九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)

惣座遺跡

1990年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書　第96集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)

惣　座　遺　跡

惣（そう）　座（ざ）　遺　跡

久（く）池（ち）井（い）Ｂ遺跡

春（か）日（す）遺（が）　跡

１９９０年３月

佐賀県教育委員会

肥前国府跡

佐賀郡大和町久池井には奈良時代に肥前国府が置かれ肥前国の政治・文化の中心地として特異な発展を遂げる。

一帯には現在でも条里および国府関連遺構がよく残っており、惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡はその中の主要な遺跡である。

肥前国庁跡前殿

国府の中の中核的建物である国庁は久池井字五本杉で遺構が確認されている。前殿・正殿・後殿・脇殿を築地で囲んでおり、全体の配置に太宰府庁のつよい影響が窺われる。

肥前国庁跡の現況

櫛御神社

相倫社

肥前国分寺跡南方の西海道跡

周辺には国分寺跡・尼寺跡をはじめ、国府に関係する遺構・神社などがよく残って当時の面影を伝えている。西海道跡は国分寺跡の南を通過して地割りにその跡をとどめる。

物座遺跡全景

外濠弧状突出部

外濠埋土中の土器

物座遺跡

弥生時代後期には外濠と内濠を二重に廻らす環濠集落が出現。外濠は途中に吉野ヶ里遺跡同様な弧状突出部をもち、防禦的性格がつよい。埋土中から多量の土器等が出土した。

奈良時代になると国府に関連する官衙地区となる。調査区内では整然と配置された倉庫群、さらに大型長棟群を多数検出した。

奈良時代の掘立柱建物跡

Ⅰ・Ⅱ区航空写真

Ⅰ区大型井戸跡

Ⅱ区掘立柱建物跡

久池井Ｂ遺跡

奈良時代を中心とする掘立柱建物群を多数検出した。とくにⅡ区では長棟と倉庫が整然と官衙風に並び、背後にあたるⅠ区に大型井戸をもつ。ほかに土壙墓・土壙多い。

Ⅱ区土壙墓

Ⅲ区航空写真

序

この報告書は佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託により、昭和57～63年度に実施した佐賀郡大和町所在の惣座遺跡、久池井Ｂ遺跡並びに春日遺跡の発掘調査報告書であります。

佐賀平野の山麓部一帯には原始・古代以来の遺跡がきわめて濃密な分布をみせておりますが、ことに、ここ大和町久池井周辺には奈良時代になると肥前国府が置かれ、まさしく肥前国の文化的・政治的中心地域として著しい発展を示すようになります。いわば私達佐賀県民にとって歴史のふるさとともいうべき、格別な愛着を感じる地域であります。

本書はこの肥前国府跡に関係する重要遺跡の調査結果を中心としながら、さらには昨今とかく話題の多い弥生時代の環濠集落の問題等にも関わる内容を含むものでありますので、その成果が今後の関連する調査・研究の一助となることを切に願う次第であります。

発刊にあたり、長期間にわたる多難な発掘調査を通じて終始多大な御協力をいただいた地元の方々、日本道路公団並びに関係各位に対し、心から篤く御礼申し上げます。

平成２年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　志　岐　常　文

例　　言

1．本書は九州横断自動車道建設に伴い、昭和57・58年度並びに昭和62・63年度に実施した佐賀郡大和町大字久池井所在の惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡・春日遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団の委託を受け、佐賀県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆分担は次のとおりである。

第１章　調査の経過　　第２章　地理的・歴史的環境　…　田平徳栄

第３章　遺跡各説

惣座遺跡　……　田平徳栄

久池井Ｂ遺跡　Ⅰ区・Ⅱ区　……　田平徳栄

Ⅲ区　遺跡の概要　……　中島恒次郎・木島慎二

遺構　……　木島慎二

遺物（縄文～弥生）……　松尾吉高

（奈良～中世）……　中島恒次郎

春日遺跡　……　田平徳栄

第４章　総括　……　田平徳栄

なお、本書の編集は田平徳栄が担当し、百崎正子・立花由香が協力した。

4．図面・写真等の記録類および出土遺物の整理作業分担は次のとおりである。

遺物復元……江口友恵・室岡勝代・大家リュウ子・古川万鶏代・前田敬子・古賀尚子
古賀久美子・中山法子

遺物実測……久米寿美子・山口成子・馬場美奈子・浜野里美・百田さつき・兵藤美紀
光石逸子・長和子・中山直子・大塚利香子・幸尾由紀子・野中裕美
杠美恵子・北村真弓美・藤田由紀

整　　図……光石逸子・長和子・幸尾由紀子・野中裕美

遺物写真撮影……松尾直子

写真現像焼付……古賀栄子

5．本書で扱った遺構・遺物図面および写真等の調査記録類並びに出土遺物は佐賀県教育委員会が保管する。

6．発掘調査にあたっては全般にわたり地元の方々から何かと御助力・御便宜を得た。また本書の作成にあたっては識者各位・大和町教育委員会・佐賀市教育委員会・同僚ほかから資料提供や貴重な御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

凡　　例

1．各遺跡の略号は次のとおりである。

　　惣座遺跡　ＳＯＺ　　久池井Ｂ遺跡　ＫＴＴ－Ｂ

　　春日遺跡　ＫＡＳ

2．遺構の種別に応じた分類記号は既刊の九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書に従い次のとおり標記する。

　　ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡　　ＳＫ：土壙・竪穴　　ＳＤ：溝

　　ＳＪ：甕棺墓・壺棺墓　　ＳＣ：石棺墓・石蓋土壙墓　　ＳＰ：土壙墓・木棺墓

　　ＳＥ：井戸　　ＳＸ：柵・その他

3．各遺跡の遺構番号は春日遺跡のみ発掘調査時の番号をそのまま用いたが、惣座遺跡および久池井Ｂ遺跡についてはこれまでの肥前国府跡関係調査との継続性を重視する立場から、本報告書では新たに一連番号に付して全面的に改め整理し、旧遺跡番号との対照は各遺跡遺構一覧表で示した。その結果、惣座遺跡は200番台、久池井Ｂ遺跡はⅠ区・Ⅱ区が300番台、Ⅲ区が700番台となっている。

4．なお、久池井Ｂ遺跡Ⅲ区は昭和62・63年度調査では惣座遺跡または惣座四本杉遺跡（ＳＯＺ）と呼んだが、遺構番号が以前調査の惣座遺跡と重複し、また調査結果からみると久池井Ｂ遺跡の一部であるので今回改めたものである。

5．遺構図の用いた方位はすべて真北（座標北）である。

6．遺構図の中で、出土状況が明らかな遺物については必要に応じて遺物図番号を付記した。

7．本報告書に登載した遺物実測図は実測原図の検索および現物との照合に便を期すため、個々に７桁数字の遺物実測番号（佐賀県教育委員会登録）を表あるいは図中などに付記した。

8．遺物図番号は各遺跡ごとに、土器や石器等の種別に関係なく一連番号とし、また図版写真の遺物番号と共通させる。

9．遺構の計測方法、その他。

　・竪穴住居跡・竪穴・土壙等の長さおよび幅は原則としてそれぞれ遺構の中央で測る。また深さはあくまで検出面からの深さである。

　・掘立柱建物跡の界線は20分の１個別図および100分の１配置図を用い、図上で検討・復元した。なお、柱間の尺数はあくまで桁行・梁行をそれぞれの間数で機械的に割った数値である。

目　　次

第1章　調査の概要

1　調査の経過 …… 2

2　調査組織 …… 5

第2章　地理的・歴史的環境 …… 7

第3章　遺跡各説

惣座遺跡

Ⅰ　遺跡の概要……22

Ⅱ　遺構

1　弥生時代　(1)　環濠・溝……34　(4)　甕棺墓・石蓋土壙墓……68

(2)　竪穴住居跡……36　(5)　土壙……71

(3)　掘立柱建物跡……58

2　奈良・平安時代　(1)　溝……78　(3)　土壙……96

(2)　掘立柱建物跡……80

Ⅲ　遺物

1　縄文時代　(1)　石器……98

2　弥生時代　(1)　石器……100　(4)　鉄器……170

(2)　土器……103　(5)　玉類……177

(3)　鏡……169

3　古墳時代　(1)　土師器……178　(2)　鉄器……179

4　奈良・平安時代　(1)　須恵器・土師器 ……180

久池井Ｂ遺跡

Ⅰ　遺跡の概要……186

Ⅱ　遺構

〈Ⅰ区の遺構〉

1　奈良・平安時代　(1)　掘立柱建物跡……205　(3)　土壙……209

(2)　井戸……208

〈Ⅱ区の遺構〉

1　奈良・平安時代　(1)　掘立柱建物跡……211　(3)　土壙墓……219

(2)　井戸……219

〈Ⅲ区の遺構〉
1　弥生時代　(1)　土壙……222
2　奈良・平安時代　(1)　掘立柱建物跡……224　(4)　土壙……249
(2)　井戸……224　(5)　溝……254
(3)　土壙墓……245
3　中世　(1)　溝……256
Ⅲ　遺物
〈Ⅰ区・Ⅱ区の遺物〉
1　奈良・平安時代　(1)　須恵器・土師器……257　(3)　鉄製紡錘車……271
(2)　土錘……271　(4)　鏡……271
〈Ⅲ区の遺物〉
1　縄文時代・弥生時代
(1)　石器……272　(2)　土器……272
2　奈良・平安時代　(1)　須恵器・土師器……275　(3)　鉄器……318
(2)　石鈴……318　(4)　鏡……318
3　室町時代　(1)　土器……320

春日遺跡
Ⅰ　遺跡の概要……326
Ⅱ　遺構
1　弥生時代　(1)　溝……330　(2)　竪穴住居跡・竪穴・土壙…330
2　古墳時代　(1)　竪穴住居跡……334
3　奈良・平安時代　(1)　掘立柱建物跡……335
Ⅲ　遺物
1　弥生時代　(1)　石器……336　(2)　土器……339
2　古墳時代　(1)　土師器……357
3　奈良・平安時代　(1)　須恵器・土師器……358　(2)　瓦……358

第4章　総括
1　まとめ……360
2　惣座遺跡の弥生後期土器……361
3　惣座遺跡の環濠集落……371
4　肥前国府跡調査の現状と問題点……382

挿　図　目　次

調査の概要 Fig. 1 九州横断自動車道路線図（佐賀大和インター付近）……2
地理的・歴史的環境 Fig. 2 遺跡位置図……8
3 佐賀平野地形図……9
4 肥前国庁跡周辺遺跡分布図……11
5 旧地形復元および発掘調査区位置図……13
6 肥前国庁跡復元図……15
7 肥前国分寺跡復元図……17
惣座遺跡 Fig. 8 惣座遺跡遺構配置図……23
9 弥生時代遺構配置図……26
10 弥生時代環濠……34
11 ＳＤ019 環濠第１突出部……36
12 ＳＢ009・ＳＢ010竪穴住居跡……37
13 ＳＢ212・ＳＢ213・ＳＢ214竪穴住居跡……38
14 ＳＢ215・ＳＢ216竪穴住居跡……39
15 ＳＢ217・ＳＢ218・ＳＢ211・ＳＢ222 竪穴住居跡……40
16 ＳＢ219 竪穴住居跡……41
17 ＳＢ220・ＳＢ223竪穴住居跡……42
18 ＳＢ224・ＳＢ225竪穴住居跡……43
19 ＳＢ262・ＳＢ263竪穴住居跡……44
20 ＳＢ266・ＳＢ267竪穴住居跡……45
21 ＳＢ264・ＳＢ265竪穴住居跡……46
22 ＳＢ268竪穴住居跡……47
23 ＳＢ269・ＳＢ270竪穴住居跡……48
24 ＳＢ287竪穴住居跡……49
25 ＳＢ271・ＳＢ272竪穴住居跡……50
26 ＳＢ273・ＳＢ274竪穴住居跡……51
27 ＳＢ280・ＳＢ281竪穴住居跡……52
28 ＳＢ283・ＳＢ284竪穴住居跡……53
29 ＳＢ285・ＳＢ286竪穴住居跡……54
30 ＳＢ288・ＳＢ289竪穴住居跡……55
31 ＳＢ291・ＳＢ292竪穴住居跡……56
32 ＳＢ290・ＳＢ293竪穴住居跡……57
33 ＳＢ249・ＳＢ250・ＳＢ251掘立柱建物跡……59
34 ＳＢ252 ～ＳＢ257 掘立柱建物跡・ＳＸ258柵……64
35 ＳＢ259・ＳＢ276掘立柱建物跡……65

惣　座　遺　跡 Fig.36　ＳＢ277・ＳＢ278掘立柱建物跡……66
37　ＳＢ275・ＳＢ287掘立柱建物跡……67
38　ＳＪ181・ＳＪ237甕棺墓……69
39　ＳＣ180石蓋土壙墓 ……70
40　ＳＫ182土壙 ……71
41　ＳＫ227・ＳＫ229土壙……72
42　ＳＫ230・ＳＫ231・ＳＫ236土壙 ……73
43　ＳＫ294・ＳＫ295・ＳＫ296土壙 ……74
44　奈良・平安時代遺構配置図……76
45　奈良・平安時代溝……79
46　ＳＢ239掘立柱建物跡・ＳＸ238柵……81
47　ＳＢ240掘立柱建物跡 ……83
48　ＳＢ241掘立柱建物跡 ……84
49　ＳＢ242掘立柱建物跡 ……85
50　ＳＢ243掘立柱建物跡 ……86
51　ＳＢ244掘立柱建物跡 ……87
52　ＳＢ245掘立柱建物跡 ……88
53　ＳＢ261掘立柱建物跡 ……89
54　ＳＢ007掘立柱建物跡 ……90
55　ＳＢ246掘立柱建物跡 ……91
56　ＳＢ260掘立柱建物跡 ……92
57　ＳＢ247掘立柱建物跡 ……93
58　ＳＸ248柵 ……95
59　ＳＢ279掘立柱建物跡 ……96
60　ＳＫ232・ＳＫ234・ＳＫ235土壙 ……97
61　打製石器……98
62　磨製石器……101
63　砥石……102
64　甕棺……105
65　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器１　甕棺 ……106
66　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器２　甕 ……108
67　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器３　甕 ……109
68　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器４　甕 ……110
69　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器５　甕 ……111
70　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器６　甕 ……112
71　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器７　甕 ……113
72　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器８　壺 ……115
73　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器９　壺 ……116
74　ＳＤ019・ＳＤ024出土土器10　壺 ……117
75　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器11　壺 ……118

惣　座　遺　跡 Fig.76　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器12　壺……119
77　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器13　壺……120
78　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器14　高坏……122
79　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器15　高坏……123
80　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器16　鉢……125
81　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器17　鉢……126
82　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器18　鉢……127
83　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器19　鉢……128
84　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器20　鉢……129
85　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器21　器台……131
86　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器22　器台……132
87　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器23　器台……133
88　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器24　支脚……135
89　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器25　支脚……136
90　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器26　甑・その他……137
91　ＳＤ207出土土器……139
92　竪穴住居跡ほか出土土器１　ＳＢ215・ＳＢ212・ＳＢ218……140
93　竪穴住居跡ほか出土土器２　ＳＢ219・ＳＢ262……141
94　竪穴住居跡ほか出土土器３　ＳＢ222・225・236・266・267……142
95　竪穴住居跡ほか出土土器４　ＳＢ269・274・288・292……143
96　竪穴住居跡ほか出土土器５　ＳＢ261・ＳＢ293……144
97　竪穴住居跡ほか出土土器６　ＳＢ291・ＳＢ281・ＳＣ180……145
98　鏡……169
99　鉄器１　斧……171
100　鉄器２　鋳造鉄斧・鍬……172
101　鉄器３　鎌……175
102　鉄器４　刀子・のみ・鉋・鑿……176
103　玉類……177
104　古墳時代の土師器……178
105　鉄器……179
106　奈良・平安時代の須恵器・土師器……181
久　池　井　Ｂ　遺　跡 Fig.107　発掘区位置図……186
108　久池井Ｂ遺跡・Ⅰ区遺構配置図……189
109　久池井Ｂ遺跡・Ⅱ区遺構配置図……195
110　久池井Ｂ遺跡・Ⅲ区遺構配置図……201
（Ⅰ・Ⅱ区遺構）　111　ＳＢ309掘立柱建物跡……205
112　ＳＢ310～ＳＢ313掘立柱建物跡……206
113　ＳＢ314・ＳＢ315掘立柱建物跡……207
114　ＳＥ302井戸……208
115　ＳＫ324～ＳＫ326土壙……209

久池井B遺跡 Fig.116 ＳＫ316～ＳＫ319土壙……210
117 ＳＢ343・ＳＢ344掘立柱建物跡……213
118 ＳＢ345掘立柱建物跡 ……215
119 ＳＢ334～ＳＢ348掘立柱建物跡……217
120 ＳＥ307井戸 ……219
121 ＳＰ350・ＳＰ351土壙墓……220
122 ＳＰ352・353土壙墓……221
（Ⅲ区遺構） 123 ＳＫ744土壙墓……222
124 ＳＫ745・ＳＫ746土壙……223
125 ＳＢ701・ＳＢ702掘立柱建物跡……225
126 ＳＢ714掘立柱建物跡 ……226
127 ＳＢ722・ＳＢ725・ＳＢ729掘立柱建物跡 ……227
128 ＳＢ703・ＳＢ704掘立柱建物跡……229
129 ＳＢ732・ＳＢ733掘立柱建物跡……230
130 ＳＢ736・ＳＢ739掘立柱建物跡……231
131 ＳＢ740掘立柱建物跡 ……232
132 ＳＢ757・ＳＢ760掘立柱建物跡……233
133 ＳＢ748・ＳＢ749掘立柱建物跡……234
134 ＳＢ756掘立柱建物跡 ……235
135 ＳＢ762掘立柱建物跡 ……236
136 ＳＢ765掘立柱建物跡 ……237
137 ＳＢ761掘立柱建物跡 ……238
138 ＳＢ763掘立柱建物跡 ……239
139 ＳＢ772掘立柱建物跡 ……240
140 ＳＢ773・ＳＢ774掘立柱建物跡……241
141 ＳＥ716・ＳＥ719井戸……242
142 ＳＥ730・ＳＥ715井戸……243
143 ＳＥ754・ＳＥ755井戸……244
144 ＳＰ731・ＳＰ735土壙墓……245
145 ＳＰ738・ＳＰ743土壙墓……246
146 ＳＰ747・ＳＰ771土壙墓……247
147 ＳＰ766・ＳＰ767土壙墓……248
148 ＳＫ708・ＳＫ709・ＳＫ718土壙 ……249
149 ＳＫ734・ＳＫ750土壙……250
150 ＳＫ768・ＳＫ759土壙……251
151 ＳＫ769・ＳＫ770・ＳＫ777土壙 ……252
152 ＳＫ775・ＳＫ776土壙……253
153 Ⅲ区奈良・平安時代溝……255
（Ⅰ・Ⅱ区遺物） 154 ＳＫ318・ＳＫ319土壙出土土器１ 須恵器……258
155 ＳＫ318・ＳＫ319土壙出土土器２ 土師器……259

久池井B遺跡 Fig.156 ＳＫ316・ＳＫ317土壙出土土器１　須恵器……260
（Ⅰ・Ⅱ区遺物） 157 ＳＫ316・ＳＫ317土壙出土土器２　土師器……261
158 土壙墓出土　須恵器・土師器……262
159 溝・土壙等出土須恵器および土師器１……263
160 溝・土壙等出土須恵器および土師器２……264
161 土錘……271
162 ＳＰ353土壙墓出土紡錘車・鏡……271
（Ⅲ区遺物） 163 縄文・弥生時代石器……273
164 ＳＫ745・746土壙出土　弥生時代・前期土器……274
165 ＳＫ764土壙出土土器１……276
166 ＳＫ764土壙出土土器２……277
167 ＳＫ775土壙出土土器１……279
168 ＳＫ775土壙出土土器２……280
169 ＳＫ775土壙出土土器３……281
170 ＳＫ775土壙出土土器４……281
171 ＳＫ775土壙出土土器５……284
172 ＳＫ776土壙出土土器１……286
173 ＳＫ776土壙出土土器２……287
174 ＳＫ759土壙出土土器……289
175 ＳＫ781土壙出土土器……289
176 ＳＫ727・782・777・743土壙出土土器……290
177 ＳＫ709・758土壙および土壙墓出土土器……291
178 ＳＫ769・770土壙および土壙墓出土土器……292
179 掘立柱建物跡・柱穴出土土器……293
180 井戸跡出土土器……294
181 溝跡出土土器……296
182 小穴・表面採集土器……297
183 石鈎……318
184 奈良・平安時代鉄器・鏡……319
185 ＳＤ789溝出土中世土器１……
186 ＳＤ789溝出土中世土器２……322
春日遺跡 Fig.187 春日遺跡遺構配置図……322
188 ＳＤ008溝断面……327
189 ＳＢ021竪穴住居跡……330
190 ＳＢ001竪穴住居跡・ＳＫ002竪穴……331
191 ＳＢ003・ＳＢ007竪穴住居跡およびＳＫ004竪穴……332
192 ＳＢ020竪穴住居跡・ＳＢ019竪穴……333
193 ＳＢ005・ＳＢ006竪穴住居跡……334
194 ＳＢ011・ＳＢ018掘立柱建物跡およびＳＸ012柱列……335
195 石鏃……336

春　日　遺　跡　Fig.196 磨製石器……338
197 弥生前期土器1　ＳＢ021出土 ……339
198 弥生前期土器2　甕……341
199 弥生前期土器3　甕……343
200 弥生前期土器4　甕……344
201 弥生前期土器5　甕……345
202 弥生前期土器6　底部……346
203 弥生前期土器7　壺……347
204 弥生前期土器8　鉢・蓋・甕棺……348
205 弥生前期土器9　その他の土製品……348
206 弥生後期土器……353
207 春日遺跡前期土器編年図……253
208 古墳時代の土師器……355
209 奈良・平安時代～中世遺物……208
総　　括　210 惣座遺跡ＳＤ019東・ＳＤ204出土土器……358
211 惣座遺跡環濠集落の変遷……365
212 惣座遺跡周辺の環濠……372
213 佐賀平野の環濠集落比較……378
214 弥生時代甕棺出土数比較……380
215 肥前国古代駅路……384
216 肥前国府域復原案と関連遺構……385
217 肥前国府跡周辺の地割……387
218 肥前国府関連主要遺構配置図……389
219 肥前国庁跡……392
220 惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡の掘立柱建物跡方位……378

表　目　次

惣　座　遺　跡　Tab.1 惣座遺跡弥生時代遺構一覧表……32
2 惣座遺跡奈良・平安時代遺構一覧表……75
3 弥生土器一覧表……146
4 奈良・平安時代の須恵器・土師器一覧表……182
久池井Ｂ遺跡 Tab.5 久池井Ｂ遺跡Ⅰ区遺構一覧表……191
6 久池井Ｂ遺跡Ⅱ区遺構一覧表……194
7 久池井Ｂ遺跡Ⅲ区奈良・平安時代遺構一覧表……203
8 Ⅰ・Ⅱ区須恵器・土師器一覧表……264
9 Ⅲ区須恵器・土師器一覧表……297
10 Ⅲ区中世土器一覧表……323
春　日　遺　跡　Tab.11 春日遺跡遺構一覧表……329
12 弥生前期土器一覧表……349

図　版　目　次

惣　座　遺　跡 PL 1　肥前国府跡周辺航空写真
2　肥前国府跡周辺航空写真
3　遺跡全景航空写真
4　遺跡全景航空写真
5　遺跡全景
6　遺跡東側航空写真、遺跡東側
7　ＳＤ019溝、同第１突出部
8　ＳＤ019溝西端断面、同西端２Ｇ区遺物出土状況、同ｄ断面トレンチ西壁
9　ＳＤ019溝南辺東端遺物出土状況、同東辺ｇ断面南側、同ｇ断面北側
10　ＳＤ207溝ａ断面、同ｃ断面、ＳＤ204溝遺物出土状況
11　ＳＢ212竪穴住居跡、ＳＢ213・ＳＢ214竪穴住居跡、ＳＢ217竪穴住居跡
12　ＳＢ218竪穴住居跡・ＳＢ215竪穴住居跡、同遺物出土状況
13　ＳＢ220～ＳＢ223竪穴住居跡付近、ＳＢ220・ＳＢ221・ＳＢ222竪穴住居跡
14　ＳＢ222竪穴住居跡、ＳＢ219竪穴住居跡、同南壁際の仿製鏡出土状況
15　ＳＢ224・ＳＢ225竪穴住居跡、ＳＢ225南壁側の礫群、ＳＢ226竪穴住居跡
16　ＳＢ223～ＳＢ270竪穴住居跡、ＳＢ266・ＳＢ267竪穴住居跡、ＳＢ263竪穴住居跡
17　ＳＢ269竪穴住居跡、ＳＢ268竪穴住居跡、ＳＢ270竪穴住居跡
18　ＳＢ272竪穴住居跡、ＳＢ271竪穴住居跡、ＳＢ262竪穴住居 跡
19　ＳＢ282～ＳＢ293竪穴住居跡付近、ＳＢ273・ＳＢ274竪穴住居跡
20　ＳＢ281・ＳＢ282竪穴住居跡、ＳＢ282竪穴住居跡、ＳＢ283竪穴住居跡
21　ＳＢ284竪穴住居跡、ＳＢ285・ＳＢ286竪穴住居跡、ＳＢ289・ＳＢ290竪穴住居跡
22　ＳＢ290竪穴住居跡、ＳＢ291・ＳＢ292竪穴住居跡、ＳＢ293竪穴住居跡
23　ＳＢ009・ＳＢ010竪穴住居跡付近、ＳＢ009・ＳＢ010竪穴住居跡
ＳＢ009竪穴住居跡
24　ＳＢ249～ＳＢ257掘立柱建物跡付近
25　ＳＢ249～ＳＢ251掘立柱建物跡、ＳＢ250柱穴断面南側柱列
26　ＳＢ276～ＳＢ278掘立柱建物跡付近
27　ＳＢ259・ＳＢ277・ＳＢ278掘立柱建物跡柱穴断面
28　ＳＪ233甕、ＳＪ237甕棺墓、ＳＪ181甕棺墓
29　ＳＣ180石蓋土壙墓、同供献壺出土状況、ＳＫ182土壙
30　ＳＫ227・ＳＫ228土壙、ＳＫ230・ＳＫ231土壙、ＳＫ236土壙
31　ＳＢ239掘立柱建物跡およびＳＸ238柵、同柱穴
32　ＳＢ240掘立柱建物跡同柱穴断面

惣　座　遺　跡　PL 33　ＳＢ241掘立柱建物跡、同柱穴断面
34　ＳＢ242掘立柱建物跡
35　ＳＢ243掘立柱建物跡
36　ＳＢ244掘立柱建物跡
37　ＳＢ245・ＳＢ246掘立柱建物跡、ＳＢ245柱穴断面南側柱列
38　ＳＢ247掘立柱建物跡
39　ＳＢ260掘立柱建物跡
40　ＳＢ261掘立柱建物跡
41　ＳＢ261掘立柱建物跡、同柱穴断面北側東列
42　ＳＢ007掘立柱建物跡
43　ＳＤ204・ＳＤ205溝、ＳＤ205溝ｄ断面、同ｅ断面
44　ＳＤ208付近、同ｂ断面、同ｃ断面
45　ＳＢ279掘立柱建物跡、ＳＤ018溝ａ断面
46　ＳＫ232土壙232土壙、ＳＫ235同、同埋土断面
47　弥生後期土器１　甕棺
48　弥生後期土器２　甕
49　弥生後期土器３　甕
50　弥生後期土器４　甕
51　弥生後期土器５　甕
52　弥生後期土器６　甕
53　弥生後期土器７　壺
54　弥生後期土器８　壺
55　弥生後期土器９　壺
56　弥生後期土器10　壺
57　弥生後期土器11　壺
58　弥生後期土器12　壺
59　弥生後期土器13　壺
60　弥生後期土器14　高坏
61　弥生後期土器15　高坏
62　弥生後期土器16　鉢
63　弥生後期土器17　鉢
64　弥生後期土器18　鉢
65　弥生後期土器19　碗・甑・器台
66　弥生後期土器20　器台
67　弥生後期土器21　器台
68　弥生後期土器22　支脚
69　弥生後期土器23　支脚・杓子・蓋
70　縄文・弥生時代石器
71　鏡・王類・紡錘車・弥生時代鉄器１
72　弥生時代鉄器２　鉄斧

惣座遺跡	PL 73	弥生時代鉄器3　鎌・鍬・のみ・鉋
	74	弥生時代鉄器4　鎌・刀子
	75	古墳時代土師器、奈良・平安時代須恵器・土師器1
	76	奈良・平安時代須恵器・土師器2
久池井B遺跡	77	Ⅰ区・Ⅱ区全景航空写真
（Ⅰ・Ⅱ区）	78	Ⅰ区全景航空写真
	79	Ⅰ区全景航空写真
	80	Ⅰ区北側建物群ほか、ＳＢ312・ＳＢ313掘立柱建物跡、ＳＢ310・ＳＢ311掘立柱建物跡
	81	ＳＢ314掘立柱建物跡、ＳＢ315掘立柱建物跡
	82	ＳＥ302井戸
	83	ＳＫ316～ＳＫ320土壙、ＳＫ324～ＳＫ326土壙
	84	Ⅱ区全景
	85	ＳＢ343・ＳＢ344掘立柱建物跡
	86	ＳＢ344掘立柱建物跡、ＳＢ343掘立柱建物跡
	87	ＳＢ345掘立柱建物跡
	88	ＳＢ344～ＳＢ338掘立柱建物跡
	89	ＳＢ344～ＳＢ337掘立柱建物跡、ＳＢ338掘立柱建物跡
	90	ＳＢ334掘立柱建物跡、ＳＢ335掘立柱建物跡
	91	ＳＢ336掘立柱建物跡、ＳＢ337掘立柱建物跡
	92	ＳＢ337南側柱穴断面、ＳＢ344間仕切柱穴断面
	93	ＳＥ347井戸、ＳＤ328溝
	94	南側土壙墓群、ＳＰ352土壙墓、ＳＰ350土壙墓
	95	ＳＰ351・ＳＰ353土壙墓
	96	ＳＫ319土壙出土須恵器
	97	ＳＫ319土壙出土須恵器・土師器
	98	ＳＫ316・ＳＫ317土壙出土須恵器
	99	ＳＫ317土壙出土須恵器・土師器
	100	土壙墓出土須恵器・土師器
	101	ＳＫ303土壙・ＳＥ302井戸出土土器ほか
	102	ＳＰ353土壙墓出土素文鏡・紡錘車ほか
（Ⅲ区）	103	Ⅲ区北側－1987年度調査－、Ⅲ区南側
	104	Ⅲ区北側－1988年度調査－、Ⅲ区全景
	105	ＳＫ774・745・746土壙
	106	ＳＢ701・702掘立柱建物跡、ＳＢ703掘立柱建物跡、ＳＢ714掘立柱建物跡
	107	ＳＢ722・725・729掘立柱建物跡、ＳＢ773・ＳＢ739掘立柱建物跡
	108	ＳＢ740掘立柱建物跡、ＳＢ748掘立柱建物跡、ＳＢ749掘立柱建物跡
	109	ＳＢ757掘立柱建物跡、ＳＢ762掘立柱建物跡、ＳＢ756掘立柱建物跡
	110	ＳＢ761掘立柱建物跡、ＳＢ763掘立柱建物跡、ＳＢ772掘立柱建物跡

久池井B遺跡 PL 111 ＳＢ773掘立柱建物跡、ＳＢ774掘立柱建物跡、ＳＥ715井戸
（Ⅲ区） 112 ＳＥ716井戸、ＳＥ730井戸、ＳＥ745井戸
113 ＳＰ731土壙墓、ＳＰ735土壙墓、ＳＰ738土壙墓
114 ＳＰ766土壙墓、ＳＰ767土壙墓、ＳＰ771土壙墓
115 縄文・弥生時代石器および弥生前期土器
116 弥生前期土器
117 ＳＫ759・764土壙出土土器
118 ＳＫ775土壙出土土器１
119 ＳＫ775土壙出土土器２
120 ＳＫ776土壙出土土器
121 ＳＫ783土壙・ＳＰ771・731土壙墓出土土器
122 井戸・土壙・溝ほか出土土器
123 奈良・平安時代石鈴・素文鏡・鉄器
春日遺跡 PL 124 遺跡全景航空写真、調査風景
125 遺跡全景
126 ＳＤ008溝東側、同西側
127 ＳＤ008溝断面、同遺物出土状況
128 ＳＤ008溝遺物出土状況、ＳＢ011付近、ＳＢ018付近、ＳＢ006付近
129 ＳＢ001・ＳＢ002竪穴住居跡、ＳＢ001竪穴住居跡、ＳＢ001
東南部土器出土状況
130 ＳＢ002竪穴住居跡、ＳＢ003竪穴住居跡、ＳＫ004竪穴
131 ＳＢ020竪穴住居跡、ＳＢ021竪穴住居跡
132 ＳＢ007竪穴住居跡、ＳＫ019竪穴、ＳＸ016炉跡
133 ＳＢ005竪穴住居跡、ＳＢ005西壁カマド
134 ＳＢ006竪穴住居跡、ＳＢ006北壁カマド
135 ＳＢ002北側柱穴群、ＳＢ011掘立柱建物跡およびＳＸ012柱列
136 ＳＢ018掘立柱建物跡
137 石鏃、磨製石器
138 弥生前期土器１
139 弥生前期土器２
140 弥生前期土器３
141 弥生前期土器４
142 弥生前期土器５
143 弥生前期土器６
144 古墳時代および奈良・平安時代の土器

〈付図〉 1．惣座遺跡弥生後期土器編年図（１／10）
2．肥前国府跡関連遺構配置図（１／1,000）

第1章　調査の概要

1．調査の経過

九州横断自動車道建設に伴う文化財調査は、まず昭和44年６月に九州地方建設局の委託を受けた鳥栖―武雄間53kmについての最初の遺跡分布調査に始まる。分布調査はその後も補足的に続けられ、結果として発掘調査の対象となった遺跡数および面積は基山―嬉野約58km区間で計197ヶ所、約120万㎡にのぼる。

発掘調査は昭和52年１月、佐賀地区から開始され、工事と並行する形で進められた。鳥栖―武雄間は高速道供用開始の前年末に調査を完了、そして多久―武雄間についても昭和63年３月の供用開始に合わせ無事調査を終えた。さらに昭和63年度中には残る嬉野・大和・鳥栖地区の調査を終了し、発掘調査から14年目にして全調査計画の完了をみた。

九州横断自動車道関係の調査で得られた成果は実に膨大である。とくに佐賀平野の古代史に対する認識を一変させたといっても過言ではない。それは路線がちょうど遺跡の密集地帯を通過することにもよるものであって、いわば佐賀平野を東西に走る巨大な試掘溝が設けられたに等しい役割りを果した。しかしその一方では120万㎡の遺跡が消滅したことも事実である。調査は平成元年度から完全に整理体制に移行したが、この損失を思うとき改めて今後の整備報告に果せられた責任の重大さを痛感する次第である。調査報告書は予定の全20編のうち、昭和63年度までに10編が刊行されている。

さて、今回報告する３遺跡は主に昭和57年度～63年度の調査にかかるものである。

まず春日遺跡であるが、同遺跡の丘陵南辺部をわずかにかすめるように路線が計画されたた

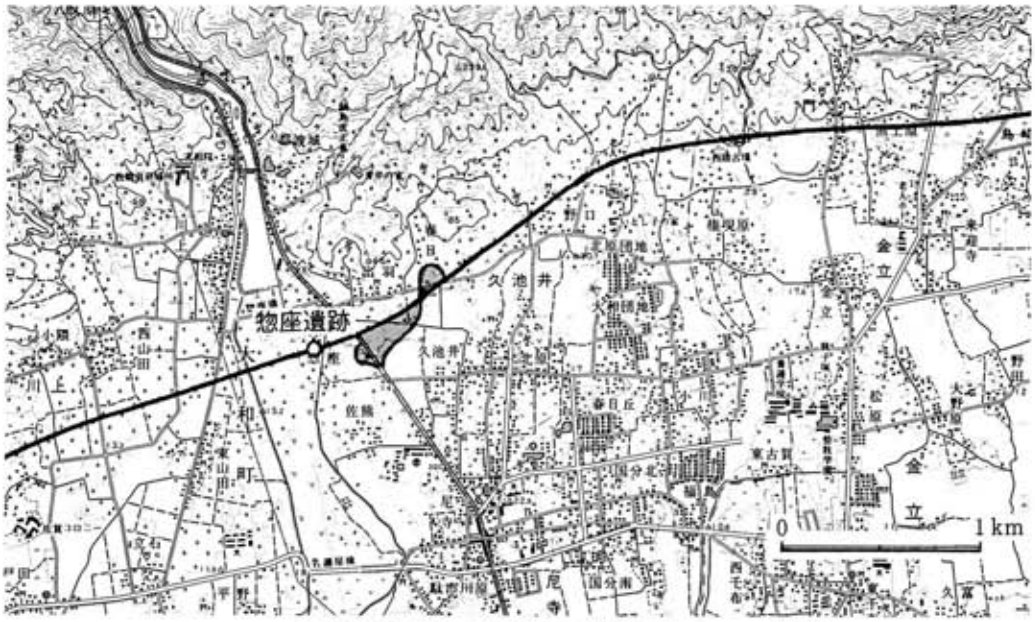


Fig. 1　九州横断自動車道路路線図（佐賀大和インター付近）

め当初は工事区が遺跡を外れるものとみていた。しかし確認調査の結果、小範囲ながらも遺構の存在が明らかになったため、追加して調査を実施したものである。調査は昭和57年５月～同年９月にかけⅠ区から始め、さらにその東側にも遺跡の続きが予想されたためⅡ区を設けた。本調査面積は計1,300㎡である。なお、Ⅰ区の西側でも丘陵斜面およびさらに下った水田部を試掘したが、弥生土器等の破片は出土するものの明瞭な遺構は認められず、確認調査だけで終わった。

調査の結果、極めて限られた小範囲であるにもかかわらず、弥生時代前・中期および古墳時代後期～奈良時代の集落跡の一部を明らかにし、とくに弥生前期の竪穴住居跡の検出、および溝から多量の弥生前期土器が出土するといった重要な成果があった。

次に惣座遺跡は、実は横断道関係調査開始期の昭和52年１月～昭和52年３月に橋梁基部にあたる調査区西端部600㎡が先に調査され、大型の総柱建物跡などの存在が知られていた。この頃、一方では肥前国府跡の確認調査が惣座遺跡を含む久池井地区一帯で繰り拡げられており、この西端部のＳＤ007建物跡がそれまでの確認調査では例をみない大型総柱構造であったことから同地区が国府正倉域にあたる可能性が指摘され、爾後の調査に期待を残していた。

57・58年度の調査は計9,200㎡の対象地区を、道路付け替え工事との関係で２回に分けて実施した。まず57年12月～58年２月には調査区東端部3,800㎡、次いで４月から58年11月にかけては残る中央部5,400㎡の調査を行った。調査の結果はある程度予想されたとおり一定の規格になる整然と配置された倉庫建物群をはじめとする大型建物が数時期にわたって営まれており、国府関係の重要な地区、おそらくある時期の正倉地区等にあたるものではないかとの見方をつよく抱かせるに至った。また本遺跡は弥生時代後期後半を中心とする環濠集落でもあり、調査区内で検出した２重の環濠あるいは環濠途中の突出部の構造は今日、吉野ケ里遺跡のそれらと対比されるべき重要な意味をもつものである。

ただ惣座遺跡の調査では、調査年次が数次にわたらざるを得なかったこと、著しい遺構の分布密度と切り合い、それに加え現在集落にあたっていたための遺構の破壊・削平がかなり進んでいたこと、そして最後の調査では工事との関係で調査期間が極めて限られたこと、などの悪要因が重なったため、必ずしも十分な調査をなし得なかったことを今さらながら残念に思う。とくに58年末の調査はまさに工事とのせめぎ合いともいえるもので、本線盛土が日増しに高くなってゆくかたわら、弥生後期の環濠の中で膨大な量の土器と連日悪戦苦闘していた。環濠の突出部も最後になってようやく確認できたものである。また調査期間の制約と東西両端を除く中央の大部分が盛土工事にあたり一応直接の破壊は避けられることから、国府関連建物の柱穴は最小限の断面図を作成するための調査にとどめ、溝はＳＤ208およびＳＤ019の７Ｅ区～12Ｂ区では比較的遺物の出土が少なかったため部分的に試掘溝を設けることで完掘せずに調査を進め、工事と並行しながら段階的に全体を埋め戻した。

久池井Ｂ遺跡は現在の横断道佐賀大和インターにあたる地区である。調査はⅠ区3,500㎡とⅡ区4,000㎡を昭和57年８月～57年11月まで同時に行った。Ⅲ区7,000㎡は国道263号西側の第２インター追加工事に伴い昭和62年１月～63年７月に調査を実施したものである。調査の結果、Ⅲ区で若干弥生時代前期の遺構を検出したが、大部分は掘立柱建物跡を中心とした奈良～平安時代にかかる遺構群で、ほかに中世の溝等がある。旧地形でみるとこの久池井Ｂ遺跡は先の惣座遺跡とは別の低台地上にあり、しかも今回調査のⅠ・Ⅱ・Ⅲ区をあわせると一つの完結した様相を示している。その東西両側については以前にも国府跡関連確認調査や圃場整備関連調査がなされ、今回また事前に広範な確認調査を実施したが、少なくとも建物の存在は確認されておらず、遺跡の拡がりとしてはほぼⅠ区～Ⅲ区の範囲に限定できるものと考えている。国府関連の重要遺跡であり、とくにⅠ・Ⅱ区では大型建物群・井戸等が整然とした配置をなしている。ちょうど同地区は全体が盛土地区にあたるため遺構の保存を考慮して柱穴の断ち切りは最小限にとどめ、調査後に全域を真砂土で埋め戻した。

惣座遺跡と久池井Ｂ遺跡は肥前国府との関係でいえばその最も重要な地区にあたる。一帯は近年開発がすさまじく調査の機会も多いが、そのたびに遺跡名等が次第に混乱する傾向にあるので、今回を機に若干整理しておくことにする。

そもそも肥前国府の確認調査は九州横断自動車道がその推定地を通加するため昭和50年から10年計画で実施したもので、国庁跡の確認をはじめ周辺官衙の拡がり等多大な成果があった。その際、国府域推定地一帯に現地割りに基づく地区割りを設け、検出した遺構のうち国府関係のものには通し番号を打った。しかしその後一帯で行われた調査では「佐賀県遺跡地図」（昭和55年）によって遺跡名称が与えられ、さらに、例えば同じ惣座遺跡の中でも発掘区を区別するため惣座四本杉、惣座六本杉、惣座Ｂなど小字名等を付け加える場合も生じてきた。さらに遺構番号もそうした各遺跡ごと独自に付けたこともある。

たしかに確認調査とは違い面的な調査を行ううえでは国府関係以外の遺構も調査の対象となるため、一連の遺構番号に種々不都合があり、旧地区割りも殆ど用をなさなくなった。しかし、そうかといって確認調査結果との関連性も無視できない。そこで本報告においては、遺跡名については「佐賀県遺跡地図」を基本としながらも、広義の惣座遺跡のうち昭和59年度に大和町がバイパス関連で調査した地区は便宜上惣座Ｂ遺跡と呼んで区別する。ただし、昭和62･63年度調査の惣座四本杉遺跡は遺跡地図では惣座遺跡の範囲に入るが、実際は先に調査した久池井Ｂ遺跡のつづきであるので、今回の報告では久池井Ｂ遺跡Ⅲ区に改めた。また遺構番号も過去の調査との継続性を重視し、惣座遺跡および久池井Ｂ遺跡に限っては国府期以外の遺構も含め肥前国府跡確認調査に続く一連番号を付し全体的に整理した。なお、国府関連遺構は今後さらに拡がるであろうが、それは別の遺跡名・遺構番号で対処せざるをえないし、惣座遺跡の中でも将来の調査のあり方によっては年次による遺構の区別も考慮する必要があるかと考える。

2　調査組織

惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡・春日遺跡の発掘調査は佐賀県教育委員会の直営事業として実施した。発掘調査年度にあたる昭和57・58年度並びに昭和62・63年度の発掘調査・組織は下記のとおりである。

総　括　教　育　長　古藤　浩（57・58年度）　志岐常文（62・63年度）
教育次長　大塚正道（57・58年度）　高橋一之（57年度）　宇田川勝之（58年度）　野角計宏（62・63年度）
文化課長　中島信之（57年度）　藤山　厳（58年度）　武藤佐久二（62・63年度）
文化課参事　尾形善郎（62年度）　高島忠平（63年度）
文化課課長補佐　山田陸造（57・58年度）　高島忠平（57・58年度）大坪英樹（62・63年度）　宮原義幸（63年度）

庶　務　文化課庶務係長　中野安正（57・58年度）　菊地文夫（62・63年度）
文化課主査　山下行夫（58年度）
文化課主事　山口　勝（57年度）　山下行夫（57年度）　東　英明（58年度）　井原裕子（57・58年度）　直塚清純（62・63年度）　西岡真一（62年度）　本山恵悟（63年度）　鶴田明美（62・63年度）

発掘調査　文化財調査１係長　樋渡敏暲（昭和57年度）　中牟田賢治（昭和58年度～）
〈惣座遺跡〉　昭和52年度　立石泰久（嘱託）　高瀬哲郎（嘱託）
昭和57年度　田平徳栄（文化財保護主事）　松尾法博（嘱託）
昭和58年度　田平徳栄（主査）　本田秀樹（嘱託）
〈久池井Ｂ遺跡〉　昭和58年度（Ⅰ区・Ⅱ区）　田平徳栄（主査）　松尾法博（嘱託）
昭和62年度（Ⅲ区南）　松尾吉高（文化財保護主事）　木島慎二（嘱託）
昭和63年度（Ⅲ区北）　松尾吉高（主査）　中島恒次郎（嘱託）
〈春日遺跡〉　昭和57年度　田平徳栄（文化財保護主事）　松尾法博（嘱託）
調査補助員　川谷昭彦　山田尚久　明瀬慎吾　鶴田和彦　江頭信哉　福島剛志
発掘作業員　（現場事務）増田庸子
（現場実測）野田美恵子　嬉野みつ代

（発掘作業）　太田鉄蔵・内山ヒロエ・石井和子・大田アサエ
大坪エイ・大坪八重子・北村博子・猶村美津子・指山千春
執行カツ代・上滝清子・城　政子・西　恵美子・西久保ハルエ
西原和子・野田せき子・野田美智子・原　京子・東島良子
広重さなえ・百武アサ子・深町俊子・藤井千枝子・納富みさお
生田美代子・生田ヨシエ・大野ミチエ・後藤美智江・小柳シゲ
ノ・武富ヨシノ・原ミチエ・広瀬幸子・広瀬八重子・横田チト
平原ヒロミ・秀島智恵子・高野ヌイ子・大木ハツエ・平原サイ
中牟田テル子・内田和子・北村ハツ子・三位保子・島崎輝子
江口綾子・山口とえ子・納富直子・村川キクエ・原ミチエ
橋本キヌ子・角田千代乃・富永ツヤ子・中牟田テル子

整　理　昭和57・58年度　蒲原宏行（指導主事）　原口　定（嘱託）　本田京子（嘱託）
友貞菜穂子（嘱託）　矢野佳代子（嘱託）

昭和62年度　田平徳栄（主査）　高瀬哲郎（指導主事）

昭和63年度　田平徳栄（主査）　高瀬哲郎（指導主事）　百崎正子（嘱託）

第２章　地理的･歴史的環境

1　地理的環境

佐賀平野は脊振山地南面に拡がる洪積段丘と扇状地さらにその南の広大な三角州に分けられる。洪積段丘は佐賀市東方の神埼町を流れる城原川以東でとくに発達しており、標高20～80m、長さ4km程の細長い丘陵が多くみられる（Fig. 3）。一方、城原川以西の佐賀市北部から大和町にかけては標高14～30m、長さ1km程の段丘が所々分布しているが、その発達は東部ほど顕著ではなく、また扇状地があまりに緩やかなこともあって山地からいきなり平野部が拡がっているような観を与える。

Fig. 2　遺跡位置図

扇状地の発達は城原川以西でとくに顕著である。嘉瀬川とその東西中小河川によって形成された扇状地は複合し、山地から下って東西に長く拡がる。多くの場合すでに開析されて扇状地としての原形は失なわれており、勾配は例えば嘉瀬川の扇頂にあたる川上川官人橋付近から下流の尼寺付近まで平均1／250と緩やかであるため、一見扇状地と気付かないほどである。

扇状地は現標高約5mラインでおわり氾濫平野を経て広大な三角州地形に移る。有明海の潮位干満差は全国一で最大6mに達する。佐賀平野の三角州はこの激しい潮汐作用を受けて河川の運んだ砂泥が海岸部に堆積し形成されたもので、低平野と化した今日でも海退の結果生じた当時の澪筋が網目のように張り廻らされた堀（クリーク）となって水郷佐賀平野特有の農村景観をみせている。また、この三角州地帯では中小河川の流域に自然堤防状の微高地が分散的にみられ、弥生時代に低平野の開発が始まる際の集落形成に重要な役割りを果すものとなる。

このような特色ある佐賀平野の地形の中で、遺跡の分布からみて原始・古代を通じた歴史の主要な舞台となったのは山麓部およびその周辺である。その様相を巨視的に見れば、脊振山地南麓を佐賀平野の西から東までベルト状に幅2～3kmの遺跡分布帯が続き、東部ではさらにそこから南に細長く伸びた多くの洪積段丘上に遺跡の分布が濃密である。

本報告の惣座遺跡および久池井B遺跡は嘉瀬川が山間部を抜けて平野部に流れ出すあたりの谷口東岸部の微高地上に在り、扇頂部に位置する。細かな地形は次項に述べるが、嘉瀬川とは遺跡の立地上不可分の関係にあり、とくに惣座遺跡の場合はそのすぐ西脇が嘉瀬川である。嘉瀬川の流路がこの付近で弥生時代～奈良・平安時代にも現在と同じであったかどうかは重要な問題で、弥生時代環濠集落の立地あるいは肥前国府官衙の立地・移転に大いに関係する。ただ現地形でみる限り、この付近ではある時期、西岸方向に氾濫のあった形跡は認められるものの

Fig. 3・佐賀平野地形図

東岸部では遺跡の拡がりなどからみて奈良・平安時代当時より河岸がかなり削り取られていることは窺われるが、大規模な氾濫の跡は見い出しがたい。

一方、春日遺跡の立地は山麓部とはいっても、実際は急な傾斜をもつ丘陵南面裾部のごく狭い緩斜面上に在るので、惣座遺跡や久池井Ｂ遺跡とは条件が異なり山地地形に含められる。嘉瀬川からは東に約1.5km離れている。

2．歴史的環境

肥前国府跡をはじめとする県内でも主要な遺跡の多くが分布する大和町から佐賀市にかけての山麓部一帯の遺跡分布についてはあらゆる機会によく紹介されている。そこで、ここでは肥前国府跡周辺に限って概要を述べるにとどめ、詳細は久保泉丸山遺跡の報告書等にゆずる。[1]

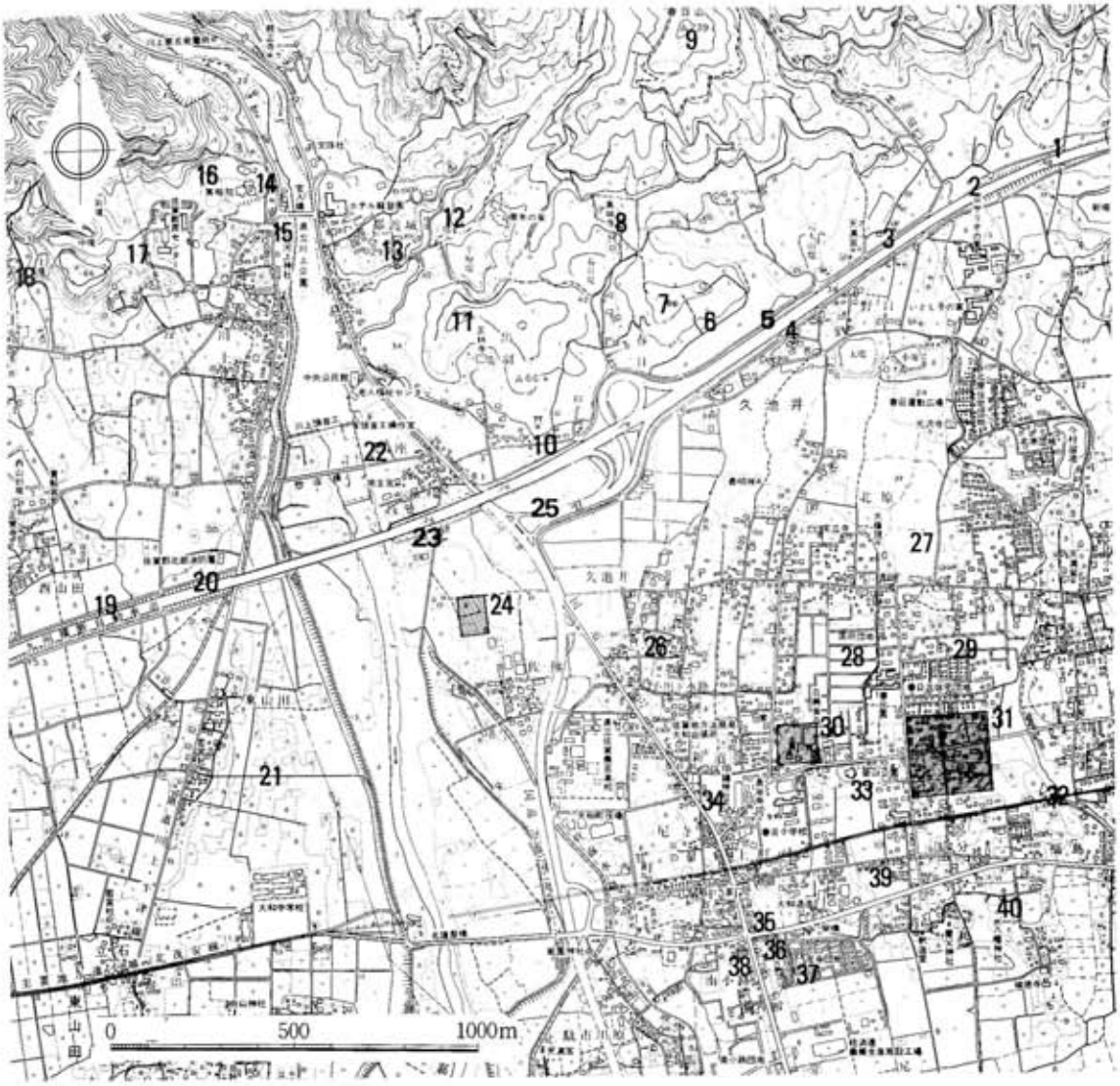
この地域、すなわち大和町久池井一帯とその周辺が佐賀平野の歴史の中で極立った特色をもつようになるのは肥前国府の出現によってである。しかしそれ以前、とくに弥生時代から古墳時代にかけても順調な発展を示し、有力な政治的勢力の台頭が想定されるのは周知のとおりであり、城原川以西にあってはその実態の解明が最も注視される地域であるといっても過言ではなかろう（Fig. 4）。

まず旧石器時代では今のところ良好な遺跡に恵まれず、久池井一本松遺跡[2]や惣座遺跡[3]で稀にナイフ型石器が採集される程度であるが、これは佐賀平野一帯に同様な情況である。縄文時代では礫石遺跡[4]・尼寺四本杉遺跡で早・前期の比較的まとまった遺物が出土している。しかし中期から後期にかけては久池井周辺でその例は聞かず、東方の佐賀市域でも少ない、したがって旧石器時代～縄文時代にかけては遺跡そのものが希薄であり発展的な継続性に乏しいといえる。

ところが弥生時代になると遺跡の分布は急な拡がりをみせるようになり、地域としての発展が顕著になる。胎動はすでに縄文晩期末から弥生前期初頭に始まり、礫石遺跡[4]では２地区に分かれて支石墓系統の埋葬が計40基以上調査されており、支石墓はまた南小路遺跡[5]でも前期末のものが知られている。前期の遺跡は他に久池井Ｃ遺跡[6]・惣座Ｂ遺跡[7]・惣座六本杉遺跡[8]・七ヶ瀬遺跡[9]など多く、本報告書所収の春日遺跡・久池井Ｂ遺跡Ⅲ区もその例である。最近の調査では埋葬のほかに貯蔵穴ないしは貯蔵、竪穴の調査例が多い。出土遺物のうち前期土器はこの地域の編年を可能ならしめるまでに豊富となりつつある。また東山田一本杉遺跡[10]では初めて前期末に遡る銅剣先が出土したほか、惣座Ｂ遺跡では節帯をもつ細形銅鉾の鋳型出土によって国産青銅器の鋳造開始の問題に一石を投じた。

中期には竪穴住居跡が春日遺跡・惣座Ｂ遺跡で知られるようになるが数は少なく、未だ大規模な集落は出現していないことを思わせる。墓地は東山田一本杉遺跡・七ヶ瀬遺跡・惣座Ｂ遺跡で前期末から続く甕棺墓地が営まれているが、久池井一帯に関する限り、甕棺盛行期のこの時期にあってはあまり大規模な遺跡は見あたらず、集落遺跡の動向に対応するようである。

後期になると嘉瀬川東西両岸にいきおい大規模な集落が形成される。本報告書所収の惣座遺跡では後期後半に弧状突出部をもち防禦的様相のつよい二重環濠を廻らせた集落の存在が確認され、東の吉野ケ里遺跡にみる環濠集落に対比すべき重要な位置を占めることが明らかになった。同時期の集落跡は惣座遺跡と対向する嘉瀬川西岸部でも知られており、東山田一本杉遺跡

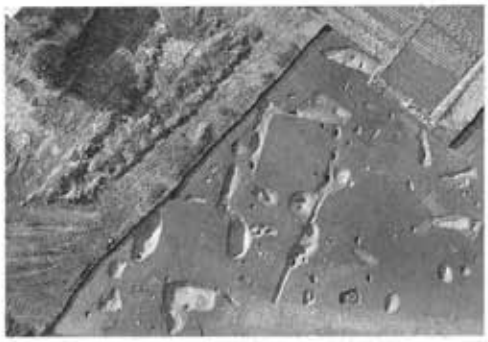


1	久池井一本松遺跡	11	玉林寺古墳群	21	東山田三本松遺跡	31	国分寺跡
2	礫石Ａ遺跡	12	春日墓所古墳群	22	惣座六本杉遺跡	32	古代官道跡
3	礫石Ｂ遺跡	13	高畠古墳	23	**惣座遺跡**	33	築山前方後円墳
4	久池井Ｃ遺跡	14	実相院	24	肥前国庁跡	34	印鑰神社
5	**春日遺跡**	15	淀姫神社	25	**久池井Ｂ遺跡**	35	尼寺銅戈出土地
6	前隈山古墳群	16	西山遺跡	26	久池井遺跡	36	南小路支石墓
7	前隈山前方後円墳	17	星隈古墳群	27	北原遺跡	37	尼寺一本松遺跡
8	高城寺	18	水上古墳群	28	宝満遺跡	38	高畑遺跡
9	春日山城跡	19	西山田遺跡	29	春日丘遺跡	39	印鑰遺跡
10	甘南備神社	20	東山田一本杉遺跡	30	国分尼寺跡	40	尼寺四本杉遺跡

Fig. 4　肥前国庁跡周辺遺跡分布図（1/2000）

から西山田二本松遺跡[02]・西山田三本松遺跡[03]にかけて大規模な遺跡の拡がりが知られている。ただしここでは環濠は確認されていない。このような環濠集落の出現はひとりこの地域の問題にとどまるものではなく、佐賀平野全体の歴史的動向と深く関わるものであって、後期後半におけるこの地域の政治的勢力の一定の熟成と結集をみせるものであろう。墓地は惣座B遺跡のバイパスにかかる調査で中期から続く甕棺・石棺の列埋葬一部が調査されているが、大規模な墓域を形成するほどではない。特殊な遺物では西山田二本松遺跡の土壙から出土した銅釧2点、惣座B遺跡の土壙墓から出土した楽浪系銀製指輪3点と約7000個のガラス小玉、尼寺遺跡出土の中広形式銅戈2本[03]などがあるほか、舶載鏡および仿製鏡の出土が惣座遺跡を中心に知られ、特異な地域性を示している。

古墳時代では今のところ久池井周辺で前期前半に遡るような古墳は見つかっていないが、いずれ明らかになるものと確信する。ただ最近の調査では西南約4㎞にあたる池ノ上二本松遺跡[04]で方形周溝墓の群集が認められているのは注目に価するし、久池井からやや離れるが、4世紀代の前方後円墳としては佐賀市金立の銚子塚古墳[05]（98m）、池ノ上の風楽寺古墳[06]がある。4世紀末～5世紀前半では琴柱形石製品を出土した森ノ上古墳[07]、豊富な鉄器を出土した高畠古墳[08]など石棺を内部主体とする小円墳が知られる中で、前方後円墳では刳抜石棺を内蔵する前隈山古墳[09]が春日遺跡の北側山上に出現、そして約3西方には県下最大の船塚古墳[09]（119m）が現存7基の陪塚と盾形周濠をもつ整美な姿で登場する。後期になると佐賀平野の古墳文化の中心は東部に移ってしまうかのようであるが、それでも築山古墳[09]（60m）、小隈山古墳[09]（64m）、さらにその西方山麓部には水上古墳、地蔵山古墳、権現山古墳などの中小前方後円墳[09]が多く、地域勢力としての伝統を保持し続けている。これらの古墳は「佐嘉君」の勢力地が大和町から佐賀市にかけての山麓部に推定される根拠となるものであり、この伝統のうえに立って肥前国府の出現とその後の発展がありえたと考えられよう。群集墳は山麓部段丘上から丘陵斜面にかけて密に分布しているが、密柑園造成時の破壊が著しいうえ調査例がまだ少ない。礫石遺跡や久池井一本松遺跡から窺われるところ、この地域での群集墳の盛期はむしろ7世紀にあるらしい。また7世紀後半以降は群集墳中に木棺墓・土壙墓が出現して8世紀以降古墳にとってかわるが、


池ノ上二本松遺跡

船塚前方後円墳

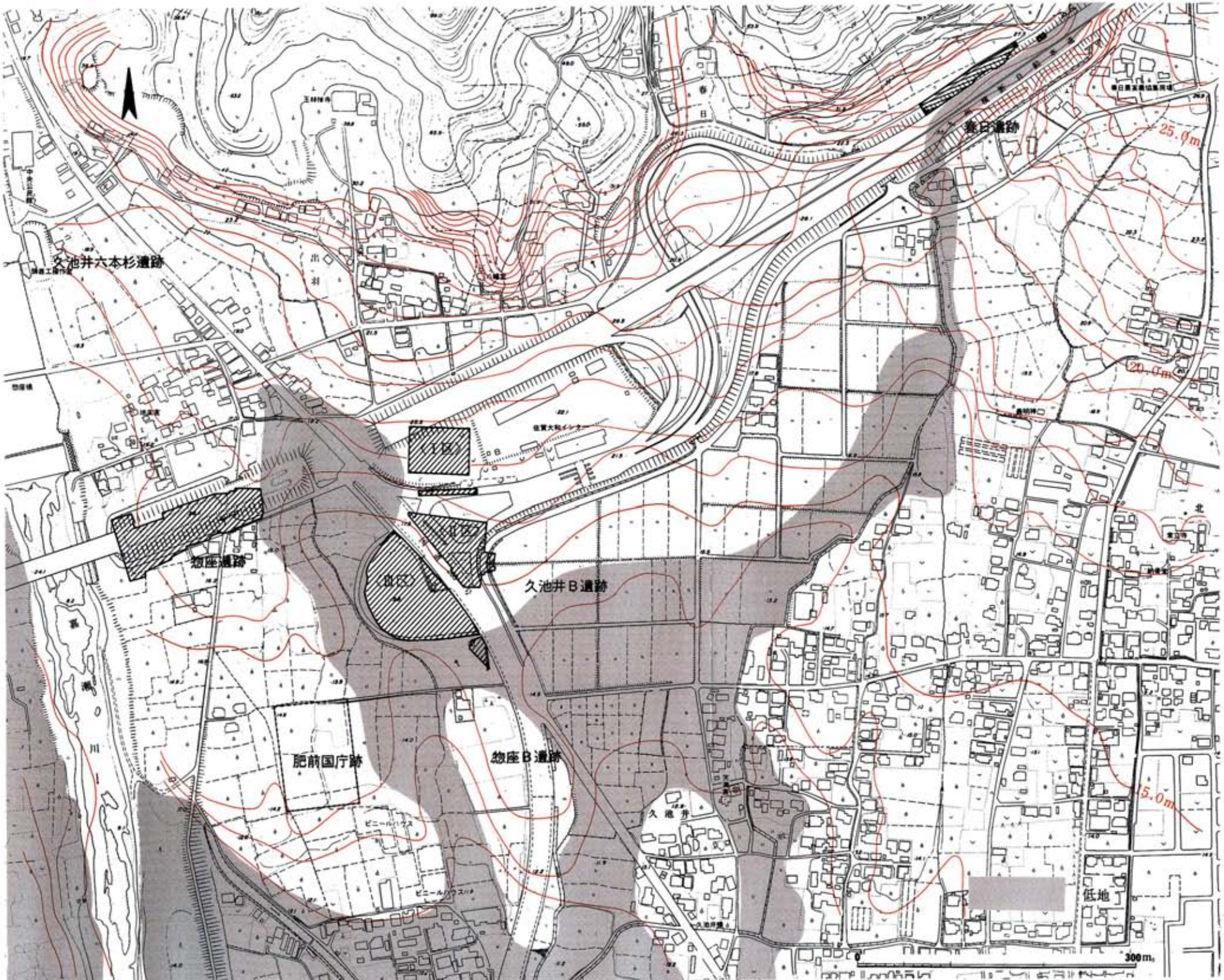


Fig. 5　旧地形復元および発掘位置図（1/5000）

この新しい埋葬様式は今のところ国府跡周辺に多く知られる点が注目される。集落遺跡は惣座遺跡で前期、春日遺跡で後期の住居跡などが知られるが、遺物・遺構ともに資料が少なく、地域全体の動向を窺うには不十分である。

肥前国府はおそらく８世紀前半には出現したと考えられる。昭和50年度以来10年計画で進めてきた確認調査およびその後の調査により全国的にも稀に国庁の位置・構造が把えられ、さらにその周辺の官衙群全体についてもかなり多くの知見が今日整いつつある。まず中心となる国庁跡は惣座遺跡の中にあって、今回報告地区の東南方約250mの距離にあたる。構造は前殿・正殿・後殿を中心に東西各２棟の脇殿と正殿にとりつく回廊があり、四周は南門を設けて築地と溝が廻る。規模77m×104m、方位は約７°西に傾く。このような国庁の形態は大宰府政庁（Ⅱ期）を一回わり小型にしたというべきもので、出土瓦の類似性等とも合わせその影響のつよさを窺わせる（Fig. 6）。この国庁跡を中心として周辺官衙は惣座遺跡が乗る微高地上では北側に拡がり、惣座六本杉遺跡まで続く。面的な調査では今回報告の正倉地区、それに惣座六本杉遺跡で規則的な配置をもつ大型の基壇建物群が見つかっている。さらに、国庁跡の北東約150mには久池井Ｂ遺跡、その南に惣座Ｂ遺跡があって、数時期にわたる国府関連建物群が調査されている。

これら国庁跡周辺の官衙群の分布状況については旧地形との関係が重要と思われるので、ここで若干説明しておく。Fig. 5 は現地形の等高線とこれまでの一帯の試掘結果、および建物遺構の分布状況を基に復元したものである。大きな特徴はまず国庁跡を含む惣座遺跡の立地は嘉瀬川東岸の細長い自然堤防微高地であって、国府の中枢部にしては極めて窮屈な条件にあることがわかる。国庁跡の南側は約100mで一旦微高地が終わるらしい。またその東側、久池井Ｂ遺跡・惣座Ｂ遺跡との間には幅30～80m程の旧小河川の流路の跡をとどめる低地帯が西北から東南に向かって流れ、現在大部分が水田となっている。久池井Ｂ遺跡はしたがって惣座遺跡とは別の、丘陵南裾から南に拡がる段丘上に独立した形で位置するものであって、さらに久池井Ｂ遺跡の場合は本来、同じ段丘が途中とぎれて南に伸びた端部に立

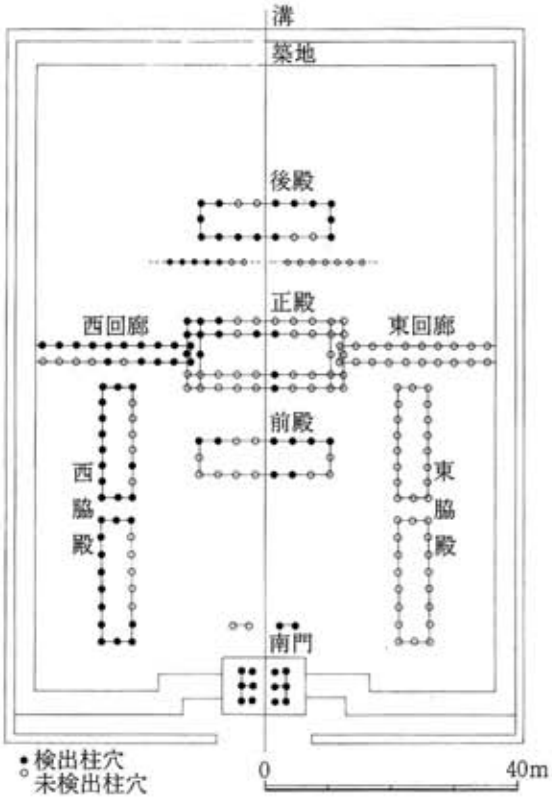
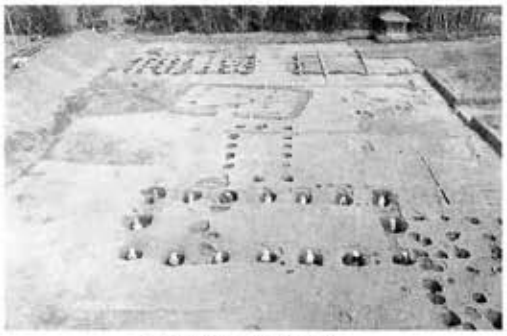


Fig. 6　肥前国庁跡復元図

宝満遺跡（国分尼寺跡）

国分寺跡の塔跡基壇


久池井六本杉遺跡

西海道跡（国分寺跡南側付近）

地するものといえよう。このように、平面的にみえる国庁周辺の官衙群の分布も旧微地形と重ねてみることにより一層意味がでてくる。地形に関してもう一言いうと、国府が本来、国庁および関連官衙を中心とする一つの都市設計であるとする一般的理解に立てば、その適地としてはむしろ東方の宝満遺跡周辺に十分広大な段丘を求めることができたはずであるが、この種の問題については総括でまとめることにする。

国庁跡周辺の地形は現在、惣座遺跡は今も大部分が果樹園や畑地としてよく旧状をとどめているが、久池井Ｂ遺跡から惣座Ｂ遺跡にかけては九州横断自動車道の佐賀大和インターやバイパス建設なよって一変し、また久池井Ｂ遺跡東側の水田地帯も圃場整備により旧地割りは全く跡をとどめていない。

さて再び国府に関連する遺跡をみてゆくと、国庁跡からやや離れ東南約1.3kmには肥前国分寺跡と肥前国分尼寺跡（宝満遺跡）がある。国分寺跡は確認調査の結果、方２町の寺域が推定され、築地と溝に囲まれた回廊とその内に講堂・金堂・塔からなる配置が考えられている。現在、講堂付近には礎石が散在し、金堂と塔は基壇の一部が残存するばかりである。尼寺跡は国分寺跡と２町の間隔をおいてその西側に位置し、規模は方１町と推定されている。中心部は現在工場が建てられ、ちかくに礎石の一部が寄せ集められているが、最近の調査によって北辺から東北隅の築地と溝が確認され、また出土須恵器に現在の地名どおり「尼寺」と墨書したものがあることなどから、この遺構が推定どおり尼寺跡にあたることが

ほぼ明らかとなった。

この南側には約70m離れて古代西海道が東西に走り、国庁の約750m南のあたりに向かう。この官道は太宰府から南下したあと基山町関屋付近で肥後に向かう道と別かれ、中原町から小城町にかけては約26kmをほぼ一直線に佐賀平野を横断しており、航空写真や現在の地割り等でその跡が知られるものである。久池井一帯でも幅７m～10mほどの道幅が断続的ながら地割りに残り、段丘部を通過する際には切り通しを造っている。

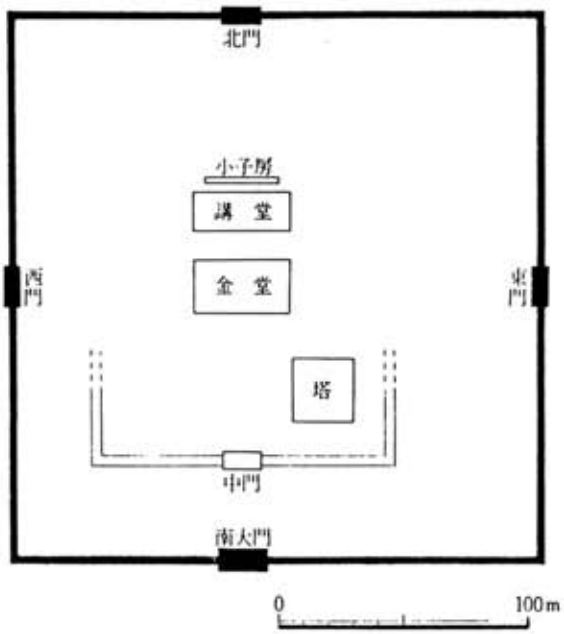


Fig.7　肥前国分寺跡復元図

一方嘉瀬川西岸ではやはり九州横断自動車道関係の調査で東山田一本杉遺跡[09]・西山田二本松遺跡[10]・西山田三本松遺跡[10]で国府の時期の掘立柱建物群が広範にみつかっている。これらの遺跡は名称を分けたが本来一連の遺跡で、整然とした配置の倉庫群や長棟がみられ、とくに東山田一本杉遺跡では一辺60m以上の区画をもつ築地と溝を廻らす建物群の一部が知られている。また一帯からは「郡廏」と読めるヘラ描き土器や緑釉陶器片、硯、石銙が出土するなど、何らかの官衙の存在を推定させるものがある。従来の肥前国府跡に対する認識からすると嘉瀬川を西にこえてこのような同時期の建物群が存在することは驚くべきことで、郡衙や駅を含めて肥前国府を廻る問題は益々拡がりをみせている。なお、この時期の一般集落としては大久保三本松遺跡で竪穴住居等のまとまりある一群が良好な資料を提供しているほか、惣座Ｂ遺跡でも数棟の竪穴住居跡がある。ただし全体に数は少ない。その他、寺跡では嘉瀬川西方約1.8kmに奈良時代の瓦を出土する大願寺廃寺が礎石と基壇の一部を残している。

このように惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡を中心とするこの地域は、とくに弥生時代以降の大きな時代の変動をくぐり抜けて国府の出現期にまで伝統的な勢力を保持し、肥前国全体の歴史の中で特異な役割りを果した地域として重要視する必要がある。

〈註〉

1　東中川忠美ほか『久保泉丸山遺跡』佐賀県教育委員会1986（本田秀樹「歴史的環境」）蒲原宏行ほか『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会1984

2　田平徳栄「久池井一本松遺跡」(『礫石遺跡』佐賀県教育委員会）1989
3　立石泰久ほか『肥前国府跡Ⅰ』佐賀県教育委員会1978
4　田平徳栄ほか『礫石遺跡』佐賀県教育委員会1989（多々良友博「礫石Ｂ遺跡の縄文土器」）
5　木下之治「脊振山脈南麓で初めて発見された大和町南小路支石墓」(『新郷土』301号）新郷土刊行会1974
6　田平徳栄「久池井Ｃ遺跡」(『礫石遺跡』佐賀県教育委員会）1989
7　立石泰久『惣座遺跡』大和町教育委員会1986
8　大和町教育委員会1988年調査
9　七田忠昭『七ヶ瀬遺跡』大和町教育委員会1981
10　本田秀樹「東山田一本杉遺跡」(『九州横断道関係発掘調査概報７』佐賀県教育委員会)1984
11　天本洋一「西山田二本松遺跡」(『九州横断道関係発掘調査概報９』佐賀県教育委員会)1987
12　副島正道・樋口秀信「西山田三本松遺跡」(『九州横断道関係発掘調査概報10』佐賀県教育委員会）1988
13　松尾禎作「春日村尼寺のクリス型銅剣出土地に就て」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第五輯）1936
14　川崎吉剛「池ノ上二本松Ｂ遺跡」(『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７』佐賀県教育委員会）1989
15　木下之治『銚子塚』佐賀市教育委員会1976
16　松尾禎作『佐賀県考古大観』祐徳博物館1959
17　松尾禎作「春日村森の上古墳」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第八輯）1949
18　松尾禎作「都渡城高畠古墳」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第八輯）1949
19　松尾禎作『佐賀県考古大観』1957
20　志佐惇彦「佐賀県下の前方後円墳（『庚申堂塚古墳』佐賀県立博物館）1978
21　田平徳栄「久池井一本松遺跡」(『礫石遺跡』佐賀県教育委員会）1989
22　七田忠昭ほか『肥前国府跡Ⅲ』佐賀県教育委員会1985
23　高島忠平ほか『肥前国分寺跡』大和町教育委員会1976
24　昭和54年大和町教育委員会調査
25　木下　良「空中写真に認められる想定駅路」（『ぴぞん』64）1976
26　副島正道「大久保三本松遺跡」(『九州横断道関係発掘調査概報』９佐賀県教育委員会）1987

第3章　遺　跡　各　説

惣（そう）座（ざ）遺跡

遺跡名：惣　座　遺　跡　（略号 ＳＯＺ）
所在地：佐賀郡大和町大字久池井字五本杉

惣　座　遺　跡

Ⅰ　遺跡の概要

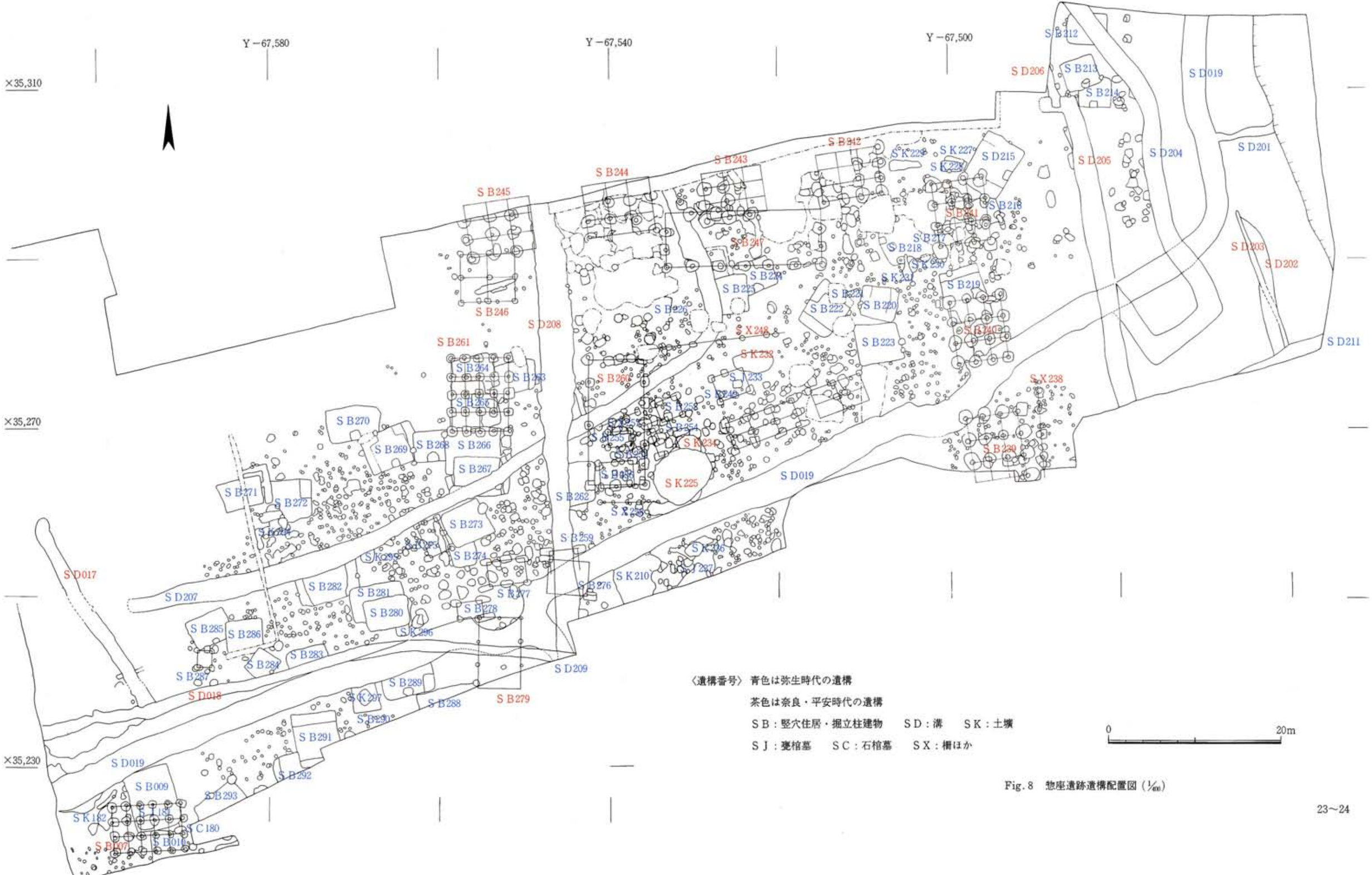
惣座遺跡は嘉瀬川が脊振山塊を抜けて扇状地に移行するあたりの東岸微高地上に位置する。既に述べたとおり、この微高地は嘉瀬川に沿って南北に伸びる幅の狭い低台地であって、その東側には旧河道にあたる湿地帯を挟んで久池井Ｂ遺跡が所在する別の低台地がある（Fig. 5）。現在遺跡の名称を区別する場合、広義の惣座遺跡は『佐賀県遺跡地図』佐賀県教育委員会1980に従えば国道263号線と嘉瀬川とに挟まれたこの一帯を極めて広い範囲で指すが、最近の大和町教育委員会による調査ではそのうち北端部を惣座六本杉遺跡、あるいは久池井Ｂ遺跡の南側低台地を惣座Ｂ遺跡と呼んで区別している。肥前国府跡との関係では惣座遺跡そのものは広義の国府域に含まれようが、現在所在が確認されている国庁跡は惣座遺跡の中に位置する、といった関係にある。

今回報告する調査区はこの惣座遺跡の中で国庁跡の北方約250mにあたる、昭和52年度および昭和57・58年度に調査を実施した地区である。高速道計画路線に沿って東西約160m、南北約50mの東西に細長い範囲で、その西端は嘉瀬川河岸にほぼ接し、また東端では地形がやや急に下がって湿地に移る。したがって調査区としては惣座遺跡が乗る微高地を幅約50mで東西幅を端から端まで拡げた形となる。この付近での地形の傾斜は南々東に向かって緩やかに下るが見た目には殆ど平坦地とかわらない（Fig. 5，ＰＬ～６）。

惣座遺跡は旧石器から中世まで続く、佐賀平野の中でも有数の大規模複合遺跡である。52年度の調査では旧石器時代の黒曜石ナイフ、57・58年度の調査での縄文時代の削器、石鏃等が出土しており、既に旧石器時代から人々の活動の場となっていたことが知られる。しかしながら何といっても今回の調査の成果を特徴づけるのは弥生時代後期の環濠集落と奈良・平安時代の国府関連建物群であろう。このことは恐らく惣座遺跡全体についても言えることであって、弥生時代でもとくに後期における大規模な集落形成、そして奈良・平安時代における肥前国庁を中心とした周辺官衙群の形成が、佐賀平野の中でも他にみられないその大きな特色といえる。

調査の結果、検出した遺構は弥生時代～平安時代までの総数100基以上にのぼるが、上記のような遺跡の性格上、その大部分は弥生後期と奈良・平安時代の遺構である（Fig. 8）。

まず弥生時代では、調査区に関する限りでいえば、後期初頭に集落形成が始まり、後期後半になるとそれから環濠集落へと大きな変貌を遂げる。遺構は竪穴住居跡43棟と掘立柱建物跡14棟のほか溝、土壙、それに甕棺墓等の埋葬が若干ある。全体に削平が著るしいため竪穴住居跡などは壁高がせいぜい10cm程度しか残存しないものが多く、とくに調査区の中で最も標高の高い西北部では、本来一様に濃密な竪穴住居跡の分布がみられたと推測するが、現状では遺構が



〈遺構番号〉 青色は弥生時代の遺構

茶色は奈良・平安時代の遺構

ＳＢ：竪穴住居・掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土壙

ＳＪ：甕棺墓　ＳＣ：石棺墓　ＳＸ：柵ほか

0　20m

Fig. 8　惣座遺跡遺構配置図（1/400）

全くみられず空白地帯となっている。削平によるものであろう。また攪乱・切合いも著るしくそのため形状の把握さえ困難なものもある。出土遺物は全体に原位置をとどめるものが少ない。時期差は別として全体の分布をみると、竪穴住居跡は調査区の中で東群と西群に大きく分かれ、その中間部にＳＢ249ほか掘立柱建物群が密集する。掘立柱建物群はその西南側にもみられるが、これら建物群には大型でしかも整然とした配置をとるものがあり、はたして集落の中でどのような性格をもつものであるか問題になるところである。

一方、環濠はＳＤ207とＳＤ019の２条がほぼ等高線に合わせて東西に並走し、両端が北に曲がる。それぞれ内濠と外濠にあたるとみられ、今回の調査区が環濠集落の中で南辺部にあたることを示している。とくに注目されるのはＳＤ019で、南辺の途中に２ケ所の弧状突出部をもち、さらに東辺では弥生終末にＳＤ204に改修しているがその際には東南隅に新たな方形突出部を加えている。この突出部構造は吉野ケ里遺跡等でみられるように防禦的機能をつよく思わせ、本遺跡が少なくとも久池井一帯の中の拠点的集落であることを象徴するものである。

環濠は古墳時代前期のうちに埋没してしまうらしい。ただし古墳時代を通じてこの地区がどのように利用されたかは殆ど不明で、明確な遺構は前期末のＳＤ211がみられるにすぎない。

奈良時代になるとまずＳＤ205・ＳＤ206で東辺を限りＳＢ239ほか３間×３間の総柱建物群が鍵形に配置されて出現する。この７棟は方位を国庁跡（約Ｎ７°Ｗ）にちかいＮ９°Ｗに揃え、倉庫構造の大型建物であることから、現在知られている国庁と同時期の正倉的性格をもつ建物群の可能性がつよい。次いで正方位にちかい方位をとる大型長棟の一群が倉庫群にとって替わる段階ではＳＢ247・ＳＢ260が鍵形に配置され、さらに同時期に存在したかどうかは不明だが、わずかに方位が西に振れるＳＤ208と、その西側にＳＢ261（４間×４間）・ＳＢ007（５間×５間）の総柱構造の倉庫建物２棟が造られる。廃棄壙にあたる大型土壙は２基あり、やはり奈良時代であろう。その他掘立柱建物はＳＢ246・ＳＢ279の２基があるが柱穴は小さく官衙的建物とは思われず、ＳＤ018と共に平安時代に下るものと推定する。

このような遺跡の変遷にかかる詳細な検討、とくに弥生時代環濠集落と奈良・平安時代官衙の形成過程についてはここで概要をまとめるにはやや問題が大きく、また他遺跡との関連・比較も必要となるので本書末の「総括」で改めて述べる。そこで以下、とくに弥生時代と奈良・平安時代についてそれぞれ項を設け遺構・遺物ごとに再度概要に触れたうえで、まず個々に資料を挙げて簡単に説明することにする。

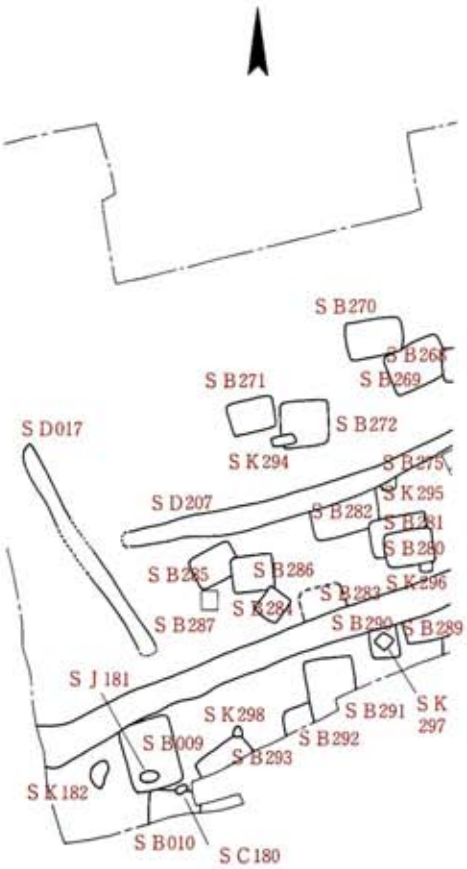
なお上記概要については『九州横断道関係発掘調査概報７』1984でも報告したところであり、その際ＳＢ249ほか小型の掘立柱建物群および方形突出部をもつＳＤ204を国府期としていたが、その後の遺物整理・検討の結果、弥生後期に位置づけざるをえないと考えるに至ったので上記のとおり変更する。またＳＤ207を弥生中期とみて環濠集落の拡大の可能性を述べたが、これも今回遺物の検討の結果、二重環濠の内濠とみるのが適当と考えている。

Ⅱ 遺 構

1 弥生時代

検出した弥生時代の遺構は溝５条・竪穴住居跡43棟・掘立柱建物跡14棟・柵２列・石蓋土壙墓１基・甕棺墓３基・土壙11基である。そのほかにも弥生時代の可能性がある掘込みや柱穴はいくつかあるが、構造あるいは時期が明確でないので一応除外する。全体の時期は弥生後期前半から弥生終末の西新式期まで幅があり、そのうち主体となるのが後期後半～後期終末である。西新式の新しい段階については今日、庄内式の影響が現われ始める頃の北部九州の在地系土器とする見方が一般的であり、それに従えば惣座遺跡の環濠集落は先進地域で古墳が出現する時期まで存続することになるが、ここでの時代区分は従来の編年に依り西新式期を弥生時代に含めて扱うことにする。奈良・平安時代の遺構を除いて遺構の分布はFig. 9のとおりであり、対照する遺構一覧はTab, 1に示した。集落全体の変遷は「総括」で述べるとして、以下、遺構の分布状況・特徴などについて一通り説明する。

まず環濠はＳＤ207とＳＤ019の２条が並走するように集落の南辺を限ったのち、それぞれ東西両辺とも曲がって北に向かうようである。ＳＤ207の場合、南辺は北から約65°東に傾き全体がやや弓状に張りながら東西方向に走ったのち、東辺では約100°の角度で隅丸状に折れて北に向かう。ただ西辺部については問題があり、昭和52年度の調査で検出したＳＤ017南北溝がＳＤ207と関連するその西辺溝にあたるものと考えるが、その場合は溝が切れるこの西南隅に環濠集落への出入口が設けられていた可能性がある。つまり、この西端部をみるとＳＤ207はＳＤ017に突き当る手前で一旦途切れてしまい、ＳＤ017と約4.0mの間隔をあける。これが環濠内すなわち集落内郭への一つの出入口にあたるのではないかと考えられるのである。また、ＳＤ017自体は北側が削平により消えてしまい残



存長約26mで、なおかつ途中も浅くなって継がりが不明瞭となるが、その南端は平安時代の溝ＳＤ018に切られるものの、明らかにＳＤ019に突き当たるまで伸びてはいない。南端がたまたまＳＤ018の位置で止まっていたとすれば、これとＳＤ019との間隔は約3.6mであり、この切れ目がまた別の出入口にあたっていた可能性がつよい。したがってこの２つの出入口を想定した場合、ＳＤ019における土橋等の存在は不明ながら、西南隅から集落内郭に入るには一旦左折することになり、あたかも中世城館の虎口を思わせるようなやや複雑な構造となる。なお、ＳＤ017の時期は北側埋土中出土の土器からみて弥生後期後半以降で、溝の方位ともあわせＳＢ207と同時期に存在したと考えて何ら支障ない。いずれにせよ、このようにみてくるとＳＤ207はＳＤ017と共に全体として集落の南を方形に区画するもので、ＳＤ019との関係では内濠に当たるものであろう。区画の東西幅は約82mである。掘削構造は平坦な濠底から壁面がやや急に立ち上がるらしい。上面がおそらく１m以上削平されているとみられ、検出面での規模は幅

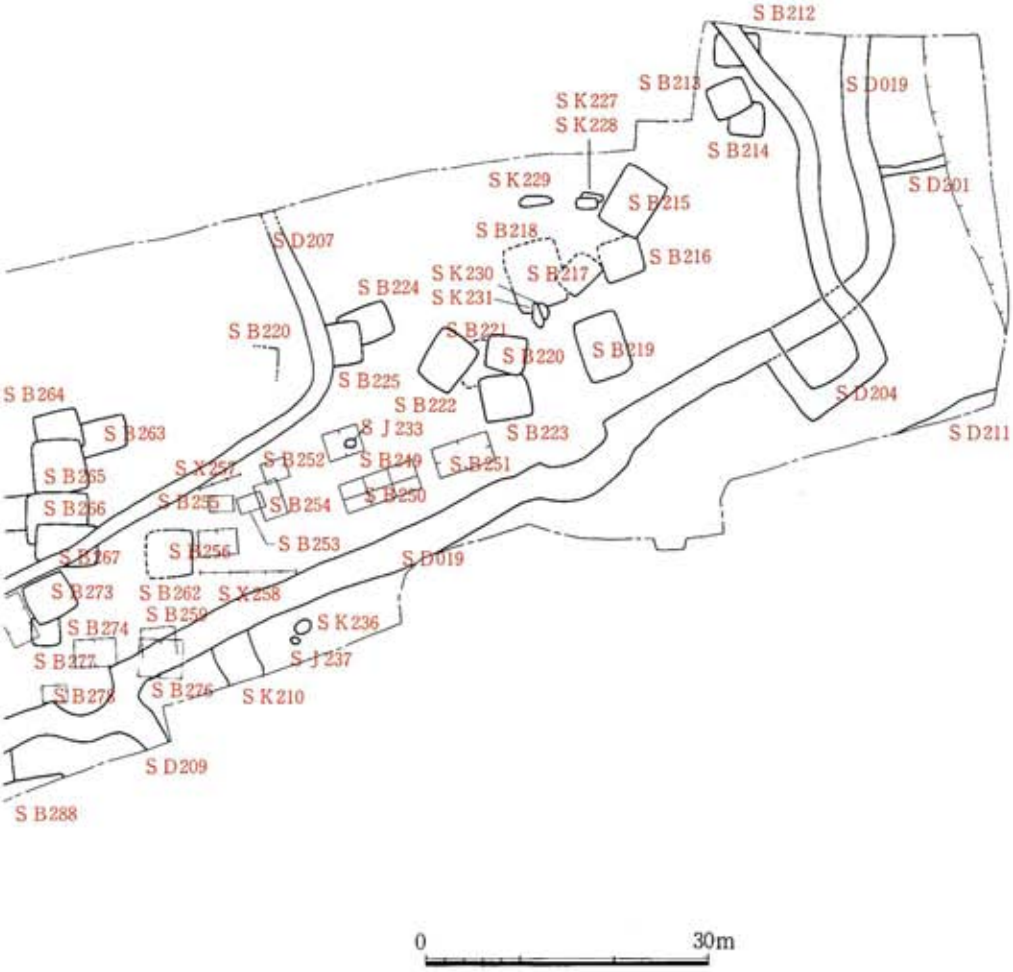


Fig. 9　弥生時代遺構分布図（1/80）

が平均1.5m前後、西側一部の広いところで幅2.2m、深さはせいぜい0.5m程度しか残存していない。したがって次に述べるＳＤ019に比べると一回わり小規模である。土塁・柵列等の痕跡は全く不明で、土橋等の存在も確認できなかった。埋土は黒色土が詰まり遺物は後期後半～終末の土器を主体に比較的多く出土したが、ＳＤ019のように多量にまとめて廃棄されといった状態ではない。ただしこれは溝の残存が浅かったことにもよろう。

次にＳＤ019は集落の外濠にあたる大溝で、その南辺は方位約N65°ＥでＳＤ207と約12mの間隔をおいてほぼ並行しながらも、より直線的に東西方向に走る。西辺は河岸となって消失しているようであるが、調査区西端での状況をみるとわずかに北に折れる気配をみせており、元々嘉瀬川に並行して集落の西側を周回していたものではなかったかと推測する。一方東辺は地形が東側湿地に移る手前で南辺溝から続いて約105°の角度で隅丸状に北に曲がり、集落の東側を画す濠となる。そして途中からやや東に反るように緩やかなカーブをみせて北側の調査区外に消える。東辺での内掘ＳＤ207との間隔は約60mである。また、この東辺部はその後大幅な改修が行なわれており、その際には、あとで述べるように隅に方形突出部をもつＳＤ204が先の東辺濠より４ｍ以上西内に入って掘り直され、途中に張出し状の膨らみをみせながら、ＳＤ207東辺にちかい角度で北々西に向かうようになる。外濠全体の規模は、西辺溝が不明なためあくまで推定であるが、当初の第１期においては東西幅約160m、ＳＤ204に改修される第２期においては東西幅約150mとなる。

濠そのものの掘削構造は共に濠底が平坦で壁はやや急に立ち上がる。規模は現検出面で測り、ＳＤ019が西側の最もよく残るところで幅2.8m、深さ0.9mである。周辺の竪穴住居跡の削平の程度から推して現在より0.5m程度は壁面が高かったと考えられるので、それから復元すると元の幅約4.0m、深さ約1.4m程度になろう。さらに痕跡は全く認められないが、これに土塁が付設されていたとすれば濠底からの高さは優に人の背丈をこえ、防禦機能を果すに十分な高さとなることが推定できる。一方改修後のＳＤ204は検出面で幅2.0m～2.3m、深さ約0.4ｍを測り、同じ東辺部で比べてもＳＤ019よりは一回わり小さく内濠ＳＤ207と同程度の規模にかわっている。深さはＳＤ019との切り合い部分でみると、ＳＤ204の方がＳＤ019より濠底面で約0.2ｍ浅い。

この外濠の時期はＳＤ019濠底出土の土器および竪穴住居跡の切合いなどから、おそらく内掘ＳＤ207と同時に弥生後期後半に掘削されたものであろうと推定する。また東辺ＳＤ204の改修時期については、この新たな堀削によって不用となったであろうＳＤ019東南隅から東辺にかかる部分（仮にＳＤ019東と呼ぶ）出土の土器をみると埋土上層が後期終末にかかる時期にあたっており、ＳＤ204出土土器も後期終末であることから、ＳＤ019東濠に替わるものとして後期終末になって掘削されたとみてよいであろう。なお、このＳＤ019東濠とＳＤ204の時期は重複することなく完全に前後の関係にあるものであるから、埋土土器の様相が編年上問題にな

るところである。ＳＤ019の廃絶時期については、埋土中に須恵器はもとより布留式以降の土器を全くみないことから、遅くとも古墳前期前半のうちには完全に埋没してしまっていたと考えてよいであろう。出土遺物は弥生後期後半～終末を中心とする土器が極めて多量で、とくにＳＤ019の西側１Ｇ区から２Ｇ・３Ｇ・４Ｆ区、および東辺濠では生活廃棄物然とした状況でおびただしく濠を埋めていた。ほかには鉄器（農工具）・石器が多く、また鏡は舶載鏡片１点と完形品１点を含む小型仿製鏡３点分以上などが出土している。

ところで、この外濠の大きな特徴は、吉野ケ里遺跡などで昨今ではあまりにも著名となった環濠途中の突出部構造にある。ＳＤ019南辺では内濠のほぼ中央と対応する位置に１ケ所弧状突出部が造られ、さらにその東側にも約58m離れて別の弧状突出部が設けられているのがそれであり、それぞれ第１突出部、第２突出部と呼ぶ。またＳＤ019東辺がＳＤ204に改修された際には東南隅に第３の突出部をもつに至るが、これは先の２ケ所と異なり方形にかわっているそれぞれの特徴をみると、まず第１突出部は内径6.5mの極めて明瞭な半円形を描き、東西直線部との接合では濠の外側がはっきり境をなさないのに対し、内側では鋭い角をつくる。この点は次の第２突出部でも同じであって、吉野ケ里遺跡の環濠突出部とも共通する特徴である。また第１突出部ではその東側付け根付近からＳＤ209が派生して南々東方向に伸びているが、これは濠底面の状況からみて、まだＳＤ019が機能していたある時期に付け加えられた可能性がつよい。すなわち第１突出部の濠底をみると西側付け根の内側と東側付け根のあたりに約20cmほどの段差があり（Fig.11）、この段差を辿るとＳＤ019の西側から第１突出部を経てＳＤ209に曲がる一連の掘削工法が想定されるからである。この段差はおそらくＳＤ209を掘る際の一貫工事として既存の第１突出部にも一部掘り直しの手が加わったことを意味するものであろう。ただしそれがＳＤ019および第１突出部をそのまま生かした形での施工であったことは、突出部の形状等が殆ど改変されていないことから容易に推測がつくところである。ＳＤ209が加わったことにより、第１突出部付近はＴ字形の堀割りとなると同時に地割りも３分割される。それがいかなる理由によるかは不明だが、環濠そのものが防禦的性格のつよい施設であるという前程に立って敢えて憶測すれば、南面する敵が東西に移動するのを防ぐ、いわば中世山城の竪掘にあたるような防禦機能の強化とみるのも一つの有力な解釈となろう。その他、集落の拡張に伴う新たな居住地区分の必要性など、色々解釈の余地がある。ただここで一つ考えておかなければならないのは、この環濠に土塁を想定した場合、それがＳＤ019の内側を巡るのであればさほど問題ないが、吉野ケ里遺跡のように外側を巡るとなるとＳＤ209が土塁を切ることになるだけに、やや複雑な問題が生じる、という点である。この問題は今はこれ以上ふれないでおく。なお、ＳＤ209の約９ｍ東側にもＳＫ210とした性格不明の溝状掘込みがあるが、形状がはっきりせず掘方も雑であるので単に土壙として扱っておくことにする。

またこのような突出部が言われるように環濠の防禦的性格を象徴するものであるとすると、

建物など他の遺構との関係が大いに気になるところである。第１突出部付近でも確かにＳＢ277ほか大型の柱穴掘形をもつ２間×１間あるいは１間×１間といった掘立柱建物跡が数棟存在する。しかしながら実態はそのいずれもがＳＤ019に切られるものであって、環濠と同時期のものではない。また、これら建物跡の柱穴はどれも残りがよく深い。したがって、この第１突出部で関連する建物を他に想定するのは殆ど不可能であろう。土橋等の出入口の存在も不明である。

次に第２突出部をみると、内径約8.0mで同じく弧状を描くものではあるが突出度は小さく第１突出部のように整った半円形はなさない。この部分には奈良時代のＳＢ239掘立柱建物跡が乗っており、保存の必要から完掘せずに試掘溝を設けるにとどめた。平面形態の若干の差違を別とすれば、構造は基本的に第１突出部と同じである。ここでも突出部付近に突出構造と直接関係するような建物等の遺構を見い出すことはできない。

最後に第３突出部はＳＤ204が掘り直された際にＳＤ019との接合部にあたる外濠の丁度東南隅に造られている。規模は濠の内側で測って幅約6.8m、出約8.0m。面積約54㎡は３ケ所の突出部の中で最も広い。詳細な平面形態はＳＤ019との接合部でほぼ直角に鋭く曲がり、さらにその西南隅でも明瞭な角をなして西辺から南辺が直線的に折れる。しかし東南隅ではやや折れ方が甘くしかも湾曲し、そのまま蛇行するように北に向う。ここでも突出部内および周辺には関連する建物等の遺構は見つかっていない。

溝はそのほかにＳＤ201がＳＤ019東辺に取り付く。幅約1.0m、深さ約0.4mで東端は東の湿地に通じて消えている。ＳＤ211は調査区東南隅に位置する唯一古墳時代前期の遺構で、詳細不明ながら斜行した東西溝とみられる。

竪穴住居跡および掘立柱建物跡は総数57基を数える。調査区の中での全体の分布は東北隅から西南隅に向かって帯状に長く拡がる。ただし北西部から西北隅にかけて空白がみられるのは削平・攪乱によるところが大きいであろうから、その分は割り引いて考えなければならない。これら竪穴住居跡等の分布が明らかに稀薄なのは東南隅付近で、調査区内に関するかぎりではＳＢ212がＳＤ204改修掘削時に切られる以外は外濠の外側に越えて所在するものはなく、またＳＤ019およびＳＤ204の東南隅部は濠の内側にあっても約400㎡ほど建物跡等が存在しない空間がある。

竪穴住居跡の場合、大きくは２群に分かれる。すなわちＳＢ212～ＳＢ223を東群とすれば、15棟がほぼ内濠と外濠それぞれの東辺に挟まれた範囲に収まる形で集合し、一方、ＳＢ262～ＳＢ293およびＳＢ009・ＳＢ010を西群とすれば28棟が内濠・外濠の南辺と全体に切り合う形で濃密に分布する。環濠との関係でいえば、東群はある程度濠の存在を意識した配置をとるのに対し、西群は少なくとも平面的にみてその点が不明瞭であり、既に在る住居群の中を通過して内濠・外濠が掘られた結果によるものであろう。また、東群・西群とも竪穴住居跡どうしの切り合いが著しく、接近しながらも単独で存在するのは１割程度しかない。このことは環濠集

落の性格とも関係し、集落内での居住空間の制約のつよさをものがたるものであろう。

竪穴住居跡の構造は全て方形で、ペット状遺構を伴うものが35％を占める。また入口の構造に関係するであろう方形ピットを壁際にもつものが33％ある。削平等のため大部分は詳細を欠き、残存する遺物は少ないが、その中でＳＢ219床面から完形の小型仿製鏡２面が出土したのは特異な例である。

掘立柱建物跡は調査時点では国府期と推定していた。しかしその後、嘉瀬川西岸の西山田三本杉遺跡など周辺でも弥生時代の掘立柱建物跡が多く見つかっており、検討の結果、ここに挙げた14棟は弥生後期の建物跡と考えるに至った。構造は３間×２間の総柱が１棟、他は２間×２間が１棟、２間×１間または１間×１間が12棟である。柱穴掘形は方形または長方形で、中には２段掘りの特徴をもち土壙墓と見まちがうほど大型の掘形もある。埋土は黒色土で柱根は殆ど不明である。とくに注目されるのは先の竪穴住居跡の西群と東群との間にあって整然とした配置をもつＳＢ249～ＳＢ251である。この３棟は大型長棟のＳＢ250を中心に南北主軸をほぼN20°Wに揃えてＳＤ019の走向を意識し、しかも竪穴住居群がこの地区を避けているところをみると、集落の中でも高床倉庫など特別な機能をもつものと考えられる。掘立柱建物は他にＳＢ252～ＳＢ256が群在、またＳＤ019第１突出部付近にも濠に切られて格別大型の掘形をもつ４棟がかたまり、さらにその北あるいは西側に２棟がある。

竪穴住居跡および掘立柱建物跡を中心とした集落全体の変遷については「総括」でまとめるとして、ただ傾向についてだけいえば、時期は弥生後期の全期間に及び、そのうち後期前半の住居跡は調査区西南部にみられ、後期中頃以降北に拡がっていくらしい。住居跡等の方位は全体として、南北主軸を真北におくものが古く、環濠が造られるのに合わせて斜傾するようになる。この間の変化傾向は掘立柱建物跡群の方位の違いによく現われている。その他、調査区の中央には柵とみられるＳＸ257・ＳＸ258がある。時期は断定できないが、掘立柱建物群に伴うものとして一応弥生時代に含めておく。

埋葬遺構は４基検出した。ＳＣ180はＳＢ009廃絶後にこれを切り込んで造られた石蓋土壙墓で、後期前半の小壺を副葬する。他３基は甕棺で、そのうち後期前半のＳＪ181はＳＢ010を切る。また後期終末の２基のうちＳＪ233はＳＢ249掘立柱建物と重なっており、おそらく建物廃絶後の埋葬であろうと推定する。甕棺片はＳＤ019埋土からも多く出土しており、当時既に破壊されたものもあったらしい。ただし現況でみるかぎりでは、これら埋葬は数も少なく分散的で、決して墓地を形成するほどのものではない。

土壙は11基あるうち、ＳＫ227・ＳＫ228は土壙墓の可能性はあるが、他は大多数が貯蔵穴にあたるものであろう。このうちではＳＫ297が唯一大型の方形である。また、調査区東側のＳＫ229～ＳＫ231の３基は平面楕円形の袋状掘込みで、一端に溝状の掘方が付くという共通性をもつ点が注意される。

Tab. 1　惣座遺跡弥生時代遺構一覧表　Ⅰ・Ⅱ後期前半、Ⅱ・Ⅲ後期後半、Ⅴ・Ⅵ後期後半

遺構番号	種別	形態	規模 m	時期	備考	旧番号
SB009	竪穴住居	長方形	7.4×5.5	Ⅰ		SB009
SB010	〃	(方形)	4.75×3.1以上	Ⅰか	炭化材、灰	SB010
SD017	環濠	内濠西辺	幅約1.8、長26	Ⅲ～Ⅵ	SD207と切れ、出入口付設	SD017
SD019	〃	外濠	幅約2.8	Ⅲ～Ⅵ	土器ほか多量に出土	SD001・019 SD022・025
SC180	石蓋土壙墓	長方形	1.26×0.63	Ⅰ	小壺供献、SB010を切る	
SJ181	甕棺墓	単棺	1.8×1.5	Ⅱ	SB009を切る	
SK182	土壙	不整楕円形	3.0×1.5		埋土中に焼土含む	
SD201	溝	東西溝	幅約1.0、長6.5	Ⅲ～Ⅳ	東側低地に通じる	SD210
SD204	環濠	外濠東辺	幅2.0～2.3	Ⅴ～Ⅵ	SD019東辺の改修	SD203
SD207	溝	内濠	幅1.5～2.7	Ⅲ～Ⅵ	南辺から東辺に曲がる	SD216
SD209	〃	南北濠	幅約2.7	Ⅴ～Ⅵ	SD019第1突出から南に伸びる	SD001
SK210	土壙	不整長方形	幅約4m		濠の可能性もある	SD271
SD211	溝	東西溝			(古墳時代)	SD211
SB212	竪穴住居	長方形	3.7×4.75	Ⅲ	方形ピットSD205に切られる	SB206
SB213	〃	〃	3.7×4.05	Ⅴ～Ⅵか	方形ピット、周溝	SB207
SB214	〃	方形	3.5×3.9	Ⅲ～Ⅳか	方形ピット	SB208
SB215	〃	長方形	7.4×5.0	Ⅴ	ベット付、方形ピット、鉄鎌・鉄鉋出土	SB241
SB216	〃	方形	(3.2) ×3.2	Ⅳか	小型竪穴	SB243
SB217	〃	(方形)		Ⅴ～Ⅵ	石包丁出土	SB244
SB218	〃	(〃)	5.5以上×α	Ⅲか	炉、方形ピット、張床、鉄斧出土	SB236
SB219	〃	長方形	6.3×4.8	Ⅲ	ベット付、仿製鏡2・鉄片出土	SB235
SB220	〃	方形	4.4×3.85	Ⅴ	ベット付	SB237
SB221	〃	(〃)		Ⅳか	張床	SB238
SB222	〃	長方形	(5.7) ×4.8	Ⅳ	ベット付、炉、鉄片出土	SB239
SB223	〃	方形	5.15×4.7	Ⅲか		SB240
SB224	〃	長方形	4.0以上×3.7	Ⅲ	張床、炉、方形ピット、ベット付	SB247
SB225	〃	(方形)	3.4以上×4.55	Ⅲ	張床、炉、礫群	SB230
SB226	〃	(〃)	5.6×α		焼土、張床	SB283
SK227	土壙	長方形	2.3× (1.0)			
SK228	〃	〃	2.3×1.25			
SK229	〃	楕円形	長3.85、幅0.75～1.2	Ⅰ～Ⅱか		SK246
SK230	〃	〃	1.5×1.05	Ⅰ		SB236-P6
SK231	〃	不整楕円形	長3.1、幅0.3～1.15	Ⅰか		SB236-P5
SJ233	甕棺墓	単棺	1.1×0.9	Ⅵ	鉄鉋出土	SJ249
SK236	土壙	楕円形	2.1×1.6			SK282
SJ237	甕棺墓	単棺	(1.1) × (1.0)	Ⅱ		SJ284
SB249	掘立柱建物	東西棟	2間×1間 3.8×3.0		N20° W、SD019に並行	SC区P1他
SB250	〃	〃 (総柱)	3間×2間 8.25×3.3		N20° W、 〃	SB287
SB251	〃	〃 (〃)	2間×2間 6.25×3.3		N20° W、 〃	SB287
SB252	〃	〃	1間×1間 2.45×2.35		N22° W	
SB253	〃	〃	1間×1間 2.75×1.55		N23° W	

遺構番号	種 別	形 態	規 模 m	時 期	備 考	旧番号
ＳＢ254	堀立柱建物	南北棟	2間×1間 3.95×2.5		N18° W	
ＳＢ255	〃	東西棟	1間×1間 2.6×1.7		N 3° W	
ＳＢ256	〃	〃	2間×1間 3.9×2.95		N 3° W	
ＳＸ257	柱 列	〃	3間以上、4.9～		N21° W	
ＳＸ258	柵	東西方向	4間以上、6.75～		N 1° W	
ＳＢ259	堀立柱建物	(東西棟)	(1)間×1間 3.5×α	Ⅰ～Ⅱか	N 6° W、ＳＤ019に切られる	ＳＫ266・288
ＳＢ262	竪穴住居	方形	α×5.6	Ⅴ	張床、ベット付、方形ピット	ＳＢ229
ＳＢ263	〃	長方形	4.5以上×3.15		張床、ベット付、	ＳＢ270
ＳＢ264	〃	方形	4.75×(4.2)		張床	ＳＢ268
ＳＢ265	〃	〃	5.45×5.7	Ⅲか	張床、鉄鏃出土	ＳＢ269
ＳＢ266	〃	長方形	(8.8)×(5.4)	Ⅵ	ベット付、炉、張床、砥石・ガラス小玉出土	ＳＢ220
ＳＢ267	〃	〃	(7.3)×4.1	Ⅰ	ベット付、炉、張床、石包丁・鉄斧・鉄鏃	ＳＢ218
ＳＢ268	〃	方形	3.7以上×3.7	Ⅰ～Ⅱか	方形ピット、炉、張床、ガラス小玉出土	ＳＢ214
ＳＢ269	〃	長方形	(6.4)×4.6	Ⅲ	ベット付、炉、方形ピット、ガラス小玉出土	ＳＢ215
ＳＢ270	〃	〃	6.2×4.1		張床、炉、方形ピット	ＳＢ213
ＳＢ271	〃	〃	4.8×3.5	Ⅴ～Ⅵ	方形ピット、炉	ＳＢ255
ＳＢ272	〃	(長方形)	5.6以上×(4.5)	Ⅰ～Ⅱか	ベット付	ＳＢ212
ＳＢ273	〃	方形	4.95×4.6	Ⅵか	張床、炉、砥石・鉄鎌出土	ＳＢ228
ＳＢ274	〃	〃	3.1×3.0	Ⅴ	小型竪穴、張床、炉	ＳＢ254
ＳＢ275	堀立柱建物	南北棟	2間×1間 4.25×2.55		N23° W、ＳＢ273と並ぶ	
ＳＢ276	〃	(東西棟)	(1間×1間) (4.9×4.1)	Ⅰ～Ⅱか	N 5° E、ＳＤ019に切られる	ＳＫ265・285
ＳＢ277	〃	東西棟	2間×1間 4.4×2.95	Ⅰ～Ⅱか	N 8° W、 〃	ＳＫ259～263
ＳＢ278	〃	〃	1間×1間 2.7×2.05	Ⅰ～Ⅱか	N10° W、 〃	ＳＫ257・258 ＳＫ289
ＳＢ280	竪穴住居	長方形	6.35×4.2		張床、ＳＢ281・ＳＫ296が切る	ＳＢ256
ＳＢ281	〃	〃	5.1×3.75	Ⅵ	ガラス小玉出土	ＳＢ253
ＳＢ282	〃	〃	7.15×3.6以上	Ⅱ	ベット付、方形ピット、張床、ガラス小玉出土	ＳＢ252
ＳＢ283	〃	(方形)	α×4.8	Ⅰ	張床、ＳＤ018に切られる	ＳＢ227
ＳＢ284	〃	方形	3.2×3.0		小型竪穴、ＳＤ018に切られる	ＳＢ234
ＳＢ285	〃	長方形	4.75×3.65	Ⅳか	炉、方形ピット	ＳＢ217
ＳＢ286	〃	方形	4.25×3.8	Ⅴか	炉、張床	ＳＢ251
ＳＢ287	堀立柱建物	南北棟	1間×1間 2.05×1.8		ほぼ正方位	
ＳＢ288	竪穴住居	(長方形)	7.3×α	Ⅱ	炉、方形ピット	ＳＢ278
ＳＢ289	〃	(方形)	6.15×3.2以上	Ⅱ	ベット付、方形ピット、張床、ガラス小玉出土	ＳＢ280
ＳＢ290	〃	方形	3.1×3.0以上	Ⅰ～Ⅱ	小型竪穴、ＳＫ297に切られる	ＳＢ279
ＳＢ291	〃	長方形	6.35×5.1	Ⅱ	ベット付、炉、張床、砥石・鉄斧出土	ＳＢ232
ＳＢ292	〃	(長方形)	6.1以上×α	Ⅰ	ベット付、ＳＢ291に切られる	ＳＢ233
ＳＢ293	〃	(方形)	5.8×α	Ⅰ	炉、砲丁・砥石出土	ＳＢ231
ＳＫ294	土 壙	長方形	2.8×1.2		埋土上面に焼土	3Ｅ区Ｐ－1
ＳＫ295	〃	隅丸方形	1.6×(1.7)		ＳＤ207に切られる	4Ｅ区Ｐ－8
ＳＫ296	〃	〃	1.6×1.6		ＳＢ280に切られるか	ＳＢ256Ｐ－19
ＳＫ297	〃	方形	1.5×1.6	Ⅵ	ＳＢ290を切る	ＳＢ279

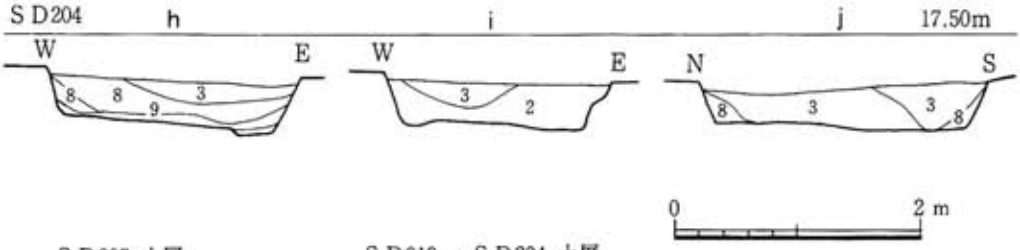
(1) 環濠・溝

環濠全体の特徴については既に述べたとおりである。ここでは断面図を示して若干の補足説明をしておく（Fig.10, ＰＬ７～10）。

濠の断面はＳＤ207・ＳＤ019・ＳＤ204のいずれも底面が平坦で、壁は約60°の角度で稜をなして立ち上がるのが本来の形と思われる。ただしＳＤ019のｅ断面のように壁の傾斜が途中で変わるのは掘り直しの痕の可能性があり、ＳＤ019については他にも第１突出部などで部分的な補修が行なわれたようである。埋土は３条とも黒色土を主体に褐色土、黄色土が上位でレンズ状となる自然な堆積を示す。遺物が多量に出土したＳＤ019では、とくに西側のｄ断面付近で濠底ちかくの下層とそれより約0.6m浮いた上層とに遺物包含層が明瞭に分かれた。

それぞれ溝のレベルをみると、上面は削平のため不明だが濠底で観察するかぎりでは、ＳＤ207の場合は東辺が若干高く、南辺では中央がかなり低くなるものの東西両端は殆どかわらない。これは濠の走向が地形の傾斜方向と一致することと関係するものであろう。ＳＤ019およびＳＤ204の場合もこれと同様に濠底は東辺が南辺よりやや高く、南辺自体は東西両端であまり違わない。したがって内濠・外濠とも濠底面を雨水が流れる場合は地形の自然傾斜上方にあたる北側から下方の南へ、すなわち濠の東辺から南辺に向かって水が集まることになる。

これは土塁の存在とも関係するが、濠は必然的に集落内雨水の排水機能をも兼ねたであろう。ＳＤ207はその結果、南辺に水が溜ることもありうる。しかし内濠・外濠とも本来の目的は防禦である以上、空掘が常態であったとしても一向にさしつかえなく、事実ＳＤ019をみれば明らかなように南辺に集中した水はＳＤ209が開放したであろうし、東辺でもＳＤ201が東側の湿地に通じてＳＤ019の水を逃がしている。したがって、少なくともＳＤ019については滞水の可



ＳＤ207 土層
1．暗褐色土
2．黒色土
3．黄色土混褐色土
4．黄色土混黒色土
5．茶褐色土混黄色土
6．灰褐色土混黄色土
7．黄色土混灰褐色土

ＳＤ019 ・ＳＤ204 土層
1．褐色土
2．暗褐色土
3．黒色土
4．黄色土混褐色土
5．黄色土混灰褐色土
6．黄褐色混黒色土
7．黒色土混黄色土

8．黄色土混黒色土
9．黄褐色土

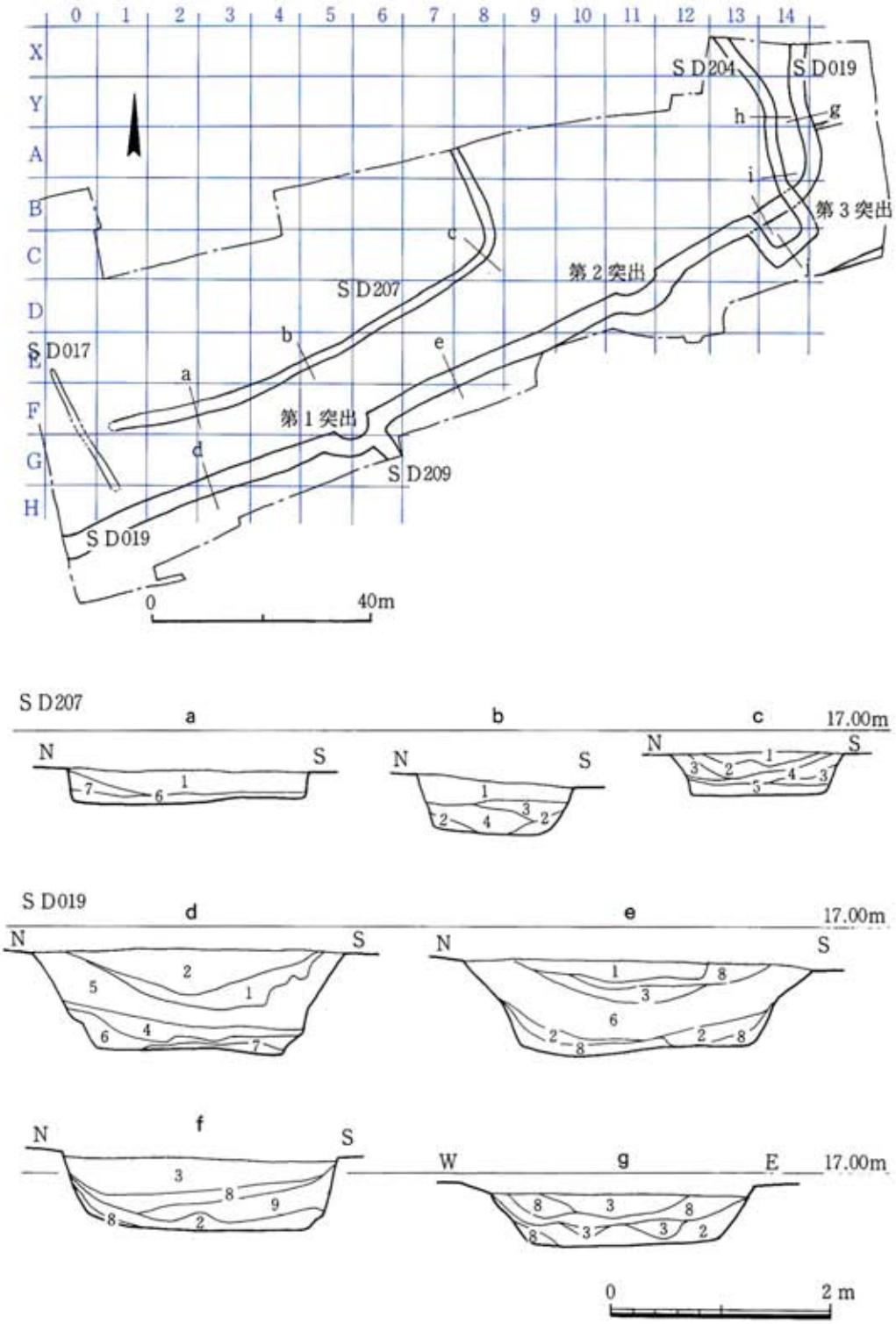


Fig.10 弥生時代環濠 (1/800) (1/60)

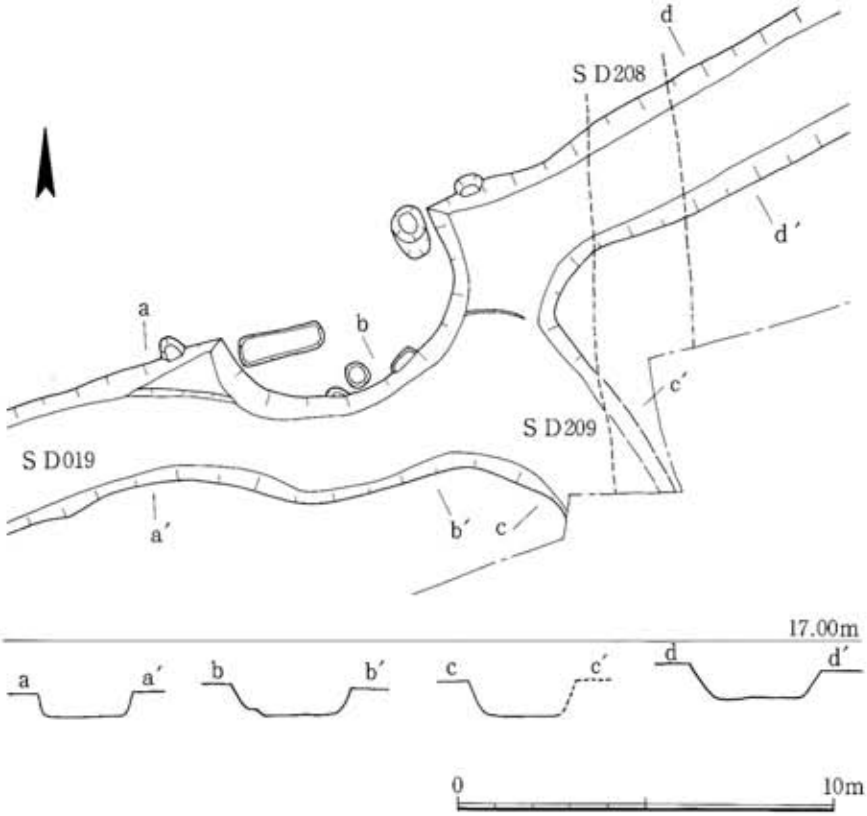


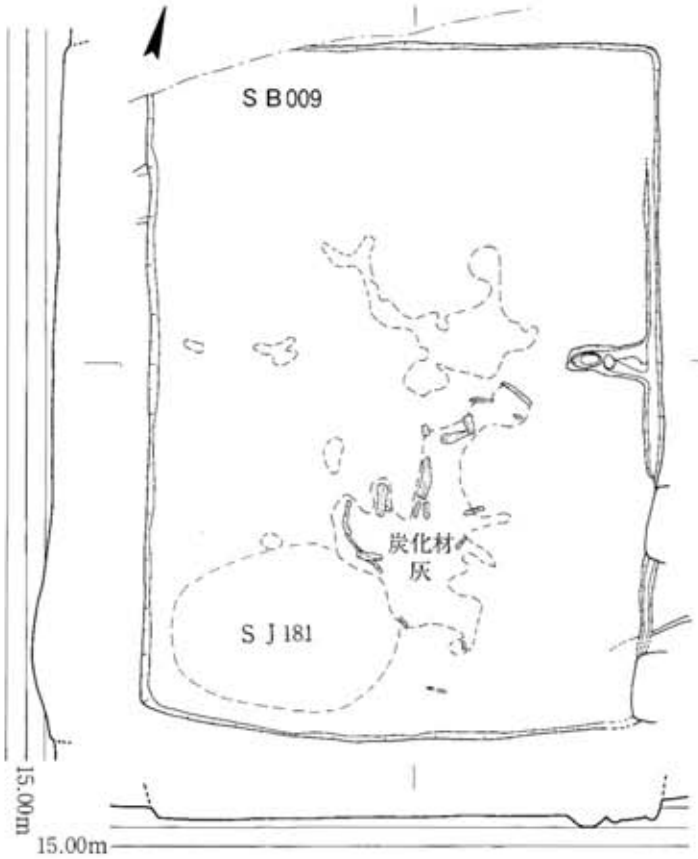
Fig.11　S D019 環濠第１突出部（1/50）

能性はまず考える必要がないであろう。排水のもっと手取り早い方法は、実は西辺からすぐ脇の嘉瀬川に放流することである。西辺が不明なためこの点は何とも言えないが、本来の防禦目的からいえば排水はあくまで第二義的なもので、環濠の機能上あまり意味のあることではない。やはりＳＤ019が西辺を周回していたと考えるべきであろう。

その他、ＳＤ019第１突出部の個別図をここに挙げておく（Fig.11）。概要は前述のとおりである。ただし図は調査の最終段階のものであるため、これと切り合うＳＢ278ほかの柱穴は既に埋められており表現していない。

(2)　竪穴住居跡

弥生後期の方形竪穴住居跡を43棟検出した。全体に削平・攪乱あるいは切り合いが著るしく構造等の詳細がわかるものは少ない。ＳＢ009とＳＢ010は昭和52年度、その他は昭和57・58年度の調査になるものである。以下、調査区の東側から西側に向かってそれぞれの竪穴住居跡の図を示し、概略の説明を付す（Fig.12～32, ＰＬ11～23）。

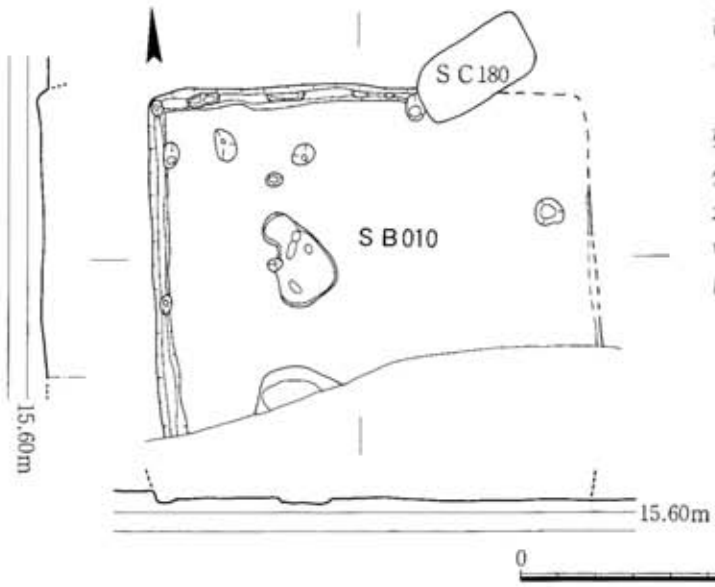


S B009

形態 長方形

規模 7.4m×5.5m

特徴 調査区の西南端に位置し、西北端をS D019に切られ、西南隅にはS J 181が廃絶後に掘り込まれている。また奈良時代には南半部にS B007が造られている。削平のため、壁は10cmほどしか残存しない。東壁下のみ浅い周溝がみられる。柱穴・炉は不明。床面中央から南側にかけて灰と炭化材が拡がっているが火災を示すものではない。



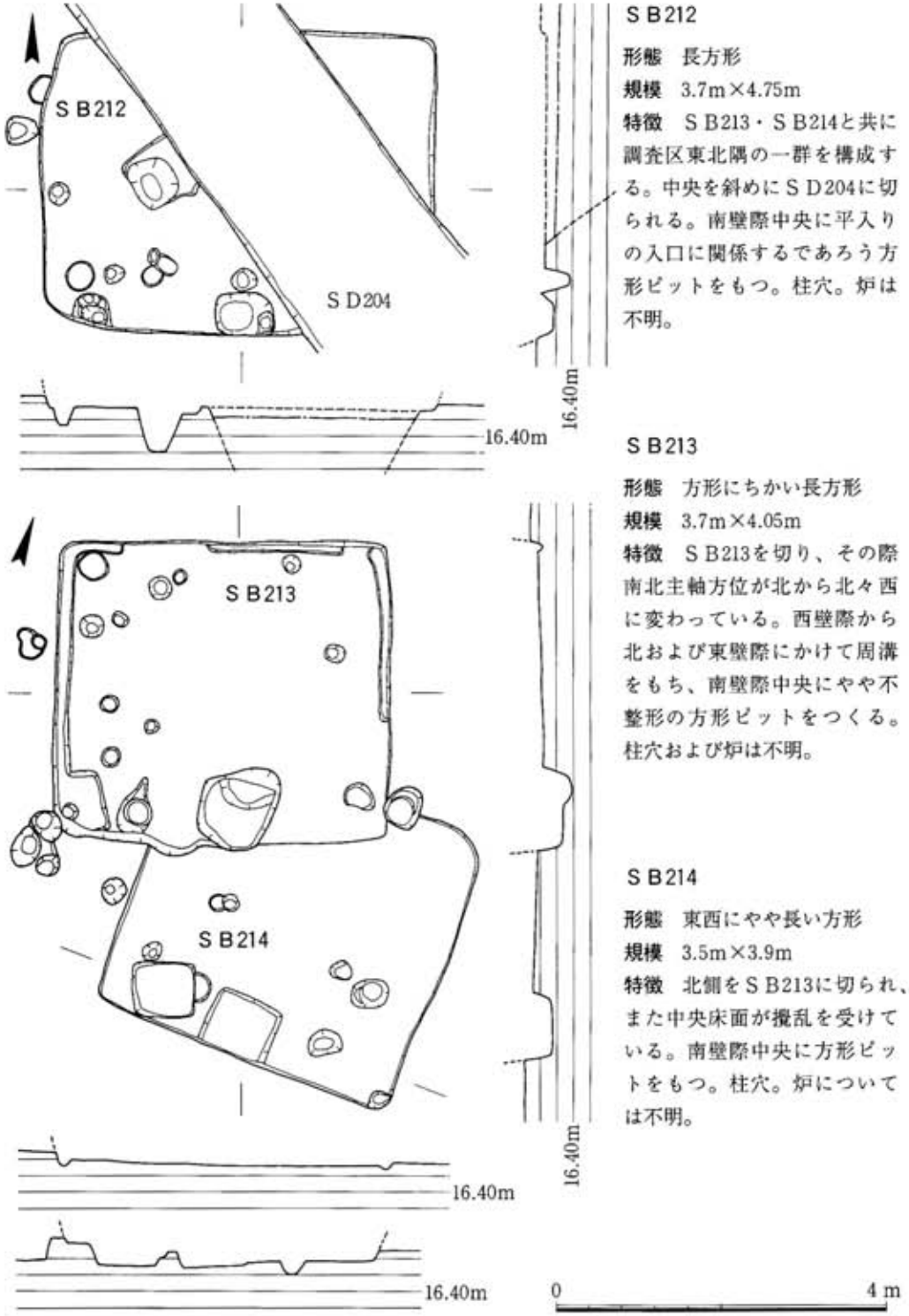
S B010

形態 長方形または方形

規模 東西4.75m

特徴 S B009と接し、北壁一部をS C 180に切られる。さらに奈良時代にS B007が上に造られる。削平のため壁が殆ど残存せず、また南側が調査区外となって全体は不明である。北壁際から西壁際にかけて浅い周溝が残存する。柱穴。炉は不明である。

Fig.12 S B009 ・ S B010 竪穴住居跡 (1/60)



S B212

形態　長方形

規模　3.7m×4.75m

特徴　S B213・S B214と共に調査区東北隅の一群を構成する。中央を斜めにS D204に切られる。南壁際中央に平入りの入口に関係するであろう方形ピットをもつ。柱穴。炉は不明。

S B213

形態　方形にちかい長方形

規模　3.7m×4.05m

特徴　S B213を切り、その際南北主軸方位が北から北々西に変わっている。西壁際から北および東壁際にかけて周溝をもち、南壁際中央にやや不整形の方形ピットをつくる。柱穴および炉は不明。

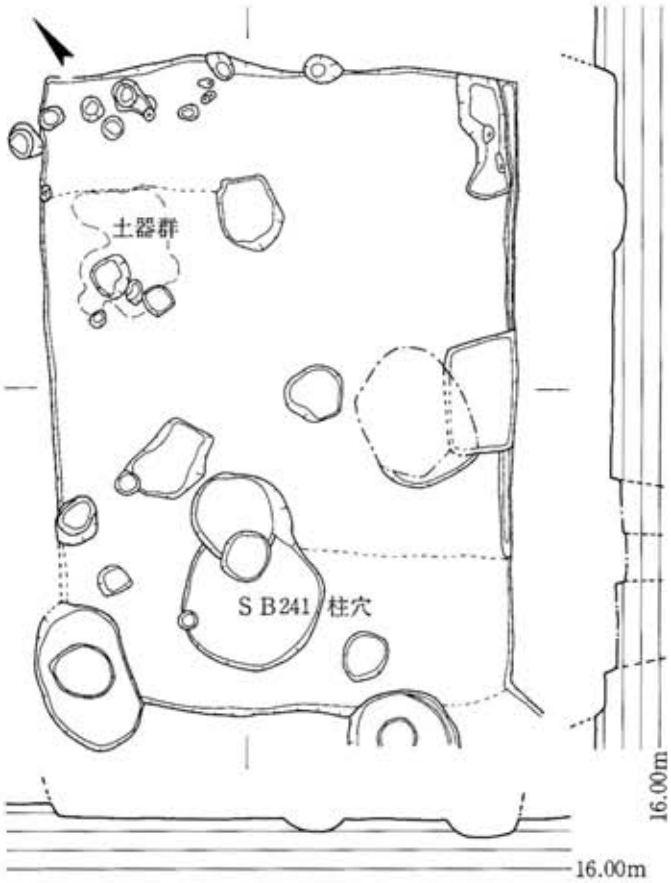
S B214

形態　東西にやや長い方形

規模　3.5m×3.9m

特徴　北側をS B213に切られ、また中央床面が攪乱を受けている。南壁際中央に方形ピットをもつ。柱穴。炉については不明。

Fig.13　S B212 ・S B213 ・S B214 竪穴住居跡（1/60）

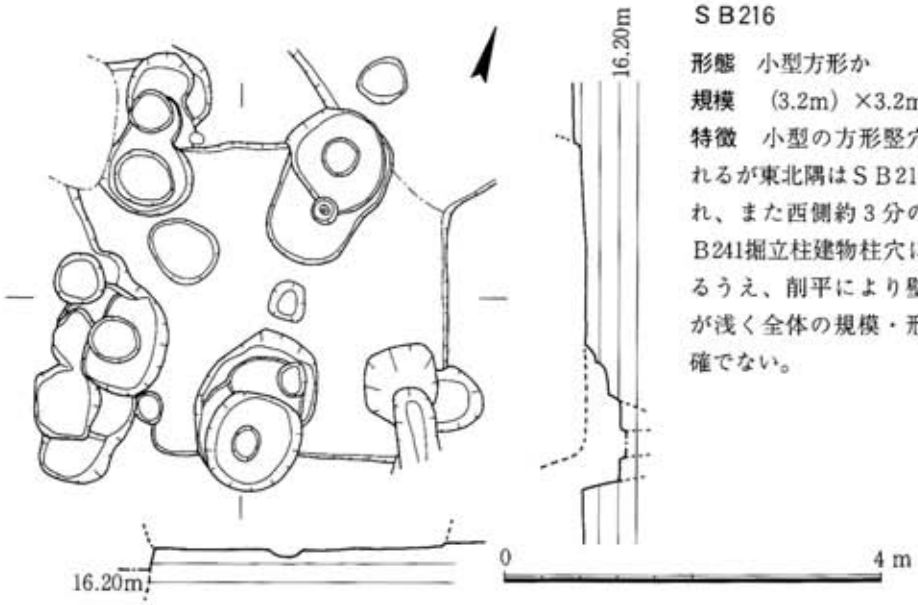


SB215

形態 長方形

規模 7.4m×5.0m

特徴 西南側はSB241掘立柱建物柱穴に切られる。長軸が北南に傾くのはこれと後述するSB222・SB284の3棟だけである。長軸両辺に幅1.2m～1.6mのベット状遺構の痕跡を認めたが、盛土によるらしく埋土との識別は困難であった。東北壁際中央に方形ピットをもつ。柱穴・炉は不明。北隅ちかくのベット状遺構下床面で土器が比較的まとまって出土した。



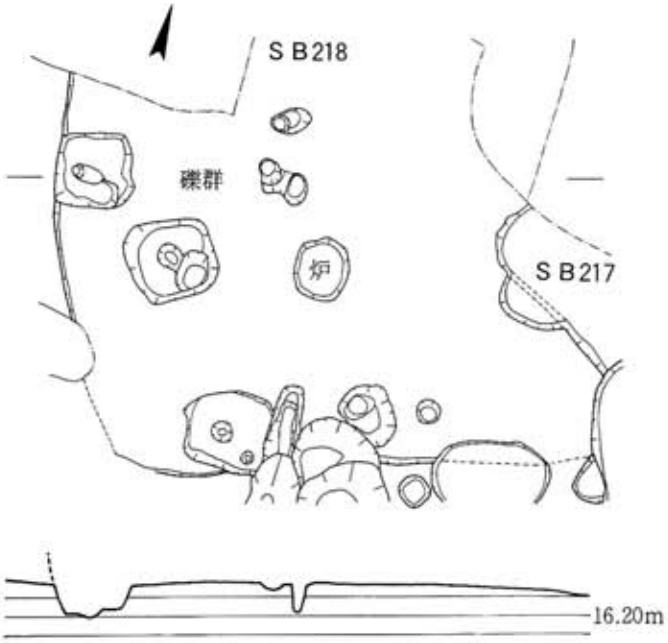
SB216

形態 小型方形か

規模 (3.2m) ×3.2m

特徴 小型の方形竪穴と思われるが東北隅はSB215に切られ、また西側約3分の2はSB241掘立柱建物柱穴に切られるうえ、削平により壁の残りが浅く全体の規模・形状は明確でない。

Fig.14 SB125・SB216 竪穴住居跡（1/80）



ＳＢ217

形態　方形か

規模　不明

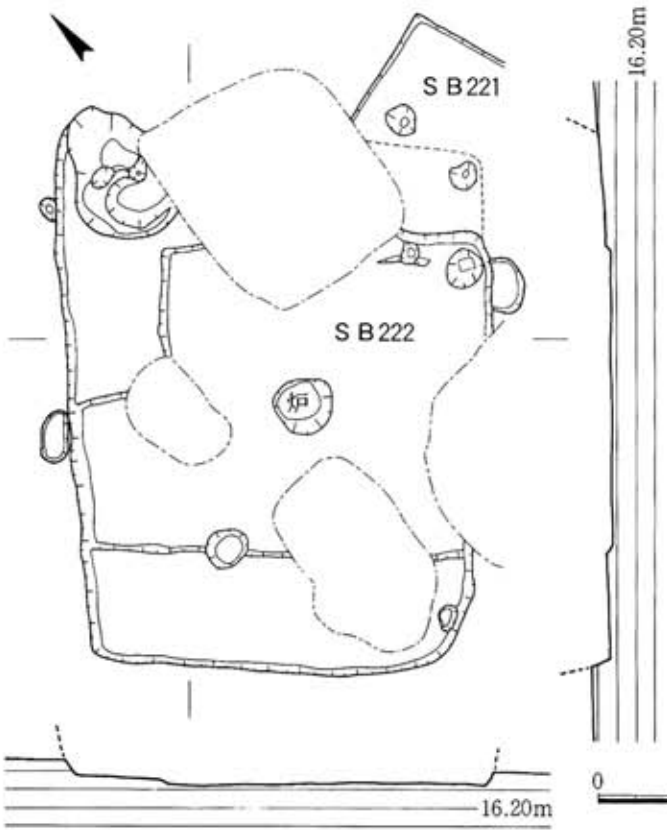
特徴　撹乱、切り合いのため西北隅らしい一部を残して全体不明。

ＳＢ218

形態　方形か

規模　不明

特徴　撹乱および削平などのため北側から東側にかけて状況不明。西壁際に方形ピットをもち、中央やや南に浅い炉がある。床は粘土張り。



ＳＢ221

形態　方形か

規模　不明

特徴　南側をＳＢ220・ＳＢ222と切り合い、また削平が著しいため全体不明。床は粘土張り。

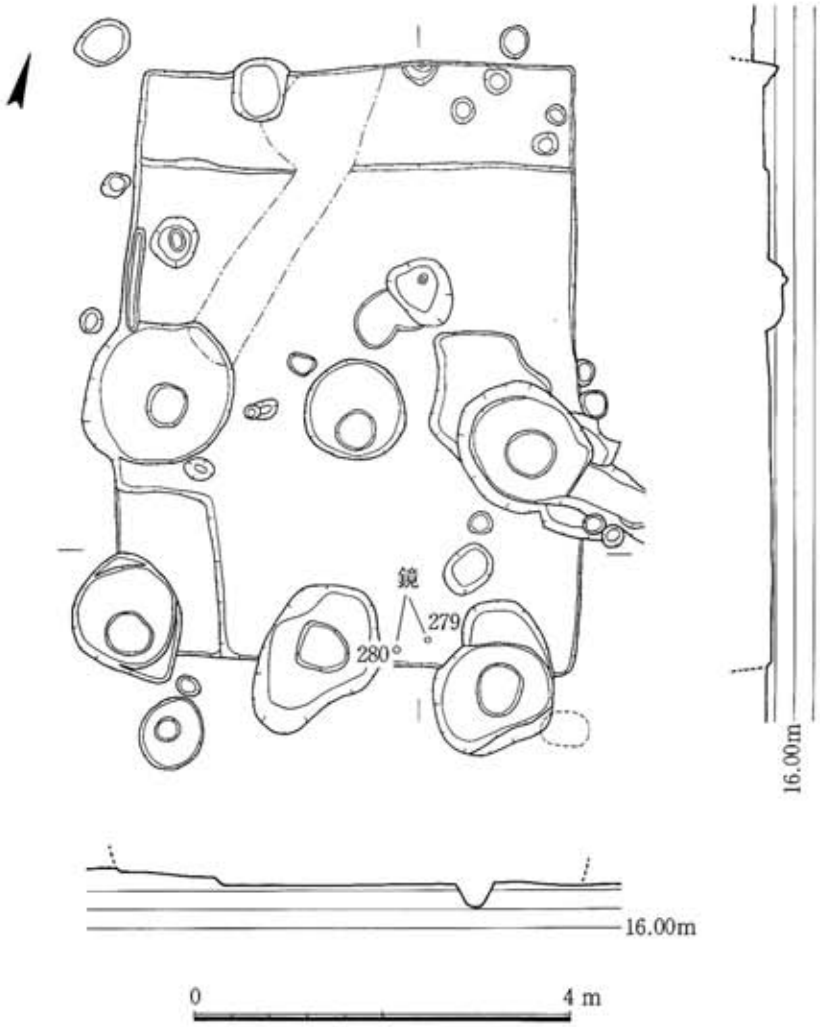
ＳＢ222

形態　長方形

規模　(5.7m)×4.8m

特徴　東北から西北辺にかけＬ字形、それと西南辺に低いベット状遺構を削り出している。柱穴は不明、炉を中央にもつ。撹乱が著しい。長軸が北東に傾く。

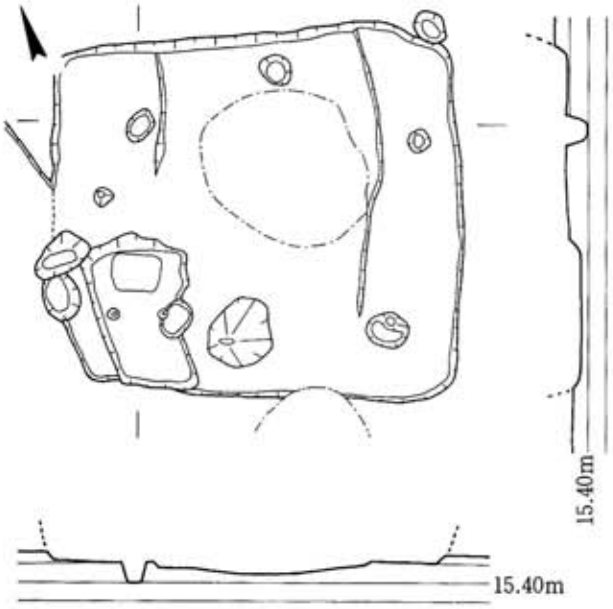
Fig. 15　ＳＢ217・ＳＢ218・ＳＢ221・ＳＢ222竪穴住居跡（1/80）



ＳＢ219　**形態**　長方形　　**規模**　6.3m×4.8m

特徴　長軸側の北辺と西南隅に幅1.0mのベット状遺構を低く削り出してつくる。北側は溝状の攪乱をうけ、南側はＳＢ240掘立柱建物柱穴によって荒らされている。柱穴・炉は不明、西壁際に浅い周溝がみられる。削平が著しいにもかかわらず南壁際の床面上から完形の小型仿製内行花文鏡２面が、279は鏡背を上に、280は鏡面を上にして出土した。２面とも接地面に床に敷かれてあったであろうワラ状の植物痕跡が認められる。

Fig.16　ＳＢ219 竪穴住居跡（1/80）

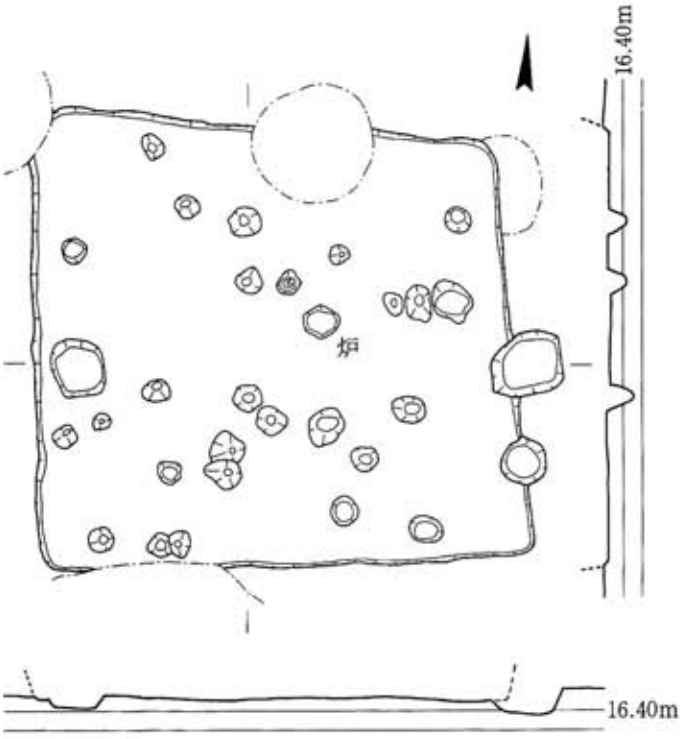


ＳＢ220

形態　東西にやや長い方形

規模　4.4m×3.85m

特徴　東西両辺に幅約１ｍの低く削り出したベット状遺構をもつ。また西南隅に性格不明の長方形掘り込みがある。柱穴。炉については不明。床面中央など攪乱をうけている。



ＳＢ223

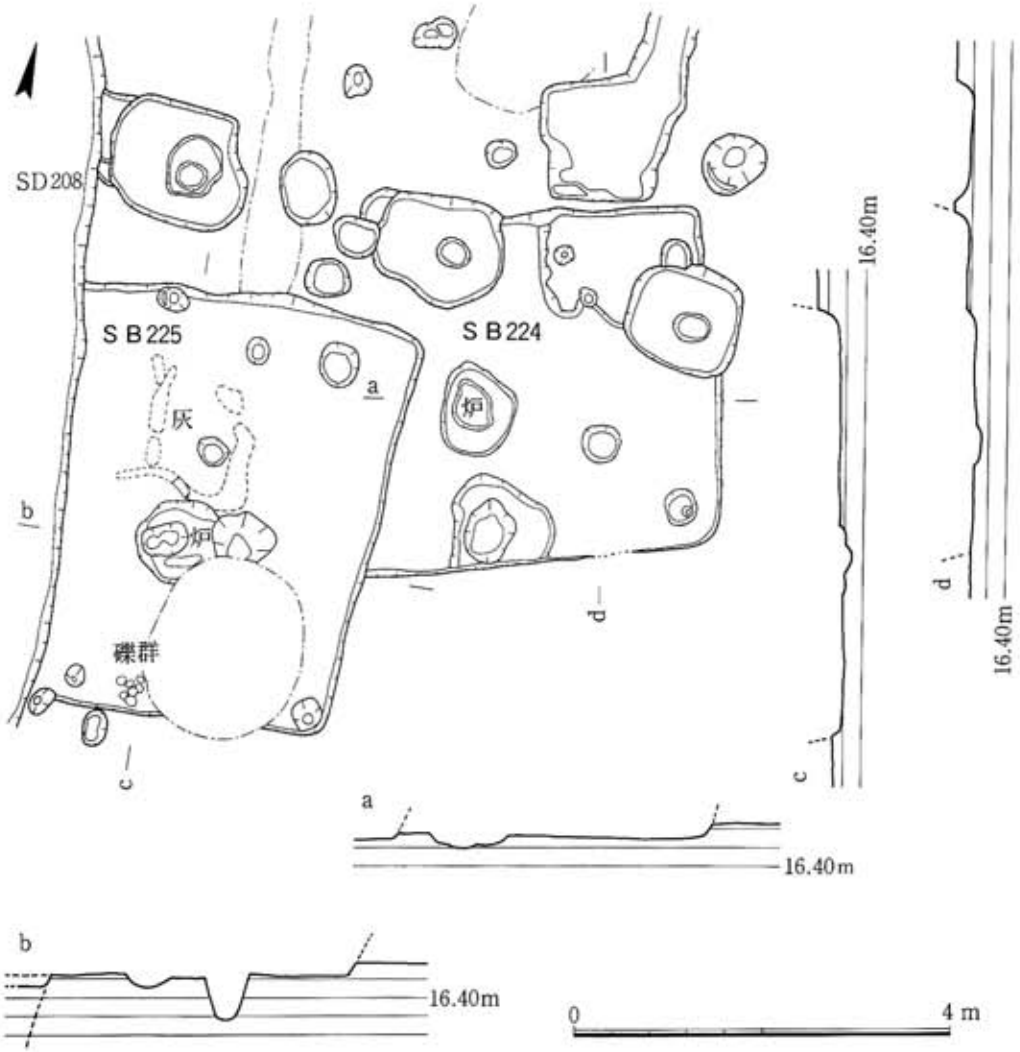
形態　やや台形気味の不整方形

規模　5.15m×4.7m

特徴　削平のため壁下端が痕跡程度しか残っていないこともあろうが、東壁がやや短く不整形である。柱穴は不明、中央に径の小さな浅い掘り込みがあり焼けていた。

0　4 m

Fig.17　ＳＢ220 ・ＳＢ223竪穴住居跡（1/60）



SB224

形態　長方形

規模　南北3.7m、東西4.0m以上

特徴　SB225と切り合うが先後関係不明。北側はSB247掘立柱建物跡柱穴に切られる。東北隅に幅約1mで約10cm高の低いベット状遺構を削り出し、中央に炉、南壁際に不整方形のピットをもつ。床は粘土張り。柱穴は不明である。

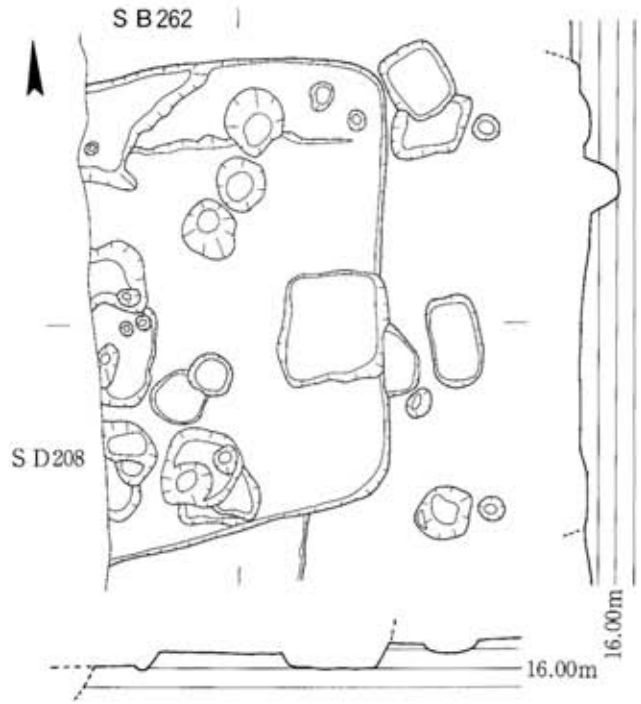
SB225

形態　方形か

規模　南北4.55m、東西3.4m以上

特徴　西側はSD208に切られて不明。東南隅は攪乱をうけている。床は粘土張り。中央やや南に炉がありその北側床面に灰・炭化物が散っていた。南壁際床面には直径10前後の粒の揃った球状花崗岩礫7個がかたまって置かれていた。

Fig.18　SB224・SB225竪穴住居跡（1/80）

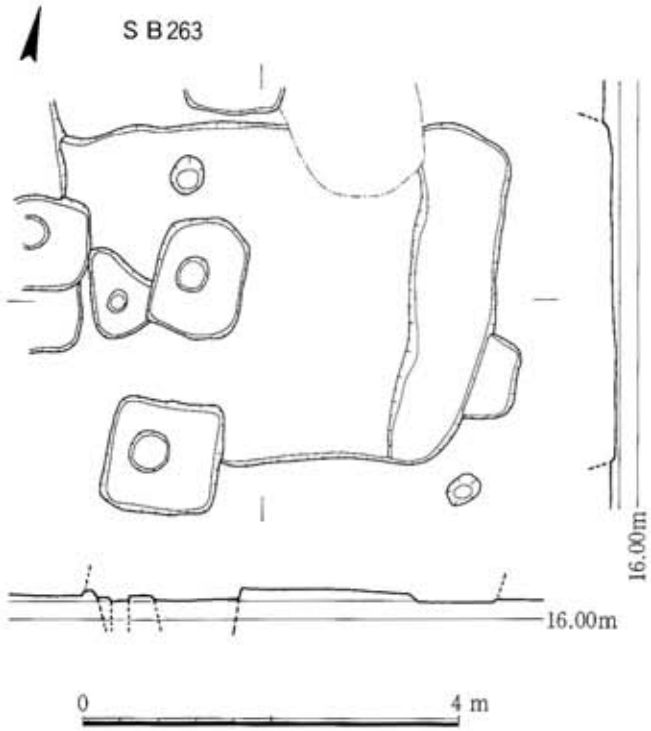


ＳＢ262

形態　方形か

規模　南北5.6m

特徴　西側をＳＤ208に切られる。北辺に幅約0.8mの低いベット状遺構を削り出し、東辺中央に方形ピットをもつ。床は薄く粘土を張っている。削平と上面攪乱が著しい。柱・炉不明。



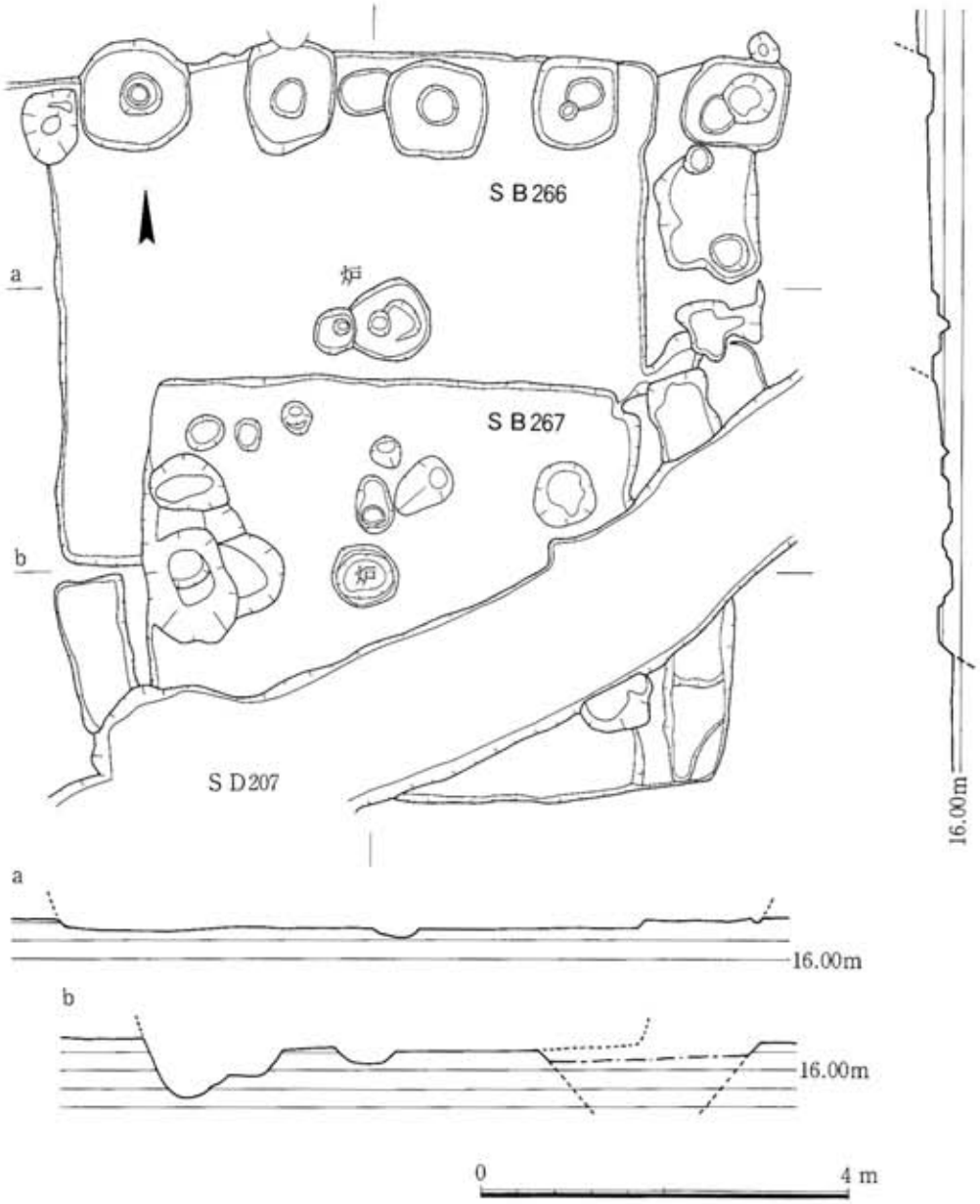
ＳＢ263

形態　長方形

規模　南北3.15m、東西4.5m以上

特徴　西辺はＳＢ264ほかと切り合う。東辺に幅約0.9mの浅い掘り込みがある。床は薄く粘土を張っている。削平などのため全体不明。

Fig.19　ＳＢ262・ＳＢ263 竪穴住居跡（1/80）



S B 266 **形態** 長方形 **規模** 8.8m×5.4m
特徴 南辺はS B 267と切り合い北辺はS B 261柱穴に切られる。粘土張床で中央に炉、東辺に幅1.2mの低いピット状遺構が残り、西辺にもあったと思われる。

S B 267 **形態** 長方形 **規模** 7.3m×4.1m
特徴 東南部を斜めにS D 207に切られる。粘土張床で中央に炉、東辺にピット状遺構の残存がみられるが西辺について不明。

Fig.20 S D 266 ・S B 267 竪穴住居跡（1/60）

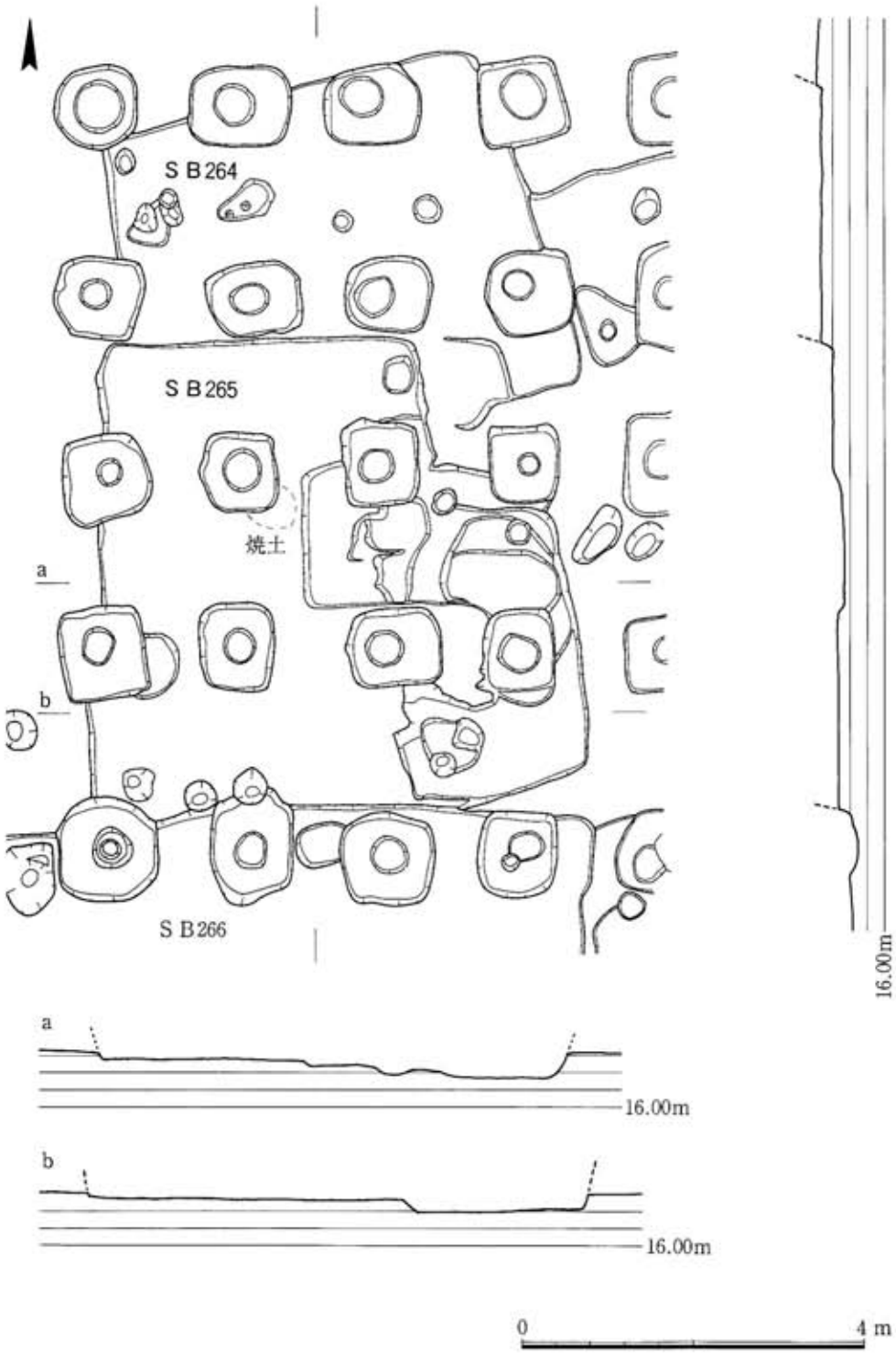


Fig.21　S B 264 ・S B 265 竪穴住居跡（1/80）

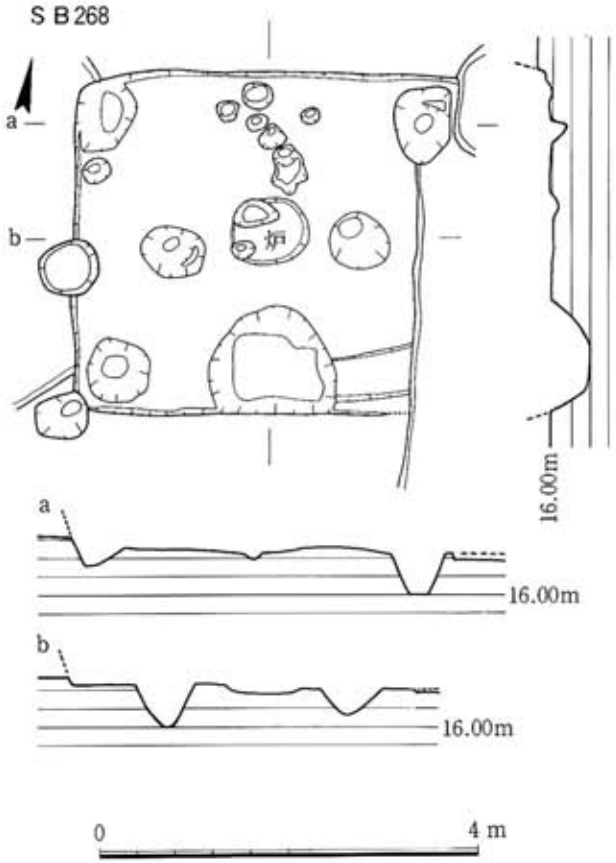


Fig.22 S B 268 竪穴住居跡（1/80）

S B 268

形態 小型の方形

規模 南北3.7m、東西3.7m以上

特徴 東側をS B 266と、また西側をS B 269と切り合う。粘土張床で中央に炉、南辺中央に方形ピットをもつ。柱穴は4隅のうち3ケ所に残り、それと炉の東西両側に1対がある。

S B 264

形態 方形 **規模** 4.75m×4.2m

特徴 東辺をS B 263と、南辺をS B 265と切り合い、さらに上面をS B 261柱穴に荒らされている。薄い粘土張床で、柱穴・炉については不明。このS B 264付近はとくに竪穴住居跡の切り合いが著しい。

S B 265

形態 方形 **規模** 5.45m×5.7m

特徴 北辺をS B 264と、南辺をS B 266と切り合い、さらに上面をS B 261柱穴に荒らされている。張床で柱穴は不明であるが、中央やや西北寄りに焼土がみられる。

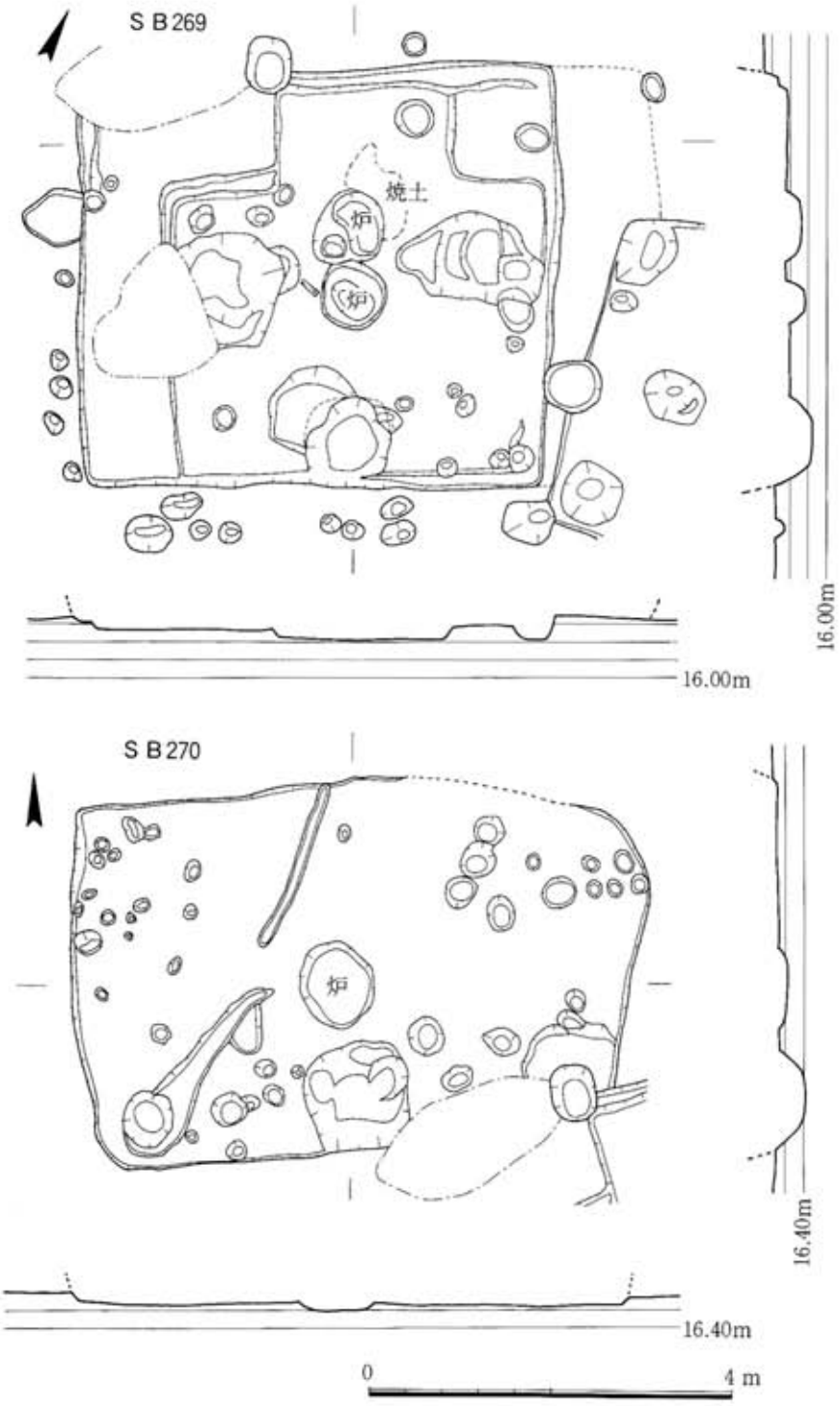


Fig.23　S B269 ・S B270 竪穴住居跡(1/80)

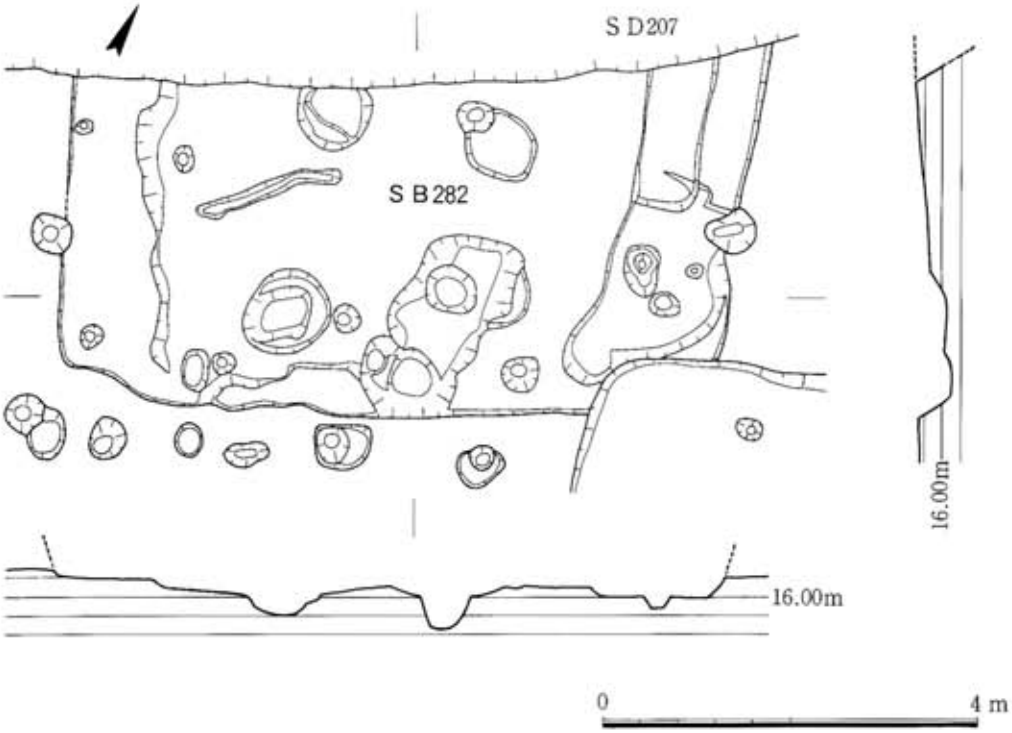


Fig.24 S B282竪穴住居跡（1/60）

S B282 **形態** 長方形 **規模** 東西7.15m、南北3.6m以上

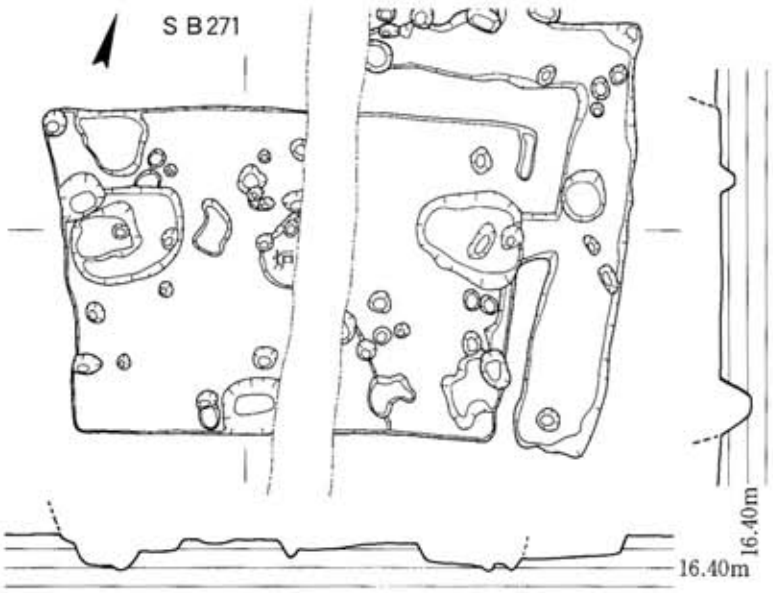
特徴 北側はS D207に切られ、東南隅はS B281と切り合う。西辺に幅約0.8mの低いベット状遺構を削り出し、東辺には「ベット」と関係するかと思われる浅く長い掘り込みをもつ。南壁際中央に方形ピットをつくり粘土張床。削平などのため全体に不明。

S B269 **形態** 長方形 **規模** (6.4) m×4.6m

特徴 東西両辺にL字型の低いベット状遺構を削り出すが東辺のそれは削平されて痕跡が残る。中央の炉の後に粘土を床に張ってその北側に別の炉を掘り直す。南壁際中央に方形ピット、柱穴は炉の東西両側に2本。

S B270 **形態** 長方形 **規模** 6.2m×4.1m

特徴 やや不整形で壁は浅く残存し、東南隅はS B269と切り合う。粘土張床で中央に炉、南壁際中央に方形ピットをもつ。柱穴は不明。

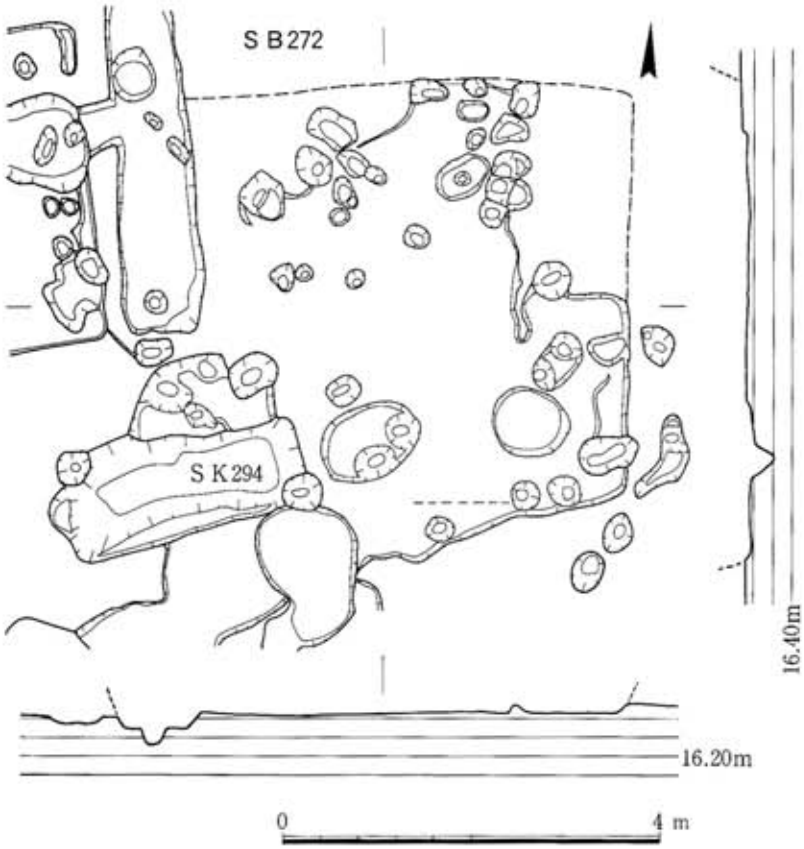


S B 271

形態　長方形

規模　4.8m×3.5m

特徴　北辺が広くやや不整形。中央を溝で攪乱されている。中央に炉、南壁際中央に方形ピットをもつと思われ、また柱穴は長軸に沿って２個か。東辺から北辺にかけ外側に鍵形の幅約0.8mの浅い溝があり、関係する施設かとみられる。



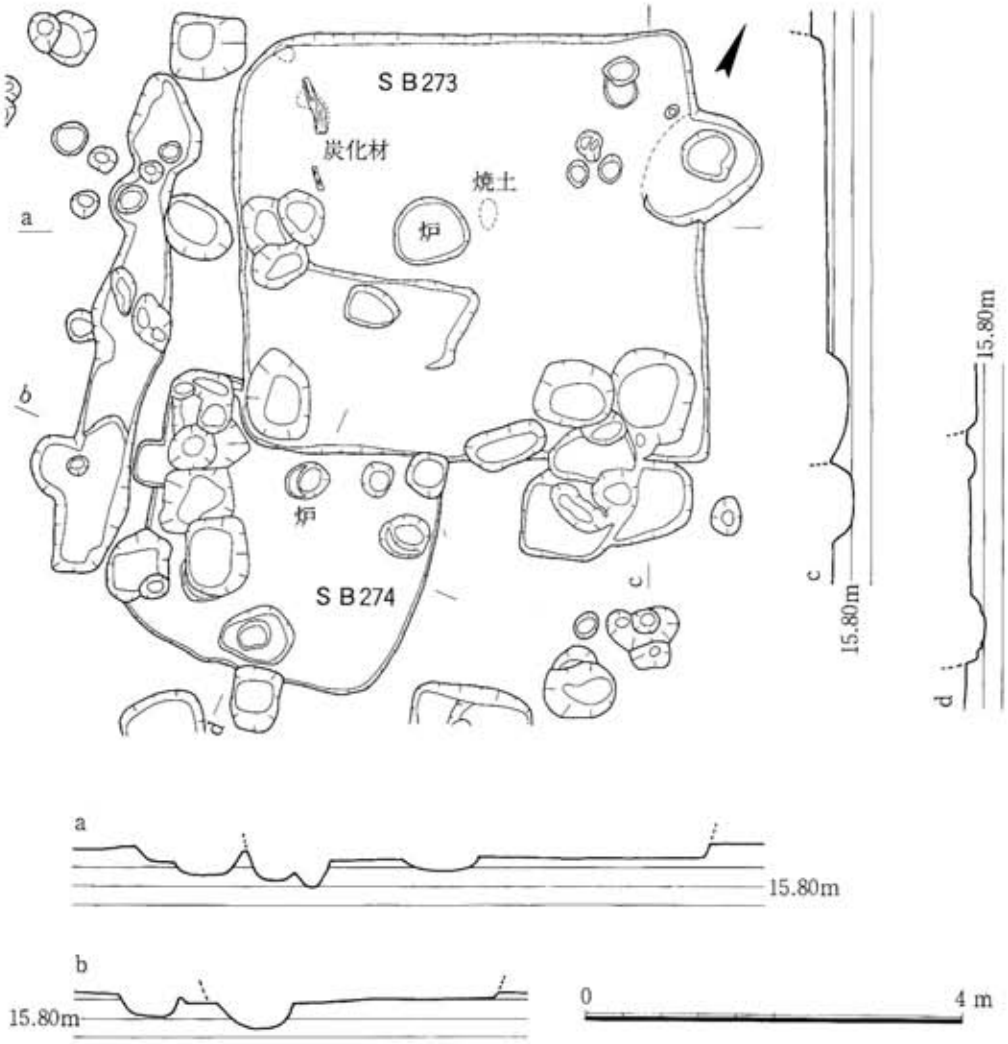
S B 272

形態　長方形か

規模　南北（4.5m）、東西5.6m以上

特徴　西側はＳＢ271と、南西隅はＳＫ294と切り合う。削平、攪乱が著しいため全体に不明。東北隅に幅1.2mのベット状遺構の痕跡が認められる。柱穴。炉については不明。

Fig.25　ＳＢ271 ・ＳＢ274 竪穴住居跡（1/80）



S B273

形態 方形

規模 4.95m×4.6m

特徴 北側はS D207と、西側はS B275と接するように並行する。粘土張床で中央やや西寄りに炉があり、その北側に炭化材・焼土が散っていた。

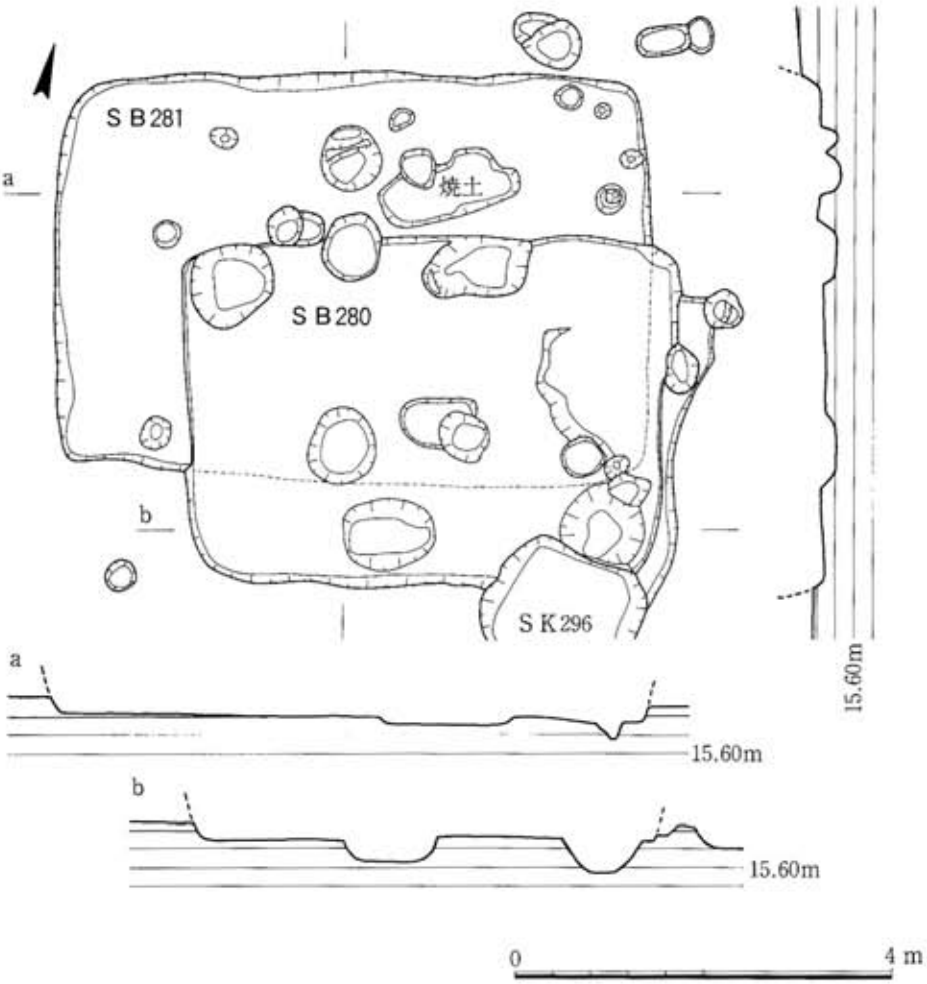
S B274

形態 小型の方形

規模 3.1m×3.0m

特徴 小型ながら貼床で北寄りに炉をもち、居住に使用されている。弥生のS B357掘立柱建物柱穴と切り合うが先後関係は不明。

Fig.26 S B273 ・S B274 竪穴住居跡（1/80）



SB280

形態　長方形

規模　6.35m×4.2m

特徴　東南側はSB281に切られ、また東南隅をSK296に切られる。東壁は外側にもう一段掘り込みがみられ、境界がやや不確かである。中央に炉をもつと思われ、また東南隅と西北隅ほかに性格不明の円形掘り込みがある。柱穴は不明。

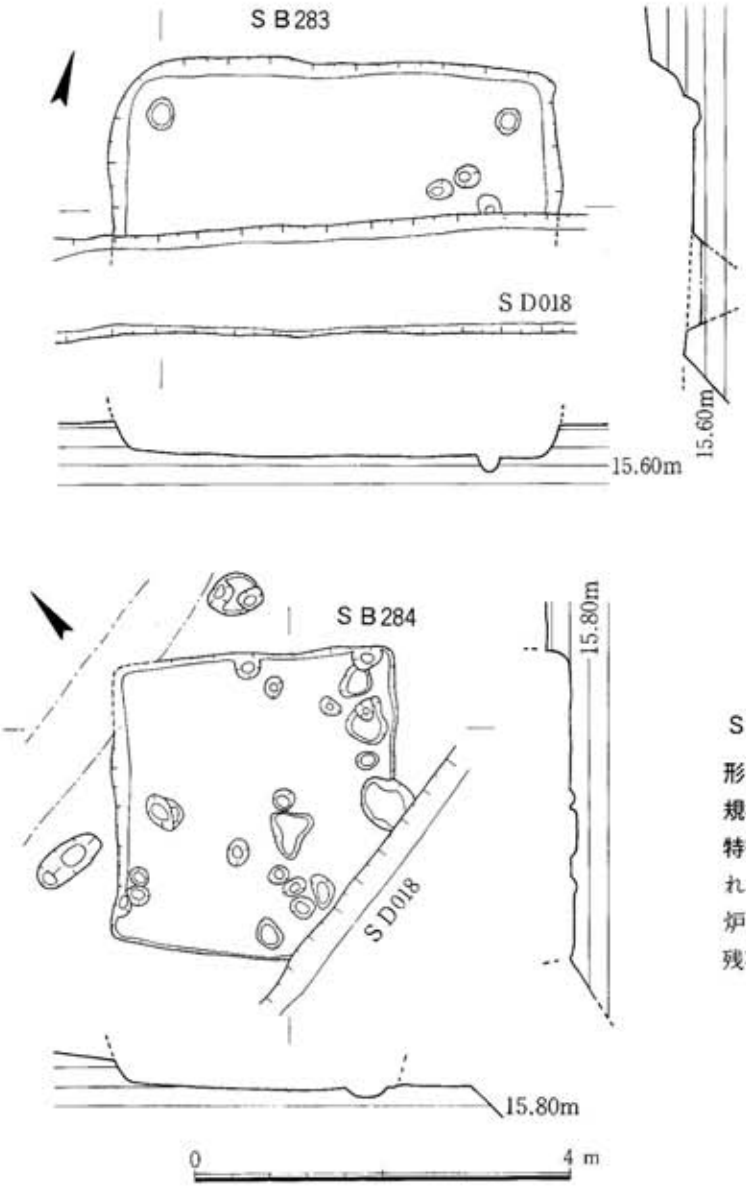
SB281

形態　長方形

規模　5.1m×3.75m

特徴　西北側はSB280を埋めて床をつくる。SB280の北壁にかかる小穴は炉とみられるが、実際はその東北寄りのピットに焼土がみられた。柱穴は不明。

Fig.27　SB280・SB281 竪穴住居跡（1/80）



S B 283

形態 方形か

規模 東西4.8m

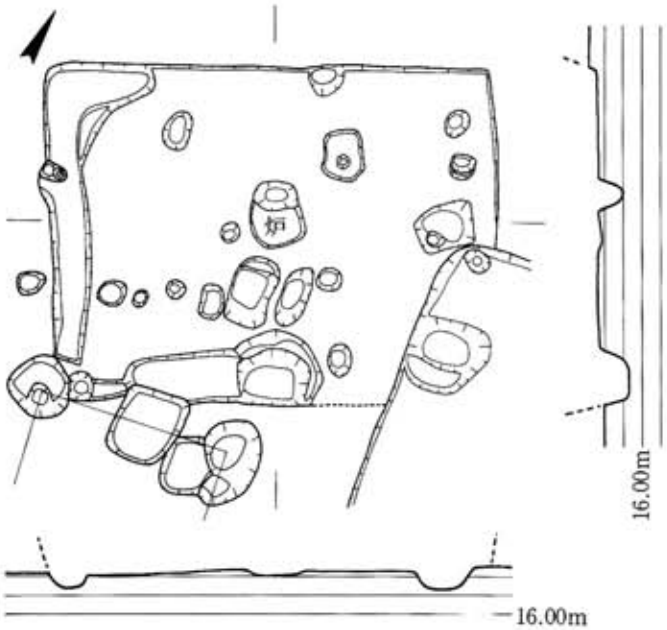
特徴 南側はS D018に切られる。粘土張床で、柱穴。炉は不明。壁は比較的よく残存する。

S B 284 **形態** 小型の方形

規模 3.2m×3.0m

特徴 南隅をS D018に切られ、北隅は溝で攪乱されている。小型で東南辺がやや広く、主軸は西北に傾く。柱穴・炉は不明。

Fig.28 S B283 ・S B284 竪穴住居跡（1/80）

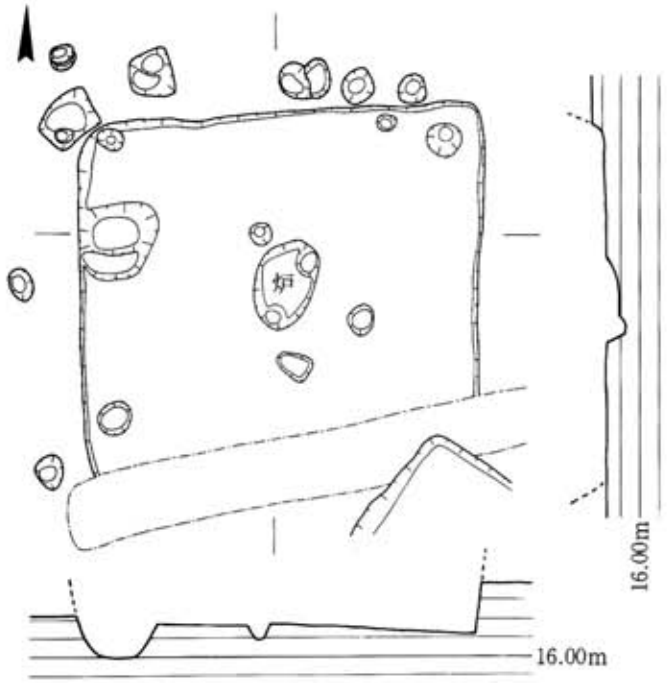


ＳＢ285

形態　長方形

規模　4.75m×3.65m

特徴　住居群のほぼ西端に位置する。東端はＳＢ286と、南隅はＳＢ287建物柱穴と切り合う。中央に炉、東南壁際中央に方形ピットをもつ。西南から東南壁際に周溝がある。



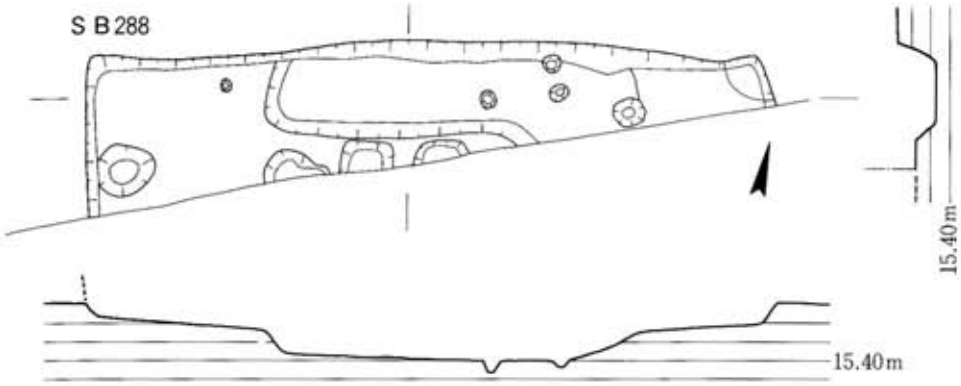
ＳＢ286

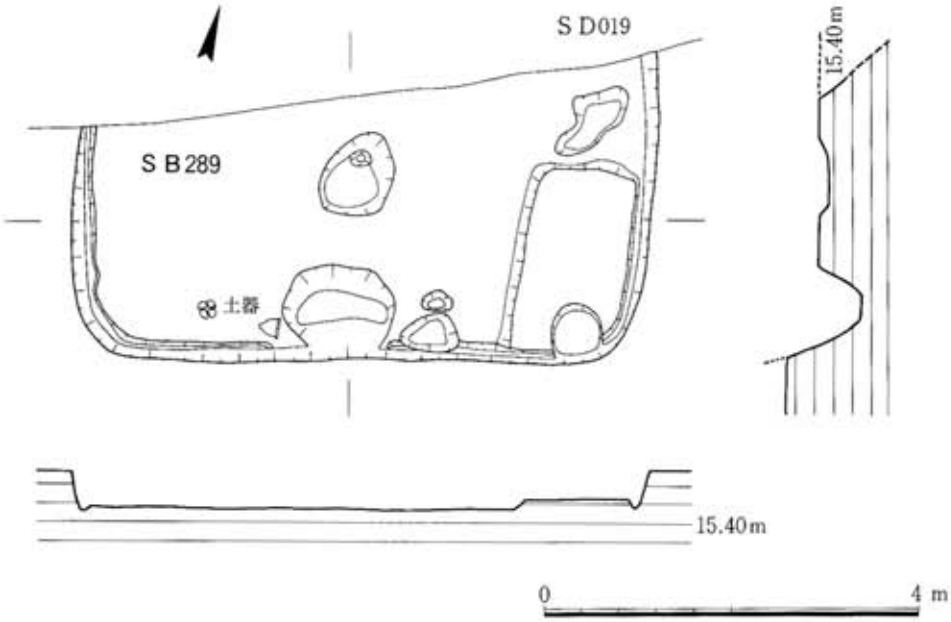
形態　方形

規模　東西4.25m、南北3.8m以上

特徴　南側は溝で攪乱されている。東辺がやや長くなると思われる。張床で中央に炉をもつ。

Fig. 29　SB285・SB286 竪穴住居跡　(1/60)





S B 288

形態 長方形か

規模 東西7.3m

特徴 南側の大部分は調査区外となるため不明。北辺に幅約0.8mのやや深い溝状の遺構が掘り込まれている。

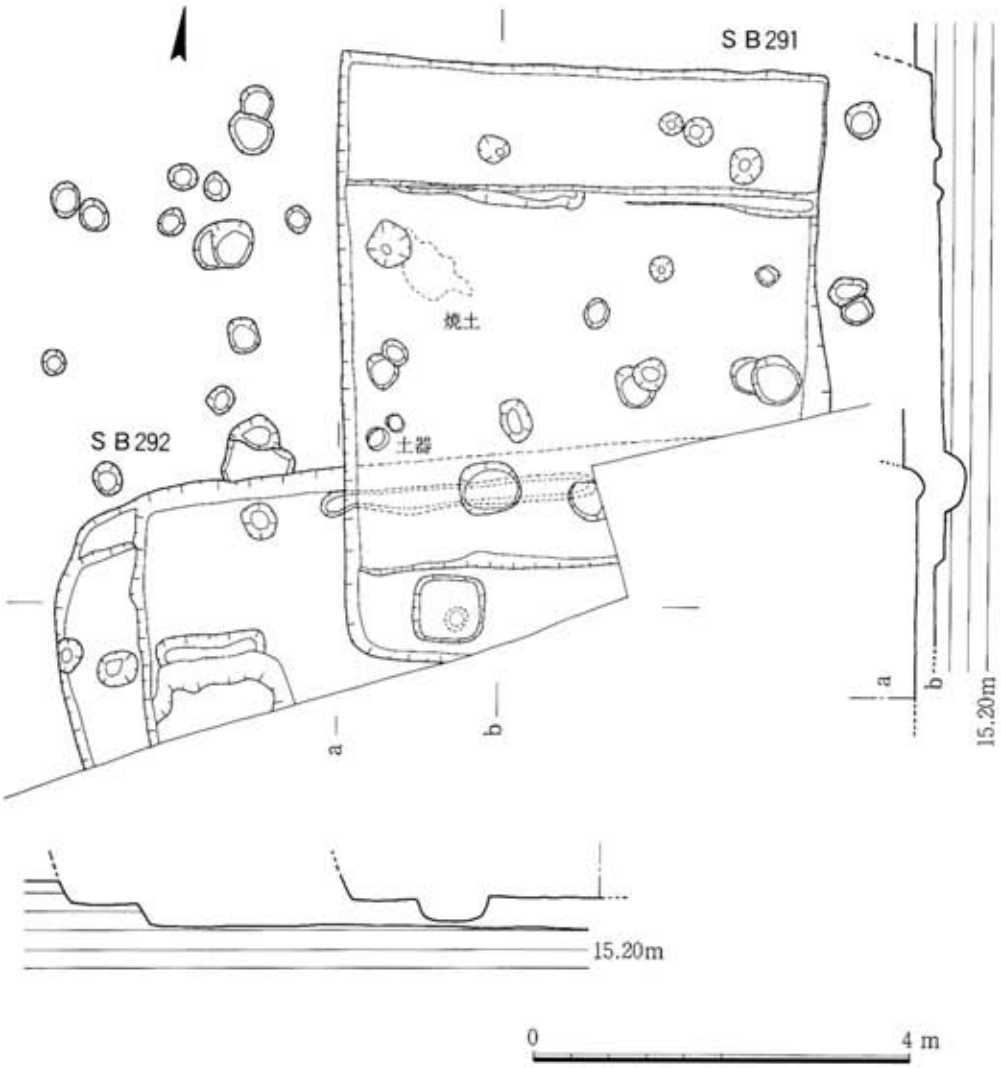
S B 289

形態 隅丸の方形か

規模 東西6.15m、南北3.2m以上

特徴 北側はＳＤ019に切られる。壁際を周溝がめぐり、東南隅にペット状遺構を削り出す。南壁際中央に方形ピットがあり、西脇床面に土器が残存していた。

Fig.30 ＳＢ288 ・ＳＢ289 竪穴住居跡（1/80）



S B 291

形態　長方形

規模　6.35m×5.1m

特徴　南側はＳＢ292を埋めて床面をつくる。南北両辺に1.0～1.2m幅の低いベット状遺構を削り出す。柱穴・炉は不明であるが、西壁寄りに焼土がみられ床面上に土器が残っていた。

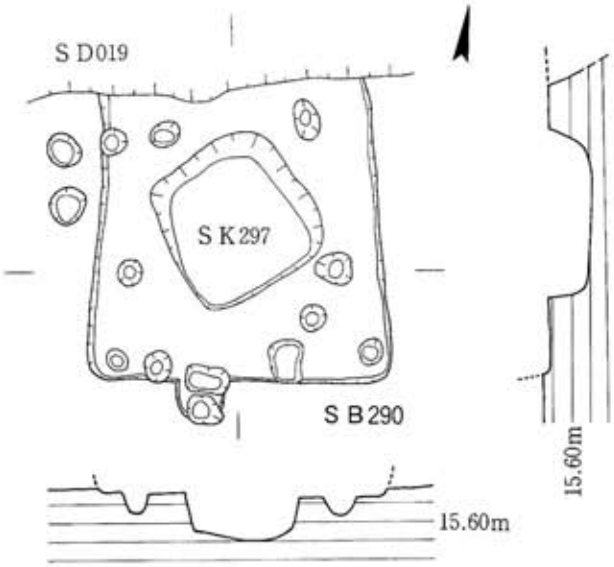
S B 292

形態　長方形か

規模　東西6.1m以上

特徴　北側はＳＢ292に切られ、南側は大部分が調査区外となるため全体は不明である。北壁下に周溝があり、西側に幅約0.8mのベット状遺構を削り出している。

Fig.31　ＳＢ291 ・ＳＢ292 竪穴住居跡（1/80）

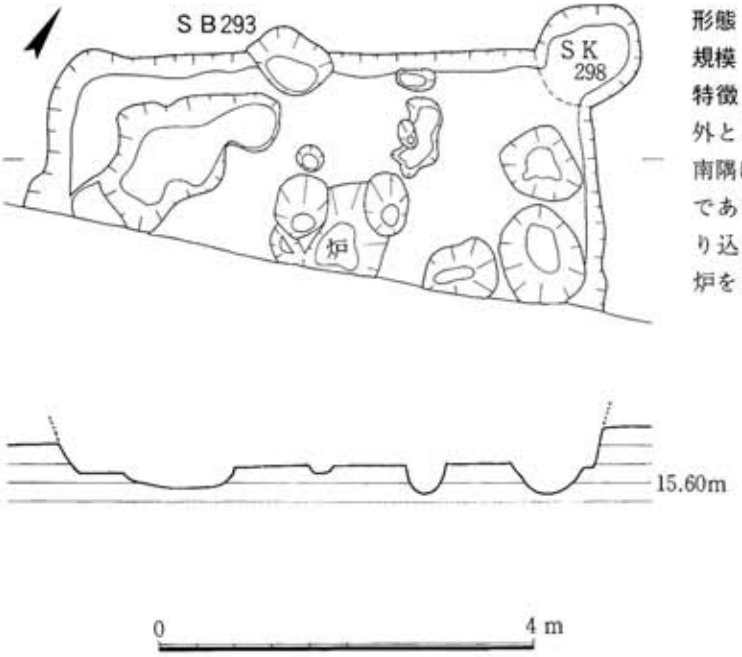


S B 290

形態 小形の方形

規模 東西3.1m、南北3.0m以上

特徴 北壁はＳＤ019に切られる。床面中央には別遺構とみられるＳＫ297があり、これに切られると思われる。ＳＫ297は1.5m×1.6mの方形で貯蔵穴状。



S B 293

形態 方形か

規模 東西5.8m

特徴 南側の大部分が調査区外となるため全体は不明。東南隅はＳＫ298に切られるようである。床面は小穴が多く掘り込まれて荒らされ、中央に炉をもつ。

Fig.32 ＳＢ290・ＳＢ293竪穴住居跡（1/80）

(3) 掘立柱建物跡

14棟を数える（Fig.33～37, ＰＬ24～27)。他にも柱穴らしい方形土壙が調査区の中央付近その他で認められるが攪乱のため構造が不明であり、しかも国府期の建物との区別が困難である。

14棟のうち最も注意を要するのは竪穴住居跡東群と西群の中間にあってＳＤ019南辺に沿い、しかも一定の方位で整然と並ぶＳＢ249・ＳＢ250・ＳＢ251の３棟の存在である。なかでもＳＢ250は３間×２間総柱で弥生時代の建物としては異例ともいえる規模・構造をもち、佐賀平野で他に類例は神埼町川寄吉原遺跡のＳＢ012が挙げられるのみである。さらにこれと2.4ｍの間隔をおいて建物南面柱列を揃えて並ぶＳＢ251もやや長棟の２間×２間総柱という珍しい構造である。２棟は総柱の構造をもつ点で後世の倉庫建物と比較することができ、相互の配置関係および環濠・竪穴住居群との位置関係からみて集落の中でも、例えば主要な高床倉庫といった重要な機能を果す建物であったと推定する。ただし両棟を比べた場合は規模・構造のほか柱

ＳＢ249

構造　２間×２間　東西棟　　**規模**　3.8ｍ×3.0ｍ

特徴　東北隅の柱穴は国府期のＳＫ232に切られる。また弥生後期終末のＳＪ233小児甕棺墓と重なっており、建物廃絶後まもなく埋葬場所に選ばれたらしい。柱穴掘形は一辺0.7ｍ前後の方形を主とする。埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。柱根径は約25㎝。建物主軸方位はＮ20°Ｅ。

ＳＢ250

構造　３間×２間　総柱東西棟　　**規模**　8.25ｍ×3.3ｍ

特徴　南北柱間に比べ東西柱間が２倍ちかく長い。南面柱列をＳＢ251と揃えて並ぶ。柱穴掘形は南側と北側の柱列では１辺0.9ｍ前後の不整方形と1.2ｍ×0.8ｍ前後の不整長方形とが不揃いに並び、東西中柱はそれより一回り小さい一辺0.6ｍ前後の隅丸方形である。１個のみ下まで掘り下げた東南隅柱の長方形状掘形は二段掘りである。柱根径約25㎝。埋土は黒色土がつまる。建物南北軸方位Ｎ20°Ｅ

ＳＢ251

構造　２間×２間　総柱東西棟　　**規模**　6.25ｍ×3.3ｍ

特徴　西南隅と東南隅は攪乱により柱穴を切られる。柱穴掘形は一辺0.8ｍ前後の方形で、ＳＢ250の中柱程度の大きさである。柱穴埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。柱根径約25㎝。建物南北軸方位Ｎ20°Ｅ。

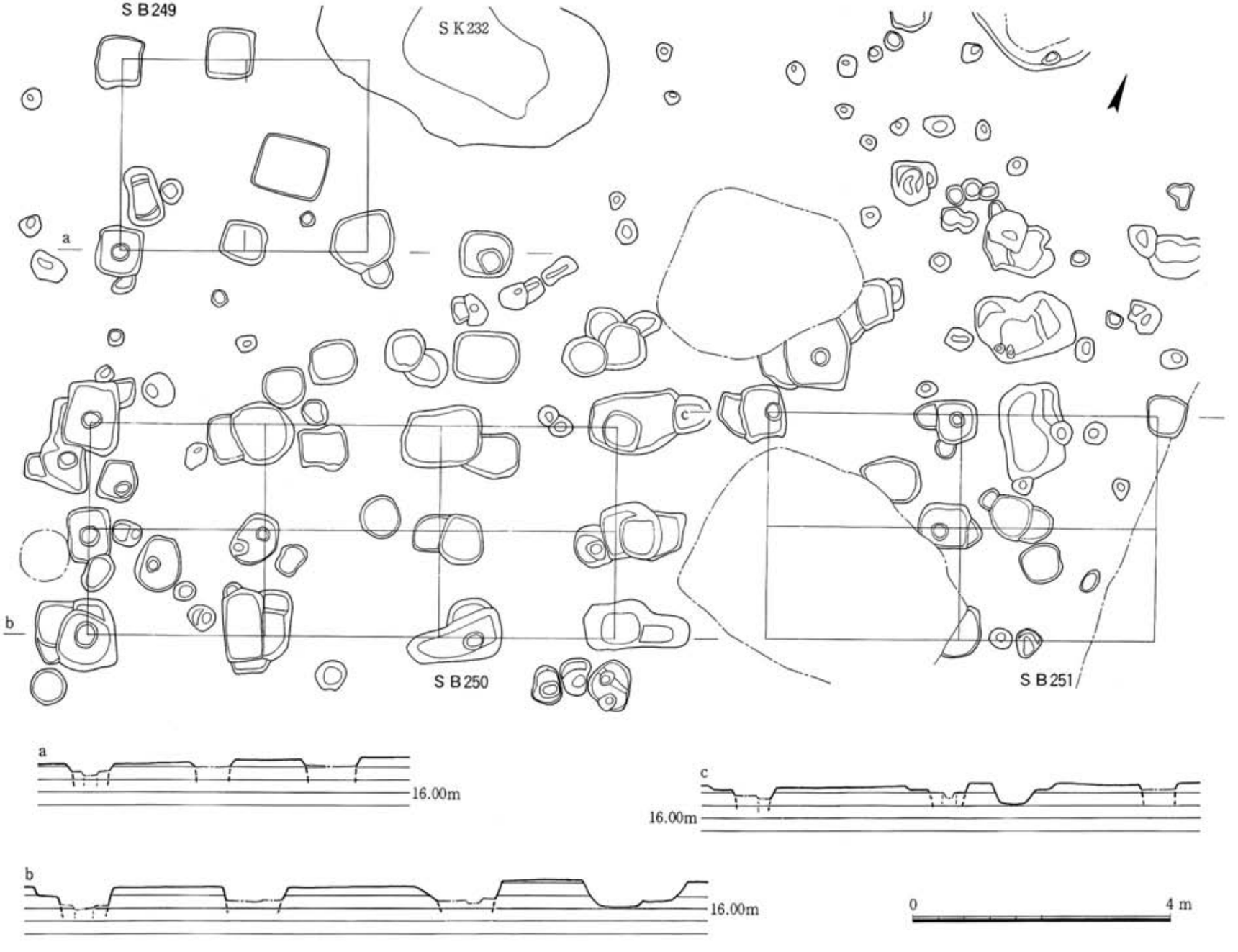


Fig.33　S B249・S B250・S B251 掘立柱建物跡（1/60）

穴掘形に違いがあり、ＳＢ250の付属的建物としてＳＢ251があるように考えられる。ＳＢ250の北側には2.7m隔ててＳＢ249が、やはり方位を一致させて南北に並ぶ、２間×１間の構造は弥生時代の掘立柱建物にもっとも一般的なものである。やはりＳＢ250と同時期の付属的な建物であろう。

一方、この３棟の西側には国府期のＳＢ260掘立柱建物と重なって、柱穴がはなはだしく切り合うＳＢ252ほか５棟の掘立柱建物と構２列がある。２間×１間あるいは１間×１間の比較的小規模な建物群とみられるが、実はこの地区については建物の構造・規模あるいは切り合い関係にあまり自信がもてない。ただでさえ密集しているうえにＳＢ253やＳＫ235など国府期の掘方で柱穴が多く破壊されているからで、実数はまだ増えるであろう。５棟も実際は国府期のものと区別するのが困難な状況ではあるが、小規模あるいは真北に対し著しく西傾することから弥生時代に含めておく。ただし、切り合いによる時期差は別として20°前後西傾するＳＢ252～ＳＢ254と正方位にちかいＳＢ255・ＳＢ256との２つのグループがあるらしく、大勢として後者から前者への時期関係が推定される。正方位にちかい２棟はさらにその西側のＳＢ259ほかと本来一群をなし、西傾する３棟は東側のＳＢ250等と一群をなすと考えれば、この地区はちょうど両群の分布範囲が時期を違えながらも交鎖する部分にあたったものであろう。なお、ＳＸ257とＳＸ258もそれぞれ西傾群と正方位群とに属するかと考える。

さらにその東南にはＳＤ259とＳＤ019に切られてＳＢ259・ＳＢ276の２棟、ＳＤ019第１突出部に一部切られてＳＢ277・ＳＢ278の2棟がある。この４棟も構造の把握に問題はあるが、２間×１間あるいは１間×１間とみられ、正方位にちかいグループに含められる建物である。大きな特徴はその柱穴掘形にある。残りが良く、掘形は２段長方形を呈し、その規模約1.4m×0.8m前後は弥生時代の柱穴としては異常ともいえる程の大きさである。柱穴の並びがやや不揃いなことも加わって、調査時は最後まで土壙墓の列埋葬の疑いを捨てきることができなかったほどである。これら４棟はＳＤ019との切り合い関係からみて、遅くともそれまでの集落が環濠集落に変貌した時期には廃絶されたことがわかる。

その他の２棟はとくにグループをなさない。ＳＢ275掘立柱建物跡はＳＢ273竪穴住居跡の西壁と接し合う位置関係にあり、あるいは同時期の関連する建物であったかもしれない。その北妻柱は内濠ＳＤ207にきわどく接するが、濠上面の削平を考えれば、それとは同時期ではあるまい。また西端のＳＢ287掘立柱建物跡は最も小規模で、他の掘立柱建物から遠く離れて存在する。これも国府期以降の建物である可能性はあるが、ここでは一応弥生時代に含めておく。

以上の掘立柱建物は竪穴住居群の配置と合わせて環濠集落全体の機能を考える際に重要な意味をもつものといえよう。

ＳＢ252

構造　１間×１間　方形棟　　**規模**　2.45m×2.35m

特徴　柱穴掘形は基本的に一辺約0.8m程度の方形。柱根径約20cm。柱穴埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。ＳＢ254と切り合う。南北軸方位Ｎ22°Ｗ。

ＳＢ253

構造　１間×１間　東西棟　　**規模**　2.75m×1.55m

特徴　構造にはやや問題が残り、あるいはもう１間南に伸びて２間×１間の南北棟になる可能性もある。柱穴掘形は一辺0.8m前後の方形またはそれより一方が若干長い長方形で、柱根径約2cm。柱穴埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。ＳＢ254と切り合う。南北軸方位Ｎ23°Ｗ。

ＳＢ254

構造　２間×１間　南北棟　　**規模**　3.95m×2.5m

特徴　北妻柱はＳＢ260に、東妻柱はＳＫ235にそれぞれ切られている。ＳＢ253と重なる。柱穴掘形は一辺0.8m前後の方形または1.2m×0.8m前後の長方形、柱根径は約25cm、柱穴埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。南北軸方位Ｎ18°Ｗ。

ＳＢ255

構造　１間×１間　東西棟　　**規模**　2.6m×1.7m

特徴　構造にはやや問題が残り、もう１間北に伸びる可能性もあるがはっきりしない。柱穴掘形は一辺0.7m前後の不整方形が基本とみられ、柱根径約25cm。柱穴埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。南北軸方位Ｎ３°Ｗ。

ＳＢ256

構造　２間×１間　東西棟　　**規模**　3.9m×2.95m

特徴　ＳＢ255と1.9m離れ、方位を揃えて並ぶ。南面中柱はＳＢ260に切られているようである。柱穴掘形は一辺0.7m前後の方形を基本とするが不揃いである。柱根径は約25cm。柱穴埋土は黒色土がつまり、上面のみ検出した。南北軸方位Ｎ３°Ｗ。

ＳＸ257

構造　東西柱列３間以上　　**規模**　4.9m以上

特徴　柱穴掘形が一辺0.7m前後の方形を基本とすることからいえば建物の可能性もあるがＳＤ209の北側にも対向する柱列がみられず、構造にはやや問題が残る。柱穴には黒色土がつまり、上面のみ検出した。方位Ｎ69°Ｅ。

ＳＸ258

構造　東西方向柵４間以上　　**規模**　6.75m以上

特徴　掘形は径0.4m前後の円形。東側はＳＫ235に切られていると思われる。方位はＮ89°Ｅで、ＳＢ256に関連する構造物の可能性がある。

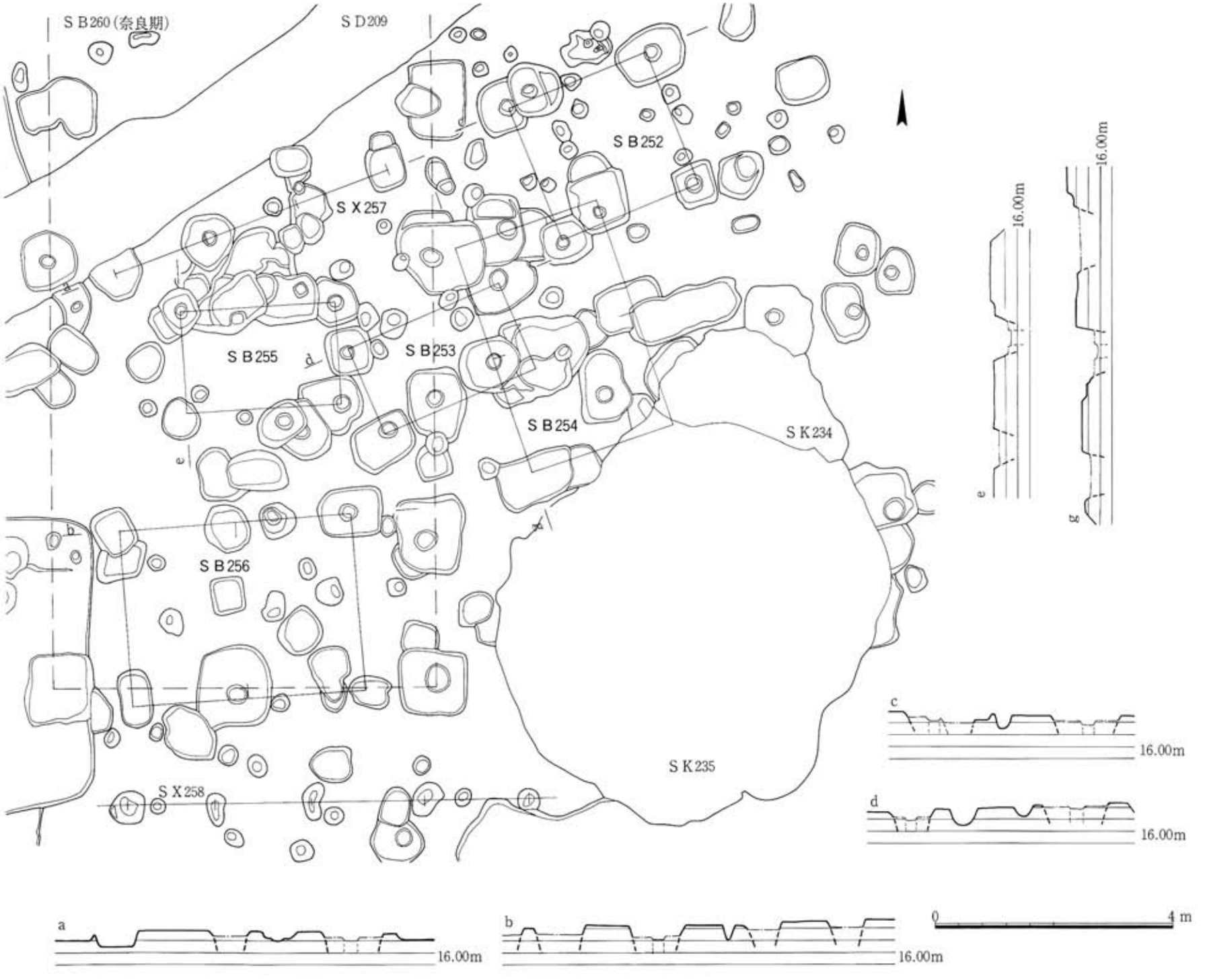
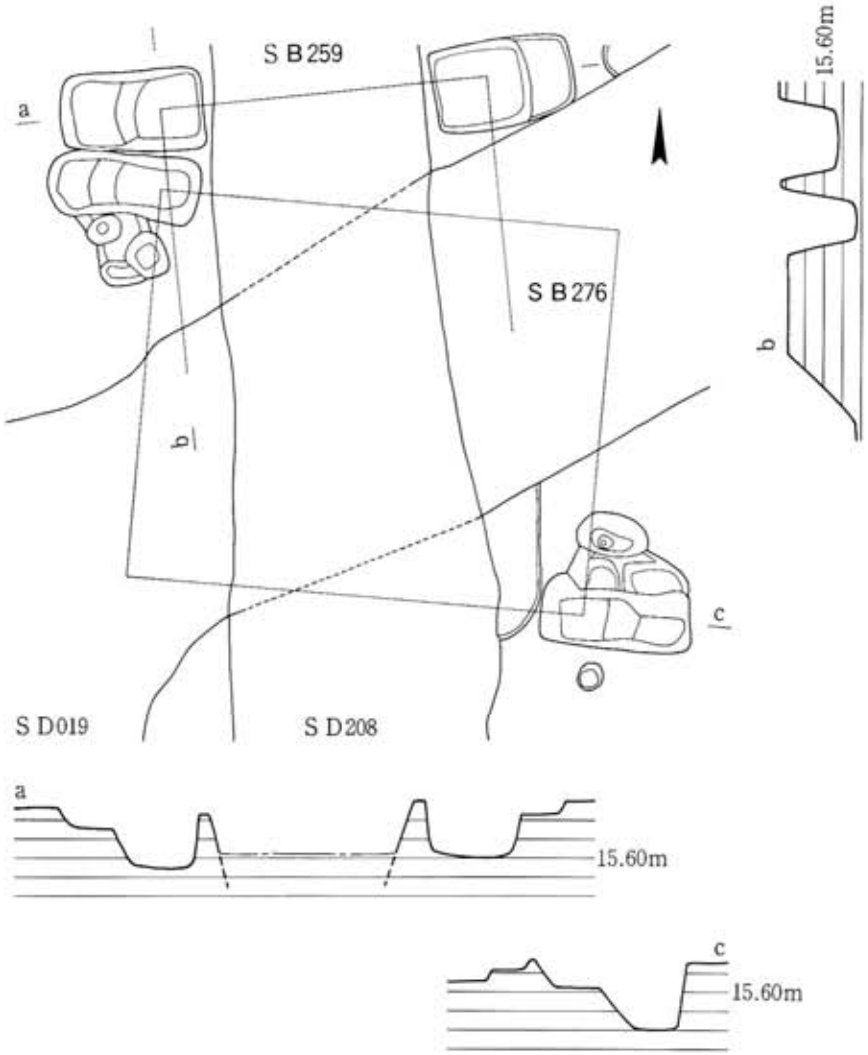


Fig.34　SB252 ～257 掘立柱建物跡・SX258構（1/80）



S B259

構造　（1間）×1間　東西棟か

規模　桁行3.5m

特徴　南側はS D259・S D019に切られる。柱穴掘形は1.5m×0.9mほどの東西に長い二段掘りで長方形黒色土がつまり柱根不明。建物南北軸方位はN 6° W。

S B276

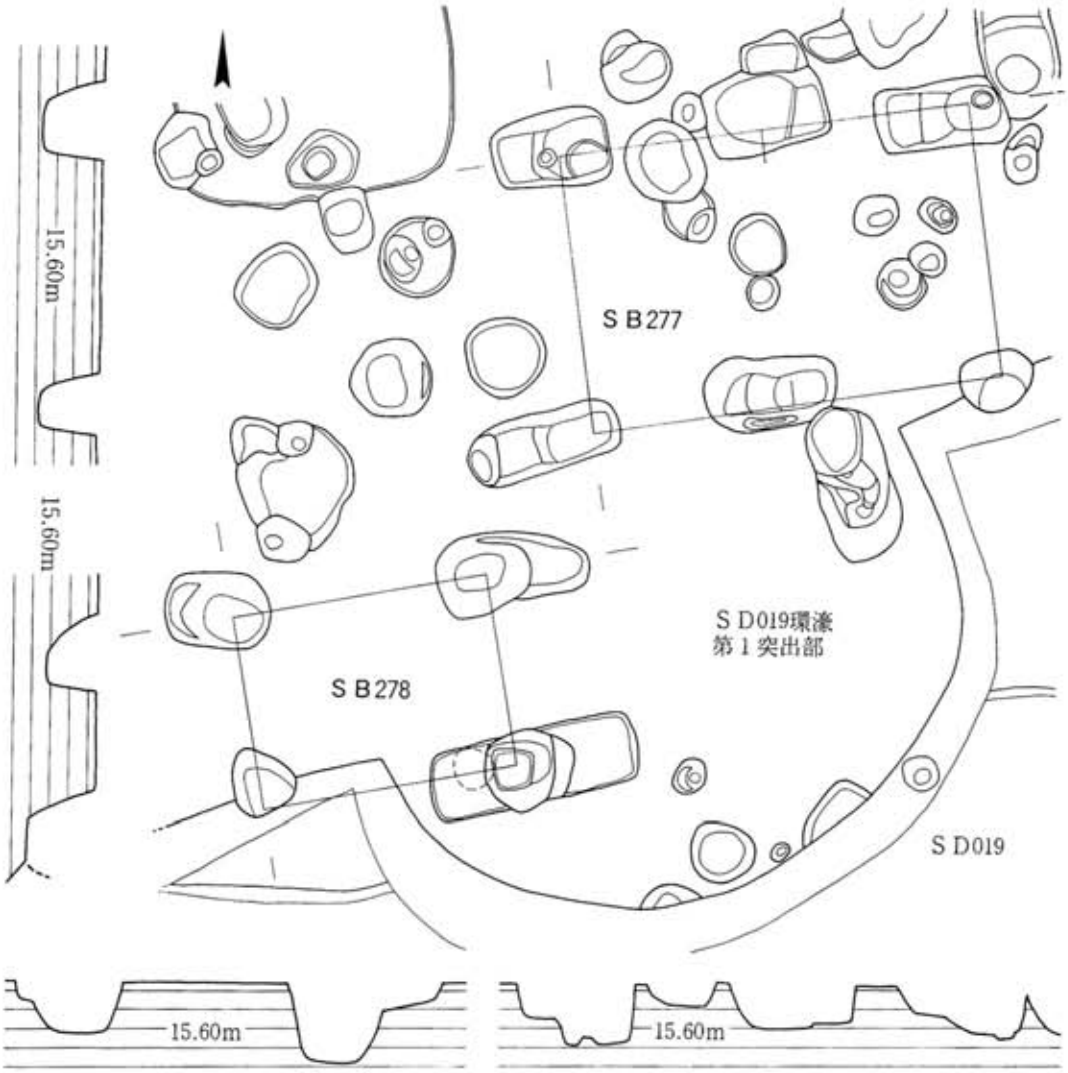
構造　（1間）×（1間）　東西棟か

規模　復元4.9m×4.1m

特徴　西北隅と東南隅の柱穴のみ残存し、中央はS D276に切られる。柱穴掘形は約1.5m×0.7mの東西に長い二段掘長方形で黒色土がつまる。建物南北軸方位N 5° E

0　　4 m

Fig.35　S B259・S B276 掘立柱建物跡（1/80）



S B277

構造　２間×１間　東西棟

規模　4.4m×2.95m

特徴　東南隅柱穴はＳＤ019に切られる。建物南北軸方位はＮ８°ＷでＳＢ278にちかい。柱穴掘形は約1.3m×0.7mの二段掘り隅丸長方形で黒色土がつまり柱根不明。

S B278

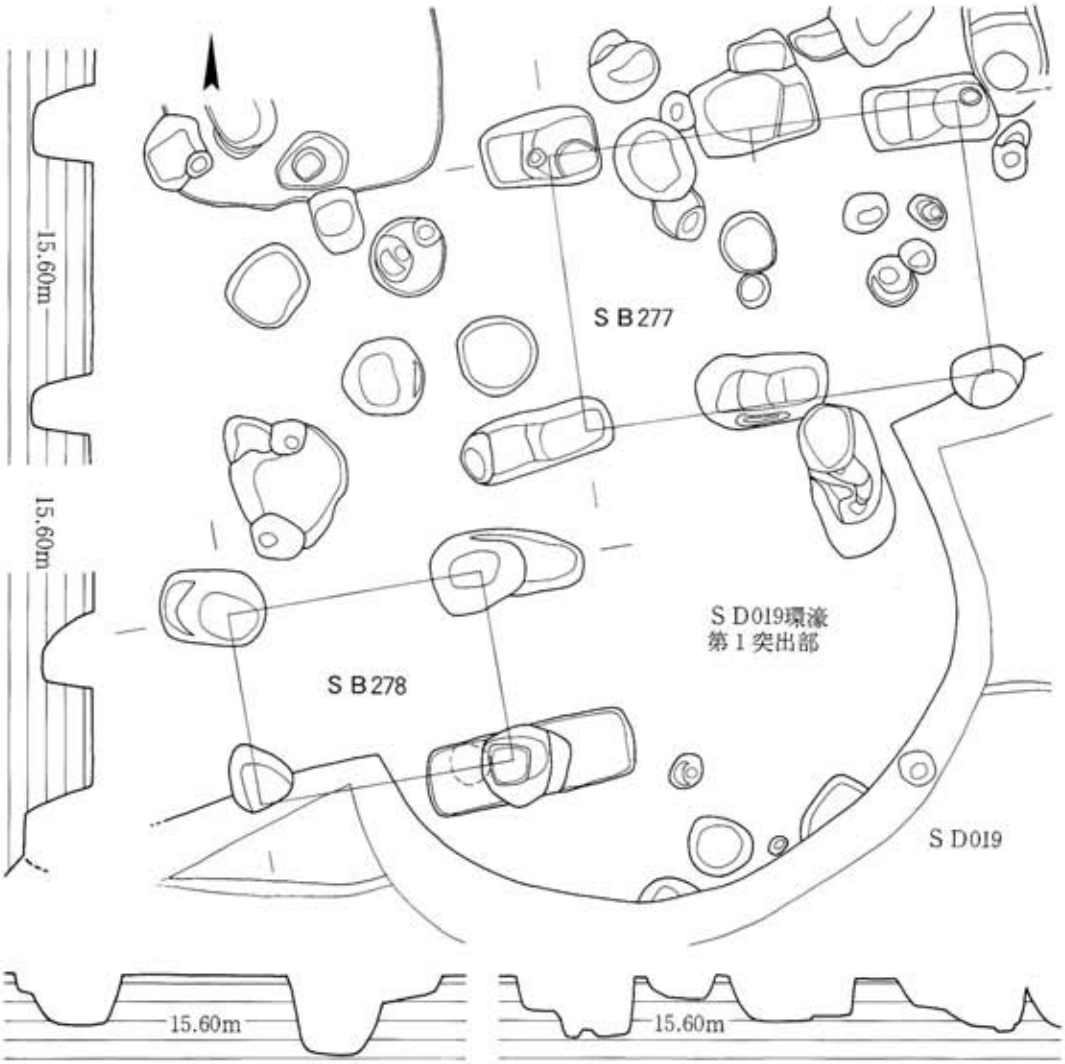
構造　１間×１間　東西棟

規模　2.7m×2.05m

特徴　西南隅柱穴はＳＤ019に切られる。南北主軸方位Ｎ10°Ｗ。柱穴掘形は不整形な隅丸長方形二段掘りで、黒色土がつまる。柱根不明。

0　4 m

Fig.36　ＳＢ277・ＳＢ278 掘立柱建物跡（1/80）



SB277

構造　2間×1間　東西棟

規模　4.4m×2.95m

特徴　東南隅柱穴はSD019に切られる。建物南北軸方位はN8°WでSB278にちかい。柱穴掘形は約1.3m×0.7mの二段掘り隅丸長方形で黒色土がつまり柱根不明。

SB278

構造　1間×1間　東西棟

規模　2.7m×2.05m

特徴　西南隅柱穴はSD019に切られる。南北主軸方位N10°W。柱穴掘形は不整形な隅丸長方形二段掘りで、黒色土がつまる。柱根不明。

0　4 m

Fig.36　SB277・SB278 掘立柱建物跡（1/80）

(4) 甕棺墓・石蓋土壙墓

埋葬遺構は甕棺墓３基・石蓋土壙墓１基の計４基がある。ただし明確な墓地を形成するといったほどのものではない。このうちＳＪ181甕棺墓とＳＣ180石蓋土壙墓は昭和52年度の調査で検出したもので、それぞれＳＢ009およびＳＢ010竪穴住居跡を切って造られている。両者は約２ｍしか離れておらず、時期も弥生後期前半のほぼ同時期の埋葬である。一方ＳＪ233とＳＪ237は互いに約22ｍ離れて調査区の中央にある。ＳＪ233の方は小児棺であるが、共に弥生後期終末の甕棺墓である。なお、ＳＪ233はＳＢ249掘立柱建物跡と重なっており、おそらく建物廃絶後の埋葬であろうと推測する。

ＳＪ181甕棺墓（Fig.38, ＰＬ28）

ＳＢ009竪穴住居跡と切り合い、その床面を掘り込んで墓壙が造られている。墓壙は二段掘り込みの特徴をもつ。まず上段は、北側が除々に浅くなってやや不明だが、1.8ｍ×1.5ｍの東西の長い楕円形で壁面は斜めに掘り込む。下段はさらにその中央南壁側に、甕棺を収めるにようやく足るだけの広さの円壙を垂直にちかく斜めに掘り込んでいる。

甕棺は器高80cmをこえる大型棺を使用しており、単棺の成人墓とみられる。棺自体は下段掘り込みにちょうど収まり、仰角約60°で立てるように埋めている。口縁部を一部欠失するのは攪乱による破壊であろう。石蓋は無く、木蓋等の使用が考えられるが痕跡等は確認できなかった。 甕は平底で、「く」字口縁の口縁下に断面台形の突帯を２条めぐらす。

ＳＪ233甕棺墓（Fig.38, ＰＬ28）

調査区中央で弥生時代のＳＢ249掘立柱建物跡と重なって位置する小児棺である。柱穴と切り合うわけではなく、正確な先後関係は不明であるが、ＳＢ249が環濠の掘削に伴って出現すると考えれば、甕棺の時期からみてもおそらくその廃絶後であろう。上面がかなり削平されており、甕棺本体にも破壊が及んでいる。

墓壙は二段に掘る。上段は浅く残存し、東西に長い1.1ｍ×0.9ｍの方形で底面は東側に向かって緩やかに下る。下段はその東辺部で壁面に向かって横穴状に径約35cmの円壙を斜めに穿け、これに甕棺を収めている。甕棺は２個の甕を用い、下甕はちょうど墓壙下段に収まるように置いて口縁部を打ち欠き、上甕で覆う。ただし上甕は口縁部付近のみ残して胴底部の大半を削平のため欠損している。上甕・下甕とも棺内には丹が塗られ、とくに下甕では鮮やかな赤褐色に厚く塗られた丹が底に落ちて溜まっていた。

使用された甕は「く」字口縁で丸底、下甕の場合は胴部に１条突帯をもつ。

ＳＪ237甕棺墓（Fig.38, ＰＬ28）

調査区中央にあってＳＤ019環濠の外側にはずれて造られている。上面が相当削平されており、甕棺も胴部下半しか残存しない。また東北側はＳＫ236と切り合う。

墓壙は二段堀りで、上段は東北部が荒らされてやや不明ながら、おそらく東西にやや長い楕

円形であろう。下段はその西寄りに径0.6mの円壙を斜めに穿け、甕棺を収めている。甕棺の埋置角度は仰角約45°である。墓壙下段の深さからみて単棺であろう。甕棺そのものは平底の比較的大型棺である。

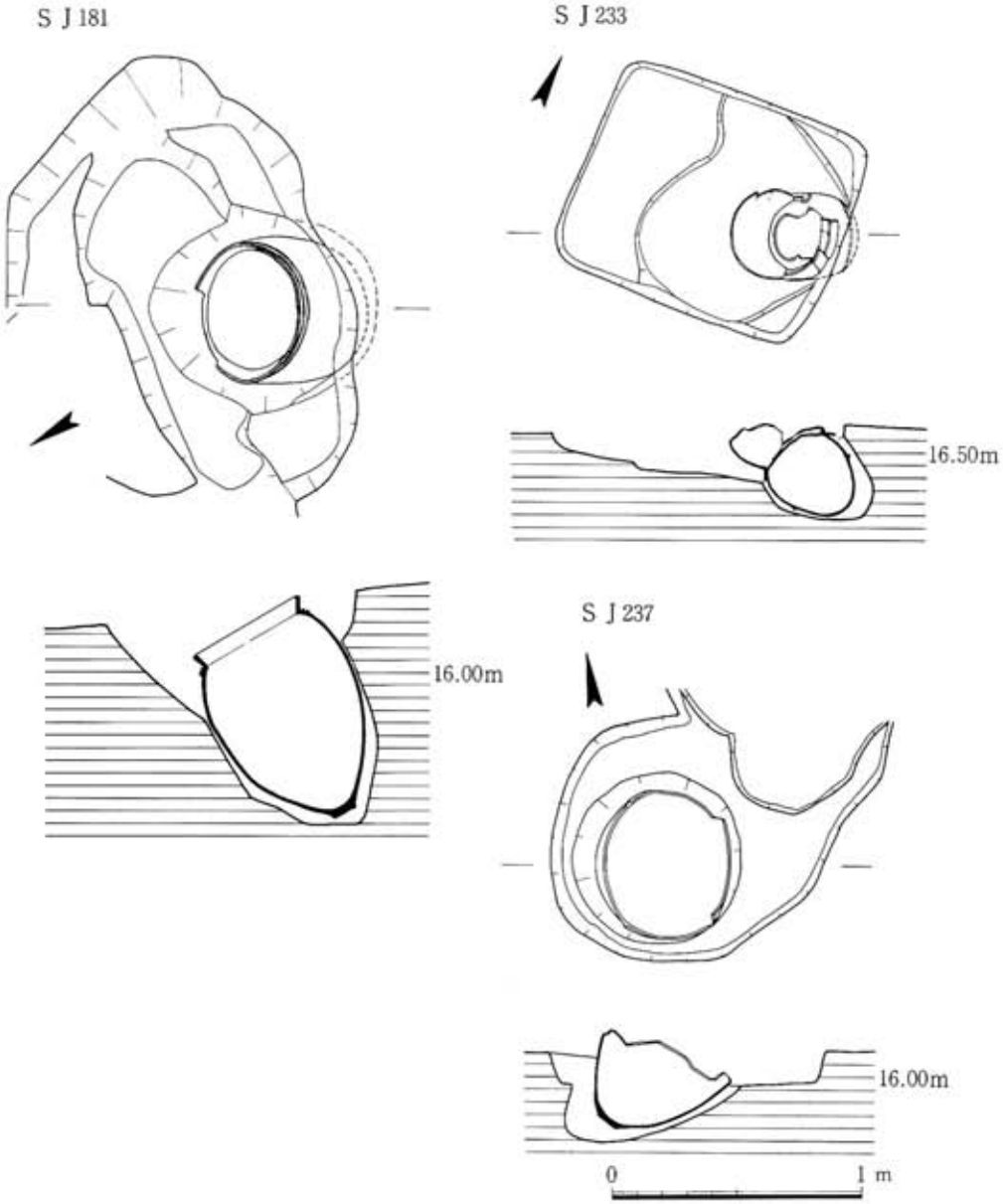


Fig. 38 S J 181・S J 233・S J 237 甕棺墓（1/30）

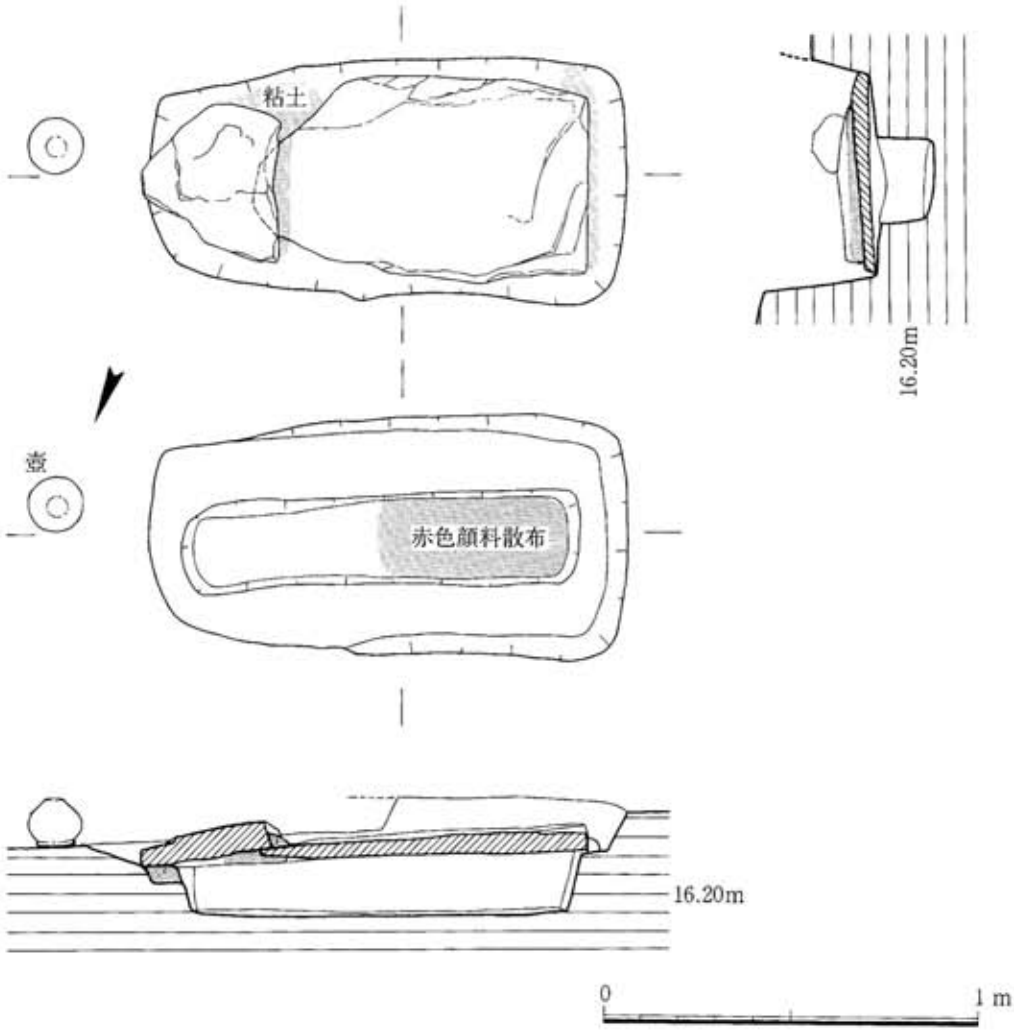


Fig.39　ＳＣ180 石蓋土流墓（1/20）

ＳＣ180石蓋土壙墓（Fig.39, ＰＬ29）

頭位を西側Ｎ114°Ｗに向ける。墓壙は長方形二段掘りで、下段に板石で蓋をする。墓壙の規模は上段1.26m×0.63mで頭位西側がやや広くなる。下段は1.05m×0.28mと極めて狭く、はたして成人墓といえるかどうか疑問である。下段壙底の西半部には赤色顔料が散布されていた。また蓋石は節理性のつよい安山岩板石を用い、頭位にあたる西側を優先させて広い板石を被せた後に足方を別の小さな板石で塞ぎ、さらに頭位と蓋石の重ね目に粘土で目張りを施して墓壙内への土砂流入を防いでいる。

東側から丹塗磨研の小型壺が１点出土しておりＳＣ180に伴う供献品であることは間違いないが、足方位置にありしかも倒立しており原位置といえるかどうかは確かでない。

(5) 土壙

11基を検出した（Fig.40～43, ＰＬ29.30）。これら以外にも弥生時代の可能性が考えられる土壙はいくつかあるが、性格・時期等が不明であり、ここでは一応除外しておく。弥生時代あるいはそれ以降の小建物柱穴等とみられる小穴は調査区全般にわたって無数に多い。

11基の土壙はＳＫ227～ＳＫ231の５基が調査区の東北部にやや集中する。そのうちでは、ＳＫ227・ＳＫ228が長方形で土壙墓の可能性も考えられるが、重複する点に問題があり、性格は不明である。ＳＫ229～ＳＫ231は一端に溝をもつ楕円形の貯蔵穴であろう。調査区中央南端にあるＳＫ236は円形貯蔵穴、ただしその西脇のＳＫ210はＳＤ019と切り合う大型の掘り込みで、全体がつかめない為ここでは一応土壙としておくが、ＳＤ209のようにＳＤ019と継がって南に下る環濠の一部にあたる可能性も否定できない。

その他の４基は調査区の西側に竪穴住居跡等と切り合いながら分散的にみられる。ＳＫ294は長方形で土壙墓の可能性がつよいが、他はいずれも貯蔵穴であろう。そのうちＳＫ297はやや大型の方形、ＳＫ295・ＳＫ298も基本的には方形で共通するものの、ＳＫ182は楕円形といった違いがある。

これら土壙の時期は、貯蔵穴の場合、ＳＫ182は後期前半に遡るかと推定するが、他は環濠集落の形成に伴う後期終末を中心とするものと推定する。

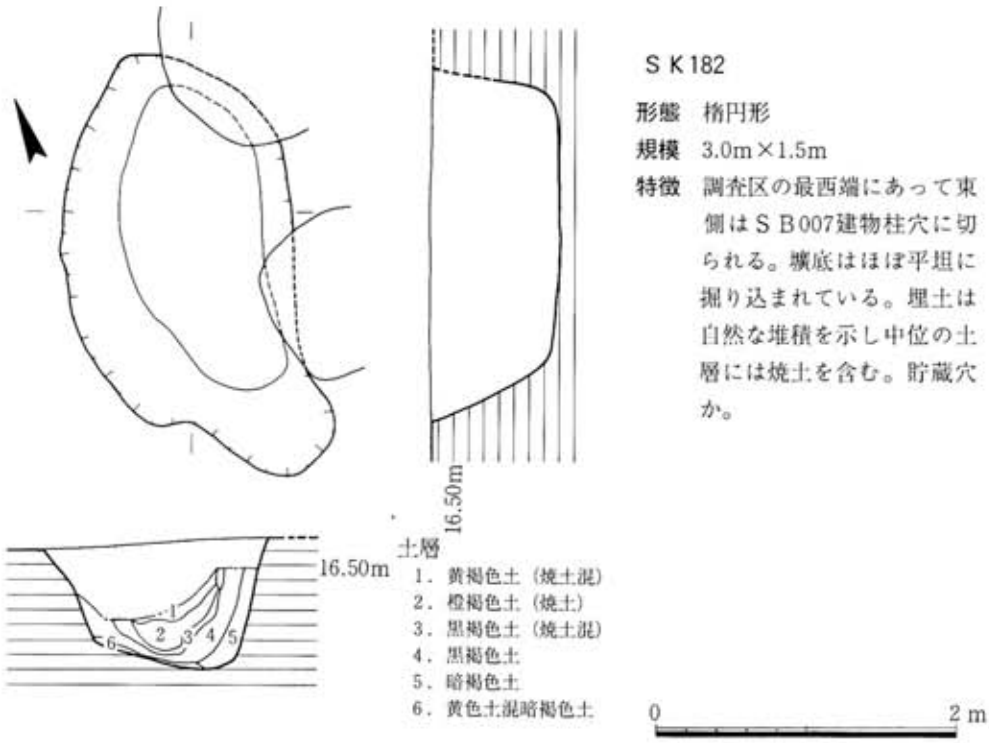
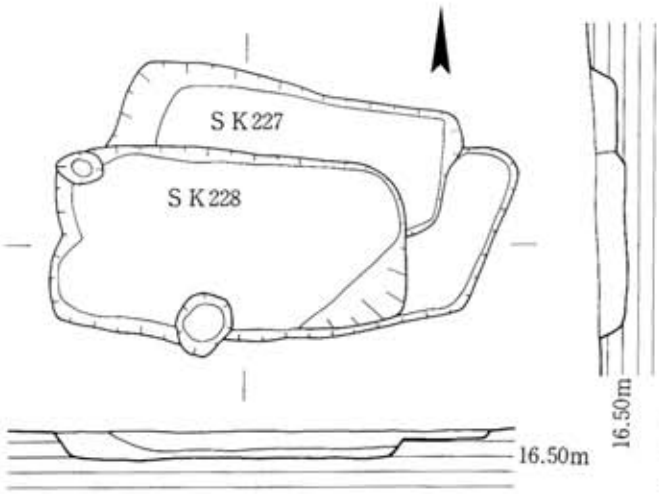


Fig.40　ＳＫ182 土壙（1/5）



ＳＫ227

形態　長方形

規模　2.3m×（1.0）m

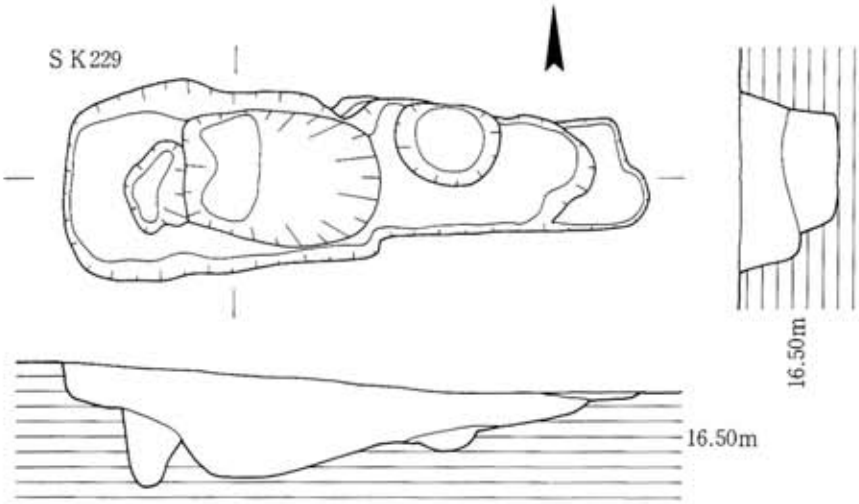
特徴　ＳＫ228と切り合うか先後不明。約20cm浅く残存する。性格不明。

ＳＫ228

形態　長方形

規模　2.3m×1.25m

特徴　壙底は平坦で約20cm浅く残存する。性格不明。



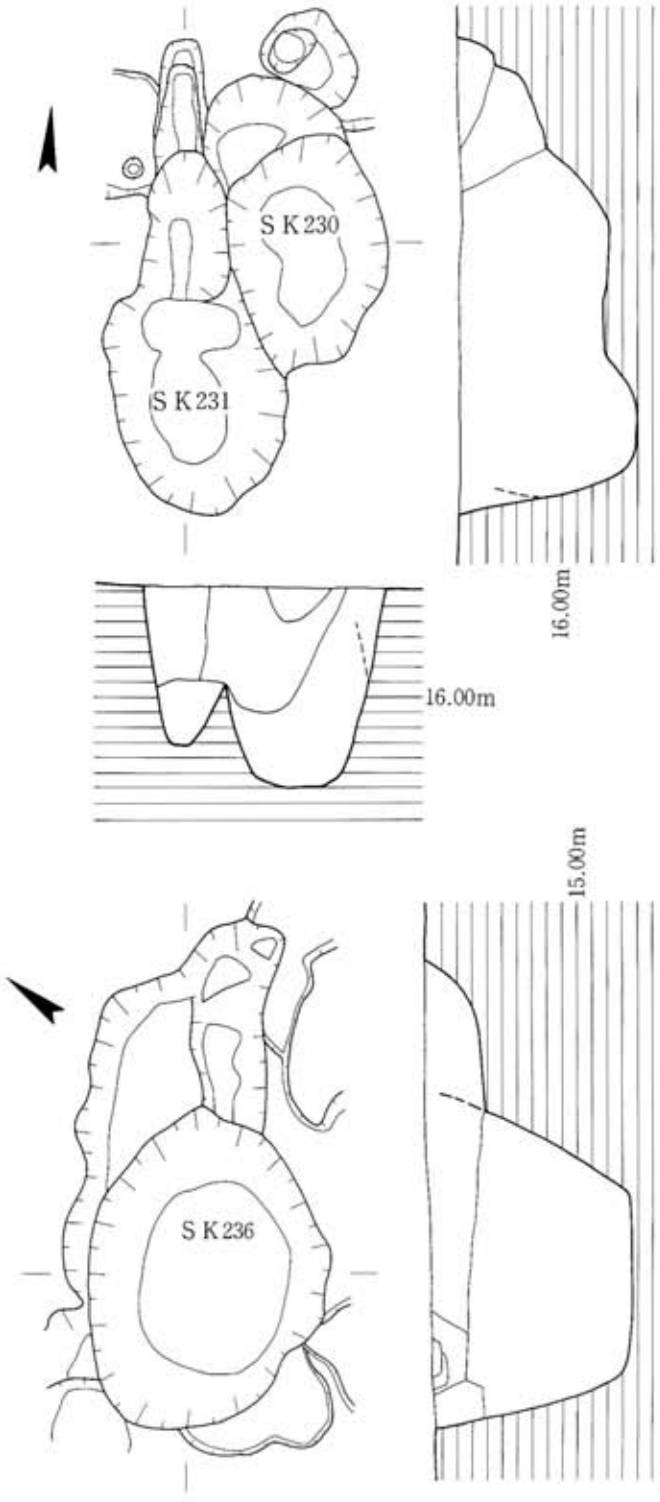
ＳＫ229　**形態**　長方形

規模　長3.85m、幅0.75m～1.2m

特徴　上面では溝状に細長く、東から西に向かって徐々に深くなり、最深部で0.7m。性格不明。

0　2 m

Fig.41　ＳＫ227・ＳＫ228・ＳＫ229 土壙（1/50）



SK230

形態 楕円形

規模 1.5m×1.05m

特徴 SK231と切り合うがほぼ同時期とみられる。深さは1.3mで調査時は壁上位が内傾し袋状であった。貯蔵穴であろう。

SK231

形態 不整楕円形

規模 長3.1m、幅0.3m～1.15m

特徴 SK229に似て北側が溝状に徐々に上がる。最深部で1.2m、またSK230同様、調査時は壁面上位が袋状であった。貯蔵穴であろう。

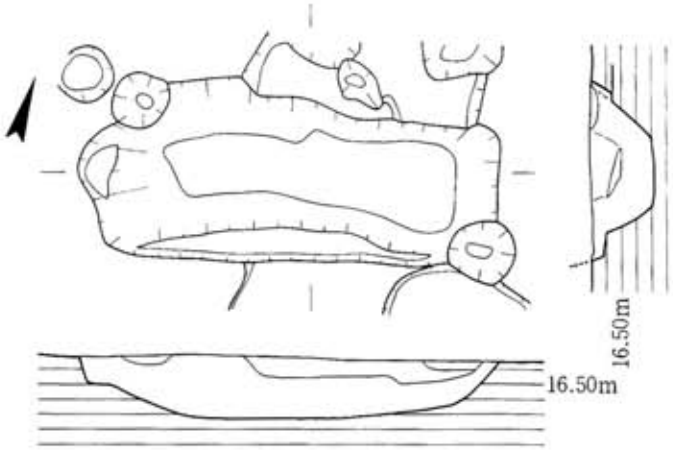
SK236

形態 楕円形

規模 2.1m×1.6m

特徴 SJ237の北脇に位置し、上面は別の土壙に切られ荒らされている。壙底は比較的整った平坦で、深さ1.35m。貯蔵穴であろう。

Fig.42 SK230・SK231・SK236 土壙（1/50）

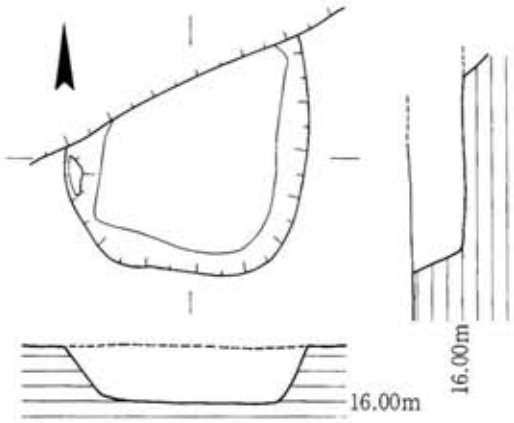


ＳＫ294

形態　長方形

規模　2.8m×1.2m

特徴　ＳＢ272と切り合う。上面は荒らされてやや不明、壁は立ち上がりが比較的ゆるやかで、壙底は東西両端がやや上がる。土壙墓あるいは石蓋土壙墓かと推定する。

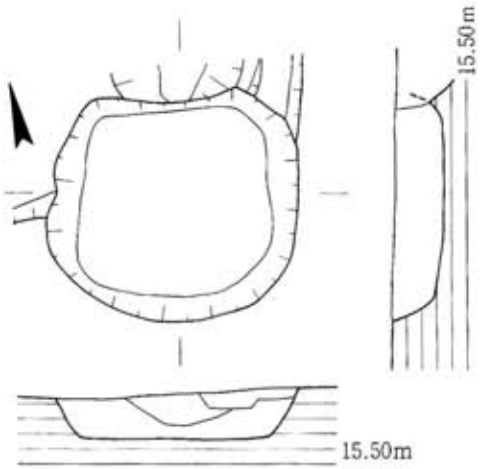


ＳＫ295

形態　隅丸方形

規模　1.6m×（1.7）m

特徴　北側はＳＤ207に切られる。整った形状で壙底は平坦に掘り込み、四壁は下位でゆるやかに立ち上がる。



ＳＫ296

形態　隅丸方形

規模　1.6m×1.6m

特徴　北側はＳＢ280に切られるかと思われる。規模・形状ともＳＫ295によく似た土壙で、壙底は平坦、四壁は下位でゆるやかに立ち上がる。

0　2 m

Fig.43　ＳＫ294 ・ＳＫ295 ・ＳＫ296 土壙（1/50）

2 奈良・平安時代

溝6条・掘立柱建物跡13棟・柵2列・土壙3基を検出した。南々東方向約250m先には肥前国庁があるだけに、肥前国府の中でいかなる性格をもつか問題になる遺構群である。調査区の中で弥生時代の遺構を除くこの時期の遺構の分布はFig.44のとおりである。また対照する遺構一覧はTab. 2に示した。

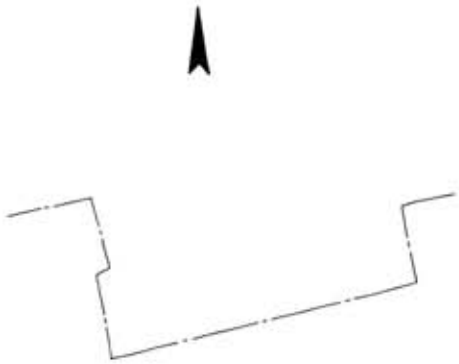
まず溝についてみると、掘立柱建物群との関係でとくに主要な溝はＳＤ205とＳＤ208の２条である。ＳＤ205は調査区の東に位置する東西溝で、方位Ｎ９°50′WはＳＢ239～ＳＢ241の並びにちかいことから、その東側を区画する溝であることは確かである。上面削平のため深さ約0.3mしか残存せず幅は2.2m前後である。このＳＤ205は昭和57年度の調査でその北端がほぼ直角に西に曲がることを確認し、翌年度の調査で溝の続きの検出に努めたが、短く切れるらしく西には伸びていなかった。ただし曲がりの位置はＳＢ242～ＳＢ245の北側柱列をほぼ結んだ

Tab. 2 惣座遺跡奈良・平安時代遺構一覧表

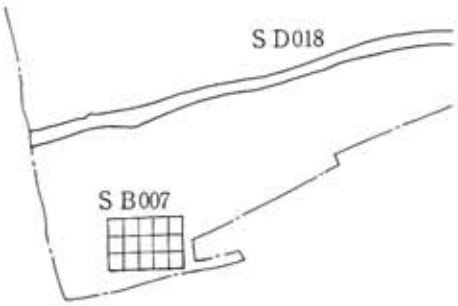
遺構番号	種 別	形 態	規 模（桁×梁） m	備 考	旧番号
ＳＢ007	掘立柱建物	東西棟(総柱)	5間×3間 8.16×5.64	Ｎ3°50′Ｗ	ＳＢ007
ＳＤ018	溝	東西溝			ＳＤ018
ＳＤ202	〃	南北溝			ＳＤ204
ＳＤ203	〃	〃		ＳＤ204を切る	ＳＤ211
ＳＤ205	〃	〃	33m以上	Ｎ9°50′Ｗ	ＳＤ202
ＳＤ206	〃	〃			ＳＤ202
ＳＤ208	〃	〃	53m以上	Ｎ3°Ｗ	ＳＤ226
ＳＫ232	土 壙	楕円形			ＳＫ248
ＳＫ234	〃	円形			ＳＫ250
ＳＫ235	〃	〃			ＳＫ250
ＳＸ238	柵	南北列	4間以上（8.8m以上）	Ｎ1°10′Ｗ	
ＳＢ239	掘立柱建物	南北棟(総柱)	3間×3間 7.65×6.12	Ｎ8°20′Ｗ	ＳＢ223
ＳＢ240	〃	〃（〃）	〃 7.50×5.97	〃	ＳＢ242
ＳＢ241	〃	〃（〃）	〃 7.48×5.92	〃	ＳＢ245
ＳＢ242	〃	東西棟(総柱)	〃 7.2×5.55	Ｎ8°40′Ｗ	ＳＢ277
ＳＢ243	〃	〃（〃）	〃 7.2×5.4	〃	ＳＢ276
ＳＢ244	〃	〃（〃）	〃 7.74×6.3	〃	ＳＢ274
ＳＢ245	〃	〃（〃）	〃 8.1×6.6	〃	ＳＢ272
ＳＢ246	〃	〃（〃）	2間×2間 6.3×5.7	Ｎ1°00′Ｗ	ＳＢ273
ＳＢ247	〃	東西棟	6間×3間 18.09×6.48	Ｎ0°40′Ｗ、ＳＢ243を切る	ＳＢ275
ＳＸ248	柵	東西列	4間以上 11.30以上	N83°Ｗ	
ＳＢ260	掘立柱建物	南北棟	6間×2間 14.70×6.50	Ｎ0°40′Ｗ	ＳＢ286
ＳＢ261	〃	南北棟(総柱)	4間×4間 8.60×6.60	Ｎ1°10′Ｗ	ＳＢ267
ＳＢ279	〃	南北棟	(3間)×2間 (8.25)×4.95	Ｎ1°40′Ｗ、ＳＤ018を切る	ＳＢ281

線上にあり、これら4棟の並びを意識したものであろうことは十分考えられる。また、この曲がり部にはＳＤ206が、中心線でＳＤ205と約1.5m西にずれながらもやはり約10°西傾して北に向かう。幅約1.0m、深さ約0.4mでＳＤ205よりかなり狭く、溝底がそれよりも約20cm深い。このＳＤ206南北溝の存在は鍵形に配置されたＳＢ239～ＳＢ245の北側にもさらに、これら7棟に類した倉庫群が拡がることを予想させるものである。時期は、ＳＤ205は完掘しなかったが、断面試掘溝から8世紀前半の須恵器が小量出土している。これはＳＢ239ほかの鍵形に配置された倉庫群の時期をも示唆するものである。

次にＳＤ208は調査区の中央にあって方位Ｎ3°Ｗ、わずかに西に傾く南北溝である。幅は南側で約2.3m、北側は掘り直しによって途中約3.3mと広い。残りが良く、深さは1.2m残存する。その北端ではＳＢ245柱穴を切っており、ＳＢ239ほか7棟の西傾建物群よりも新しいことは確かである。完掘はしなかったが、断面試掘溝から出土した小量の須恵器片には8世紀後半から9世紀初のものがみられ、埋没する時期が9世紀初以降であることを示している。このＳＤ208の東西両側にはＳＢ260とＳＢ261の正方位にちかい建物があり、約3°のずれはあるが同時期に存在した可能性がつよい。その場合は、ＳＢ260およびこれと同時期のＳＢ247の長棟2棟を一群として、倉庫構造のＳＢ261との境を限るものであろう。



その他の溝は調査区東側にＳＤ202がＳＤ205と約18.5m離れて並行する。幅約1.8mで浅く残存し、やや蛇行する。時期は不明だがＳＤ205にちかい時期と推定する。ＳＤ203はＳＤ202を切る幅約0.6mの小溝で、ＳＤ202の掘り直しとみることもできる。また、調査区の西南部に位置するＳＤ018は全体が緩く湾曲する東西溝で、時期は12世紀前半に下る。幅約1.3mで浅く残存する。



次に掘立柱建物跡についてみる。

ＳＢ239～ＳＢ235の7棟は既にふれたとおり東側に3棟、北側に4棟が全体として鍵形の配置をとる。構造は全て3間×3間の総柱で倉庫建物にあたるとみられ、柱穴掘形・柱根ともきわめて大型である。これら7棟の規模は図上計測で微妙な

違いはあるが、大まかにみて東群ＳＢ239～ＳＢ241の３棟、北群ＳＢ242・ＳＢ243の２棟およびＳＢ244・ＳＢ245の２棟の３群に分けられ、とくにＳＢ244・ＳＢ245の２棟が大型である。配置の特徴は個々の建物の規模が多少異なるにもかかわらず、東群・北群がそれぞれ西側柱列と南側柱列を一線に揃え、前面を意識している点にある。しかも東群は南北軸方位Ｎ８°20'Ｗ、西群のそれはＮ８°40'Ｗであるからほぼ直角といってよく、また東群北端のＳＢ241の北妻柱列が北群の南側柱列に一致する、といった関係にある。各建物どうしの間隔も約6.5ｍでほぼ一定している。このような状況は７棟が、おそらくＳＤ205と同じ８世紀前半～中頃頃に、一定の計画に基づき整然と配置されたものであったことをよく示している。方位を揃える点でいえば、ＳＸ248柵もこの時期であろう。

そして次の時期になるとこの地区に正方位建物群が出現するが、ＳＢ243とＳＢ247との切り合いからみて、その際には先の倉庫群は７棟とも既に廃絶していたと思われる。ＳＢ247は６

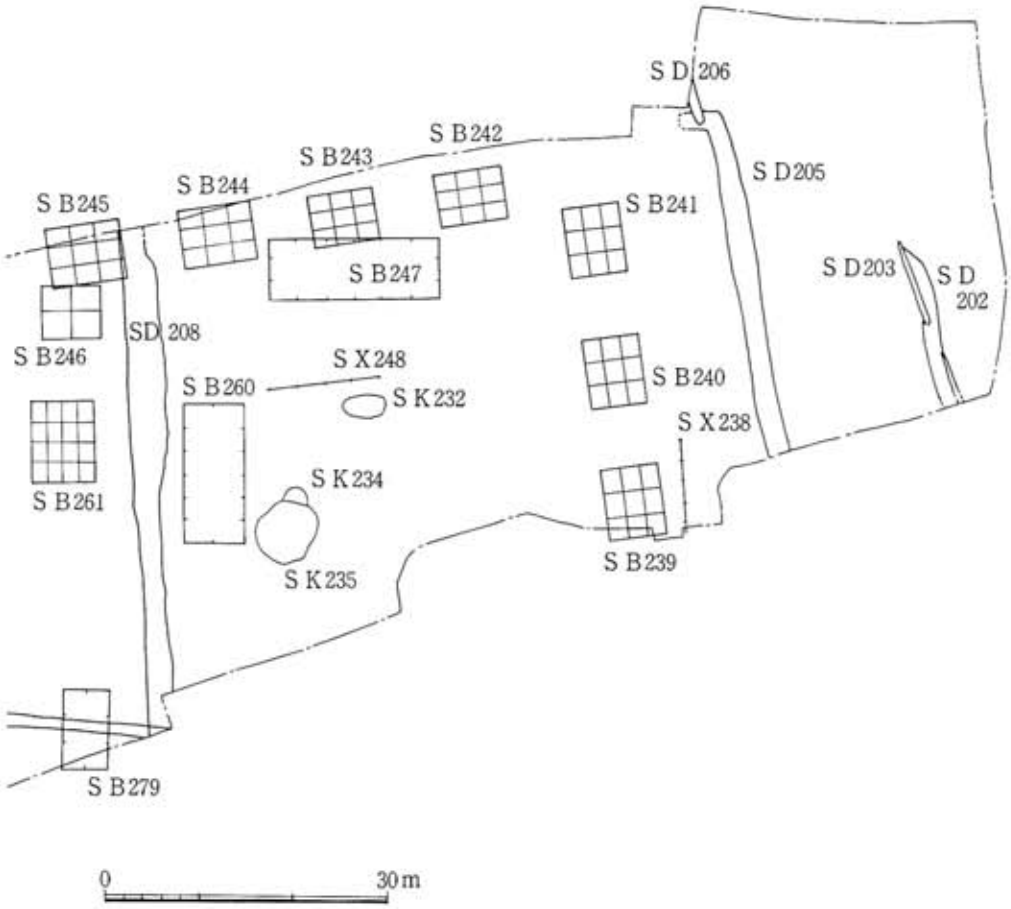


Fig.44　奈良・平安時代遺構配置図（1/600）

間×３間、ＳＢ260は５間×２間の大型の長棟でともに南北軸方位が真北から約１°西傾しながらほぼ正確に鍵型をなして北と西に配置されている。この配置は先の倉庫７棟によって囲まれた広場を基本的に踏襲し意識した結果であろう。２棟はこれまでの肥前国府関係の調査の中では国庁跡の正殿に次ぐ規模の大型建物であり、しかも配置からみて同時期であることは間違いない。ＳＤ208との関係でいえば、時期はおそらく８世紀後半～９世紀初の間に推定されるものであろう。

これら大型長棟の出現は、それまで倉庫群一色であったこの地区の利用に何らかの行政機能が加わったことを示しており、一定の変質を意味する。ただしそれが倉庫地区としての伝統的な利用を完全に失うものでないことはＳＢ261およびＳＢ007の存在からも窺われるところであろう。ＳＢ261・ＳＢ007はそれぞれ４間×４間、５間×３間の総柱構造で、規模そのものはＳＢ245など前代の倉庫建物と大差ないが、これだけ細かな総柱構造の本格的な倉庫は肥前国府関連調査でも他の地区ではみつかっていないからである。このうちＳＢ261は南北軸方位Ｎ１°10'ＷでＳＢ260およびＳＢ247の正方位建物群と同時期と考えられる。ＳＢ007は昭和52年度に肥前国府関係調査では初めて検出された大型建物で、実は当時、その構造が総柱であることからこの地区を正倉地区と推定して爾後の調査に期待を抱かせた、いわば記念的な遺構である。国府期の官衙は国庁跡を含めてその後一帯で広く確認され、この地区では確かに57・58年度の調査で大型倉庫群が検出されたことは見てきたとおりである。ただしＳＢ007の場合南北軸方位はＮ３°50'Ｗであるから正方位建物群に含めるにはやや違いが大きく、また離れていることもあって、近接した時期であろうと推定するが、同時期に存在したかどうかは不明である。この点は調査区南側の状況が明らかになることをまたざるをえない。その他、ＳＢ239の東脇にはＳＸ238柵がＮ１°10'Ｗで南北に伸びており、あるいは正方位建物群の時期に広場を意識してその南を限ったものかと推測する。

ＳＢ246とＳＢ279はそれぞれ2間×2間、３間×２間（推定）の正方位にちかい方位の建物である。ただし柱穴は小規模で、ＳＢ279は12世紀に下るＳＤ018溝と重なっており、時期はＳＤ018溝以前であったとしても平安時代に下るとみられる。とうてい官衙的な建物ではない。

最後に、土壙は３基を数えるが、ＳＫ235付近では実際は近接した時期に２基以上が切り合うようである。いずれも廃棄壙とみられ、とくにＳＫ235は大型である。時期は正方位建物群と同時期、あるいはそれ以降でも９世紀の早いうちであろう。

(1) 溝

概要は既に述べたとおりで、ここでは断面図を示して補足する（Fig.45, ＰＬ43～45）。

まずＳＤ205はｄ断面とｅ断面とで比較すると、地形の傾斜に合わせて溝底が北から南に緩やかに下っており、自然な流水を可能とする。ただし両断面から明らかなように、これには改

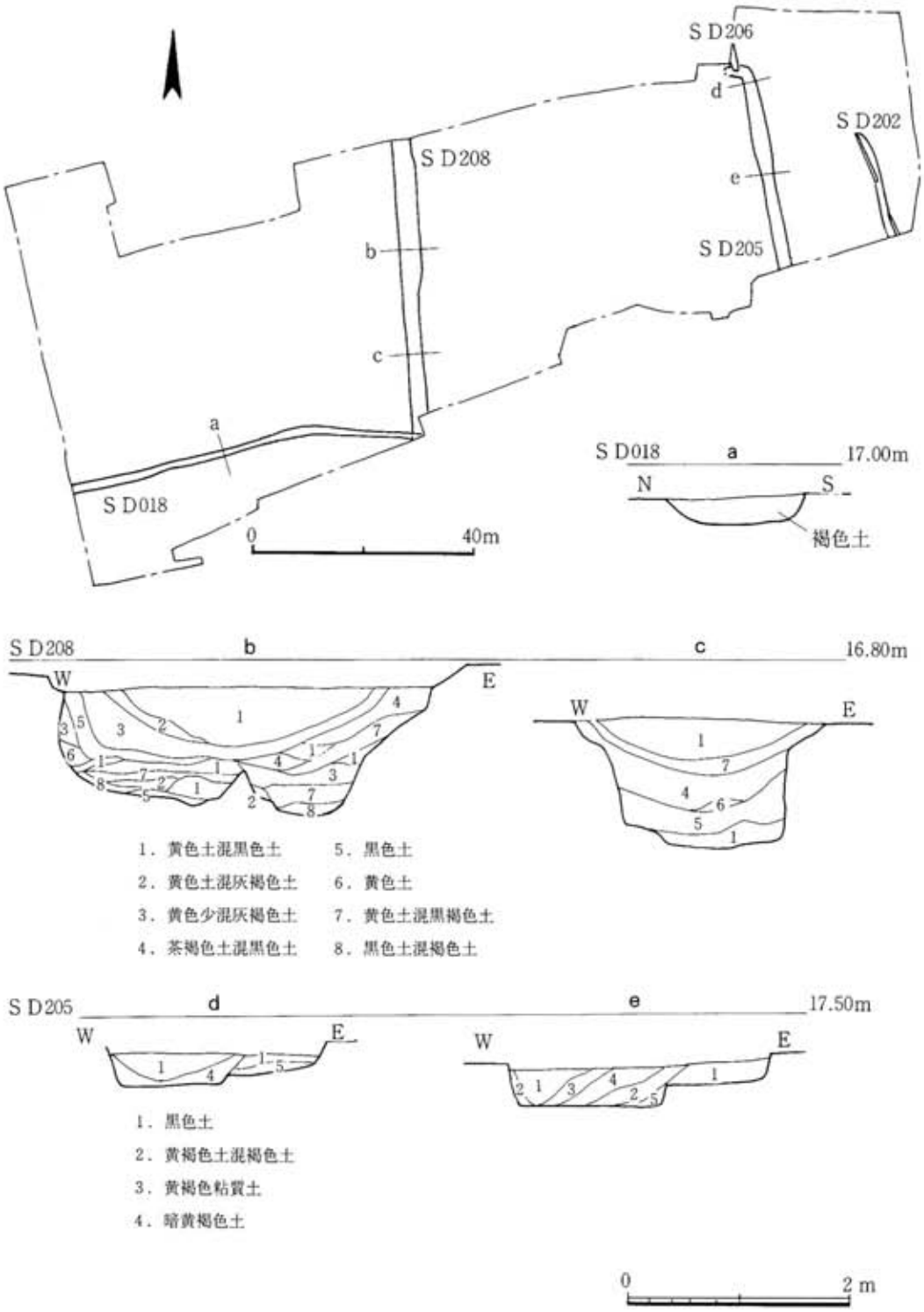


Fig.45 奈良・平安時代溝 （1/1200）（1/60）

修の痕が認められる。すなわち断面で溝底が一段高くなっている東側の部分が最初のもので、次期には西側に寄せてそれより溝底が10～20cm深く掘り直している。この改修は埋土上面の観察では気づかなかったが、そうしてみると先にＳＤ205の幅を約2.2mとしたのは実は改修前・後を合わせた数値であって、少なくとも改修後でいえばそれよりはやや狭いことになる。溝底の断面から復元すると当初の溝幅にしても１mをこえることは必至であり、改修後のそれは検出面の広いところで1.45mである。ただし改修後の溝の場合、改修時の幅はたしかにその程度の規模であるが、埋土状況からみるとその後東壁が自然に崩れて溝を埋め、結果的に溝自体は東側に幅を拡げていったことが推定される。改修時の東壁が旧溝の埋土を切り込んでいることを思えば当然であろう。なお、この改修が旧溝の西側に寄ってなされているのはＳＤ206と何らかの関わりがあるかとも考えるが、ただしそれでも直接的に継がるわけではない。

次にＳＤ208をｂ断面、ｃ断面でみると、溝底のレベル差により北から南への自然の流水があったことは当然として、実はここでも当初の溝を利用した一部改修あるいは掘り直しの痕を認めることができる。このＳＤ208の場合は南側で幅2.3m前後、それが北側で途中約12mにわたって幅約3.3mに急に広くなる。この部分をｂ断面でみると、当初の溝は南側同様にほぼ一定幅２m強で直線的に掘られている。ところがその後、なぜか北側のこの付近のみ旧溝がある程度埋没したあと、その東脇を于回するように約12mにわたってＶ字溝が掘られている。これは建物等との利用上の必要からであろうが、理由は不明である。そして最終段階では新・旧両溝は一本に合わさって幅の広い溝になってしまうのである。ｃ断面も壁の傾斜が上位途中で変わるのはｂ断面における最終段階の掘り直しと継がるものであろう。したがって現在みる溝の南側の幅2.3mにしても実は掘り直しの結果広くなったもので、当初の溝幅は1.7m程度である。ＳＤ208にしてもＳＤ205にしても奈良時代におけるこれら溝の特徴は、とくに当初の掘方を弥生時代の環濠と比べれば明らかなように、きわめて計画的に直線的で、なおかつ壁面が垂直にちかいくらいに急であるという点にある。

平安時代の溝ＳＤ018はａ断面のみ示しておく。埋土はやや明るい褐色土がつまり、改修等が行なわれた形跡はない。溝底のレベルはあまり違わないが、やや西から東に向かって下がっている。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡13棟を検出した。時期別には奈良時代と推定されるもの11棟、平安時代と推定されるもの２棟がある。奈良時代の11棟はさらに大きな２時期に分かれ、第１期は倉庫７棟、第２期は倉庫２棟および長棟とからなり、それぞれの時期に伴うとみられる柵が各１列ずつある。平安時代の２棟は倉庫１棟と長棟１棟で、奈良時代のものと比べると格段に小規模である。

以下、東側から順に各建物跡を図示し、簡単に説明を付す(Fig.46～59, ＰＬ31～45)。

ＳＢ295

構造　３間×３間　総柱南北棟（7.65m×6.12m）

柱間　桁2.55m（8.5尺）、梁2.04m（6.8尺）

方位　Ｎ８°20′Ｗ

特徴　南側柱列は１個以外は調査区外に出る。柱穴掘形は基本的に隅丸方形だがやや不揃いで大きさは一辺（径）0.6m～1.2mで、これと並ぶＳＢ240ほかと比べて全体に大きい。埋土は黒色土と黄色土を版築状にたたきしめる。柱根径は平均約25cm。

ＳＸ238

構造　柵列４間以上（8.8m以上）

柱間　１間2.2m（7.3尺）

方位　Ｎ１°20′Ｗ

特徴　ＳＢ239の東脇に位置するが方位はほぼ真北で別時期である。掘形はやや不揃いながら基本的に小型の方形で一辺約0.5m、北側はこれ以上続かず、南側は４間から先が調査区外に隠れる。柱根径ははっきりしないが径約20cmである。

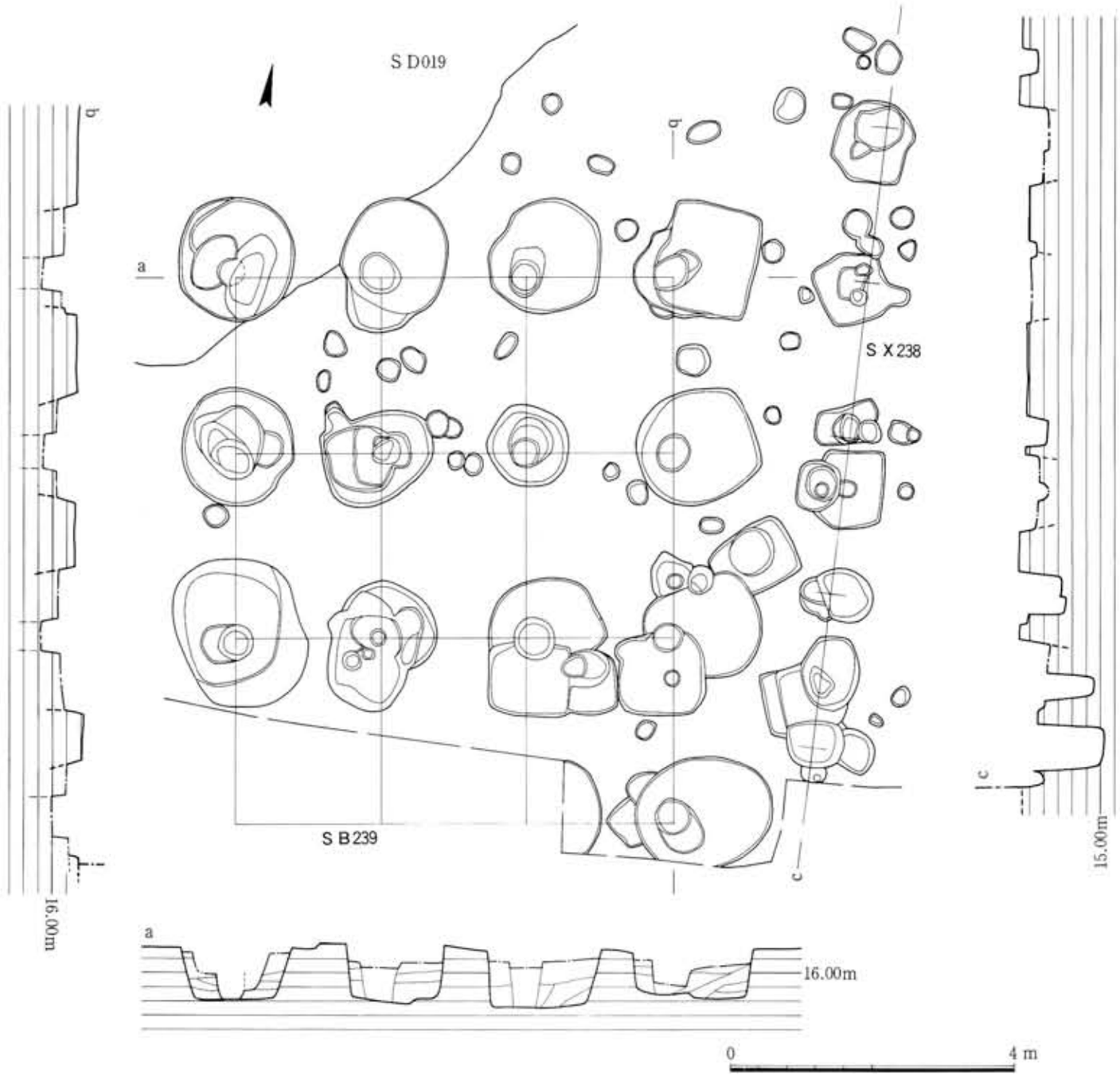
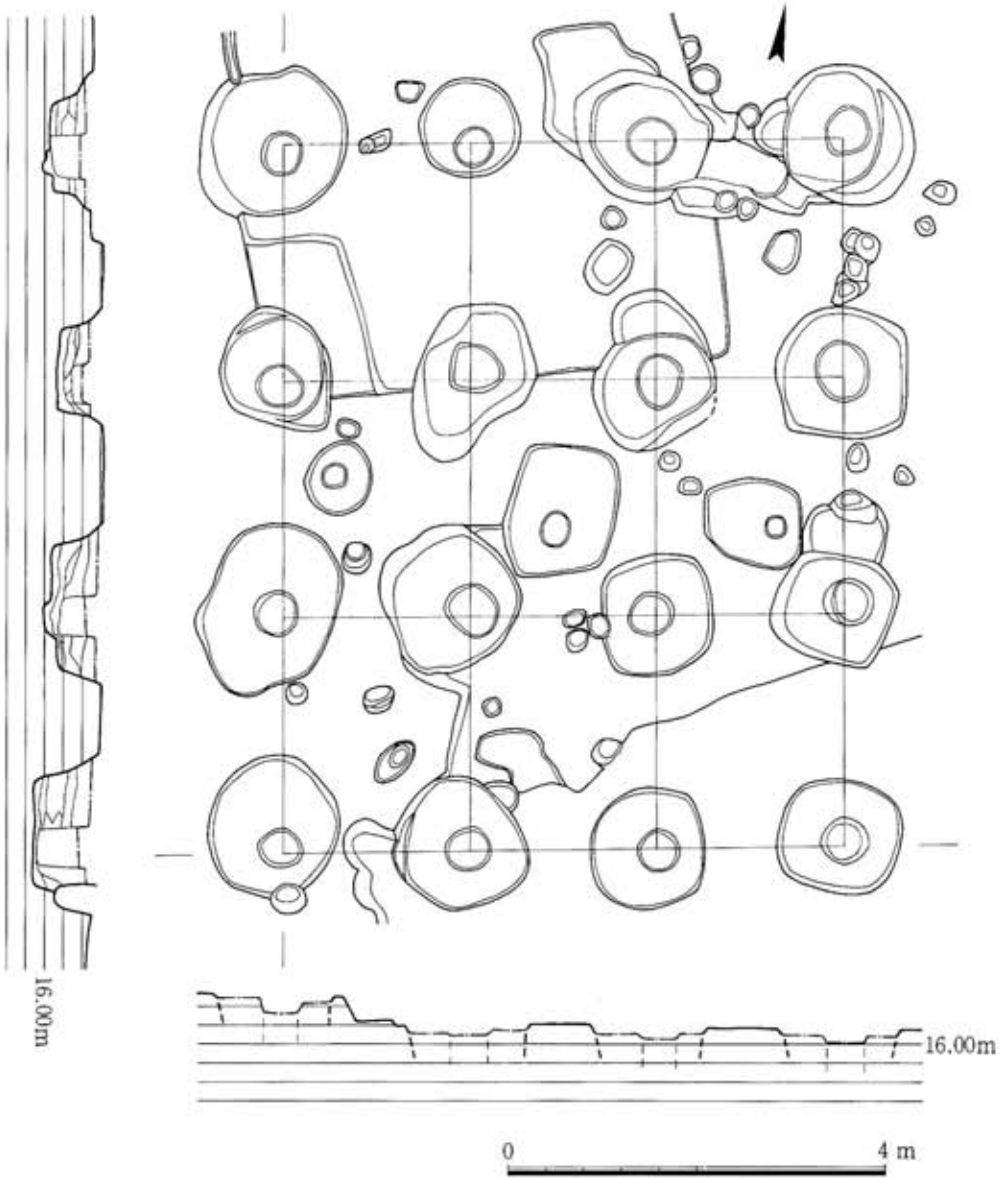


Fig.46　ＳＢ239 掘立柱建物跡・ＳＸ238柵（1/80）



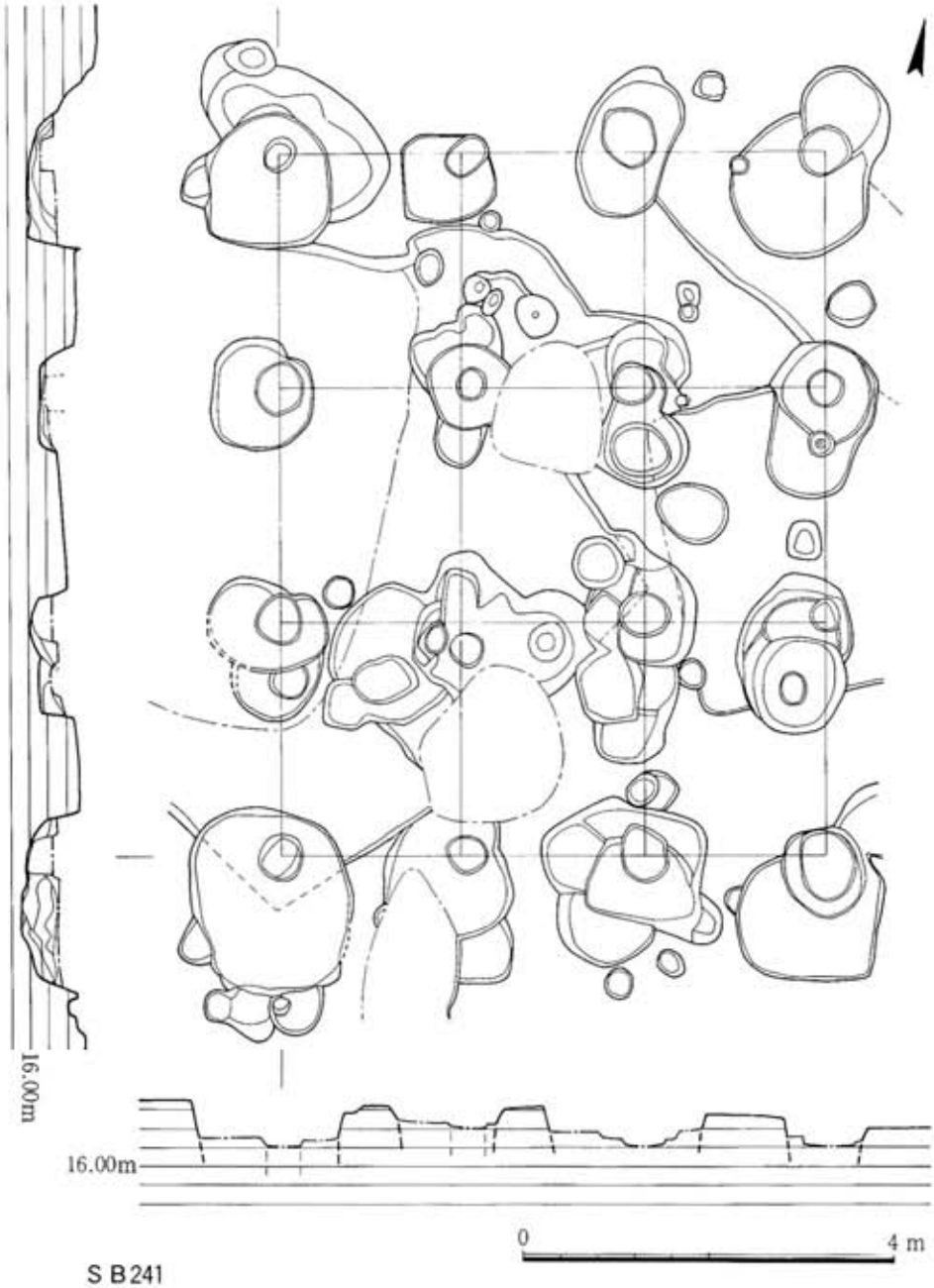
ＳＢ240

構造　３間×３間　総柱南北棟（7.50m×5.97m）

柱間　桁2.5m（8.3尺）　梁1.99m（6.6尺）　**方位**　Ｎ８°20'W

特徴　柱穴掘形は全体に円形にちかくやや不揃いであるが、基本的には一辺1.3m前後の隅丸方形。埋土は黒色土と黄色土を版築状にたたきしめる。柱根径は平均約40cmと大きい。

Fig.47　ＳＢ240 掘立柱建物跡（1/60）



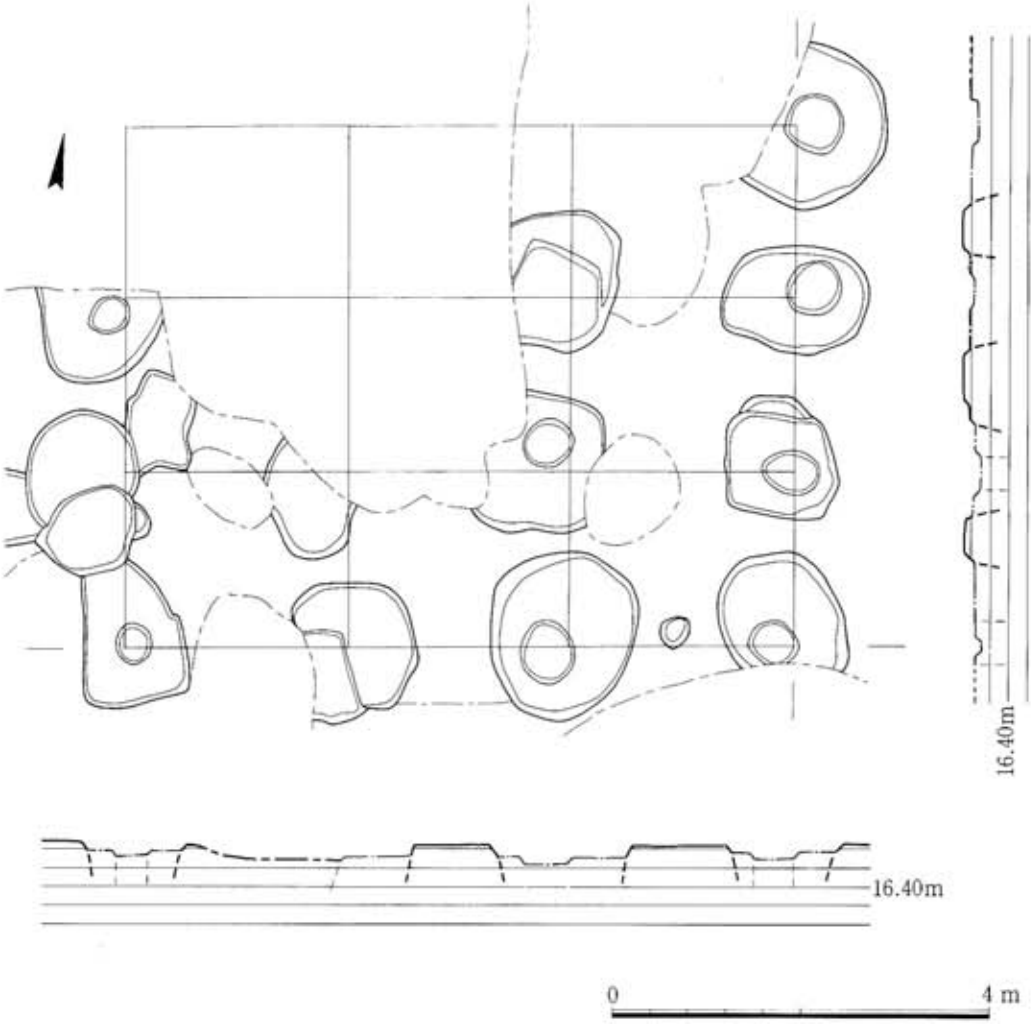
S B241

構造　3間×3間　総柱南北棟（7.48m×5.92m）

柱間　桁2.49m（8.3尺）、梁1.97m（6.6尺）　**方位**　N 8° 20'W

特徴　切合い、攪乱が著しい。柱穴は4隅のみ一辺1.3m前後の隅丸方形で他はそれよりやや小型の一辺1m前後の円形にちかい隅丸方形。埋土は黒色土と黄色土を版築状にたたきしめる。柱根径は平均約40cmと大きい。

Fig.48　S B241 掘立柱建物跡（1/60）

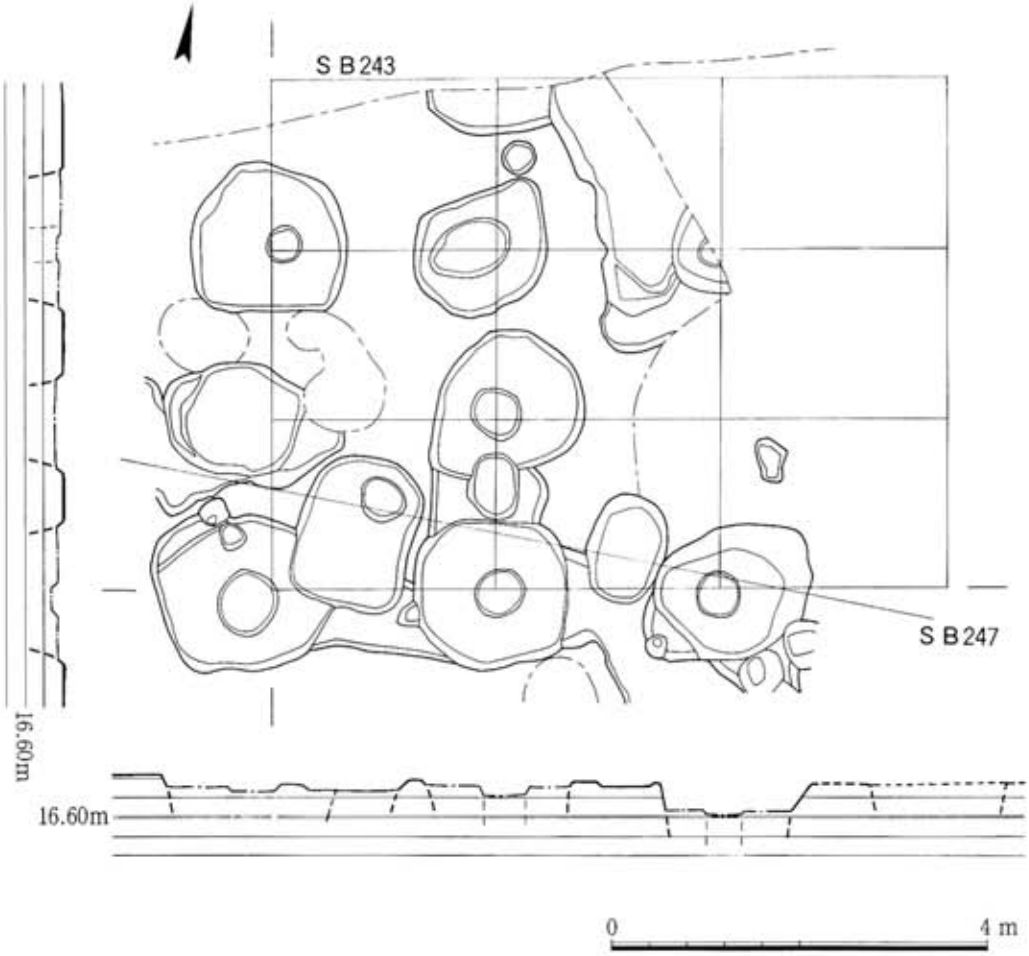


S B 242

構造 3 間×3 間 総柱東西棟（7.2m×5.55m）

柱間 桁2.4m（8 尺） 梁1.85m（6.1尺） **方位** N 8° 40'W

特徴 北側は大きく攪乱を受けて不明だが建物群の並びからみて 3 間×3 間。柱穴掘形は全体に不揃いであるが基本的には円形にちかい隅丸方形で、一辺（径）1.1m～1.5m。柱穴断面の断切りは行なわなかったが、黒色土と黄色土をたたきしめるものと思われる。柱根径は平均約40cmと大きい。



S B 243

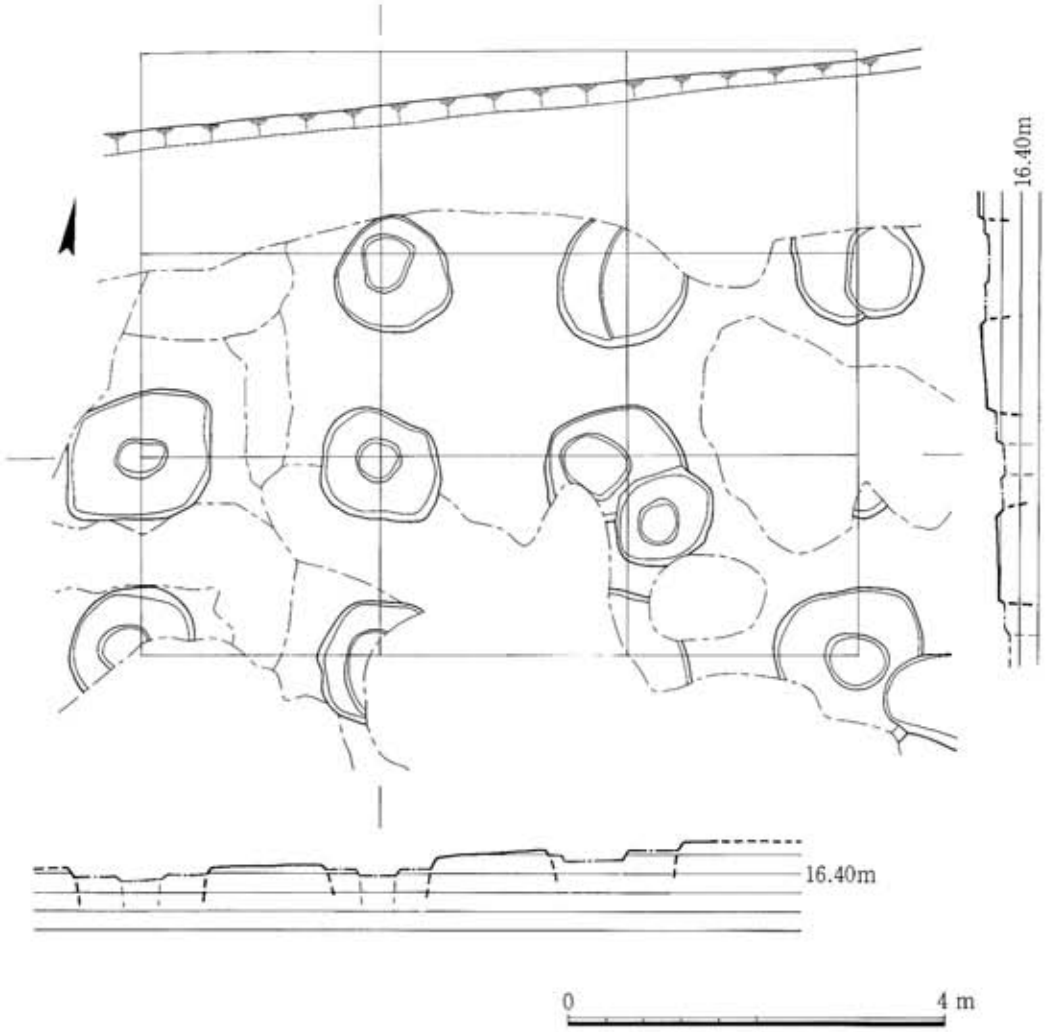
構造　3 間×3 間　総柱東西棟（7.2m×5.4m）

柱間　桁2.4m（8 尺）　梁1.8m（6 尺）

方位　N 8° 40'W

特徴　東側と北側に大きな攪乱を受けているがS B 242と並ぶ3 間×3 間。南側柱列がS B 247柱穴と切り合っており、攪乱のためやや問題は残るがS B 247より古いとみられる。柱穴掘形はやや不整形な隅丸方形で、埋土は掘り下げなかったが版築状であろう。柱根径は平均約40cmと大きい。

Fig.50　S B 243 掘立柱建物跡（1/80）



ＳＢ244

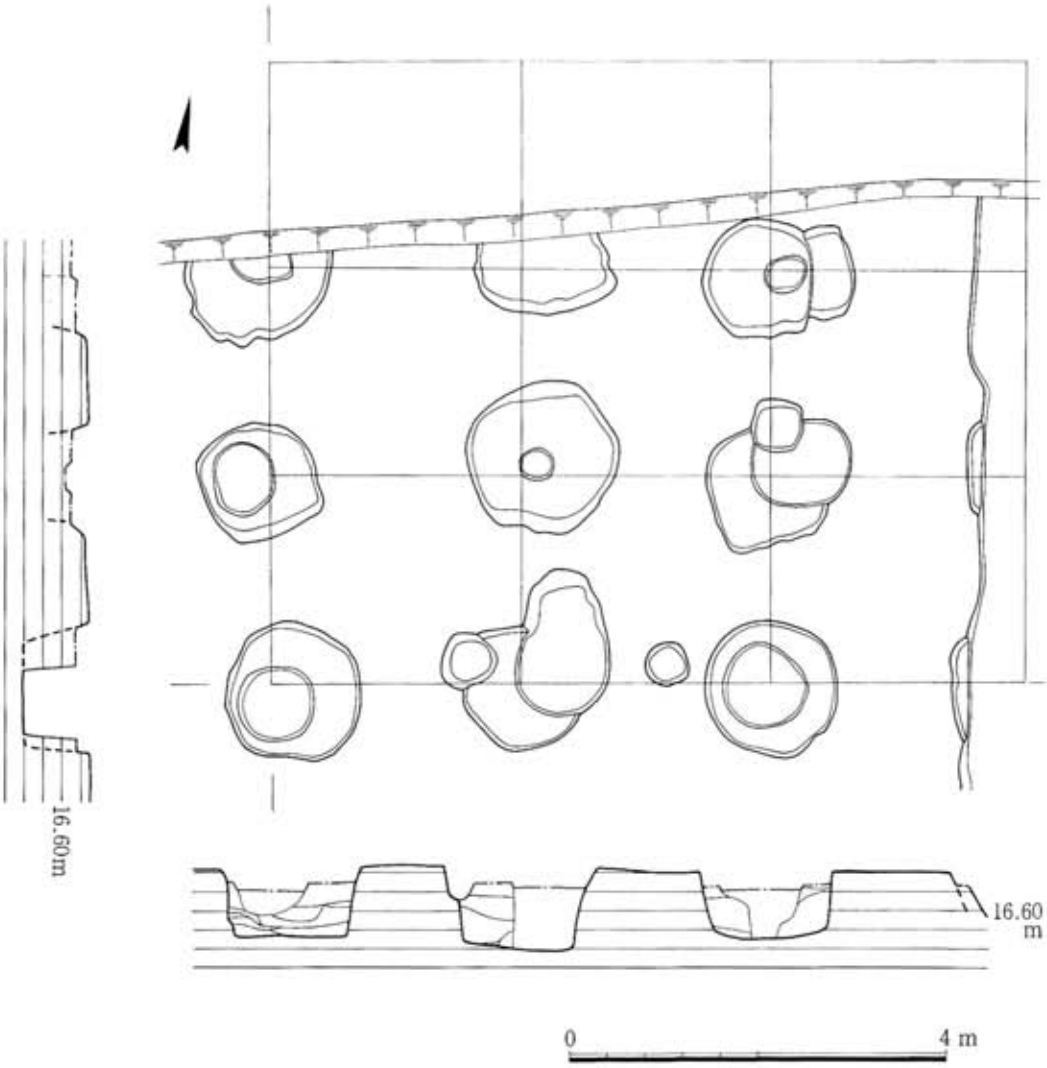
構造　３間×３間　総柱東西棟（7.74m×6.3m）

柱間　桁2.71m（９尺）　梁2.1m（７尺）

方位　Ｎ８°40'Ｗ

特徴　全体に攪乱が著しく不明な部分は多いが、ＳＢ245と並ぶ３間×３間とみてよいであろう。東南隅柱がＳＢ247と切り合っており、攪乱のためやや問題はあるがＳＢ247より古いとみられる。柱穴掘形は一辺（径）1.2m～1.5mほどの円形にちかいやや不揃いな隅丸方形で、埋土は版築状にたたきしめるものであろう。柱根径は平均約40cmと大きい。

Fig.51　ＳＢ244 掘立柱建物跡（1/80）



ＳＢ245

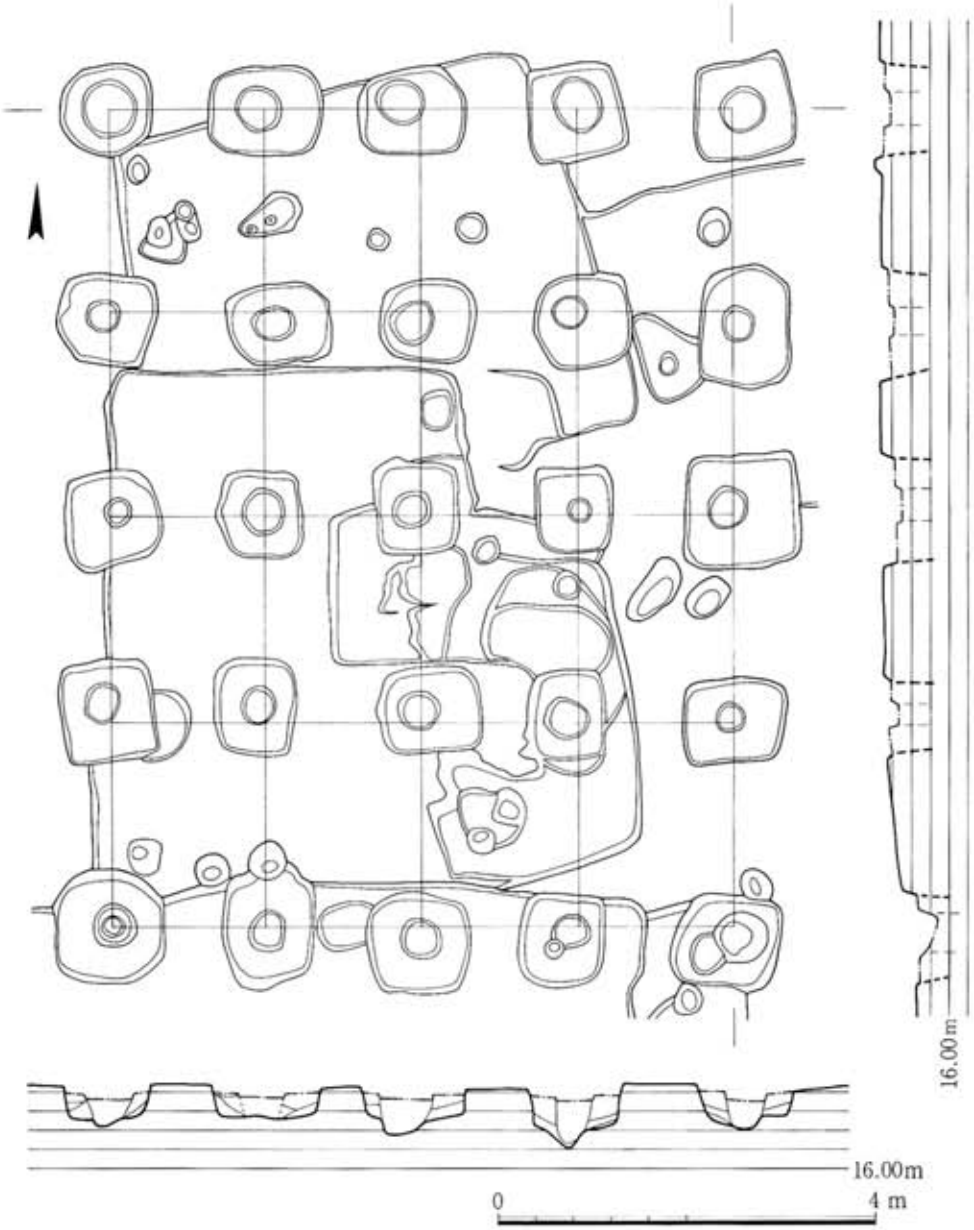
構造　３間×３間　総柱東西棟　(8.1m×6.6m)

柱間　桁2.7m（９尺）　梁2.2m（7.3尺）

方位　Ｎ８°40'Ｗ

特徴　北側は水路で荒され、東側はＳＤ208に切られているが、ＳＢ244と並ぶ３間×３間であろう。柱穴掘形は円形にちかい隅丸方形で一辺（径）1.2m～1.6m。埋土は黒色土と黄色土を版築状にたたきしめる。柱は抜かれているためか不明瞭だが径約40cmほどとみられる。

Fig.52　ＳＢ245 掘立柱建物跡（1/80）



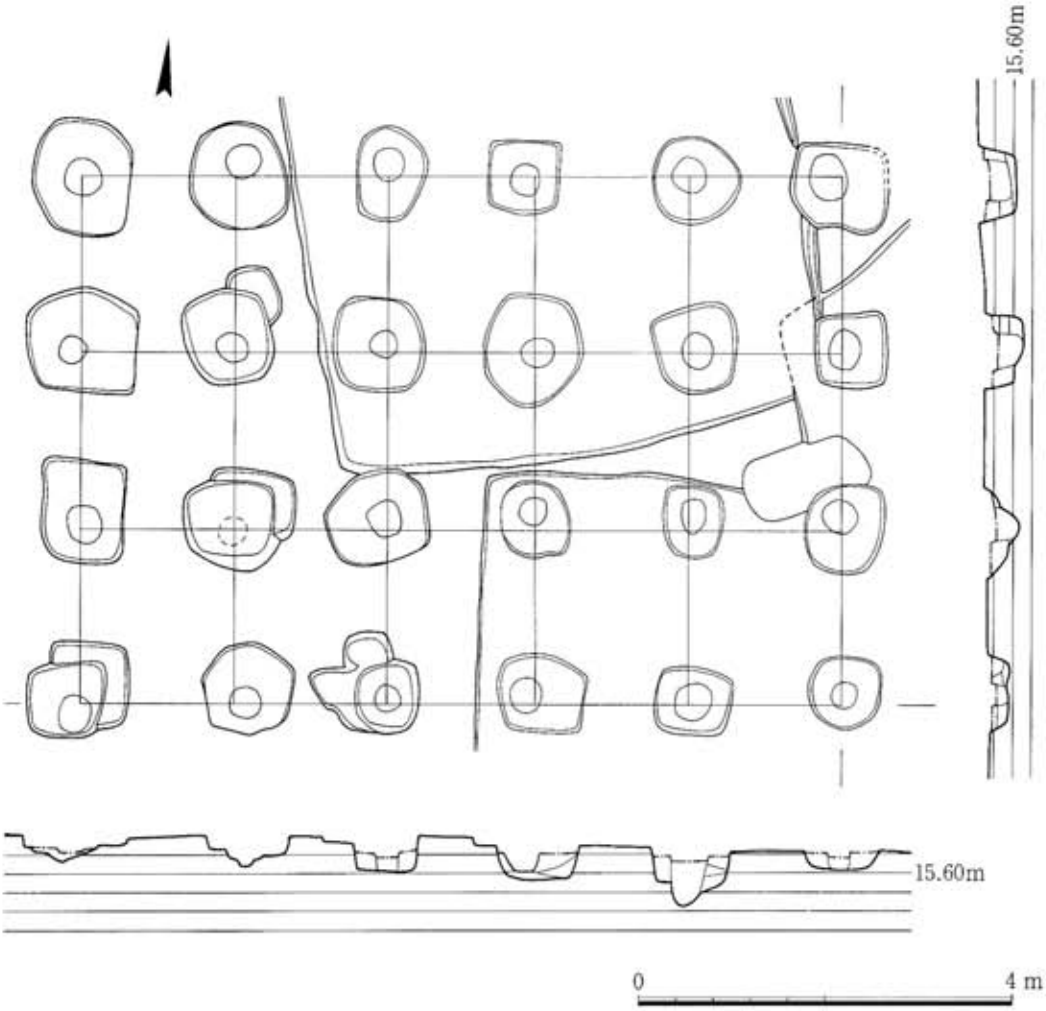
ＳＢ261

構造 ４間×４間 総柱南北棟（8.60m×6.60m）

柱間 桁2.15m（7.1尺） 梁1.65m（5.5尺） **方位** Ｎ１°10'Ｗ

特徴 弥生の竪穴住居群の上にあるが柱穴は明瞭に残っていた。掘形は一辺1.0m前後の方形で、埋土は黒色土と黄色土を版築状にたたきしめる。北妻部柱穴断面でみると柱は先が尖り気味のものを使用したらしい。径は平均約40cmである。

Fig.53 ＳＢ261 掘立柱建物跡（1/80）



ＳＢ007

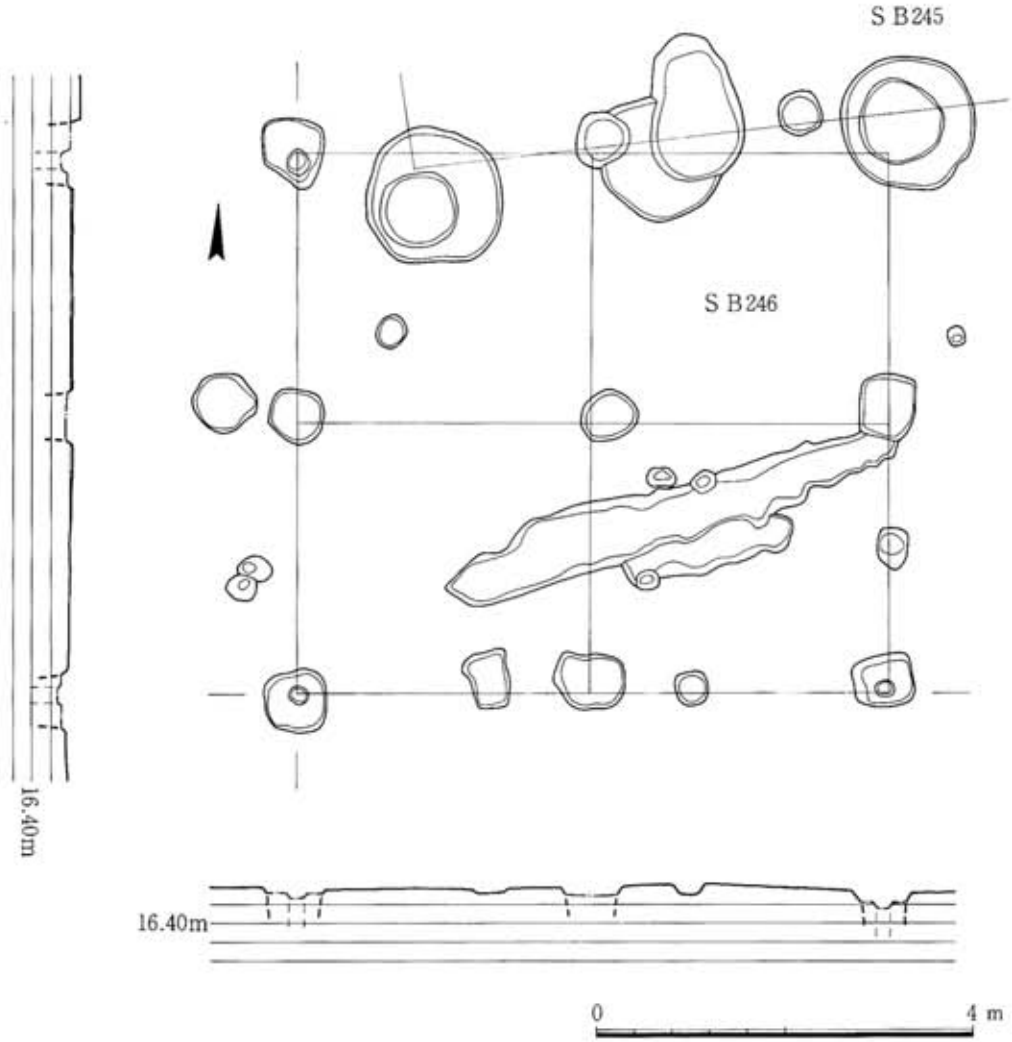
構造　５間×３間　総柱東西棟（8.16m×5.64m）

柱間　桁1.63m（5.4尺）　梁1.88m（6.3尺）

方位　Ｎ３°50'Ｗ

特徴　調査区の西南隅に離れて位置し、弥生の竪穴住居の上にのる。柱穴掘形はやや不整形で大小のある一辺0.7m～1.1mの隅丸方形で、東側の柱穴が小型となる傾向がみられる。全体として東側の同時期の建物群柱穴より一回り小さい。埋土は黒色土を主に黄色土を版築状に交える。柱根径は平均30cmである。

Fig.54　ＳＢ007 掘立柱建物跡（1/60）



S B246

構造 2間×2間 総柱東西棟（6.3m×5.7m）

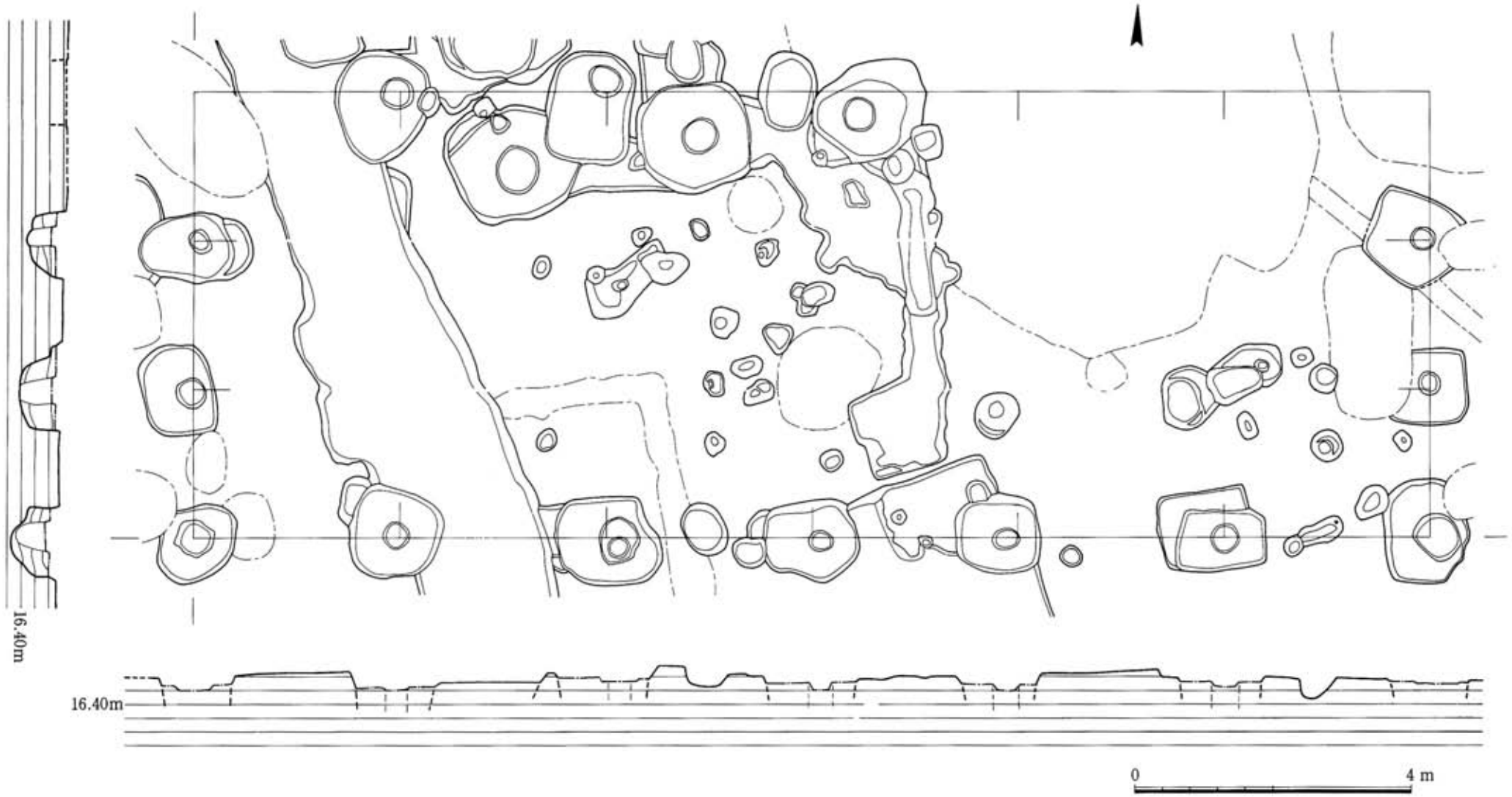
柱間 桁2.1m（7尺） 梁1.9m（6.3尺）

方位 N 1° 00'W

特徴 北側柱列がS B245を切る。建物は東西がわずかに長く、柱穴は掘形が一辺0.6m前後の方形で小型、柱根径は約20cmにすぎない。

Fig.55 S B246 掘立柱建物跡（1/80）

Fig.56　S B260 掘立柱建物跡(1/80)



ＳＢ260

構造　６間×３間　南北棟（14.70m×6.50m）
柱間　桁2.45m（8.2尺）、梁2.17m（7.2尺）
方位　Ｎ０°40′W
特徴　ＳＤ208東脇に並行する。北側は別の構造不明な柱建物と切り合うらしく、また南側は弥生の掘立柱建物を切る。柱穴掘形は一辺1.1m前後の方形で埋土は黒色土を主に黄色土を交えて固める。柱根径は平均約30cmである。

ＳＢ247

構造　６間×３間　東西棟（18.09m×6.48m）
柱間　桁3.01m（10尺）　梁2.16m（7.2尺）
方位　Ｎ０°40′W
特徴　ＳＢ247を切るとみられる。北側柱列は攪乱が著しいが６間×３間とみてよいであろう。掘形はやや不揃いな一辺1.2m前後の隅丸方形で埋土は黒色土と黄色土を版築状に固める。柱根径は平均約30cmである。

Fig.57　ＳＢ247 掘立柱建物跡（1/80）

ＳＸ248

構造 柵列　４間以上（11.30ｍ以上）

柱間 １間2.83ｍ（9.4尺）

方位 N83°W

特徴 東側はこれ以上伸びないが、西側はなお数間伸びるかもしれない。柱穴は径約0.6ｍの小型円形で黒色土がつまる。方位はＳＢ242ほか北辺に並ぶ倉庫建物群にほぼ一致しており、それに関係する施設とみられる。

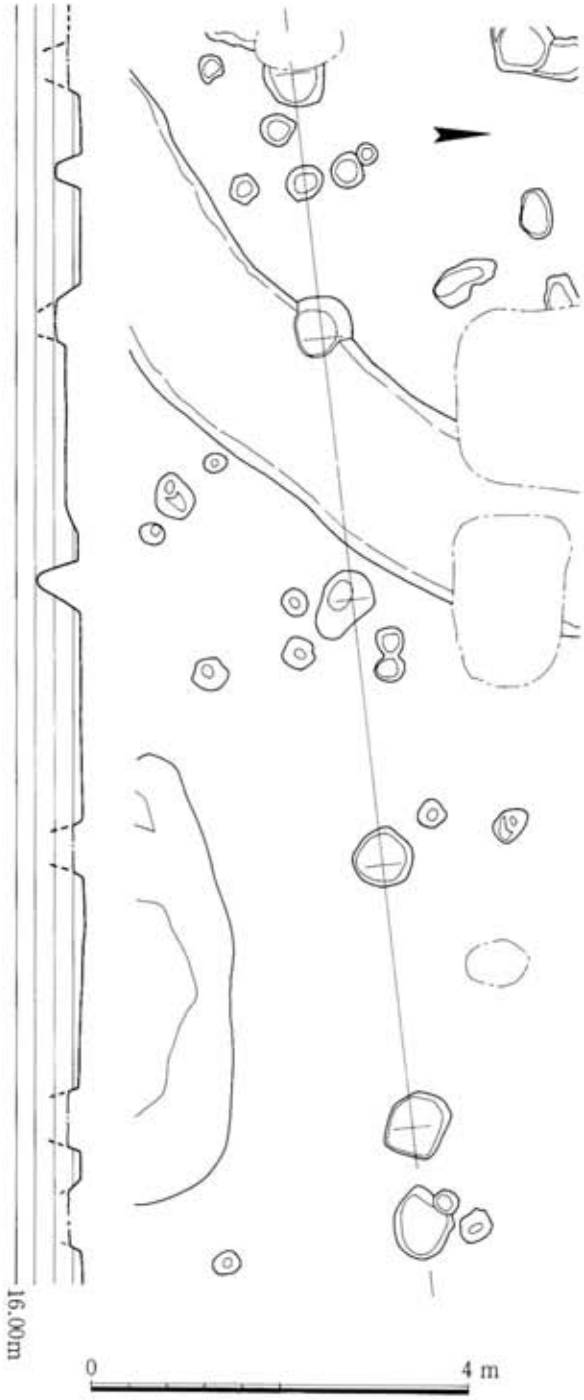


Fig.58　ＳＸ248柵（1/80）

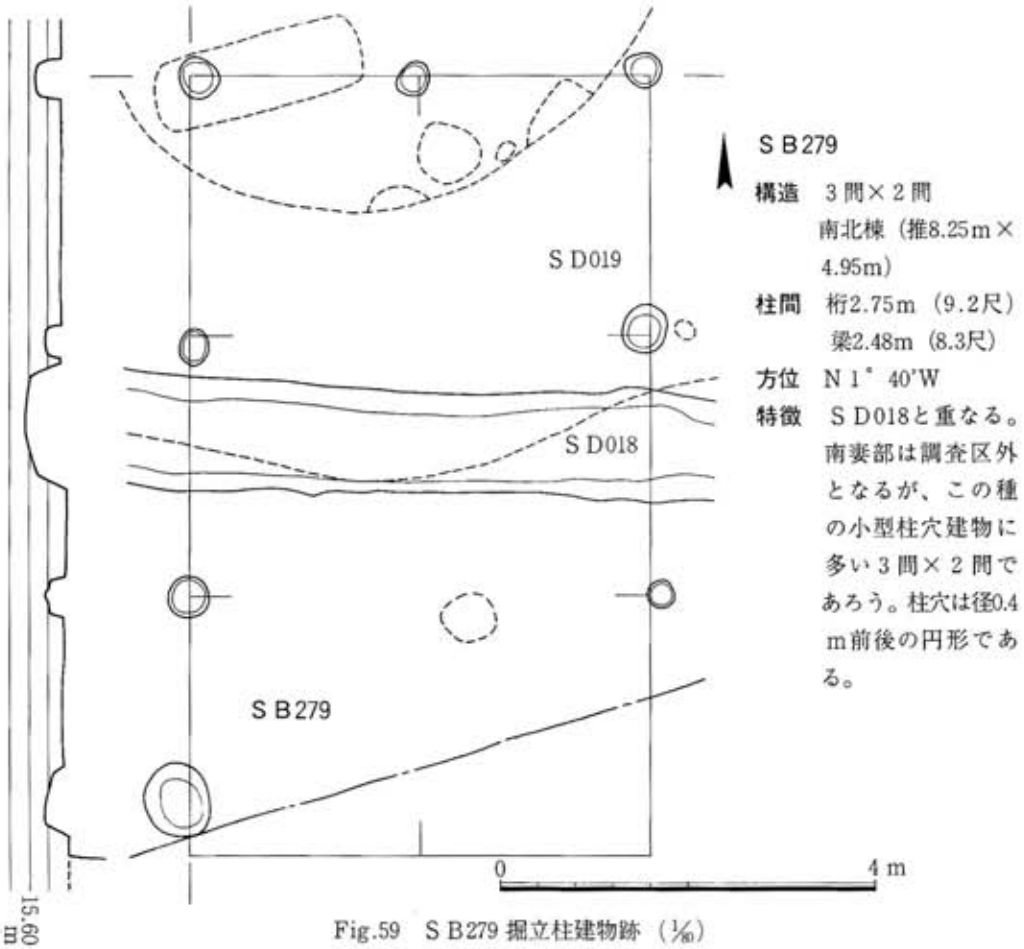


Fig.59　S B279 掘立柱建物跡（1/80）

(3)　土壙

S B260の東側で廃棄壙とみられる土壙3基を検出した（Fig.60, P L46）。

S K232は2.3m×1.25mの東西に長い楕円形で、深さ約0.6m。壙底は平坦で、壁はこれと稜をなしてとくに南北側が急に立ち上がる。埋土は暗褐色土および黒褐色土を主に自然な堆積を示し、若干の須恵器片が出土した。

S K235は平面約3.4m×2.9m、深さ約1.0mの不整円形を呈する大きな掘り込みで、北側はS K234と切り合う。ただしこのS K235の場合、最初大型に掘り込まれたあと、埋没するまでの途中に数回別の掘り込みがなされていることは、南側壙底の状況からわかる。S K234も実際はこの数回の掘り込みのうちの1回とすべきであろう。S K235は壙底をみるかぎりではS K232同様東西に長く、南側が斜めに削り上がっている。埋土は黒色土および褐色土を主にレンズ状の自然な堆積を示している。

また同時期の出土遺物は須恵器片若干数と釘1点にすぎず、したがって少なくとも土器の廃棄を目的とした土壙ではない。時期はいずれも8世紀後半と推定する。

Fig.60 S K 232 ・ S K 234 ・ S K 235 土壙（1/80）

Ⅲ 遺 物

弥生後期の土器が圧倒的に多く、しかも膨大である。時期別には、縄文時代は石器数点があるにすぎず、弥生時代では多量の土器のほか鉄器・石器・鏡等が豊富に出土した。古墳時代および奈良・平安時代の遺物は奈良時代を中心に須恵器・土師器等がみられるが、量は少ない。

なお、昭和52年度の調査になる調査区西端で、ＳＤ019濠を中心に多量に出土した土器および鉄器・小型仿製鏡等については『肥前国府跡Ⅰ』佐賀県教育委員会1978で採録しているので、ここでは取りあげない。

1 縄 文 時 代

(1) 石器

昭和52年度の調査では旧石器時代のナイフ型石器が出土したが、57・58年度の調査では該期

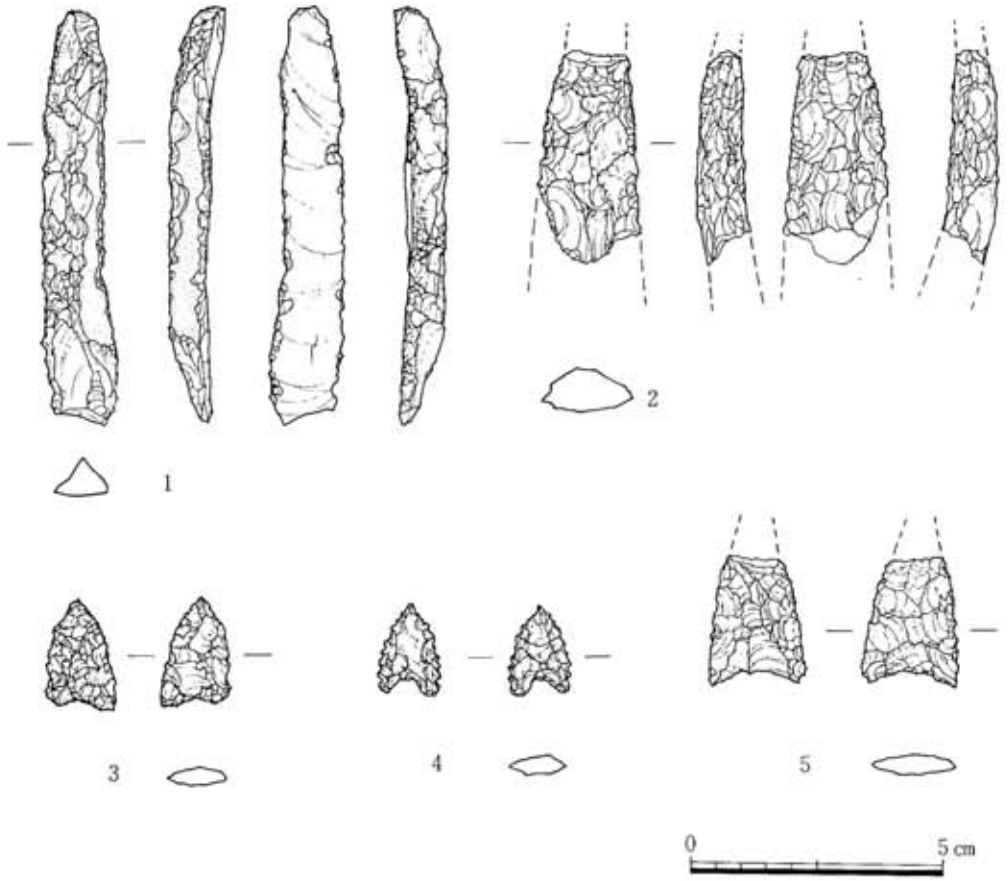


Fig.61 打製石器（⅔）

の石器は出土していない。

1～5はいずれも検出面から出土した（Fig.61, PL70）。このうち1および2の掻器は縄文後期あるいは晩期に属すと推定する。3～5の石鏃は縄文後期以降、弥生時代とすべき可能性もあるが、打製石器としてこの項にとりあえず含めておく。

1掻器は黒曜石製で長さ8.1cm、幅約1.6cm。断面三角形で両縁に細かな二次調整により刃部をつくる。2掻器は黒曜石製で先端と基部を欠損する。尖頭器状に厚味があり、両縁に刃部をつくる。

石鏃は3が黒曜石製、4・5は安山岩製、4はていねいな調整による小型品で基部の抉りがやや深く、4・5は浅い凹基である。

2 弥生時代

土器・石器・鉄器・鏡・玉類がみられる。

圧倒的に多量なのは土器で、とくにSD019からはおよそ環濠集落の形成から廃絶に至るまでの時期を中心とする生活用土器が膨大に出土し、場所によっては埋土の量とあまりかわらないほど密に土器片が詰まっていた。完形品もしくは完形ちかくに復元できたものだけでもその数は500点以上にのぼる。ただしこのSD019の調査は埋土の掘り下げが調査の最終段階にあたり、すぐ脇では既に発注された盛土工事が急ピッチで進む危険な状況下で早急にとり行なわざるをえなかった。そのため、埋土掘り下げは遺物の包含量が著しい南辺環濠の西半部と東辺環濠に限り、また層位による遺物の取り上げも概略上層と下層、あるいは上位と下位を分けるにとどまった。遺物の出土量はSD019に次いでSD207、外濠改修後の東辺SD205が多い。竪穴住居跡出土遺物は総量としては比較的多いが、遺構数に比べるとさほどの量ではない。削平が著しかったことによるものであろう。

土器は弥生後期、とくにその後半～終末の時期を中心とする。前・中期の土器は全く見当たらなかった。前述のとおり大部分はSD019環濠出土の生活用土器で、当時の生活に用いられたあらゆる器種・器形を網羅するといっても過言ではないであろう。甕・壺・鉢の類いが主体でとくに器台・支脚の厚手小型品には無傷の完形で遺存するものが多い。また調査当時、注目された遺物に幾何学的文様を描いた器台等がある。埋葬関係の土器は甕棺が遺構数で3基分と環濠埋土出土の数個体分、それに石蓋土壙墓の供献土器1点があるにすぎない。そのほかに投弾その他が数点ある。

鉄器は農工具類を中心にSD019環濠および竪穴住居跡などから比較的豊富に出土した。殆どは破損して廃棄されたものであろうが、なかには多少の修理で再生可能と思われるものまで含まれており、弥生後期終末頃の鉄器供給量は一般に予想される以上のものがあったのではな

いかと思わせる程である。これには鋳造鉄斧の可能性のある１点が含まれており、舶載品であるかどうか問題となる。

石器は石包丁と砥石が主で、それに紡錘車が１点、環濠および竪穴住居跡から出土した。

鏡は竪穴住居跡の１棟から完形の小型仿製鏡２面が遺棄されたような状態で出土した。弥生時代の鏡にはとかく神性がつきまとって解釈されるが、このような出土状況はその用途に問題を投げかけるものである。仿製鏡はほかにＳＤ019環濠からも破片が出土しており、また以前昭和52年度の調査でも同濠から完形の小型仿製鏡１面と舶載鏡片１点が出土している。

その他、玉類はガラス小玉、ガラス管玉、めのう丸玉が環濠および竪穴住居跡の埋土中から出土した。ただし点数はあまり多くなく、一つの遺構からまとまった状態での出土ではない。

以下、石器・土器・鉄器・玉類の順に説明する。

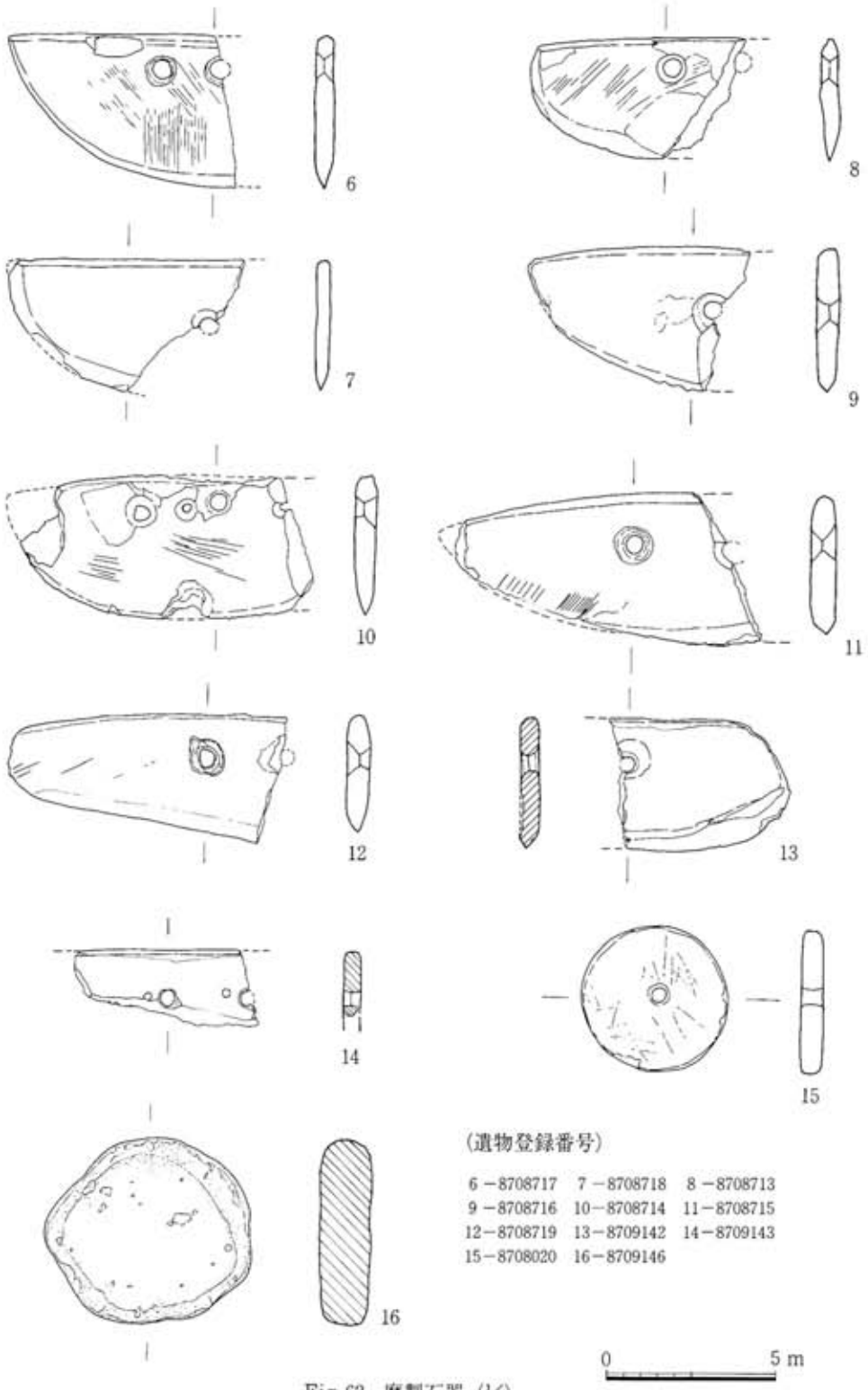
(1) 石器

石包丁９点・砥石６点・紡錘車１点・その他を図示する（Fig.62・63, ＰＬ.70）。

６～14は石包丁である。すべて割れており、完形品はない。６・７は脊が直線の半月刃。石材は灰色の砂岩で、それぞれ検出面およびＳＢ267から出土した。８も脊は直線であるが、側端は方形気味で全体に調整の粗さが目立つ。立岩産のあづき色をした輝緑凝灰岩製である。ＳＢ267出土。９は脊がやや湾曲する半月刃、石材は輝緑凝灰岩である。ＳＤ019出土。10は脊がやや湾曲する半月刃で調整は粗く、右端が欠損したあと紐孔を左に寄せて穿け直し再利用している。輝緑凝灰岩製でＳＤ208埋土出土。11は脊が湾曲する半月刃で、幅が広い。青灰色の変成岩でＳＢ293出土。12は石鎌の再利用かと思われる。緑泥片岩製でＳＤ217出土。13は側端を方形気味に粗く仕上げた直線刃で砂岩製。ＳＤ019出土。14は脊が直線で、紐孔は最初の穿孔を途中で止めて仕直している。砂岩製でＳＤ217出土。

15は紡錘車、径4.3cm、厚さ0.6cm、口径0.5cm。両面および周縁とも平滑に研磨している。蛇紋岩製でＳＤ019から出土した。16は用途不明の円板状石製品。径約5.5cm、厚さ約1.6cm。多孔性の火成岩で、検出面出土。すり石にあたるものか。

17～23は砥石である。いずれも破損しており、大型と小型とがある。17が粘板岩である以外は砂岩を使用している。17は長さ21.9cmで、すり減った使用面が部分的に遺存する。４面使用。ＳＢ291出土。18は１面のみを使用し、粗い使用痕が斜めにはしる。長さ12.2cm。ＳＤ019出土。19は14.2cm×6.2cm、厚さ4.0cmの長方形で主に１面のみ使用する。使用面上には長軸に沿って幅約0.8cm、長さ約９cmの浅い溝状研磨痕がある。ＳＤ019出土。20は元の形状は不明だが、台形上辺以外のすべての面に使用痕がある。ＳＤ019出土。21～23は小型の柱状研石。21は主に平部片面使用でＳＢ273出土。22は３面使用でＳＢ266出土。23は断面三角形の３面使用でＳＢ293から出土した。



（遺物登録番号）

6－8708717　7－8708718　8－8708713
9－8708716　10－8708714　11－8708715
12－8709719　13－8709142　14－8709143
15－8708020　16－8709146

Fig.62　磨製石器（½）

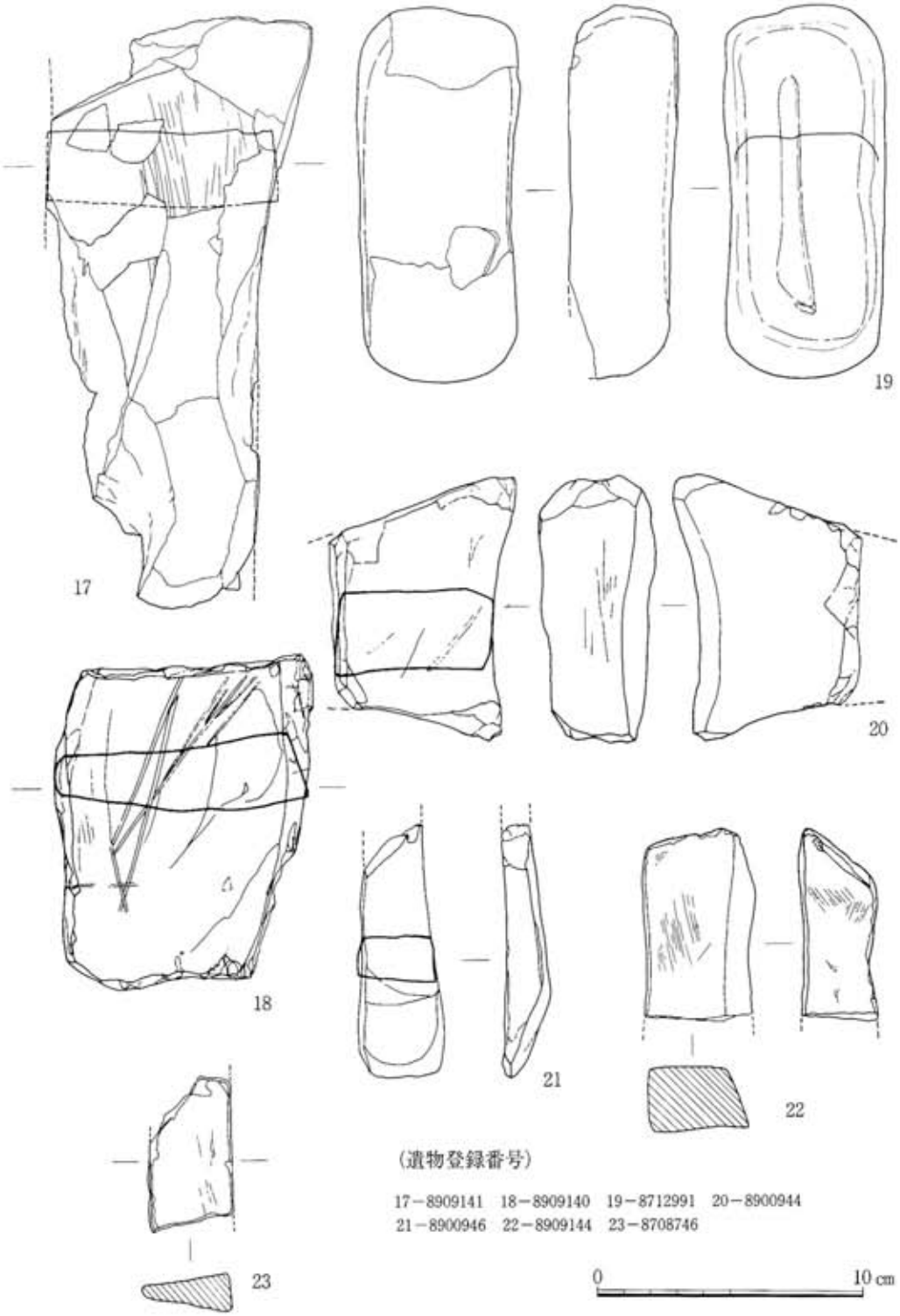

17
18
19
20
21
22
23
(遺物登録番号)
17－8909141　18－8909140　19－8712991　20－8900944
21－8900946　22－8909144　23－8708746
0
10 cm

Fig.63　砥石（2/5）

(2) 土器

出土した土器は極めて多量である。とくに外濠ＳＤ019からが多く出土量の大部分を占める。内濠ＳＤ207は完掘できなかったが、断面試掘溝の状況からみるとＳＤ019ほどではない。またＳＤ019東辺濠を改修したＳＤ204からの土器出土量は比較的少ない。竪穴住居跡の場合、その大部分が著しく削平を被っていたため数のわりには全体の出土量は少なく、ほかには甕棺数基その他がある。

調査後の整理で実測した土器の個体数は約1,950点、そのうち完形および完形にちかくまで復元しえたものだけでも500点をこえる。ここでは紙幅の都合上とうてい全てを網羅するわけにはいかないので、完形品を中心に、かつ土器編年上重要と思われる資料を図示しておく。ただし全体の編年については「総括」の章でまとめることとし、ここでは器種ごとの分類を主に概要を述べるにとどめる。

資料の図示方法はまず甕棺を挙げ、次に圧倒的に多量な環濠出土土器すなわちＳＤ019およびＳＤ204、ＳＤ207出土土器を一括してその中で器種ごとの分類を行なう。最後に竪穴住居跡等出土土器のうち器種の供伴関係が知られる比較的多量の出土をみた遺構を中心に、遺構ごとの一括資料を図示する（Fig.64～97，ＰＬ47～69）。また個々の資料の説明はTab, 3に述べるところである。ＳＤ019およびＳＤ204環濠出土土器については本来、遺構・層位を分けるべきであろうが、ＳＤ019東辺のみＳＤ204と切り合いの先後関係があるといっても全体としては出土する土器の時期はほぼ並行する。しかも「総括」で詳しく述べるように、ＳＤ019南辺では埋土上層と下層で土器の様相に一定の傾向はあるものの、おそらく濠の掘直しが行なわれた結果の混合であろう、それが截然とした違いとして現われないばかりか土器形式の新古が明らかに逆転している場合もあるので、上・下の差にそのまま依処するわけにはいかない。したがってここでは、とりあえず両濠の土器を一括しておき、ＳＤ019東辺とＳＤ204出土土器の先後関係および層位等にみる土器の様相は「総括」で改めて補足するつもりである。なお、表の中で上層と下層とを区分表記しているのは部分的には埋土層位の違いを示す地区もあるが、多くは土層が不明確であるためあくまで埋土上半と下半を遺物取り上げの際に便宜上区分したにすぎないものであることを断わっておく。

さて、図示した土器を概観すると、まず甕棺は後期中頃～後期終末にかかる時期のものであるが、格別墓地を形成するほどの数ではないので集落との関係ではあまり問題にならない。環濠出土土器では後期中頃～後期終末にわたる膨大な資料をえたが、その主体は後期後半～後期終末にある。これは集落の形成・変遷に関わるもので、後期後半に二重環濠が掘られ、その後何らかの事情でＳＤ019の東辺が改修されてＳＤ204となり、後期終末まで機能したことを示すものである。後期中頃の土器はあっても量が少なく、他に後期前半まで遡る竪穴住居跡もあることからみて、おそらく環濠掘削間もない頃の流れ込みであろう。器種は甕・壺・高坏・鉢・

器台・支脚の６種を基本とし、当時の生活に使用されたあらゆる器種・器形が出揃っている。とくに主体を占めるのが甕と壺であることは当然として、案外多いのが鉢である。しかも鉢の場合は精製から粗製まで、あるいは大小きわめて多彩な内容をもっており、弥生時代の食生活の中で人々が最も手にする機会の多い、いわば銘銘器としてあらゆる用途に形を変えていた実態を窺わせる。また、器台と支脚はいずれも丈夫な作りであるためよく残存しており、完形品の数でいえば甕・壺をしのぐ。特殊な遺物としては大型器台の中に弧帯文に類した線刻文様を描いたものが１点みられる。

竪穴住居跡ほか出土土器は既述のとおり器種の供伴関係と残存量が良好な遺構を選んで図示している。時期は後期前半～後期終末、すなわち後期に限られる。全体に量が少なく器種の全てがかかるわけではないが、環濠出土土器を中心に編年を考える際には器種の供伴関係の目安になるものである。

ａ）　甕棺

遺構が明らかなのは24・25・26であって、他の27～31は環濠埋土中から生活用土器と一緒に廃棄された状況で出土したものである。なお、ここでは図示していないが、昭和52年度の調査でも後期前半の三津式の特徴をもつＳＪ181甕棺墓を１基検出している。(Fig.64・65, ＰＬ47)。

24・25はＳＪ233甕棺墓のそれぞれ上甕と下甕である。ただし24は丸底の甕を使用するのに対し、25はわずかに平底の名残りをとどめる壺の口縁部を打ち欠いて使用している。いずれも内面には厚く丹が塗られている。時期は後期終末の前半であろう。ＳＪ233は環濠集落の中の主要な掘立柱建物とみられるＳＢ249と重複した位置関係にあり、その廃絶後であるとすればＳＢ249は環濠が掘られた後期後半にあたる時期の建物と考えるのが適当であることを示す。

26はＳＪ237甕棺墓で、やや不安定な平底を残す。三津式でも新しい段階のものであろう。

そのほかは27が後期後半の溝ＳＤ204上層から１点のみ出土している。口縁がく字に折れて頸部と胴部に各１条の突帯をめぐらせ胴部の張りがつよい、といった特徴は三津式の系統に属するものである。28～31はいずれも底部は丸底化して口縁部の屈曲が甘くなり、壺系統の31は別として他３点は胴部の張りを失なう。器面調整にはタタキ面痕がみられ、後期終末にあたる。

ｂ）　ＳＤ019・ＳＤ204出土土器

甕（Fig.66～71, ＰＬ48～52）

口縁部は、程度の違いはかなり大きいが、基本的に共通してく字形に折れる。大別して胴高が胴径より大きい長胴系Ａ類、長胴系台付甕Ｂ類、胴高が胴径以下のＣ類、そして庄内式の影響を受けたとみられるＣ類の４類に分け、さらに大型・中型・小型の別にそれぞれの中でⅠ・Ⅱ・Ⅲに細分する。

〈Ａ類〉　特に長胴で大型の甕をＡⅠ類、中型甕をＡⅡ類、小型甕をＡⅢ類とする。

ＡⅠ類として32～39を挙げておく。最も大型の33では長さ46cmをはかる。口縁部は屈曲が比

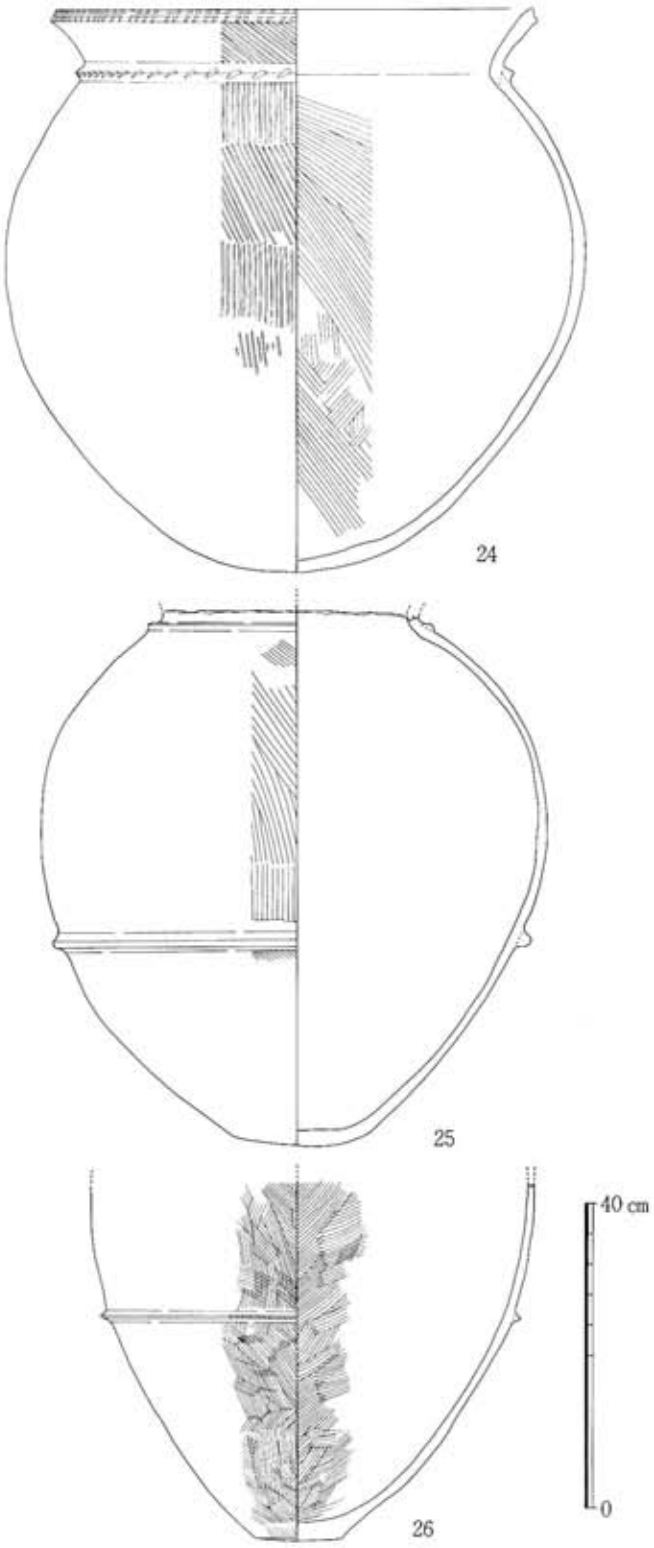


Fig.64 甕棺（1/10）

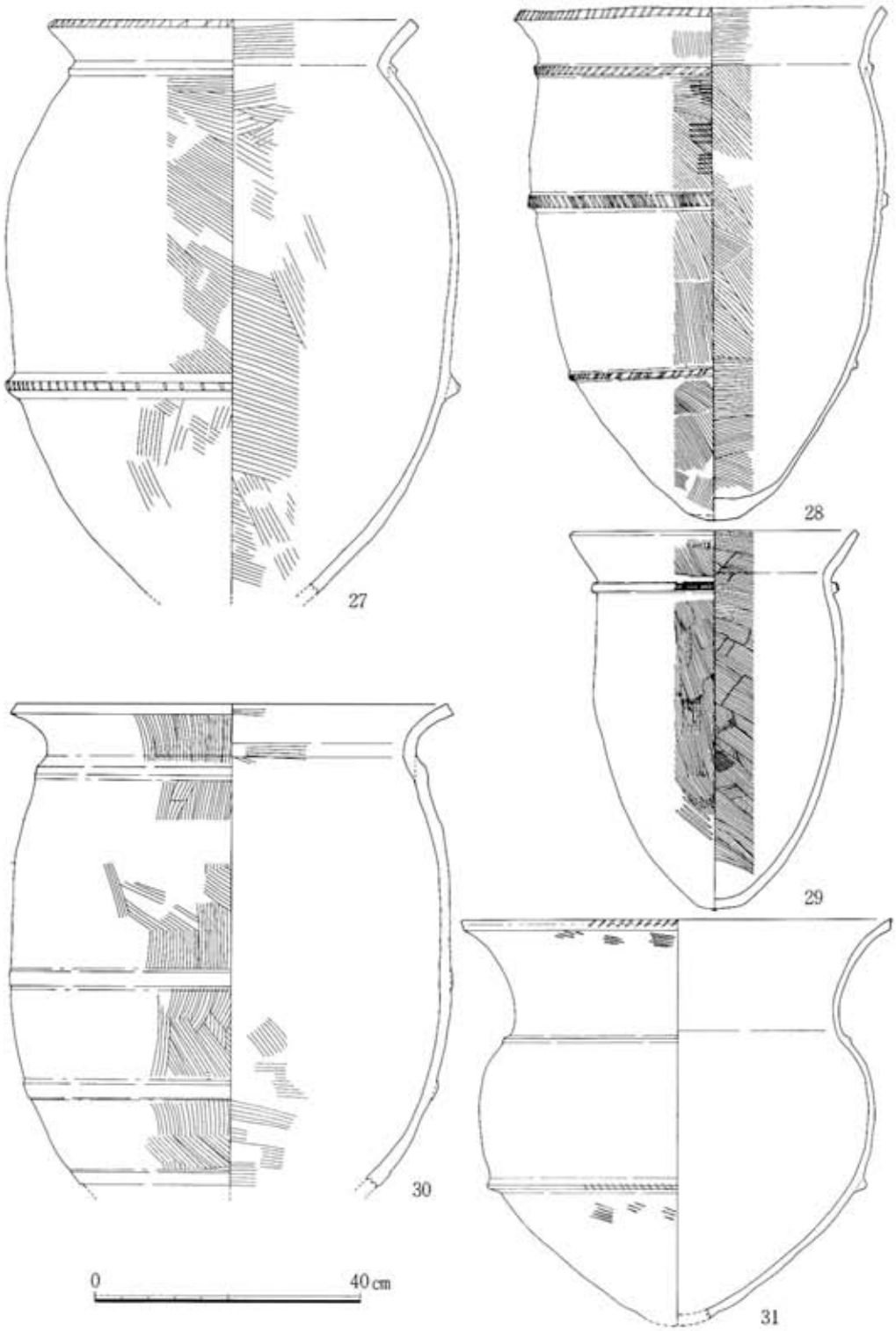


Fig.65　S D019　S D204 出土土器　甕棺（1/10）

較的明瞭で、35は著しく伸びる。胴部は最大径が中位にある場合が多く。口径よりやや大きい程度である。底部は33・34・36ではわずかに平底をとどめるが、32・37～39は丸底化し、35では尖り気味の丸底に焼成後の穿孔を施している。底部の違いは基本的に時期差によるものとみられ、丸底化したものにタタキ目を残す側が多い。大部分は大型のわりに器壁が薄く仕上げられている。

ＡⅡ類として40～54を挙げておく。ただしその中にはかなり大型で長胴化のきざしをみせる44・45などがあり、また胴部が下膨れの53のや直口気味の54のような特徴あるものも含むが、ここでは一括しておく。46～49は中位あるいは中位やや上で張り、退化傾向ながら平底を残しており、この中では古相をとどめるものである。

ＡⅢ類として55～59を挙げる。Ａ類の中で占める割合はごく少ない。これにも56のように平底の名残りを残すものから、他の丸底化したものまであって、時期差がみられる。

〈Ｂ類〉　台付甕のうち、中型をＢⅠ類、小型をＢⅡ類とする。出土量は少ない。

ＢⅠ類では61・64がある。ともに胴部は中位が張り低く開いた台部が付き、64では口縁部の端部がナデて内側にめくれる特徴をもつ。２点ともタタキ目はみえない。

ＢⅡ類では62・63・65・66がある。口縁部および胴部の特徴は様々であるが、胴部が下膨れ気味の66以外は台部がやや高い。62以外は胴外面に一部タタキ目を残す。

〈Ｃ類〉　短胴系甕のうち大型をＣⅠ類、小型をＣⅡ類とする。ＣⅡ類については実は壺および鉢との区別が困難な場合が多く、実際は明確な基準で分け難い。ただし、ここでは図示したＣⅡ類程度の胴径をもつ、く字口縁のものをＣⅠ類との関係で甕に含めることにし、同程度の法量でも直口のものは壺、あるいはＣⅡ類より明らかに小型のものは形態に応じ壺または鉢として区別する。

ＣⅠ類として67～70を挙げる。69は胴径30cmをはかり大型である。このうち67・68は底部にわずかながら平底の痕跡を残すが、69・70は丸底化が著しい。また68は口縁部口唇を刻目で飾り、69とともに口縁下に三角突帯をめぐらす。いずれもハケ目調整を主とし、タタキ目はみえず、70は胴外面下半に粗くヘラミガキを施している。

ＣⅡ類として71～76を挙げる。胴部は球状にちかく丸味をもつものが多い中で、72・73は胴部とあまりかわらない器厚で平底の痕跡を残す。口頸部のしまり方は様々で、71はとくにつよくしまって壺にちかく、また75は広口で口縁部は極端に短く鉢状である。73・76は外面一部にタタキ目を残してナデ仕上げである。

〈Ｄ類〉　60は尖底状で胴部は上位がつよく張り、口縁部は明確に屈曲して外反する。調整は胴部外面にハケ目のあとタタキ目を残し、口縁部と胴部内面はハケ目のあとナデて仕上げている。胴部のとくにプロポーションだけみれば庄内式といえるもので、その影響をつよく受けたものであろう。この１点以外は目にとまらず、量はごく少ないと思われる。

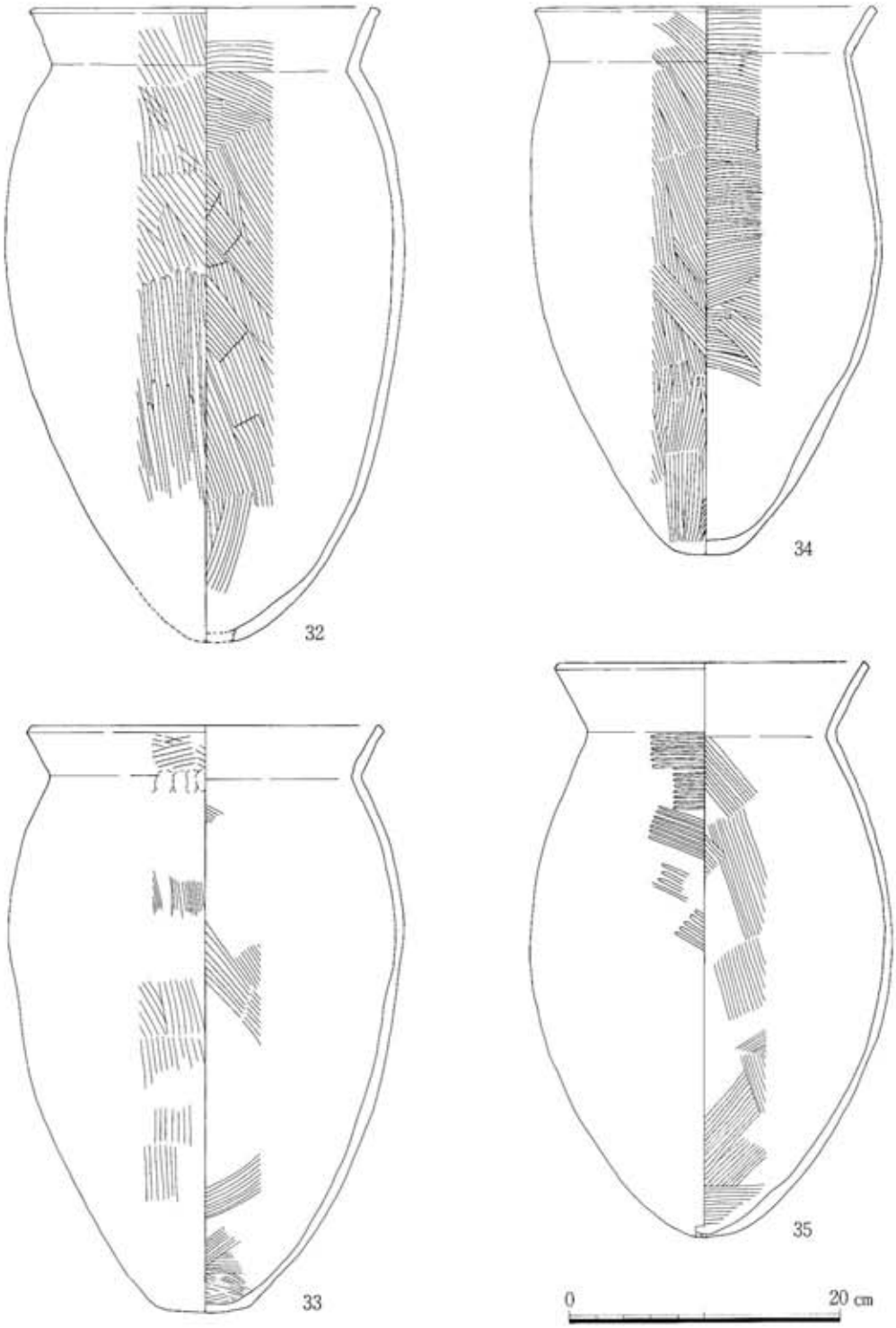


Fig.66　S D019・S D204 出土土器　甕（1/5）

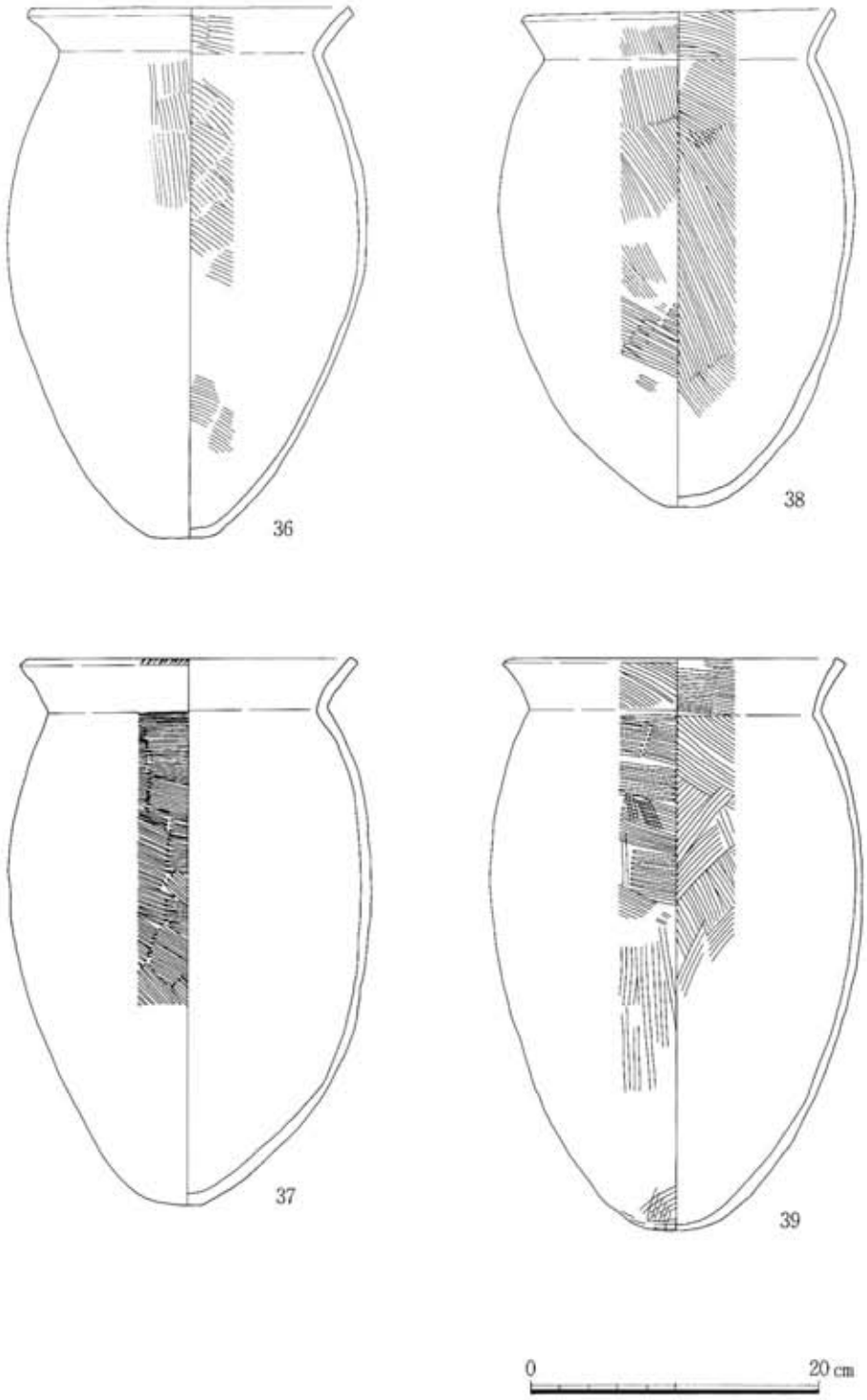


Fig.67　S D019・S D204 出土土器 3　甕（1/5）

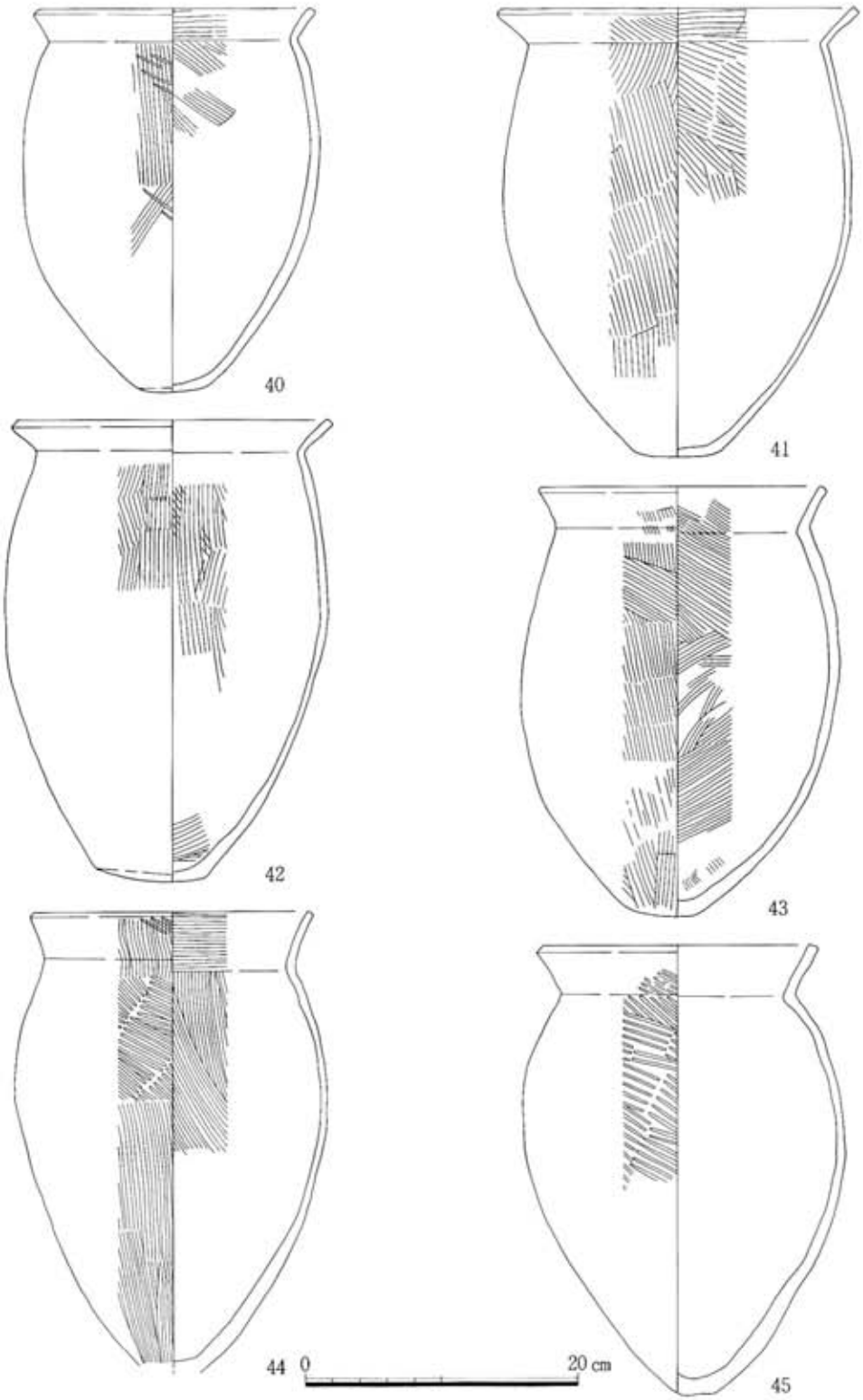


Fig. 68 SD019・SD204 出土土器 4 甕(1/5)

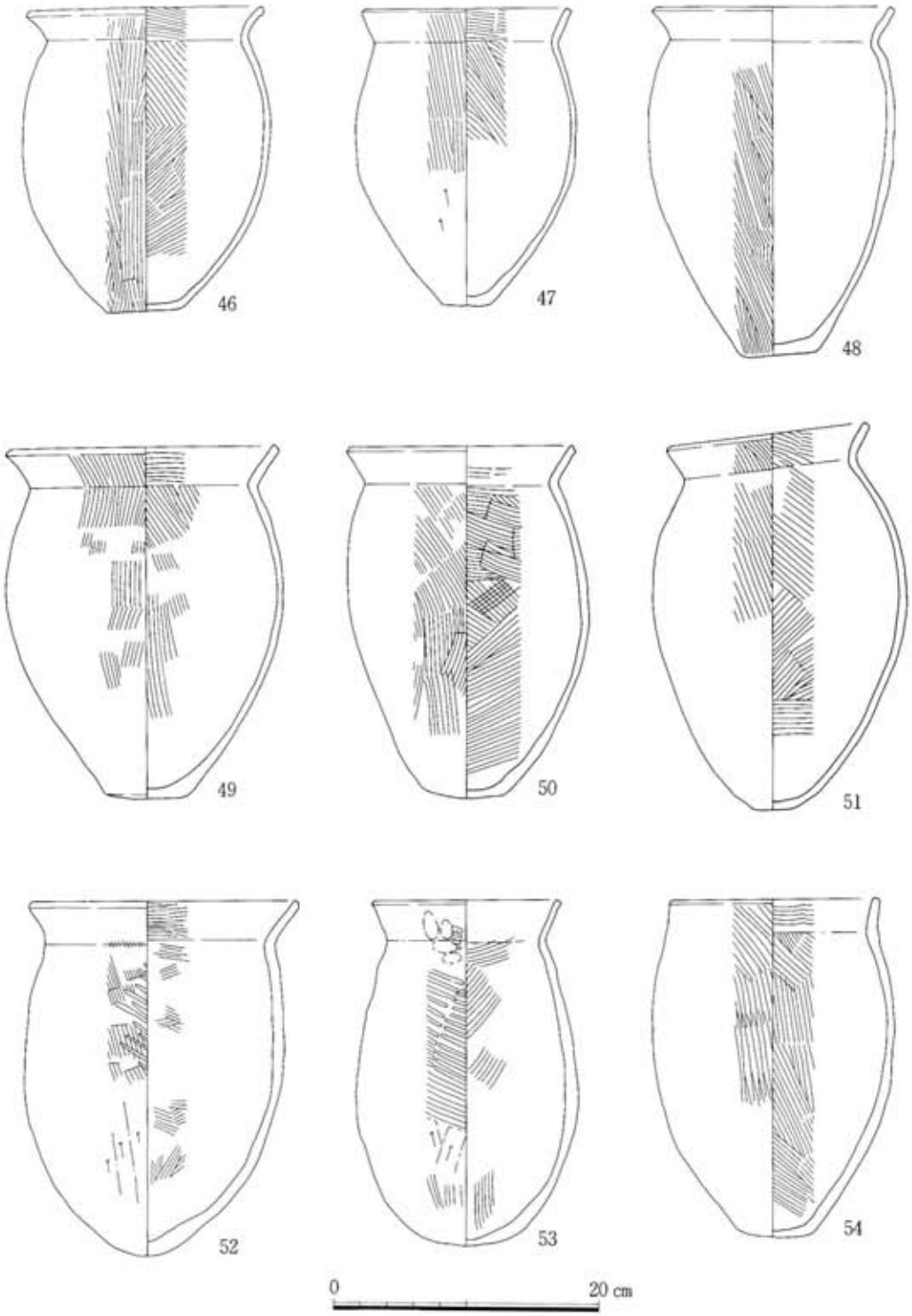


Fig.69 S D019・S D204 出土土器 5 甕（1/5）

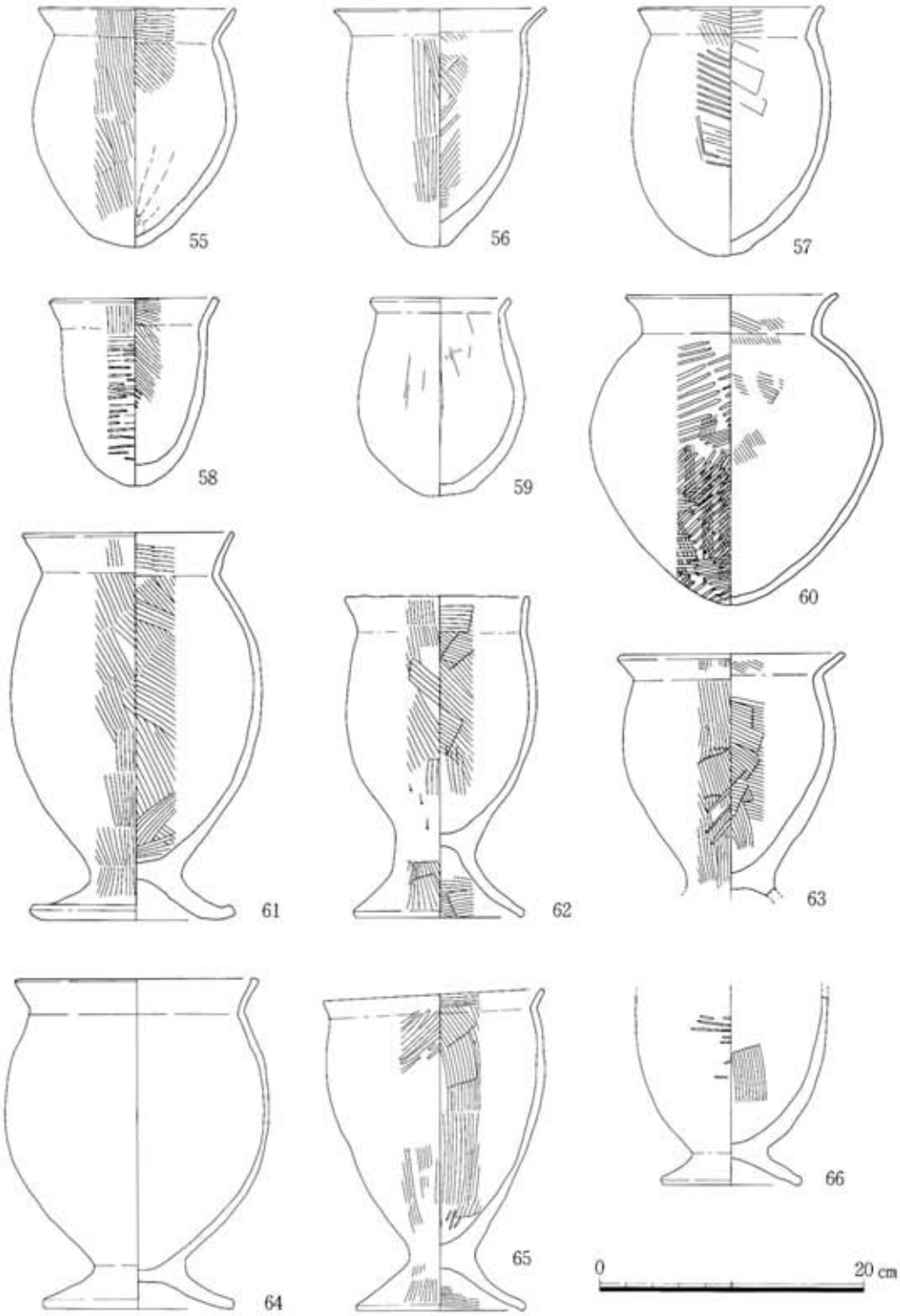


Fig.70　S D019・S D204 出土土器 6　甕（1/5）

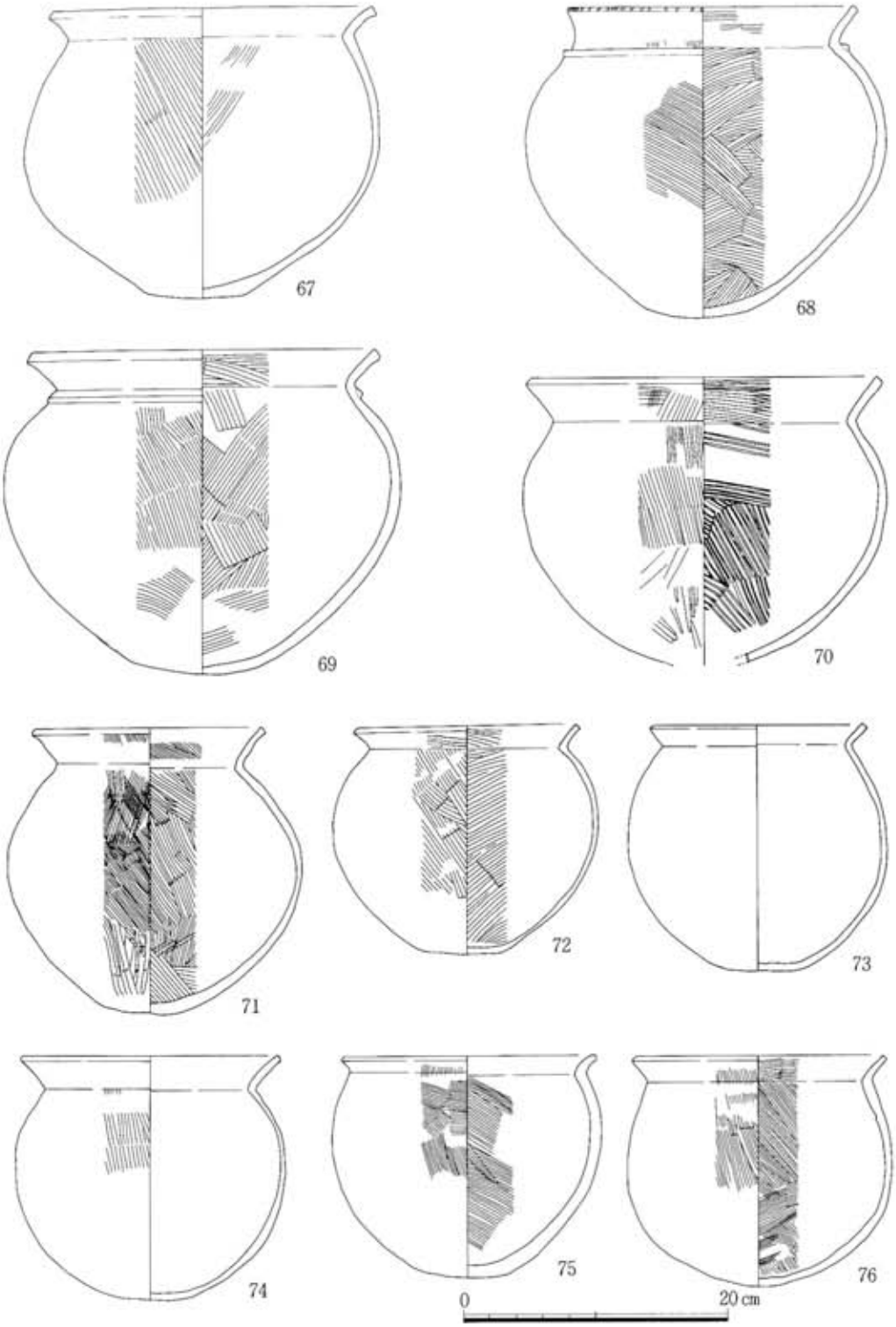


Fig.71 S D019・S D204 出土土器7 甕（1/5）

壺（Fig.72～77, ＰＬ53～59）

複合口縁壺をＡ類、口縁部が屈曲ないしは直立気味のものをＢ類とし法量によってＩ・Ⅱ・Ⅲに分け、さらにそれぞれの中で形態的なａ・ｂ・ｃ…に細分する。また、とくに小型の壺をＣ類とする。

〈Ａ類〉　77～90がある。口縁部は77のように袋状の名残りをとどめるものから85・86のようにつよく屈曲し、88・90では二重口縁状になる。頸部もこれに応じて直立外反から外反、さらに短い直立へと変化し、底部も平底から丸底への一定の流れがある。これらをＡＩ類とし後述する竪穴住居跡出土の古相をとどめる小型品をＡⅡ類とする。

〈Ｂ類〉　91～125・128～134の中で大小および器形の変化が実に多彩である。

ＢＩ類では胴部が球状にややつぶれて口縁部が大きく外反するＢＩａ類（91～93）、胴部がやや長く口縁部が屈曲外反するＢＩｂ類（94・95・97～100）、口頸部が直立気味のＢＩｃ類（101・102）の３類に細分する。ＢＩａ類は口唇部を刻目で飾る傾向がつよく、91は口縁部が明瞭に折れるのに対し92・93はそれがやや甘い。ＢＩｂ類では94が口唇部刻目、胴部は中位やや上が張り、底部は平底を痕跡程度残すものから丸底まで時期差をみせる。ＢＩｃ類は口頸部が直立気味につよくしまり、101が細身平底気味であるのに対し、102は球胴丸底といった違いがある。

ＢⅡ類では口縁部は屈曲外反するＢⅡａ類（103・104）と、口縁部直立のＢⅡｂ類（105）とがある。前者が平底の名残りをとどめるのに対し、後者は丸底である。量は少ない。

ＢⅢ類はきわめて変化が大きく、壺類の中では最も量が多い。細分すればキリがないが、ここでは以下のａ～ｈの８類に分けておく。まず胴部が比較的深いもののうち口縁部が長伸し平底のものをＢⅢａ類（108）、口縁部が屈曲外反するものをＢⅢｂ類（107・113～116）、口縁部が直立気味のものをＢⅢｃ類（106・109～112）とする。ＢⅢｂ・ＢⅢｃ類は丸底球状胴部で器壁の薄いものが多い。次に胴部が比較的浅いものでは口縁部が屈曲外反するＢⅢｄ類（122～124）、口縁部が直立気味のＢⅢｅ類（117～121）があり、いずれも丸底ないしは丸底気味で器壁の薄いものが多い。ＢⅢｂ類（125）はＢⅢｄ類に台が付いたものである。なお、ＢⅢｄ類およびＢⅢｅ類に類するが口径が胴径以上に開く形態のものは鉢に含めて別に扱った。そのほかにＢⅢ類では、ＢⅢｇ類（133・134）は胴部が極端に低くつぶれ丸底で口頸部が広口直立する精製品、ＢⅢｈ類（130～132）もこれに類した精製の長頸壺である。

〈Ｃ類〉　126～129を一括しておく。126はやや平底の痕跡を残し口頸部が長く、127は胴部がやや浅い丸底で、丁度それぞれに対応するかのようにさらに小型の126と127がある。

以上のＡ類・Ｂ類・Ｃ類を通じて平底から丸底への変化は共通した一定の流れである。形態上とくに問題があるのはＢⅢ類とした小型壺類で、その多彩かつ多量な状況は後述する小型鉢に似ており、法量の点で大型鉢ＢＩ類とは大きな隔たりがあることもあわせ考えると、本来貯蔵器であるとはいえ、日用食器にちかいものまで多様な用途のものをも含むと思われる。

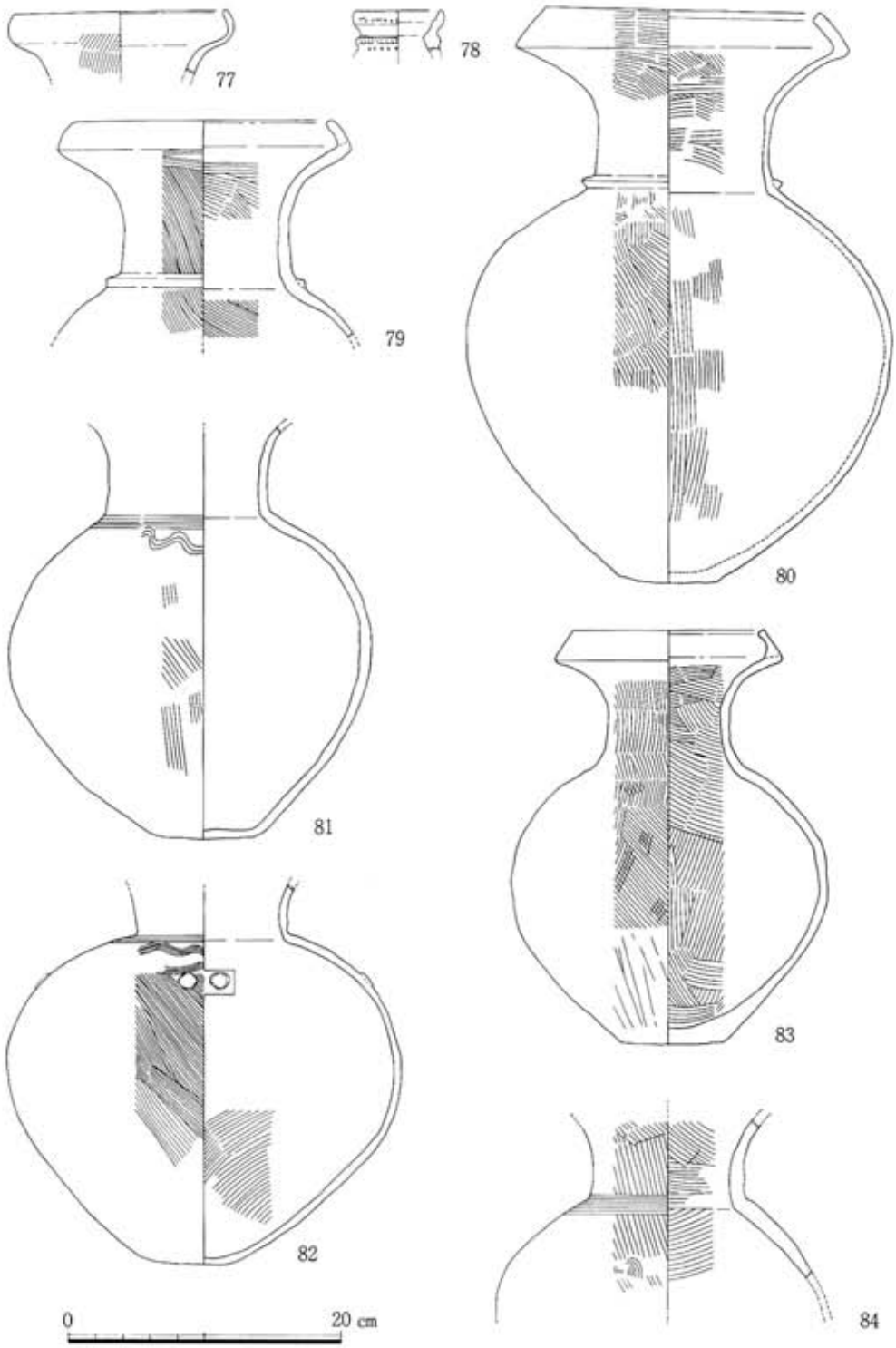


Fig.72 S D019・S D204 出土土器8 壺（1/5）

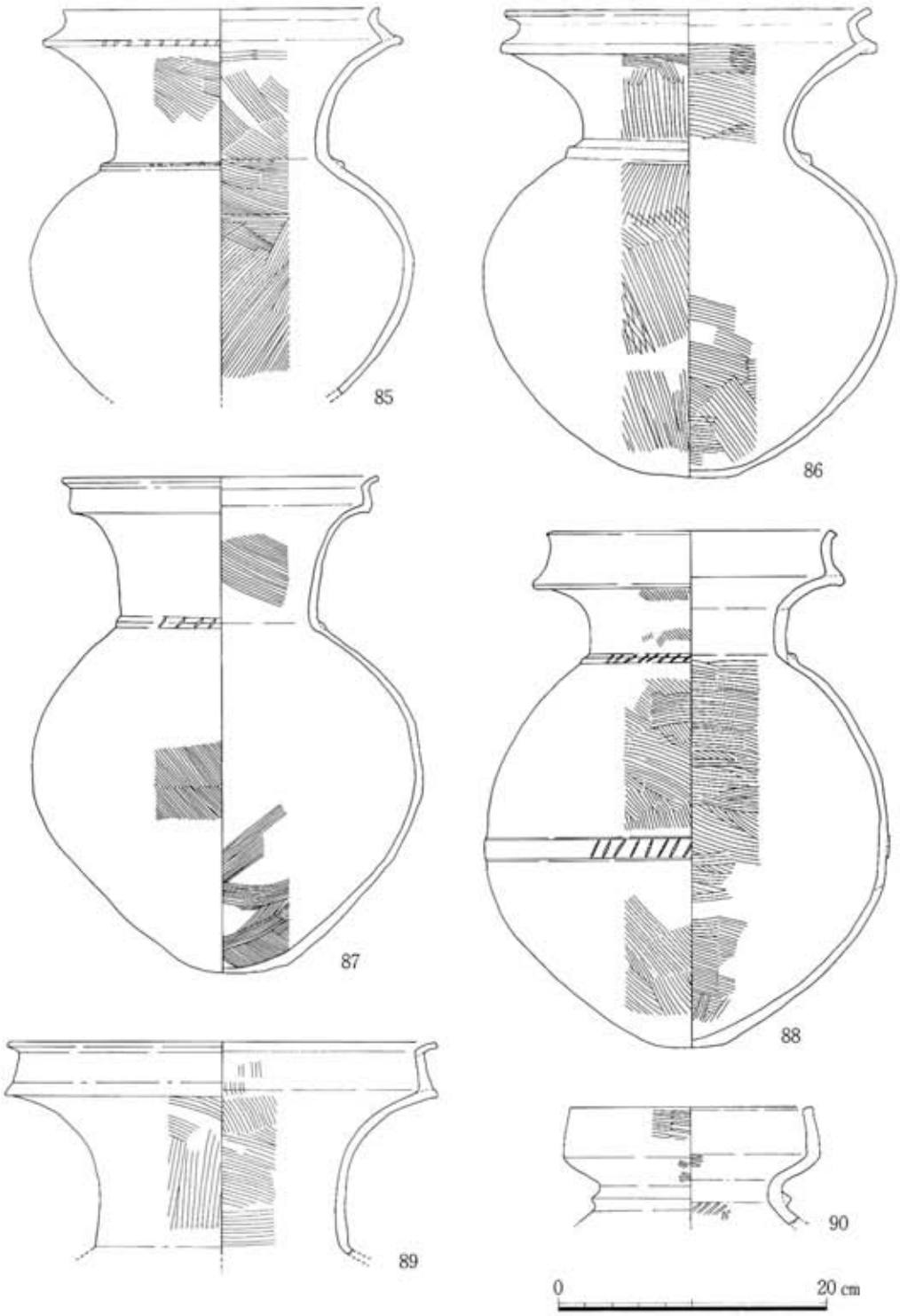


Fig.73　S D019 ・S D204 出土土器 9　甕（1/5）

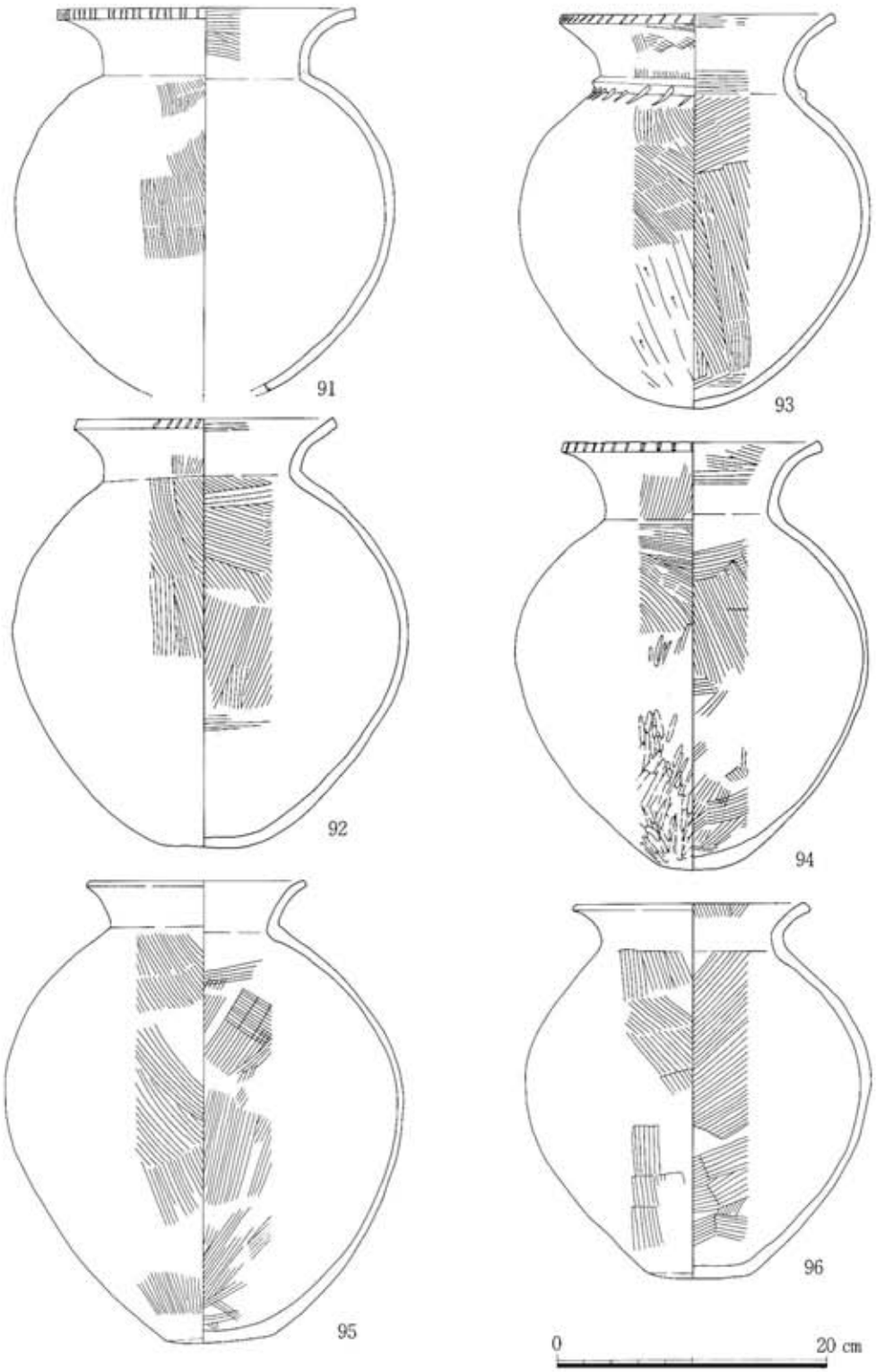


Fig.74 S D019 ・S D204 出土土器10 壺（1/5）

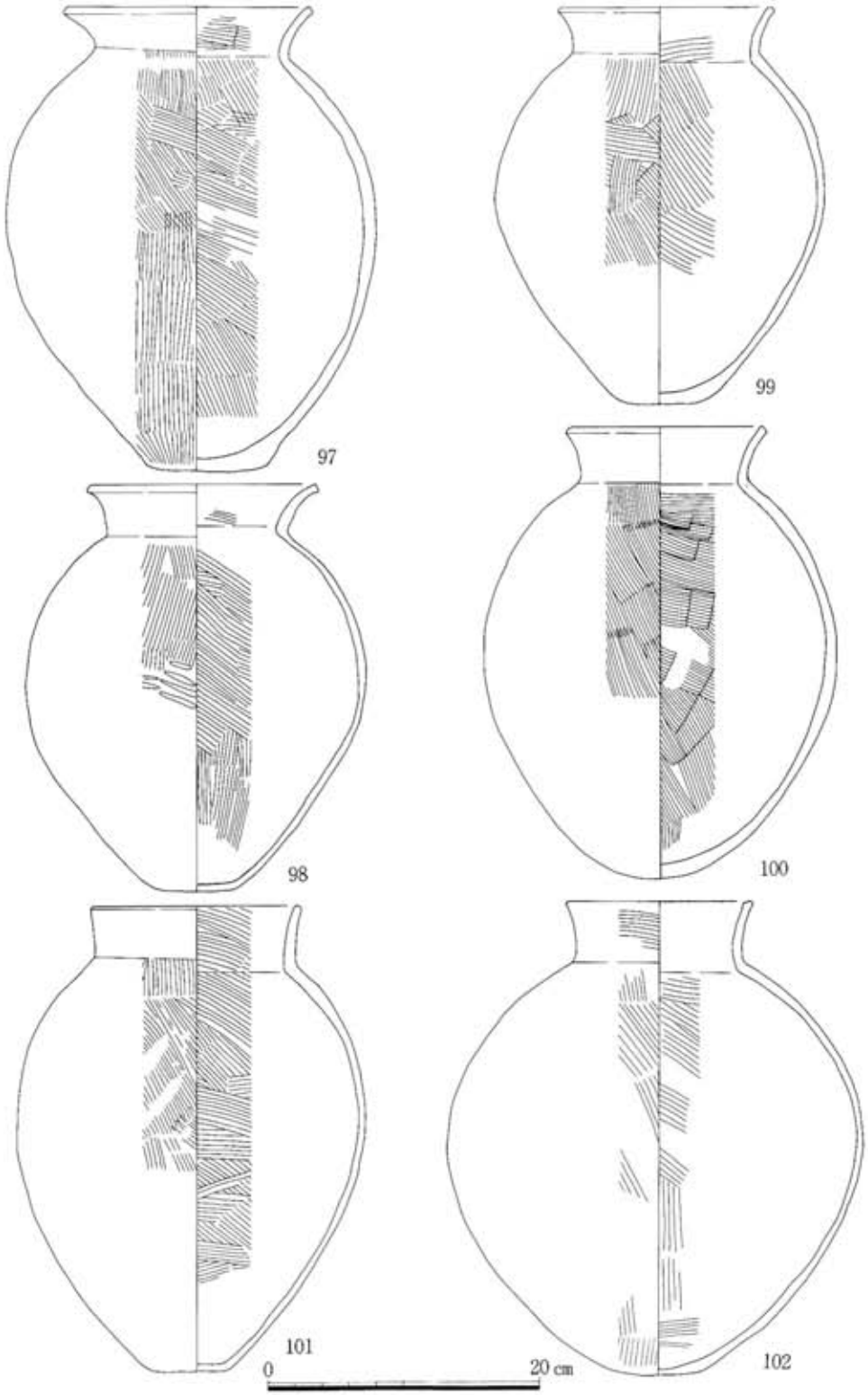


Fig.75　S D0019 ・S D204 出土土器11　壺（1/5）

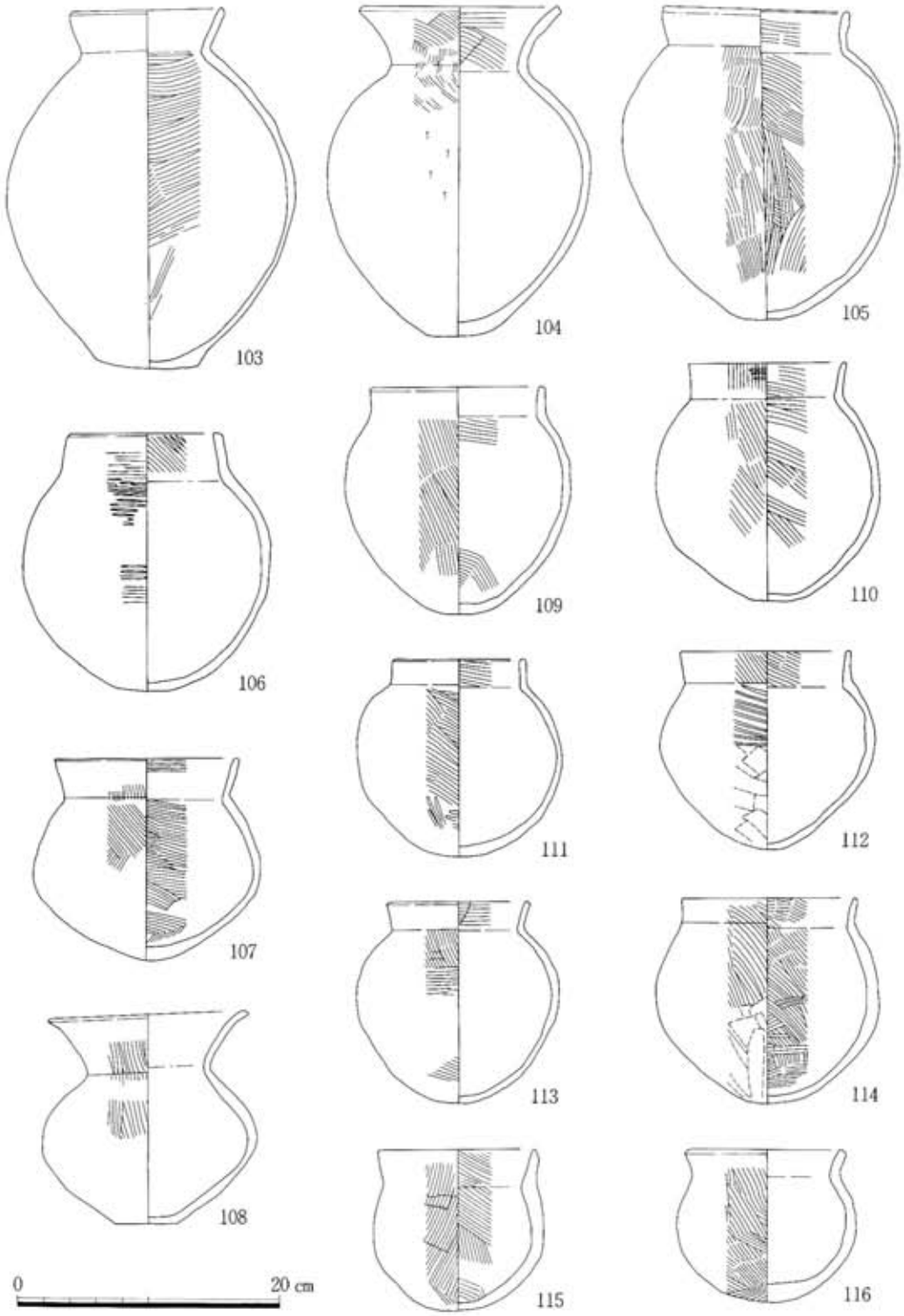


Fig.76 S D019 ・S D204 出土土器12 壺（1/5）

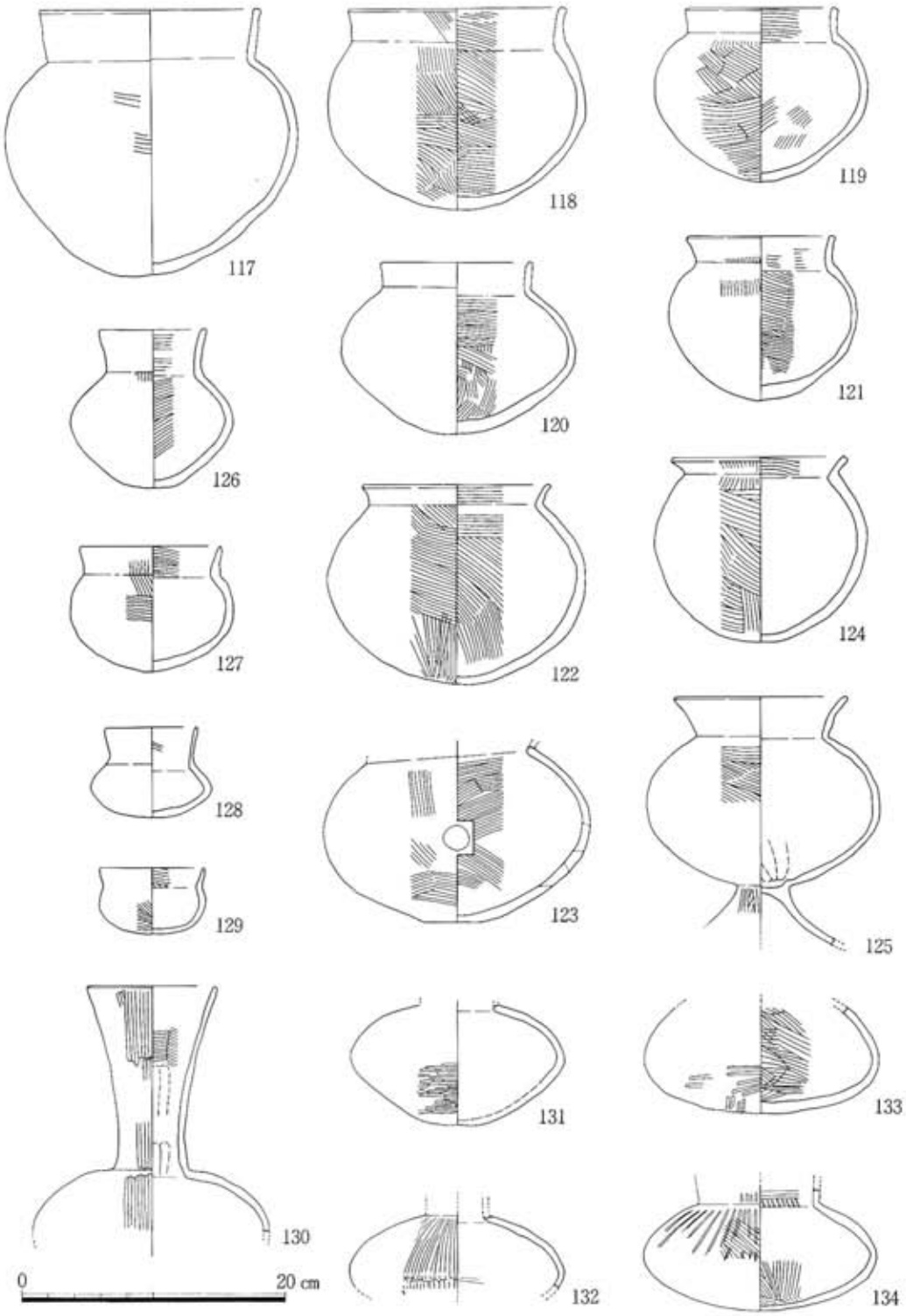


Fig.77　SD019・SD204 出土土器13　壺（1/5）

高坏（Fig.78・79, ＰＬ60・61）

坏底体部が大きく開き、口縁部が屈曲または段をなして外反する系統をＡ類、口縁部が体部と一体化し坏底部から急に屈曲して高く立ち上がるものをＢ類、台付鉢状に坏部が鉢形で低く裾が開く脚部が付くものをＣ類、坏部は口縁が短かく直立して浅く脚部が高いものをＤ類、口縁部が弥生中期的な鋤先状のものをＥ類とする。Ａ類とＢ類は法量の大小でＩ・Ⅱに分ける。

〈Ａ類〉　必ずしも截然と区分できるものではないが、口径を目安に大型品をＡＩ類、小型品をＡⅡ類とする。大型では口径27cmから40cmちかいものまであり、小型品は口径24cm前後の坏の容量が小さい。弥生後期中頃～終末の高坏の主体を占める。

ＡＩ類　135～143・147～152を挙げておく。口縁部の形態の違いは基本的には時期差によるもので、135は口縁部が底体部から屈曲して短かく立ってＡ類の初現的な形態にちかく、137～143ではそれが斜傾外反、さらに148～152では口縁部の長伸発達が著しく口縁部と体部との接合部は稜から段に変化し、むしろ口縁部が体部に替わる様相をみせている。また、これに応じて脚部にも一定の変化があり、口縁部が直立あるいは斜傾する段階では脚裾部はやや高く内湾気味に開く場合が多いのに対し、口縁部が長伸するようになると脚裾部が低く外反気味に開く傾向をつよく示すようになる。器面調整はハケ目およびナデに加えてヘラミガキを施するものが多く、全体に作りは丁寧である。ただし136は特殊で、体部が丸く深い特徴は鉢にちかい。調整もタタキ目を一部残し、作りはやや雑であるが、口縁部の特徴からＡＩ類におく。

ＡⅡ類　144・145・153を挙げる。144は口縁部が屈曲直立から端部外反、145はそれが屈曲して屈曲して斜傾外反、145ではタタキ目が加わる。153は坏部が全体に丸味をもち、口縁部と底体部との接合段はかすかで、ヘラ暗文を施し丁寧な作りである。量は少ない。

〈Ｂ類〉　量はごく少ないと思われる。大型と小型の各１点があり、ＢＩ類・ＢⅡ類とする。

ＢＩ類に154・155を挙げる。154は坏部口縁が外反気味に立ち上がるのに対し、155は直線的に伸く伸びる違いがあり脚部は筒状に立って裾が低く開く。

ＢⅡ類の156は坏部の特徴は155にちかいが、脚部は基から直線的に開き高い。

155・156は古墳前期の高坏に継がるものである。

〈Ｃ類〉　157・158がある。一般に高坏に含められているが台付鉢としもよい形態である。体部は浅く、２点のうちでは157の方が口縁部と体部との稜が明瞭である。ヘラ暗文を施し、つくりはきわめて精良である。点数は少ない。

〈Ｄ類〉　ＳＢ274竪穴住居跡出土の350（Fig.95）の１点がある。形態はかなり異なるが、Ｃ類同様にヘラ暗文などで飾り、きわめて精良な作りである。点数は少ない。

〈Ｅ類〉　のちに竪穴住居跡出土品で取りあげる322（Fig.92）などがある。弥生中期の高坏の特徴をそのままとどめ、Ａ類高坏が出現するまでの間、後期になっても中頃まで残存して使用されている。ただし破片しか出土しておらず、点数も少ない。

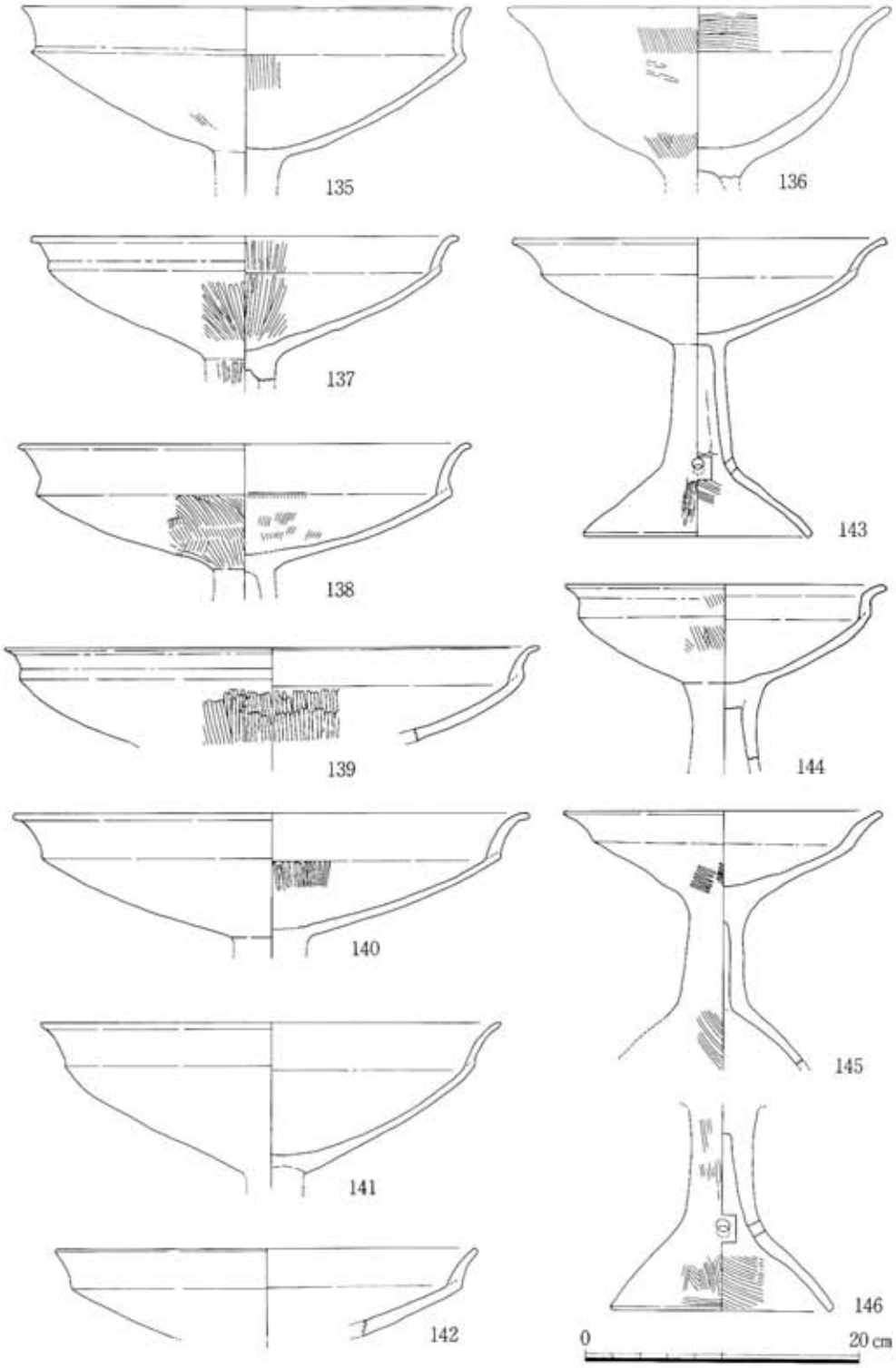


Fig.78　S D019・S D204 出土土器14　高坏（1/5）

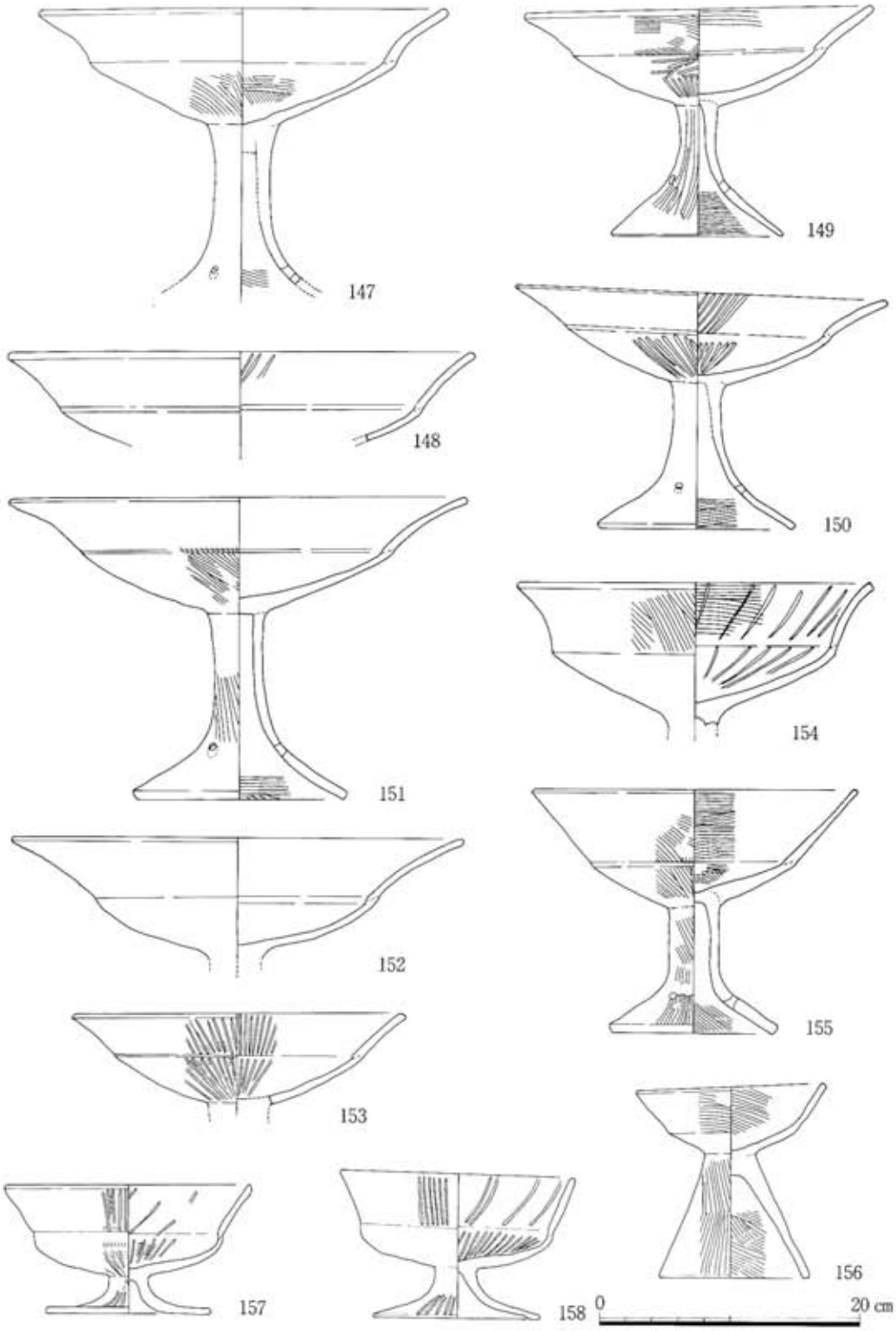


Fig.79 S D019 ・ S D204 出土土器15 高坏（1/5）

鉢・埦 (Fig.80～84, ＰＬ62～65)

器種は実にバラエティーに富む。大別して大型ないしは中型でやや浅い体部から口縁部が折れずに立ち上がるＡ類、口縁部が屈曲するＢ類、Ａ類に似るが体部の深いＣ類、小型浅鉢のＤ類、とくに小型で粗製のＥ類、ジョッキ型のＦ類がある。

〈Ａ類〉　159・160,162～167がある。その中での大・中・小の別にⅠ・Ⅱ・Ⅲに分ける。

ＡⅠ類の159は口径36cmと格別大きく、小さな平底をつくる。中型では160・164～167をＡⅡａ類とし、これに台が付く197をＡⅡｂ類とする。また小型の162・163をＡⅢ類とする。全体として直立ないしは内湾しながらも平底から丸底への変化がある。ＡⅢ類は粗製が多い。

〈Ｂ類〉　168～189があり、その中での大・中・小の別にⅠ・Ⅱに分ける。

ＡⅠ類の168～177では口縁部が屈曲する特徴で一括するが、実際には口縁部・体部・底部それぞれに違いがある。平底では168が大型で、169はそれより口縁部の屈曲が甘くなる。または177は底部が偏平で口縁部が急に立ち特異である。ＡⅡ類も同様に変化が大きいが、脚台をもつ187～189をＢⅡｂ類、他をＢⅡａ類としてあえて一括しておく。

〈Ｃ類〉　161・190～196・198・199を挙げ、大・中・小の別にⅠ・Ⅱ・Ⅲに分ける。Ａ類との違いは体部が深い点にあり、大型は少なく中型・小型が主体である。

ＣⅠ類の161は大型とはいってもＡ類に比べてはその小型に当たる容量である。ＣⅡ類は台付の187～189をＣⅡｂ類、他はＣⅡｃ類として一括する。192が平底である以外は丸底である。また、196は口縁部がわずかに外反気味であるが、便宜上これに含めておく。小型のＣⅢ類として丸底の197・199がある。

〈Ｄ類〉　200・201・203～214を挙げる。先のＣⅡ類と親縁関係にあるが、それより体部が浅く全体に小型である。大・小の別にⅠ・Ⅱに分ける。

ＤⅠ類は200・201・208～210で、そのうち体部がやや深い200・201をＤⅠａ類、体部が坏状に浅い208～210をＤⅠｂ類とする。Ｄ類に主体を占めるのは小型のＤⅡ類の203～207・212～214で、単純な器形ながら口縁部や体部の特徴に変化はあるが一括する。

〈Ｅ類〉　215～227を一括する。掌中に収まる程度の特小型品でしかも大部分が手捏ね風の作りであるため実に多彩で、極端にいえば１点ごとに個性がある。なおかつ出土点数が多い。あえて分類すれば粗製丸底気味の多い215～224をＥａ類、尖底状に深い225・226をＥｂ類、台付きの227をＥｃ類、尖底砲弾形の228・229をＥｄ類に分けることができよう。このうちではＥｄ類のみ全て作りが丁寧で、ヘラミガキを施した精良品を含む。

〈Ｆ類〉　あえて分類名称を与えることもあるまいが、ジョッキ形埦202をＦ類としておく。

201は口縁部と把手を欠失する。体部は下位でくびれ、底部は中央がやや上がり、把手は板状である。薄手ではあるが指またはヘラでナデ仕上げられ堅く焼き締った良精品である。佐賀平野での類例は他に基山町干塔山遺跡の例がある。

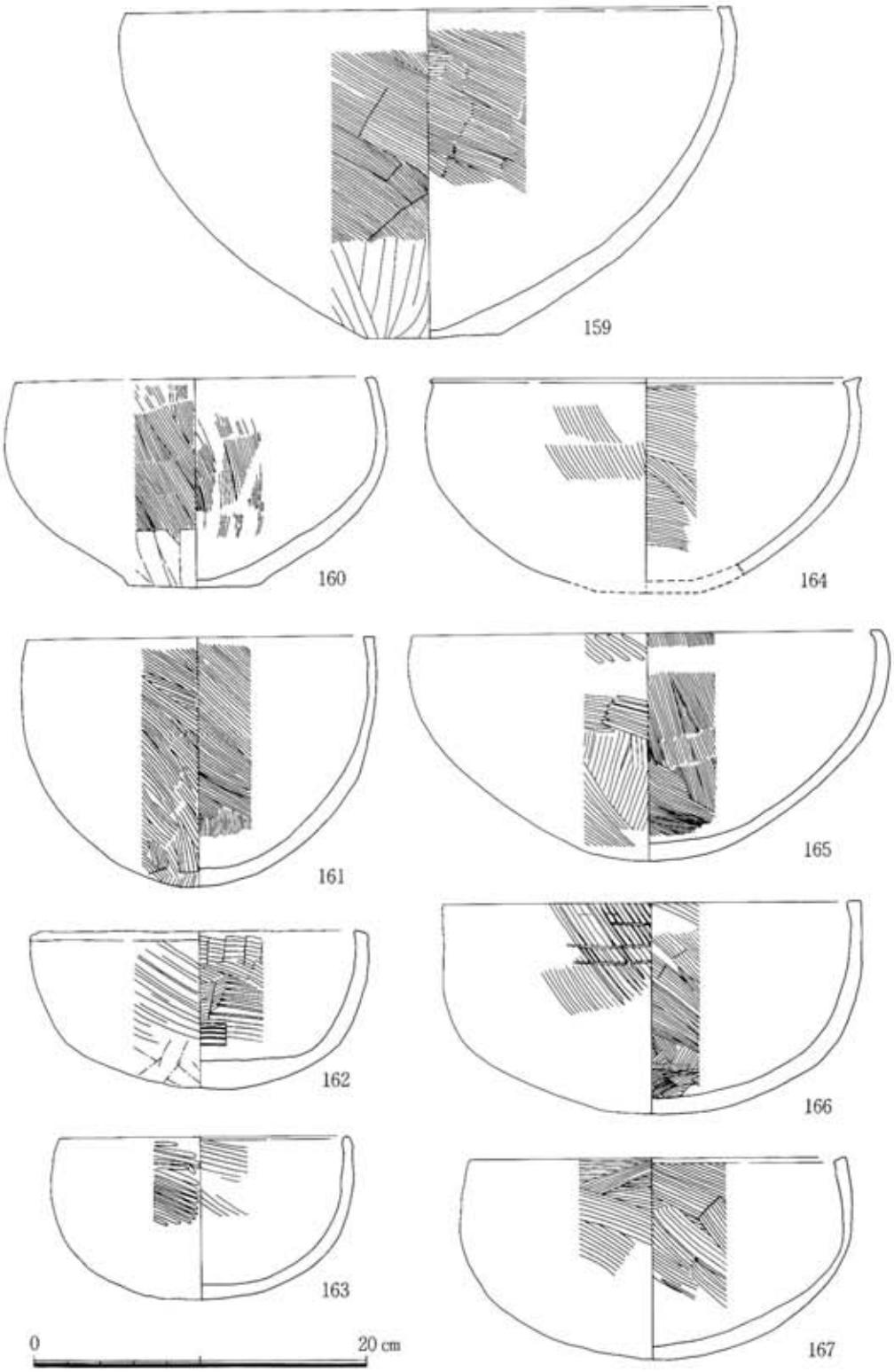


Fig.80 S D019・S D204 出土土器16 鉢 (1/4)

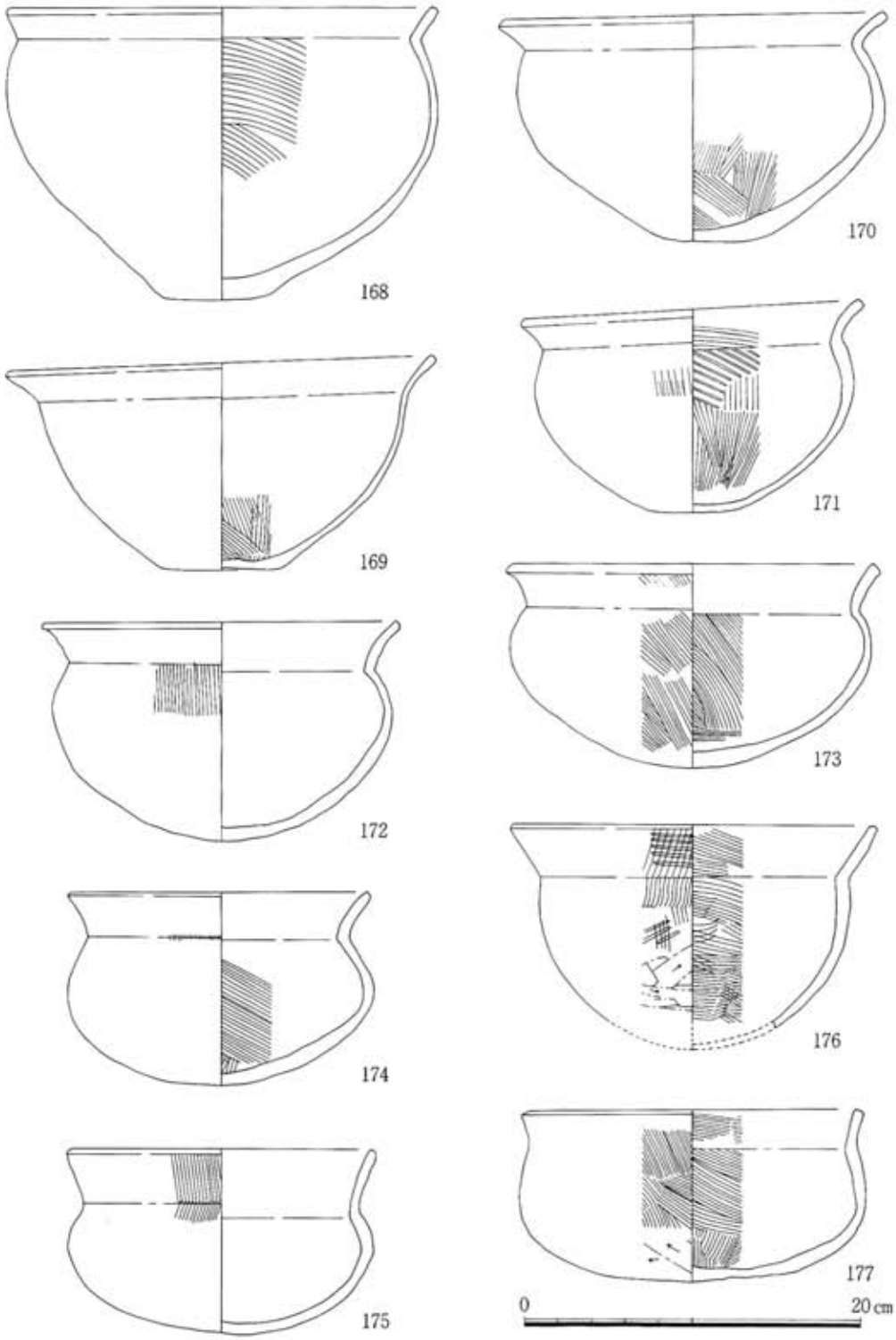


Fig.81　S D019・S D204 出土土器17　鉢 (1/4)

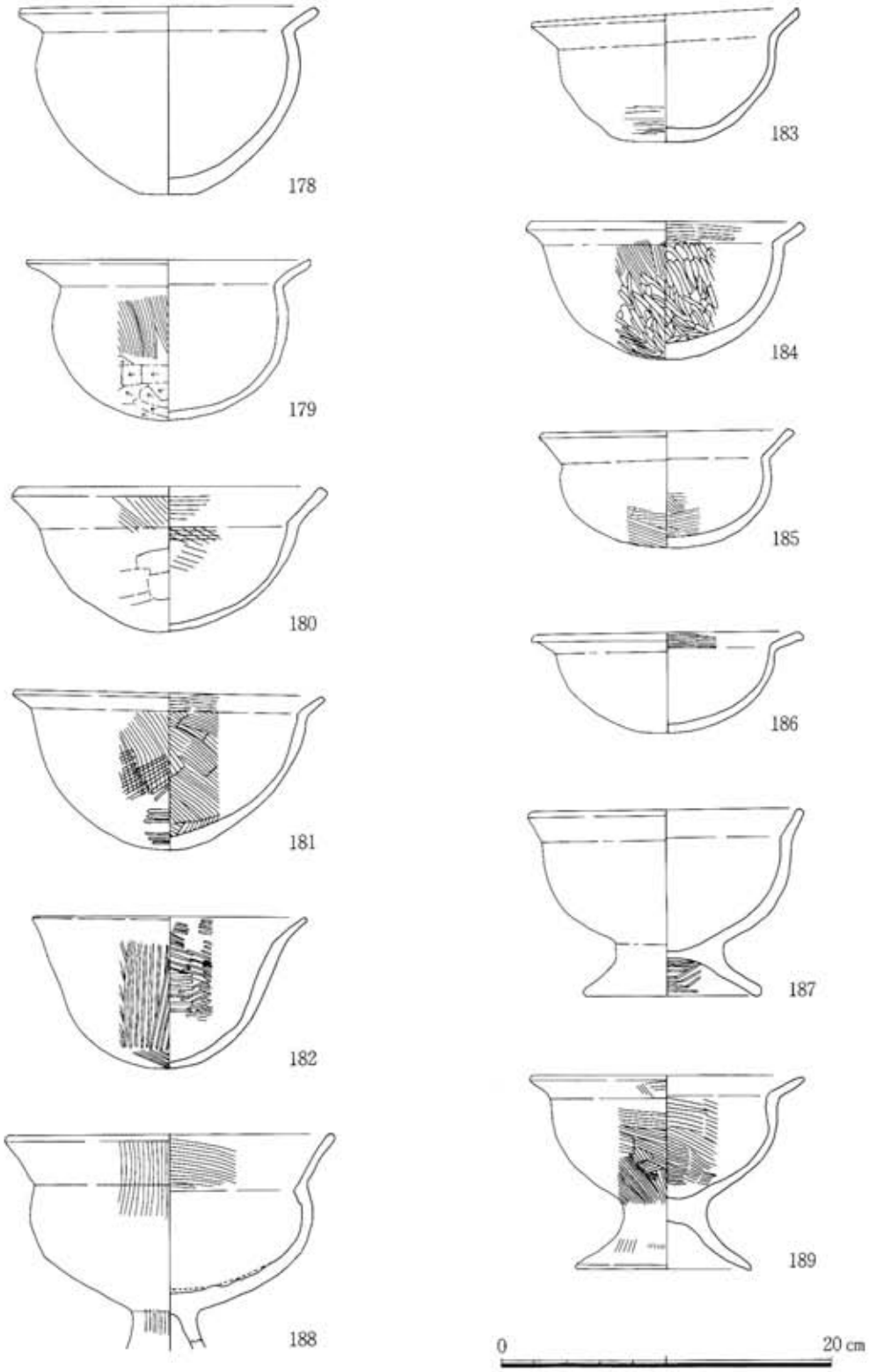


Fig. 82　S D019・S D204 出土土器18　鉢 (¼)

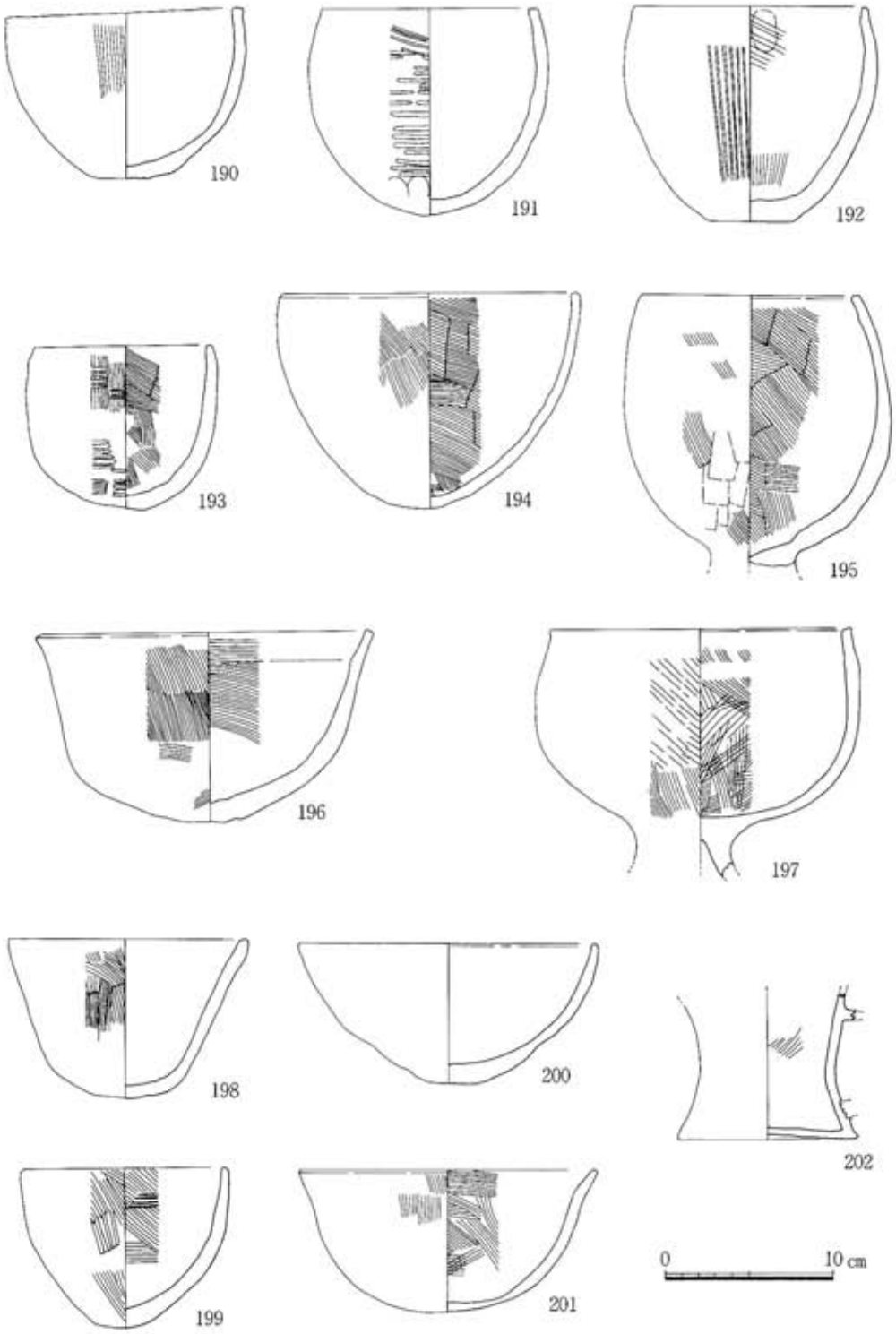


Fig.83　S D019・S D204 出土土器19　鉢（½）

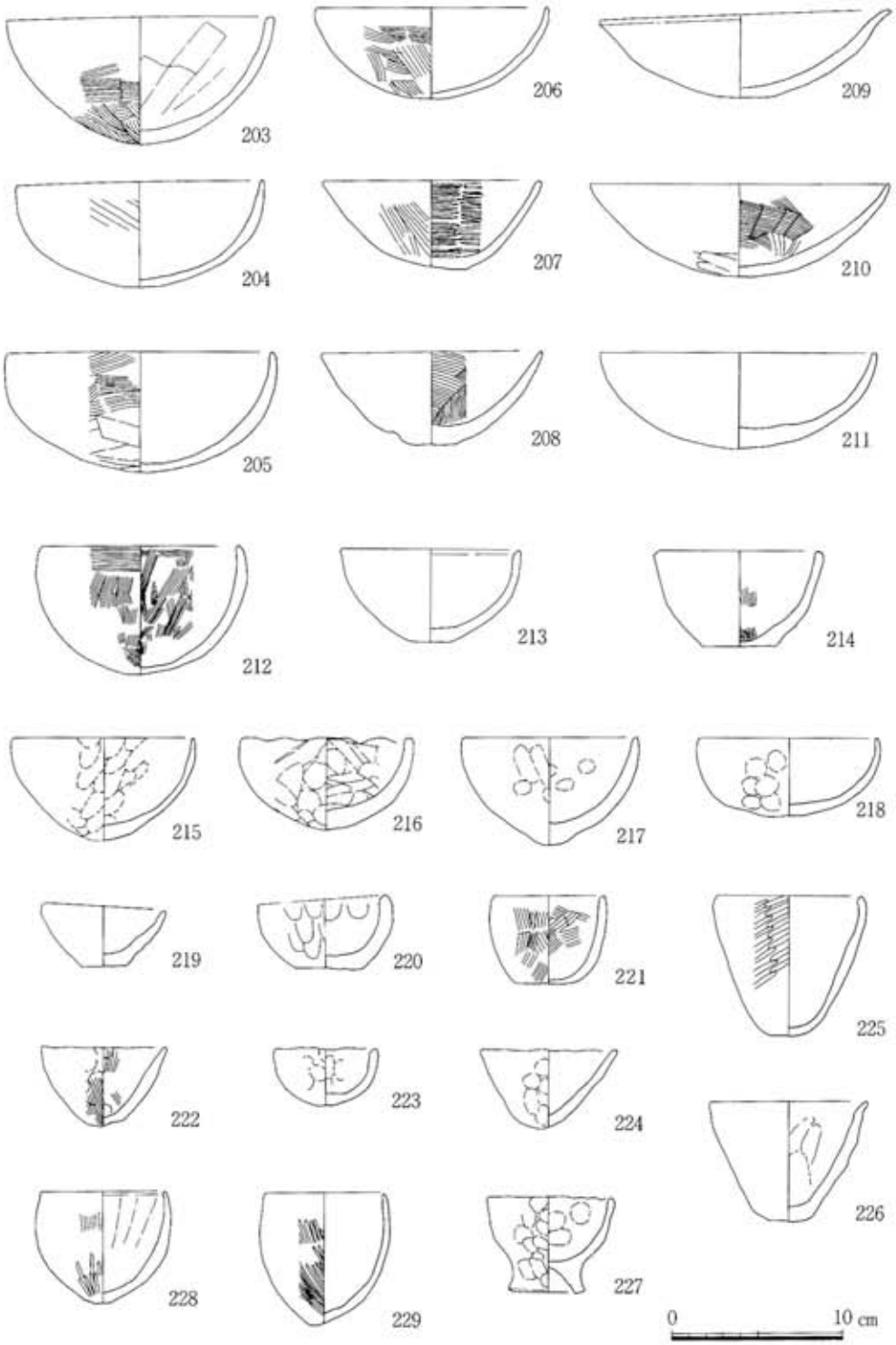


Fig. 84　S D019・S D204 出土土器20　鉢（1/4）

器台（Fig.85～87, ＰＬ65～67）

弥生中期の筒形器台から発達した、長身で体部中位または上がくびれて裾が開くＡ類と、低身で体部中位がくびれ口縁部と裾部が大きく開き、２段の長方形透しを穿けるＢ類とがある。ただしＢ類は点数がごく少なく、Ａ類が殆ど全てである。筒状の為か、焼成黒斑は殆どない。

〈Ａ類〉　大型・中型・小型の別にⅠ・Ⅱ・Ⅲに分け、さらにⅡ・Ⅲは細部の特徴からａ・ｂ・ｃ…に細分する。Ⅰ・Ⅲは稀で、主体をなすのはⅡの中型である。

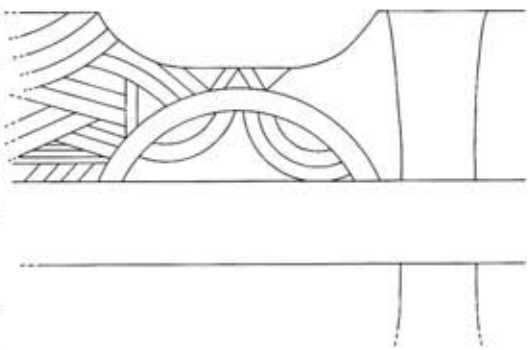
ＡⅠ類の233は器高26cm、口径21cmの大型で、口縁部は体部上位からゆるく外反し口唇に刻目を施し、体部は裾が外反気味に開く。

ＡⅡ類として234～258・260・261のほか後述の竪穴出土の343を含め、ａ～ｅに分ける。**ＡⅡａ類**の230～231は弥生中期の筒形器台の名残りをとどめるもので、体部中位ないしは中位やや上がくびれる。器高は16cm前後のやや小型である。**ＡⅡｂ類**は234～239・260のように体部のくびれ位置が上に上がり、体部裾がやや外反する。器高は20cm前後が一般的で、口縁部はやや小型で特異な260が内面に稜をもつ以外は体部から急に外反して稜をなさない。**ＡⅡｃ類**はＡⅡｂ類に似るが、体部裾が直線的に伸びる240～246・253～258・261を挙げる。口縁部は体部と稜をなさず急に外反する240～244、内面に稜をなす245・246、外面で屈曲が明瞭になる253～258・261、といった違いがある。**ＡⅡｄ類**もＡⅡｂ類に似るが、体部裾が内湾気味の247～252を挙げる。口縁部は251が内にかすかな稜をもつものの、他は稜をなさずに体部から急に外反する。他に特殊なものとして複合口縁の343（Fig.94）もＡⅡｅ類としてＡ類に含める。

ＡⅢ類は器高13cm前後の小型品で量は少ない、体部裾が外反する259をＡⅢａ類、ここには図示していないが体部が直線的に伸びるものをＡⅢｂ類とする。

以上のＡ類は弥生中期的な筒形器台から発達して全体に大型化するもので、その中に時期差がある。概念的にはくびれ部位置の上昇、口縁部の外反から屈曲、体部裾の外反から直伸ないしは内湾への変化とそれに伴う裾端部の平坦接地、調整面ではハケ目からタタキ目への変化を読みとることができる。

〈Ｂ類〉　262・263を挙げておく。口径は底径よりやや小さいと思われ口縁が平坦にちかく開く。262の破片には鋭利なヘラにより右の模式図のように円弧と直線を組み合わせた幾何学的な文様がある。一見直弧文を思わせるが上段４方透しの一区画に限られるらしく特に何らかの規範に基づくとは思われない。北部九州に伝統的な文様要素を基調とするものであろう。



262器台　ヘラ描文様模式図（½）

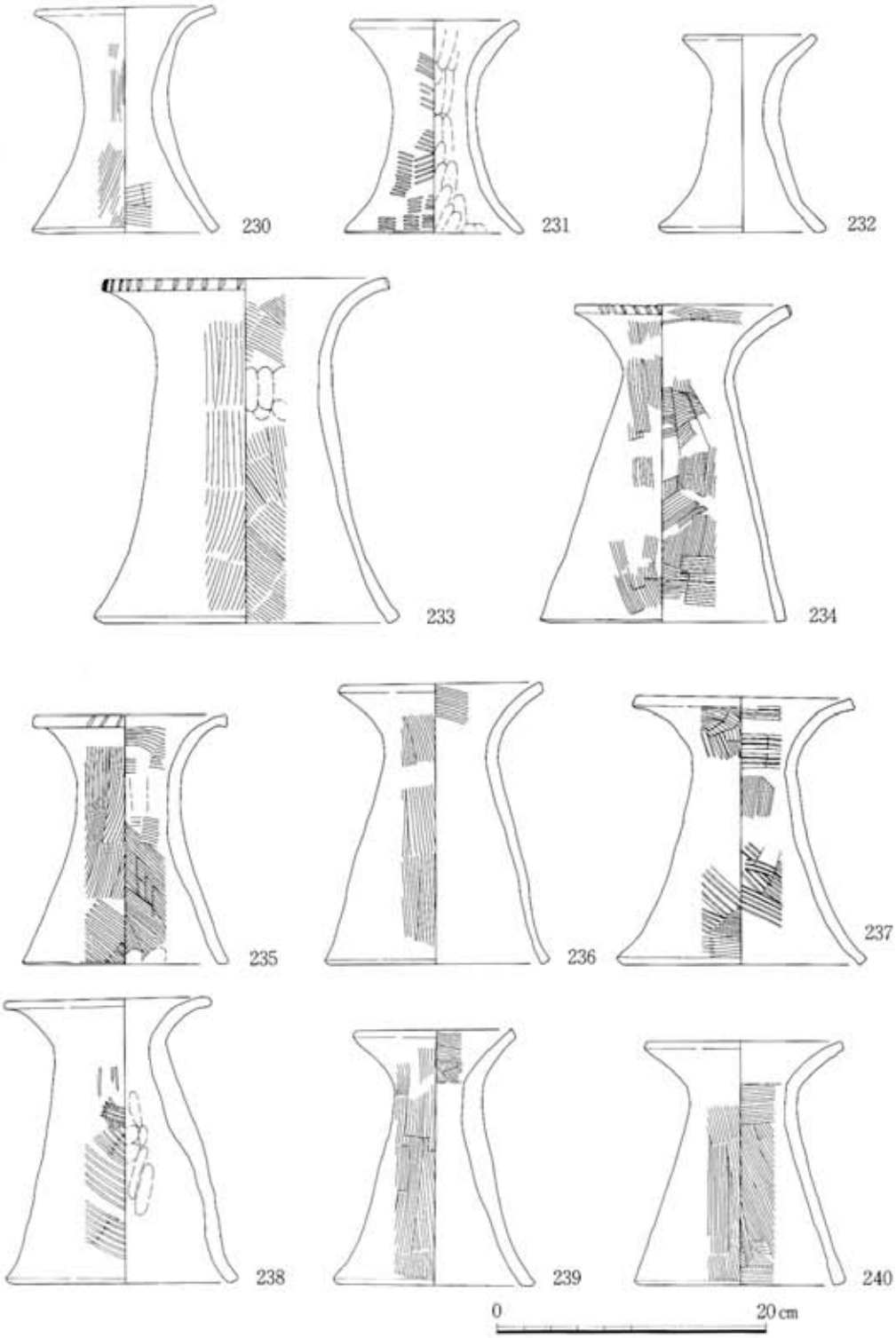


Fig.85　S D019・S D204 出土土器21　器（1/5）

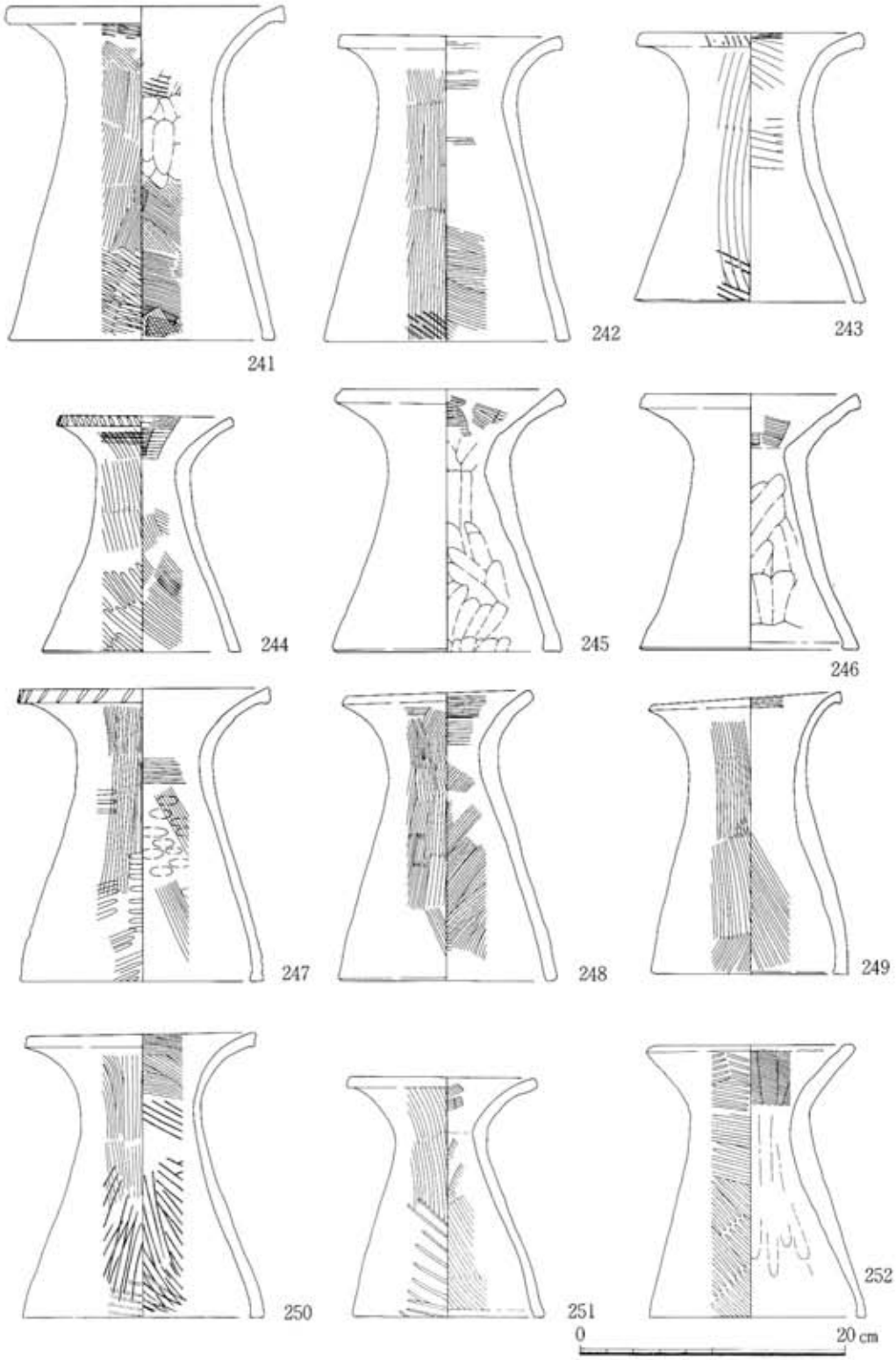


Fig. 86　S D019・S D204 出土土器22　器台（1/5）

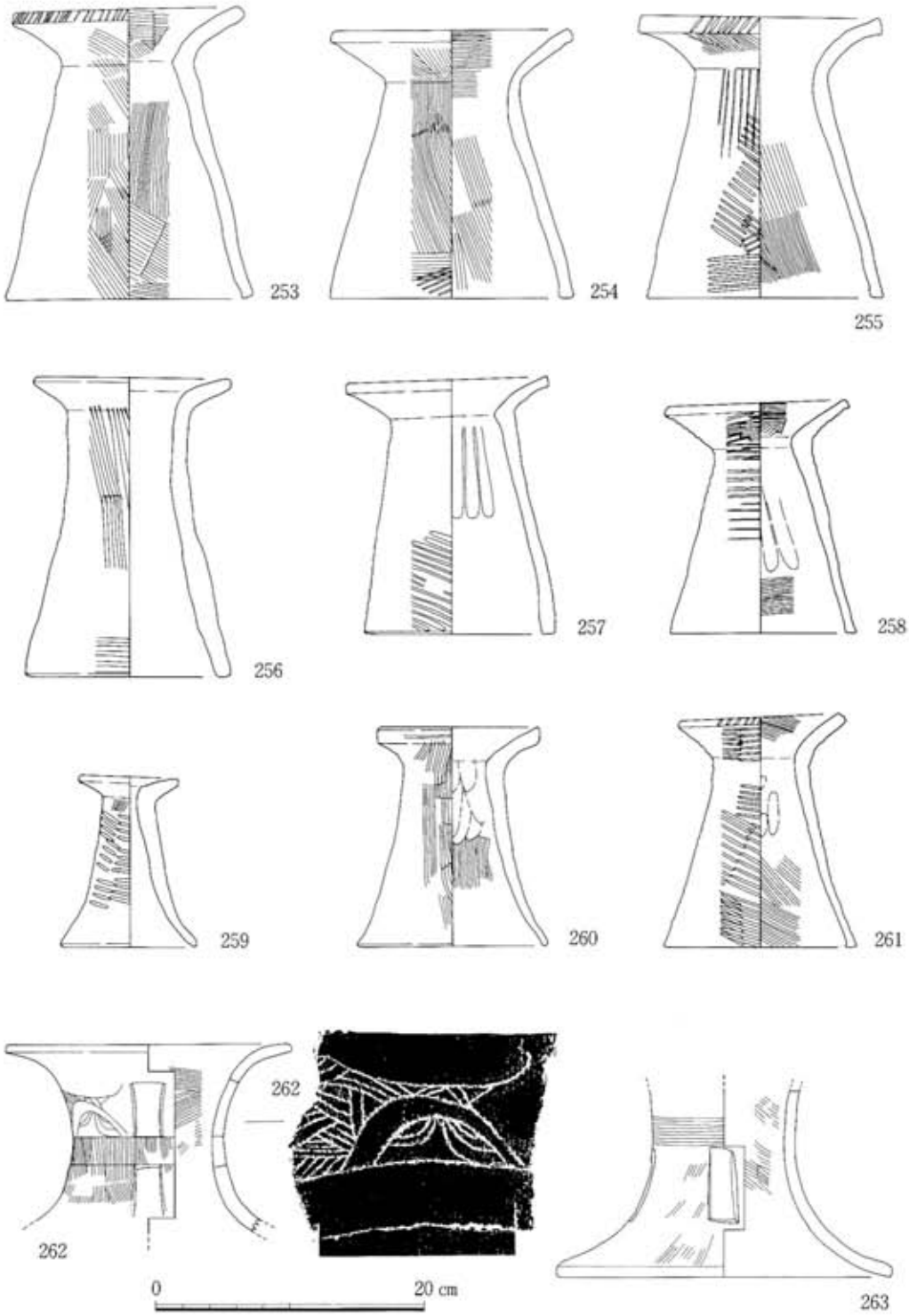


Fig. 87　S D019・S D204 出土土器23　器台（1/5）

支脚（Fig.88・89, ＰＬ68・69）

粗製が多く、器形は変化に富む。大別して上縁が水平もしくは水平にちかく回るＡ類、上縁が斜傾して回るＢ類、やや特殊なものとして口縁部が複合口縁状のＣ類、棒状で大型のＤ類とがある。上面有孔が一般的で、稀に無孔あるいは芯のつまったものがある。

〈Ａ類〉　264～277を挙げる。その中での変化は多彩であるが一応ａ～ｆに細分しておく。Aa類283・284は上面の一端に嘴状突起をもつ。Ab類265・266・268・269は上縁が張り出し、かつ上面がレンズ状に凸面をなす。Ac類267・270～274はAb類に似るが上面が平坦なものを一括する。ただし典型的なタイプは267・270・271で、他はそれぞれ個性がつよい。Ad類275～277は筒状にちかいものを一括する。小型で雑な作りものが多く、実際は多様である。Ae類279は芯がつまり、小型である。

〈Ｂ類〉　上縁が傾斜する281・282～297を挙げる。その中でａ～ｄの４類に細分する。

Ba類281・282～286は上面一端に嘴状突起をもつ。287～296は上面が偏円形で傾斜上方の縁が張り出し、そのうち上面凸形の290をBb類、他はBc類とする。Bc類のうちでは293が筒状、295・296が無孔で特殊である。Bd類294は傾斜上方縁に突出をみない。Be類297は芯がつまった小型の支脚である。

〈Ｃ類〉　264は口縁が水平にまわる複合口縁状で、屈曲張り出し部のどこでも支えられる。

〈Ｄ類〉　280は大型棒状で安定感があり、斜め上方の先端が支点となる。

これら支脚の機態はAe類やBd類、Be類のように小型のものは小型の煮沸器に用途が限られるが、他はあまり法量に差がない。ただ火熱の効率からいえば支点となる上縁の突出度が大きい、あるいは嘴状のものの方が有利と思われる。

甑型土器（Fig.90, ＰＬ65）

298～303は底部に穿孔がある以外は鉢とかわりない。このうち口縁部がかすかに外反する303は焼成後穿孔の転用器であり、これを別とすれば焼成前穿孔の298～300のように口縁部が体部からそのまま内湾して立ち上がるタイプが基本形であろう。鉢ＣⅡａ類にちかい中型の深鉢状のものが多い。この種の土器を甑とするのをためらう向きもあるが、参考資料として挙げた検出面出土の304の場合は小さな平底に焼成前の穿孔が３個みられ、明らかな専用甑としてよいであろう。ただし土器の形態は甕形である。

その他の土器（Fig.90, ＰＬ69）

307・308はそれぞれ大型・小型の杓子。手捏ね風の雑な作りである。いずれも曲がりが大きく、同じ杓子と呼ぶにしても小型の308はサジに当たるものであろう。305・306は蛸壺形土器であるが、305は体部に１孔、306は頂部穿孔で煤が付着しており用途ははっきりしない。309は小型壺の蓋であろう。乳状つまみをもつ。310は土製勾玉。ほかに図示していないが投弾が数個出土している。

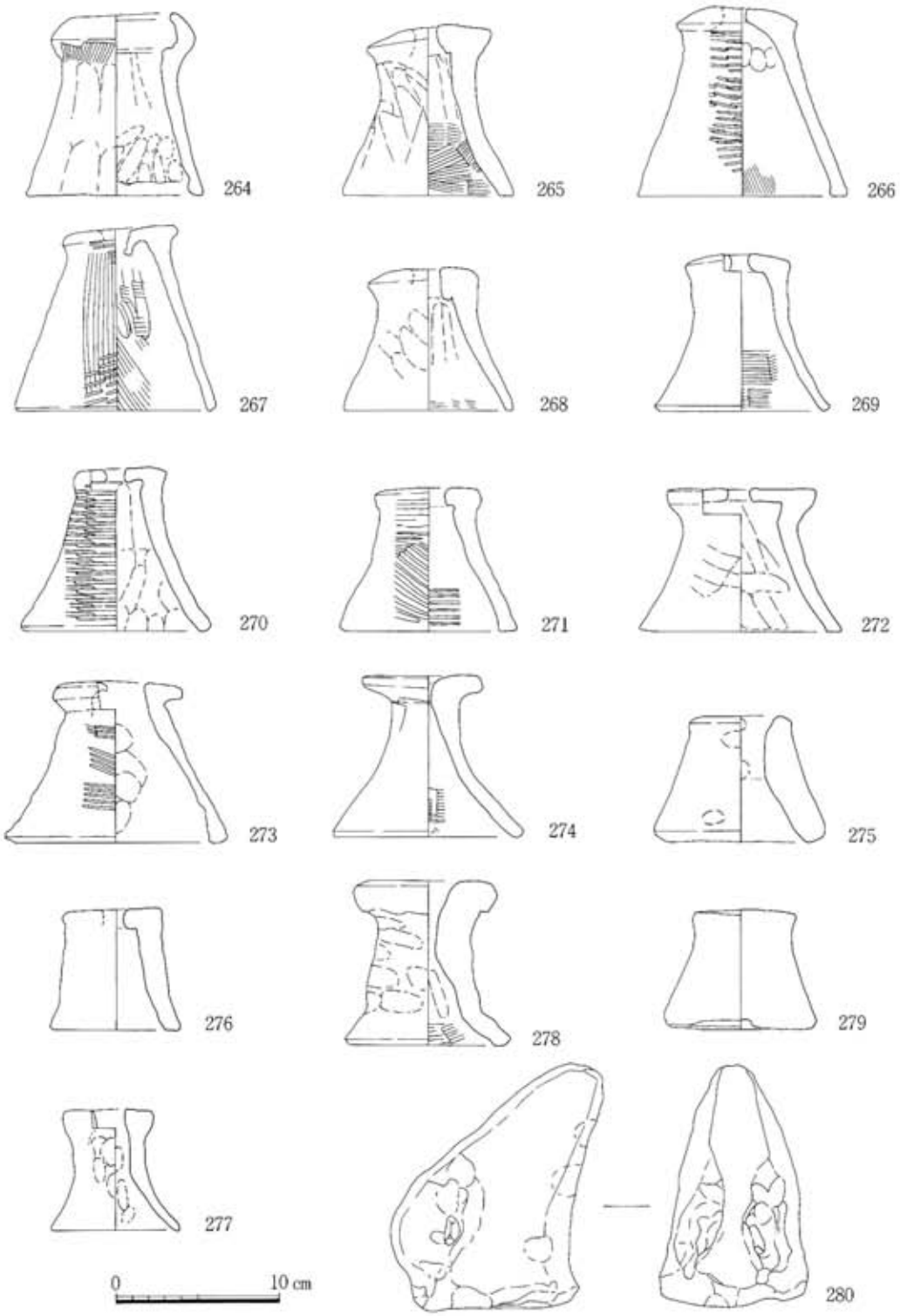


Fig.88 S D019・S D204 出土土器24 支脚（¼）

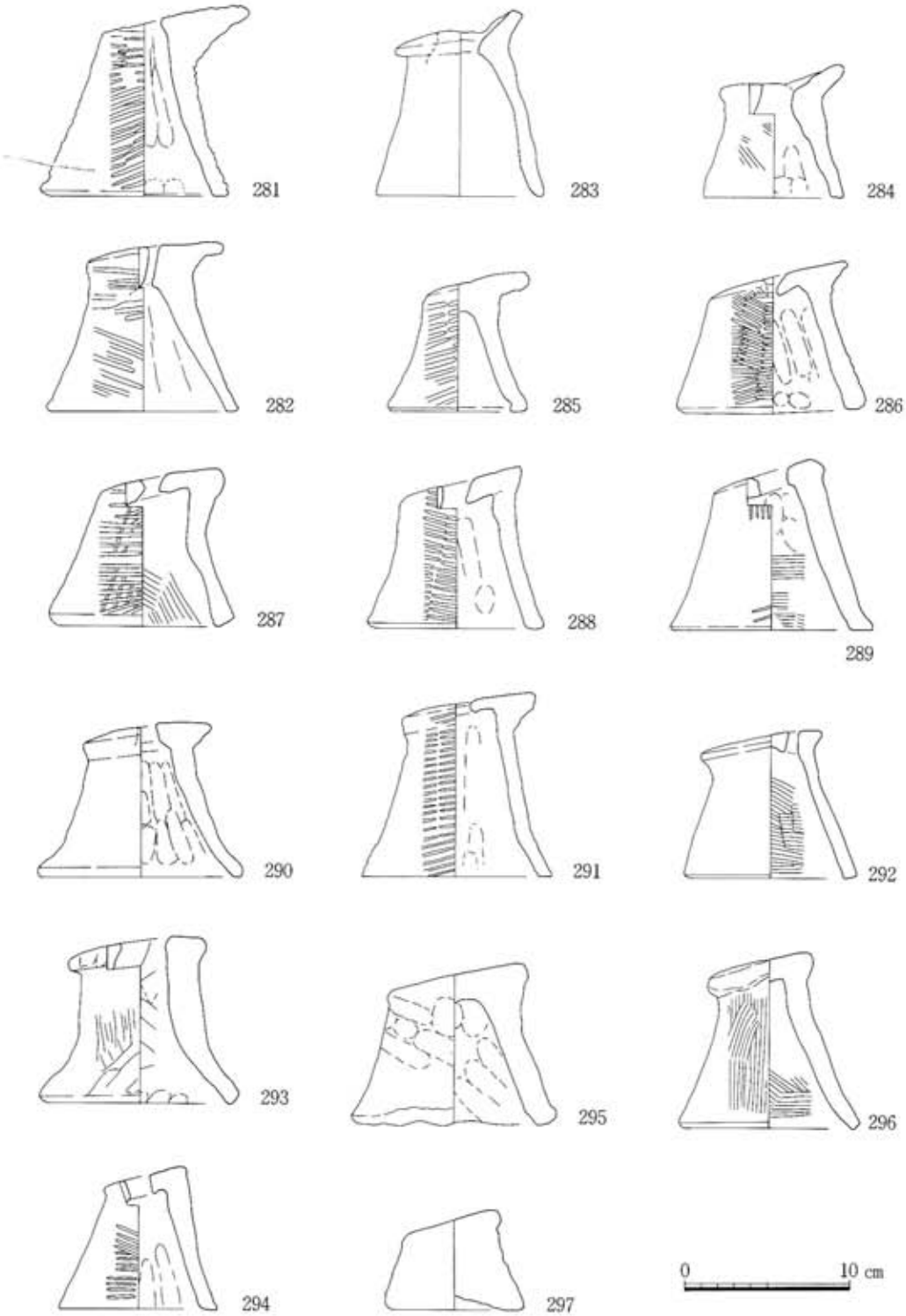


Fig.89　S D019・S D204 出土土器25　支脚（1/4）

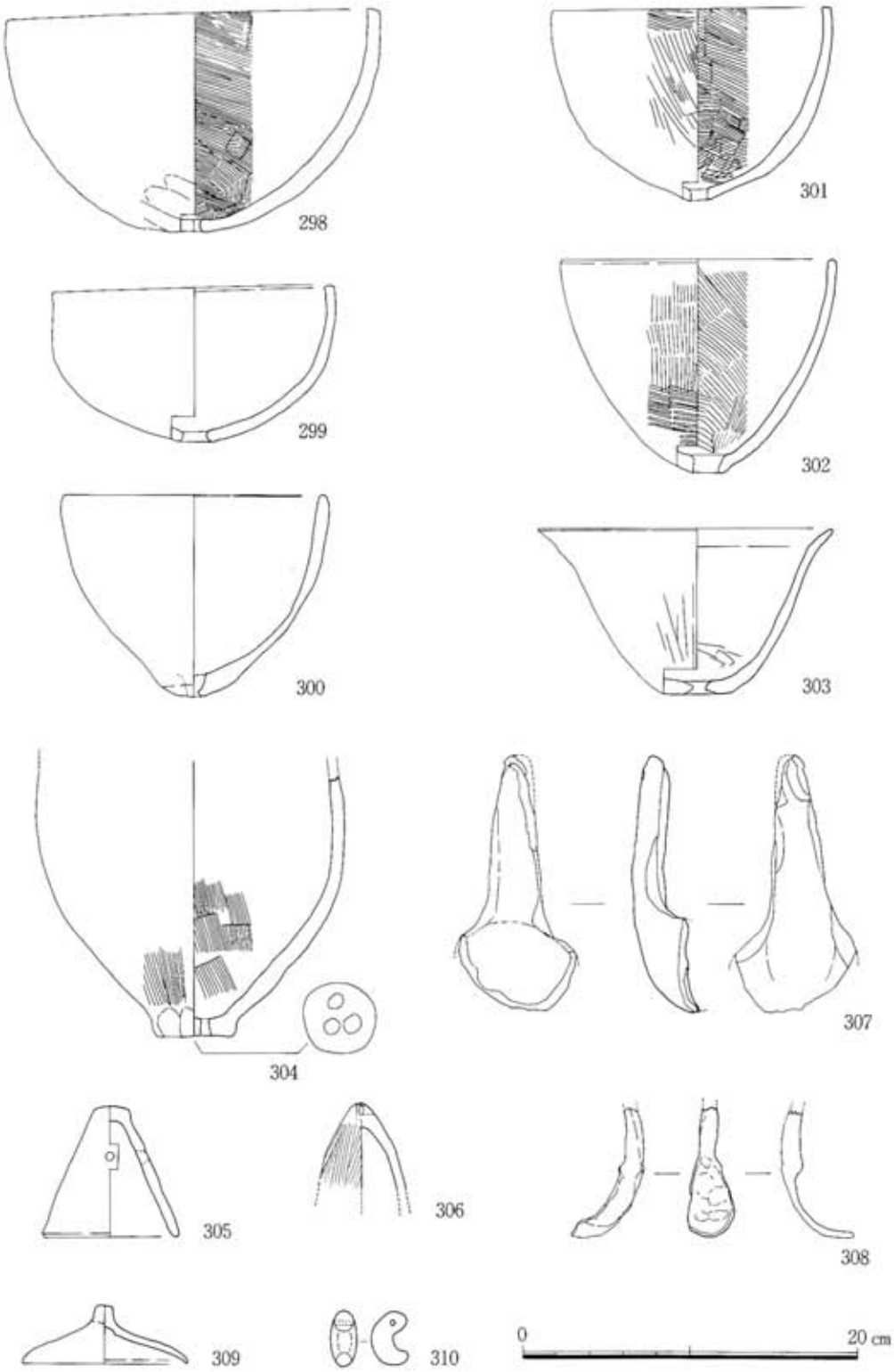


Fig.90 S D019・S D204 出土土器26 甑・杓子ほか (1/4)

c) ＳＤ207出土土器

環濠の内濠ＳＤ207出土土器をまとめて図示する（Fig.91）。廃棄量自体がＳＤ019ほどではなく、また遺構の残りが浅かったことと完掘しなかったこともあって出土量は多くない。

311甕はやや長胴傾向で平底をわずかに残す。312は台付甕底部。313・314は丸底気味小型壺。315は精製の特小型鉢。316高坏は口縁部が屈曲して短く外反し脚部裾が内湾気味に開く。317器台は口縁部が折れ、体部は直線的に伸び、タタキ目をそのまま残す。これらは後期後半から終末までの時期を含むものである。

d) 竪穴住居跡ほか出土土器

竪穴住居跡・土壙・石蓋土壙墓出土土器のうち、器種の供伴関係がわかるものを中心に遺構ごとに図示する（Fig.92～97）。遺構全体の削平が著しいため、遺構数のわりに量は少ない。以下、編年上の詳しい位置付け等は「総括」にゆずり、要点のみ簡単に触れておく。

ＳＢ215出土品（Fig.92）では長胴丸底の甕318にいずれも丸底化した大型壺319・小型壺320・浅鉢212が伴う。

ＳＢ218出土品（Fig.92）では上面が平坦な鋤先状口縁の高坏322と複合口縁小型壺325に平底甕323と平底小鉢326が伴う。この高坏322のタイプはＳＢ219（Fig.93）でも底部の丸底化が始まる時期の壺・鉢に伴うようであるが、仮に遺構埋没時の混入としても時期的には近接し少なくとも後期中頃まで残存することを示すものであろう。ＳＢ292（Fig.95）では複合口縁壺のほか、口縁部の屈曲が不明瞭な高坏292、下膨れ気味胴部と思われる特異な甕256、口縁部屈曲の甘い小型器台357を伴う。

ＳＢ222出土品（Fig.94）は平底を残す甕328に器339、丸底化した浅鉢340、小鉢342、上げ底の平底鉢341が供伴し、小型土器の丸底化が早く進む様相を示している。

ＳＢ225出土品（Fig.94）の器台343は先に紹介したとおり口縁部が複合口縁状で体部が高く裾が開く。ＳＫ236出土品（Fig.94）の支脚344は上からみると嘴状突起が二又に別れる特異な形態で、先の支脚の分類にあえて当てはめればAa類の変形とすることもできよう。

ＳＢ269出土品（Fig.95）は小型高坏348に中型深鉢347と口縁部の屈曲が明瞭な甕349が伴う。先に紹介したＳＢ274出土品（Fig.95）の高坏350は装飾性に富む精良品。他との供伴関係が明らかでない。ＳＢ288出土品（Fig.95）では平底の中型浅鉢に伴う小鉢は丸底である。

ＳＢ281出土品（Fig.96）は丸底化した各形態の鉢類と、坏部が丸味をもち脚裾部が低く開く段階の高坏、および甑型土器との組合わせである。ＳＢ293出土品（Fig.96）は甕365にみられるように今回取り上げた土器群では最も古いもので、小型甕366、鉢367・368を伴う。

その他ＳＢ291・ＳＢ289出土品（Fig.97）からは鉢と高坏の共伴関係が知られるが、高坏374は鋤先口縁の退化した形態を示し、これに平底の小型鉢375が伴う。小壺378はＳＣ180石蓋土壙墓供献品で、本来蓋が付く丹塗磨研の精良品である。

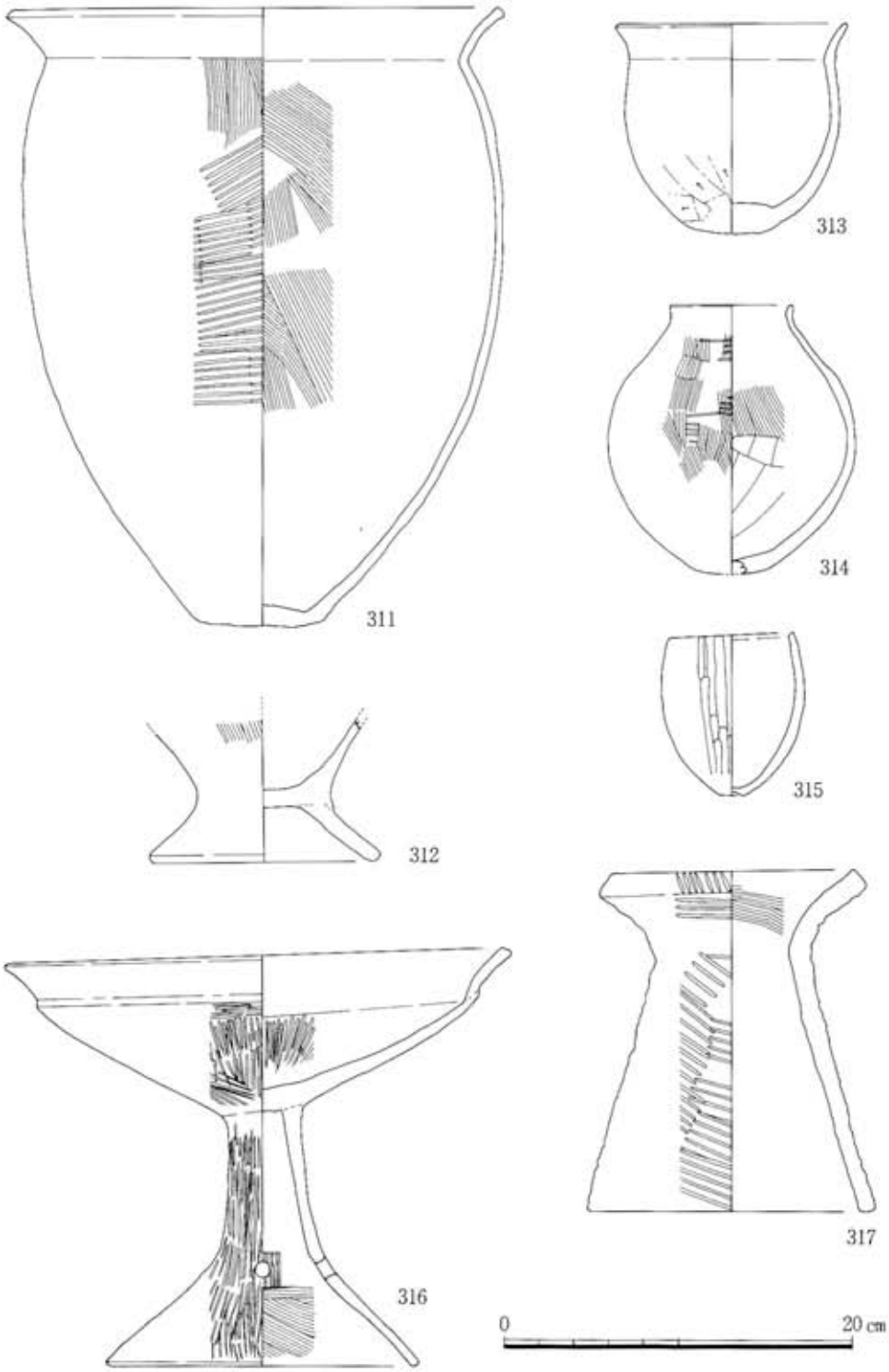


Fig.91 S D207 出土土器 (1/4)

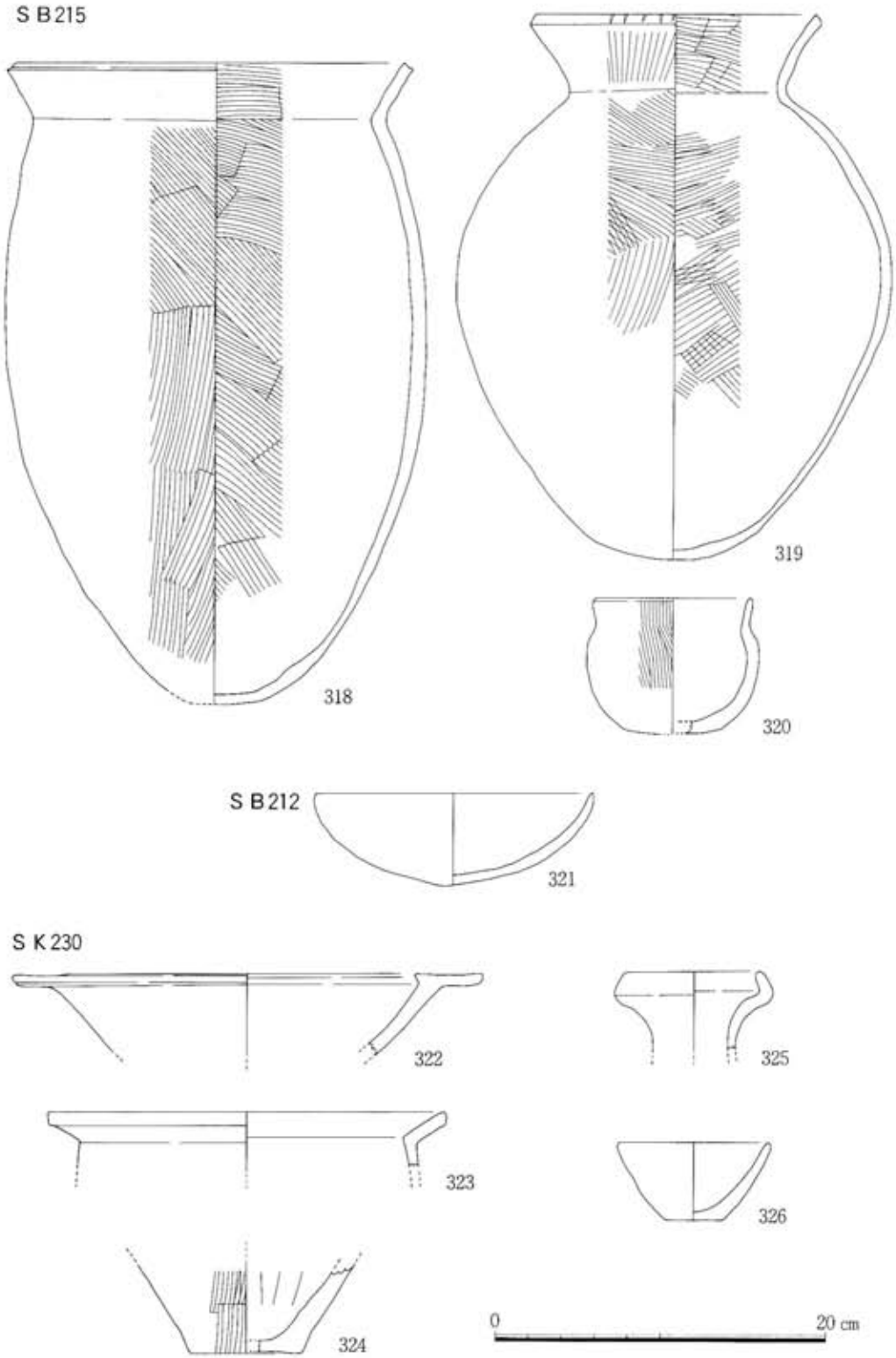


Fig.92　竪穴住居跡出土土器 1　　S B 215 ・ S B 212 ・ S B 218　(¼)

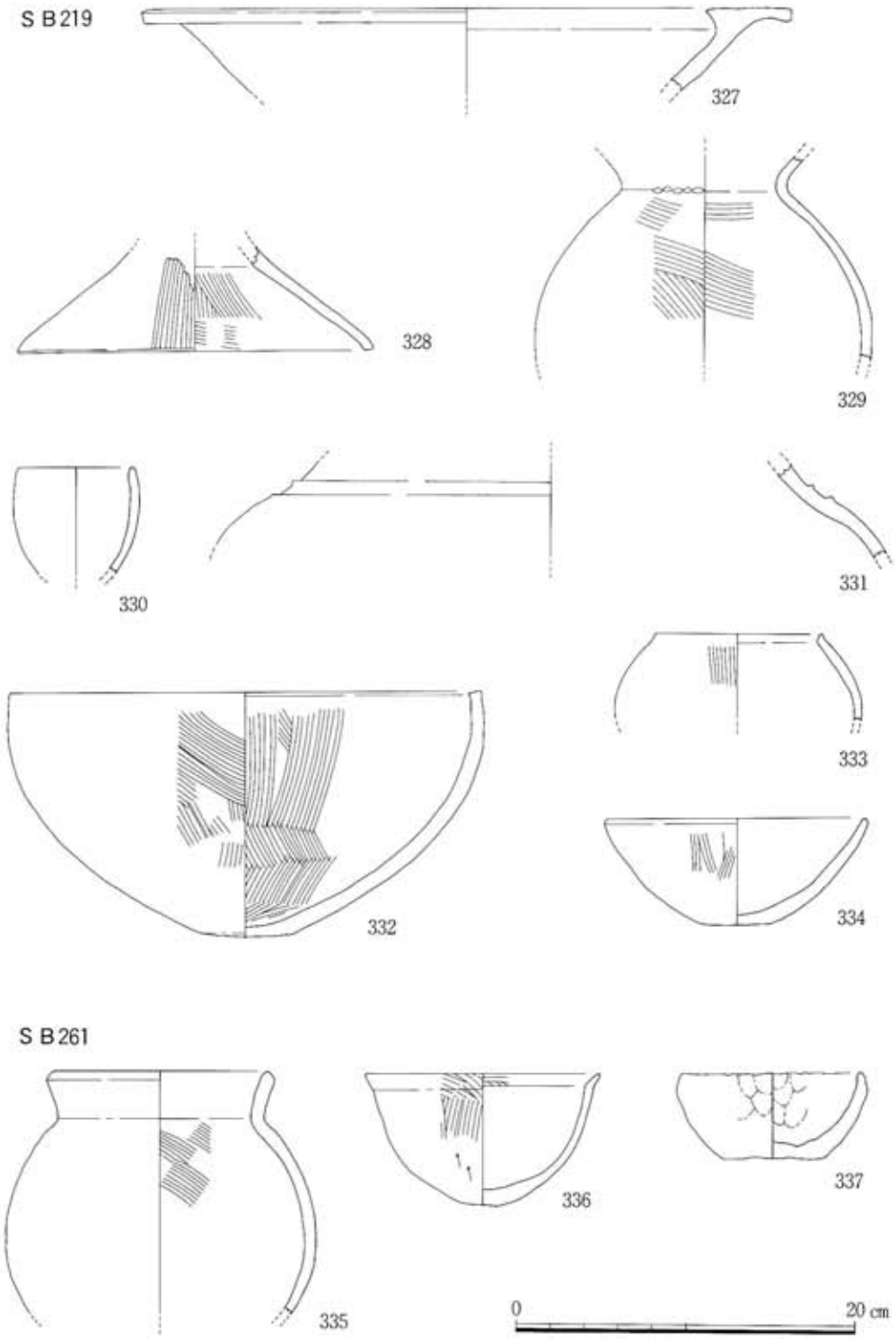


Fig.93 竪穴住居跡ほか出土土器 2 S B219 ・ S B262 (1/4)

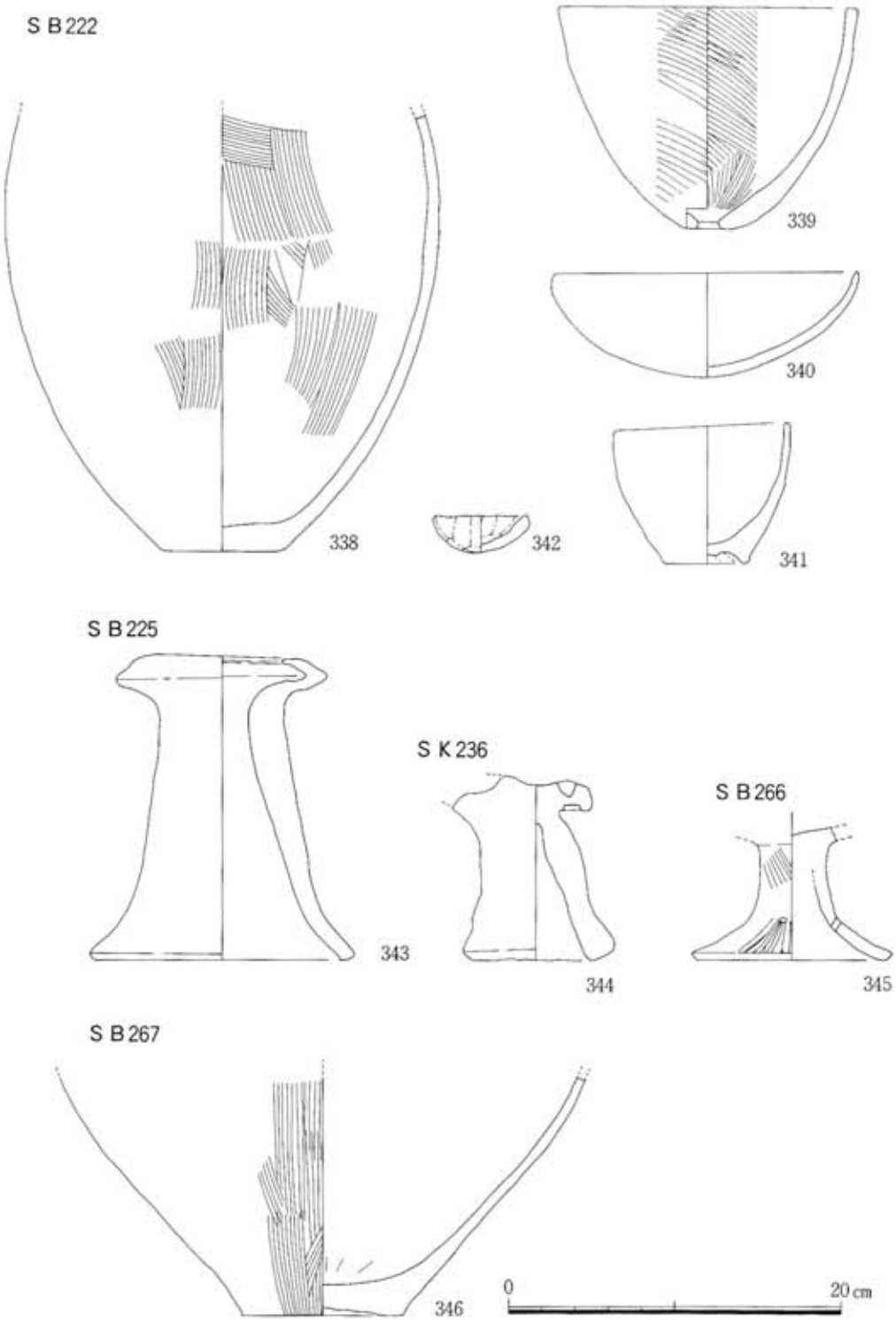


Fig.94　竪穴住居跡ほか出土土器 3　　S B 222　S B 225　S K 236　S B 266　S B 267　(1/4)

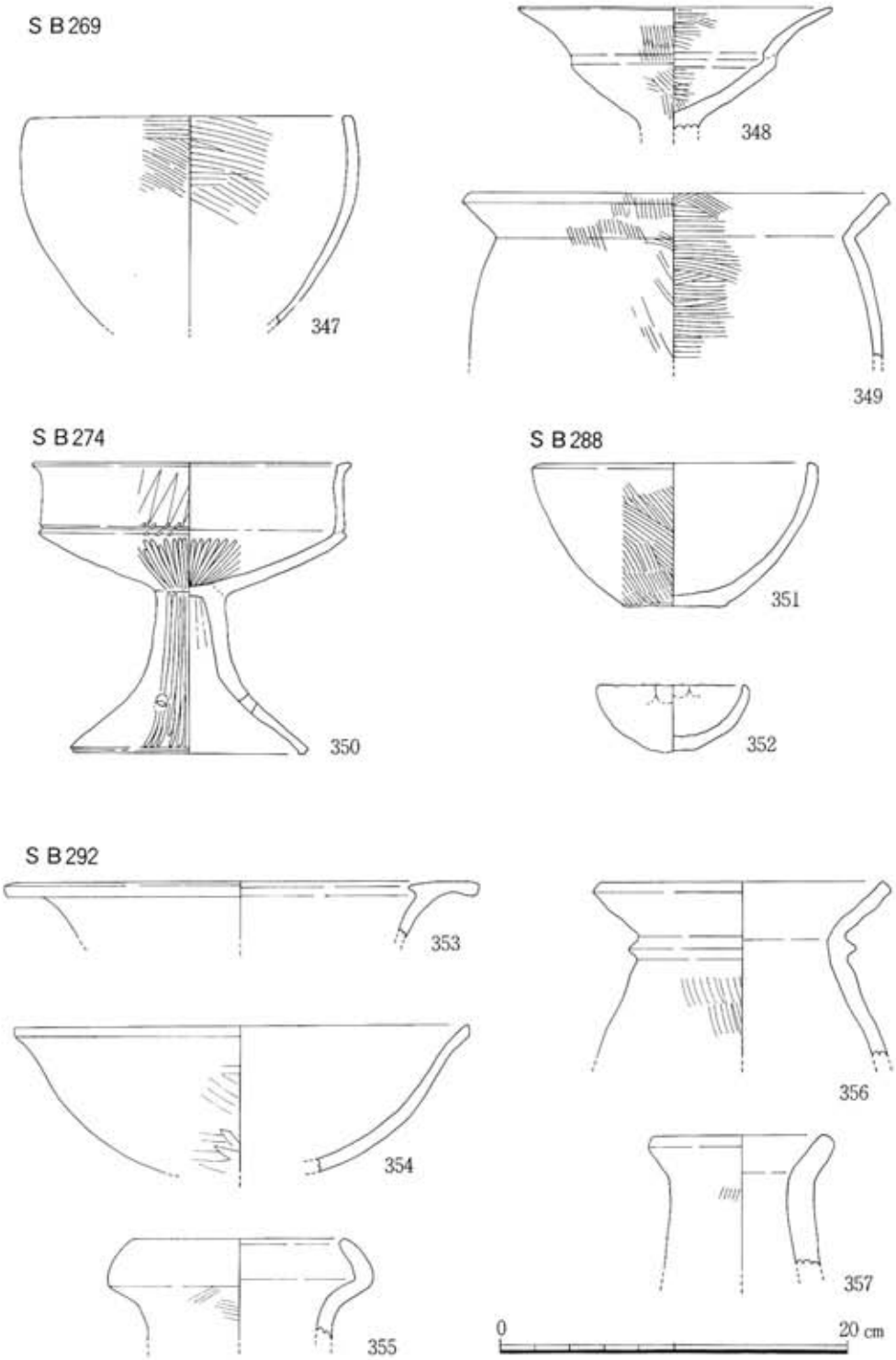


Fig. 95 竪穴住居跡ほか出土土器 4 S B 269・S B 274・S B 288・S B 292 (1/4)

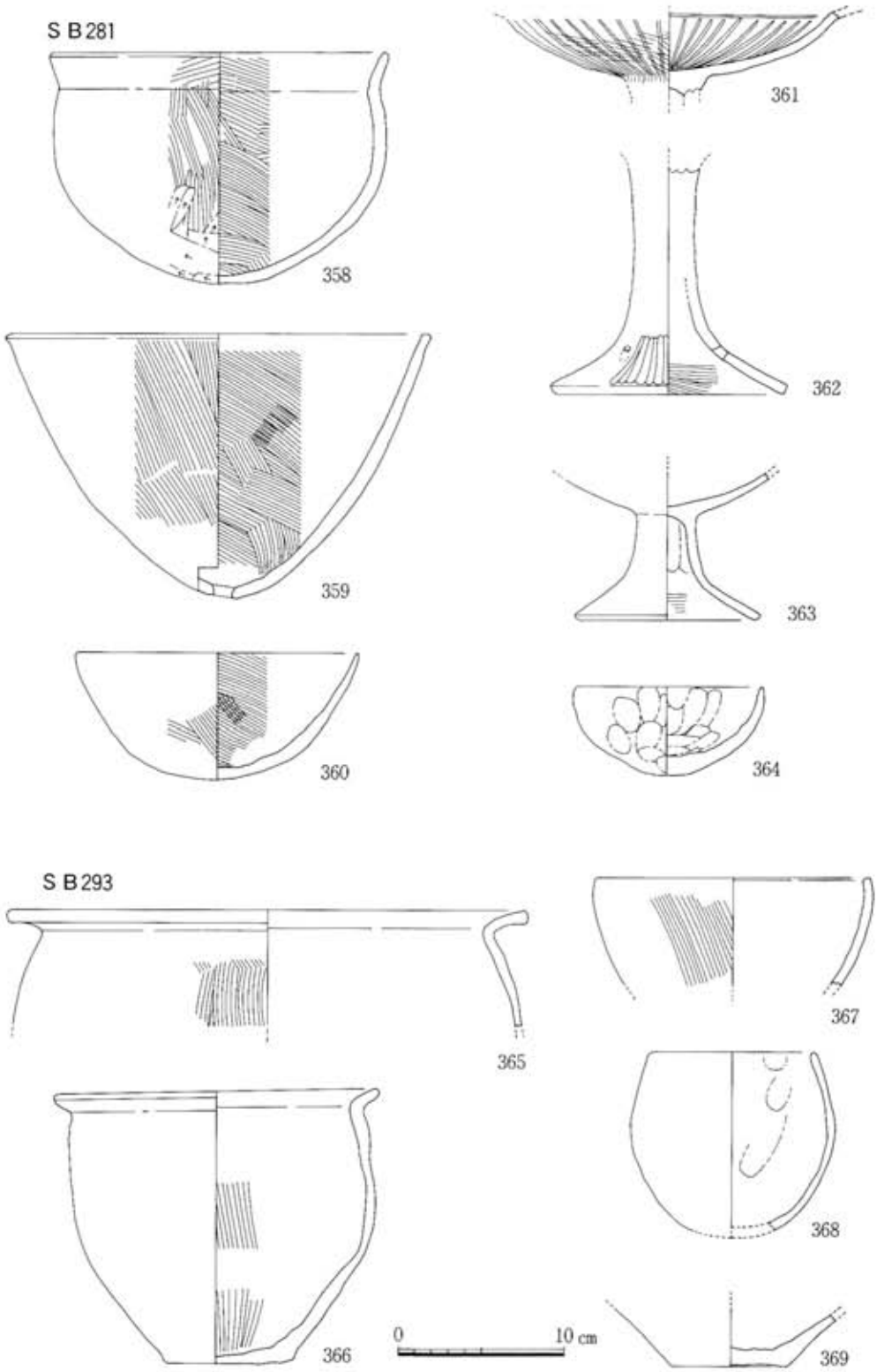


Fig.96　竪穴住居跡ほか出土土器 5　　S B 261 ・ S B 293　(1/4)

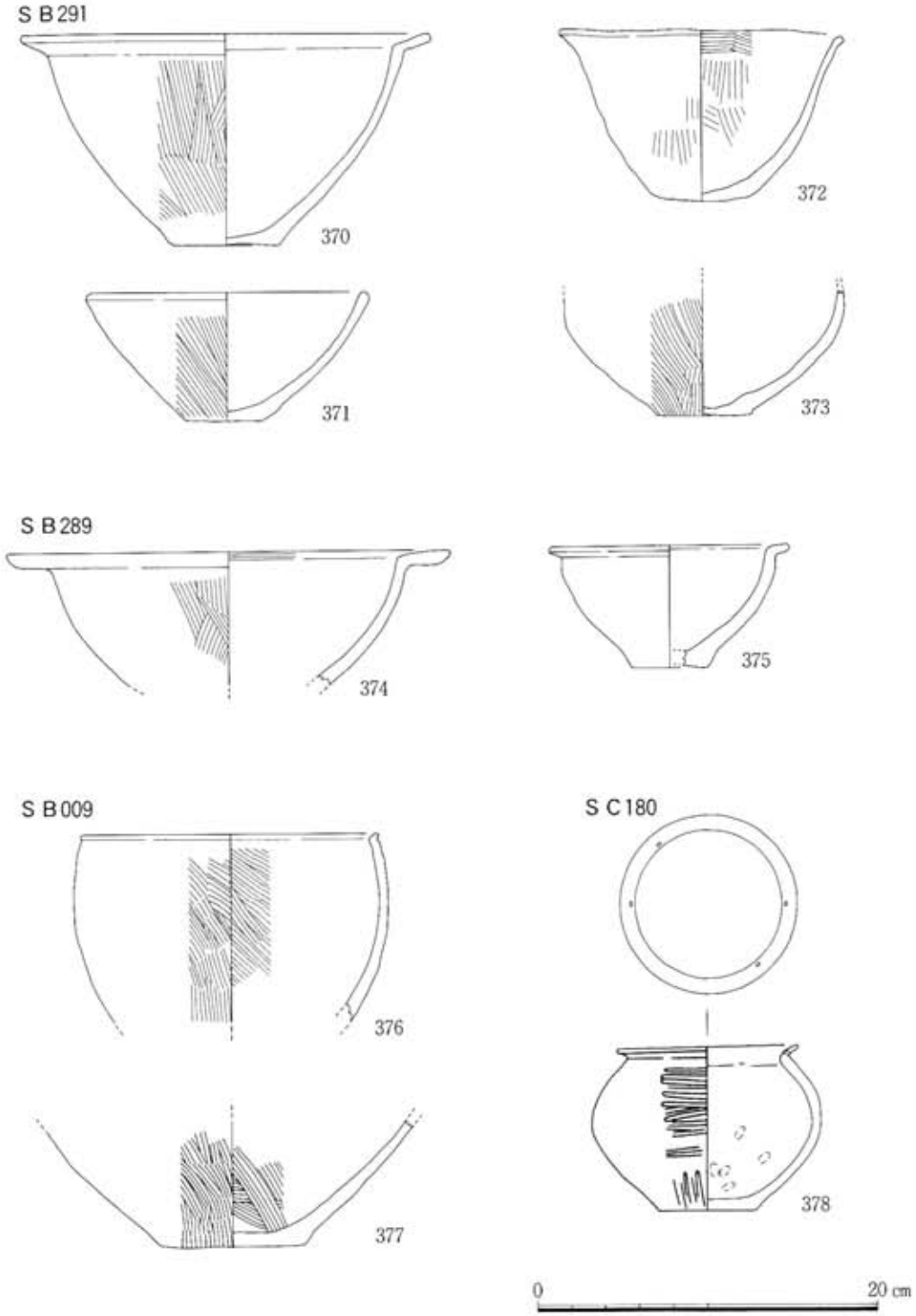


Fig. 97 竪穴住居跡ほか出土土器 6 S B291・S B281・S B009・S C180 (¼)

Tab. 3　弥生土器一覧表

Fig.-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
64－24 8803031	S J 233	甕棺 上甕	口径　32.3 胴径　38.5 器高　37.3	口縁部はく字形に折れ胴部との境に三角突帯がめぐる。口唇部と突帯にヘラ刻目。胴部は球状丸底。	内外面ともハケ目、のち口縁部内面と胴外面下半ナデ。内面に丹を塗布する。明茶褐色で砂粒含む。
－25 8803035	S J 233	甕棺 下甕(壺)	胴径　33.6 残高　35.2	く字口縁部打欠き。胴部はやや尻すぼみでわずかに平底をとどめる。頸部に三角突帯、胴部下位に台形突帯。	内外面ともハケ目、のち胴部突帯以下ナデ。内面に厚く丹を塗る。茶褐色で砂粒含む。
－26 8805890	S J 237	甕棺	胴径　59.0 残高　47.2	胴部上位欠失。底部は小さく不安定な平底で、胴部やや下位に三角突帯をめぐらせ刻目を施す。	内外面ともハケ目。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
65－27 8900548	S D019東 上層	〃	口径　45.2 胴径　68.0 残高　86.2	口縁はく字に折れ、胴部中位が張り、平底か、口唇刻目、口縁下に三角突帯、胴下位に刻目台形突帯。	内外面ともハケ目のあと口縁外面ナデ。褐色で砂粒含む。
－28 8803047	S D019 3 F区上層	〃	口径　54.4 胴径　54.2 器高　77.0	口縁部はかすかに折れて口唇部刻目。胴部は張りがなくレンズ状底部。口縁下と胴部に刻目をもつ偏平突帯3条。	内外面ともハケ目、茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－30 8800696	S D204	〃	口径　65.0 胴径　67.2 残高　72.0	口縁部は稜をなさず急に外反、胴部は下膨らみで口縁下1条、胴部3条の偏平突帯をめぐらす。	内外面ハケ目。褐白色で軟質、砂粒含む。
－29 8802867	S D019 2 G区上層	〃	口径　42.2 胴径　37.6 器高　56.7	口縁部はく字に折れて開き、胴部は張りがなく底部はレンズ状。口縁下に台形突帯をめぐらせ刻目を施す。	内外面ともハケ目のあと胴外面下端ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－31 8900799	S D019 4 F区下層	〃	口径　65.2 胴径　59.7 残高　60.0	口縁部は大きく外反し胴部にかけ壺状にゆるくS字形。底部はレンズ状。口唇部刻目、口縁下と胴部に三角突帯。	外面タタキ目のあと十分ナデ、内面ナデ。明茶褐色で砂粒含む。
66－32 8802802	S D019 2 G区下層	甕	口径　25.0 胴径　29.5 残高　46.6	大型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は長胴で張りが少なくわずかに平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと、口縁内面ナデ、胴外面はミガキ風にヘラナデ、茶褐色で砂粒少し含む。
－33 8803033	S D204 上層	〃	口径　25.6 胴径　29.3 器高　43.3	〃	内外面ともハケ目のあと、胴外面下半板小口ナデ、他指ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－34 8802875	S D019 2 G区下層	〃	口径　25.4 胴径　25.9 器高　40.4	〃	内外面ハケ目のあと胴内面下位ナデ。褐色で砂粒含む。
－35 8801264	S D204	〃	口径　22.5 胴径　25.8 器高　42.3	大型甕。口縁部はく字に折れて長く、胴部は中位径が最大となる長胴で丸底部に径3㎜の焼成後穿孔1個。	口縁部ナデ。胴部は内面ハケ目、外面タタキ目のあと下半ナデ。褐色で砂粒多く含む。
67－36 8803030	S D019 5 F区下層	〃	口径　22.2 胴径　25.0 器高　36.9	大型甕。口縁部はく字におれて、胴部は中位やや上に最大径をおく長胴でわずかに平底の名残りをとどめる。	口縁部ハケ目、胴部はハケ目のあと内面下半ナデ、外面下半板小口タテナデ。茶褐色で微砂粒含む。
－37 8712479	S D019 6 F区上層	〃	口径　22.6 胴径　25.1 器高　37.8	〃	口縁部ハケ目後ナデ。胴部は内面板小口ナデのあと下半ナデ、外面タタキ目のあと下半ナデ。茶褐色で粗砂粒含む。
－38 8802829	S D019 2 G区下層	〃	口径　21.3 胴径　24.7 器高　34.6	口縁部はく字に折れ、胴部は中位やや上に最大径をおく長胴で底部はほぼ丸底。	口縁部と胴部内面ハケ目、胴外面は下半3タタキ目のあとハケ目、さらに下端ヘラナデ。赤褐色で砂粒多。
－39 8812488	S D019 2 G区上層	〃	口径　22.6 胴径　25.9 器高　39.6	〃	口縁部と胴部内面ハケ目。胴外面はタタキ目後下半ハケ目、さらに下端ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
68－40 8900778	S D019東 下層	甕	口径 20.7 胴径 21.7 器高 28.0	やや大型の甕。口縁部はく字に折れ、胴部は最大径が中位やや上にあり平底の名残りをとどめる。	口縁部ハケ目後外ナデ。胴内面ハケ目後内ナデ。胴外面タタキ目後ハケ目、下半ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－41 8900934	S D019 4 F区	〃	口径 25.6 胴径 25.6 器高 32.8	大型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は中位やや上に最大径をおき平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと胴部内面下半と外面下端ナデ。暗褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－42 8900541	S D004 上層	〃	口径 22.8 胴径 23.6 器高 33.7	大型甕。口縁部はややあまくく字に折れ、胴部は中位やや上に最大径をおき平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと口縁部、胴内面および外面下半ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－43 8803673	S D019 8 E区上層	〃	口径 20.5 胴径 23.4 器高 31.4	大型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は中位に最大径をおき長胴気味で平底の名残りをとどめる。	内外面ともハケ目のあと口縁部と胴内外下位ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－44 8712478	S D019 8 E区上層	〃	口径 20.1 胴径 23.0 器高 34.0	大型甕。口縁部はあまくく字に折れて立ち、胴部は上位がやや張って下半が急にすぼみ尖底状。	胴部外面上位にタタキ目を残し内外面ハケ目、さらに胴内面下半ナデ。明褐色で黒斑、煤付着。砂粒含。
－45 8712487	S D019 6 F区	〃	口径 19.5 胴径 23.5 器高 32.9	大型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は上位が張って下半が急にすぼみ尖底状。	胴外面上位タタキ目を残し内外面ともナデ。茶褐色で黒斑があり、粗砂粒含む。
69－46 8801229	S D019東 下層	〃	口径 17.3 胴径 18.6 器高 22.7	中型甕。口縁部はく字に折れてやや外反。胴部は中位やや上に最大径をおき平底。	内外面ハケ目のあと内面底付近ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－47 8711585	S D019 6 F区上層	〃	口径 15.4 胴径 16.5 器高 22.2	中型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は中位やや上に最大径をおき小さな平底。	内外面ハケ目のあと胴内面下半ナデ、外面下半ヘラケズリ。褐色で黒斑あり、煤付着。粗砂粒多。
－48 8802907	S D019東	〃	口径 17.6 胴径 18.4 器高 26.3	中型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は長胴気味で下位がやや急にすぼみ平底。	口縁および胴内面ナデ、胴外面にハケ目を残す。内面黒色、外面暗褐色で微砂粒多。
－49 8900683	S D019東 下層	〃	口径 19.6 胴径 20.8 器高 26.3	中型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は上位がやや張り不安定な平底。	内外面ハケ目のあと胴外面下位ナデ。茶褐色で粗砂粒多く含む。
－50 8802853	S D019東 下層	〃	口径 16.6 胴径 18.0 器高 26.3	中型甕。口縁はく字に折れてややあつく、胴部は張りがなく長胴気味で歪み、不安定な平底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下位ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－51 8802997	S D019 6 F区下層	〃	口径 14.6 胴径 19.0 器高 28.9	中型甕。口縁はく字に折れ、胴部は中位に最大径をおき長胴で尖底状。	内外面ハケ目のあと胴外面下半ナデ。褐色で胴下半に煤付着。微砂粒多く含む。
－52 8803669	S D019 5 F区下層	〃	口径 20.0 胴径 19.4 器高 26.6	中型甕。口縁部はやや甘くく字に折れ、胴部は張りがなく長胴気味の尖底状。器壁が厚い。	口縁部ハケ目後ナデ。胴外面タタキ後ハケ、さらに下半ヘラケズリ、内面ハケ目後ナデ。茶褐色で砂粒含。
－53 8711508	S D019 5 F区上層	〃	口径 13.7 胴径 16.7 器高 25.9	中型甕。口縁部はやや甘くく字に折れて立ち、胴部は完全に下膨れの長胴丸底。器壁が厚い。	口縁部ナデ。胴外面タタキ後下半ヘラケズリとハケ目、ナデ、内面ハケ目後ナデ。褐色で粗砂粒含。
－54 8712919	S D019 5 E区上層	〃	口径 15.7 胴径 18.1 器高 25.4	中型甕。口縁部は甘く折れて立ち、胴部は張りがなく長胴気味で不安定な平底。粗製。	内外面ハケ目のあと胴外面下半ナデ。明褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
70－55 8802847	S D019 2 G区上層	〃	口径 14.5 胴径 15.4 器高 18.1	小型甕。口縁部はく字におれて端部が薄く、胴部は中位やや上に最大径をおき、底部に平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと胴内面下半と外面下半ナデ。明茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
70－56 8801207	S D019 4 F区	甕	口径　15.8 胴径　13.7 器高　17.9	小型甕。口縁部はやや甘くく字に折れ、胴部は張りがなく底部は小さく平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと口縁と胴内面および胴外面下位ナデ。暗褐色で砂粒多く含む。
－57 8712972	S D019 2 G区中層	〃	口径　14.0 胴径　14.9 器高　18.7	小型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は中位に最大径をおきほぼ丸底。	胴外面上半にタタキ目を残し、口縁ハケ目、他ヘラナデ仕上げ。茶褐色で黒斑、煤付着。砂粒多く含む。
－58 8712997	S D019 3 F区上層	〃	口径　12.8 胴径　11.0 器高　14.1	小型甕。口縁部は甘く折れて立ち、胴部は張らず丸底。	胴外面タタキ目。口縁と胴内面ハケ目のあと胴内外面下位ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－59 8802912	S D019 4 F区下層	〃	口径　10.3 胴径　11.8 器高　14.9	小型甕。口縁部は短かくやや不明瞭に折れ、胴部は下膨れでほぼ丸底。	内外面ヘラナデ。明褐色で粗砂粒多く含む。胴外面に黒色有機物付着。
－60 8712472	S D019 6 F区上層	〃	口径　16.1 胴径　22.1 器高　23.4	中型甕。口縁部は胴部から明瞭に折れて外反し端部が薄く、胴部は中位やや上が張り、尖底状。	口縁部ハケ目後ナデ。胴部は内面ハケ目後ナデ、外面タタキ目後下半ハケ目。明茶褐色で、煤付着、砂粒含。
－61 8712989	S D019 2 G区上層	台付甕	口径　15.8 胴径　19.0 器高　29.2	台付中型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は中位径最大で長胴気味。台は低く開き、厚い。	内外面ハケ目のあと口縁と台ナデ。茶褐色で砂粒含。
－62 8802807	S D019 2 G区上層	〃	口径　13.5 胴径　14.4 器高　24.2	台付中型甕。口縁部は不明瞭に折れて立ち、端部は波状に雑。胴部は張りがなく、台部はわりと高い。	内外面ハケ目のあと胴外面下位ヘラナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－63 8712998	S D019 3 F区上層	〃	口径　16.4 胴径　15.1 残高　18.3	台付小型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は上位に最大径をおく。	胴外面下半に一部タタキ目を残し、内外面ハケ目のあと口縁ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－64 8801232	S D204 上層	〃	口径　17.6 胴径　20.0 器高　25.0	台付中型甕。口縁部はく字に折れて端部ややめくれ、胴部は中位が張って低く開く台が付く。	内外面ハケ目のあとていねいなナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－65 8712921	S D019 2 G区中層	〃	口径　16.8 胴径　16.6 器高　24.2	台付小型甕。口縁部は短かくく字に折れ、胴部は尻すぼみで張りがなく、台はやや高い。	内外面ハケ目のあと胴外面下半ナデ。茶褐色で粗砂粒多く含む。
－66 8712948	S D019 3 F区中層	〃	胴径　14.5 残高　15.2	台付小型甕。胴部は下膨れ気味で台は低く開く。	胴部は外面タタキ目のあとナデ、内面ハケ目後ナデ。茶褐色で砂粒含む。
71－67 8802854	S D019東 下層	甕	口径　24.0 器高　22.0	短胴大型甕。口縁部はく字に折れてやや外反し、胴部は中位が張って低く不安定な平底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴内面下半および外面下半ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－68 8803670	S D019 5 F区下層	〃	口径　21.5 胴径　27.2 器高　23.5	短胴大型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は上位が張って低く、平底の名残り。口唇部に刻目、口縁下に三角突帯。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下半ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－69 8802849	S D019 2 G区	〃	口径　25.7 胴径　30.0 器高　24.5	短胴大型甕。口縁部は稜をなさずく字に折れ、胴部は上位が張って低く、平底の名残り、口縁下に三角突帯。	内外面ハケ目。明茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－70 8712923	S D019 2 G区中層	〃	口径　26.0 胴径　27.5 残高　21.6	短胴大型甕。口縁部はく字に折れ、胴部は上位が張って低く、底部は平底の名残りをとどめる程度か。	内外面ハケ目のあと胴外面下半ヘラナデ。暗褐色で黒斑が砂粒含む。
－71 8802910	S D019 4 F区下層	壺	口径　17.1 胴径　22.3 器高　21.6	短胴甕。口縁部はく字に折れて頸がしまり、胴部は中位が張って平底の名残り。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、胴外面下半ヘラナデ。褐色で微砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
71－72 8900771	S D019東 下層	甕	口径 16.5 胴径 20.1 器高 17.3	短胴甕。口縁部はく字に折れ、胴部は上位が張って不安定な平底。	内外面ハケ目。明褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－73 8711587	S D019 7 E区下層	〃	口径 15.9 胴径 19.5 器高 18.6	短胴甕。口縁部はく字に折れ、胴部は球状に張って不安定な平底。	口縁ナデ。胴外面タタキ目後ナデ、内面ヘラナデ。褐色で砂粒多く含む。
－74 8714088	S D019 2 G区	〃	口径 19.4 胴径 20.5 器高 18.3	短胴甕。口縁部はく字に折れ、胴部はややつぶれた球状で丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴内面および胴外面下半ナデ。白褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－75 8712944	S D019 5 F区下層	〃	口径 18.8 胴径 20.4 器高 16.8	短胴甕。口縁部は短く外反気味に折れ、胴部は上位がやや張って平底の名残り。器壁が厚い。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下半ナデ。外面赤褐色、内面暗褐色で砂粒多く含む。
－76 8714087	S D019 7 G区上層	〃	口径 18.5 胴径 19.8 器高 17.4	短胴甕。口縁部はく字に折れ、胴部は下膨れ気味で丸底。	胴外面下半にタタキ目痕を残し、内外面ハケ目のあと口縁ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
72－77 8900350	S D019 6 F区下層	壺	口径 15.6 残高 4.6	口縁部は袋状の名残りをとどめ、明瞭な稜をなさずに折れ。	口頸部ハケ目のあと口縁および頸内面ナデ。茶褐色で微砂粒含む。
－78 8712920	S D019 8 E区	〃	口径 6.4 残高 2.9	複合口縁の特殊小型壺か。頸部に刻目突帯をめぐらせ、口頸部に３段の刺突列点文。	口頸部の内外面ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－79 8712491	S D019東 上層	〃	口径 18.7 残高 19.5	複合口縁壺。頸は直立したあと外反し、口縁部はやや内湾気味に内傾して折れる頸胴間に三角突帯。	内外面ハケ目のあと口縁と頸内面下半ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－80 8803005	S D019東 上層	〃	口径 20.0 胴径 31.0 器高 41.9	複合口縁壺。頸は直立から外反、口縁はおれて直に内傾。胴は中位やや上で張り不安定な平底。頸胴間突帯。	内外面ハケ目のあと口縁内面と頸内面下半ナデ。褐色で砂粒含む。
－81 8804802	S D019東 下層	〃	口径 13.1 胴径 26.4 器高 29.7	複合口縁壺。頸部は直立から外反、胴部は上位が張り不安定な平底。櫛描文は頸胴間１周、胴肩位波状。	内外面ハケ目のあとていねいなナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－82 8802865	S D019東 下層	〃	胴径 28.9 残高 27.7	複合口縁壺。頸部はやや外反気味に立ち、胴部は上位がつよく張る。頸胴間櫛描文、胴肩に４対の円形浮文。	内外面ハケ目のあと頸内外面ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－83 8803672	S D019東 下層	〃	口径 14.0 胴径 23.0 器高 30.1	複合口縁壺。頸は直立から外反し、口縁が折れて内傾。胴は頸と不明瞭な稜をなし、最大径中位で平底。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、胴外面下位板小口ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－84 8803679	S D019東 下層	〃	残高 14.2	複合口縁壺。頸は直立から外反、胴は中位最大径か。櫛描文は頸胴間１周、胴肩位３方に同心円文。	内外面ハケ目。茶褐色で砂粒含む。
73－85 8712918	S D019 8 E区下層	〃	口径 23.4 胴径 28.6 残高 28.8	複合口縁壺。頸外反、口縁は急に屈曲内傾し、胴は上位が張る。口縁屈曲部に刻目、頸胴間に刻目三角突帯。	内外面ハケ目のあと口縁と頸外面下半から胴外面ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－86 8802810	S D019 2 G区下層	〃	口径 27.3 胴径 30.7 器高 34.9	複合口縁壺。頸外反、口縁は急に屈曲内傾し端部屈曲外反。胴は中位が張り丸底気味。頸胴間三角突帯。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－87 8802916	S D204 上層	〃	口径 23.7 胴径 29.1 器高 37.0	複合口縁壺。頸外反、口縁は屈曲直立から端部屈曲外反、胴は中位やや上が張り丸底気味、頸胴間刻目突帯。	内外面ハケ目のあと全体にナデ。茶褐色で砂粒多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
73－88 8802939	S D019	壺	口径　20.8 胴径　30.1 器高　38.5	複合口縁壺。頸は直立から外反、口縁部は屈曲直立から端外折。胴は尖底気味の球状で頸胴間と胴に刻目突帯。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、頸と胴の外面かるくナデ。明褐色で砂粒少し含む。
－89 8801265	S D204 下層	〃	口径　31.6 残高　16.0	頸部は短く直立から外反、口縁部は屈曲内傾して端部が外に折れる。	口頸部は内外面ハケ目のあと口縁ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－90 8900432	S D022 2 G区下層	〃	口径　18.0 残高　8.3	頸部は短かく三角突帯をめぐらせ、口縁部は屈曲して直立気味にやや内傾。器壁が厚い。	内外面タタキ目のあとナデ。褐色で微砂粒含む。
74－91 8805886	S D019東 下層	〃	口径　22.0 胴径　28.0 残高　27.2	口縁部は大きく外反して開き口唇に刻目。胴部は中位やや上が張り球状。	内外面ハケ目のあと口縁外面、胴内面および胴外面の肩と下半ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－92 8712490	S D204 上層	〃	口径　19.0 胴径　29.3 器高　31.7	口縁部はく字に外反し口唇に刻目。胴部は中位が張り平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと口縁と胴内面下半および外面下半ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－93 8802860	S D019 3 F区中層	〃	口径　20.4 胴径　25.9 器高　29.6	口縁部はく字に外反して口唇に刻目。胴部は中位やや上で張り丸底。頸胴間に三角突帯、突帯下にヘラ刻目。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、胴外面下半はケズリにちかいヘラナデ。褐色で砂粒含む。
－94 8711381	S D019東 上層	〃	口径　18.8 胴径　26.1 器高　31.6	口縁部はく字に外反して口唇に刻目。頸は細くしまる。胴部は中位やや上が張り、平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと口縁かるくナデ、胴外面下半ヘラナデ。褐色で砂粒含む。
－95 8802876	S D019東 下層	〃	口径　16.0 胴径　29.5 器高　35.2	口縁部はく字に外反し頸部が細くしまる。胴部は中位が張りやや長胴で不安定な平底。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、胴外面かるくナデ。褐色で砂粒を含む。
－96 8900682	S D019東 上層	〃	口径　17.3 胴径　25.4 器高　27.7	口縁部は不明瞭に折れて外反。胴部は中位やや上がつよく張り不安定な平底。	内外面ハケ目のあと外面ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒やや多く含む。
75－97 8803680	S D019東 下層	〃	口径　17.7 胴径　27.1 器高　34.0	口縁部はく字に折れ外反、頸は細くしまり、胴部は長胴気味で中位やや上が張り不安定な平底。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒を含む。
－98 8712941	S D019 2 G区中層	〃	口径　19.0 胴径　24.9 器高　29.9	〃	胴外面にタタキ目痕を残し、内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下半ナデ。褐色で砂粒含む。
－99 8802871	S D019 6 F区下層	〃	口径　15.4 胴径　24.2 器高　29.1	〃	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下半ナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒含む。
－100 8802806	S D019 2 G区下層	〃	口径　13.9 胴径　26.0 器高　33.1	口縁部はく字に外反し頸部がつよくしまる。胴部は中位で最大径となり丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下半ナデ。白褐色で砂粒含む。
－101 8712494	S D019 2 G区上層	〃	口径　14.8 胴径　25.6 器高　34.2	口縁部は折れて直立気味、胴部は上位が張り長胴気味で、不安定な平底。	胴外面にタタキ目痕少し残る。内外面ハケ目のあと胴内面下位と外面下半ナデ。明褐色で粗砂粒含む。
－102 8803037	S D019 5 F区下層	〃	口径　12.9 胴径　30.5 器高　34.2	頸部はつよくしまり、口縁部は直立気味にやや外反。胴部は中位がつよく張りほぼ丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
76－103 8712489	S D019東 下層	〃	口径　11.3 胴径　21.8 器高　27.2	口縁部はく字に折れ頸部がつよくしまる。胴部は中位が張り、不安定な平底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面ナデか。白褐色で砂粒多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
76－104 8802828	S D019	壺	口径 14.7 胴径 20.0 器高 25.0	口縁部は屈曲外反して長く伸び、頸部がつよくしまる。胴部は中位やや上が張り、平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと胴外面ヘラナデ。明褐色でで黒斑があり砂粒やや多く含む。
－105 8802908	S D019 4 F区下層	〃	口径 13.8 胴径 20.7 器高 23.5	口縁部はほぼ直立、胴部は中位やや上が張ってほぼ丸底。	内外面ハケ目のあと口縁部と胴外面かるくナデ。茶褐色で砂粒含む。
－106 8802809	S D019 7 E区	〃	口径 10.7 胴径 19.4 器高 19.5	口縁部は内傾直行し、胴部は球状丸底。	内面ハケ目、外面タタキ目のあとナデ。明褐色で砂粒多く含む。
－107 8712950	S D019 3 F区	〃	口径 13.2 胴径 17.2 器高 15.3	口縁部はく字に折れて立ち、胴部は中位が張り出し尖底状。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、胴外面下半をつよくヘラナデ。明茶褐色で微砂粒含む。
－108 8900537	S D019東 下層	〃	口径 14.6 胴径 16.3 器高 16.3	口縁部は屈曲外反して長く伸び、頸部がつよくしまる。胴部は中位が張り出し小さな平底。	内面ナデ、外面ハケ目のあと口縁と胴下半ナデ。褐色で微砂粒含む。
－109 8713000	S D019 3 F区	〃	口径 12.6 胴径 17.1 器高 17.3	口縁部はほぼ直立し、胴部は球状にちかく丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面下位ナデ。明茶褐色で砂粒含む。
－110 8711568	S D019 3 G区	〃	口径 11.9 胴径 16.8 器高 18.0	〃	口縁外面タタキ目痕。内外面ハケ目のあと胴外面下半ナデ。褐色で黒斑があり砂粒多く含む。
－111 8712926	S D019 2 G区上層	〃	口径 9.6 胴径 15.5 器高 15.0	〃	胴外面下位タタキ目痕。口縁ハケ目のあと外面ナデ、胴部ハケ目のあと内面と外面下半ヘラナデ。茶褐色で砂粒多。
－112 8801212	S D019 3 F区中層	〃	口径 12.8 胴径 16.2 器高 14.0	口縁部はほぼ直立し、胴部は上位が張って尖底状。	口縁ハケ目、胴内面ナデ、外面タタキのあと下半ヘラケズリ。暗褐色で砂粒含む。
－113 8712965	S D019 8 G区	〃	口径 10.1 胴径 15.4 器高 15.2	口縁部はく字に折れて立ち、胴部は球状にちかい丸底。	胴外面タタキ目痕。内外面ハケ目のあと口縁外面と胴内面ナデ、外面下半ヘラナデ。白褐色で微砂粒含む。
－114 8712437	S D019 6 F区上層	〃	口径 13.2 胴径 16.7 器高 15.6	〃	内外面ハケ目のあと胴外面下半ヘラケズリ。茶褐色で粗砂粒含む。
－115 8712983	S D019 2 G区上層	〃	口径 11.7 胴径 12.9 器高 12.3	口縁部は不明瞭に折れて立ち、胴部は球状丸底。器壁が厚い。	内外面ハケ目。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－116 8802911	S D019 4 F区下層	〃	口径 11.4 胴径 13.6 器高 11.5	口縁部はあまくく字に折れ、胴部はややつぶれて丸底。	外面ハケ目、口縁部と内面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
77－117 8712922	S D019 2 G区	〃	口径 15.3 胴径 22.0 器高 20.0	口縁部直立気味、胴部は上位が張り丸底。	胴外面にハケ目目痕を残し内外面ナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒含む。
－118 8712930	S D019 2 G区中層	〃	口径 15.7 胴径 19.4 器高 15.2	口縁部はやや不明瞭に折れて直立気味。胴部は偏球状丸底。	内外面ハケ目。茶褐色で黒斑があり砂粒含む。
－119 8805888	S D019 3 F区下層	〃	口径 11.6 胴径 16.0 器高 13.1	口縁部直立、胴部は上位が張り、尖り気味の丸底。	内外面ハケ目のあと口縁外面と胴内面ナデ。茶褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
77－120 8711597	S D019 2 G区上層	壺	口径　11.9 胴径　17.7 器高　13.0	口縁部直立、胴部は低く中位がつよく張り出し丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と胴外面ナデ。明茶褐色で砂粒含む。
－121 8714112	S D019 3 G区	〃	口径　11.1 胴径　14.2 器高　12.4	口縁部はやや不明瞭に折れやや外反し、胴部は中位やや上が張り丸底。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－122 8712945	S D019 5 F区上層	〃	口径　13.6 胴径　19.5 器高　15.1	口縁部は短くく字に折れ、胴部は中位が張って偏球状丸底。	内外面ハケ目のあと口縁外面ナデ。明茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－123 8802857	S D019東 下層	〃	胴径　20.1 残高　13.2	口縁部はく字に折れ、胴部は中位がつよく張って平底をとどめる。胴部中位と下位に焼成後穿孔２孔。	胴部は内外面ハケ目。茶褐色で砂粒含む。
－124 8802859	S D204 上層	〃	口径　12.6 胴径　16.0 器高　14.0	口縁部はく字に折れ、胴部は球状丸底。	口縁ハケ目のあと外面ナデ。胴外面ハケ目、内面ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－125 8712448	S D019 2 G区中層	台付壺	口径　13.0 胴径　17.7 残高　18.4	口縁部はく字に折れて外反。胴部は中位がつよく張り、台部は高く大きく開く。	内外面ハケ目のあとナデ。褐色で砂粒含む。精製。
－126 8900332	S D019東 下層	壺	口径　8.0 胴径　12.2 器高　12.5	小型壺。口縁部は直立気味にやや長く、胴部は中位が突出状に張り平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと外面ナデ。明褐色で砂粒多く含む。
－127 8712984	S D019 2 G区上層	〃	口径　10.3 胴径　12.3 器高　9.5	小型壺。口縁部は折れて直立気味、胴部は低く中位やや上が張り丸底。	内外面ハケ目のあと口縁外面と胴内面ナデ、胴外面下位ヘラナデ。明茶褐色で砂粒含む。
－128 8900333	S D019東 下層	〃	口径　6.8 胴径　9.0 器高　6.8	小型壺。口縁部は直立気味にやや長く、胴部は低くつぶれて中位が突出状に張り丸底。	内面一部にハケ目を残し、内外面ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－129 8801219	S D019 3 F区下層	〃	口径　7.6 胴径　8.0 器高　5.0	小型壺。口縁部は不明瞭にく字に折れて立ち、胴部は低くつぶれ丸底。	内外面ハケ目のあと明茶褐色で砂粒含む。
－130 8900684	S D019 5 F区下層	長頸壺	口径　9.6 残高　18.5	頸部は細くしまってから外反気味に伸び、胴部は上位が張る。	内面ハケ目のあとナデ、外面ヘラミガキ。茶褐色で微砂粒含む。精製。
－131 8802808	S D019 7 E区	〃	胴径　16.1 残高　9.1	胴部は中位が突出状に張り平底の名残りをとどめる。	胴部は内面ナデ、外面ヘラミガキ。茶褐色で黒斑があり、砂粒やや多く含む。
－132 8900781	S D019 7 E・8 E区	〃	胴径　16.2 残高　5.5	胴部は低くつぶれて中位が突出状に張る。	胴部は一部ハケ目を残し内面ナデ、外面ヘラミガキ。茶褐色で砂粒含まない。精製。
－133 8711582	S D019 5 F区	壺	胴径　17.7 残高　8.0	胴部は低くつぶれ下膨れ丸底。	内面ハケ目、外面ヘラミガキ。茶褐色で砂粒含む。
－134 8712985	S D019 2 G区中層	〃	胴径　17.6 残高　9.3	胴部は低くつぶれ下膨れ丸底。頸部直立しやや広口。	内外面ハケ目のあと胴内面上半ナデ、外面は頸と胴下半ナデのあとヘラ暗文。明褐色で砂粒含まず。精製。
78－135 8900681	S D019東 下層	高杯	口径　32.7 坏高　11.0	坏部口縁は明瞭に折れて直立から端部外反。	坏部は内外面ハケ目のあとナデ。褐色で砂粒多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
78－136 8714111	S D019 3 G区	高杯	口径 28.0 坏高 12.0	坏部は深く、口縁は不明瞭に折れて外反。	外面一部にタタキ目痕。内外面ハケ目のあと坏体部内外面ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－137 8801225	S D019 6 F区下層	〃	口径 31.2 坏高 9.3	坏部口縁は体と稜をなして立ち上がり外反し端部がめくれる。	坏内外面ヘラミガキ。明褐色で砂粒やや多く含む。
－138 8714102	S D019 5 F区上層	〃	口径 33.0 坏高 9.4	坏部口縁は体と稜をなして立ち上がり外反。	坏内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で砂粒含む。
－139 8900428	S D019 6 F区上層	〃	口径 39.0 残高 6.8	坏部口縁は体と稜をなして立ち上がり外反。	坏部は口縁内外面ナデ、体内外面ヘラミガキ。明褐色で砂粒含む。
－140 8900775	S D019東	〃	口径 37.0 残高 9.4	〃	坏部は口縁内外面ヨコヘラミガキ、体部タテヘラミガキ。赤褐色で砂粒含む。
－141 8900539	S D019東	〃	口径 33.5 残高 11.6	坏部は深く、口縁は体とかるく稜をなして立ち上がり外反。	坏部内外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－142 8900426	S D019 4 F区下層	〃	口径 30.6 残高 6.5	坏部は口縁はややかるく体と稜をなして立ち上がり、やや外反。	坏部は内外面ともナデか。明褐色で砂粒多く含む。
－143 8900686	S D019 8 E区下層	〃	口径 27.0 底径 16.5 器高 21.8	坏部口縁は稜をなして立ち上がり外反。裾が筒から不明瞭に屈曲してやや内湾気味に開き３方透し。	坏部は口縁と体内面ナデ、体外面タテヘラミガキか。脚部外面タテヘラミガキ、内面ハケ目後ナデ。茶褐色で砂粒多。
－144 8801252	S D019東 下層	〃	口径 22.8 坏高 7.8	坏部は体が丸味をもち、口縁は体と稜をなして直立したあと折れて外反。	坏部内外面ハケ目後ナデ。 脚部筒内外面ナデ。赤褐色で砂粒多く含む。
－145 8804834	S D019東 上層	〃	底径 22.8 坏高 6.5	坏部は体が直線的に開き口縁が不明瞭に折れてやや外反。脚部は裾が不明瞭に屈曲して内湾気味に開き高い。	坏外面にタタキ目痕、脚外面にハケ目痕。坏脚とも内外面ナデ。褐色で砂粒多く含む。
－146 8712468	S D019 6 F区上層	〃	底径 15.8 脚高 14.5	脚部は裾が筒から不明瞭に屈曲して内湾気味に開き高い。	脚部内外面ハケ目のあとナデ、筒内面ヘラケズリ。茶褐色で砂粒含む。
79－147 8802936	S D019 5 F区下層	〃	口径 30.8 坏高 9.7	坏部口縁は体とかるく稜をなし外反伸長。脚部は筒から裾がそのまま弧を描き開き３方透し。	坏脚とも内外面ハケ目のあとナデ、明茶褐色で砂粒を殆ど含まない。外面に丹塗り痕あり。
－148 8900425	S D019 4 F区下層	〃	口径 35.4 残高 6.8	坏部口縁は体と不明瞭な段をなしてやや急に立ち上がる。	坏部は内外面ヘラミガキか。褐色で微砂粒含む。
－149 8712974	S D019 2 G区上層	〃	口径 26.3 底径 13.2 器高 17.8	坏部口縁は体と段をなして外反伸長。脚部は筒から裾がそのまま弧を描き開き３方透し。	坏部は内外面ハケ目後体外面ヘラミガキ、他ナデ。脚部は内面八ヶ目、外面タテヘラミガキ。茶褐色で砂粒多。
－150 8802995	S D019 8 D区	〃	口径 28.2 底径 15.2 器高 18.6	〃	坏部内外面タテヘラミガキ、脚部は外面タテヘラミガキ、内面ハケ目。明茶褐色で黒斑があり微砂粒含む。
－151 8802935	S D019 5 E区上層	〃	口径 34.9 底径 15.4 器高 23.1	〃	坏脚とも内外面ハケ目のあとナデ、明茶褐色で砂粒を殆ど含まない。外面に丹塗り痕あり。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
79－152 8711589	S D019 3 G区	高杯	口径　34.7 坏高　9.0	坏部は体が浅く、口縁は体と段をなして外反伸長。	内外面ハケ目のあとヘラミガキか。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－153 8900782	S D019 5 F区下層	〃	口径　25.0 坏高　6.9	坏部は体が浅く、口縁は体とほぼ一体化しながらもわずかに段をなす。	坏部内外面ともハケ目のあとタテヘラミガキ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－154 8802818	S D019 上層	〃	口径　26.8 坏高　10.3	坏部は体が浅く、口縁は体と稜をなして急に立ち上がり外反伸長。	坏部は内面ハケ目のあとヘラ暗文、外面ハケ目のあと体タテヘラミガキ。褐色で砂粒含む。
－155 8712470	S D019 6 F区上層	〃	口径　14.6 底径　12.3 器高　18.7	坏部は体が浅く、口縁はかるく段をなし折れて直伸。脚部は裾が不明瞭に屈曲して開き３方透し。	坏脚ともハケ目のあと口縁外面ナデ、筒外面ナデ、裾外面タテヘラミガキ。明褐色で砂粒少し含む。
－156 8802868	S D019 6 F区上層	〃	口径　14.1 底径　11.5 器高　14.9	坏部口縁は体と不明瞭な稜をなし直伸。脚部は直線的に高く開く。	坏脚とも内外面ハケ目。明茶褐色で砂粒含む。
－157 8900797	S D019 2 G区	〃	口径　18.8 底径　12.7 器高　9.9	坏部は鉢形で浅い体から口縁が屈曲直伸。脚部は低く裾が大きく開く。	坏脚ともハケ目のあと口縁内面ヘラ暗文、脚内面ナデ、他タテヘラミガキ。明茶褐色で砂粒殆ど含まず。精製。
－158 8711574	S D019 3 G区	〃	口径　18.0 底径　12.9 器高　11.0	坏部は鉢形で、浅い体から口縁が不明瞭に折れて直伸。脚部は裾が大きく開く。	坏脚ともハケ目のあと坏内外面と脚外面タテヘラミガキ。明茶褐色で砂粒殆ど含まず。精製。
80－159 8714120	S D019 2 G区上層	鉢	口径　36.2 器高　19.6	特大型鉢。口縁部やや内湾、体部は下半が急にすぼみ小さな平底。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、体部外面下位ヘラナデ、底外面タタキ目後ナデ。明褐色で黒斑があり砂粒含む。
－160 8712483	S D019 7 E区下層	〃	口径　21.4 器高　12.6	体部上位内湾、平底。	内外面ハケ目のあと口縁と内面ナデ、体部外面下位ヘラナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒少し含む。
－161 8714100	S D019 5 F区上層	〃	口径　20.7 器高　14.8	体部は深く、丸底。	体部外面にタタキ目痕。内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－162 8802844	S D019 2 G区上層	〃	口径　18.9 器高　9.4	口縁部直立し、丸底。器壁が厚く粗製。	内面ハケ目、外面は体部タタキ目、底部ヘラケズリ。茶褐色で砂粒含む。
－163 8714116	S D019 2 G区上層	〃	口径　17.2 器高　9.8	口縁部直立し、丸底。	内面ハケ目のあと下半ナデ、外面タタキ目のあと下半から底部ヘラケズリ。明褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－164 8805885	S D019東 下層	〃	口径　26.5 残高　12.1	大型鉢。口縁部やや内湾し、口唇はナデでめくれる。やや平底を残すか。	内外面ハケ目のあと外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－165 8712471	S D019 6 F区上層	〃	口径　28.2 器高　13.5	大型鉢。口縁部やや内湾し、体部は下半が急にすぼみ丸底。	内面ハケ目のあと口縁ナデ、外面はタタキ目のあと下半ハケ目、口縁ナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒多。
－166 8805889	S D019 上層	〃	口径　25.0 器高　12.7	大型鉢。口縁部直立し、丸底。	内外面ハケ目のあと口縁内面と体下半から底外面にかけナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－167 8802820	S D019 2 G区上層	〃	口径　22.5 器高　12.0	大型鉢。口縁部内湾し、丸底。	内外面ハケ目のあと下半ナデ。暗褐色で黒斑があり、砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
81－168 8802855	S D019東 下層	鉢	口径 24.8 器高 17.3	大型鉢。口縁部はく字に折れ、体部は上位が張り小さな平底。	内外面ハケ目のあと口縁と体外面下半ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－169 8900536	S D019東 上層	〃	口径 20.1 器高 17.8	口縁部は体部からゆるく折れ端部やや肥厚。体部は張りがなく平底。	内外面ハケ目のあとナデ。褐色で黒斑があり、砂粒やや多く含む。
－170 8802864	S D019東 下層	〃	口径 22.3 器高 13.6	口縁部はく字に折れ、体部は上位が張り不安定な平底。	内外面ハケ目痕。褐色で砂粒を含む。内外面に丹塗り痕か。
－171 8712929	S D019東 下層	〃	口径 20.0 器高 12.6	口縁部はく字に折れて外反、体部は上位がやや張り平底の名残りをとどめる。	内外面ハケ目のあと口縁と体底外面ナデ。明褐色で黒斑があり砂粒少し含む。
－172 8712962	S D019 3 G区西トレ	〃	口径 20.8 器高 13.0	口縁部はく字に折れて外反、体部は上位が張り丸底。	内外面ハケ目のあとナデ。明褐色で黒斑があり砂粒多く含む。
－173 8712447	S D019 2 G区上層	〃	口径 11.3 器高 12.1	〃	内外面ハケ目のあと口縁と底外面ナデ。黄褐色で黒斑があり砂粒少し含む。
－174 8802804	S D019 2 G区	〃	口径 17.7 器高 11.5	口縁部はく字におれて外反。体部は浅く丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と外面ナデ。明茶褐色で砂粒少し含む。
－175 8712954	S D019 3 F区中層	〃	口径 17.6 器高 11.0	口縁部はやや不明瞭におれ外反気味に立ち、胴部は低くつぶれ丸底。	内外面ハケ目のあと内面と体底外面ヘラミガキ。黄褐色で砂粒多く含む。内外面に丹塗痕。
－176 8712431	S D019 2 G区上層	〃	口径 21.6 残高 12.1	口縁部はく字に折れて開き、体部は張りがなく丸底。	外面タタキ目痕。内外面ハケ目のあと体外面下半から底外面ヘラケズリ。暗褐色で黒斑があり砂粒含む。
－177 8711569	S D019 3 G区	〃	口径 24.0 器高 10.2	口縁部は不明瞭に折れて立ち、体部は下膨らみにつぶれ平底。	内外面ハケ目のあと口縁外面ナデ、体外面から底外面ヘラケズリ。茶褐色で砂粒含む。
82－178 8803678	S D019東 下層	〃	口径 17.8 器高 11.3	口縁部はく字に折れ、体部はあまり張らずに深く、不安定な小平底。	内外面にハケ目痕。明褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－179 8900535	S D019東 上層	〃	口径 19.0 器高 13.2	口縁部はく字に折れて外反。体部はやや深く丸味をもち丸底。	口縁ナデ、体部は内面ナデ、外面ハケ目のあと下半から底部ヘラケズリ。褐色で黒斑、砂粒含む。
－180 8804853	S D019 7 E区	〃	口径 18.3 器高 8.7	口縁部はやや不明瞭に折れ、体部は急にすぼみ丸底。	内外面ハケ目のあとナデ、体外面下半ヘラケズリ。褐色で砂粒少し含む。
－181 8803004	S D204 上層	〃	口径 18.6 器高 9.6	口縁部は短くく字に折れ、体部は急にすぼみ丸底。口縁が歪む。	外面タタキ目痕。内外面ハケ目のあと外面ナデ。茶褐色で黒斑があり、微砂粒含む。
－182 8900418	S D019	〃	口径 16.6 器高 9.2	口縁部は体部から不明瞭に折れ薄く外反。丸底。	内面タタキ目後ナデ、外面ハケ目のあとこと底外面ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－183 8712952	S D019 3 F区中層	〃	口径 15.8 器高 8.0	口縁部はやや不明瞭に折れ、体部は張りがなく不安定な平底。	口縁部ナデ。体部は内面ハケ目のあとナデ。外面タタキ目のあとナデ。茶褐色で黒斑あり、砂粒少し含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
82－184 82－184	S D019 2G区上層	鉢	口径　16.2 器高　8.3	口縁部はく字に折れ、体部は丸味をもち丸底。	内外面ハケ目のあと体内外面ヘラミガキ、口縁外面ナデ。褐色で砂粒少し含む。
－185 8712927	S D204 下層	〃	口径　14.4 器高　7.0	口縁部はく字に折れ外反し体部は浅く丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と体上位内外面ナデ。褐色で砂粒少し含む。
－186 8712968	S D019 5 F区下層	〃	口径　15.9 器高　6.0	〃	内外面ハケ目のあと口縁と体内面ナデ、体外面ヘラナデ。明褐色で砂粒多く含む。
－187 8712996	S D019 3 F区上層	〃	口径　16.0 底径　10.6 器高　11.2	鉢部は口縁がやや不明瞭に折れ、体部は張りがなく、台部は低く外に開く。	鉢部内外面ナデか。台部は内面ハケ目、外面ナデか。茶褐色で砂粒多く含む。
－188 8802869	S D019 6 F区	台付鉢	口径　19.4 鉢高　10.6	鉢部は口縁がく字に折れ、体上位が張る。台部はやや高く開く。	内外面ハケ目のあと鉢部体外面ナデ。明茶褐色で砂粒多く含む。
－189 8711373	S D019 2 G区上層	〃	口径　16.3 底径　10.5 器高　11.6	鉢部は口縁がく字に折れて開き、体部は張りがなく、台部はやや高く開く。	内外面ハケ目のあと口縁と台内外面ナデ。明褐色で黒斑があり砂粒多く含む。
83－190 83－190	S D019東 下層	〃	口径　13.2 器高　10.1	体部はやや深く上位直立し不安定な平底。	内面ナデ、外面ハケ目のあと体下半ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－191 8714098	S D019 5 F区	〃	口径　12.7 器高　12.3	体部は深く上位内湾し、丸底。	内面ナデ、外面タタキ目のあとナデ。褐色で砂粒含む。内面から外面上位に有機物付着。
－192 8712992	S D019 3 F区上層	〃	口径　13.6 器高　12.8	体部は深く上位内湾し、平底。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。
－193 8714115	S D019 2 G区上層	〃	口径　10.4 器高　9.7	体部は深く上位直立し、丸底。	内面ハケ目、外面タタキ目のあとハケ目、さらに下半ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－194 8714113	S D019 2 G区上層	鉢	口径　17.0 器高　12.7	体部は深く上位直立し、丸底。	内外面ハケ目のあと口縁と外面下半ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－195 8900677	S D019 2 G区下層	台付鉢	口径　13.0 残高　15.9	体部は下膨らみに深く上位内湾し、台付。	内外面ハケ目のあと外面下半ナデ、下半ヘラケズリ。褐色で砂粒少し含む。
－196 8714112	S D019 2 G区	鉢	口径　19.9 器高　11.3	体部はやや深く、上位はナデてやや外反し、丸底。	内外面ハケ目のあとこと体下半から底内外面ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－197 8711374	S D019 2 G区上層	台付鉢	口径　17.8 残高　13.9	体部は下膨らみで上位やや内湾し、台付。	内外面ハケ目のあと口縁と外面ナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒少し含む。
－198 8714091	S D019 2 G区上層	鉢	口径　14.0 器高　9.5	体部は直線的に、外に開き、丸底。	内外面ハケ目のあと雑なヘラミガキ、口縁ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－199 8712993	S D019 3 F区上層	〃	口径　11.6 器高　9.5	体部は深く立ち上がり、丸底。	内外面ハケ目。褐色で黒斑があり砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
83－200 8803011	S B019	鉢	口径 17.6 器高 8.3	体部は内湾して立ち上がり丸底。	内外面ナデのあと内面下半ヘラミガキ。褐色で粗砂粒含む。
－201 8712932	S D019 2 G区上層	〃	口径 17.3 器高 8.4	口縁部は体部から不明瞭に折れ薄く外反、体部は浅く丸底。	内外面ハケ目のあと体外面ナデ。暗褐色で砂粒少し含む。
－202 8712418	S D019	把手付埦	底径 10.7 残高 8.6	ジョッキ型で口縁部と把手欠失。体部は下位がややくびれる筒状でやや上げ底。	体内面にハケ目を残し内面と体外面ナデ、底外面ヘラナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒含む。精製。
84－203 8804843	S D019東 上層	鉢	口径 15.8 器高 7.5	体部はやや深く丸底。	内面ヘラナデ、外面タタキ目のあとハケ目、さらに口縁部ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－204 8711360	S D019 2 G区上層	〃	口径 14.5 器高 6.2	体部は浅く内湾し丸底。	口縁と内面ナデ。外面ハケ目のあと体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。明褐色で砂粒含む。
－205 8712467	S D019 6 F区 東側上層	〃	口径 15.5 器高 7.0	〃	〃
－206 8711376	S D019 4 F区下層	〃	口径 13.5 器高 5.4	〃	口縁と内面ナデ、外面ハケ目。明褐色で砂粒含む。
－207 8711596	S D019 5 F区下層	〃	口径 12.9 器高 5.3	〃	内面タタキ目外面ハケ目のあと口縁と底部ナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒少し含む。
－208 8712947	S D019 5 F区中層	〃	口径 12.8 器高 5.4	〃	茶褐色で黒斑があり砂粒少し含む。内面ハケ目、外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－209 8801268	S D019東 下層	〃	口径 16.9 器高 5.6	体部はとくに浅く開き、口縁部が薄くやや外反。平底の名残りをとどめる。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒やや多く含む。
－210 8711328	S D019 4 F区上層	〃	口径 17.6 器高 5.5	体部はとくに浅く開き、丸底。	内面ハケ目。口縁ナデ。外面はタタキ目のあと体部ナデ、底部ヘラケズリ。明褐色で砂粒含む。
－211 8904808	S D204 上層	〃	口径 16.1 器高 5.6	体部は内湾して開き、浅く丸底。	口縁と内面ナデ。外面は体部ヘラケズリ、底部ナデ。赤褐色で砂粒含む。
－212 8712466	S D019 6 F区上層	〃	口径 11.5 器高 7.5	体部は内湾してやや深く立ち上がり、丸底。	内外面ハケ目のあとナデ。明褐色で砂粒含む。
－213 8803040	S D019東 下層	〃	口径 10.6 器高 5.3	体部は内湾し、小さな平底。	内外面ナデ。明褐色で砂粒含む。
－214 8803043	S D019東 上層	〃	口径 9.2 器高 5.5	体部は内湾して立ち上がり、平底。	内面ハケ目後ナデ、口縁と外面ナデ。明茶褐色で砂粒少し含む。
－215 8900774	S D204 第1トレ下層	〃	口径 10.6 器高 6.0	小型鉢。体部内湾、丸底。器壁が薄い。	指オサエ。茶褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
84－216 8711382	S D019東 下層	鉢	口径　9.8 器高　5.4	小型鉢。体部内湾、丸底。口縁が著しく波状で、器壁が厚い。	指オサエ。茶褐色で砂粒含む。
－217 8712440	S D019 6 F区上層	〃	口径　10.2 器高　6.3	小型鉢。体部内湾し尖底状。	指オサエ後ナデ。暗褐色で粗砂粒含む。
－218 8712463	S D019 8 E区上層	〃	口径　10.3 器高　4.6	小型鉢。体部は内湾して浅く、丸底。	指オサエ後ナデ。内面暗褐色。外面黄褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－219 8712955	S D019 5 F区下層	〃	口径　7.0 器高　3.7	小型鉢。体部は直線的に開き、平底。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－220 8714103	S D019 4 F区	〃	口径　7.5 器高　4.3	小型鉢。体部は内湾し、不安定な平底、器壁が厚い。	指オサエ。暗褐色で砂粒含む。
－221 8711366	S D019 2 G区下層	〃	口径　6.5 器高　5.2	小型鉢。体部は直立気味で平底。歪みが大きい。	内外面ハケ目。暗褐色で黒斑点があり、砂粒少し含む。
－222 8900344	S D019 4 F区下層	〃	口径　7.2 器高　4.7	小型鉢。体部は直線的に開き、尖底状。	内外面ハケ目のあと指オサエ、ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－223 8900343	S D019 4 F区下層	〃	口径　5.8 器高　3.4	小型鉢。体部内湾、丸底。	指オサエ、ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－224 8900340	S D019 3 F区上層	〃	口径　8.0 器高　4.6	小型鉢。体部は直線的に開き、尖底状。	指オサエ、ナデ。褐色で砂粒含む。
－225 8804827	S D019 6 E区上層	〃	口径　8.4 器高　8.2	〃	内面ナデ、外面は上半タタキ目、下半と底部ナデ。褐色で微砂粒含む。
－226 8712935	S D019 2 G区下層	〃	口径　9.2 器高　7.0	体部は直線的に立ち上がり深く、丸底気味の平底。	指オサエ、ナデ。暗褐色で砂粒含む。
－227 8712462	S D019 8 E区上層	台付鉢	口径　7.4 底径　4.5 器高　5.5	小型台付鉢。体部は内湾し、台部は高くやや外に開く。	指オサエ。暗褐色で砂粒含む。
－228 8802858	S D019東 上層	鉢	口径　7.1 器高　6.6	小型鉢。体部は内湾して立ち上がり深く、尖底状。	内面ナデのあと粗いヘラミガキ、外面ハケ目のあと体下半ヘラミガキ。赤褐色で砂粒少し含む。精製。
－229 8712970	S D019 5 F区下層	〃	口径　6.9 器高　7.7	〃	口縁と内面ナデ、外面ヘラミガキ。明茶褐色で砂粒を含む。精製。
85－230 8801188	S D019東 下層	器台	口径　13.2 底径　12.6 器高　16.9	長身鼓形器台。中位やや上がしまる。	内外面ハケ目のあとナデ。茶褐色で砂粒含む。
－231 8900186	S D019 8 D区	〃	口径　12.0 底径　13.4 器高　15.7	〃	内面ナデ。外面タタキ目のあと口縁ナデ。茶褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
85－232	S D019 8 D区	器台	口径 9.2 底径 12.6 器高 14.7	細身の筒形器台。中位やや上がしまる。	内外面ナデ。明茶褐色で砂粒多く含む。
－233 8803024	S D019 6 F区上層	〃	口径 20.8 底径 21.2 器高 25.7	大型器台。体部はあまりしまらず裾がやや開く。口縁部は体部からゆるやかに外反し、口唇にヘラ刻目。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－234 8900927	S D019東 下層	〃	口径 15.6 底径 18.4 器高 23.7	口縁部は体部から急に外反し、口唇にヘラ刻目。体部は直線的に伸びる。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で砂粒含む。
－235 8712485	S D019 7 E区下層	〃	口径 14.3 底径 15.4 器高 18.4	口縁部は体部から比較的ゆるやかに外反し口唇にヘラ刻目。	外面裾にタタキ目痕。内外面ハケ目のあと口縁ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－236 8712500	S D019東 下層	〃	口径 14.7 底径 16.0 器高 20.8	口縁部は体部から急に外反、体部は直線的に伸び端部が開く。	内外面ハケ目。明褐色で砂粒多く含む。内面に赤色顔料付着か。
－237 8712951	S D019 5 F区下層	〃	口径 15.9 底径 17.5 器高 19.1	口縁部は体部からゆるく外反し、体部は外反して裾が開く。	内面ハケ目のあとナデ、外面タタキ目の口縁と裾ハケ目。暗茶褐色で砂粒含む。
－238 8804831	S D019 2 G区上層	〃	口径 15.4 底径 17.4 器高 21.1	口縁部は体部から急に外反し、体部は裾がやや外反気味に開く。	内面ナデ、外面は体部タタキ目のあとハケ目、ナデ。褐色で砂粒少し含む。
－239 8806509	S D019 5 F区下層	〃	口径 12.1 底径 14.8 器高 18.2	口縁部は内にやや稜をなしてゆるく外反し、体部は裾が外反気味に開く。	内外面ハケ目のあと体部内面ナデ。茶褐色で黒斑があり砂粒含む。
－240 8801266	S D019東 下層	〃	口径 14.8 底径 14.4 器高 18.2	口縁部は体部からゆるく外反し、体部は直線的に伸びる。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で微砂粒多く含む。
86－241 8803021	S D019 8 F区中層	〃	口径 20.6 底径 20.0 器高 25.1	〃	内面ハケ目のあと体上位と口縁ナデ、外面タタキ目のあと体部ハケ目。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－242 8712434	S D019 6 F区 東側下層	〃	口径 16.5 底径 18.6 器高 23.1	〃	外面裾にタタキ目痕。内外面ハケ目のあと内面ナデ。明褐色で砂粒含む。
－243 8801221	S D019 7 F区下層	〃	口径 16.2 底径 20.2 器高 13.3	口縁は体部からゆるく外反し、口唇にヘラ刻目。体部は直線的に伸びる。	外面裾にタタキ目痕。内外面粗いハケ目のあと体部内面下半ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－244 8803000	S D019東 下層	〃	口径 12.8 底径 14.8 器高 17.8	口縁部は体部から急に外反し、口唇にヘラ刻目。体部はやや外反気味に開く。	内面ハケ目、外面はタタキ目のあと体部下半と口縁ハケ目。明茶褐色で微砂粒多く含む。
－245 8900933	S D019東 下層	〃	口径 16.3 底径 16.8 器高 19.6	口縁部は体部から急に外反、体部は直線的に開き裾端部が内にめくれる。	内面は口縁ハケ目、体部ナデ。外面はタタキ目後ナデ。褐色で砂粒含む。
－246 8900932	S D019東 下層	〃	口径 16.6 底径 16.5 器高 19.2	口縁部は内面で稜をなして直線的に折れ、体部は裾が外反気味に開き端部が内にめくれる。	口縁内面ハケ目後ナデ、体内面ナデ。外面はタタキ目のあとナデ。褐色で砂粒含む。
－247 8804861	S D019 2 G区下層	〃	口径 18.7 底径 18.9 器高 22.0	口縁部は体部からゆるく外反し口唇にヘラ刻目。体部は裾が内湾気味。	内面ハケ目後ナデ、外面タタキ目のあとハケ目、褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
86－248 8802999	S D019東 下層	器台	口径　13.7 底径　15.9 器高　21.8	口縁部は体部からゆるく外反、体部は裾がやや内湾気味。	内外面ハケ目。明茶褐色で砂粒多く含む。
－249 8804856	S D019 7 E区下層	〃	口径　14.2 底径　14.9 器高　21.2	〃	内外面ハケ目のあと口縁と体部内面ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－250 8712433	S D019 6 F区下層	〃	口径　17.4 底径　18.2 器高　21.5	〃	外面裾にタタキ目痕。内外面粗いハケ目。赤褐色で砂粒多く含む。
－251 8900679	S D019 下層	〃	口径　13.9 底径　14.4 器高　18.0	口縁部は体部からやや急に外反、体部は裾がやや内湾気味。	内面ハケ目、外面はタタキ目のあと体部上位と口縁ナデ。褐色で砂粒やや多く含む。
－252 8712473	S D019 7 E区下層	〃	口径　15.0 底径　16.3 器高　20.5	口縁部はゆるく外反し、体部は裾が薄くやや内湾気味。	内面は口縁ハケ目、体部ナデ。外面タタキ目。褐色で砂粒含む。
87－253 8804865	S D019 5 F区下層	〃	口径　16.5 底径　18.8 器高　21.5	口縁部は内面に稜をなし直線的に折れ、体部が直線的に伸びる。	内外面ハケ目。褐色で砂粒含む。
－254 8712980	S D019 6 F区下層	〃	口径　18.0 底径　18.2 器高　19.8	口縁部は外面に稜をなし直線的に折れ、体部は直線的に伸び、端部やや内湾。	口縁部ハケ目後外面ナデ。体部内面ハケ目、外面タタキ目後ハケ目。茶褐色で砂粒少し含む。
－255 8802994	S D019東 上層	〃	口径　18.0 底径　17.6 器高　21.0	口縁部は外面に稜をなし外反、体部が直線的に伸びる。	内面ハケ目後口縁ナデ。外面タタキ目のあと口縁ハケ目、ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－256 8804839	S D019 4 F区下層	〃	口径　14.8 底径　15.4 器高　22.4	口縁部は不明瞭に折れて短く大きく開き、体部はやや外反気味に開き高い。	内外面ハケ目のあと口縁と体部内面ナデ。褐色で砂粒多く含む。
－257 8712942	S D019 5 F区	〃	口径　12.4 底径　14.9 器高　19.2	口縁部はく字に折れてやや外反、体部は直線的に伸び開きが少ない。	口縁と体部内面ナデ。体部外面タタキ目のあと下半ハケ目、ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－258 8712971	S D019 2 G区中層	〃	口径　12.1 底径　12.6 器高　18.8	口縁部はく字に折れ、体部は直線的に伸びる。	内面ハケ目後ナデ、外面タタキ目のあと体部上半ナデ。暗褐色で砂粒少し含む。
－259 8712497	S D019東 下層	〃	口径　7.2 底径　9.7 器高　12.8	小型器台。口縁部はく字に短かく折れて開き、体部は裾が外反気味に開き高い。	内面ナデ。外面は口縁ハケ目後ナデ、体部タタキ目後裾ナデ。茶褐色で微砂粒多く含む。
－260 8900931	S D019東 下層	〃	口径　10.6 底径　13.8 器高　16.3	口縁部は内面に体部と不明瞭な稜をなして外反。体部は裾が外反気味に開く。	内外面ハケ目のあとナデ。褐色で砂粒を含む。
－261 8804854	S D019東 上層	〃	口径　11.2 底径　14.2 器高　17.3	口縁部はく字にちかく体部から急に外反し、体部は外反気味に開く。	内面ハケ目のあと体部下半ナデ。外面タタキ目。褐色で砂粒少し含む。
－262 8712417	S D019 3 G区西トレ	特殊器台	口径　21.4 残高　12.5	大型鼓形器台。くびれ部に平行細線２条を刻み、長方形透しを上下２段に４方穿け、上段に幾何学的刻文。	内外面ハケ目のあと口縁ナデ、さらに刻文し透しを切る。明茶褐色で砂粒少し含む。
－263 8900942	S D019 8 E区下層	器台	底径　24.4 残高　14.0	大型鼓形器台。くびれ部に、櫛描文をめぐらし、長方形透しは上下２段に４方穿けるか。	内外面ハケ目のあとナデ、さらに櫛描をめぐらし、透しを切る。茶褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
88－264 8802881	S D019 3 E区	支脚	底径 10.6 器高 11.0	口縁部は袋状、体部は直線的に開き、端部は内にめくれる。	内面ナデツケ、体外面ハケ目後ナデ。褐色で砂粒含む。
－265 8711359	S D019 5 F区下層	〃	底径 10.3 器高 10.3	上面はやや傾斜し、有孔凸形で一端がやや突出。体部は外反して開く。	内面ハケ目後ナデツケ、体外面タタキ目後ナデ。暗褐色で砂粒含む。
－266 8803038	S D019東 上層	〃	底径 12.9 器高 11.6	上面は有孔凸形で一端がやや突出。体部は直線的に開く。	内面ハケ目後ナデ、体外面タタキ目後ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－267 8803682	S D204 上層	〃	底径 12.2 器高 11.3	上面は平坦でやや傾斜し有孔、一端突出。体部は直線的に開く。	外面タタキ目のあと内外面ハケ目、上面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－268 8714106	S D019 5 F区上層	〃	底径 10.3 器高 8.7	上面は有孔凸形で一端がやや突出。体部は裾が内湾気味に開く。	内面は裾ハケ目、他ナデツケ。外面ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－269 8806502	S D019 6 F区上層	〃	底径 9.8 器高 9.5	上面は有孔凸形で体部は外反して開く。	内面は下半ハケ目、上半ヘラナデ。体外面はタタキ目後ナデ。茶褐色で砂粒を含む。
－270 8900930	S D019東 下層	〃	底径 11.0 器高 10.0	上面は有孔平坦。体部は外反して開く。	内面ナデツケ、体外面タタキ。褐色で砂粒含む。
－271 8712956	S D019 3 F区下層	〃	底径 10.3 器高 8.8	上面は有孔平坦。体部は直線的に開く。	内面は下半ハケ目、上半ナデ。体外面タタキ目。茶褐色で砂粒多く含む。
－272 8810899	S D019東 下層	〃	底径 12.2 器高 8.6	上面は有孔平坦。体部は外反気味に開く。	内外面ナデツケ。暗褐色で砂粒含む。
－273 8804838	S D019東 上層	〃	底径 13.5 器高 9.7	上面は有孔平坦。体部は裾がわずかに開く。	内面ナデツケ、外面タタキ目。赤褐色で砂粒含む。
－274 8900690	S D019 5 F区上層	〃	底径 11.1 器高 9.8	上面は器台口縁状に開いて厚く有孔、体部は外反して大きく開く。	内外面ハケ目のあとナデ。褐色で粗砂粒含む。
－275 8712422	S D019 6 F区上層	〃	底径 8.6 器高 7.6	器台状に台部が開く。	内外面ナデ。外面黄褐色、内面黒色で、粗砂粒含む。
－267 8712957	S D019東 5 F区下層	〃	底径 8.0 器高 7.4	上面は有孔平坦。体部は裾がわずかに開く。	内外面ナデ。褐色で砂粒含む。
－277 8804849	S D019 7 E区	〃	底径 7.8 器高 7.4	筒形。体部は外反して開く。	内外面ナデツケ。褐色で砂粒少し含む。
－278 8712455	S D019 8 E区下層	〃	底径 9.4 器高 10.0	筒形。口縁部は外にめくれ、体部は裾が外反。器壁が厚く、成形雑。	内面裾ハケ目、他ナデツケ。外面白褐色で黒斑、内面茶褐色で粗砂粒含む。
－279 8900928	S D019東 下層	〃	底径 8.6 器高 7.3	上面は平坦にちかく、体部は芯がつまり中央ややへこむ。	全面ナデ。茶褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
88－280 8803027	S D019 4 F区下層	支脚	底径　10.0 器高　14.4	大型支柱状。先端は斜め上方に突出し、下位背面につまみ出し。底面は楕円形。	全面指オサエ、ナデ。明茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
89－281 8712973	S D019 8 E区上層	〃	底径　10.6 器高　11.4	上面は傾斜し、有孔、一端が嘴状突出。体部は直線的に開く。	内面と上面ナデ、体外面タタキ目。茶褐色で砂粒含む。
－282 8801196	S D019 5 F区下層	〃	底径　11.2 器高　10.2	〃	内面ヘラナデ、体外面と上面タタキ目。明褐色で砂粒多く含む。
－283 8712442	S D019 2 G区中層	〃	底径　10.0 器高　11.3	上面は有孔凸形で一端が斜め上方に嘴状突出。体部は直線的に開く。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－284 8801193	S D019 5 F区上層	〃	底径　8.4 器高　8.0	〃	内面と上面ナデ、体外面ハケ目のあとナデ。黄褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－285 8801195	S D019 5 F区下層	〃	底径　8.0 器高　8.3	上面は平坦で傾斜し無孔、一端が突出する。体部はやや外反気味に開く。	内面と上面ハケ目後ナデ、体外面タタキ目。茶褐色で粗砂粒多く含む。
－286 8712452	S D019 8 E区上層	〃	底径　11.4 器高　9.2	上面は平坦で傾斜し有孔、一端突出。体部は直線的に開く。	内面ナデ、外面と上面タタキ目。茶褐色で砂粒やや多く含む。
－287 8801198	S D019 5 F区下層	〃	底径　9.7 器高　9.5	〃	内面ハケ目後ナデ、外面と上面タタキ目。暗褐色で粗砂粒多く含む。
－288 8801190	S D019東 下層	〃	底径　9.3 器高　9.7	〃	内面ナデ、外面と上面タタキ目。褐色で砂粒含む。
－289 8900340	S D019東 下層	〃	底径　12.2 器高　10.2	上面は斜めで有孔、一端がわずかに突出。体部は直線的に開く。	内面と上面ハケ目後ナデ、体外面タタキ目後ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－290 8712435	S D019 6 F区上層	〃	底径　12.2 器高　9.4	上面はやや傾斜し有孔凸形で一端がやや突出。体部は外反して開く。	内面ナデツケ、体外面タタキ目後ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－291 8801214	S D019 3 F区下層	〃	底径　11.2 器高　11.2	上面はほぼ平坦で傾斜し有孔、一端突出。体部は裾がやや外反。	内面と上面ナデ、体外面タタキ目。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－292 8712456	S D019 8 E区下層	〃	底径　10.4 器高　8.9	上面はほぼ平坦で傾斜し有孔。体部は直線的に開く。	内面ハケ目、体外面と上面ナデ。赤褐色で砂粒含む。
－293 8900929	S D019東 下層	〃	底径　11.5 器高　10.0	上面は凸形でやや傾斜し有孔。体部は裾が外反。成形雑。	内外面ヘラナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－294 8804837	S D204	〃	底径　9.5 器高　8.6	上面は平坦で傾斜し無孔。体部は直線的に開く。	内外面ナデツケ。明茶褐色で砂粒やや多く含む。
－295 8802882	S D019 6 E区	〃	底径　12.4 器高　9.7	〃	内面ハケ目、外面ハケ目、上面ナデ。内面黒褐色、外面茶褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
89－296 8806504	S D019東 下層	支脚	底径 10.4 器高 10.6	上面は平坦で傾斜し有孔。体部は直線的に開く。	内面と上面ナデ、体外面タタキ目。褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－297 8712988	S D019 2 G区中層	〃	底径 8.4 器高 6.0	上面は平坦で傾斜し体部は柱状でやや上げ底。	内外面ナデ。暗褐色で微砂粒含む。
90－298 8714109	S D019 3 G区	甑	口径 22.2 器高 13.3	鉢形。体部は内湾して立ち上がり、丸底。底部孔径は不整楕円形。	内面ハケ目、外面は体部ナデ、底部ヘラケズリ。茶褐色で砂粒多く含む。
－299 8802840	S D019東 上層	〃	口径 16.7 器高 9.3	鉢形。体部は内湾して立ち上がり、丸底。底部孔径1.4cm。	内外面ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－300 8801205	S D019 4 F区下層	〃	口径 15.4 器高 12.0	鉢形。体部は内湾して立ち上がり、底部はレンズ状に突出。底部孔径0.6cm。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－301 8714110	S D019 3 G区	〃	口径 16.5 器高 11.3	鉢形。体部は内湾して立ち上がり、丸底。底部孔径1.0cm。	内外面ハケ目のあと底外面ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－302 8803002	S D019 8 F区上層	〃	口径 16.4 器高 12.7	鉢形。体部は内湾気味に立ち上がり、丸底。底部孔径1.4cm。	外面底部付近タタキ目痕。内外面ハケ目のあと口縁ナデ。
－303 8900099	S D019東	〃	口径 17.4 器高 9.8	鉢形。体部は直線的に開き、口縁部は不明瞭に折れる。底部は不安定な平底。底部孔径0.8cm。	内外面ナデおよびヘラナデ。底部孔は焼成後穿孔。茶褐色で粗砂粒多く含む。
－304 8804811	検出面	〃	胴径 18.3 底径 5.0	甕形。胴部はあまり張らず、底部は小さな平底で径約1.0cmの孔を３個穿ける。	内外面ハケ目。茶褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－305 8802990	S D019東 下層	不明	底径 7.9 器高 7.7	釣錘形。体部は直線的に開き、体上位に１孔穿ける。	内外面ナデ。茶褐色で微砂粒多く含む。内面にスス付着。
－306 8802991	S D019東 下層	〃	残高 5.0	釣錘形。体部は内湾して下がり、頂部に紐通し状の１孔穿ける。	内面ナデ、外面ハケ目。明茶褐色で砂粒多く含む。外面にスス付着。
－307 8712990	S D019 2 G区中層	杓子	残長 15.3	粗製。	全面指オサエ、ナデ。明褐色で砂粒含む。
－308 8900348	S D019 5 F区上層	〃	残高 7.3	小型、粗製。	全面指オサエ、ナデ。褐色で砂粒含む。
－309 8711365	S D019 2 G区上層	蓋	口径 9.9 器高 3.5	天井部はなだらかに傾斜し端部内湾、乳状つまみ。	内外面ナデ。明褐色で砂粒多く含む。
－310 8802992	S D019 上層	勾玉	長 3.3 孔径 0.2	円弧形。	ナデ仕上げ。明茶褐色で微砂粒含む。
91－311 8802996	S D207	甕	口径 28.1 胴径 27.6 器高 35.5	口縁部はく字に折れやや外反。胴部は上位に最大径をおき長胴気味で、不安定な平底。	口縁と内面ハケ目のあとナデ、胴外面タタキ目のあと下位ナデ。明褐色で砂粒多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
91－312 8802934	S D207 3 E区	台付甕	底径　12.7 台高　3.2	台は直線的に開く。	甕底部付近は内面ナデ、外面ハケ目。台部は内外面ナデ。黄褐色で砂粒含む。
－313 8802932	S D207	鉢	口径　13.0 器高　12.1	口縁部は胴部からやや不明瞭に折れ外反、胴部は張りがなく、平底の名残りをとどめる。	内外面ナデのあと胴外面下半ヘラケズリ。褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－314 8810896	S D207 8 B区	壺	口径　8.8 胴径　14.2 器高　15.4	口頸部はつよくしまり短く直立、胴部は球状で平底の名残りをとどめる。	胴内面ハケ目のあとナデおよびヘラナデ。胴外面タタキ目のあとハケ目、さらにナデ。褐色で砂粒含む。
－315 8802933	S D207 7 B区	鉢	口径　7.1 器高　9.3	小型鉢。体部は内湾して深く立ち上がり、底部は指で押えて小さな平底。	内面ナデ、外面タテヘラミガキ。外面赤褐色、内面黒色で、砂粒含む。精製。
－316 8803020	S D207	高杯	口径　28.3 底径　17.6 器高　24.0	坏部口縁は体と段をなして外反、脚部は裾がやや高く内湾気味に開き、4方透し。	坏部内外面と脚部外面タテヘラミガキ。脚部内面は筒ヘラケズリ、裾ハケ目。赤褐色で砂粒含む。
－317 8802931	〃	器台	口径　13.7 底径　16.5 器高　19.7	口縁部は体部から急に外反し、体部は直線的に開く。	内面ハケ目五ナデ、外面タタキ目。褐色で砂粒多く含む。
92－318 8802873	S B215	甕	口径　23.3 胴径　25.3 器高　38.6	口縁部はく字に折れ、胴部は中位に最大径をおく長胴で丸底。	内外面ハケ目のあと口縁外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－319 8711380	〃	壺	口径　17.1 胴径　26.2 器高　32.9	口縁部は胴部とやや不明瞭な稜をなしてく字に折れ、口唇刻目。胴部は中位やや上が張り丸底。	内外面ハケ目のあと胴下半内外面ナデ。明褐色で黒斑があり粗砂粒含む。
－320 8802815	〃	鉢	口径　9.3 器高　8.2	口縁部は胴部から不明瞭に折れて直立気味。胴部はあまり張らず不安定な平底。	内面ナデ、外面ハケ目のあと胴外面下位ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－321 8804809	S B212	〃	口径　16.8 器高　5.6	体部は皿状に浅く内湾しながら開き、丸底。	内面ナデ、外面タタキ目のあとナデ。明褐色で粗砂粒含む。
－322 8910103	S K230	高杯	外口径28.5 残高　5.0	平坦口縁。	坏部内外面ヘラミガキ。明褐色で砂粒多く含む。
－323 8910104	〃	甕	口径　23.8 残高　3.4	口縁部はく字に折れ、胴部は長胴気味か。	口縁と胴内面ナデ、胴外面ハケ目。褐色で砂粒やや多く含む。
－324 8910106	〃	〃	底径　6.6 残高　9.5	平底。	内面ヘラナデ、外面ハケ目。褐色で砂粒多く含む。
－325 8910107	〃	壺	口径　7.9 残高　5.0	頸部は直立から外反し、口縁部は不明瞭な稜をなして折れ内傾。	口頸部内外面ナデ。褐色で砂粒少し含む。
－326 8910105	〃	鉢	口径　9.0 底径　4.7 器高　3.3	小型鉢。体部はわずかに内湾して立ち上がり、平底。	内外面ナデ。褐色で砂粒少し含む。
93－327 8910119	S B219	高杯	口径　38.3 残高　5.0	平坦口縁。	内外面ナデか。明褐色で砂粒多く含む。

Fig.-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
93－328 8910114	S B219	高杯	底径 21.0 残高 6.1	脚部は裾が内湾気味に開く。	脚部内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目後タテヘラミガキ。褐色で砂粒やや多く含む。
－329 8910115	〃	壺	胴径 19.9 残高 12.0	頸部はつよくしまり、口縁部は急に折れて外反。胴部は中位に最大径をおく。頸部に刺突文。	内外面ハケ目。褐色で砂粒含む。
－330 8910116	〃	鉢	口径 6.9 残高 6.2	小型鉢。体部は内湾して立ち上がり、尖底状。	内外面ナデ。褐色で砂粒を少し含む。
－331 8910118	〃	壺	頸径 33.0	複合口縁壺か。胴部は肩が張り、頸胴間に三角突帯２条。	内外面ナデ。明茶褐色で砂粒多く含む。
－332 8910113	〃	鉢	口径 27.9 器高 14.4	大型鉢。体部は内湾して立ち上がり、不安定な平底。	内外面ハケ目のあと口縁と体部外面下位ナデ。褐色で砂粒やや多く含む。
－333 8910117	〃	壺	口径 9.9 胴径 14.6	無頸壺。口縁部は上方に稜をもち、胴部は中位やや上が張るか。	内面ナデ、外面ハケ目後ナデ。褐色で砂粒少し含む。
－334 8910112	〃	鉢	口径 15.1 器高 6.3	体部は内湾して開き、浅く丸底の名残りをとどめる。	内面ナデ、外面ハケ目後ナデ。褐色で砂粒含む。
－335 8802930	S B262	壺	口径 12.7 胴径 18.3 残高 14.3	口縁部はく字に折れ直立気味、胴部は球状で、丸底か。	内外面ハケ目後ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－336 8803013	〃	鉢	口径 13.8 器高 5.8	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は不明瞭に短く折れて薄い。丸底。	体部内面ヘラナデ、他ハケ目のあと体部外面下半ヘラナデ。茶褐色で砂粒含む。
－337 8803014	S B222	〃	口径 10.6 器高 5.0	体部は平底から内湾して立ち上がり、浅い。	内外面指オサエ、ナデ。褐色で砂粒含む。
94 －338 8900692	〃	甕	胴径 26.0 残高 26.0	長胴気味で平底。	内外面ハケ目のあとナデ。褐色で砂粒多く含む。
－339 8802822	〃	甑	口径 16.6 器高 13.2	体部は内湾して立ち上がり深く、丸底。底部孔径1.3cm。	内面ハケ目、外面タタキ目後ナデ。黄褐色で砂粒多く含む。
－340 8803025	〃	鉢	口径 18.0 器高 6.2	体部は内湾して開き、皿状に浅い。歪む。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－341 8802921	〃	〃	口径 10.2 器高 8.4	体部は内湾して立ち上がり深く、底部は指でオサエて上げ底状の平底。	内外面ナデ。明褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－342 8802925	〃	〃	口径 5.5 器高 2.2	小型鉢。	内外面指オサエ、赤褐色で砂粒含む。
－343 8900544	S B225	器台	口径 8.5 底径 15.5 器高 13.3	口縁部は複合状につぶれ、体部は裾が外反して開く。	口縁と体部内面ナデ、体部外面タテヘラナデから裾部ナデ。明褐色で砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
94－344 8804814	ＳＫ236 埋土中	支脚	底径　7.0 残高　11.1	上面片側で雁股状に２本の嘴状突起、後方に未貫通の刺突痕。	内面ナデ、外面ヘラナデ。明褐色で砂粒少し含む。
－345 8802926	ＳＢ266	高杯	底径　11.1 残高　8.0	脚部は裾が低く開き、３方透し。	脚部は内面ナデ、外面ハケ目のあとタテヘラミガキ。褐色で微砂粒含む。
－346 8909832	ＳＢ267	甕	底径　9.6 残高　14.3	大型甕か。平底。	胴下半内面ヘラナデのあと指ナデ、内面ハケ目。明褐色で砂粒含む。外面にスス付着。
95－347 8909830	ＳＢ269	鉢	口径　17.8 残高　12.1	体部は内湾して立ち上がり深い。	内外面ハケ目のあと内面下半ナデ、外面下半ヘラケズリ、さらにナデ。茶褐色で砂粒含む。
－348 8909831	〃	高杯	口径　18.0 残高　7.0	坏部口縁は体部と段をなして外反長伸。	坏部内外面ハケ目。茶褐色で砂粒含む。
－349 8909829	〃	甕	口径　24.0 残高　9.6	口縁部はく字に折れ、胴部は上位に最大径をおく。	内外面ハケ目のあと外面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－350 8711594	ＳＢ274	高杯	口径　18.4 底径　13.4 器高　15.8	坏部口縁は体部から折れ直立し端部外反。刻目沈線とヘラ暗文を描く。脚部はやや高く開く。	口縁ナデ、脚内面ヘラナデ、それ以外タテヘラミガキ。明茶褐色で黒斑があり砂粒殆ど含まず。精製。
－351 8803018	ＳＢ288	鉢	口径　15.6 器高　8.3	体部は内湾して立ち上がり平底。	内面ナデ、外面ハケ目のあと口縁ナデ。明茶褐色で砂粒含む。
－352 8803017	〃	〃	口径　8.5 器高　3.9	小型鉢。体部は浅く丸底。	指オサエ。褐色で微砂粒含む。
－353 8910108	ＳＢ292	高杯	口径　26.2 残高　3.3	平坦口縁。丹塗。	内外面ヘラミガキ。褐色で砂粒多く含む。
－354 8909833	〃	〃	口径　26.0 残高　8.5	坏部は底体にかけ丸く、口縁部でやや外反。	坏部口縁と体内面ナデ、体外面板小口ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－355 8910109	〃	壺	口径　12.5 残高　5.8	復合口縁壺。頸部は直立から外反し、口縁部はやや不明瞭な稜をなして折れ内傾。	口頸部内外面ハケ目のあとナデ。褐色で黒斑があり、砂粒多く含む。
－356 8910111	〃	〃	口径　16.3 残高　10.0	口縁部はく字に折れ、口頸間に三角突帯。胴部は下膨れか。特殊形態。	内面ナデ、外面ハケ目のあと口縁ナデ。褐色で砂粒少し含む。
－357 8910110	〃	器台	口径　10.1 残高　7.5	口縁部はやや不明瞭に折れて短く開く。	口縁と体部内面ナデ、体部外面ハケ目のあとナデ。褐色で砂粒多く含む。
96－358 8802920	〃	鉢	口径　19.8 器高　13.9	口縁部はやや不明瞭に折れ、体部はあまり張らず丸底。	内面ハケ目。口縁外面タタキ目後ナデ、底体外面はハケ目のあと底ヘラケズリ。赤褐色で黒斑、砂粒含む。
－359 8802826	ＳＢ281	甑	口径　24.6 器高　15.8	やや大型の鉢形。体部は深く、尖底状。底部孔径1.0cm。	内外面ハケ目のあと口縁と底外面ナデ。褐色で黒斑があり、砂粒含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
96－360 8802821	S B281	鉢	口径 17.0 器高 7.6	体部はやや浅く、丸底。	内外面ハケ目のあと外面ナデ。褐色で黒斑があり砂粒含む。
－361 8803006	〃	高杯	残高 5.0	坏体部は浅く丸味をもち、口縁部は内面に沈線をおいて大きく外反。	坏体部内外面ハケ目のあと周縁ナデ、さらにヘラ暗文。明赤褐色で微砂粒少し含む。精製。
－362 8802928	〃	〃	底径 13.5 残高 13.7	脚部は柱状筒から裾が低く外反して開く。	筒部外面タテナデ、裾は内面ハケ目、外面タテヘラミガキ。明褐色で微砂粒含む。
－363 8803023	〃	〃	底径 10.6 残高 8.4	坏体部は内湾して開き、脚部は裾が不明瞭に屈曲して開く。	脚内面ハケ目、他不明。黄褐色で砂粒殆ど含まない。
－364 8802922	〃	鉢	口径 11.2 器高 5.3	小型鉢。体部は湾曲して立ち上がり、丸底。	内外面指オサエ、ナデ。明褐色で砂粒含む。
－365 8909825	S B293	甕	口径 30.8 残高 7.0	口縁部は平坦にちかく屈曲し端部がやや肥厚して丸味をもつ。胴部は上位が張る。	口縁と胴内面ナデ、胴外面ハケ目。褐色で砂粒含む。胴外面スス付着。
－366 8712928	〃	〃	口径 19.6 胴径 17.7 器高 16.6	口縁は不明瞭ながらく字に折れて短く、胴部は中位が張って平底。口縁波状の粗製。	内外面板ナデ状の粗いハケ目のあと口縁ナデ。明褐色で砂粒含む。胴外面上位にスス付着。
－367 8909828	〃	鉢	口径 16.6 残高 6.4	体部は内湾して立ち上がる。	内面ナデ、外面ハケ目。褐色で砂粒含む。
－368 8802812	〃	〃	口径 9.6 残高 10.8	体部は深く、大きく内湾して立ち上がる。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
－369 8909827	〃	壺	底径 7.0 残高 3.5	平底。丹塗。	内面ナデ、外面赤褐色丹塗磨研。内面明褐色で砂粒含む。
97－370 8802825	S B291	鉢	口径 23.6 器高 12.7	口縁部は屈曲して大きく開く。体部は張りがなく平底。	口縁と体部内面ナデ、体部外面ハケ目。外面黒褐色、内面褐色で黒斑があり、砂粒含む。
－371 8802816	〃	〃	口径 15.8 器高 7.6	体部は内湾気味に、平底。	口縁と体部内面ナデ、体部外面ハケ目。褐色で砂粒含む。
－372 8803022	〃	〃	口径 16.4 器高 10.1	体は深く、口縁部やや外反し、不安定な平底。口縁が楕円形に大きく歪む。	内外面ハケ目後ナデ。褐色で砂粒含む。粗製。
－373 8802919	〃	壺	残高 7.4	胴部は中位が張り平底。口縁部は屈曲して大きく開くか。	胴部内面ナデ、外面ハケ目。外面黒色、内面褐色で砂粒含む。
－374 8910101	S B289	高杯	口径 25.6 残高 7.9	坏体部は丸味をもち深く、口縁部は平旦に屈曲して端部肥厚。	坏体部内面ナデ、口縁上面ヘラミガキ、坏体部外面ハケ目。褐色で砂粒含む。
－375 8910102	〃	鉢	口径 13.8 器高 7.2	小型鉢。口縁部は水平にちかく短く屈曲し、体部は張りがなく平底。	内外面ナデ。茶褐色で黒斑があり、砂粒やや多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量 cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
97－376	ＳＢ010	鉢	口径　17.7 残高　11.2	やや大型の鉢。体部は内湾して立ち上がり深く、口縁端部は上方に稜を向ける。	内外面ハケ目のあと口縁部ナデ。外面茶褐色、内面灰褐色で微砂粒含む。
－377	〃	壺	底径　8.6 残高　7.0	平底。	内外面ハケ目のあと内面ナデ。茶褐色で砂粒含む。
－378 8909824	ＳＣ180 東儒供献	〃	口径　10.5 胴径　13.5 器高　9.6	口縁部は短くく字状に屈曲して薄く、胴部は中位が張って平底。口縁部に２対の蓋紐孔。精製。	胴内面ナデ、口縁部と胴外面ヘラミガキ。口縁と胴外面に赤褐色丹塗り、内面茶褐色で砂粒含む。

(3) 鏡

ＳＢ219竪穴住居跡の床面上から379・380の２面、ＳＤ019環濠埋土から381が出土した（Fig.98, ＰＬ71）。ＳＤ019からは昭和52年度の調査でも小型仿製鏡１面と舶載鏡片１点が出土しており、既に『肥前国府跡Ⅰ』佐賀県教育委員会1978で報告したところである。

379は内行花文小型仿製鏡で径7.5cm。鏡面はわずかに１mm程度反るが、ほぼ平旦にちかい。縁の厚さ0.35cm、残存重量41g。全体に黄緑色に銹化し、腐触が芯まで及んでいる。銅質は錫分が少ないと思われる。完形のまま検出したが脆く、取上げの際に破損し、現状では縁の大部分が細片となって修復困難である。鏡背の文様構成は鈕をおいて径2.0cmの突線円圏、内区に９花文・さらに幅0.9cmの粗い櫛歯文帯をおいて幅0.7cmの素文縁でおわる。全体に鋳上がりがわるく文様の描出は不鮮明である。鈕孔部の座端に小突起があるのは鈕孔中茎の押さえであるとすれば、土製鋳型の使用を示すものであろうか。なお、両面には住居跡の床に敷いてあったであろうワラ状の植物痕が認められる。

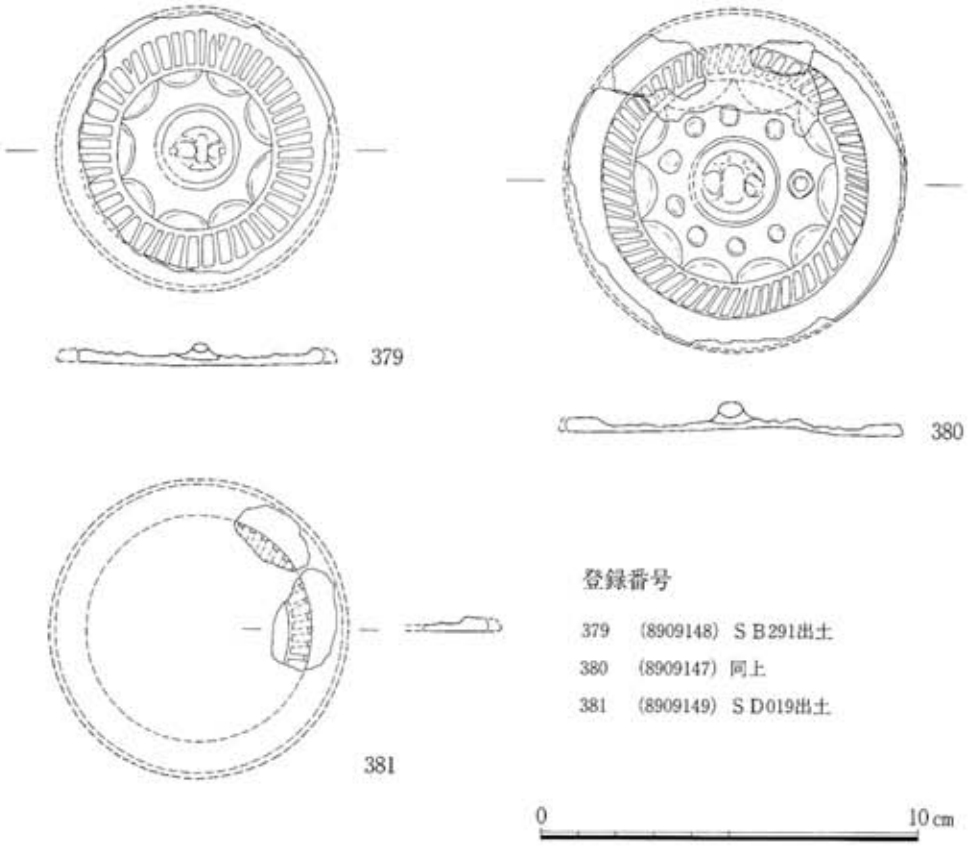


Fig.98 鏡（½）

380も内行花文小型仿製鏡で、径9.1cm、縁厚0.4cm、残存重要40ｇ。鏡面は中央付近がややへこんでいるのは二次的作用で変形したもので、もともと平坦であろう。両面とも濃緑色と暗灰色のまだらに銹化し、芯まで腐触が及んでいる。銅質は錫分が少ないと思われる。銅質が脆いため取上げの際に縁と文様帯の一部が細かく破損したが、元々完形品のまま検出した。鏡背の文様構成は鈕をおいて径2.3cmの突線円圏、内区には小座をもつ突出度の小さい乳９個が不等間隔に一周し、それぞれの乳間に対応して10花文がめぐる。さらに外側に幅0.9cmの粗い斜行格子文帯があり、幅1.0cmの素縁でおわる。全体に鋳上がりはあまり良くなく、文様の描出はやや不鮮明である。379と同じく両面に住居跡の床に敷いてあったであろうワラ状の植物痕が認められる。

381は縁から櫛歯文帯にかけての一部のみ破片のまま出土した。379に類する小型内行花文鏡であろう。縁の幅1.0cmとして復元すれば鏡面径約8.0cmとなる。縁厚0.4cm、文様の描出は不鮮明である。全面黒色に銹化して芯まで青緑色に腐触が進んでおり、銅質はあまり良くないと思われる。

(4) 鉄器

斧・鎌・鍬・刀子・のみ・鉈・鏃・その他がある（Fig.99～102, ＰＬ71～74）。

〔斧〕 382～388を図示する。刃部に有肩と無肩との違いがあり、いずれも袋部の折り返しは離れて合わせ目をなさない弥生時代の鉄斧の特徴を示す。382以外は手斧であろう。

382は無肩で長さ9.0cm、刃幅（復元）4.8cmで刃部がとくに厚い。刃部片側と袋部折り返し片側を欠損する。全体に厚く錆に覆われている。ＳＤ019濠６Ｆ区埋土上位出土。

383は刃部がわずかに肩をつくる。長さ8.6cm、刃幅（復元）4.5cm。刃部片側と袋折り返しの一部を欠損する。小穴埋土中出土。

384は段の不明瞭な有肩で、長さ7.7cm、刃幅4.3cm。刃こぼれが認められるほか、使用時の力で袋部が捩れている。裏面にワラ状の植物痕がみられる。ＳＢ218出土。

385は小型無肩で長さ6.4cm、刃幅3.3cm、袋部断面は稀に長方形にちかく、小型のわりには刃部が厚い。全体に銹化著しく、刃こぼれと袋部端の欠損がある。ＳＤ019濠２Ｇ区出土。

386は刃部が明瞭な肩をなさずにやや拡がる小型品。長さ6.3cm、刃部は両角が丸味をもち最大幅3.6cmで、小型のわりには厚い。袋部片側を欠損する。奈良時代の土壙ＳＫ232埋土上から出土したが、他にも弥生土器片が出土しており、混入であろう。

387も刃部が明瞭な肩をなさずに拡がる小型品、長さ6.1cm、刃幅3.1cm。袋部端がやや欠損する以外はあまり大きな破損はない。ＳＢ291出土。

388は有肩で刃部が長い特徴をもつ。長さ7.0cm、刃幅2.9cm、刃部は若干刃こぼれがあって一方の角を欠き、袋部は片側を欠損する。また袋部にワラ状植物痕がある。ＳＢ267出土。

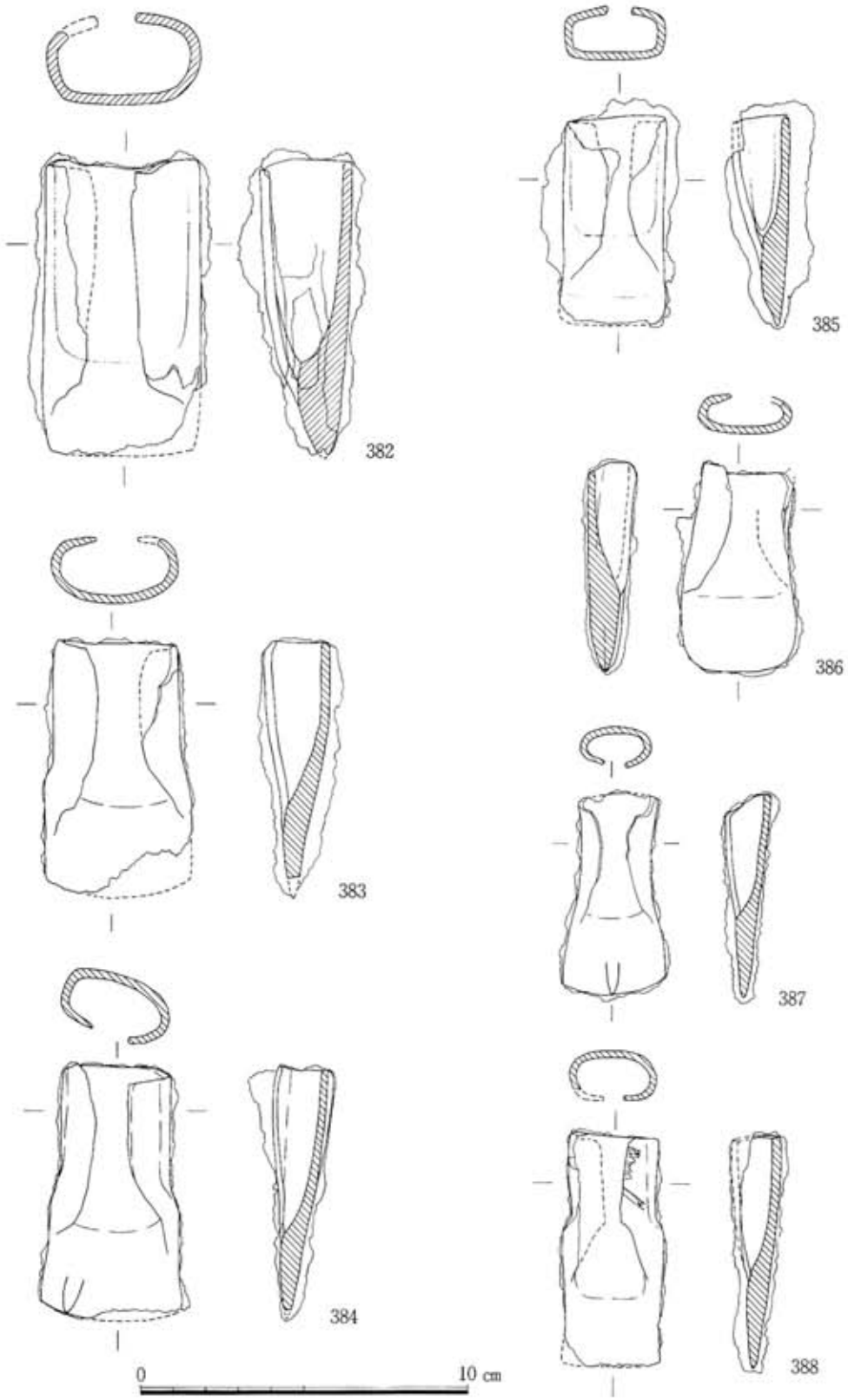


Fig.99 鉄器1 斧 (½)

〔鋳造鉄斧・鍬〕　389～398を図示する。このうち389は鉄斧に含められるかもしれないが、類例の少ない鋤先状である。390～398は両端を短く折り返した板状の鍬先で、そのうち396～398は小型である。

389は鉄塊同然に全体が銹に覆われているため、実測図はあくまで復元によるものである。それでも袋部はソケット状になることは明らかであり、鋳造品の可能性がつよい。形態は刃部が袋部よりわずかに幅が拡がる。袋部は両面が段差をもって方形のくり込みをつくり、両側面が袖状に立つと思われる。ただし袋部の袖片側を欠損する。法量は長さ7.8cm、刃幅は約8.6cm、袋部幅8.2cm、袋部厚さ2.2cmに復元する。刃部が厚く、見た目にも重量感がある。残存部重量290ｇ。復元によるこのような形態は銅製鋤先を思わせる。幅に対する長さおよび両面のくり込みからみて鉄斧とすれば手斧的なものか。奈良時代の土壙ＳＫ235の埋土下層から出土したが、弥生土器片も多く伴っており、混入とみてよいであろう。

390は長さ6.0cm、幅11.3cmで、刃部に向かって徐々に薄くなる。刃部片側から折り返し片側にかけて欠失する。ＳＤ019濠２Ｇ区出土。

391は折り返しの片側を欠失するが、長さ4.6cm、幅は約13cm程度となろう。したがって幅のわりには刃部が短い。厚く錆で覆われ、ふくれている。ＳＢ267出土。

392は刃部と身幅の約３分の１程度を欠失する。復元すれば長さ約5.5cm、幅約12cm程度になるかと思われる。身の厚さは脊で約0.3cmと比較的薄い。394残欠と共にＳＢ265出土。

393は身幅の約２分の１程度が残存するものであろう。残存部も折り返しを欠失している。長さ5.0cmで、刃幅が脊幅よりかなり広く開く特徴をもつ。395ともＳＤ019濠３Ｇ区出土。

396・397・398の３点は小型仿製鏡２面を出土したＳＢ219から出土した同一形式の鍬先で、手鍬とでも呼ぶべきＵ字形刃部の小型品である。396でみると脊部両側には小さな舌状の折り返しがあり、一部木質が付着する。刃部はやや不整形なＵ字形で刃こぼれがある。脊幅5.0cm、長さ3.9cm。身厚0.2cm。398は片側折り返し部を欠失するがこれとほぼ類似し、長さ4.1cm。397も同様な残欠である。

〔鎌〕　直刃鎌399～403・405・406、曲刃鎌404、それに手鎌407を図示する。

399は全体に錆で覆われふくれているが、ほぼ完形品と思われる。直刃で脊がわずかに湾曲し、鋒がやや急にせばまって先端を斜めに切り落としている。基部は刃部に対し約98°の角度で折り返して柄が付く。ただし折り返し部分は一部欠損する。長さ20.7cm、幅は基部で4.4cm鋒部で2.3cmである。ＳＤ019濠６Ｆ区出土。

400は鋒方約５分の２程度を欠失する。全体に銹化著しくふくれている。脊は直線、刃部はわずかに内湾気味で刃こぼれがある。残存長13.5cm、基部幅4.8cm。柄部の折り返しは欠失するが、脊部に対する角度は96°である。ＳＤ019濠５Ｆ区出土。

401は鋒方約３分の１程度を欠失する。脊は直線、刃部は研ぎ減りによるものか内湾して鋒

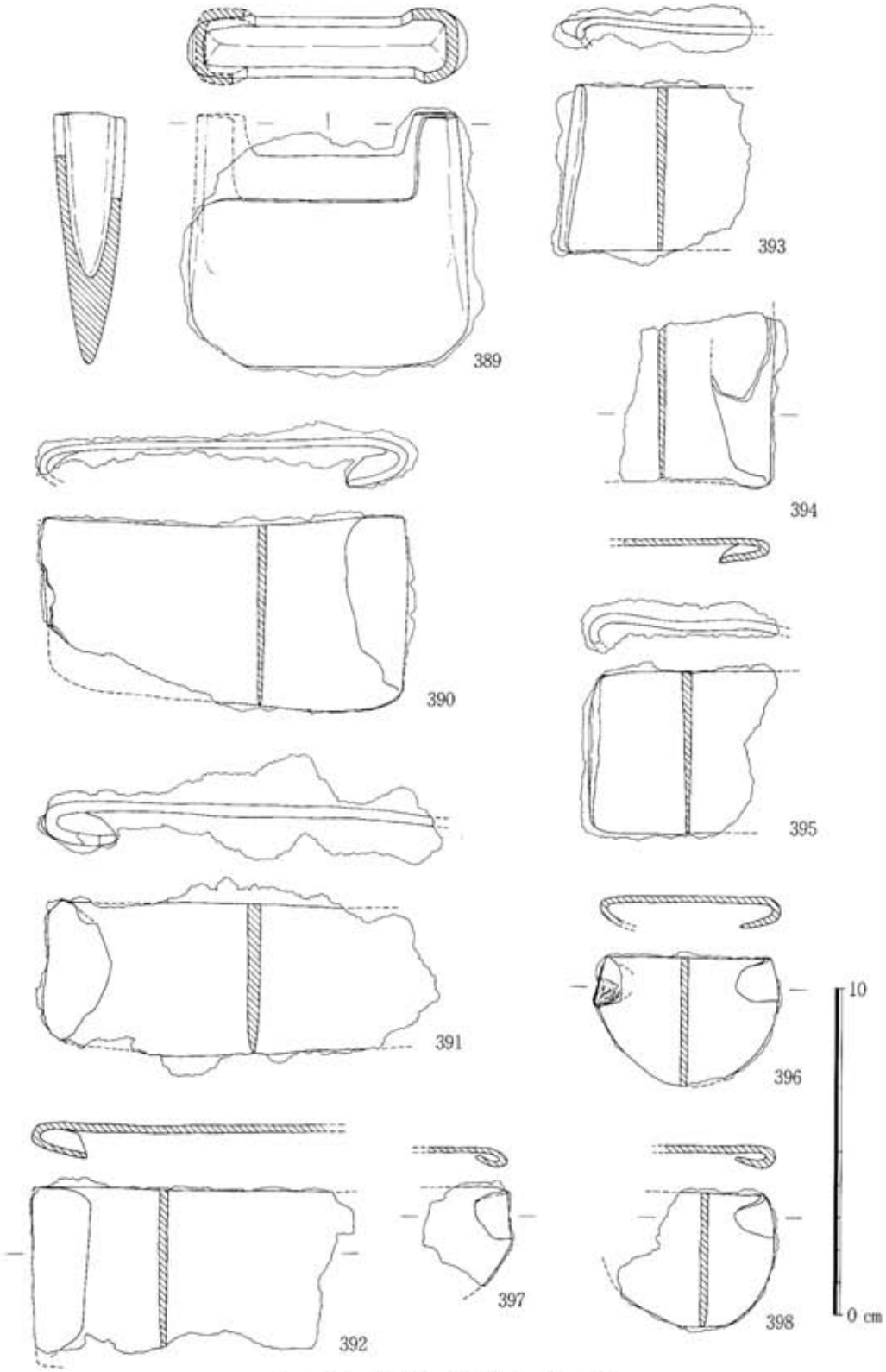


Fig. 100 鉄器 2 鋳造鉄斧・鍬 (½)

が急に狭くなる。残存長10.5cm、基部幅3.4cm。柄部の折り返しは短く一部欠損し、柄を結びつけた樹皮らしい痕跡が残る。脊に対する角度はほぼ直角である。ＳＤ019濠２Ｇ区出土。

402は現在、途中で曲がり２つに折れ、基部の折り返しを欠失する。復元すれば長さ22.6cm、基部幅4.4cm、鋒幅2.0cmである。脊は鋒でやや内湾、刃部側も基部ちかくの2.4cmから先は内湾気味で、先端を方形に切り落す。脊に対する折り返し角度89°。ＳＤ019濠12Ｃ区出土。

403は鍬先状にもみえるが鎌としておく。基部は脊に対しほぼ直角に折り返し、鋒が斜めに刃部をつくって切れ上がる。長さ10.0cm。基部幅2.2cm。ＳＤ019濠２Ｇ区出土。

404は１点のみ曲刃鎌が出土した。ただし検出面出土である点に問題はあるが、一応弥生時代としておく。柄茎と鋒を欠失しており、残存長8.6cm、刃幅2.5cm。両面には樹皮を巻いたかとみられる繊維状痕跡が認められる。

405・406は基部折り返しの特徴をもたないが直刃鎌か。それぞれＳＢ215、ＳＢ273出土。

407は１点のみＳＤ019濠東辺から出土した手鎌で、残存長3.9cm、幅2.0cm。脊にはヨコに木目がはしる木質が幅0.9cmで一部遺存する。

〔刀子〕　408・409の2点がある。出土地点はやや離れるが同一個体の可能性もある。409は弥生時代では類例の少ない鹿角装である。

408は２片に折損する。本来的には片関とみられ、茎と切鋒をやや欠質する。復元すれば身の長さ約14cm、幅は基部で1.8cm、鋒で1.3cm、脊厚0.3cm。ＳＤ019濠４Ｅ区出土。409の茎は長さ7.5cm、幅1.0cm、厚さ0.6cm。これに鹿角の柄を装着する。柄の握りは下方の幅を狭く断面三角形状に削っている。ＳＤ019濠３Ｆ区出土。

〔のみ〕 410が１点ある。刃部は断面やや台形で下幅1.1cm、厚さ1.2cm。片刃で厚味がある。袋穂は刃部からそのまま膨らみ、断面は長方形。残存部での最大幅は2.0cmで、柄の木質が遺存する。袋穂の中央に縦の亀裂が走っているのは合わせ目と思われる。残存長11.6cm、そのうちの刃部長6.0cm。ＳＤ019濠８Ｄ区出土。

〔鉋〕 411～414の４点を図示しておく。１点をのぞいて残欠である。古墳時代の鉋に見られるような板状茎の特徴をもつものは見あたらない。

411は両端を使用する。断面でみると中央は曲面を描くが両端刃部付近ではＶ字形となって深い。全長11.1cm、幅1.0cm、厚さ0.1cm～0.15cm、ＳＤ019濠８Ｄ区出土。

412は断面および柄とみられる木質の付着位置から、図上方が鋒であろう。残存長6.8cm、幅は鋒の方がやや広くなり1.2cm、厚さ0.2cm。奈良時代の溝ＳＤ208から出土したが混入であろう。413残欠も断面および木質の遺存位置からみて図上方が鋒であろう。ＳＢ215出土。414残欠も図上方が鋒にあたる。残存長5.9cm、幅1.0cm、厚さ0.1cm～0.15cm。ＳＪ233甕棺墓で下甕外の墓壙底から出土したが、副葬品とは思われない。

〔鑿〕　415～420の６点を図示しておく。それぞれ特徴をもつが、身と茎がやや不分明で茎が

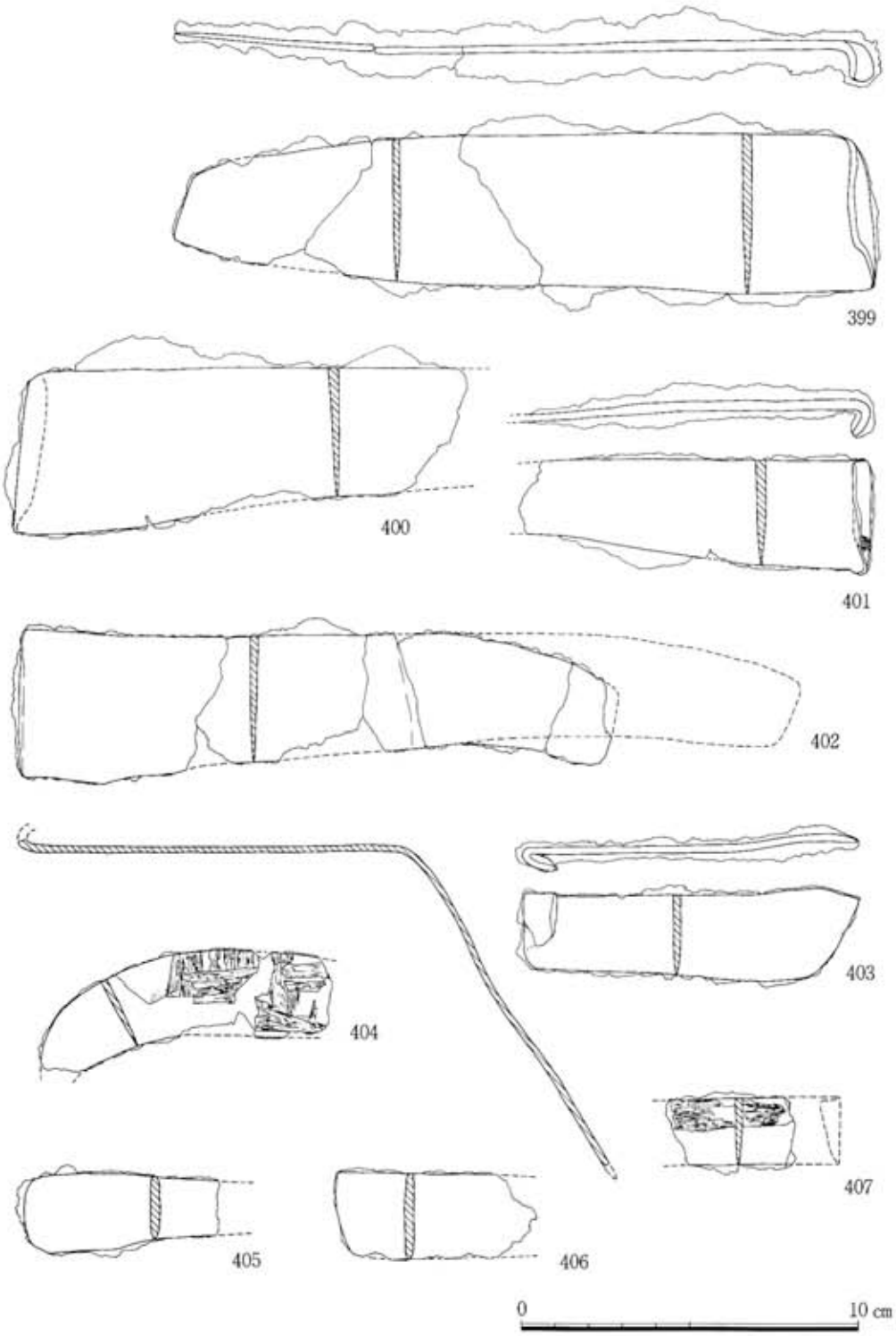


Fig.101　鉄器3　鎌（½）

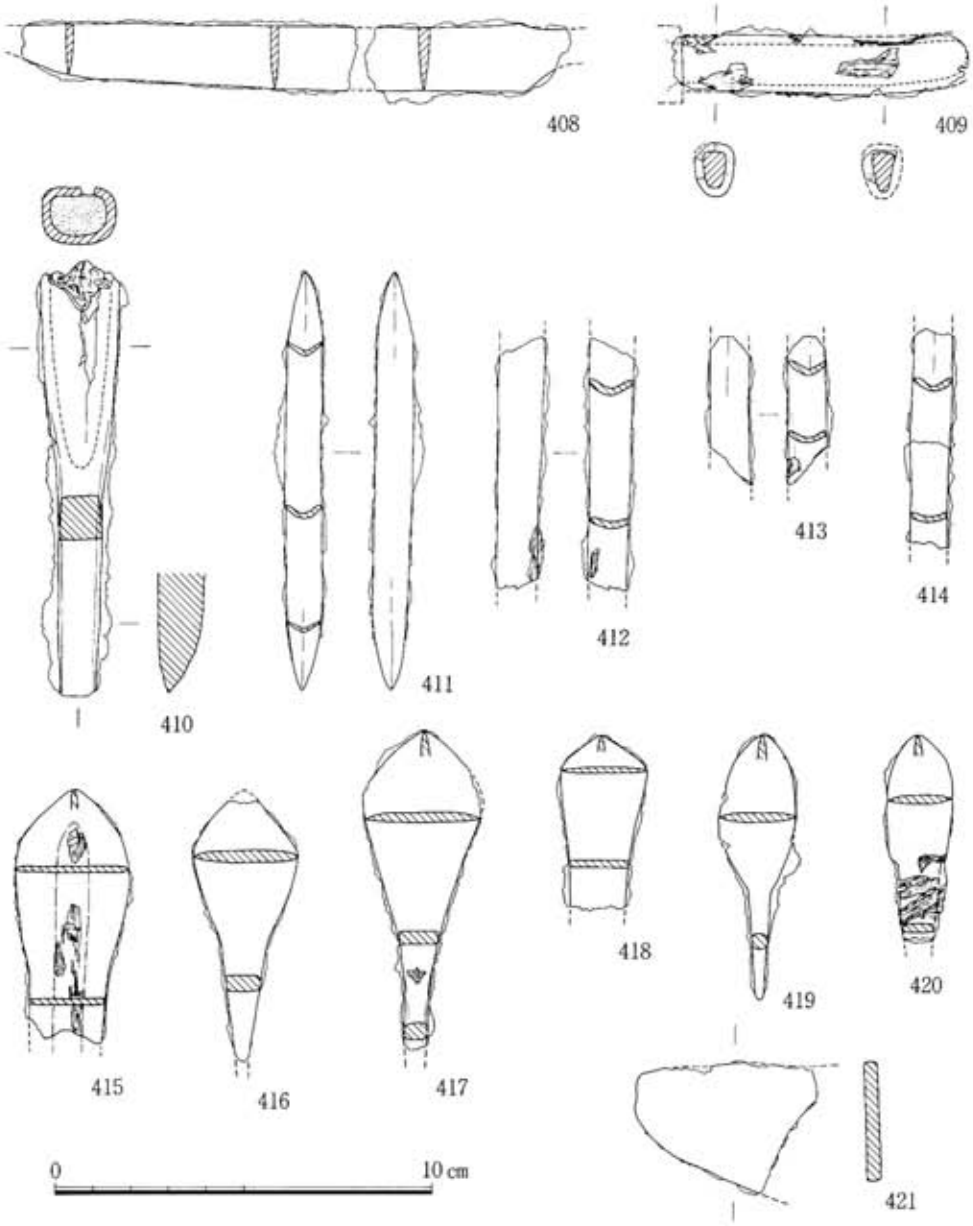


Fig. 102　鉄器4　刀子・のみ・鉋・鏃（½）

短いあるいは無茎といった点は弥生時代通有の形態である。

415は大型広身で、無茎であろう。両面には鏃頭は挟みこんだ柄の木質痕が幅0.8cmで先端ちかくまで残る。残存長6.7cm、身幅3.0cm、厚さ0.15cm。ＳＤ019濠８Ｄ区出土。

416は菱形身からのそのまま幅がせばまって茎につづく。残存長6.9cm、身幅2.8cmで厚味がある。ＳＤ019濠８Ｄ区出土。417もこれに類するがやや大型である。ＳＤ019濠３Ｆ区出土。

418は鋒が鋭く尖り身が板状に細長い。ＳＤ019濠３Ｆ区出土。

419は身全体が丸味をもち、やや稜をなして細い茎が付く、長さ7.0、身幅2.0。ＳＤ019濠２Ｇ区出土。420は茎幅が広く、身との境に段をもつかと思われる。茎には柄を結んだであろう樹皮が一部遺存する。残存長5.6cm、身幅1.7cm。ＳＤ019濠７Ｅ区出土。

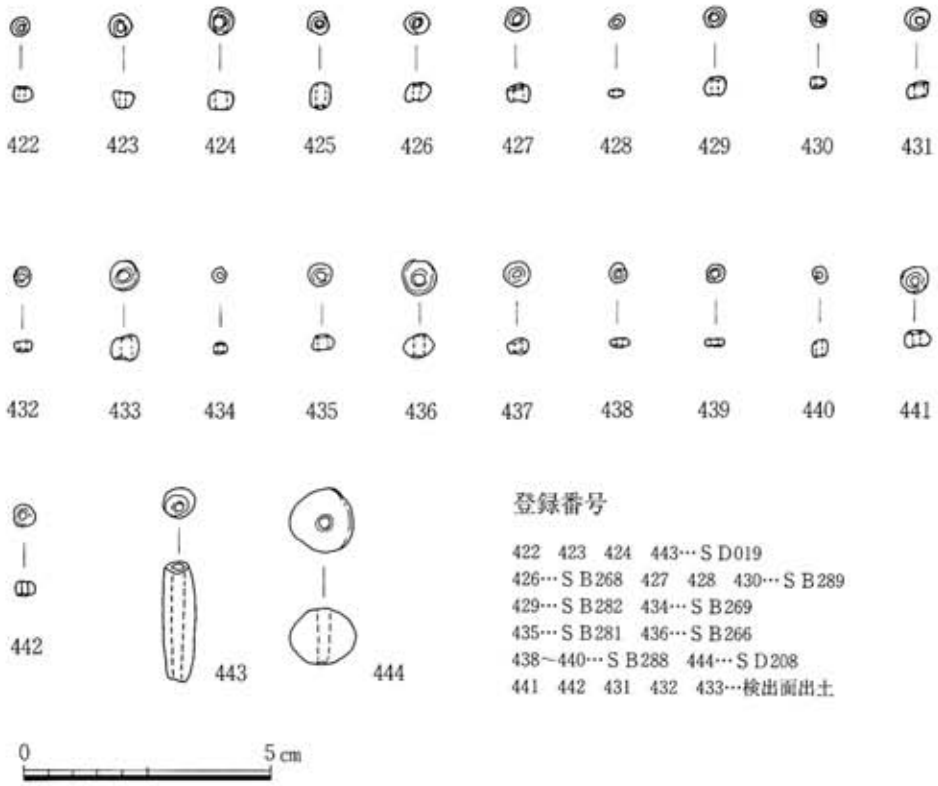
その他421は用途不明の板状鉄片で残存長4.2cm、厚さ0.4cm。ＳＢ222出土。

（鉄器　遺物登録番号）

382－8712373　383－8909130　384－8909139　385－8712372　386－8714025　387－8909132
388－8909133　389－8714026　390－8712366　391－8909131　392－8712395　393－8712371
394－8712396　395－8712368　396－8712398　397－8712400　398－8712399　399－8714027
400－8712381　401－8712375　402－8712386　403－8712367　404－8714031　405－8909135
406－8909136　407－8714032　408－8712322　409－8712347　410－8712385　411－8712324
412－8712384　413－8714012　414－8714028　415－8712383　416－8909128　417－8712321
418－8712370　419－8909134　420－8712382

(5) 玉類

ガラス製の小玉422～442（422～433は青色、434～442は紺色）が多く、他に緑色ガラス管玉443と乳白色めのう丸玉444がある（Fig.103, ＰＬ71）。



登録番号

422　423　424　443…ＳＤ019
426…ＳＢ268　427　428　430…ＳＢ289
429…ＳＢ282　434…ＳＢ269
435…ＳＢ281　436…ＳＢ266
438～440…ＳＢ288　444…ＳＤ208
441　442　431　432　433…検出面出土

Fig.103 玉類（2/3）

3 古 墳 時 代

土師器と鉄器が若干ある（Fig.104・105, PL75）。

SD011は調査区東南隅にある東西溝で、今回の調査区内では唯一明確な古墳時代の遺構である。ただし一部分しか調査していないので性格については必ずしも断定できないが、一応、溝として扱っておく。埋土中から古式土師器が若干量出土している。

またSD019埋土中からは古墳時代に下るかと思われる鉄鏃が少量出土した。SD019は弥生後期終末まで続く環濠で、他にも弥生の鉄鏃等が出土しており、必ずしもそれらと別時期とは言い切れないところはあるが、別遺構の切り込み等の可能性を考え一応区別しておく。

今回の調査で出土した遺物をみると古墳時代でも布留式以降にいてはSD011以外ほとんど皆無である。ただし、先に見たSD019出土土器の新しい段階にはわずかに庄内式の影響がみえることからも知られるように、既に先進地域では古墳が出現している時期に並行するであろうから、弥生時代の終焉と共に集落そのものが廃絶したということにはならない。なお、SD019およびSD207の環濠からは古墳時代の須恵器は全く出土せず、おそらく古墳前期前半のうちには完全に埋没した状態にあったと考えられる。

(1) 土師器

SD201溝から出土した446～450を一括して挙げておく。

440は小型壺。口縁部は胴部から屈曲して立ち気味に伸び、胴部は最大径がやや上位にあり、球状にちかいと思われる。内外面ともナデ、焼成不良のため黒褐色で、砂粒を多く含む。口径10.0cm、胴径10.8cm。447は底部に焼成前穿孔をもち、鉢状の甑であろう。茶褐色で砂粒を多

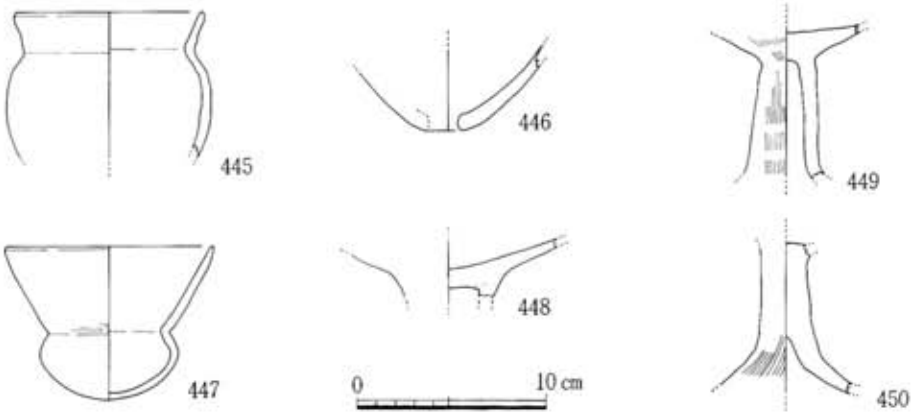


Fig.104 古墳時代の土師器（1/4）

く含む。447は口縁部が大きく開いた、いわゆる小型丸底坩。器壁は薄く、口縁部と胴部の境外面に細かなハケ目を残し、ナデて仕上げている。明褐色で砂粒を少し含む。口径11.0cm、胴径8.0cm、器高8.1cm。

448は高坏の坏脚接合部付近。坏底部は丸底気味で体部は直線的に開き、筒状の脚付に乗る。内外面ともナデて仕上げており、明褐色で微砂粒を含む。残高3.4cm。449は小型の高坏脚部で筒部は細くしまってやや不明瞭に屈曲して裾が開くようである。坏部は内面が平坦であり、体部の立ち上がりはやや浅いかと思われる。筒部外面にハケ目を残す。褐色で砂粒を含む。残高8.0cm。450は同じく小型の高坏脚部であるが、筒部は芯がつまり細身で、裾は明瞭な屈曲をもたずに開く。筒部外面にハケ目を残す。明褐色で微砂粒をわずかに含む。残高8.1cm。

遺物登録番号は以下のとおりである。

445－8802833　446－8802836　447－8802834　448－882837　449－8802838

450－8802839

(2) 鉄器

451はＳＤ019濠３Ｆ区下位、452～454は同溝２Ｇ区上位から出土した。いずれも細身長頸形式の鉄鏃である。ただし篦被と茎との段は451のみ残存するが、他は頸部の途中から茎を欠失して不明である。身は453のみ細長く伸びる。

遺物登録番号は以下のとおりである。

451－8712325　452－8712376　453－8712377　454－8712378

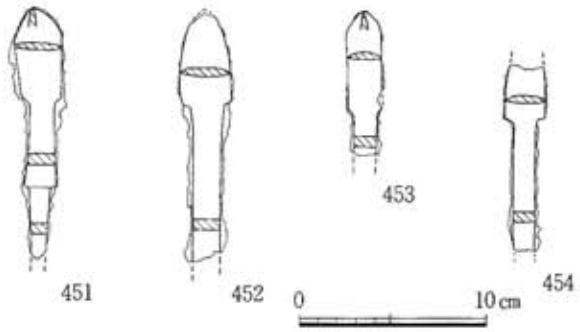


Fig.105　鉄鏃（½）

4　奈良・平安時代

溝および土壙から須恵器と土師器が若干出土した（Fig.106, ＰＬ75・76）。少ないながらも主体は須恵器で、土師器はごくわずかである。他には布目瓦片数点と、土器以外ではＳＫ234から釘片が１点出土したのみである。遺物が最も多く出土したのはＳＫ234で、ＳＤ205およびＳＤ208の溝２条は調査が断面試掘溝だけで完掘しなかったこともあって量は少ない。ただし試掘溝の状況からすると、埋土中に包含される遺物の量はもともと少ないようである。

以下、須恵器と土師器について遺構ごとにまとめて概要をふれる。遺物一覧Tab.４。

(1)　須恵器・土師器

ＳＤ205溝からは須恵器455～458が出土した。455蓋はつまみが無く天井部はややつぶれて口縁端部が短く立つ。456・457坏は高台が底部の内に入り、体部は底部と稜をなしてやや浅く直線的に伸びる。458は底部がヘラ切り離しのままの不安定な皿で、体部は短く開き口縁部が外反する。

ＳＤ208溝から須恵器459～461が出土した。459・460蓋はつまみとも天井部が偏平にちかくつぶれる。461坏は高台が底体部の境に付き、短く立つ。

ＳＤ207溝からは土師器坏462と瓦質土器463が出土した。462は口径が大きく底部はヘラ切り離し、463は坏底部が丸味をもち、その接地面とほぼ同高の高台がめぐる。

ＳＫ232土壙からは須恵器蓋464が出土した。天井部は平坦で、口縁部が短く折れて立つ。

ＳＫ234土壙からは465～474が出土した。そのうち474が土師器、他は全て須恵器である。器種には須恵器坏蓋および身・皿・壺、土師器鉢がみられる。

須恵器蓋465～466は天井部が全体に丸味をもち、口縁端部はただ垂直にちかく成形する。465は破片天井部に墨書「田」があり、上にもう１字あったとすればこの地区で既に類例のある「山田」かもしれない。「山田」では肥前風土記にも登場する久池井周辺の古地名である。須恵器坏のうち468～470は大小の差はあるが、高台は底部のやや内に入り体部が底部と稜をなして立ち上がる。468は底外面には墨書があるが一部分のため読めない。高台をもたない須恵器坏471は体部が底部と明瞭な稜をなして外反気味に立ち上がる。472は須恵器皿。473の須恵器壺は別々に出土した底部・胴部・口縁部を同一個体とみて、図上で復元したものである。したがって法量等は必ずしも正確ではないが、参考資料として挙げておく。胴部肩と頸胴間は突帯で飾り、細頸に二段口縁が付く。

鉢474のみ土師器で、平坦を思わせる底部から、体部は急に立ち上がって深い。

これらの須恵器・土師器の時期は太宰府周辺の編年に合わせ、およそ次のとおり推定する。ＳＤ205溝出土の一群は８世紀前半に位置づけられ、これはＳＢ239掘立柱建物跡ほかの約９°

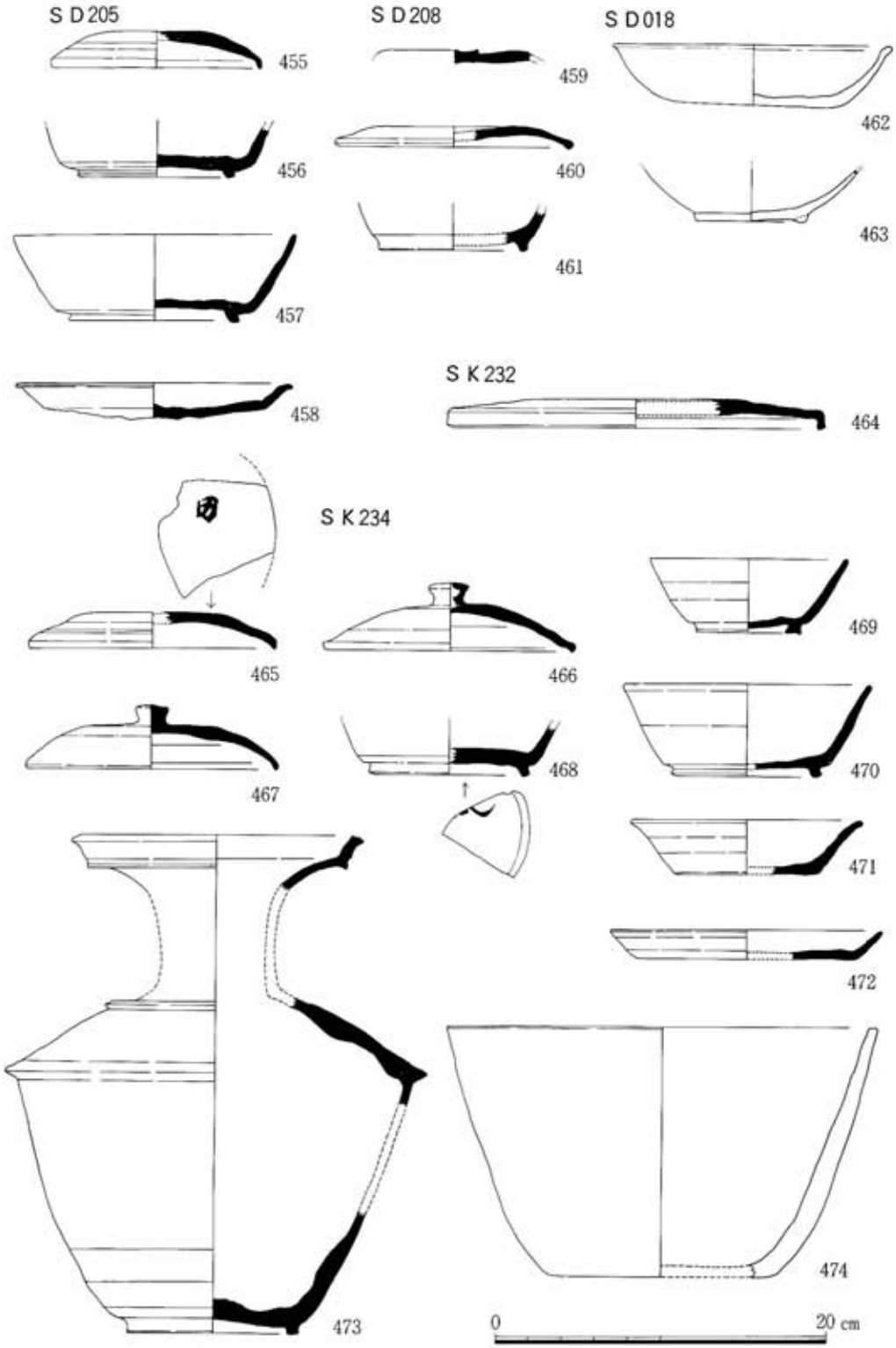


Fig.106 奈良・平安時代の須恵器・土師器（1/4）

西傾する倉庫群7棟の時期を示すものであろう。ＳＤ208溝出土の一群は8世紀後半～9世紀初に位置づけられ、これはＳＢ260掘立柱建物跡ほかの正方位建物群の時期を示すと思われる。また、ＳＫ232およびＳＫ233土壙出土の一群も8世紀後半を中心とするものであって、正方位建物群と同時期がその廃絶直後の様相を示すものであろう。

ＳＤ018溝出土の2点は12世紀前半頃と推定する。切り合わないまでもこれと重復する小型柱穴のＳＢ279掘立柱建物跡は、おそらくそれ以前であろう。

以上の遺物推定時期から総じていえば、今回の調査地区の遺構は8世紀前半～9世紀初の主に奈良時代で、9世紀前半以降この地区の利用については不詳ながら、平安時代のうちに再び建物が造られるが、もはやそれは官衙的なものではない、といった変遷を辿ることができる。

Tab. 4　奈良・平安時代の須恵器・土師器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
106－455 8401949	ＳＤ205 下層	須恵器 蓋	口径 12.6 器高 2.2	天井部は狭く平坦で、口縁端部は短く折れて直に立つ。つまみは付かない。	天井部平且面ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。器壁が厚い。外面暗灰色、内面暗褐色で砂粒やや多く含む。
－456 8401950	ＳＤ205	須恵器 坏	底径 9.4 残高 3.0	体部は底部と不明瞭ながら稜をなして急に立ち上がる。高台は、やや内に入って短く外に張る。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ。灰色で砂粒やや多く含む。
－457 8804810	ＳＤ205 上層	〃	口径 17.0 底径 10.2 器高 5.2	体部は底部と稜をなして直線的にやや浅く伸びる。高台はやや内に入って短く外に張る。	底外面ヘラ切離し後ナデ他ナデ、他ナデ仕上げ。明灰色で砂粒を殆ど含まない。
－458 8810894	ＳＤ205 上層	須恵器 皿	口径 16.0 器高 2.1	底部は丸味があり不安定。体部は底部と稜をなして短く立ち、口縁部は薄く外反する。	底外面ヘラ切離しのまま他ナデ仕上げ。酸化により褐灰色で焼ぶくれあり。砂粒は殆ど含まない。
－459 8401946	ＳＤ208 ６Ｂ区	須恵器 蓋	残高 0.8	天井部は平坦で痕跡程度のつまみが付く	天井部ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。暗灰色で砂粒をやや多く含む。
－460 8401947	ＳＤ208 ６Ｅ区	〃	口径 14.4 残高 1.3	天井部は平坦で低くつぶれ、口縁端部は丸くまるめる。つまみを欠失する。	天井部ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。明灰色で砂粒を少し含む。
－461 8401945	ＳＤ208 ６Ｂ区	須恵器 坏	底径 9.0 残高 2.4	高台は底体部境にあって短く立つ。	ナデ仕上げ。明灰色で微砂粒を少し含む。
－462 8803007	ＳＤ018	土師器 坏	口径 16.8 器高 3.7	体部は底部と明瞭な稜をなさず。内湾気味に立ち上がって口縁端部が外にめくれる。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ。底外面に板目痕あり。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－463 8401940	〃	瓦器 坏	底径 6.6 残高 3.2	体部から底部にかけて丸味をもち、高台は底中央接地面とほぼ同高に低くめぐる。	ナデ仕上げ。底外面に板目痕あり。外面暗灰色、内面明灰色で砂粒は殆ど含まない。
－464 8401948	ＳＫ232	須恵器 蓋	口径 23.0 残高 1.8	天井部は偏平で、口縁部は稜をなして折れ短く直に立つ。	天井部約2分の1ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。明灰色で砂粒をやや多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
106-465 8401939	SK234 上層	須恵器 蓋	口径 14.6 残高 2.2	天井部はわずかに平坦をつくり、体部は丸味をもって下り口縁端部が断面三角の稜をなす。墨書「田」あり。	天井部約2分の1ヘラケズリ、田ナデ仕上げ。明灰色で微砂粒を少し含む。
−466 8401933	〃	〃	口径 14.8 器高 4.1	天井部から口縁部まで一体化して見る味をもち、口縁端ぶは断面三角形の稜をつくる。ヘラ記号あり。	天井ぶ約4分の3ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。明灰色で砂粒を含む。
−467 8401934	〃	〃	口径 15.0 器高 3.9	天井部はわずかに平坦をなし、体部は丸味をもってそのまま口縁部につづく。小さくやや雑なつまみが付く。	天井部約2分の1ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。灰色で砂粒をやや多く含む。
−468 8401938	〃	須恵器 坏	底径 9.8 残高 3.0	体部は底部と稜をなして立ち上がり、高台は体部ちかくにあって短く外に張る。底外面に墨書あり。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ。灰色で砂粒をやや多く含む。
−469 8401931	〃	〃	口径 12.0 袖無 6.4 器高 4.5	体部は底部と不明瞭な稜をなしてやや内湾気味に立ち上がり、高台は体部ちかくにあって短かく立つ。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ。暗灰色で微砂粒を少し含む。
−470 8401932	〃	〃	口径 14.8 底径 8.4 器高 5.5	大型の坏。体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がる。高台はやや内に入って短く外に張る。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ。褐灰色で砂粒を含む。
106 −471 8401930	〃	須恵器 坏	口径 13.7 底径 8.0 器高 3.3	体部は底部と不明瞭な稜をなして外反気味に開いて立ちあがる。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ、明灰色で微砂粒を少し含む。
−472 8401926	〃	須恵器 皿	口径 16.4 底径 13.3 器高 1.7	体部は底部と明瞭な稜をなして短く立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ、他ナデ仕上げ。灰色で砂粒を少し含む。
−473 8401929	〃	須恵器 壺	口径 16.4 胴径 25.6 器高 30.0	図上復元。口縁部は細頸から外反して2段に立つ。胴部は肩をもち突帯2条、高台は底体境にあって低い。	胴部下半ヘラケズリ、低外面ヘラ切離し後ナデ、胴部肩位内面に同心円文を残しナデ仕上げ。外面灰色。
−474 8802851	〃	土師器 鉢	口径 25.7 器高 14.9	体部は平坦な底部から急に直線的に深く立ち上がる。	体部は回転ナデ。明褐色で砂粒を含む。

久池井（くちい）Ｂ遺跡

遺跡名：久池井Ｂ遺跡（略号　ＫＴＴ－Ｂ）
所在地：佐賀郡大和町久池井四本杉

久池井Ｂ遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は惣座遺跡の東方約150 mに位置する。調査区はⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区に別れる。一帯は現在、九州横断自動車道建設によって地形が一変してしまっており、Ⅰ区・Ⅱ区が佐賀大和第１インターチェンジ（国道263 号線東側）、Ⅲ区が第２インターチェンジ（同国道西側）にあたる。Ⅰ区・Ⅱ区が昭和57年度調査、Ⅲ区が昭和62年度・63年度で、しかもそれぞれ調査者が異なるので、本来一つの遺跡ではあるが、遺構・遺物ともそれぞれ区を分けて説明することにする。ただしⅢ区の場合は調査時点では惣座四本杉遺跡としたが、立地および遺構の関連性などからみるとⅠ区・Ⅲ区と同一視すべき遺跡であるので、今回改めて先に名称のあった久池井Ｂ遺跡に統一したものである。また、各調査区の遺構番号も惣座遺跡・惣座Ｂ遺跡に関連する一連番号に打ち改め今回整理した結果、久池井Ｂ遺跡の中で調査時期の順にⅠ区・Ⅱ区が300番台、Ⅲ区が700番台の遺構番号を付すことになった。これは肥前国府跡確認調査以来もちいて来た方法を踏襲するもので、これだと例えば国府関連の建物を示す場合でも遺跡をこえて重複せずに名称をあたえることができる。ただしこの方法はあくまで肥前国府跡の確認を主眼に調査を進めてきた段階のものであって、調査が国府の時期以外にも及びしかも国府関連遺構が

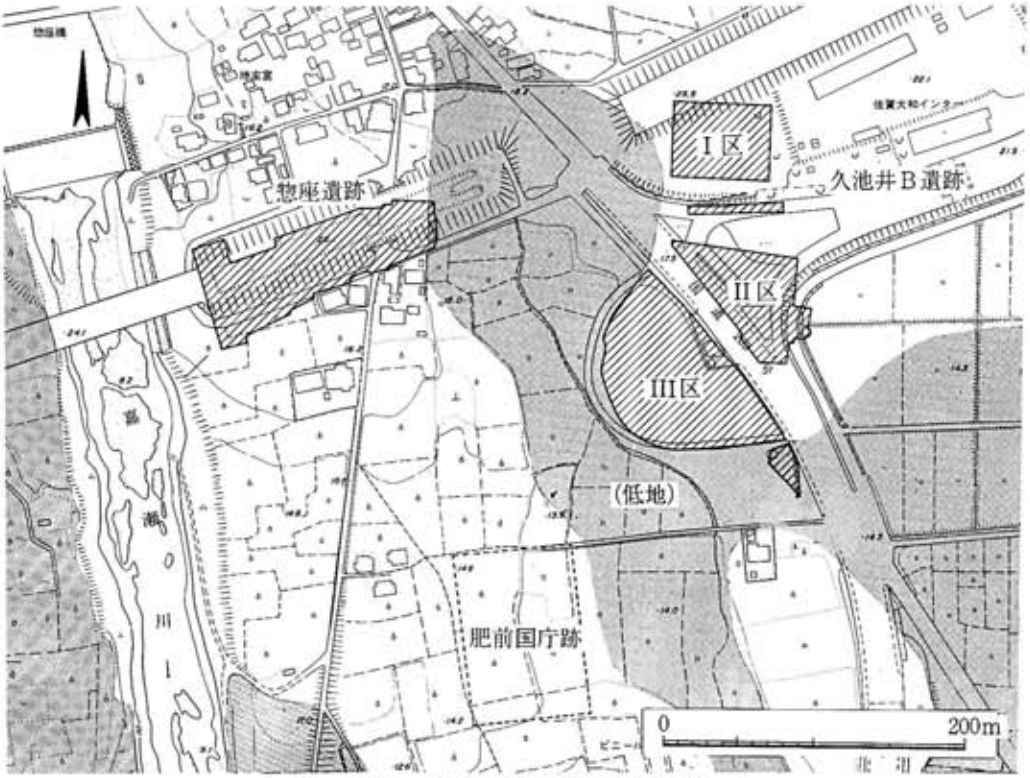


Fig. 107　久池井Ｂ遺跡発掘位置図（1/2000）

当初の予想をこえた範囲に拡がった今日では、いずれ再考すべき必要を感じている。ともあれ、当面はこの一連番号は現在確認されている国庁跡とその周辺官衙地区、すなわち広義の惣座遺跡（最近の調査ではその中で小字名を加えて区別することもある）と久池井Ｂ遺跡に限定して用いておくことにする。

さて本書のはじめにも触れたように、久池井Ｂ遺跡が所在する台地は惣座遺跡とは別の台地である（Fig.107）。これまで佐賀県および大和町が実施した調査結果を総合してみると、両遺跡の間には幅50m～100mほどで浅い凹地帯か南北に走っており、ここでは井戸・溝等はあるが建物が所在しない。この凹地帯は現在でも水田が主であって、両遺跡がのる台地が蜜柑園等に利用されているのと明らかに区別される。現地形での比高差は約0.5mであり、おそらく国府の時期においてもある程度湿地状態ではなかったと推定される。したがって両遺跡が並存した以上、その間の通交には近接しながらも一定の不便があったと思われるが、見方を変えれば久池井Ｂ遺跡の場合、国庁跡ほか惣座遺跡内の周辺官衙とは一定程度分割された機能をもつ建物群であったと想定できるのである。

次に久池井Ｂ遺跡の地形だけをみると、この台地は嘉瀬川東岸の山麓部から低位段丘が南に舌状に張り出したものであって、その末端は一旦途切れて先にバイパス関連調査を実施した地区にまで伸びる。したがってバイパス関連調査では惣座遺跡Ｂ遺跡とした地区も実際は久池井Ｂ遺跡の続きとみた方がよい。久池井Ｂ遺跡の範囲については調査区の北側および東側で試掘を行ったが若干の溝・土壙が検出されただけで、建物跡はみつからなかった。大和町が圃場整備関連で東側一帯を広く確認調査を実施した際も結果は同様であった。これらのことから見ると久池井Ｂ遺跡はそれ自体が他と分断された一つのまとまりある遺跡であり、今回のⅠ区・Ⅱ・Ⅲ区の調査をもって、ほぼその全体を完掘したといえよう。

各調査区で検出した遺構は殆ど奈良・平安時代で占められ、ほかにはⅢ区で弥生前期の貯蔵竪穴３基、Ⅱ区で７世紀の土壙墓１基、またⅢ区で中世の溝数条がある程度である。奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物跡が多く、Ⅰ区７棟、Ⅱ区８棟、Ⅲ区25棟を数える。中でもⅡ区を中心とする建物群は大型の３棟が鍵型に整然と配置されて北側に５棟の倉庫をもち、さらに側溝をもつ道が北に伸びてⅡ区に大型の井戸を配する。方位をほぼ真北に揃えており、一つの完結した機能をもつ遺構群とみられる。Ⅰ区北側にも正方位にちかい建物群はあるが、規模は小さい。Ⅲ区の建物群は方位から区分するとおよそ３群に分かれ、おそらく時期差によると思われるが複雑な配置をみせている。その他の遺構は溝・井戸・土壙墓があり、とくにⅢ区で数が多い。これらは建物群との時期ごとの関係およびその廃絶、あるいは地割り等の問題に重要な関わりをもつものである。

具体的な様相は以下、調査区別に説明し、肥前国府跡の中での位置付けについては惣座遺跡等と合わせて後に総括する際まとめて述べることにする。

1　Ⅰ区 (Fig.108, PL77～83)

地形は南に向かう緩やかな傾斜面で、水田耕作による段々がある。また調査区北側は約1.5m高くなって再び緩傾斜が北に向かって上がる。全体に削平が著しく遺構の残りが浅い。

検出した遺構は掘立柱建物跡７棟、井戸１基、土壙10基、溝６条である。

まず掘立柱建物跡は７棟が調査区の北側に偏って位置し、一部は切り合う。柱掘形はいずれも径30cm前後の円形で、建物自体も国府関連官衙といえるような規模のものではない。構造はＳＢ314が３間×２間で、ＳＢ315も北側は高い盛土の農道があって検出できなかったが同じ構造であろう。またＳＢ309は柱穴が一部痕跡程度しか残存しなかったが、やはり３間×２間と推定する。この３棟はいずれも南北棟であるとはいえ、ＳＢ314がほぼ正方位であるのに対しＳＢ315はやや西に傾き、逆にＳＢ309はやや東に傾くといったわずかな違いがあり、規則的な配置関係をもたない。３間×２間で柱穴が小円形の特徴をもつ建物跡はⅢ区でも長棟構造の半数以上を占め、方位はまばらではあるが全期間を通じて最も一般的とみられる。春日遺跡でも１棟を検出している。２間×２間総柱の倉庫構造建物はＳＢ212・ＳＢ213・ＳＢ311の３棟がある。いずれも方位を正方位に揃えており、隣接するＳＢ314と関係する倉庫であろうか。ただしＳＢ312とＳＢ313はほぼ同じ位置に建ち、柱穴の切合い関係からＳＢ313→ＳＢ312への建替えが考えられる。また２棟はＳＤ322に切られている。ＳＢ310は柱穴の全てがそろって検出されたわけではないので問題は残るが２間×１間としておく。ＳＢ311と重なるが先後不明。

井戸はＳＥ302が１基ある。上面はかなり削平されているが約３m四方の方形に掘り込んだあとさらに約１m四方の方形で深く掘り下げており、肥前国府関連ではこれまで唯一の大型井戸である。検出面から約６mの深さにもかかわらず出水がなく、また埋土中に殆ど遺物が含まれないので実際使用されたかどうかは疑問である。このＳＥ302の北側にはＳＫ301とした底面平坦な浅い窪みがあり、関連施設の可能性がある。ＳＥ302はＳＫ303に切られる。

溝は６条あるうちＳＤ304・ＳＤ305か位置関係からみてＳＥ302に関連するであろう。またＳＤ307とＳＤ308は約４mの間隔をおいて並行しながらＳＥ302からほぼ真南に向かっており、おそらくＩ区の建物群とＳＥ302井戸とを結ぶ通路の側溝であろうと考えられる。ＳＤ307の続きはＩ区でも一部みられ、もう１条並行するＳＤ306はⅢ区のＳＤ713に続いている。これらの溝は削平のため深さ10cm～20cmほどしか残っていない。北側のＳＤ323は南に傾いて東から西に向かったあと南に折れる。深さ約50cmの断面Ｕ字形で比較的よく残っていたが、それでも両端は削平のため途中で消える。ＳＢ312およびＳＢ313を切る。

土壙はＳＢ314の東脇にＳＫ316～ＳＫ320が集中的に掘り込まれており、ＳＢ314等に関連する廃棄壙と推定する。このうちＳＫ320は削平されて深さ５cmほどしか残存しなかったが、他４基は埋土中から比較的多量の須恵器・土師器が出土した。西側のＳＫ324～ＳＫ326も小量で

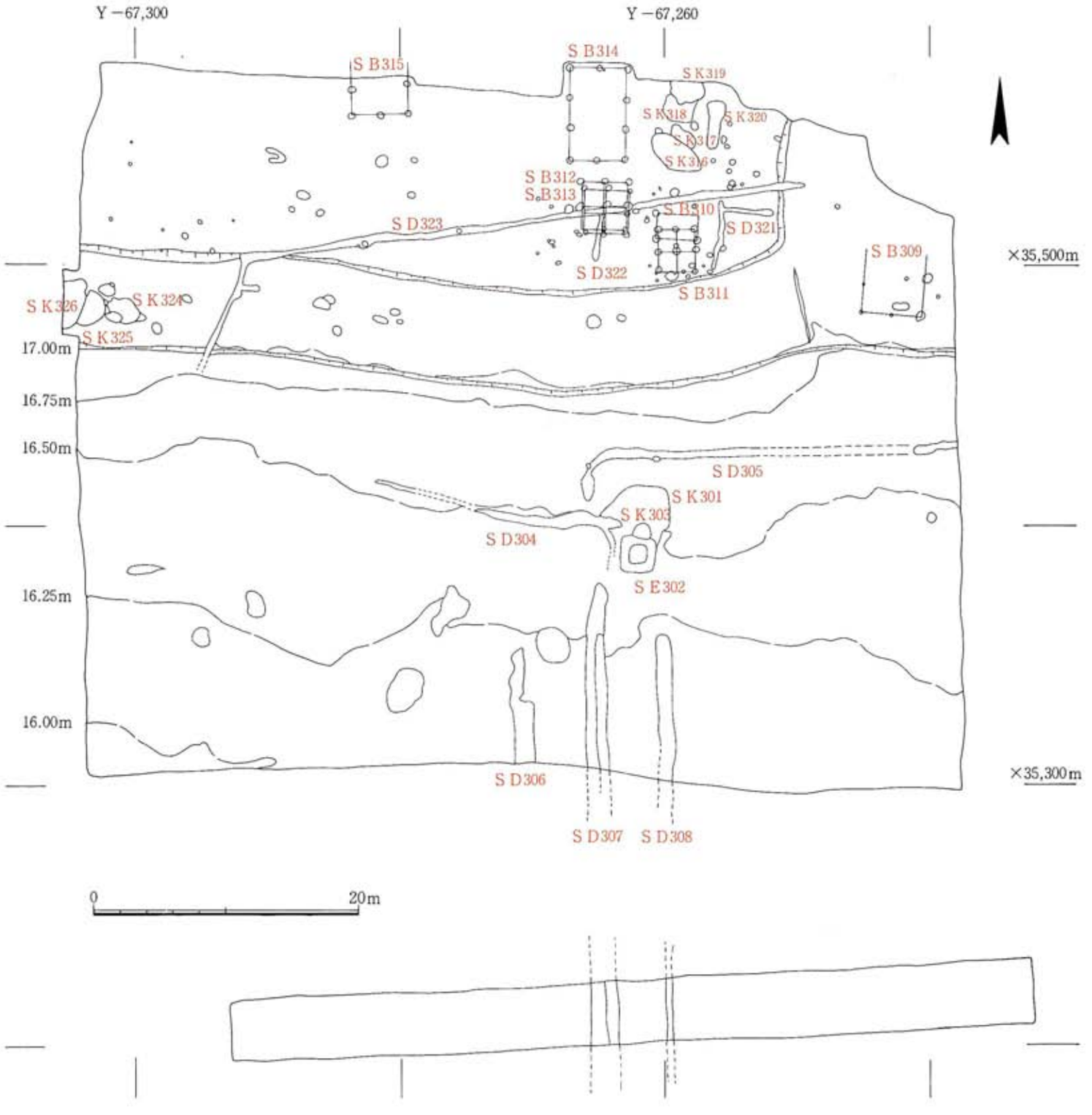


Fig. 108　久池井B遺跡Ⅰ区遺構配置図（1/400）

はあるが須恵器・土師器が出土しており、廃棄壙であろう。

各遺構の時期は、ＳＫ316・ＳＫ317とＳＫ318・ＳＫ319が８世紀後半である。ただし遺物の組成からは前２基の方が若干古い。またＳＫ324～ＳＫ326も８世紀後半である。溝ではＳＢ312に切られるＳＤ323が８世紀中頃である。従ってＩ区北辺の建物群はこれら廃棄壙をある時期に伴うものとみて、８世紀後半を中心とする頃と推定しておきたい。一方南側の井戸および溝はＳＤ306～ＳＤ308が８世紀中頃～後半の遺物を出土、ＳＫ301も同時期である。ＳＤ305は８世紀末～９世紀中頃と推定する。従ってこれら溝等と関係するであろうＳＥ302は８世紀のうちには存在したことは確かであろうが、おそらく９世紀中頃までのうちには廃棄されたのではないかと推定する。この点はⅡ区建物群の時期とも関係する問題である。

Tab. 5　久池井遺跡Ⅰ区遺構一覧表

遺構番号	種　別	形　態	規　　模　　m	備　　考	旧番号
ＳＫ301	竪穴	方形か	１辺約4.7		ＳＫ301
ＳＥ302	井戸	方形	上掘2.9×2.7、井戸1.45×1.35、深５以上	ＳＫ303に切られる	ＳＥ302
ＳＫ303	土壙	円形	径1.35		ＳＢ302
ＳＤ304	溝	東西溝	長19.2、幅0.6～1.1	方位N91°40′E	ＳＤ323
ＳＤ305	〃	〃	長30.5、幅約0.6	方位N91°W	ＳＤ311
ＳＤ306	〃	南北溝	長74以上、幅約1.5	方位Ｎ１°20′W	ＳＤ304
ＳＤ307	〃	〃	長65以上、幅約1.6	〃　、ＳＥ302関連	ＳＤ329
ＳＤ308	〃	〃	長31以上、幅約1.2	〃　、　〃	ＳＤ330
ＳＢ309	掘立柱建物	南北棟	（３間）×２間　(6.75)×4.50	方位Ｎ５°00′E	
ＳＢ310	〃	東西棟	１間×１間　3.23×2.00	方位Ｎ４°10′E	ＳＢ307
ＳＢ311	〃	南北棟(総柱)	２間×２間　3.36×2.88	方位Ｎ０°40′W	ＳＢ331
ＳＢ312	〃	〃（〃）	〃　3.67×3.45	方位Ｎ３°10′E	ＳＢ308
ＳＢ313	〃	〃（〃）	〃　3.45×3.45	方位Ｎ２°40′E	ＳＢ312
ＳＢ314	〃	南北棟	３間×２間　7.05×4.50	方位Ｎ１°10′E	ＳＢ319
ＳＢ315	〃	〃	（３間）×２間　(6.15)×4.18	方位Ｎ２°40′W	ＳＢ320
ＳＫ316	土壙	楕円形	4.3×2.2	須恵器・土師器多し	ＳＫ318
ＳＫ317	〃	〃	2.3×（1.1）	〃	ＳＫ315
ＳＫ318	〃	不整方形	2.2×（2.2）	〃	ＳＫ313
ＳＫ319	〃	不整円形	4.4×（2.5）	〃	ＳＫ314
ＳＫ320	〃	溝状	長3.6、幅約0.9		ＳＫ310
ＳＤ321	溝	東西・南北溝	長9、幅約0.4	西端で南に折れる	ＳＤ332
ＳＤ322	〃	南北溝	長3.5、幅約0.4		ＳＤ306
ＳＤ323	〃	東西溝	長51以上、幅約0.5	方位N103°20′W	ＳＤ009
ＳＫ324	土壙	不整楕円形	1.2×0.9		ＳＫ324
ＳＫ325	〃	〃	1.4×0.9		ＳＫ325
ＳＫ326	〃	〃	1.8×α		ＳＫ326

2　Ⅱ区 (Fig.109, PL84～95)

Ⅰ区から続いて地形はわずかながら南に傾斜し、その南端で一旦台地が終わって約0.5mやや急に下がる。掘立柱建物跡８棟・溝６条・井戸１基・土壙墓４基・土壙７基を検出した。

掘立柱建物跡は調査区の南側でＳＢ343・ＳＢ43・ＳＢ345の大型長棟３棟が鍵形に並びその北側にＳＢ334～ＳＢ338の倉庫建物５棟が鍵形に並ぶ。これらの建物跡は全て方位が真北でしかも規則的な配置をもつ。また国道263号をこえてⅢ区でもＳＢ345に並ぶＳＢ702があり、関連する建物跡とみられる。Ⅱ区の東側は圃場整備に伴う確認調査でも建物跡は見つかっておらず、南側も今回確認調査を行った結果では建物跡は存在しない。したがってⅡ区の建物跡８棟とⅢ区ＳＢ702を加えた９棟をもって、同時期に存在し完結した一群の建物跡とみてほぼ間違いないであろう。さらにその関連施設としてはＳＤ346溝がＳＢ343・ＳＢ344の南面に掘られ、ＳＤ339はＳＢ334・ＳＢ335の南面に痕跡程度残っており倉庫群に伴うものと考えられる。

まず掘立柱建物跡をみると、一群の中ではＳＢ344が主殿にあたり、ＳＢ343がその脇殿的な性格をもつものであろう。ＳＢ344は身舎６間×３間、南面に出１間の廂が付く６間×４間の東西棟で、身舎の梁中間に間仕切りをもつ。柱穴は身舎では間仕切り柱がやや小型の方形である以外は一辺約1.0mの方形で柱根径約0.25m、廂の柱穴はやや不規則な小型の方形である。ＳＢ343は５間×３間の東西棟で、柱掘形はＳＢ344同様一辺約1.0mの方形、柱根径約0.25mである。この２棟は3,5mの間隔で東西に並び、ＳＢ343とＳＢ344身舎の共に梁間中央の東西軸で列を揃えるが、桁行の柱間が互いに等しいのに対し、梁間の柱間はＳＢ343の方が小さい。その為、同じ３間でありながらＳＢ343とＳＢ344身舎部分との位置関係は後者の方が北側・南側とも柱列が１尺出ている。次にＳＢ345は６間×３間の南北棟で、出１間の東面廂をもつ。前２棟との位置関係は身舎部分の東柱列がＳＢ343の西柱列と一線に並ぶ。このＳＢ345の柱掘形は基本的に方形ではあるが、長方形や円形にちかい隅丸方形が多く、また大きさも不揃いであるなど前２棟からみるとやや雑な感は否めない。この点はＳＢ345が前２棟に対して従属的な性格の建物であることを示すかのようである。

一方、北側のＳＢ334～ＳＢ338の５棟はいずれも２間×２間のやや南北に長い総柱建物で倉庫とみてよい。このうちＳＢ334～ＳＢ337の４棟が南面の柱列をほぼ一線に揃え、ＳＢ338がＳＢ337の南に位置し、全体としてみると鍵形の配置をもつ。５棟は主軸をほぼ真北におくが、ただし正確にはＳＢ334～ＳＢ336の３棟が互いに約12尺の間隔をおいて南側柱列を正しく揃え主軸方位N0°10'Wであるのに対し、ＳＢ337はＳＢ336と約19尺の間隔をあけ、しかも主軸方位N1°10'Wでわずかな違いがありＳＢ338と西側・東側柱列とも正しく並ぶといった若干の違いがある。また５棟は規模・柱掘形にも違いがみられ、とくにＳＢ334・ＳＢ335と他３棟との差が大きい。すなわちＳＢ334・ＳＢ335の柱掘形は径0.5m前後の小型円形で柱根径約0.2m、

規模でもＳＢ334が11尺×９尺、ＳＢ335が10尺×９尺とほぼ同程度でいずれもさほど大型の建物を想像させない。これに対しＳＢ336は前２棟と南面を揃えながらも12.5尺×11尺で一回り大きく、しかも柱穴は基本的に変則の布掘りである。この布掘りはＳＢ336の東・北・南の各辺にみられるが実は単一掘形との折衷形態であって、上半のみ布掘りでその下半が単一掘形となるものであることからいえば、西辺柱列は上面の布掘りが削平された結果とみてよいかもしれない。掘形個々は円にちかい隅丸方形で一辺約0.8mと大型、柱根径約0.25mである。５棟の中で特に規格的な関係をもつのがＳＢ237とＳＢ238である。互いに4.3mの間隔をおき方位・柱列を正しく揃えて南北に並び、14間×12間をはかる。柱掘形はＳＢ337が南側柱列を上面布掘り、他は基本的に一辺約0.9mの隅丸長方形で柱根径約0.25mであるが、これも４周柱列がもともと上面布掘りであった可能性がつよい。ＳＢ338掘形はやや不揃いながら基本的に一辺約0.9mの大型方形、柱根径約0.25mであり、ＳＢ337とやや異なる。このように５棟は規模・構造など必ずしも一定せず、はたして同時に建てられたかどうかは明らかでないが、規則的な配置からみて少なくともある時期に並存したことは確かであろう。

溝はＳＤ346がＳＢ343・ＳＢ344に伴いその前面に掘られ、ＳＢ344廂柱列からは約３m南に離れている。長さ36.5m、東西両端で浅くなるＵ字溝で、中央で残存幅1.6m、深さ0.7mをはかる。西端がＳＢ343の西側でほぼ終わるのに対し、東端はＳＢ344の東側よりも約18m伸びている。ＳＤ339もＳＢ334ほかの倉庫群に伴うものであろう。ＳＢ335南側柱列から南に4.0mはなれて痕跡程度わずかに残存する。その他の溝はＳＤ329およびＳＤ330がそれぞれⅠ区のＳＤ306とＳＤ307に続くもので、ＳＥ302井戸に通じる幅約４mの通路の側溝にあたる。途切れながら浅く残存してＳＢ334の西脇を通りさらに南に向かっており、やや方位を西に振るが、ＳＥ302井戸がⅡ区の建物群と通路で連絡されたその付属施設であることを示すものと考える。ＳＤ331は斜行してＳＢ335を切るようであり、ＳＤ328と継がるかもしれない。幅1.0mで残りが浅い。

井戸はＳＢ343の廃絶後、その南側柱列に近接してＳＥ347が掘られている。径1.2mの円形素掘りの井戸である。

土壙墓はⅡ区の東南隅でＳＰ350～ＳＰ353の４基を検出した。ただしＳＰ350のみ主軸が東西方向で７世紀前半、他３基は南北方向で10世紀中頃以降であるから、一見同一墓域を形成するかのようにみえるが、その間には２世紀間ほどの空白がある。４基はＳＢ344ほか建物群のまさに南庭に位置するものであって、墓という性格上建物群と同時期に存在したとは考えにくい。このような土壙墓は10世紀以降になるとⅢ区でも分散的に多く造られている。

その他、土壙は７基以上を検出したが、削平のため残存が浅く、時期・性格等の詳細は不明である。そのうちＳＫ332・ＳＫ333は土壙墓の可能性もある。

出土遺物は土壙墓の副葬品が若干ある以外、各遺構埋土中出土が少量で全体に少ない。

推定される各遺構の時期はＳＢ335を切るＳＤ331が10世紀前半、ＳＢ344ほかに伴うＳＤ346の埋没時期が９世紀末～10世紀初、ＳＥ347が10世紀前半である。また土壙墓はＳＰ350が７世紀前半、ＳＰ352が11世紀前半、ＳＰ353が10世紀中頃～後半である。従って８棟の一群建物が墓地と共存しえないとすれば、その時期はまず７世紀後半～10世紀前半の大枠が設定される。さらにＳＥ347およびＳＤ331の示す年代から10世紀前半までのうちには廃絶していたことは確かであり、おそらくＳＤ346が埋没した９世紀末頃がその下限であろう。Ｉ区ＳＥ302とも合わせて考え、ＳＢ344ほか８棟の時期は８世紀後半を中心とするものと推定しておく。

Tab. 6　久池井Ｂ遺跡Ⅱ区遺構一覧表

遺構番号	種別	形態	規模 m	備考	旧番号
ＳＤ328	溝	東西溝	長18以上、幅約0.8	方位N96°W	ＳＤ341
ＳＤ329	〃	南北溝	幅約0.8	ＳＤ306に続く	ＳＤ342
ＳＤ330	〃	〃	幅約0.9	ＳＤ307に続く	ＳＤ343
ＳＤ331	〃	斜行溝	長25以上、幅約1.0		ＳＤ345
ＳＫ332	土壙	隅丸長方形	0.75×0.45		ＳＫ348
ＳＫ333	〃	〃	0.8 ×0.55		ＳＫ347
ＳＢ334	掘立柱建物	南北棟(総柱)	2間 ×2間　3.28×2.86	方位Ｎ0°10′W	ＳＢ351
ＳＢ335	〃	〃（〃）	〃　3.00×2.67	〃　、ＳＤ331が切る	ＳＢ352
ＳＢ336	〃	〃（〃）	〃　3.76×3.23	〃　、布掘	ＳＢ353
ＳＢ337	〃	〃（〃）	〃　4.14×3.35	方位Ｎ1°10′W、布掘	ＳＢ354
ＳＢ338	〃	〃（〃）	〃　4.08×3.28	〃	ＳＢ355
ＳＤ339	溝	東西溝	幅約0.4	方位N91°E	ＳＤ346
ＳＫ340	土壙	隅丸長方形	2.5×1.4		ＳＫ349
ＳＫ341	〃	〃	1.2×0.9		ＳＫ350
ＳＤ342	溝	斜行溝	幅約0.3		ＳＤ356
ＳＢ343	掘立柱建物	東西棟	5間×3間　10.42×5.48	方位Ｎ1°20′E	ＳＢ357
ＳＢ344	〃	東西棟(南廂)	6間×4間　12.50×7.45	方位Ｎ0°40′E、南廂、溝	ＳＢ358
ＳＢ345	〃	南北棟(東廂)	6間×3間　12.12×6.14	方位Ｎ1°20′E、東廂	ＳＢ367
ＳＤ346	溝	東西溝	長36.5、幅約1.6	方位N91°20′E	ＳＤ360
ＳＥ347	井戸	円形	径1.2	ＳＢ343に後出	ＳＥ359
ＳＫ348	土壙	溝状	長4.0、幅0.3～1.5		ＳＫ364
ＳＫ349	〃	〃	長2.3、幅約1.0		ＳＫ365
ＳＰ350	土壙墓	隅丸長方形	1.85×0.6　頭位N85°E	須恵器杯身２・蓋２	ＳＰ369
ＳＰ351	〃	長方形	2.25×0.8　頭位Ｎ1°W		ＳＰ374
ＳＰ352	〃	隅丸長方形	2.05×0.65　頭位N10°E	土師器坏１	ＳＰ372
ＳＰ353	〃	長方形	2.0×0.8　頭位N17°E	土師器10、鏡片１、紡錘車１	ＳＰ370
ＳＫ354	土壙	溝状	長2.3、幅約0.7		ＳＫ373
ＳＤ355	溝	円形周溝状	幅約1.1		ＳＤ376
ＳＫ356	〃	溝状	長2.7、幅約0.9		ＳＫ375

Fig. 109 久池井B遺跡Ⅱ区遺構配置図（1/400）

3．Ⅲ区（Fig.110，ＰＬ103～114）

Ⅲ区において最も古く位置付けられる遺物は、遺構検出の際、包含層中に混入していた縄文早期の押型文土器片である。表面がかなり摩滅しており、周辺部もしくは当該地区から北方における縄文期の人々の活動を窺わせる。また小穴内から打製石斧が１点出土しているが、縄文期の遺物としても他に関連する遺構がないことから、混入の可能性もある。いずれにせよ、縄文期においては、未だ遺跡としての内容に乏しい。

Ⅲ区における人々の生活の痕跡を示す最初の確実な遺構は、弥生前期中頃の土器を出土した長方形プランの土壙３基である。土壙内には上方から流れ混んだ状態で甕・高坏等が出土しており、遺構埋没時における流入と解される。このうちＳＫ744とＳＫ746では出土土器の接合関係が認められることから、同時期に存在したことが想定できる。遺構の性格については、貯蔵穴の可能性が高い。ただし貯蔵穴と解した場合、近辺に集落の存在を考えざるを得ないが、当該遺跡内においてはこれに対応する住居群の確認はできていない。したがって、この３基の土壙については周辺遺跡を含めて位置付けが必要であり、その点では南側の惣座Ｂ遺跡との関係がとくに問題になろうかと考える。弥生前期の長方形貯蔵穴の類例は、近辺では久池井Ｃ遺跡・久池井六本杉遺跡でも検出されている。

Ⅲ区の遺構を最も特徴づけるのは奈良・平安時代の掘立柱建物および溝等の多さである。全体の分布は調査区北側に掘立柱建物群が多く密集し、溝と切り合う。井戸は低湿地にちかい調査区南辺に偏在、土壙および土壙墓はまばらながら、ほぼ全域にわたっている。Ⅲ区の南西約200mの位置には肥前国庁跡が確認されており、とくに掘立柱建物の多くはこの国庁と関連する官衙を含むものであろう。その点ではⅠ区の建物群と基本的に同様であるが、ただしⅠ区に比べると全体に配置の規格性に乏しく、若干性格を異にするように思われる（Tab.７）。

まず、奈良時代の遺構では掘立柱建物跡25棟のほか土壙・溝・井戸等がある。

掘立柱建物跡の場合、時期については柱穴掘形埋め土および柱根内出土土器からある程度推定できるが、あくまで建物建築時期から廃絶時期に至る間に非常に近接した時期を示すにすぎないと解した方がよく、また、なによりも出土量が少ないため、それだけでは具体的な時期決定がなかなか困難である。そこで一つの目安として、建物配置の規格性という観点から、建物南北軸の角度の振れにより群構成を考えてみることにする。全体方位図は後に総括Fig.220で示す。　当該調査区の掘立柱建物群は南北軸方位の振れから、およそ次の３群に大別される。

a群　15°～17°前後西傾するもの　ＳＢ765・761・773・774

b群　5°～10°前後西傾するもの　ＳＢ701・704・722・725・739・748・760・763・765・772

c群　0°～2°西傾するもの　ＳＢ702・703・714・733・740・749

a群に属する４棟は調査区の北側に集中する傾向を示しており、このうちＳＢ773・ＳＢ774

は３間×２間の東西棟で南面をほぼ直線上に揃えて東西に並ぶ。そしてこの２棟にほぼ直交するように５間×２間のＳＢ761南北棟があり、さらに南に３間×２間の総柱南北棟ＳＢ756が建っている。建物群の中ではこれら４棟だけが座標北から大きく西に振れており、埋土状況にみる共通性、消極的な根拠ではあるが柱穴内出土土器の示す時期などと合わせ、完結した一つの群とみることもできる。ただし厳密な意味ではあくまで方位から把えた群であり、同時に存在したかどうかは必ずしも明らかでない。時期はＳＢ773柱穴出土土器が８世紀初頭～前半であることから、消極的ながらこの間に廃絶期を考える。

ｂ群に属する建物はⅢ区内で最も多く、ほぼ全域に分散しながらもやや北側に偏在する傾向を示す。このｂ群の方位の振れは国庁跡の中軸線方位にほぼ等しい。群としては北側のＳＢ762・ＳＢ765・ＳＢ772がまとまりをもつものの他は散在的である。ＳＢ762ほか３棟の場合、ＳＢ763とＳＢ765が大型長棟で、前者は東面廂の５間×３間東西棟、後者は５間×３間南北棟で互いに東面を揃えて並ぶが、同時存在というには軒が接近しすぎており、おそらく近接した時期に前後して造られたものであろうと考える。ＳＢ722とＳＢ725は重複した位置関係にあって前後関係は不明だが、方位がほぼ一致することから、これも互いに近接した時期と考える。いずれも周囲に雨落溝をもっており、ＳＢ722にはＳＤ723・ＳＤ724、ＳＢ725にはＳＤ726・ＳＤ728が付随する。また調査区東南部のＳＢ701・ＳＢ704についてはⅡ区の建物群にちかく、ＳＤ713以西の大部分の建物群と一定の空白地帯をもつようであるが、微妙な方位の違い、配置の規格性、掘形規模等からみて、同一視するわけにはゆかないであろう。

ｂ群の時期についてはＳＢ763の西側にあるＳＫ761・ＳＫから出土した多量の廃棄土器を参考にし得る。ＳＤ764・ＳＫ781は本来連続した溝状の遺構で、ＳＢ763の脇にあって方位をほぼ一致させることから、これに伴うと考えてさしつかえなく、ＳＢ763の存在期間もしくは廃絶時期の一端を示す。出土した土器の年代は８世紀前半～中頃である。また切合い関係ではＳＢ765は、下っても８世紀末とみられるＳＤ753に切られている。したがって、時期幅を特定できないまでも、ｂ群は８世紀のうちにあって、おそらく中頃を中心とするものであろうと考えておく。なお、ＳＫ764出土土器のうちに、やや離れて位置するＳＫ759・ＳＫ775との接合関係をもつものがあることが注意される。

ｃ群に属する建物群は一転して調査区の南側に分布する傾向をみせる。とはいっても、各棟は分散的で、少なくとも規格的な配置は認めがたい。ｃ群に属する６棟は３間×２間の構造を主とするが、西辺に離れて位置するＳＢ740だけは東面廂の５間×３間南北棟で大型、さらに東脇にＳＤ742雨落溝と廂内に特殊なＳＤ741溝をもっており、その機能が注目される。廂内に溝をもつ類例は吉野ケ里遺跡でも奈良期の建物がある。これらｃ群は方位が正南北にちかい点において、Ⅱ区の建物群との関係が問題になる一群である。

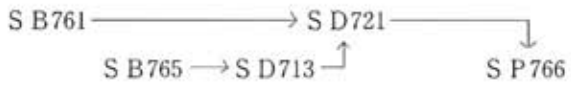
ところで、これらの建物群の区画を考えるうえで注意を要する溝が４条検出されている。す

なわち東西溝ＳＤ753・ＳＤ782と南北溝ＳＤ712・ＳＤ713がそれで、いずれもｃ群建物群と同様に正方位にちかく、東西・南北の走向が延長線上でほぼ直交する。さらに調査区北側のＳＤ753および南端のＳＤ782の東西溝２条は心々距離でほぼ１町にあたる108mを測り、当時の地割りに関係が深いとみられる。溝の時期は、ＳＤ753・ＳＤ782が埋土状況および出土遺物からみて奈良期のうちにとどまり、なおかつ同時に存在したと考えられる。ＳＤ712・ＳＤ713もこれと同様である。このうちＳＤ712とＳＤ713はおそらく幅約２ｍの道を挟んでの側溝であろう。延長は北側でⅡ区さらにⅠ区へと続いている。またＳＤ753とは現在の国道263号線下でＴ字形で交わる可能性があり、ＳＤ753の続きはⅡ区では見つかっていない。

ｃ群の建物のうち西側のＳＢ714・ＳＢ733・ＳＢ740・ＳＢ749はたしかに分散的ではあるが、これらの溝に北辺と東辺を限られ範囲に収まるものであり、溝が地割りに基づく実際的な区画として機能した可能性は十分考えられる。その場合、ＳＤ713から東側のＳＢ702およびＳＤ703は、規模の点などに問題はあるが、あるいはⅡ区の建物群と密接な関係をもつものかもしれない。とくにＳＢ702はⅡ区のＳＢ345の南に並ぶ南北棟である点が注意される。

ｃ群の時期については、ＳＢ740に伴うＳＤ741から出土した土器が８世紀後半である。そのほかの建物個々の存続・廃絶時期については不明確であるが、先の区画溝埋土中からは少なくとも９世紀に下るような資料は出土していない。したがって、あくまで可能性の問題として、ｂ群の廃絶時期は先述したようにＳＤ753とＳＢ765の切合い関係からほぼ８世紀中頃を前後する時期に求められ、これに対し、ｃ群の廃絶時期は８世紀後半もしくはやや下って８世紀末頃と考えられる。

その他、上記３群のいずれにも属さない建物として、これまでとは逆に南北軸が東に2°～3°振れるＳＢ732・ＳＢ735・ＳＢ729、あるいはａ群とｂ群との中間のＳＢ757・ＳＢ762がある。このうち西傾するＳＢ762は５間×３間の大型棟で柱穴掘形はⅢ区の中で最も大きく、あえて含めようとすればａ群である。ＳＢ763とは7.8m離れて位置し、方位が2°違うとはいえ、北面柱列の並びが一線上にちかい。その東にある２間×２間の総柱建物ＳＢ757はＳＢ762に伴う同時期の倉庫棟と推定する。また東傾する３棟はいずれも３間×２間の比較的小型の建物で、方位・規模ともⅠ区北側の建物群の在り方に似る。群としては本来ｃ群にちかいものであろう。さらに、溝ＳＤ721は調査区の北辺で約7°南に傾いて東西に走ったのち、鈍角約110°に折れて建物群の大半を囲うように弧を描いて南に下る。埋土出土土器および埋土状況からは奈良期に収まると推定され、北辺の走向方位からみておそらくｂ群建物群にちかい時期の区画溝であろうと考えたい。ＳＤ780も約６ｍの間隔をおいてこの北辺に並行しており、同時期のものであろう。なお、ＳＤ721と他の遺構との切合い関係は次のとおりである。



井戸はいずれも円形素掘りで、上端径1.0m～1.5m前後のものが多い。土壙は大部分が整地などの際のいわゆる廃棄壙とみられ、大型の円形または楕円形を基本としながらも全体に不整形なものが多い。分布はまばらである。

遺物は須恵器・土師器が殆どで、ほかには鉄器が若干、特殊な遺物として調査区北側の小穴から出土した石鈴１点がある。圧倒的に大部分は土壙からの出土である。

次に平安時代の遺構についてみると、先の奈良期の状況と一変して全て墓域としての土地利用がなされるようになり、ほぼ調査区全域に散在しながら７基の土壙墓が営まれている。出土した副葬土器から全ての土壙墓が、９世紀末頃～10世紀初頭に造墓されていることがわかる。しかし墓壙長軸方向は、まとまりがなく様々な方向を取っている。このことが先述した時期内における微差を示しているのか、当時の埋葬観念から同一方向への意識ならびに規制がはたらいていなかったのかについては問題が残る。しかし少なくとも当該期には先述した建物群は全て廃絶していた状況だけは看取できよう。また厚葬墓の存在は見られず、全体的に副葬土器群の質からみて調査区内における何らかの偏在傾向も認めがたい。その様な中において、土壙墓ＳＰ771はやや特異で、土師器・坏に伴って円形素文鏡片が出土しており、出土状況から棺上副葬の状況を示していたものと考える。この様な鏡片副葬事例は同遺跡Ⅱ区および佐賀市泉三本栗遺跡土壙墓ＳＰ001でも知られており、今のところ佐賀平野北部の特に国府周辺にのみみられる一つの特色である。

最後に、調査区南部において小規模ながら散在する状況で中世の時期に埋没したと考えられる溝を数条検出しており、特に調査区南端部分に中世末期の曲折する溝が１条検出できた。この溝は、先述した奈良期の溝ＳＤ782を切る状況で検出され、東西・南北にほぼ直角に曲折する形状を示している。溝内の埋土状況は砂質土が堆積し、この砂質土に包含される形で溝全域から土器が出土している。出土した土器破片が非常に大型であることから、近接した所より投棄された土器群ではないかと考えられる。出土した土器群は、日常雑器的性格が非常に強い。時期は16世紀後半～末頃の埋没と考えられる。きわめて明瞭に直角に曲折する形状を示すことから、溝に囲まれるであろう西側に何らかの施設を想定できるが、調査区内においては小ピットの検出を見ただけで、施設を確証できるだけの積極的な遺構は検出できなかった。周辺の地形からこの部分は低い地形を示しており、単なる入排水のための施設である可能性も考られる。

〈参考文献〉

佐賀県教育委員会『肥前国府跡Ⅲ』1985
佐賀市教育委員会『泉三本栗遺跡』1982

Fig110 久池井B遺跡Ⅲ区遺構配置図（1/60）

Tab. 7　久池井Ｂ遺跡Ⅲ区奈良・平安時代遺構一覧表

遺構番号	種　別	形　態	規　模　m	備　考	旧番号
ＳＢ701	掘立柱建物	南北棟	(４間) ×２間　7.54×4.68	方位Ｎ４°40′Ｗ	ＳＢ050
ＳＢ702	〃	〃	５間　×３間　9.40×4.92	方位Ｎ０°10′Ｅ	ＳＢ048
ＳＢ703	〃	〃	(３間) ×２間　5.72×3.58	方位Ｎ３°Ｗ	ＳＢ024
ＳＢ704	〃	東西棟	(３間) ×２間　(6.3)×4.40	方位Ｎ７°Ｗ	ＳＢ025
ＳＫ708	土壙	円形	2.0×1.6		ＳＫ026
ＳＫ709	〃	〃	1.6×1.5		ＳＫ027
ＳＫ710	溝	東西溝	長16以上、幅0.4～1.1	方位Ｎ20°10′Ｗ	
ＳＤ711	〃	〃	長６、幅約0.7	方位Ｎ15°10′Ｗ	ＳＤ020
ＳＤ712	〃	南北溝	長12.5以上、幅0.4～1.2	方位Ｎ２°20′Ｗ	
ＳＤ713	〃	〃	長59以上、幅約0.8	〃	
ＳＢ714	掘立柱建物	南北棟	３間　×２間　5.58×3.95	方位Ｎ０°20′Ｗ	ＳＢ049
ＳＢ715	井戸	円形	1.0×0.85		ＳＥ034
ＳＥ716	〃	〃	1.4×1.3		ＳＥ001
ＳＫ717	土壙	〃	0.85×0.6		ＳＫ012
ＳＫ718	〃	〃	1.0×0.75		ＳＫ013
ＳＥ719	井戸	〃	2.95×1.8		ＳＥ002
ＳＤ720	溝	斜行溝	長15、幅約0.7		ＳＫ014
ＳＤ721	〃	東西・南北溝	長140以上、幅約１	北辺方位Ｎ６°10′Ｗ	ＳＤ004
ＳＢ722	掘立柱建物	東西棟	４間×２間　9.55×5.04	方位Ｎ６°Ｗ	ＳＢ023
ＳＤ723	溝	東西溝	長5.7、幅約0.5	ＳＢ722に伴う	
ＳＤ724	〃	南北溝	長2.6、幅約0.6	〃	
ＳＢ725	掘立柱建物	東西棟	４間×２間　6.89×4.85	方位Ｎ５°40′Ｗ	ＳＢ043
ＳＤ726	溝	東西・南北溝	長6.7、幅(北)約1.4 (西)約0.4	ＳＢ725に伴う、西北隅折	ＳＤ005
ＳＫ727	土壙	溝状	ＳＤ726とつながる		ＳＫ016
ＳＤ728	溝	東西溝	長5.4、幅0.4～1.7	ＳＢ725に伴う	ＳＫ015
ＳＢ729	掘立柱建物	南北棟	３間×２間　5.16×3.86	方位Ｎ６°24′Ｅ	ＳＢ021
ＳＥ730	井戸	円形	1.2×1.3		ＳＥ003
ＳＰ731	土壙墓	長方形	1.95×0.6	土師器２副葬	ＳＫ033
ＳＢ732	掘立柱建物	南北棟	３間×２間　5.15×3.81	方位Ｎ３°Ｅ	ＳＢ051
ＳＢ733	〃	東西棟	３間×２間　5.08×4.12	方位Ｎ１°40′Ｗ	ＳＢ052
ＳＫ734	土壙	不整楕円形	4.25×3.1		ＳＫ018
ＳＰ735	土壙墓	長方形	1.9×0.55	土師器副葬	ＳＫ032
ＳＢ736	掘立柱建物	東西棟	３間×２間　4.23×3.36	方位Ｎ２°40′Ｅ	ＳＢ045
ＳＫ737	土壙	不整楕円形			ＳＫ019
ＳＰ738	土壙墓	長方形	1.8×0.8	土師器１副葬	ＳＫ031
ＳＢ739	掘立柱建物	東西棟(総柱)	２間×２間　3.16×2.79	方位Ｎ６°20′Ｗ	ＳＢ011
ＳＢ740	〃	南北棟(東廂)	５間×３間　9.02×6.79	方位Ｎ１°20′Ｅ、溝２付設	ＳＢ047
ＳＤ741	溝	南北溝	長8.5、幅約0.8	ＳＢ740に伴う	ＳＤ009
ＳＤ742	〃	〃	長6.9、幅約0.8	〃	ＳＤ010
ＳＰ743	土壙墓	長方形	1.7×0.6	土師器副葬	ＳＫ038
ＳＰ747	〃	〃	2.2×0.65		ＳＫ039

遺構番号	種　別	形　態	規　　模　　m	備　　考	旧番号
ＳＢ748	掘立柱建物	東西棟	３間×２間　6.08×3.92	方位Ｎ７°Ｗ	ＳＢ053
ＳＢ749	〃	南北棟	３間×２間　6.72×4.80	方位Ｎ１°50′Ｗ	ＳＢ054
ＳＫ750	土壙	楕円形	3.0×2.1		ＳＫ037
ＳＤ751	溝	南北溝	長10、幅約0.8	方位Ｎ２°Ｅ	ＳＤ209
ＳＫ752	土壙	溝状			ＳＫ160
ＳＤ753	溝	東西溝	長64以上、幅約0.7	方位Ｎ１°40′Ｗ	ＳＤ132
ＳＥ754	井戸	円形	1.5×1.5		ＳＥ040
ＳＥ755	〃	〃	1.3×1.25		ＳＥ145
ＳＢ756	掘立柱建物	南北棟(総柱)	３間×２間　5.63×4.80	方位Ｎ14°40′Ｗ	ＳＢ162
ＳＢ757	〃	〃（〃）	２間×２間　3.38×3.34	方位Ｎ10°40′Ｗ	ＳＢ140
ＳＫ758	土壙	溝状			ＳＫ182
ＳＫ759	〃	不整方形	4.7×3.6		ＳＫ059
ＳＢ760	掘立柱建物	南北棟	３間×２間　5.40×4.20	方位Ｎ６°Ｗ	ＳＢ063
ＳＢ761	〃	〃	５間×２間　9.04×4.48	方位Ｎ15°30′Ｗ	ＳＢ062
ＳＢ762	〃	〃	５間×３間　8.30×4.93	方位Ｎ11°50′Ｗ	ＳＢ161
ＳＢ763	〃	〃	〃　9.65×5.12	方位Ｎ８°40′Ｗ	ＳＢ111
ＳＤ764	溝	南北溝	長11、幅約1.8	ＳＢ763に伴う	ＳＫ133
ＳＫ765	掘立柱建物	東面廂東西棟	５間×３間　10.88×5.58	方位Ｎ７°10′Ｗ	ＳＢ104
ＳＰ766	土壙墓	長方形	2.2×1.0	土師器副葬	ＳＰ173
ＳＰ767	〃	〃	1.65×0.5	〃	ＳＰ139
ＳＫ768	土壙	楕円形	1.6×1.15		ＳＸ149
ＳＫ769	〃	不整楕円形	0.7×0.35		ＳＸ203
ＳＫ770	〃	楕円形	0.9×0.6		ＳＰ144
ＳＰ771	土壙墓	長方形	1.3×0.45	土師器５・鏡片１副葬	ＳＰ142
ＳＢ772	掘立柱建物	南北棟	３間×２間　6.91×4.46	方位Ｎ６°40′Ｗ	ＳＢ113
ＳＢ773	〃	東西棟	〃　6.60×4.55	方位Ｎ17°Ｗ	ＳＢ061
ＳＢ774	〃	〃	〃　6.45×4.80	〃	ＳＢ058
ＳＫ775	土壙	楕円形	4.8×2.5		ＳＫ116
ＳＫ776	〃	〃	3.6×2.5		ＳＫ115
ＳＫ777	〃	〃	2.1×1.4		ＳＫ114
ＳＤ778	溝	東西溝	長8.5、幅約0.4	方位Ｎ５°10′Ｅ	ＳＤ059
ＳＤ779	〃	〃	長4、幅約0.4	方位Ｎ８°40′Ｗ	ＳＤ056
ＳＤ780	〃	〃	長13以上、幅約0.6	方位Ｎ６°10′Ｗ	
ＳＫ781	小穴	円形			ＳＫ134
Ｐ782	〃	〃			Ｐ01
Ｐ783	〃	〃			Ｐ11
Ｐ784	〃	〃			Ｐ131
Ｐ785	〃	〃			Ｐ183
Ｐ786	〃	〃			Ｐ167
ＳＤ787	溝	曲折溝		中世	ＳＤ214
ＳＤ788	〃	東西溝			

Ⅱ　遺　構

旧石器・縄文時代については石器が若干出土しているものの遺構の存在は明らかでない。弥生時代ではⅢ区で貯蔵土壙が３基検出されたにとどまる。主体を占めるのは奈良・平安時代の建物跡で、Ⅰ区～Ⅲ区あわせて15棟を検出した。その他同時期では溝・井戸・土壙等が多数あるほか、Ⅱ区とⅢ区で土壙墓４基がある。中世の遺構はⅢ区南端で溝数条を検出しにとどまる。

以下、調査区ごとに時代を分けて順に説明する。

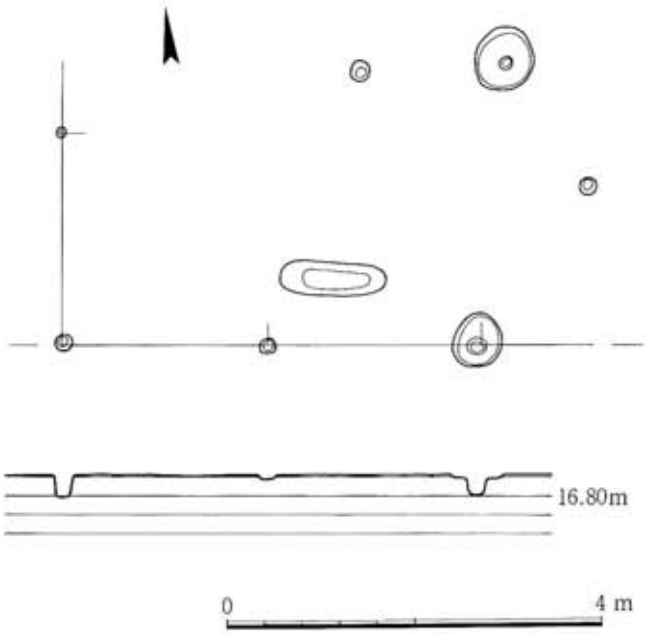
〈Ⅰ区の遺構〉

掘立柱建物跡７棟・溝７条・井戸１基・土壙９基を検出した。時期は７世紀に遡る土壙墓１基以外は奈良・平安時代に限られる。全体に削平が著しい。

1　奈良・平安時代

(1)　掘立柱建物跡（Fig.111～113, PL80.81）

調査区の北側で３間×２間とみられる南北棟３棟、２間×２間の倉庫構造の総柱建物３棟、２間×１間１棟がある。切り合いがみられるので２時期以上あることは確かであるが、柱掘形はいずれも小形円形で、おおむね正方位建物群に含められるなど共通点が多い。



ＳＢ309

構造　推３間×２間　南北棟（6.75m×4.5m）

柱間　桁推2.25m（推7.5尺）
梁2.25m（7.5尺）

方位　Ｎ５°０'Ｅ

特徴　柱穴は痕跡程度しか残存せず、構造・規模についてはあくまで推定であるが、ＳＢ314に類する建物とみている。柱根径は約20cm前後か。一群の建物のうちでは東端に位置する。

Fig. 111　ＳＢ309掘立柱建物跡（1/80）

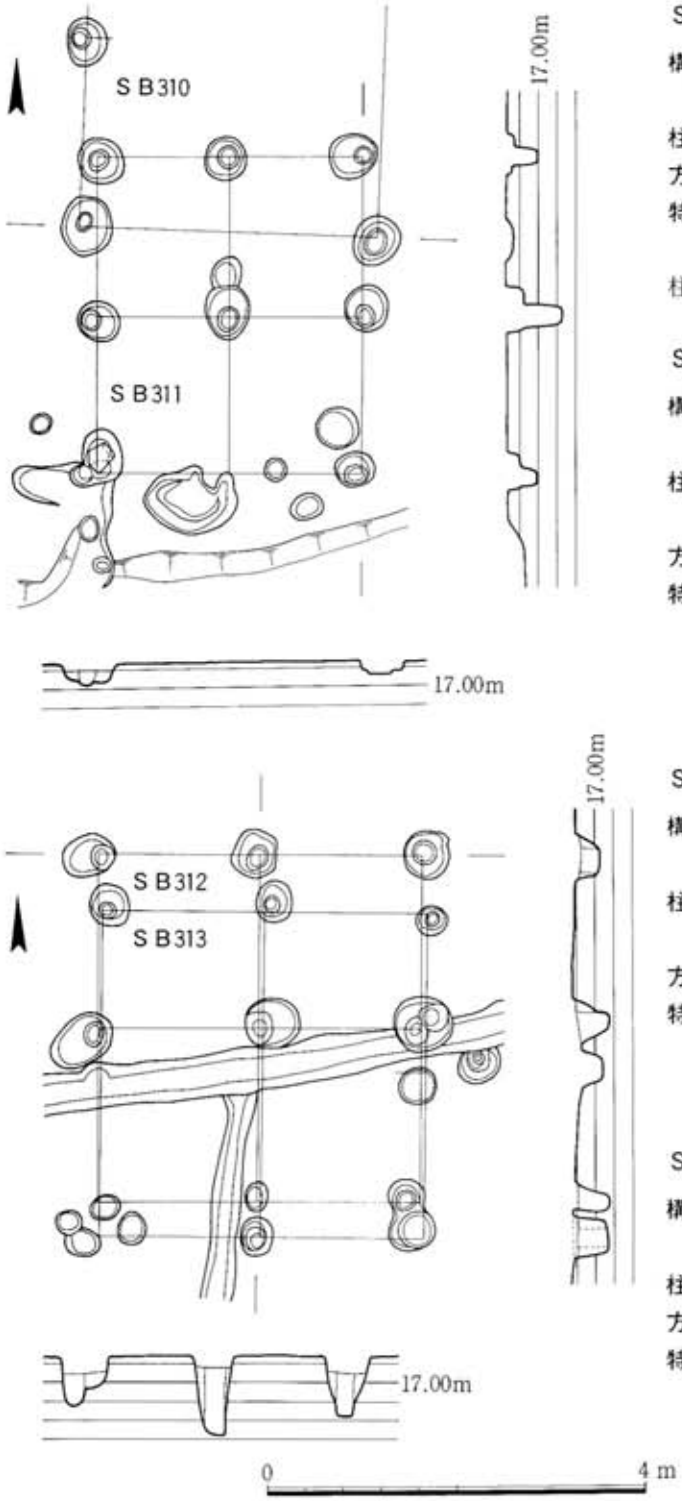


Fig. 112　ＳＢ310～ＳＢ313掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ310

構造　１×１間
（2.23m×2.0m）
柱間　桁7.4尺、梁6.7尺
方位　Ｎ４°10′Ｅ東西棟
特徴　東北隅柱穴不明で構造等は推定。掘形径約50cm、柱根径約20cm。

ＳＢ311

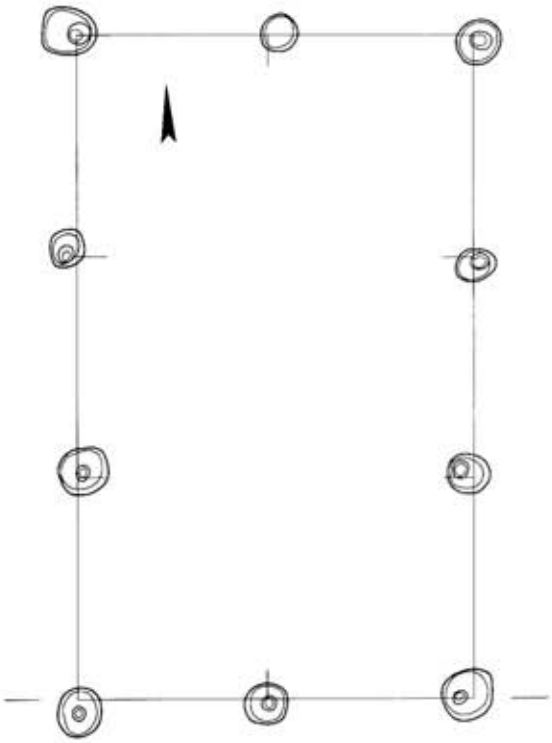
構造　２×２間
（3.36m×2.88m）
柱間　1.68m（5.6尺）
梁1.44m（4.8尺）
方位　Ｎ０°40′Ｗ南北棟
特徴　総柱。掘形径約40cm、柱根径約20cm。ＳＢ310と重なるが時期の先後不明。

ＳＢ312

構造　２×２間
（3.67m×3.45m）
柱間　桁1.84m（6.1尺）
梁1.73m（5.8尺）
方位　Ｎ３°10′Ｅ南北棟
特徴　総柱。掘形径約40cm、柱根径約20cm。ＳＤ323を切る。

ＳＢ313

構造　２×２間
（3.45m×3.45m）
柱間　1.15m（3.8尺）
方位　Ｎ２°40′Ｅ
特徴　総柱。掘形径約40cm、柱根径約20cm。ＳＢ312と重なるが時期の先後不明の建替え。



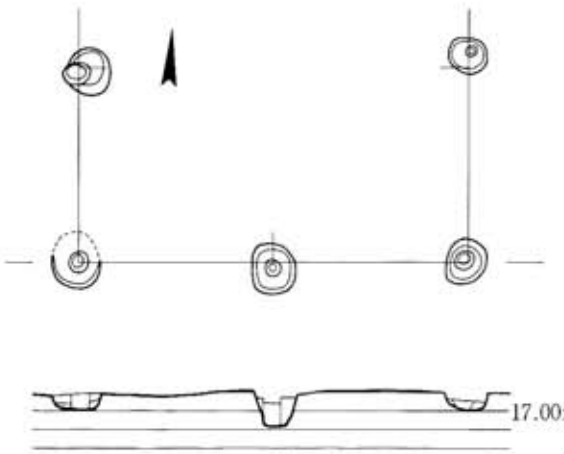
ＳＢ314

構造　３×２間
南北棟（7.05m×4.50m）

柱間　桁2.35m（7.8尺）
梁2.25m（7.5尺）

方位　Ｎ１°10'Ｅ

特徴　本遺跡における小規模な柱建物としては最も一般的な構造にあたる。掘形は円形で径約40cm～45cm、柱根径約20cm。柱穴埋土は主に黒色土が詰まる。



ＳＢ315

構造　推定３×２間
南北棟（6.15m×4.18m）

柱間　桁2.05（6.8尺）、梁1.39m（4.6尺）

方位　Ｎ２°40'Ｗ南北棟

特徴　ＳＢ314の西脇に位置する。北側が盛土した農道下に入るため調査できなかったが、上記のとおり３×２間の南北棟と推定する。掘形は円形で径約40cm～45cm、柱根径約20cm。柱穴埋土は黒色土。削平のため浅く残存する。

0　4 m

Fig. 113　ＳＢ314・ＳＢ315掘立柱建物跡（1/80）

(2) **井戸** (Fig.114, PL.82)

ＳＥ302をⅠ基検出した。肥前国府関係ではこれまでのところ唯一の大型方形井戸である。南側に側溝をもつ幅約４ｍの通路が付設されており、Ⅰ区建物群と密接な関係が推定される。二段掘りで、上段は１辺約10尺、下段は１辺約５尺。上段は黒色土が詰まり、井戸枠などの痕跡は認められなかった。また下段は4.5m（上段検出面から5.4m）掘り下げたあたりで土質が

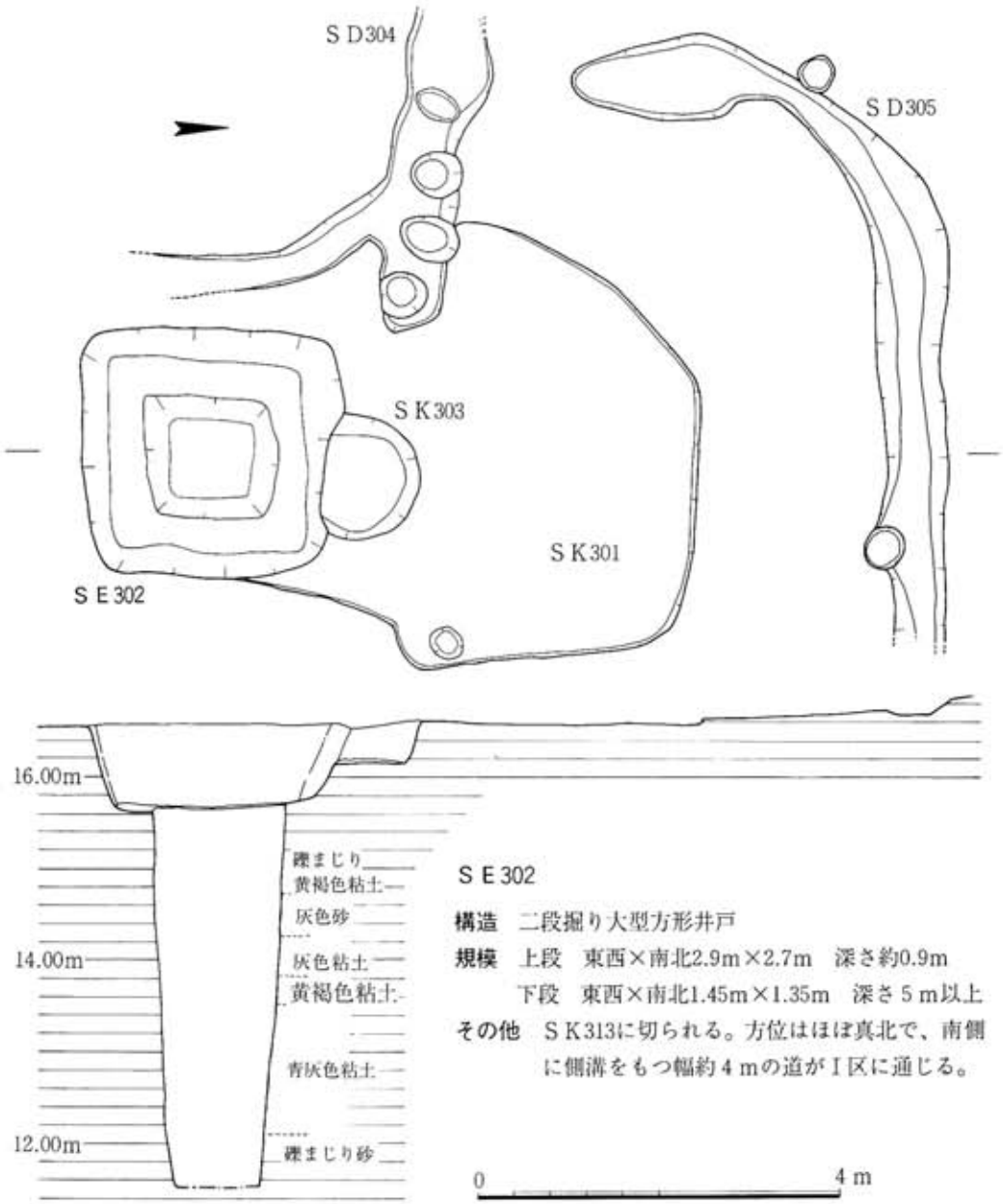


Fig. 114　ＳＥ302井戸(1/80)

粘土層から砂礫層に変わり、壁面が不明瞭となる。また既に底に達していると思われるが、底もはっきり確認できず、危険な為それ以上掘り下げることは止めた。砂礫層が滞水層にあたるとみて相当の湧水を予想したが調査中は全くその徴候はなく、またその後まとまった降水があっても一向に滞水しなかった。下段埋土は上約⅓に黒色土、下約⅔に粘土が詰まり、出土遺物は上位で須恵器甕片がわずかに出土しただけであった。したがって実際に使用それた形跡は極めてうすく、素掘りのまま中断した可能性も考えられる。

関連施設としては先の南側通路のほか、ＳＤ304・ＳＤ305が井戸を意識した配置をとっており、その可能性がある。またＳＫ301は形状不明確で浅く残存していたが、位置がＳＥ302の北側であるため、関連する敷石構造等を推定するには疑問がある。ＳＫ303は円形の土壙でＳＥ302を切ると思われる。時期は８世紀後半と推定する。

(3)　土壙（Fig.115・116, PL83）

調査区の北端で５基、また西端で３基以上がそれぞれまとまって掘り込まれていた。いずれも廃棄壙にあたるものであろう。その他散布的に土壙状の掘り込みがみられるが、残存が浅く

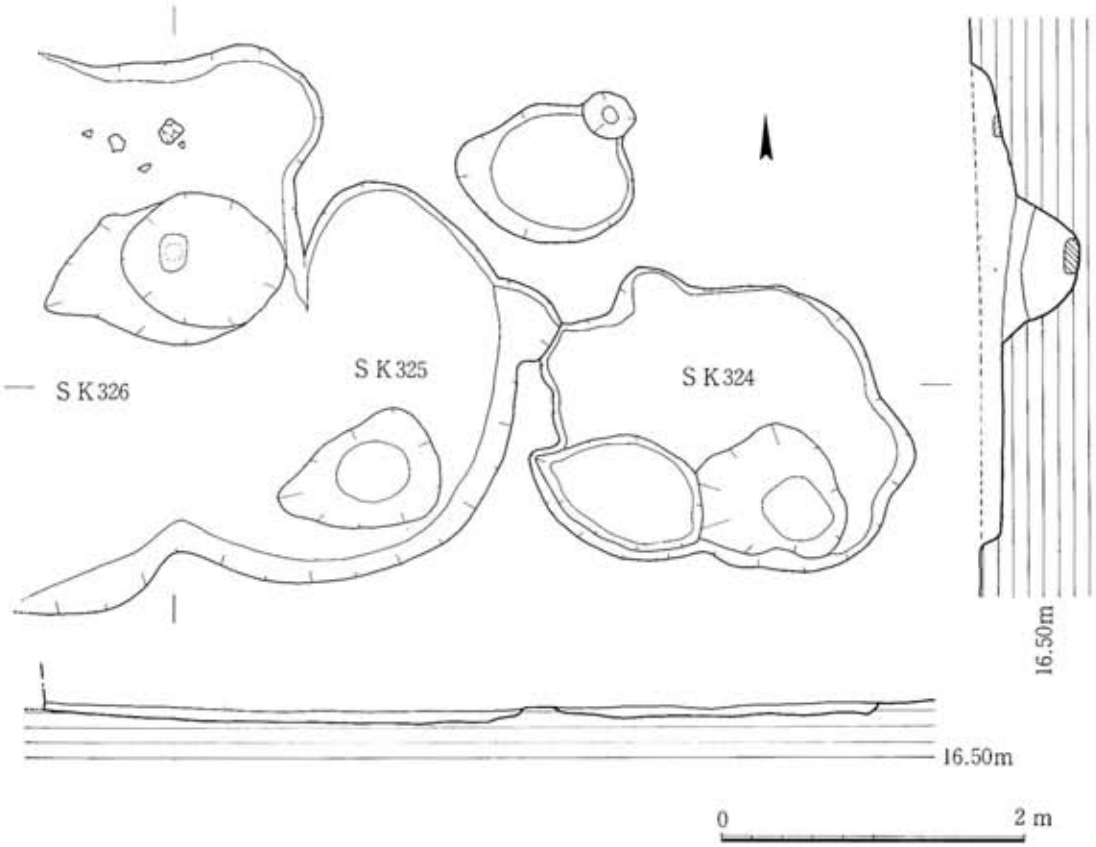
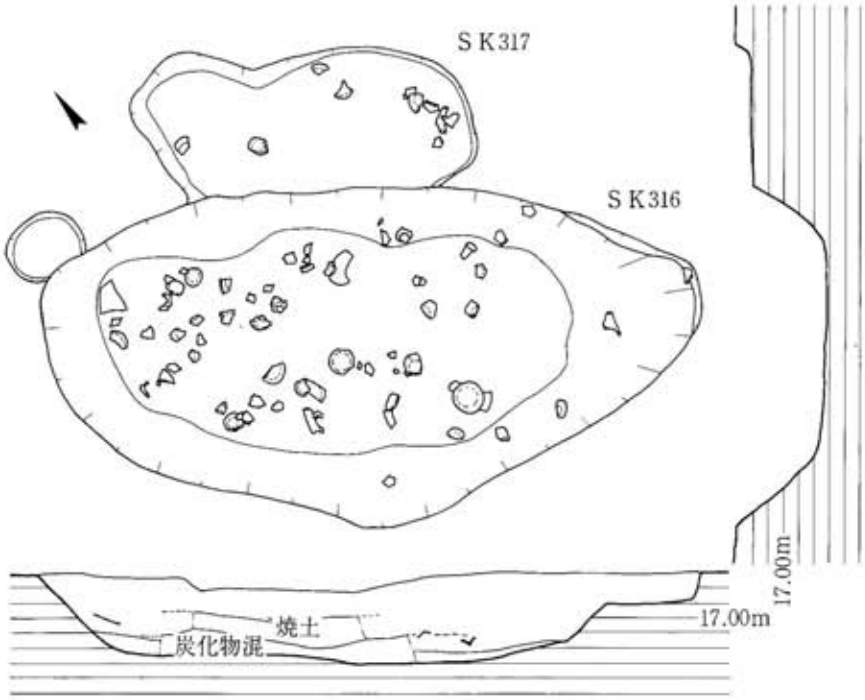


Fig. 115　ＳＫ324～ＳＫ326土壙（1/50）



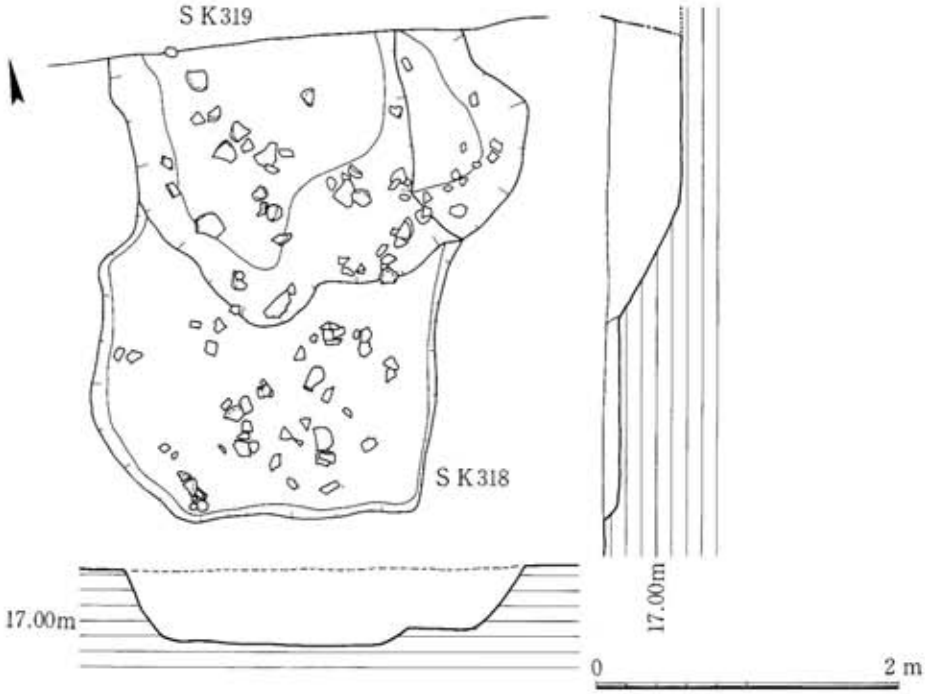


Fig. 116　ＳＢ316～ＳＫ319土壙（1/50）

遺構と設定しがたい。

北端の５基のうち、ＳＫ316とＳＫ317はほぼ同時期とみられる。ＳＫ316は4.3m×2.2mの楕円形で壙底に炭化物の混じった灰褐色土が約20cm堆積し、その上に約20cmの焼土層があった。遺物は須恵器・土師器・土錘が比較的多量にこの炭化物層と焼土層から出土した。ただしその出土状況をみるかぎりでは土器等が一括廃棄されたというよりは焼土・灰に混じって土器片が投げ込まれたといった状況にちかい。この点は他の土壙の遺物出土状況も同様である。ＳＫ317は2.3m×約1.1mの楕円形土壙で須恵器・土師器・土錘が若干出土した。ＳＫ318とＳＫ319は前者から後者への先後関係が推定されるが、これもほぼ同時期とみてよいであろう。ＳＫ318は推定約2.2m×2.2mの不整方形で浅く残存していたが、須恵器・土師器を比較的多量に出土した。ＳＫ319は北側は不明ながら推定約2.4m×2.5mの不整円形土壙である。ＳＫ316同様に鍋底状に掘り込み、須恵器・土師器が比較的多量に出土した。ＳＫ320はこれら４基の東脇にあって3.6m×0.9mと南北に長い。残存も深さ約10cmで浅く、問題はあるが一群の土壙に含めておく。これら土壙群はＳＢ314ほか北端の掘立柱建物群と関係するものであろう。時期は８世紀後半と推定する。

一方西端にはＳＫ324～ＳＫ326の不整楕円形土壙３基が連続して掘り込まれている。切り合いではＳＫ326→ＳＫ325と思われる。いずれも不整形なうえ壙底が複雑な凹凸をなしており実際には３回以上の掘り込みによるものかもしれない。ＳＫ324とＳＫ325のそれぞれ壙底ちかくから土師器片が若干出土した。付近には建物群等は見当たらず、これらの西側は地形がやや下がって湿地状となる。時期は８世紀後半と推定する。

〈Ⅱ区の遺構〉

掘立柱建物跡８棟・溝７条・井戸１基・土壙墓４基・土壙８基を検出した。いずれも奈良・平安時代に限られる。建物跡８棟は長棟の３棟と倉庫５棟が全体として規則的な配置をとり、Ⅰ区のＳＥ302井戸と共に完結した一群を形成している。土壙墓は東南隅にかたまる。また土壙はいずれも残りが浅く、土壙墓が含まれる可能性もあるが、性格は不明である。

１　奈良・平安時代

(1)　掘立柱建物跡（Fig.117～119, PL85～92）

ＳＢ343～ＳＢ345の大型建物３棟が鍵形に並びＳＤ346溝を伴い、その北側後方にはＳＢ334～ＳＢ338の総柱倉庫５棟が大型建物３棟とは逆の鍵形に配置されて、これもＳＤ339溝を伴う。これら建物群は子細な構造の違いはあるがほぼ正方位に合わせて同時期に存在したとみられ、溝出土土器および別時期のＳＥ348井戸および土壙墓との関係から時期は８世紀後半～を中心とするものと推定する。

ＳＢ343

構造　５間×３間　東西棟（10.42m×5.48m）

柱間　桁2.08m（6.9尺）、梁1.83（6.1尺）

方位　N1°20'E

特徴　ＳＢ344の身舎部分と東西中心軸を揃えて並ぶ。ただしＳＢ344身舎より梁間が小さいため南側・北側柱列ともそれより約１尺づつ内に入る。柱穴掘形は小型ながら全体に整った方形で一辺約１m～1.2m、柱根径は平均約25cmである。柱穴埋土はは黒色を主に黄色粘土を混じえる。南面にＳＥ347井戸が接するが、時期はＳＢ343の廃絶後とみられる。

ＳＢ344

構造　６間×４間　東西棟（12.50m×7.50m）　身舎部６間×３間（12.50m×5.95m）
南面廂出１間（1.50m）

柱間　身舎ー桁2.08m、梁（6.6尺）　廂ー出1.50m（５尺）

方位　N1°40'E

特徴　Ⅱ区建物群の主殿にあたるとみられる。柱穴掘形および柱根径等は基本的にＳＢ343と同様であるが、ただし間仕切と廂の掘形は一辺0.5m前後のやや不整形な小型方形である。西側は水路に一部切られている。
なお、このＳＢ344とＳＢ343の付属施設として両建物の南側前面にＳＤ346溝がある。方位は南縁でN91°20'Eであるから建物２棟の並びと並行する。西端はＳＢ343から1.5m西に出、東端はＳＢ344から6.6m出て終わり、長さは36.5mをはかる。西から両端から中央に向かって深くなり、上面はかなり削平されていると思われるが、ＳＢ344西側前前付近で幅約1.6m、深さ約0.7m残存する。前面に渡橋の存在が想定されるが、柱穴等は確認できない。

ＳＢ345

構造　６間×３間　南北棟（12.12m×6.14m）　身舎部６間×２間（12.12m×3.97m）
東面廂出１間（2.17m）

柱間　身舎ー桁2.02m（6.7尺）、梁2.15m・1.82m（7.1尺・6.1尺）　廂出2.17m（7.2尺）

方位　N1°20'E

特徴　身舎部東側柱列をＳＢ343西側柱列に揃えて並ぶ。柱穴掘形は基本的に方形であるが、上記２棟に比べると不揃いかつ不整形で一辺0.8m前後とやや小型、柱根径は平均約20cmである。柱穴埋土は黒色土を主に黄色粘土を混じえる。柱間は身舎部２間の梁間が異なり変則的であるなど、上記２棟の付属的な関係の建物を思わせる。東側にも柱穴２個があるが、性格は不明である。

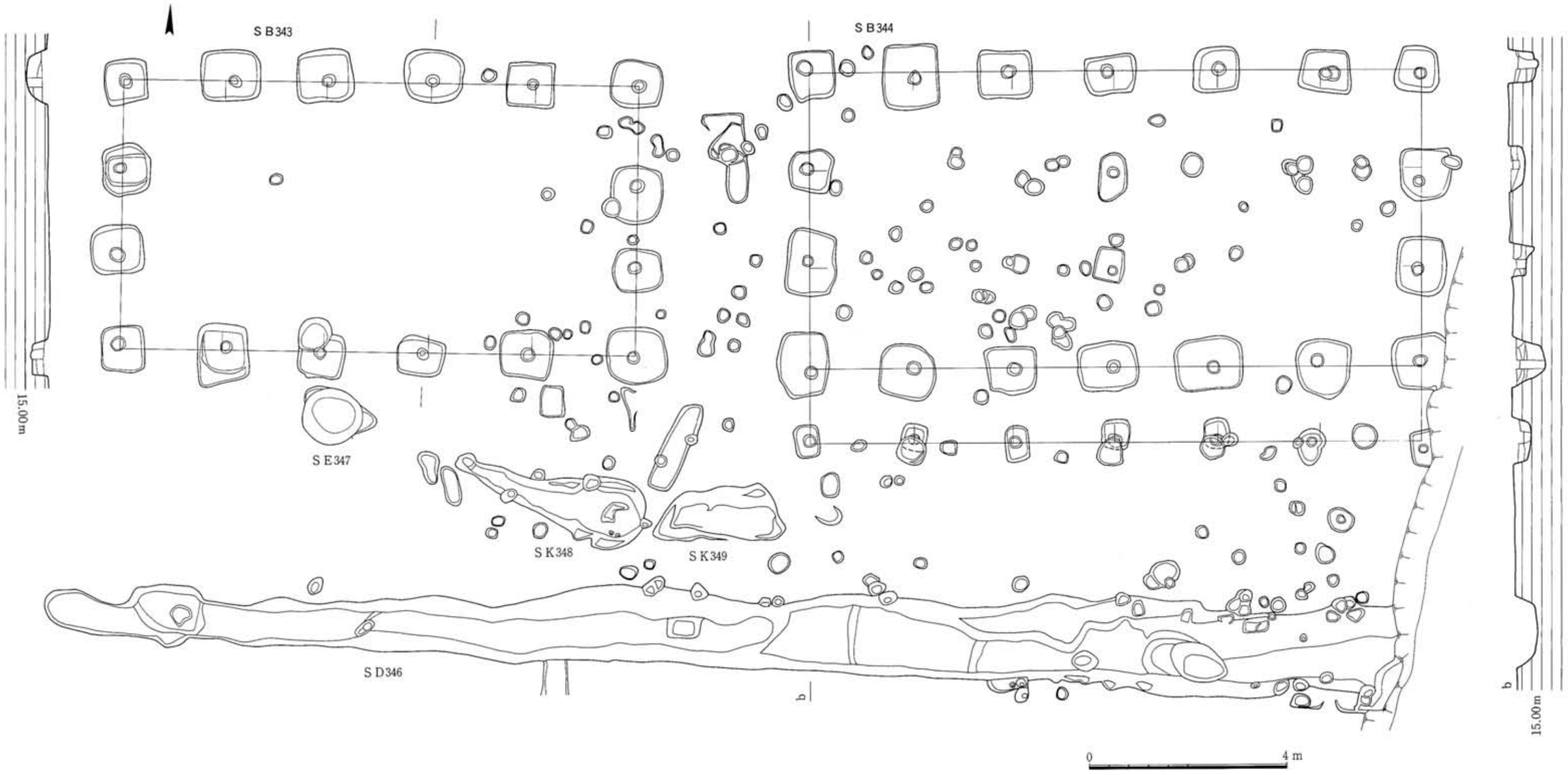


Fig. 117　S B343・S B344掘立柱建物跡（1/80）

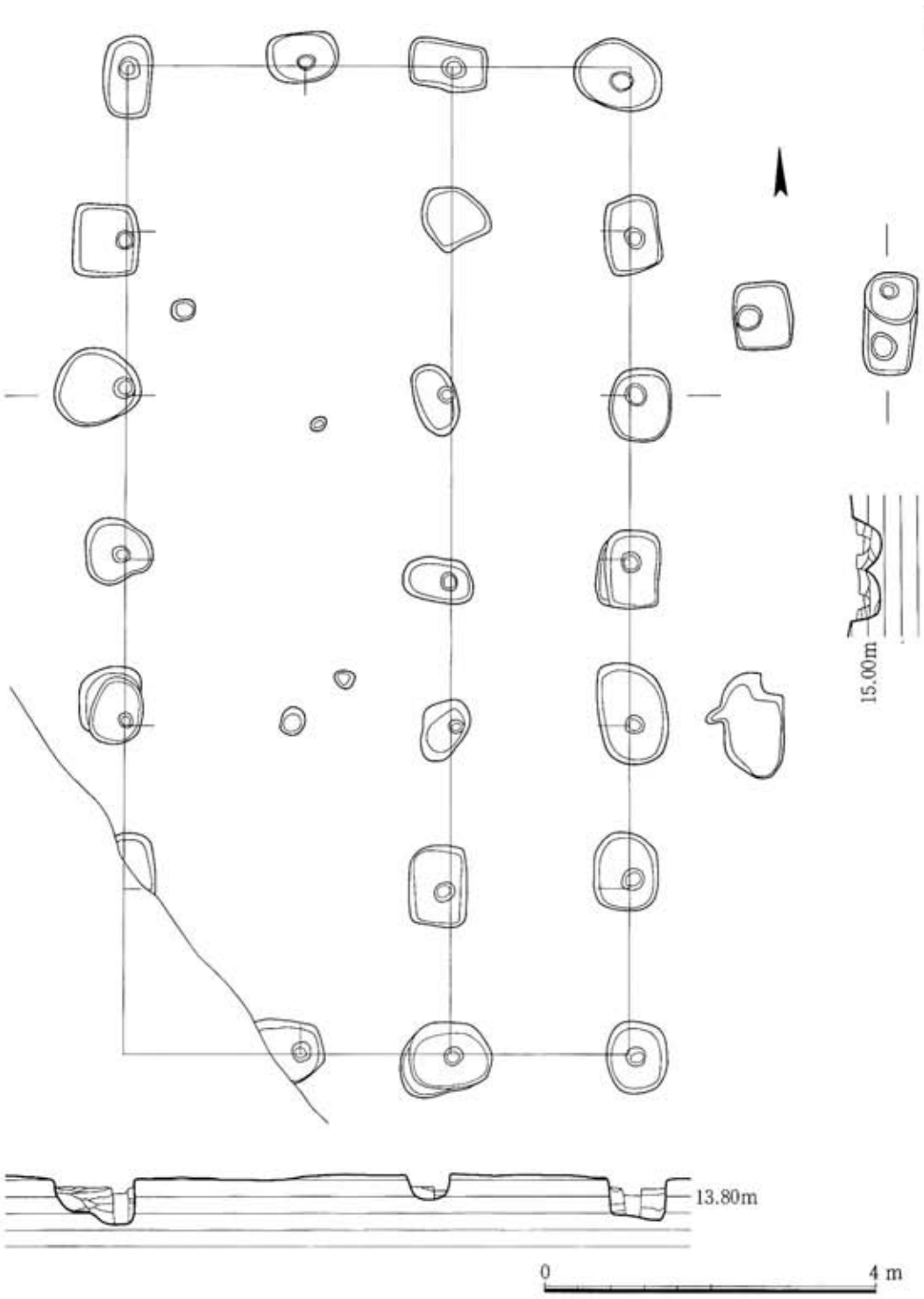


Fig. 118　ＳＢ345 掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ334

構造　２間×２間（3.28m×2.86m）総柱　**柱間**　南北1.64m（5.5尺）、東西1.43m（4.8尺）

方位　N1°10′W

特徴　ＳＢ335・ＳＢ336と全面の南側柱列を揃える。柱穴掘形は径0.5m前後の不揃いな不整円形、柱根径は平均約20cm。柱穴埋土は黒色土を主に黄色土が混じる。

ＳＢ335

構造　２間×２間（3.00m×2.86m）総柱　**柱間**　南北1.50m（５尺）、東西　1.43m（4.8尺）

方位　N1°10′W

特徴　ＳＢ334より南北長が短い以外、柱穴等の特徴はこれに同じく全体に雑な感がある。ＳＤ331に切られる。前面にＳＤ339が幅約0.8mで痕跡程度残存する。

ＳＢ336

構造　２間×２間（3.76m×3.23m）総柱　**柱間**　南北1.88m（6.3尺）、東　西1.62m（5.4尺）

方位　N1°10′W

特徴　柱穴は四辺とも本来上半を布掘状に掘ったあと下半は個別に径0.8m前後の円形に掘り込んだと思われるが、削平のため西側柱列は布掘りが切られている。柱根径は平均約25cm。柱穴埋土は黒色土を主としながら黄色土を交互に埋めている。

ＳＢ337

構造　２間×２間（4.14m×3.35m）総柱　**柱間**　南北2.07m（6.9尺）、東西1.68m（5.6尺）

方位　N1°10′W

特徴　ＳＢ338とほぼ同規模で南北に並ぶ。柱穴掘形は南側柱列に変則的な上半布掘りで残る。上面がかなり削平されてはいるが、本来は四辺ともＳＢ366同様にこのような掘ではなかったかと推定する。下半の個々の柱穴掘形は基本的に一辺0.9m前後の隅丸方形とみられ、柱根径は平均約25cm。柱穴埋土は北側柱列で観察する限りでは黒色土を主に個々の柱の基部を固めたあと上半布掘部では西から東に向かって順次埋め固めている。

ＳＢ338

構造　２間×２間（4.08m×3.28m）総柱　**柱間**　南北2.04m（6.8尺）、東西1.　64m（5.5尺）

方位　N1°10′W

特徴　柱穴掘形は基本的に１辺0.9m前後の方形であるが小型あるいは円形にちかい掘形がみられるなど不揃いである。柱根径は平均約25cm、柱穴埋土は黒色土を主に黄色粘土を交互に混じえる。柱穴掘り込みに深浅があるため西側柱列の中間柱穴は痕跡程度しか残っていない。なおＳＢ337との中間に径約1.5mの円形土壙があるが、両建物に関係するかどうか不明である。

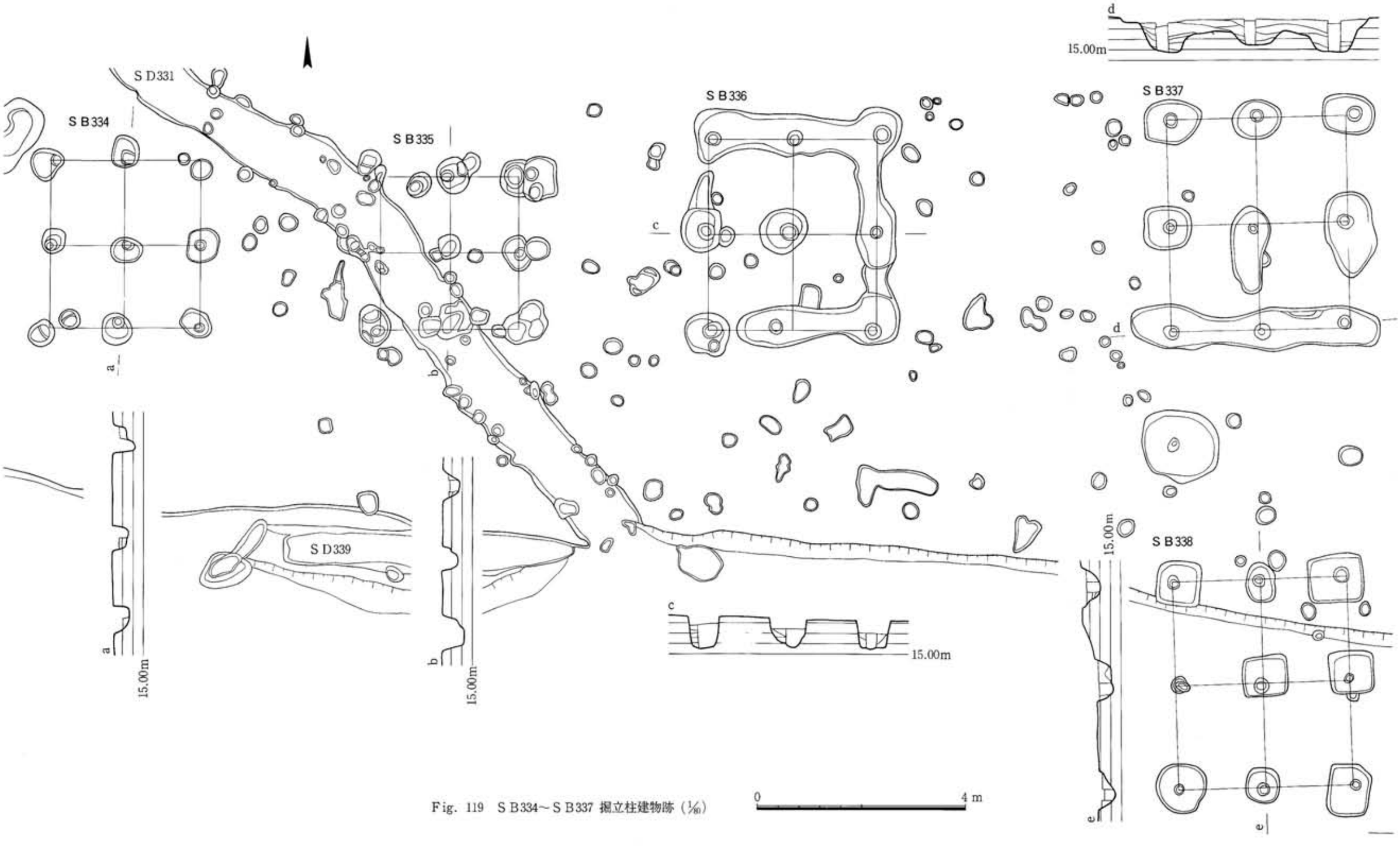
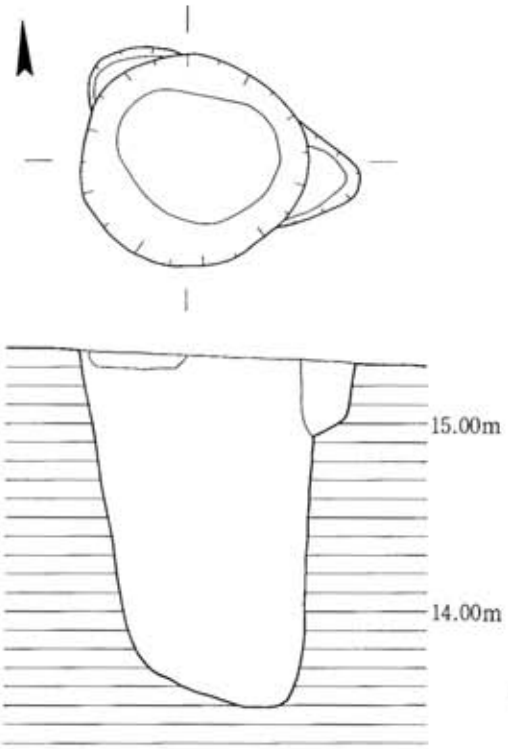


Fig. 119　S B334～S B337 掘立柱建物跡（1/80）

(2)　**井戸**（Fig.120, PL.93）

ＳＢ343の南側で井戸とみられるＳＥ347の１基を検出した。埋土中出土の土師器は10世紀前半であり、ＳＢ347ほか一群の建物とは共存しえず、その廃絶後に掘り込まれたものである。



ＳＥ347井戸

構造　円形素掘り

規模　上面で径1.2m、深さは壙底が東側でやや下がり検出面からの最深1.85m。

その他　類似する円形井戸はⅢ区で多数みつかっている。ただしＳＥ347付近は微高地でしかも今日地下水脈が深いことを思うと、この程度の掘り込みで湧水が得られたかどうか、井戸とするに疑念がわかないでもない。

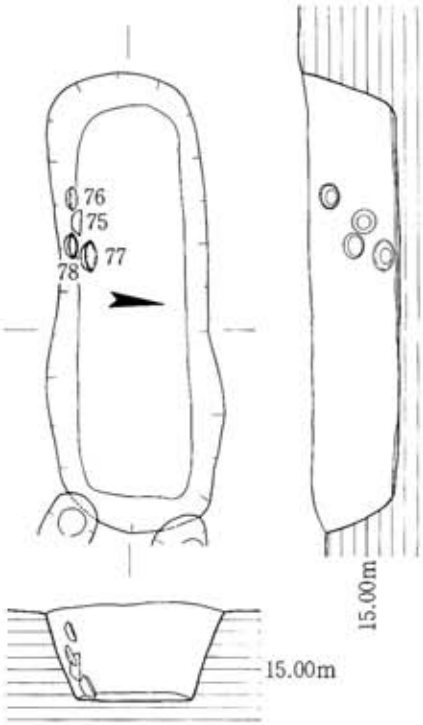
0　2 m

Fig. 120　ＳＥ347 井戸（1/40）

(3)　**土壙墓**（Fig.121・122, PL.94・95）

調査区の東南隅で４基を検出した。その他付近に溝状の土壙等３基以上があり、土壙墓の可能性もあるが掘形が不整形であるなど墓と認定できない。ちょうど微高地の南端部にあたり、これより南側はやや急に一段地形が下がる。

４基のうちには副葬品の出土状況から木棺墓の可能性をもつものもあるが、棺釘は検出されず木棺とする明徴がないのでここでは土壙墓としておく。ただしＳＰ350は７世紀前半に遡るが、便宜上この項で説明する。他はＳＰ352が11世紀前半、ＳＰ353が10世紀中頃～後半と推定する。頭位はＳＰ350が西、他３基は北または南とみられる。したがって一見同一墓地を形成してはいるが２時期に分かれるものであり、墓と官衙的な建物との並存が考えにくい以上、ＳＢ344ほか一群の建物はその空白期間内、すなわち７世紀後半～10世紀前半の大枠の中に収まることになる。９～10世紀の土壙墓はⅢ区でも分散的に多くみつかっている。



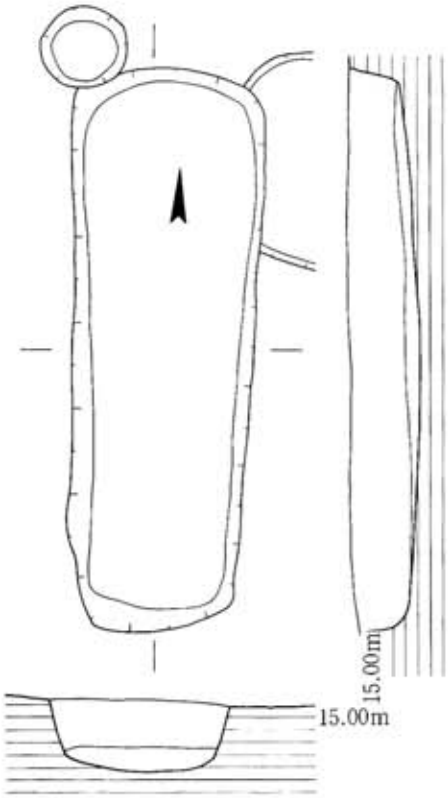
ＳＰ350

形態　隅丸長方形

規模　長1.85m、幅0.6m、深0.7m

特徴　土壙は四壁ともやや急に掘り込み壙底は平坦に仕上げている。幅が一様なため頭位は明らかでないが副葬品が西に偏っていることから一応西としておく。

副葬品　軟質の須恵器坏２組が蓋と身を別々にし、口縁部を壙の内側に向けた状態で南壁際から出土した。この出土状況からすると４点は木棺が埋められる際に棺外副葬品として墓壙との隙間に入れられたことも考えられ、木棺が使用された可能性がつよい。



ＳＰ351

形態　長方形

規模　長2.25m、幅0.8m、深0.6m

特徴　四壁は急に掘り込み、壙底はほぼ平坦である。幅が北側に向かってやや広くなることから頭位は北と推定する。東北隅を別の小土壙に切られている。

副葬品　なし

Fig. 121　ＳＰ350・ＳＰ351 土壙墓（1/30）

Fig. 122　ＳＰ352・ＳＰ353 土壙墓（1/50）

ＳＰ352

形態　隅丸長方形

規模　長2.05m、幅0.65m、深0.4m

特徴　四壁は下位で斜めに立ち上がり、壙底は平坦ながら北側に向かってやや上がる。頭位は北と推定する。

副葬品　頭位とみられる北壁際で土師器坏１点が口縁部を壙の内側に向けて出土した。木棺使用の可能性もあり、その場合は棺外副葬品にあたるものであろう。

ＳＰ353

形態　長方形

規模　長2.0m、幅0.8m、深0.6m

特徴　四壁は直にちかく掘り込まれ、壙底はほぼ平坦である。西壁は一部別の土壙に切られる。頭位は他の２基に合わせ一応北としておく。

副葬品　土師器坏７点、同皿２点、黒色埦１点と素文鏡片１点、鉄製紡錘車１点が出土した。このうち素文鏡片ははさらに細片に割れ重なった状態で南側壙底ちかくから、また紡錘車も同じ付近から２片に折れて出土した。また土師器類は壙底では南側に埦１点、北側では83・81・80・84の坏４点が分散しそのうち84は伏せてあった。壙底より約30cm浮いて北側に82・85の坏２点と88皿１点がいずれも伏せてあり、その他南側に坏87と北側に皿89が浮いて出土した。木棺使用の可能性もあり、82等は棺上副葬か。

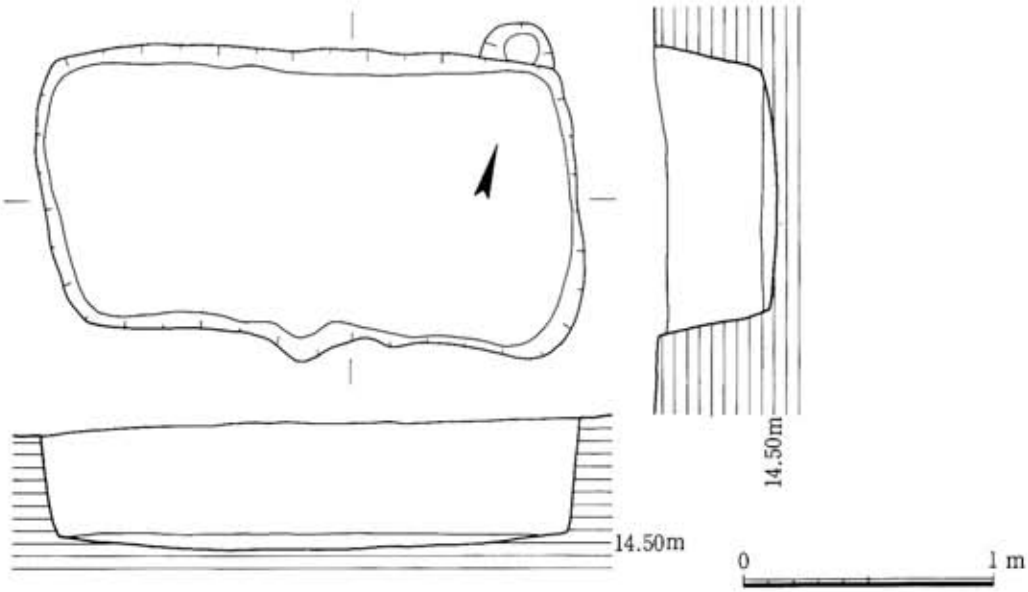
〈Ⅲ区の遺構〉

弥生時代では貯蔵穴とみられる土壙３基がある。奈良・平安時代の遺構は主に掘立柱建物跡で25棟を数える。Ⅱ区に比べると全体に規格性が乏しく、また小規模なものが多い。他に溝19条・土壙17基・土壙墓８基等がある。中世では明確な建物跡は認められず、溝４条を検出した。

1　弥生時代

(1)　土壙（Fig.123・124, ＰＬ105）

調査区の西側で比較的まとまって３基を検出した。分布は西側になお数基拡がっていた可能性もあるが、削平により不明である。弥生時代の遺構は前期のみにかぎらず、Ⅲ区ではこの３基以外に知られていない。位置からみるとⅢ区の東側に同時期の居住地区が想定されることに地形上何ら支障ないと思われるが、実際は該期の遺構はは存在せず、あるいは削平されてしまったものであろうか。このような様相は隣接する東側のⅠ・Ⅱ区でも同様である。



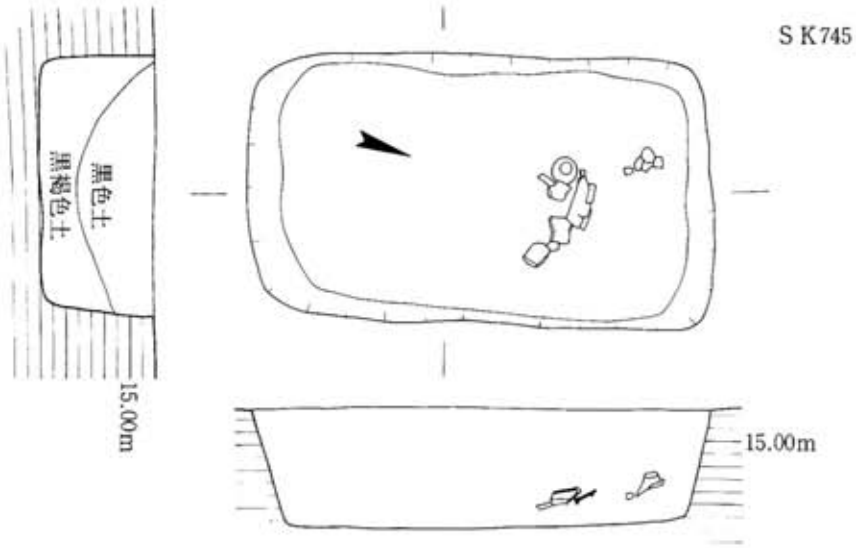
ＳＫ744

形態　隅丸長方形

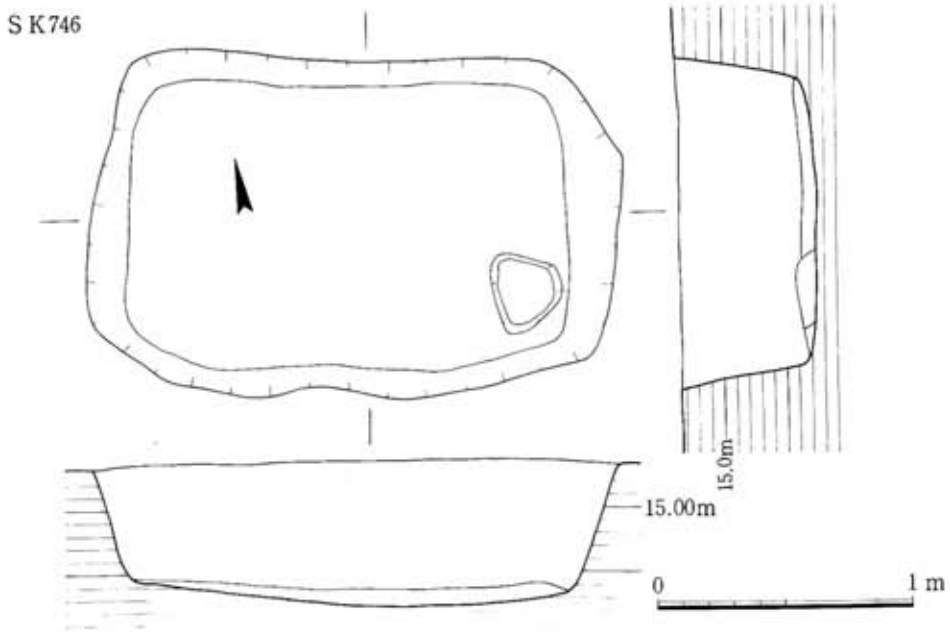
規模　長2.15m、幅1.15m、深0.5m

特徴　壙底はほぼ平坦で、壁が垂直にちかく急に立ち上がる。長方形とはいえ、やや平行四辺形に否む。黒色土がつまり、土器が若干出土した。

Fig. 123　ＳＫ744 土壙（1/20）



ＳＫ745　**形態**　隅丸長方形　　**規模**　長1.8m、幅1.0m、深0.5m
特徴　壙底は平坦、壁は長辺側でほぼ垂直だが短辺側はやや斜めに立つ。
埋土は自然な堆積を示し、北側で壙底から約20cm浮いて土器出土。



ＳＫ746　**形態**　隅丸長方形　　**規模**　長2.1m、幅1.35m、深0.55m
特徴　他２基に比べて幅が広い。壙底はほぼ平坦ながら東側がやや下がり、壁はやや斜めに立つ。黒色土がつまり、土器が若干出土した。

Fig. 124　ＳＫ745・ＳＫ746 土壙（1/30）

３基は長さの点では２ｍ前後であまり大きな違いがない。ただし幅はＳＫ744とＳＫ745が長軸の約半分であるのに対し、ＳＫ746はそれよりやや広めて比率は約３分の２である。周辺におけるこの種の土壙あるいは竪穴には平面形の縦横比率が約２：１と約３：２のタイプがあるらしく、例えば久池井Ｃ遺跡の竪穴２基のうちＳＢ０１は4.16m×2.21mと前者であり、ＳＢ14は3.12m×1.92mと後者である。久池井Ｃ遺跡の２基は規模が大きく、上屋をもつ貯蔵竪穴と推定されるが、掘形比率に対する意識としてはこれらⅢ区の土壙に共通するものが認められる。

長軸方位はＳＫ744とＳＫ746が東西方向、ＳＫ745は南北方向で、一定しない。遺構埋土は主に黒色土がつまり、ＳＫ745の場合レンズ状の自然な堆積が認められた。出土遺物は多くないが、ＳＫ745から甕、ＳＫ746から甕・高坏が出土している。いずれも埋土中の出土ではあるが土壙の時期を示すものであろう。時期は前期中頃から前期後半にかかる頃である。

なお、この種の弥生前期の土壙は久池井周辺で最近とみに調査例が多く、先の久池井Ｃ遺跡のほか、惣座六本杉遺跡でも数基を昭和63年度に大和町教育委員会が調査している。いずれも近辺に竪穴住居跡などの居住施設の存在は不明である。

2　奈良・平安時代

(1)　掘立柱建物跡（Fig.125～140, ＰＬ106～111）

25棟を検出した。構造は３間×２間のものが14棟で半数以上を占める。他には５間×３間が５棟、５間×２間が１棟、４間×２間が１棟、３間×２間総柱が１棟、２間×２間総柱が１棟などがある。柱穴掘形は桁行５間の建物跡一部以外は小型である。方位は南側では正方位にちかいものが多く、逆に北側では西傾するものが多い。周囲に溝をもつものが４棟あり、そのうち１棟は廂の内に入ってもう１条溝をもつ。全体に配置は規格性に乏しい。時期は８世紀を主とする。

ＳＢ701

構造　４間（?）×２間（7.54m×4.68m）南北棟

柱間　桁2.51m　梁2.34m

方位　N4°40'W

特徴　上面削平のため残存状況は良くない。柱掘形は円形ないしは方形を呈する。ＳＢ702と切り合うが前後関係は不明。埋土は黒褐色～暗褐色土を呈し、柱痕跡は直径10cm～15cmを測る。

ＳＢ702

構造　５間×２間（9.40m×4.92m）南北棟

柱間　桁1.88m　梁1.64m

方位　N0°10'E

特徴　上面削平のため残存状況は良くない。柱掘形は円形ないし楕円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土または暗褐色土で柱痕跡は直径10cm～15cmを測る。ＳＢ702と切り合うが前後関係は不明。

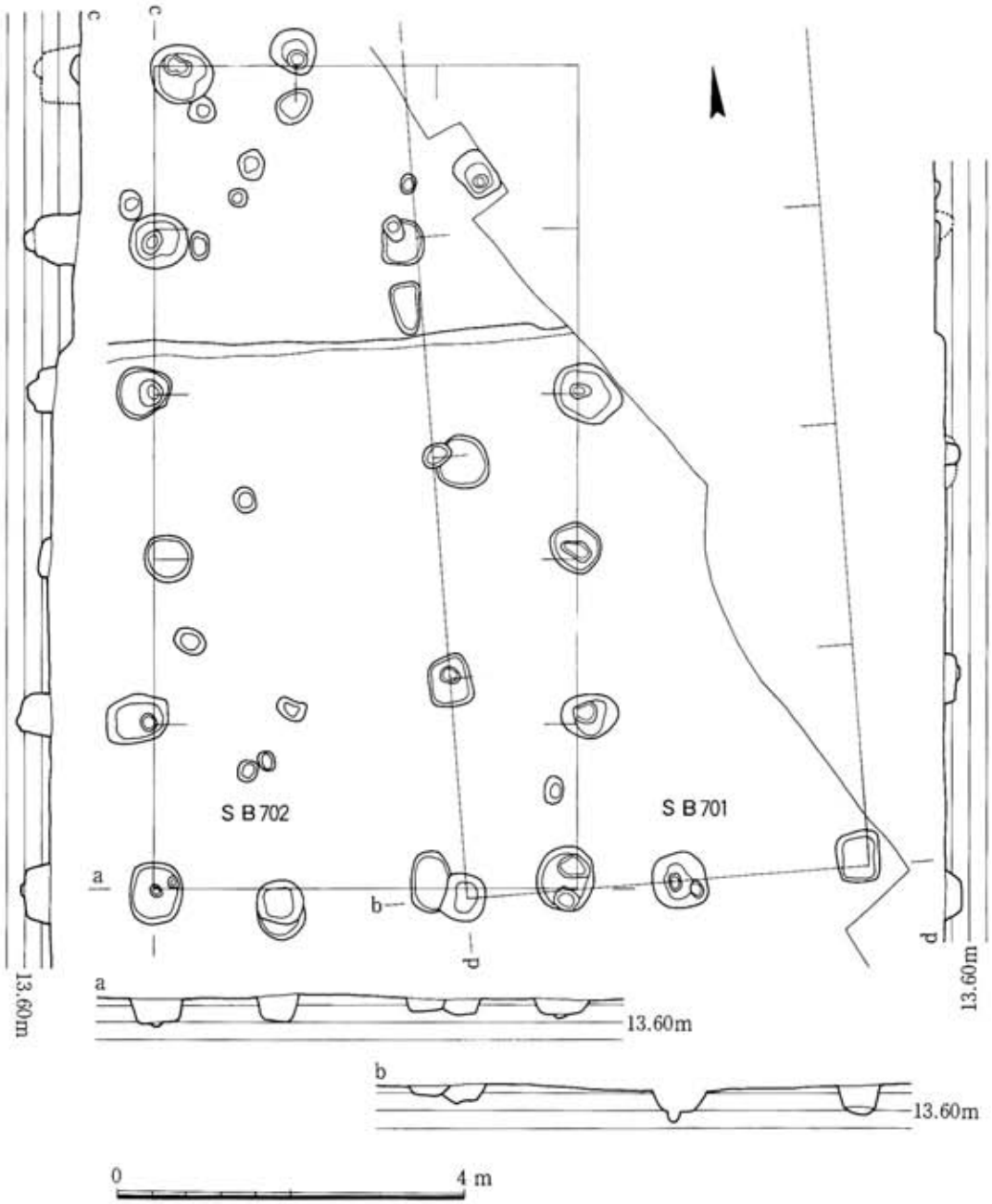


Fig. 125　S B701・S B702 掘立柱建物跡（1/80）

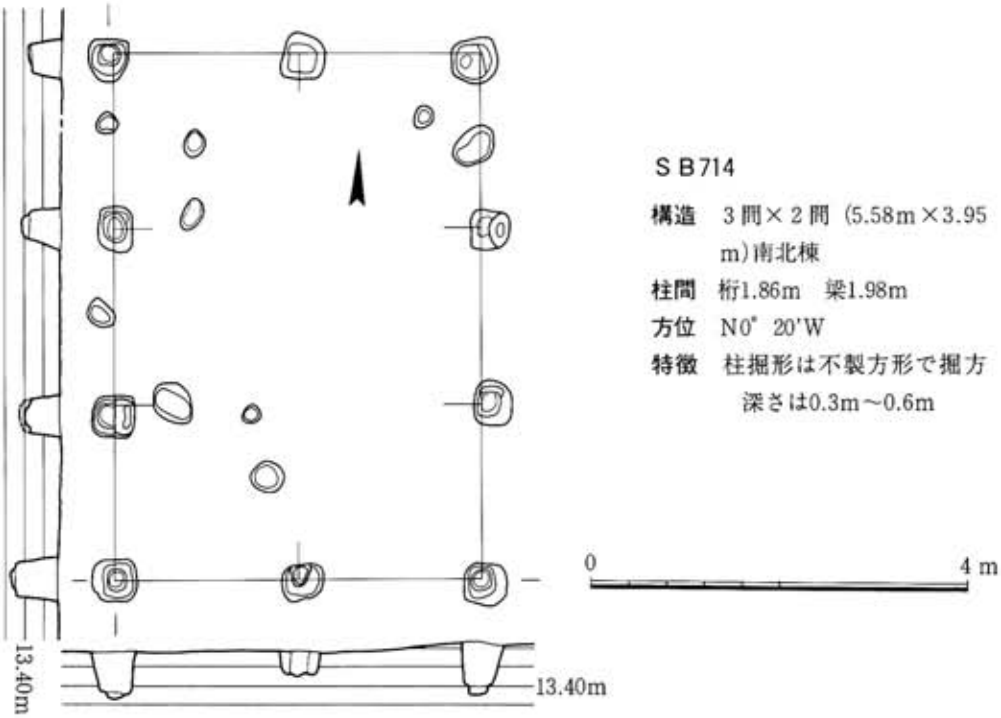


Fig. 126 ＳＢ714 掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ722

構造　４間×２間（9.55m×5.04m）東西棟　**柱間**　桁2.39m　梁2.53m　**方位**　N6°W

特徴　柱掘形はほぼ円形を呈し、深さ0.4m～0.7mを測る。建物南半部はやや削平を受ける。建物に北隣するＳＤ723西隣するＳＤ724は本遺構に付属するものと思われる。ＳＢ725・ＳＢ729と重複関係にあるが、柱そのものの切り合いはなく前後関係は不明である。また、ＳＤ726との切り合いにおいてもその前後関係は不明である。

ＳＢ725

構造　４間×２間(6.89m×4.85m)東西棟　**柱間**　桁1.88m 1.57m 梁2.43m　**方位**　N5°40'W

特徴　柱掘形はほぼ円形を呈し、深さ0.3m～0.5mを測る。全体的に削平を受けている。本遺構の北及び西に走るＳＤ726・ＳＤ728は位置的にみて本遺構に伴うものと思われる。ＳＢ722・ＳＢ729と重複関係にあるが、その前後関係は不明であっった。

ＳＢ729

構造　３間×２間（5.16m×3.86m）南北棟　**柱間**　桁3.72m　梁1.93m　**方位**　N6°24'E

特徴　柱掘形は円形ないしは不整円形を呈する。全体的に削平を受けており、掘形深さは0.1m～0.4mと浅い。ＳＢ722・ＳＢ725及びＳＤ726と重複関係にあるが、その前後関係は不明であった。

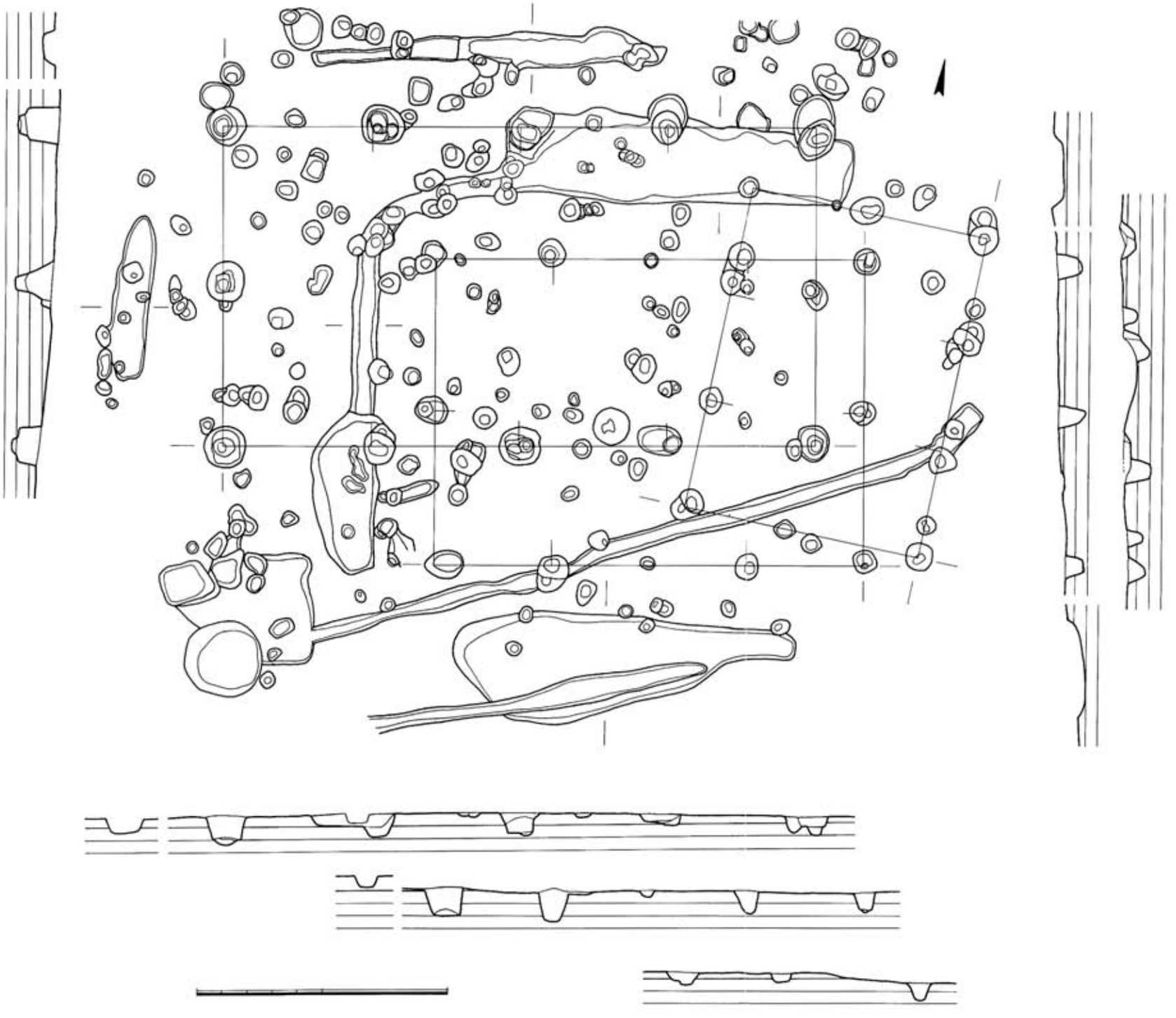
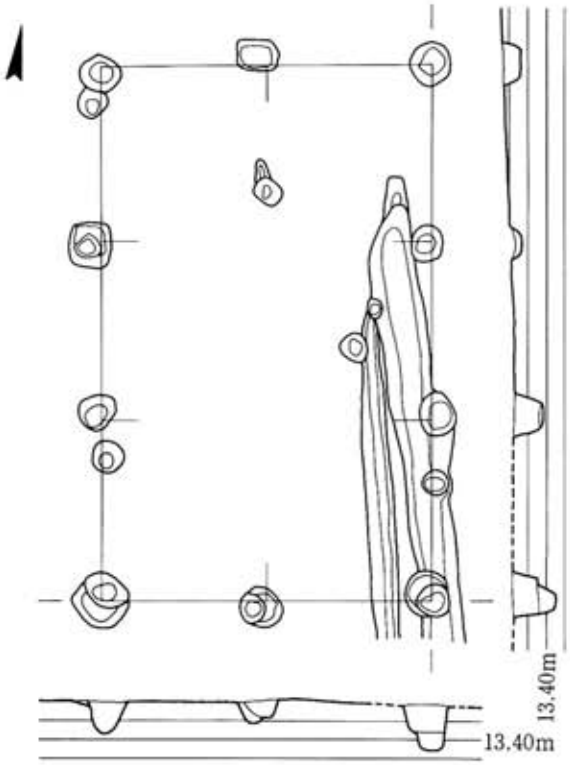


Fig. 127 S B722・S B725・S B729 掘立柱建物跡（1/80）



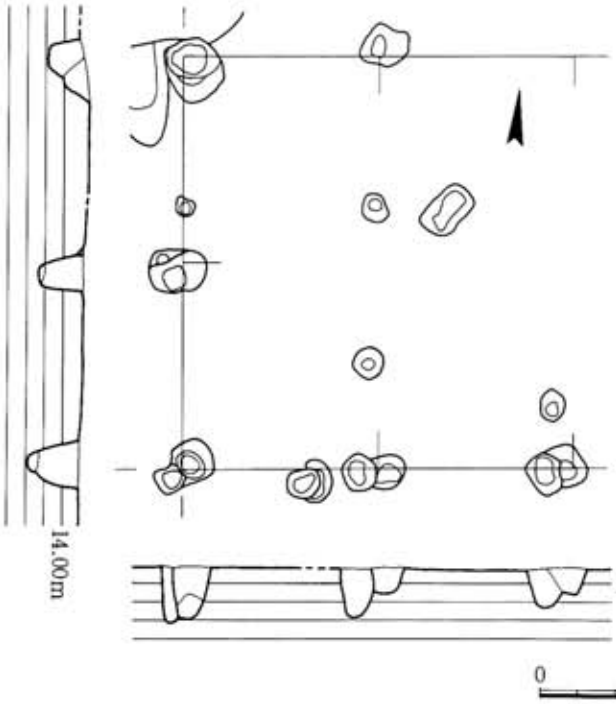
ＳＢ703

構造　３間×２間（5.72m×3.58m）南北棟

柱間　桁1.91m　梁1.79m

方位　N3°W

特徴　柱掘形は円形ないしは方形を呈し、掘形深さは0.1m～0.5mを測る。建物南東側は中世の溝に切られる。



ＳＢ704

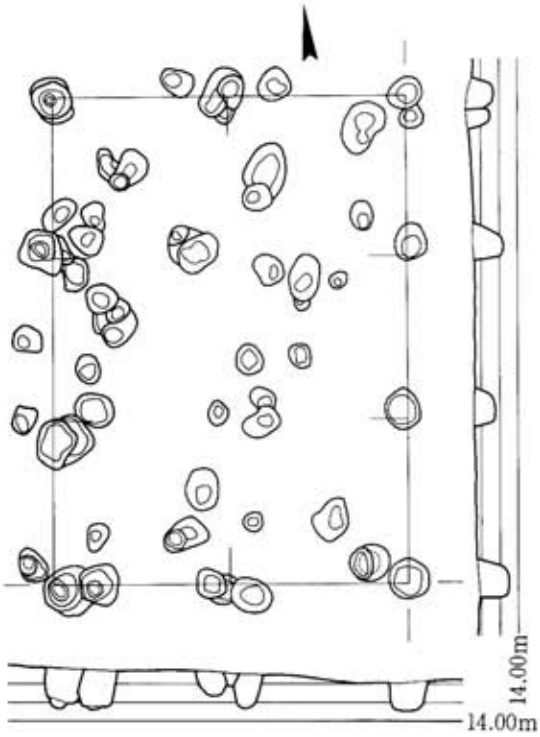
構造　３（？）間×２間（6.3m×4.40m）東西棟

柱間　桁2.1m　梁2.2m

方位　N7°W

特徴　柱掘形は円形ないしは不整方形を呈し、掘形深さは0.4m～0.6mを測る。建物東部が調査区外にあるため全体の規格は不明である。他の建物との重複関係はない。

Fig. 128　ＳＢ703・ＳＢ704 掘立柱建物跡（1/80）



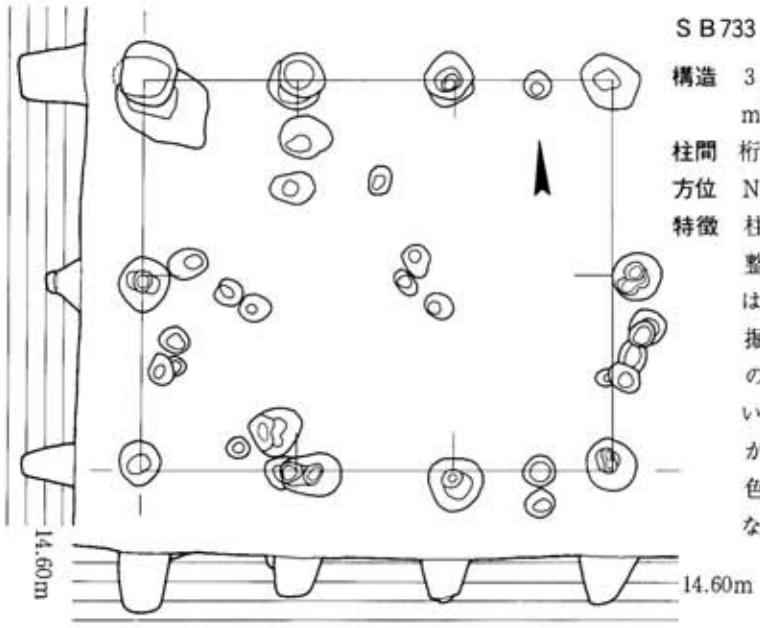
ＳＢ732

構造　３間×２間(5.15m×3.81m)南北棟

柱間　桁1.72m　梁1.91m

方位　N3°E

特徴　柱掘形は円形ないしは不整方形を呈し、掘形深さは0.2m～0.5mを測る。他の建物との重複関係はない。



ＳＢ733

構造　３間×２間（5.08m×4.12m)東西棟

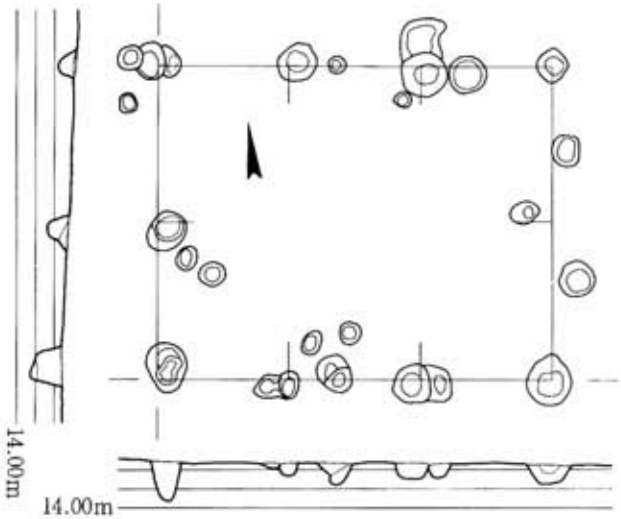
柱間　桁1.69m　梁2.06m

方位　N１°40′W

特徴　柱掘形は円形ないしは不整方形を呈し、掘形深さは0.4m～0.7mを測る。柱掘形は比較的大きい。他の遺構との重複関係はないが、建物西側にＳＫ734が存在する。埋土は黒褐色土で柱痕跡は確認できなかった。

0　4 m

Fig. 129　ＳＢ732・ＳＢ733 掘立柱建物跡（1/80）



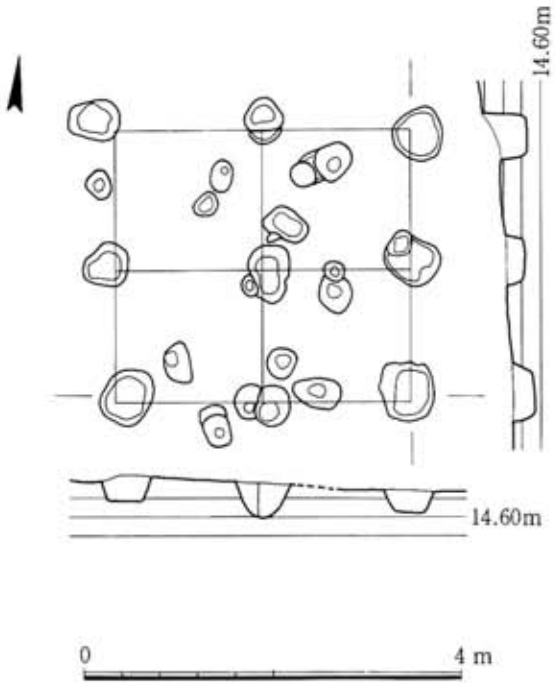
ＳＢ736

構造　３間×２間（4.23m×3.36m）東西棟

柱間　桁1.41m　梁1.68m

方位　N2°40′E

特徴　柱掘形は不整円形を呈し、掘形深さは0.1m～0.4mを測る。梁行は東で３間、西で２間と変則的な柱穴の配列となっている。柱穴はやや小さめである。他の遺構との重複関係はない。



ＳＢ739

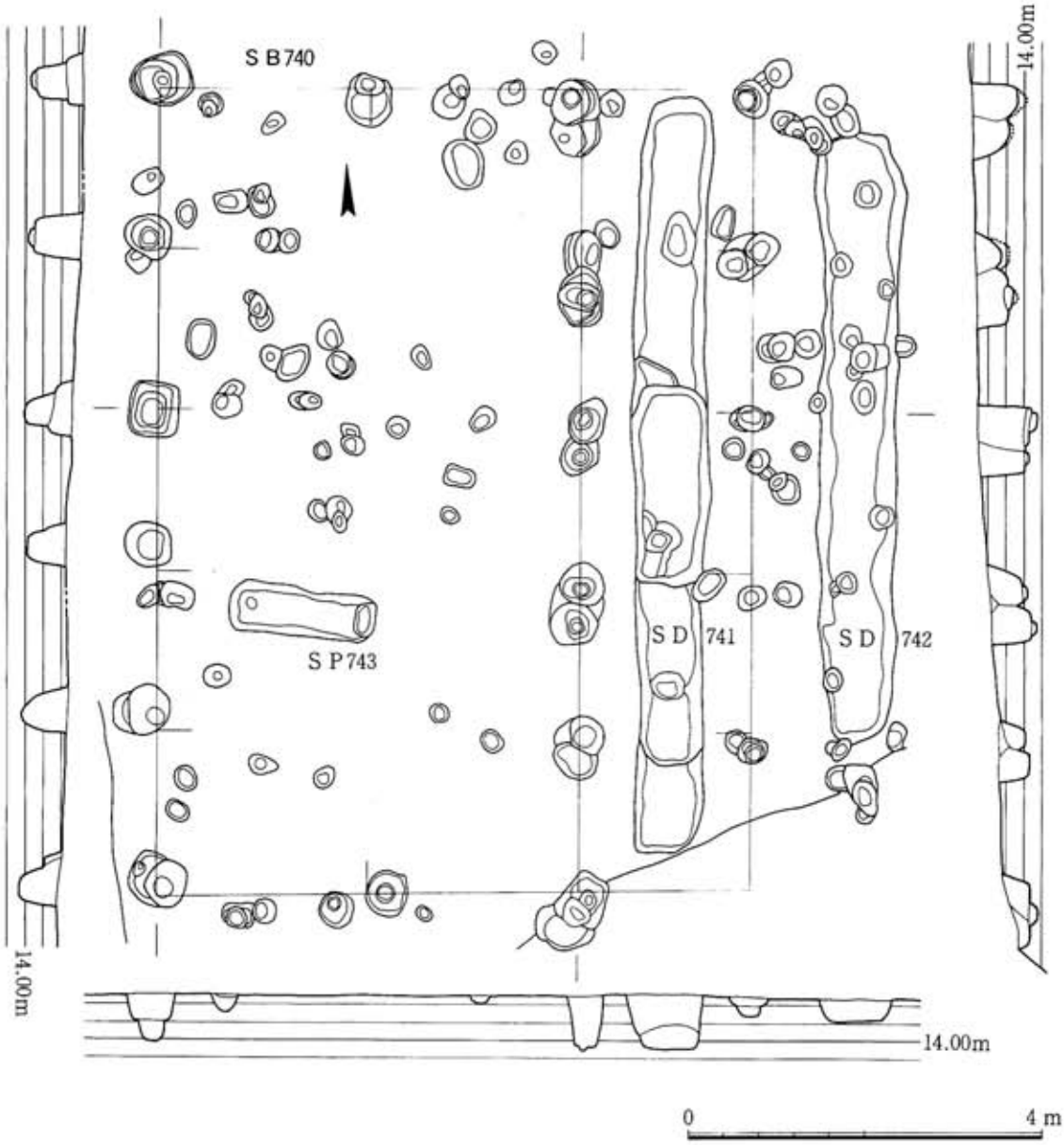
構造　２間×２間（3.16m×2.79m）総柱東西棟

柱間　桁1.58m　梁1.395m

方位　N7°20′W

特徴　柱掘形は円形ないし不整方形を呈し、掘形深さは0.2m～0.4mで、上面が削平を受けているため比較的浅い。本調査区において総柱の建物はＳＢ756・ＳＢ757と本建物の３棟だけであるが、その中でも最も規模の小さい建物である。他の遺構との重複関係はない。

Fig. 130　ＳＢ736・ＳＢ739 掘立柱建物跡（1/80）



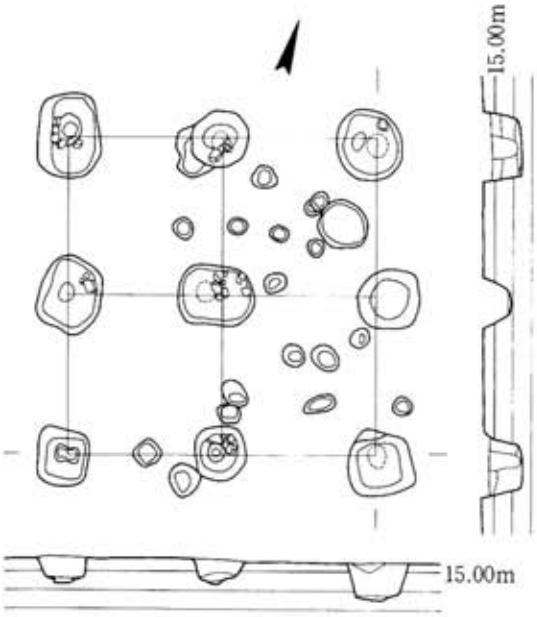
ＳＢ740

構造　５間×３間（9.02m×6.79m）東面廂南北棟　　**柱間**　桁1.804m　梁2.41m　1.97

方位　Ｎ１°20′Ｅ

特徴　柱掘形ないしは方形を呈し、掘形深さは0.4m～0.7mを測る。廂をもつ建物はこの１棟だけである。廂の柱筋の両側にＳＤ741・ＳＤ742が存在する。いずれの溝も桁行に並行に走っていることから、本建物に伴うものと思われる。身舎の東側桁行では２つの柱穴が切り合って存在する。建て替えか。

Fig. 131　ＳＢ740 掘立柱建物跡（1/80）



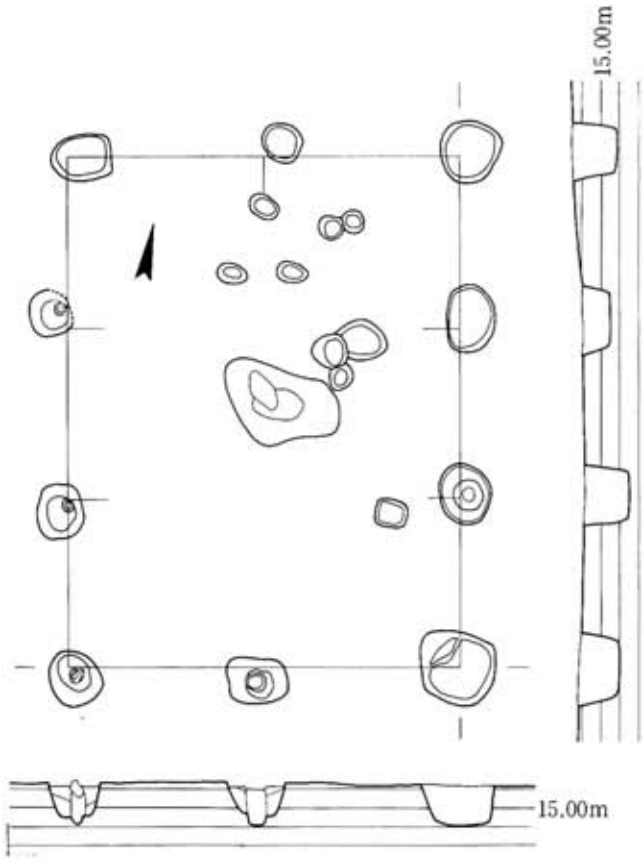
ＳＢ757

構造　２間×２間（3.38m×3.34m）総柱南北棟

柱間　桁1.69m　梁1.67m

方位　N10°40′W

特徴　柱掘形は方形に近い。掘形深さは0.3m～0.4mを測る。柱掘方内部に小礫をもつものがあり、礫を柱の周囲に配置して安定を図ったものと思われる。２間×２間の建物は他にＳＢ739がある。他の遺構との重複・切り合い関係はない。遺物から８世紀前半の所産と考えられる。



ＳＢ760

構造　３間×２間（5.40m×4.20m）南北棟

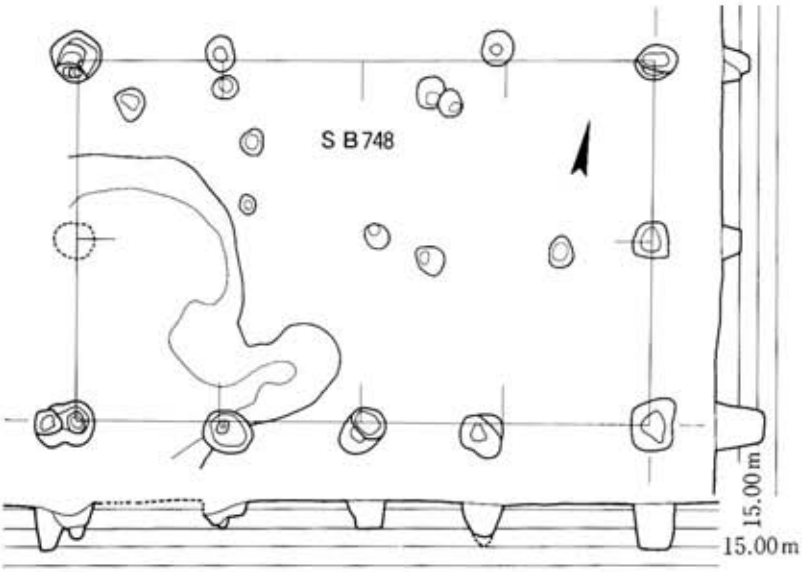
柱間　桁1.8m　梁2.1m

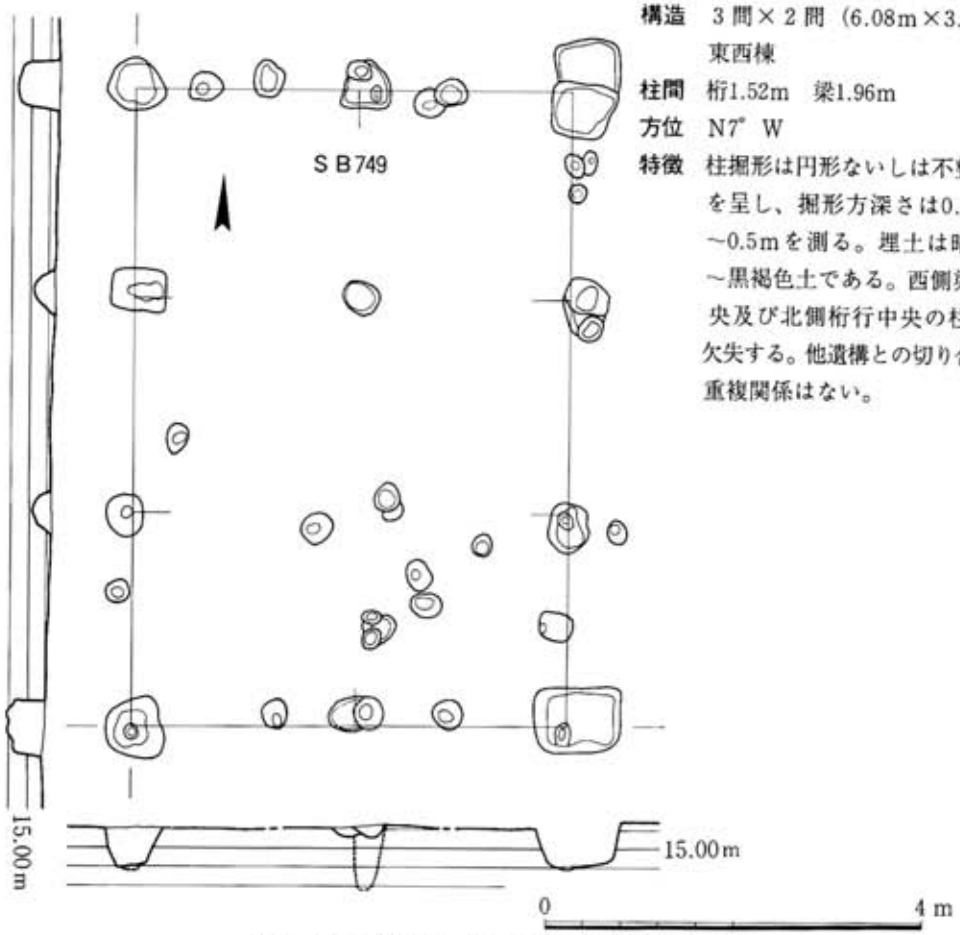
方位　N6°W

特徴　柱掘形はほぼ円形を呈し、掘形深さは0.3m～0.5mを測る。他の遺構との切り合い・重複関係はない。

0　4 m

Fig. 132　ＳＢ757・ＳＢ760 掘立柱建物跡（1/80）





ＳＢ748

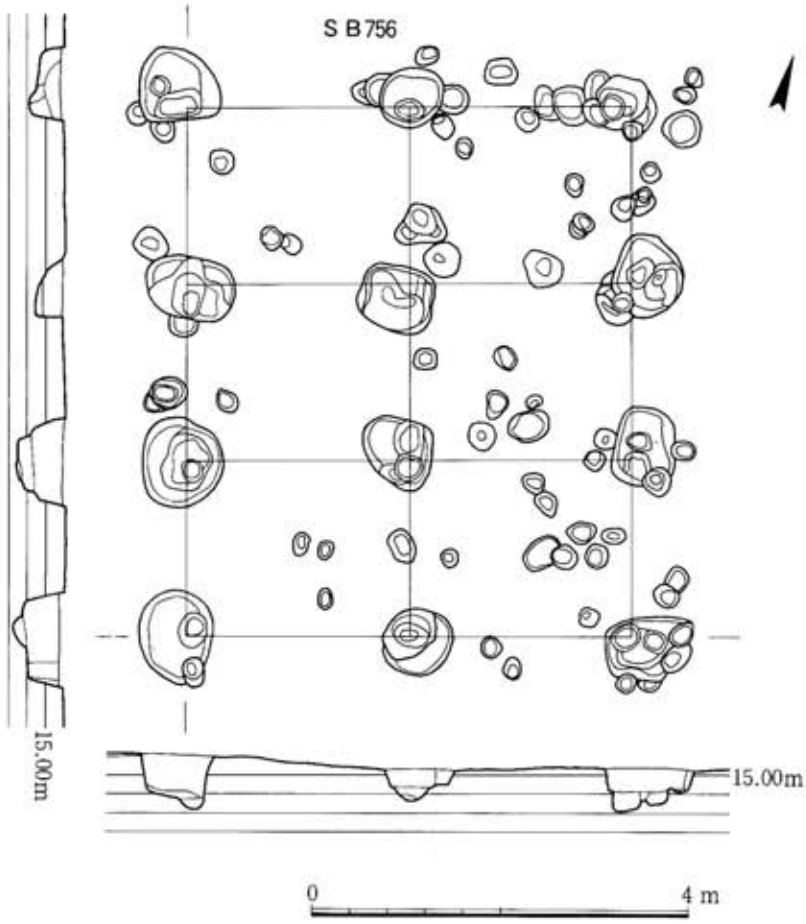
構造　３間×２間（6.08m×3.92m）東西棟

柱間　桁1.52m　梁1.96m

方位　N7°W

特徴　柱掘形は円形ないしは不整方形を呈し、掘形方深さは0.2m～0.5mを測る。埋土は暗褐色～黒褐色土である。西側梁筋中央及び北側桁行中央の柱穴を欠失する。他遺構との切り合い・重複関係はない。

Fig. 133　ＳＢ748・ＳＢ749 掘立柱建物跡（1/80）



SB749

構造　3間×2間（6.72m×4.8m）南北棟

柱間　桁2.24m　梁2.4m

方位　N1° 50′W

特徴　柱掘形は円形ないしは不整方形を呈し、掘形深さは0.1m～0.4mを測る。埋土は暗褐色～黒褐色である。コーナーの柱穴は比較的深く、それ以外は浅い。他遺構との切り合い・重複関係はない。

SB756

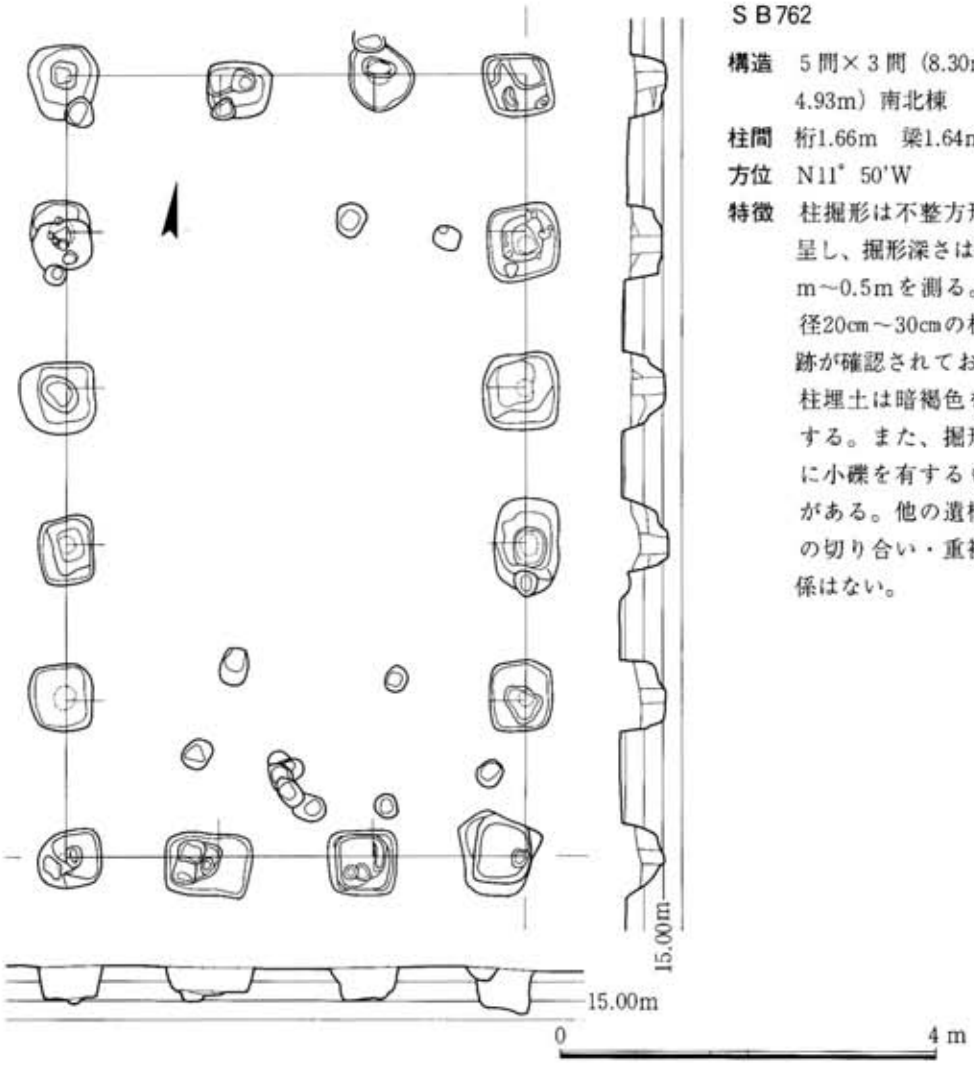
構造　3間×2間（5.63m×4.8m）総柱南北棟

柱間　桁1.88m　梁2.4m

方位　N14° 40′W

特徴　柱掘形は円形ないしは不整方形を呈し、掘形深さは0.3m～0.6mを測る。埋土は暗褐色土で、柱痕跡は直系15cm～20cmを測る。柱掘方は比較的しっかりしている。このタイプの建物しこの1棟のみである。他遺構との切り合い・重複関係はない。

Fig. 134　SB756 掘立柱建物跡（1/60）



ＳＢ762

構造　５間×３間（8.30m×4.93m）南北棟

柱間　桁1.66m　梁1.64m

方位　N11°50'W

特徴　柱掘形は不整方形を呈し、掘形深さは00.4m～0.5mを測る。直径20cm～30cmの柱痕跡が確認されており、柱埋土は暗褐色を呈する。また、掘形内に小礫を有するものがある。他の遺構との切り合い・重複関係はない。

Fig. 135　ＳＢ762 掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ765

構造　５間×３間（10.88m×5.58m）　東面廂東西棟

柱間　桁2.14m×４間＋2.32m　梁1.86m

方位　N7°10'W

特徴　柱掘形は不整方形・不整円形あるいは楕円形を呈し、掘形深さは0.5m～0.8mを測る。埋土は暗褐色～暗茶褐色土である。ＳＤ753と切り合っており、本遺構が溝に切られている。また、建物中央にＳＰ766が存在する。本遺構に南隣してＳＢ763・ＳＤ764が、北側にはＳＢ772が存在する。

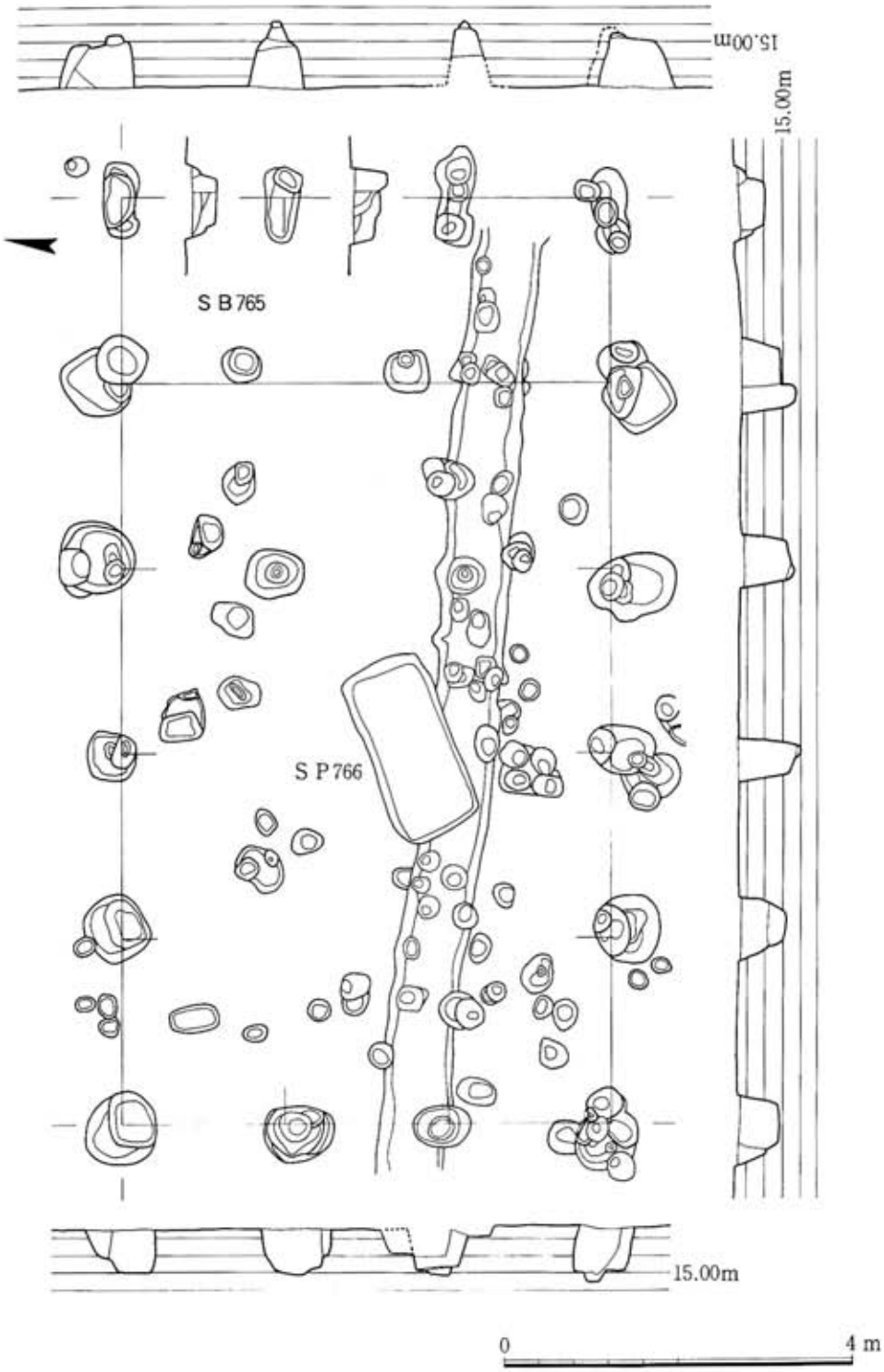
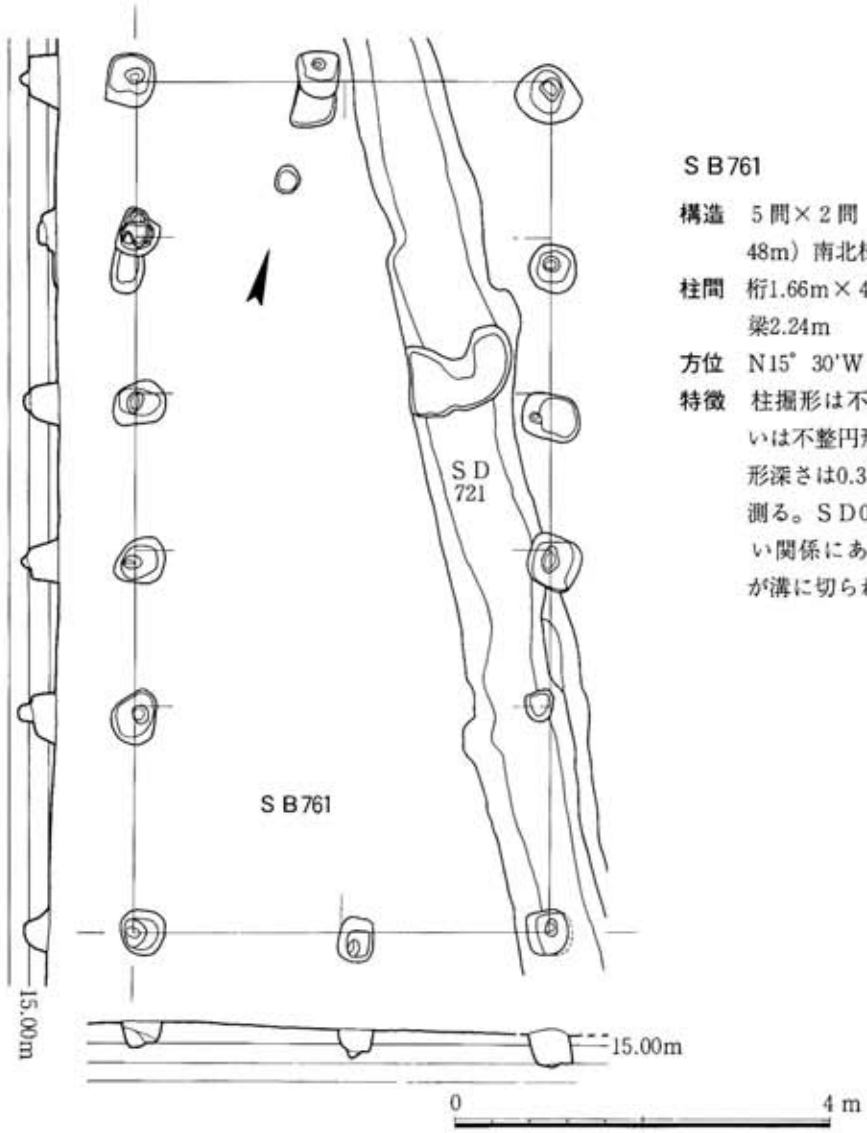


Fig. 136　S B765掘立柱建物跡（1/80）



ＳＢ761

構造　５間×２間（9.04m×4.48m）南北棟

柱間　桁1.66m×４＋2.40m　梁2.24m

方位　N15°30'W

特徴　柱掘形は不整方形あるいは不整円形を呈し、掘形深さは0.3m～0.4mを測る。ＳＤ004と切り合い関係にあり、本遺構が溝に切られている。

Fig. 137　ＳＢ761掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ763

構造　５間×３間（9.65m×5.12m）南北棟

柱間　桁1.70m　梁1.93m

方位　N8°40'W

特徴　柱掘形は不整方形あるいは不整円形を呈し、掘形深さは0.5m～0.8mを測る。埋土は暗褐色～暗茶褐色で、柱痕跡は直径15cm～20cmを測る。西側にＳＤ764が存在し、本遺構に伴うものと考える。北隣してＳＢ765が存在する。

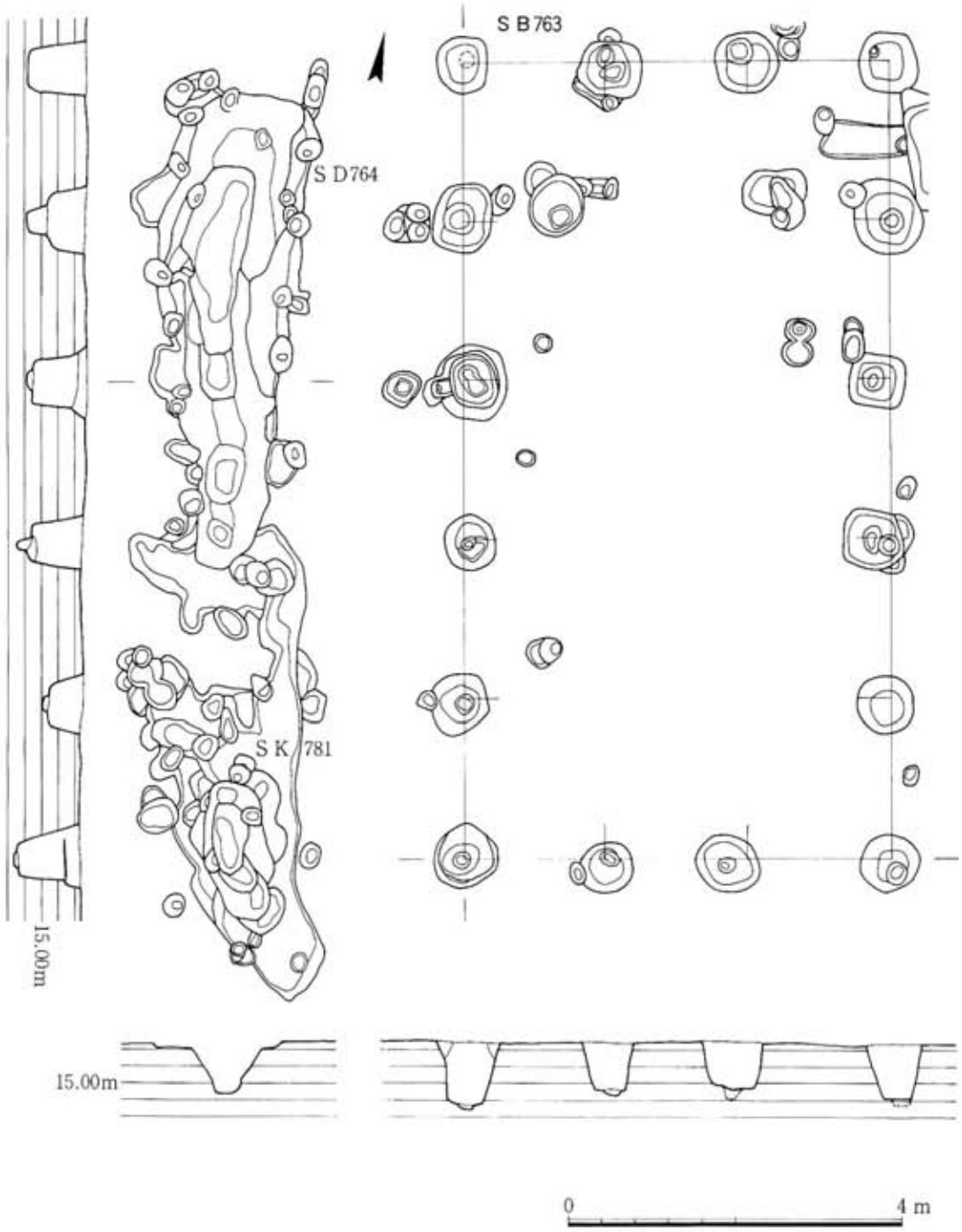


Fig. 138　S B763 掘立柱建物跡（1/80）

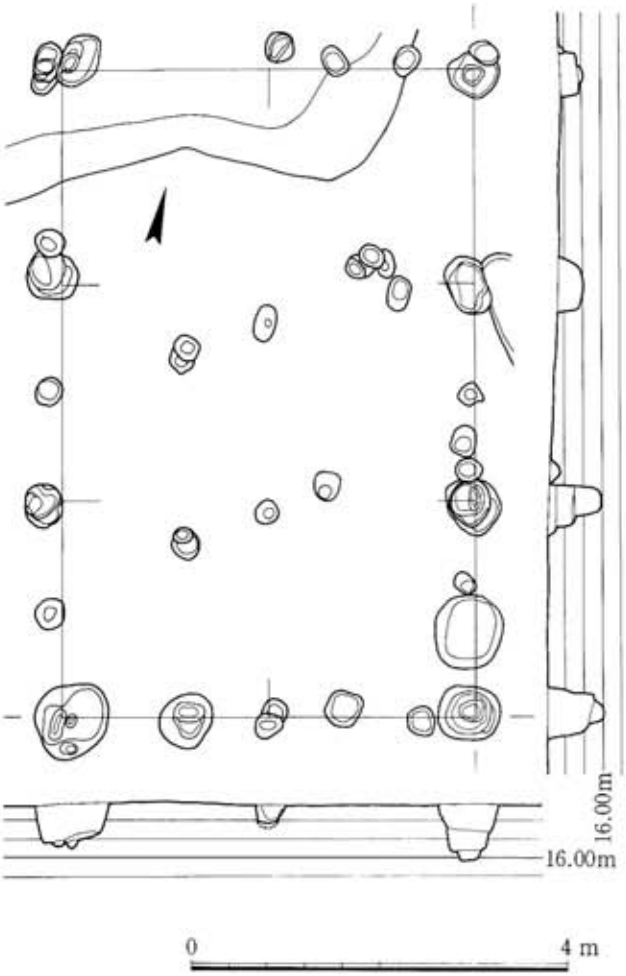


Fig. 139　ＳＢ772掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ772

構造　３間×２間（6.91×4.46m）南北棟

柱間　桁2.303m　梁2.23m

方位　N6°40'W

特徴　柱掘方形は不整方形を呈し、掘方深さは0.3～0.6mを測る。埋土は暗褐色～暗茶褐色土で、柱痕跡は直径15～20cmを測る。建物北半部がやや削平を受ける。柱穴の一部がＳＰ771に切られている。

ＳＢ773

構造　３間×２間（6.60×4.55m）東西棟

柱間　桁2.20m　梁2.28m

方位　N17°W

特徴　柱掘方形は不整方形を呈し、掘方の深さは約0.3mを測る。東隣してＳＢ774が存在する。埋土は黒色～暗褐色土である。

ＳＢ774

構造　３間×２間（6.45×4.80m）東西棟

柱間　桁2.15m　梁2.40m

方位　N17°W

特徴　柱掘方形は不整円形あるいは不整方形を呈し、掘方深さは約0.3～0.5mを測る。埋土は黒色土～暗褐色土で柱痕跡は直径10～15cmを測る。西隣してＳＢ773が存在する。

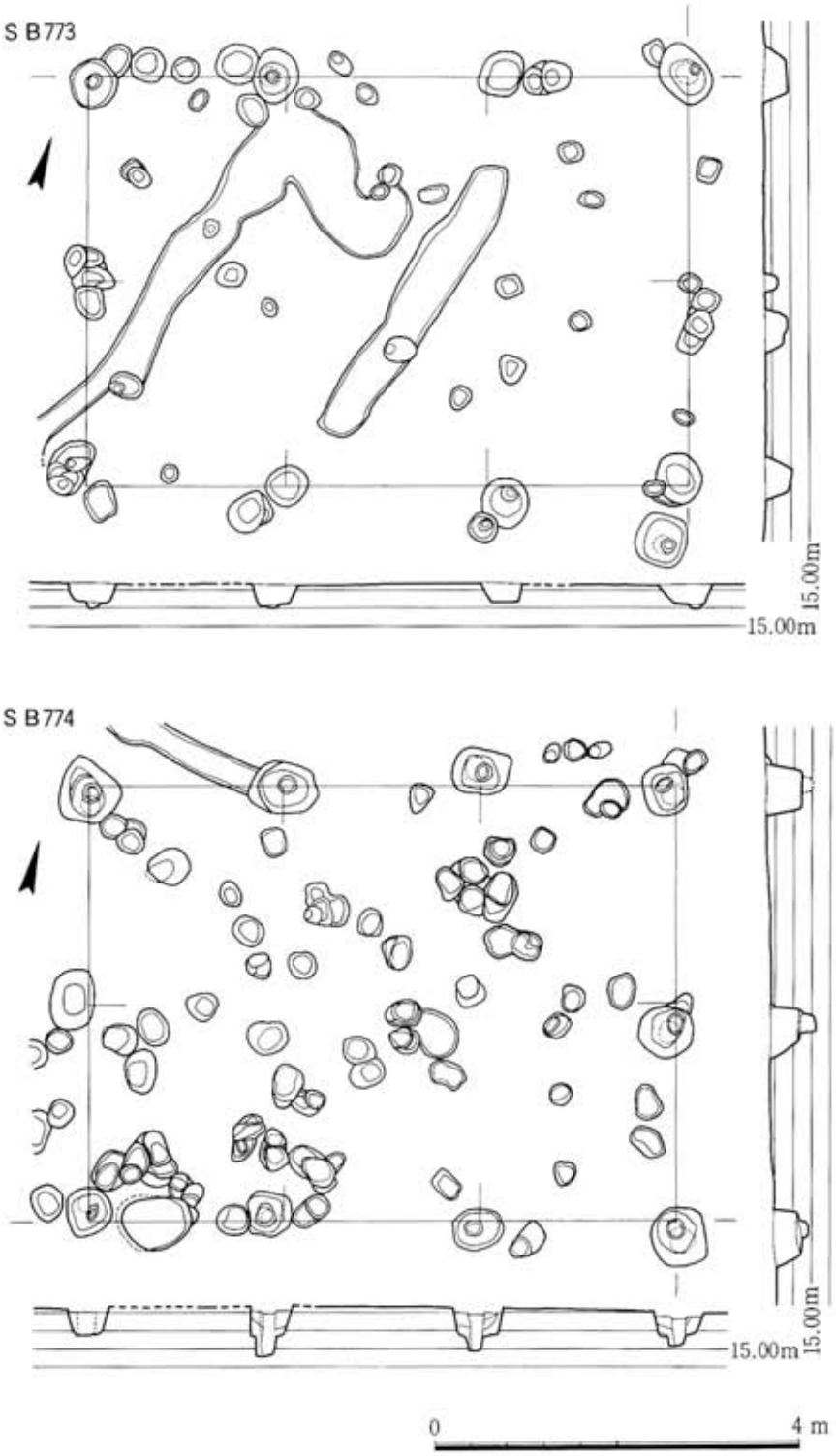


Fig. 140　SB773・SB774掘立柱建物跡（1/80）

(2) 井 戸 (Fig.141～143, ＰＬ111・112)

６基を検出した。いずれも円形素掘りで、規模はＳＥ719のみ径３ｍちかい大型、他は１ｍ～1.5ｍ程度である。分布は南辺部のほぼ１ケ所に集中しており、長期間にわたり井戸掘削のための土地利用がなされた地区であったことが知られる。

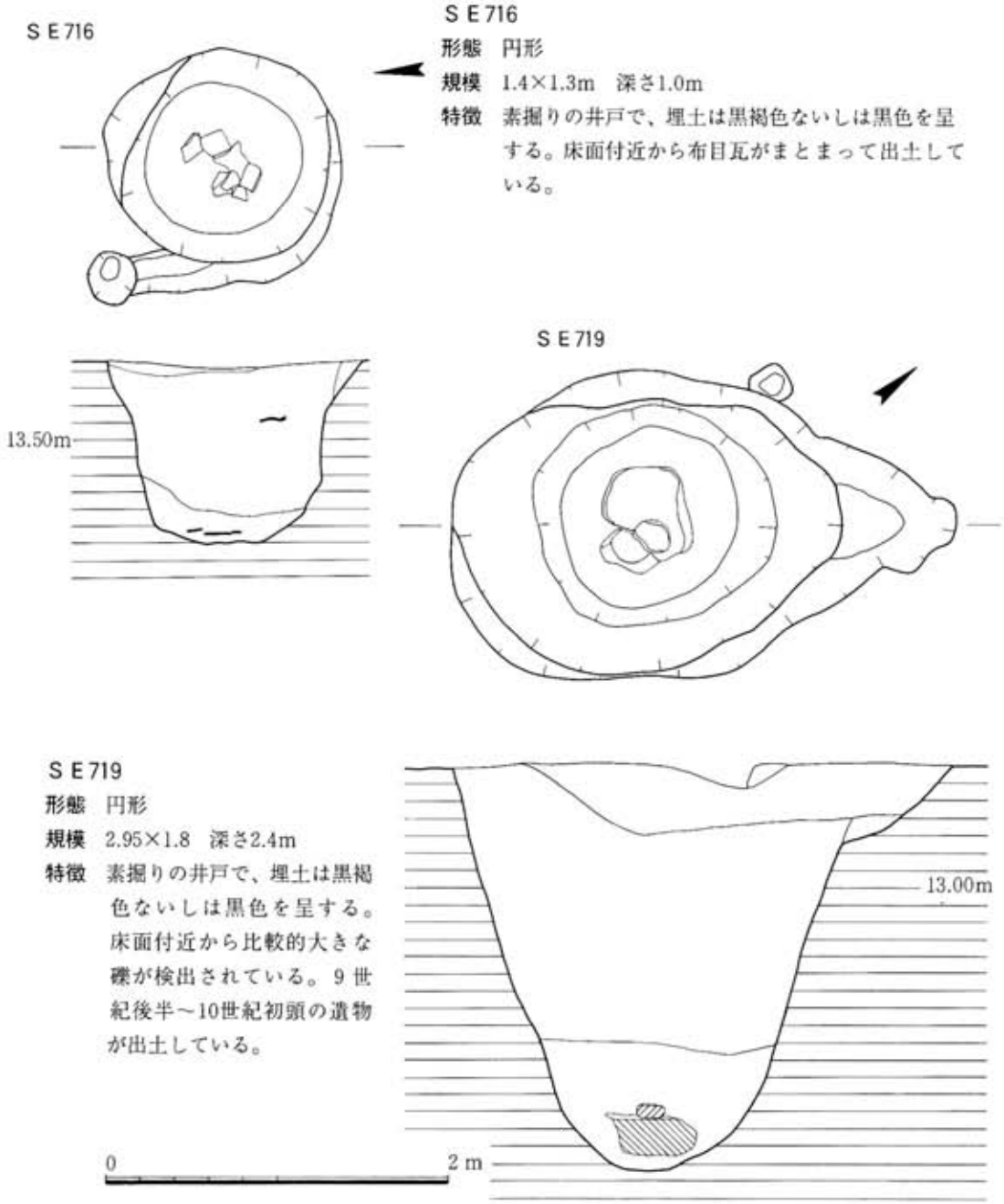
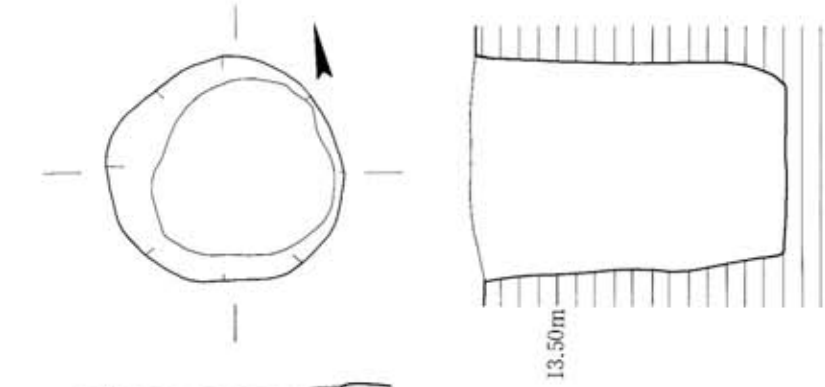
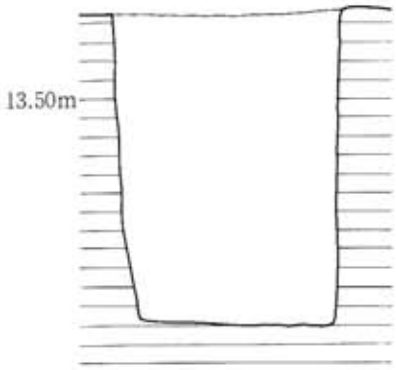


Fig. 141　ＳＥ716・ＳＥ719井戸 (1/80)



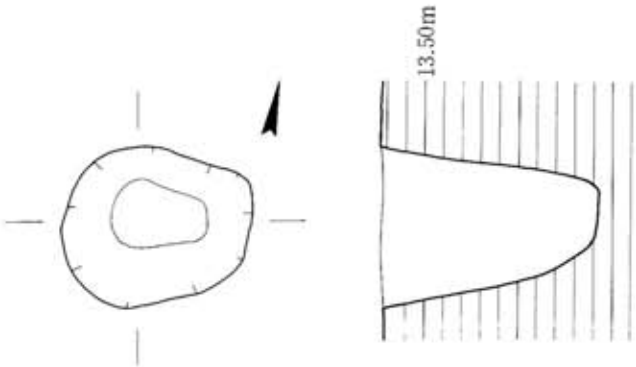


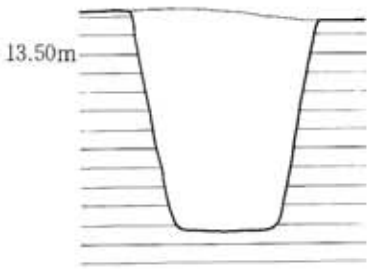
ＳＥ730

形態　円形

規模　1.2×1.3m　深さ1.65m

特徴　素掘りの井戸で、埋土は黒褐色ないしは黒色を呈する。床面はほぼ平坦になっている。





ＳＥ715

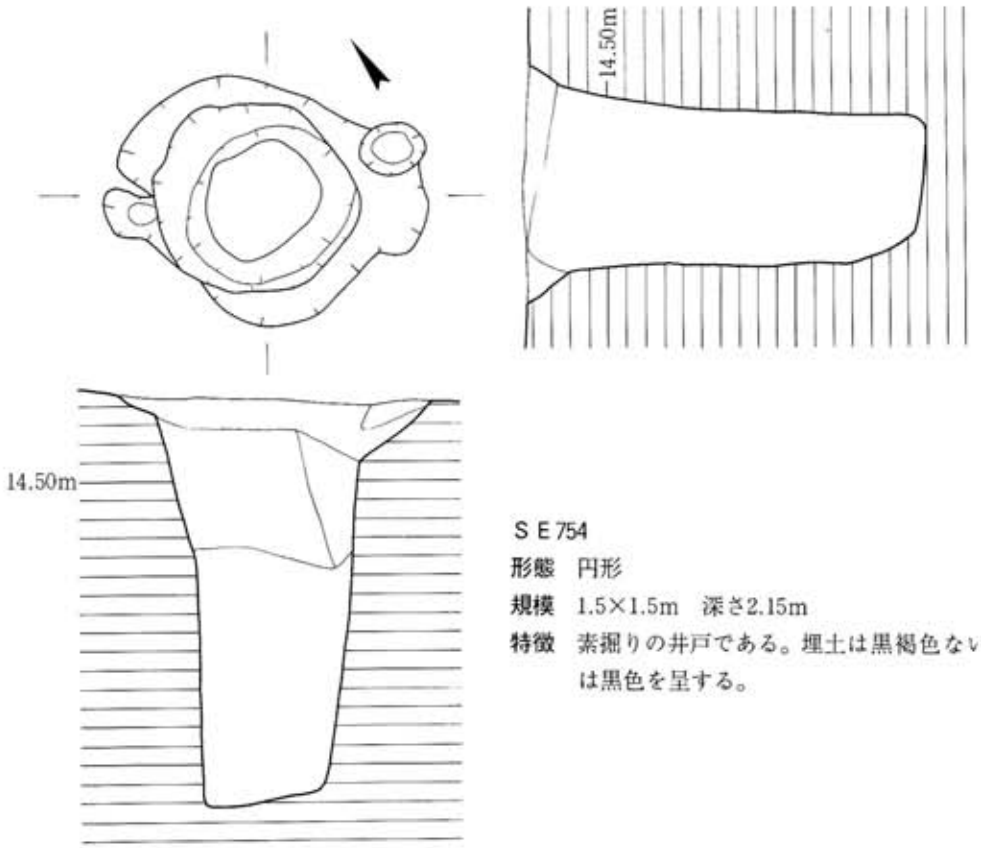
形態　円形

規模　1.0×0.85m　深さ1.15m

特徴　素掘りの井戸である。

0　2 m

Fig. 142　ＳＥ730・ＳＥ715井戸（1/40）

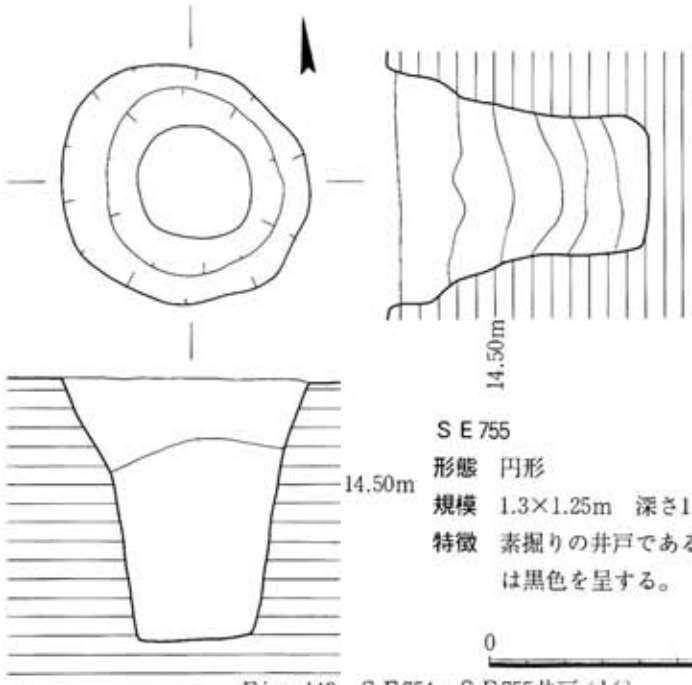


ＳＥ754

形態　円形

規模　1.5×1.5m　深さ2.15m

特徴　素掘りの井戸である。埋土は黒褐色ないしは黒色を呈する。



ＳＥ755

形態　円形

規模　1.3×1.25m　深さ1.4m

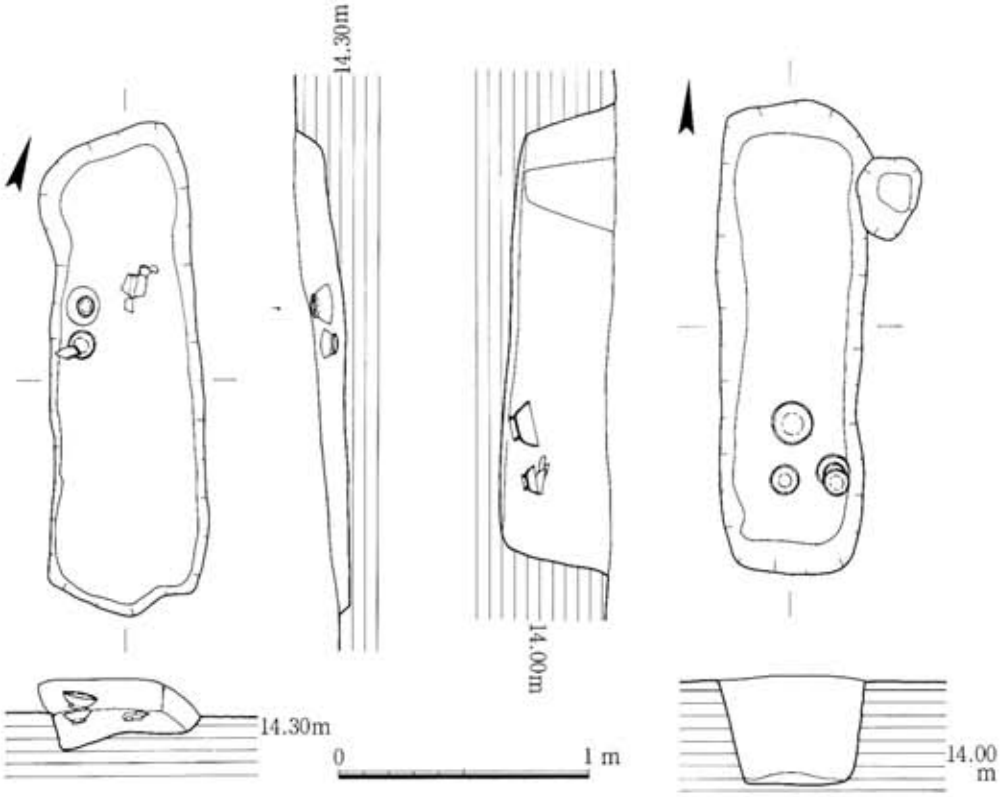
特徴　素掘りの井戸である。埋土は黒褐色ないしは黒色を呈する。

0　2 m

Fig. 143　ＳＥ754・ＳＥ755井戸（1/40）

(3)　土 壙 墓 (Fig.144～147, P L 113・114)

8基を検出した。分布は調査区の東辺部を除く全域にわたる。ただし分散的で明瞭な墓域は認めがたい。時期は9世紀末～10世紀にかけてで、掘立柱建物と重なるものがあり、この地区の建物跡等が廃絶したあとの造営であることがわかる。構造は細長い長方形を原則とするが、ＳＰ766のみ幅が広く大型である。小型のＳＰ771以外は成人墓であろう。木棺墓を含む可能性もあるが、明徴がないので土壙墓としておく。一般的に土師器を副葬ないしは供献しており、ＳＰ771からは素文鏡片が出土した。



ＳＰ731

形態　不整長方形

規模　1.95×0.6m　深さ0.15m

特徴　上面は削平を受けており、かなり浅くなっている。遺構底面は東半部はほぼ平坦であるが西半部は落ち込んでいる。埋土は黒褐色を呈する。遺構北西部から完形の土師器が2個体出土している。

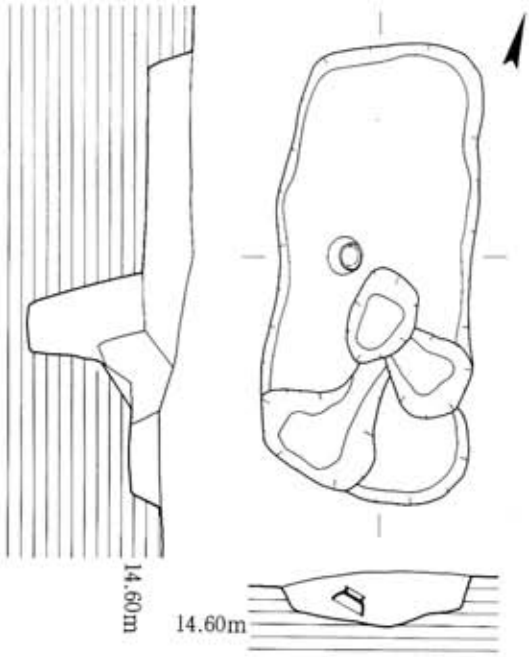
ＳＰ735

形態　不整長方形

規模　1.9×0.55m　深さ0.4m

特徴　残存状況は比較的良い。断面形は逆台形を呈する。遺構底面はほぼ平坦であるが、やや南へ落ちている。埋土は黒褐色である。遺構南部において完形の土師器がまとまって出土している。

Fig. 144　ＳＰ731・ＳＰ735土壙墓（1/20）

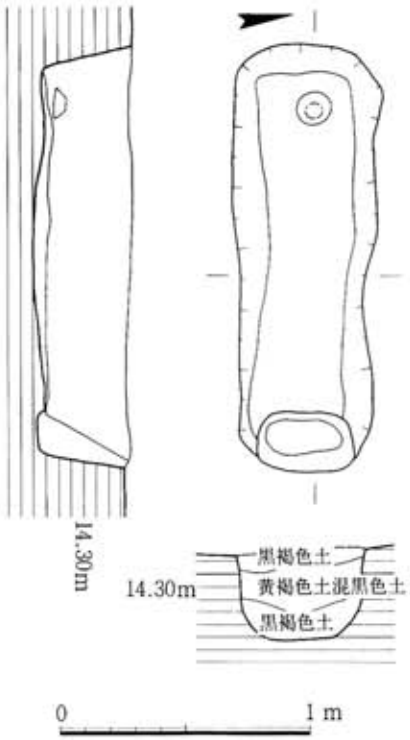


ＳＰ738

形態　不整長方形

規模　1.8×0.8m　深さ0.15m

特徴　上面は削平を受けており、かなり浅くなっている。遺構南半部は小穴と切り合っている。断面は逆台形を呈し、中央部がやや窪んでいる。埋土は黒褐色である。遺構中央から完形の土師器が１個体出土している。



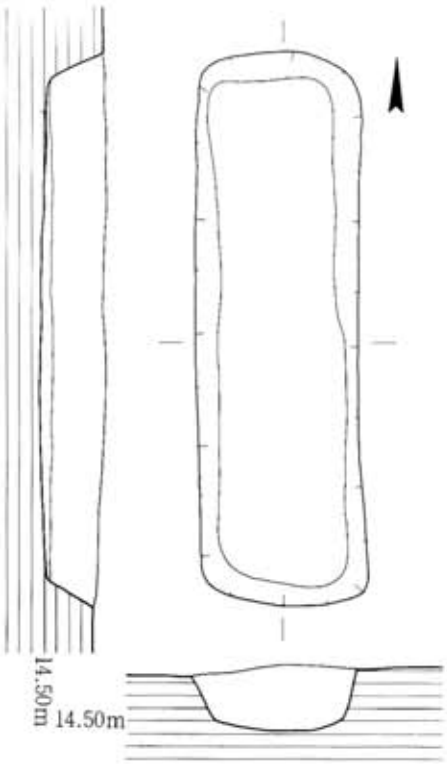
ＳＰ743

形態　不整長方形

規模　1.7×0.6m　深さ0.4m

特徴　残存状況は比較的良い。断面形はＵ字状を呈する。遺構底面はやや起伏があるもののほぼ平坦である。遺構東端部にある落ち込みが遺構に伴うものかどうかは不明である。埋土は３層に分層可能であり、黒褐色を基本とする。木棺の痕跡等は見られなかった。遺構西部から完形の土師器が出土している。

Fig. 145　ＳＰ738・ＳＰ743土壙墓（1/20）

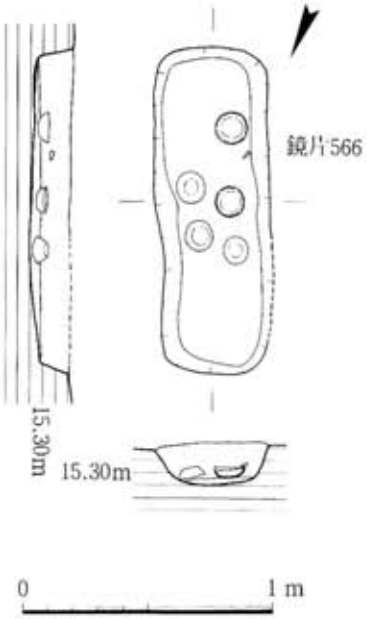


ＳＰ747

形態　隅丸長方形

規模　2.2×0.65m　深さ0.25m

特徴　上面は削平を受けており、やや浅くなっている。断面は扁平なＵ字状を呈する。遺構底面はほぼ平坦をなす。埋土は黒褐色である。完形の土器は出土していない。



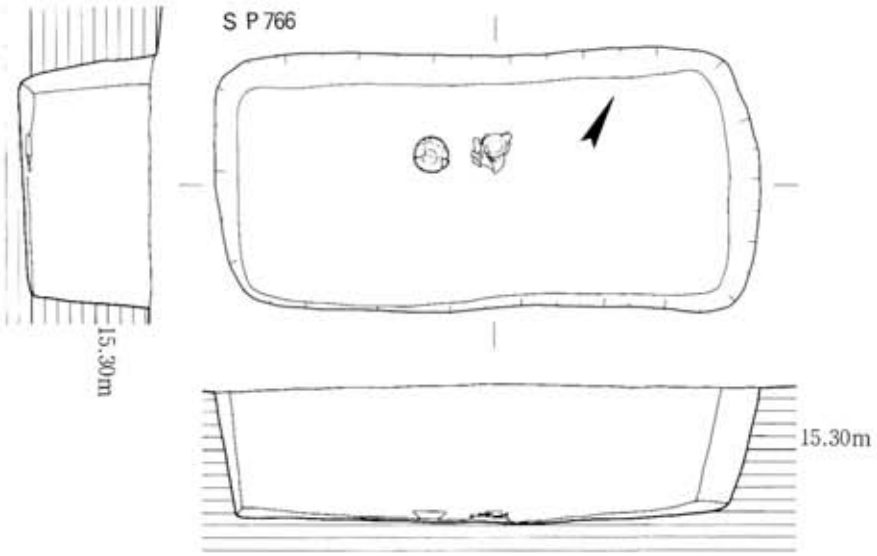
ＳＰ771

形態　隅丸長方形

規模　1.3×0.45m　深さ0.15m

特徴　上面が削平を受けておりかなり浅くなっている。断面扁平なＵ字状をなし、遺構中央部がやや窪んでいる。埋土は黒褐色である。出土遺物としては、遺構中央部で完形の土師器５個体が床面直上より出土しているほか、鏡片がやや浮いた状態で出土しており注目される。

Fig. 146　ＳＰ747・ＳＰ771 土壙墓（1/30）

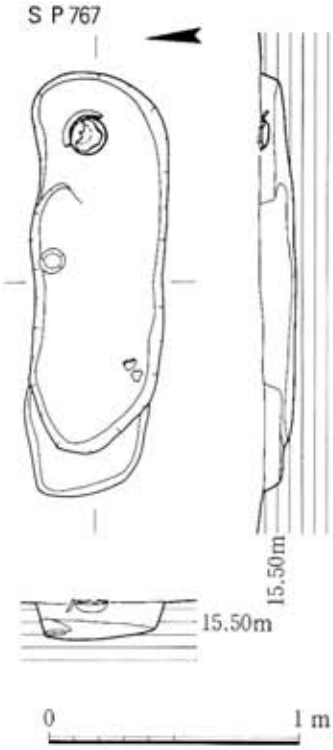


ＳＰ766

形態　隅丸長方形

規模　2.2×1.0m　深さ0.55m

特徴　検出した土壙墓のなかでは最も規模の大きいものである。断面形は逆台形であるが、遺構壁面はほぼ真っすぐに立ち上がる。遺構底面はほぼ平坦である。中央部で土師器が床面直上より出土している。



ＳＰ767

形態　不整長方形

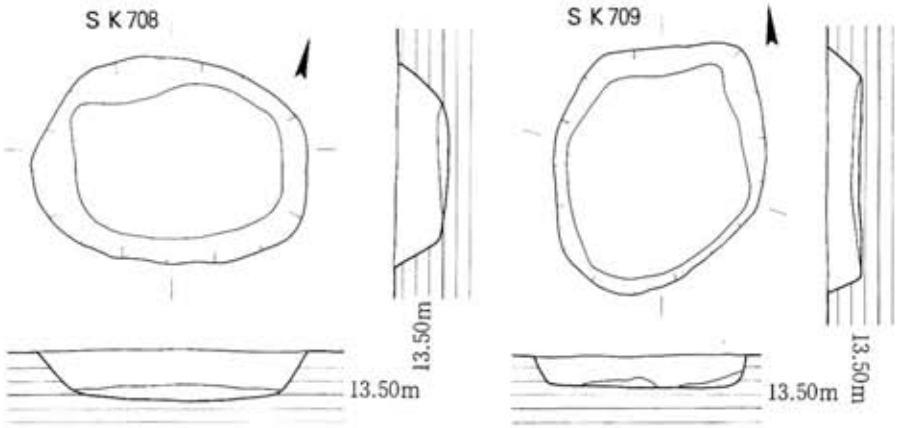
規模　1.65m×0.5m　深さ0.15m

特徴　削平を受けており、かなり浅くなっている。断面形は逆台形状をなし、遺構中央はやや窪んでいる。他の遺構と切り合いがあるようだが、その前後関係は不明であった。遺構西部で土師器が浮いた状態で出土している。

Fig. 147　ＳＰ766・ＳＰ767 土壙墓（1/20）

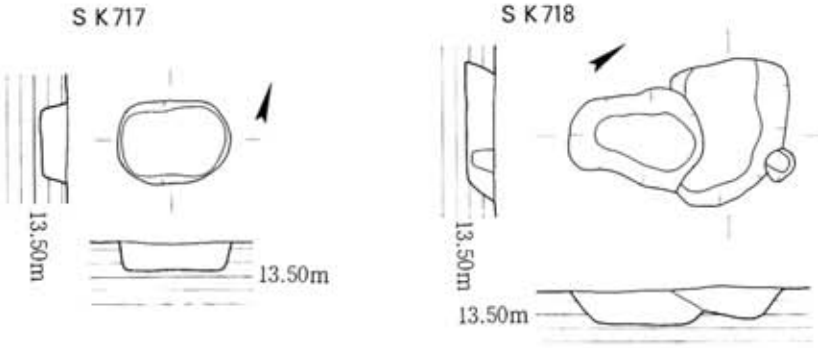
(4) 土 壙 (Fig.148～152)

大小合わせて　基を検出した。そのほかにも掘込みは多いが、「風倒木痕」など遺構と認めがたいものは除外した。また、溝と判別しにくいものも存在する。大部分はいわゆる廃棄壙で、須恵器・土師器の殆どはこれら土壙から出土したものである。



ＳＫ709　形態　楕円形　**規模**　2.0m×1.6m　深さ　0.38m　**特徴**　断面形は偏平な逆台形状を呈する。遺構底面はほぼ平坦をなす。8世紀前半の遺物が出土している。

ＳＫ708　形態　楕円形　**規模**　1.06m×1.5m　深さ0.24m　**特徴**　断面形は偏平なＵ字状を呈する。遺構底面はほぼ平坦をなす。埋土は黒褐色土である。8世紀前半の遺物が出土している。

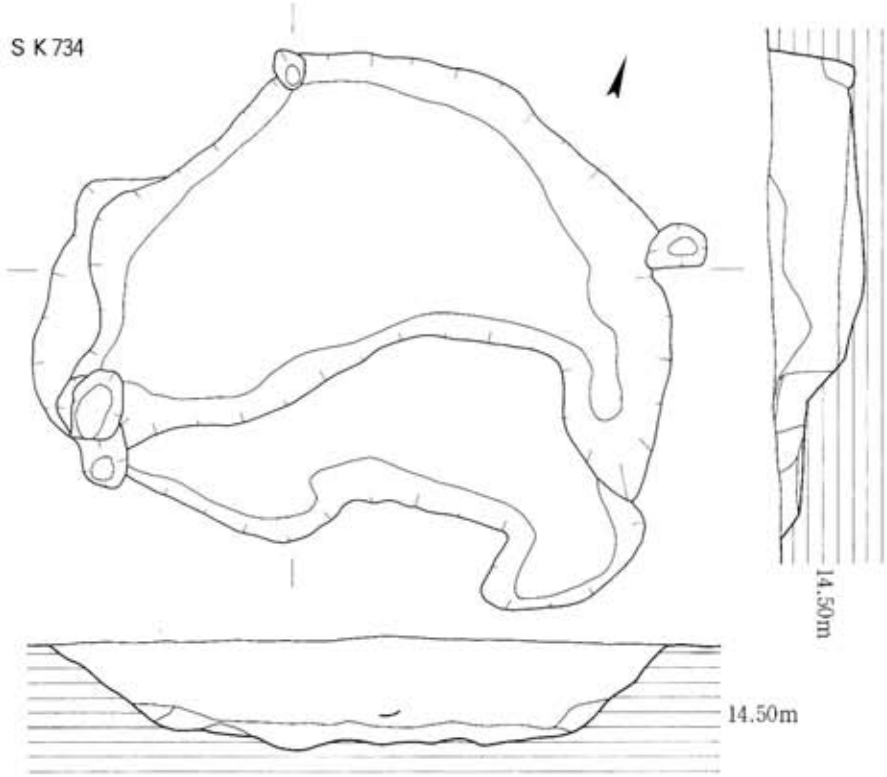


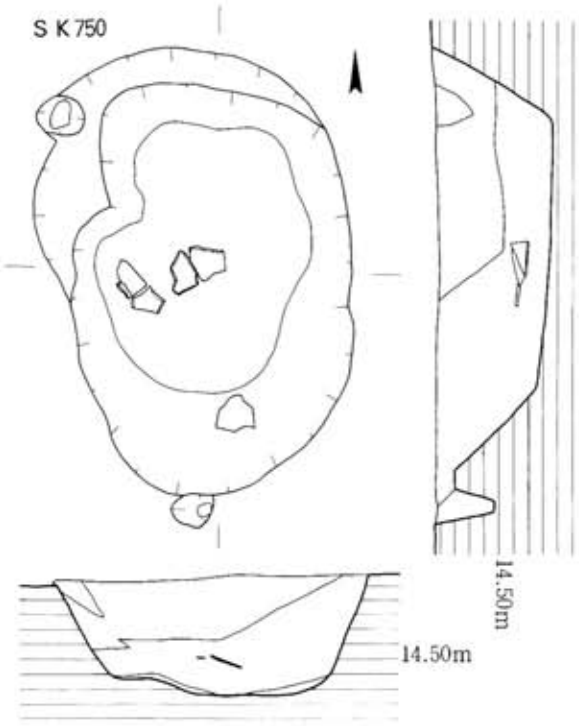
ＳＫ717　形態　楕円形　**規模**　0.85m×0.6m　深さ0.2m　**特徴**　断面形は偏平な逆台形状を呈する。遺構底面はほぼ平坦をなす。埋土は黒褐色土である。

ＳＫ718　形態　不整楕円形　**規模**　1.0m×0.75m　深さ0.24m　**特徴**　断面形は偏平な逆台形状を呈する。遺構底面はほぼ平坦をなす。埋土は黒褐色土である。遺構北部で他遺構と切り合うが、前後関係は不明。

0　　2 m

Fig. 148　ＳＫ708・ＳＫ709・ＳＫ717・ＳＫ718 土壙（1/60）





ＳＫ734

形態　不整楕円形

規模　4.25m×3.01m　深さ0.7m

特徴　断面形は偏平な逆台形状を呈し、遺構底面は起伏が激しい。遺構南部に平坦面をもち、二段掘りの様相を呈している。８世紀前半～中頃の遺物が出土している。

ＳＫ750

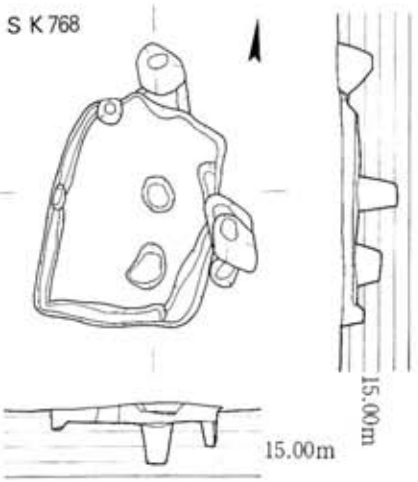
形態　楕円形

規模　3.0m×2.1m、深さ0.8m

特徴　断面形は逆台形状を呈する。遺構底面はやや起伏をもつ。埋土は黒色～黒褐色土である。

0　　2 m

Fig. 149　ＳＫ734・ＳＫ750 土壙（1/50）



ＳＫ768

形態　不整長方形

規模　1.6m×1.15m　深さ0.14m

特徴　削平のためか非常に浅い。壁面は真っすぐに立上がり、遺構北部以外は壁に沿って溝状の掘り込みをめぐらしている。

ＳＫ759

形態　不整長方形

規模　4.7m×3.6m　深さ0.4m

特徴　遺構北部と南部に平坦面をもち、二段掘りになっている。遺構底面はほぼ平坦である。8世紀前半～中頃の遺物が出土している。

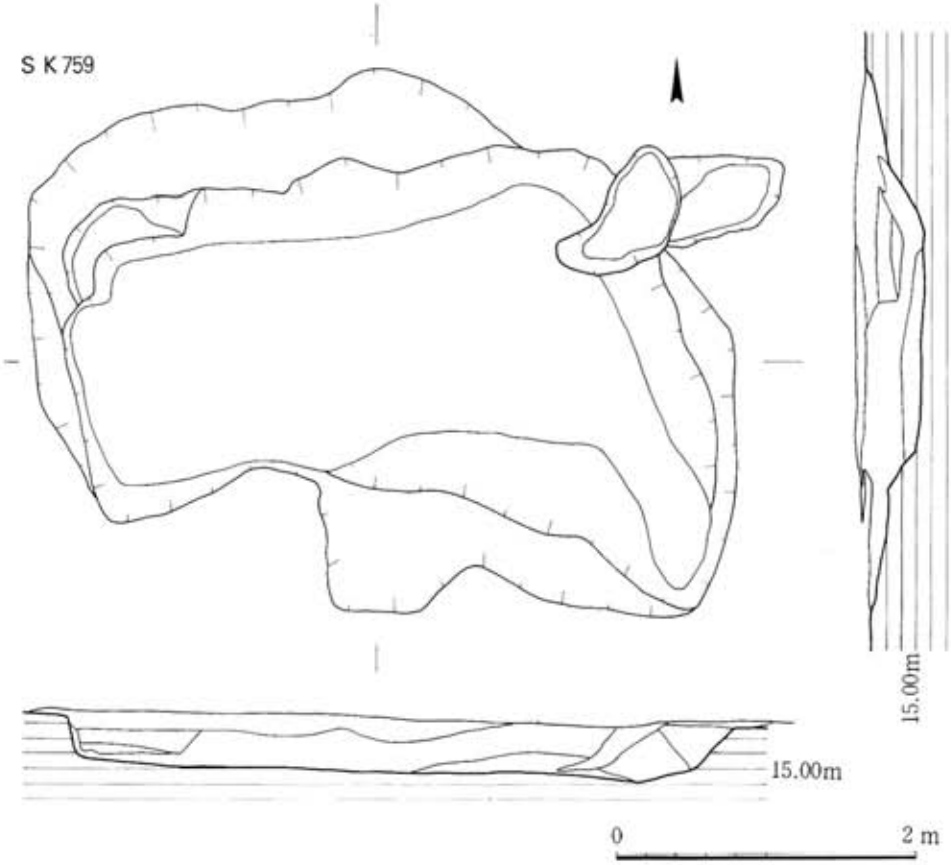
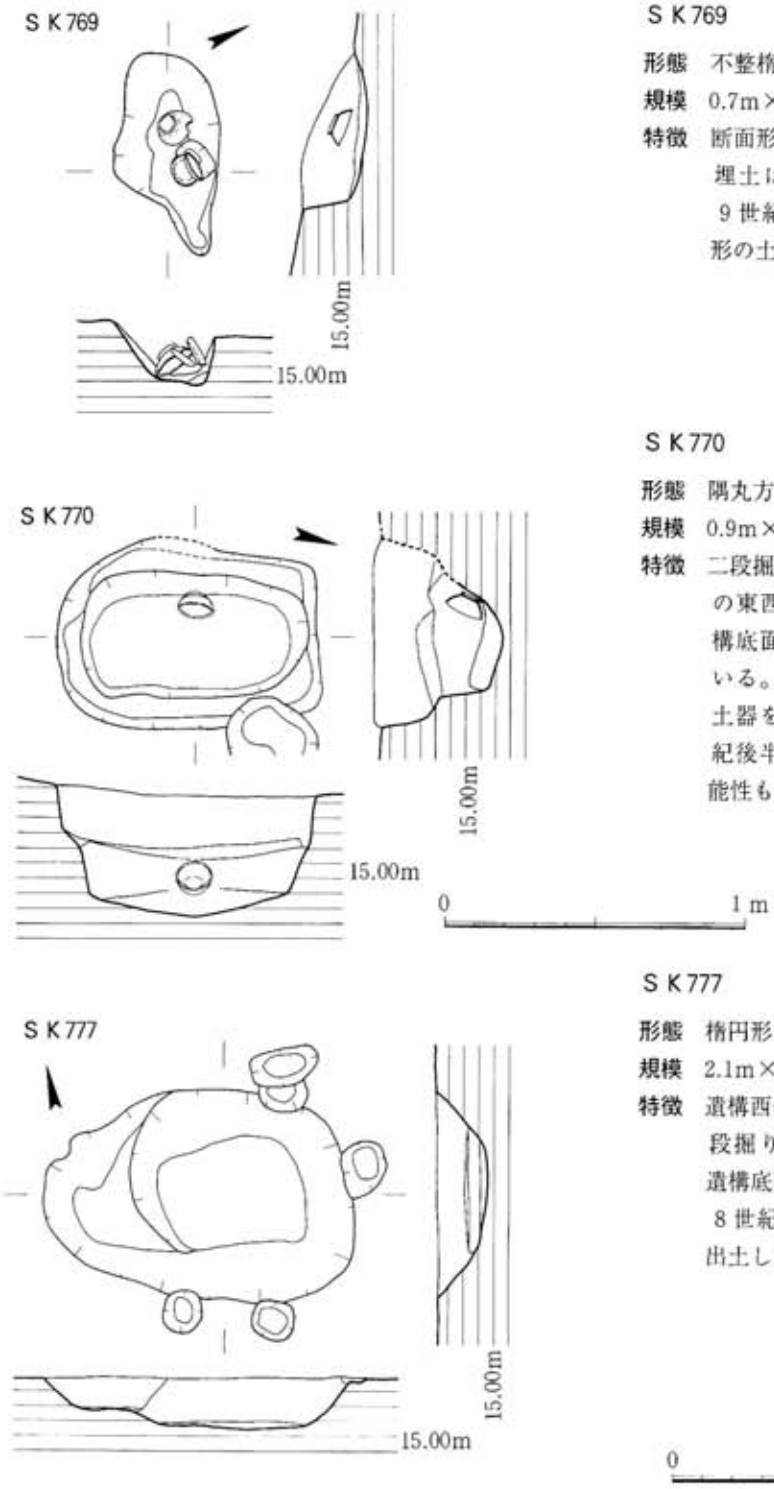


Fig. 150　ＳＫ768・ＳＫ759 土壙（1/50）



SK769

形態　不整楕円形

規模　0.7m×0.35m　深さ0.18m

特徴　断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗茶褐色土である。9世紀末～10世紀初頭の完形の土器を出土している。

SK770

形態　隅丸方形

規模　0.9m×0.6m　深さ0.4m

特徴　二段掘りになっており、遺構の東西に平坦面をもつ。遺構底面は中央がやや窪んでいる。遺構底面から完形の土器を出土している。8世紀後半か。土壙墓である可能性もある。

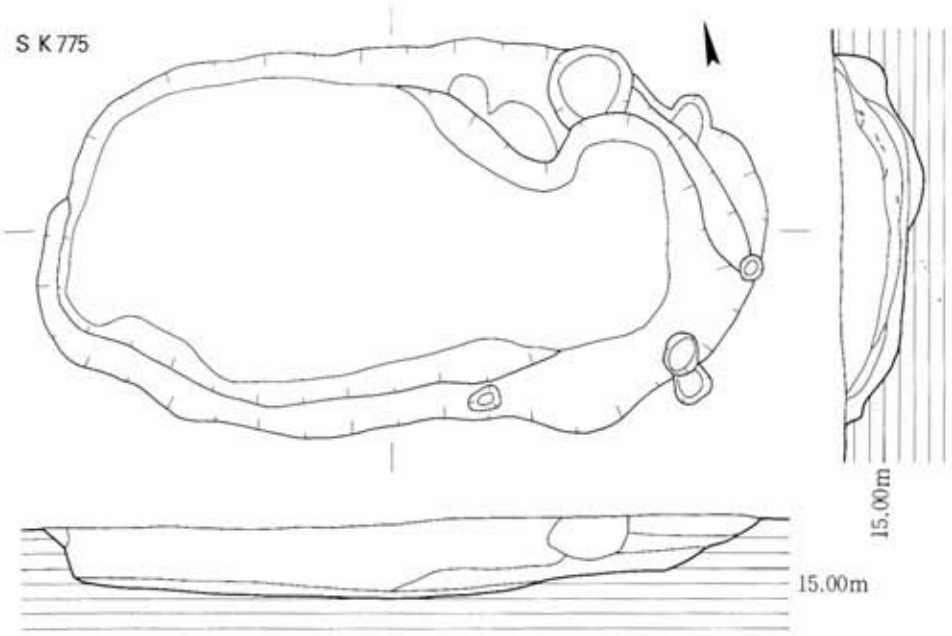
SK777

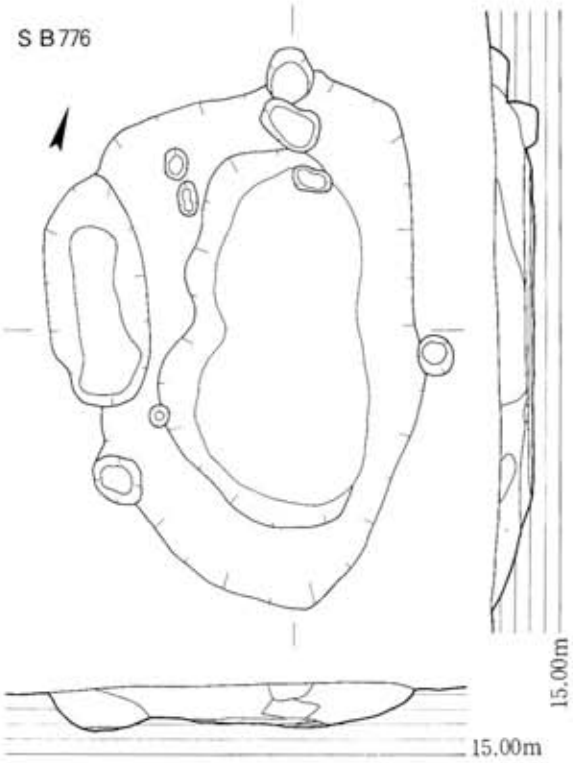
形態　楕円形

規模　2.1m×1.4m　深さ0.36m

特徴　遺構西部に平坦面をもち、二段掘り込みになっている。遺構底面はほぼ平坦をなす。8世紀前半～中頃の遺物が出土している。

Fig. 151　SK769・SK770・SK777土壙（1/25　1/1）





ＳＫ775

形態　楕円形

規模　4.8m×2.5m　深さ0.48m

特徴　断面形はレンズ状をなす。遺構底面は中央部がやや窪む。8世紀前半～中頃の良好な遺物が出土している。ＳＫ756の遺物と接合関係をもつ。

ＳＫ776

形態　楕円形

規模　3.6m×2.5m

特徴　比較的浅い遺構である。断面形はかなり偏平な逆台形状を呈する。遺構底面はほぼ平坦である。8世紀前半～中頃の遺物が出土している。

0　　2 m

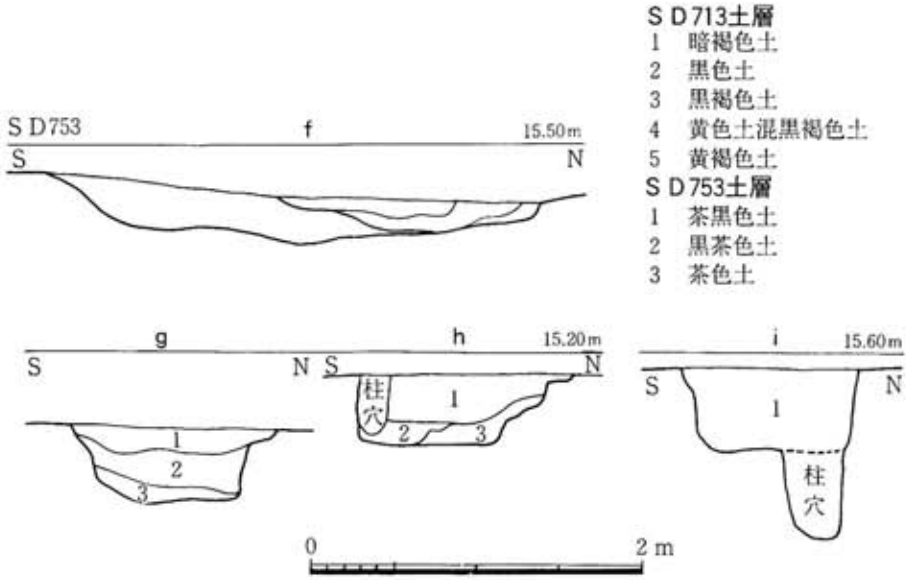
Fig. 152　ＳＫ775・ＳＫ776 土壙（1/50）

(5) 溝

全体の配置および建物群等との関係については遺跡の概要で触れたところであるが、ここでは若干繰り返しになることを承知で、とくに主要な溝に関して断面図を示しながら補足説明をしておく（Fig.153）。

まずＳＤ721は調査区中央を割って南から緩やかな弧を描きながら北へ向い、調査区北端で約110°の鈍角に折れて約7°南に傾く東西方向の直線溝となる。北端部の傾斜からいえばｂ群とした5°～10°前後西傾する建物群との関係がつよいとみられ、またその北端に約６ｍの間隔をおいて並走するＳＤ780とも密接な関係が推定される。時期は出土遺物から特定は困難であるが奈良時代のうちに収まるものである。溝の構造は基本的に底面が平坦で、両壁はやや急に掘り下げている。規模は検出面で幅約１ｍ、深さ約0.4ｍ。長さは北辺で20ｍ以上、南北辺は全体としては120ｍ長の弧状を呈するが、部分的にみればその北半は直線的で、南半も一旦直線気味に下ったのち、再度緩く屈曲する特徴をもっている。また溝の傾斜は溝底のレベルでみると北から南へ比較的ゆるやかに下り、埋土は黒色土あるいは黒褐色土が主体となって自然な堆積状況を示していた。切り合い関係では正東西溝ＳＤ753を切り、また西傾する掘立柱建物ＳＢ761をも切る。

ＳＤ713は調査区東部にあたる南北溝である。調査区内での検出長は60ｍにすぎないが、その延長は断続的ながらⅠ区・Ⅱ区でも認められ、これらを結んだ長さは南北一直線に200ｍ以上となる。並行してＳＤ712があり、おそらく両溝は幅約２ｍの道を挟んだ側溝にあたるものであろう。ＳＤ713の方位はN0°20'Wであるから、ほぼ真北といえるものであり、掘立柱建物群ではｃ群としたグループと密接な関係をもつと思われる。時期は特定困難であるが奈良時



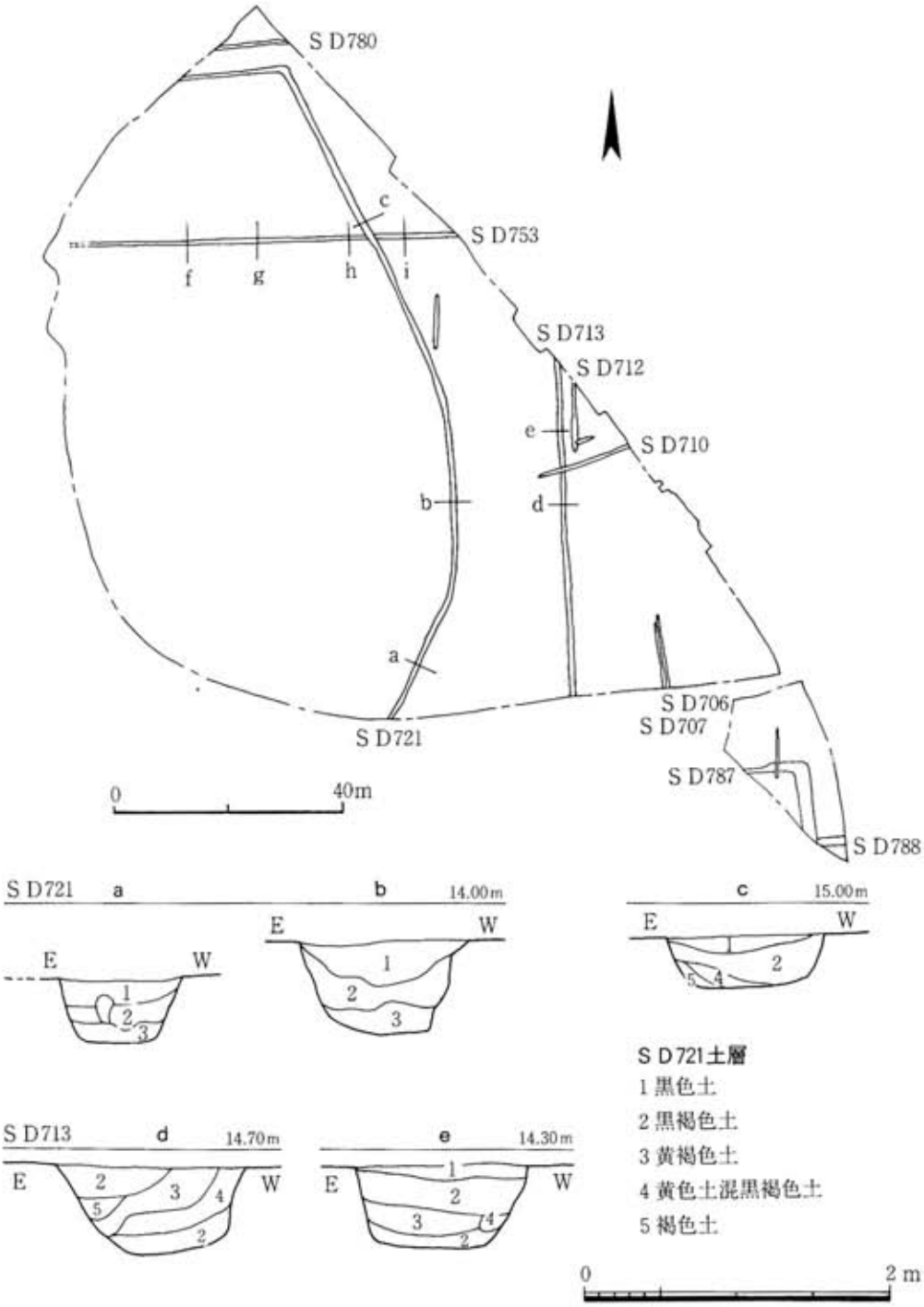


Fig. 153　Ⅲ区奈良・平安時代溝（1/600）（1/50）

代のうちにあることは確かで、他の正方位をとる遺構との関係からおそらく８世紀後半であろうと推定する。溝の構造は基本的に底面は平坦で、両壁ともやや急に掘り下げている。規模は検出面で幅約0.8m、深さ約0.4m。北から南に向かってやや急に下る。埋土は黒色土あるいは黒褐色土を主として自然な堆積状況を示し、とくに掘り直されたような形跡もない。なお、途中切り合いをなすＳＤ710との先後関係は、出土遺物からみてＳＤ713の方が古いと判断される。

ＳＤ753はＳＤ713と延長線上でほぼ正確に直行する東西溝で、同時期の区画溝とみて誤りないであろう。調査区内での検出長は約65m、Ⅱ区でその続きが認められないところをみると現在国道263号線下にあたり確めようもないが、ＳＤ713に突き当って終るようである。構造、埋土状況等はＳＤ713と同じ。規模は検出面で幅約0.8m、深さ約0.3m。溝の傾斜は溝底のレベルで比較すると西から東に向かって下がる。したがってＳＤ753がＳＤ713に突き当るとすれば、流水もＳＤ713に集まって南に流下することになる。また、このＳＤ753は調査区南端でわずかに検出したＳＤ782とほぼ１町すなわち108mの間隔をもっており、これらの溝が条里の坪境と関係が深い、いわゆる埋没条里にあたるものである可能性を示している。切り合い関係ではＳＤ753はＳＤ721に切られ、西傾する掘立柱建物群ＳＢ762・ＳＢ763を切り、さらに平安時代の土壙墓ＳＰ766に切られる、といった関係にある。

以上のように、溝はほぼ奈良時代のうちに限定され、国府全体の地割りと密接な関係をもっていたと考えられる。とくに建物群との関係では、調査区北側に多い西傾建物群のあとに調査区南側を中心に正方位建物群が造られる時期に、それらを囲うようにＳＤ713・ＳＤ753がおそらく条里に沿った区画溝として出現している点が注目される。いずれも小溝であることもあって、平安時代に土壙墓が造られる時期には多くは埋没してしまっていたと推定される。

２　中　世

(1)　溝

台地が下りかけて低地部にちかい調査区南端でＳＤ706・ＳＤ707・ＳＤ710・ＳＤ783など溝４条を検出した。このうちＳＤ783以外は小溝で残りが浅い。

ＳＤ783は調査区南端部で検出した。全体の形状は不明ながら一定範囲を方形に区画するその東北隅に当るらしく、検出部分はほぼ正確に直角に曲がる。これに囲まれる西南側は台地が一旦終って低地に下るとみられるので建物の存在は考えにくく、溝の性格が何を意図したものかについては全く不明である。構造は底面が平坦をなし、部分的に二段掘りになっている。規模は検出面で、東辺溝は幅約2.5mと広く、深さ約0.4m、北辺溝は削平で浅くなり幅は不確かであるが、元々2.5m程度であろう。時期は出土遺物からみて室町期、16世紀中頃～後半か。

Ⅲ 遺 物

主に奈良・平安時代の遺物、とくに須恵器・土師器で占められる。そのほか旧石器・縄文時代ではⅠ区～Ⅲ区で石器が若干採集されている。また弥生時代および中世の土器等がⅢ区で出土しているが量は少ない。以下、便宜上Ⅰ区・Ⅱ区とⅢ区とを分けて説明する。

〈Ⅰ区・Ⅱ区の遺物〉

旧石器・縄文時代ではサヌカイトおよび黒曜石の剥片が若干ある。石鏃はここでは図示しないが縄文～弥生時代にかかる黒曜石製で凹基式のもの７点がある。これら石器類はいずれも遺構検出面での採集品であって遺構は不明である。またⅠ区・Ⅱ区では縄文・弥生時代の土器は出土せず、南側の惣座Ｂ遺跡に隣接し同じ様な立地条件であるにもかかわらず、古墳時代以前は殆ど居住地区としての利用ははかられていなかったらしい。

奈良・平安時代では須恵器・土師器が多く、とくにⅠ区北辺のＳＫ316～ＳＫ319土壙とⅡ区の土壙墓から比較的まとまって出土した。そのほかＳＫ316ほかから土錘、鉄鋌（ＳＫ316）が出土、またⅠ区・Ⅱ区の検出面で布目瓦片を数点採集したが、細片少量であって建物を瓦葺きと推定させるほどのものではない。特殊な遺物としてＳＰ353土壙墓出土の素文鏡片および鉄製紡錘車がある。須恵器・土師器については土壙等からまとまって出土したものは一括して図示し、資料個々の説明はTab, 8一覧表による。実年代の比定は下記文献等、主に大宰府跡周辺で用いられている編年を参考にした。

参考文献・横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」（『九州歴史資料館研究論集２』）
・九州歴史資料館『太宰府史跡』各年度概報
・前川威洋ほか『福岡南バイパス埋蔵文化財調査報告書第６集』福岡県教育委員会1977
・七田忠昭ほか『肥前国府跡Ⅲ』佐賀県教育委員会1985
・川述昭人・森田勉ほか『牛頭窯群Ⅱ』福岡県教育委員会1989

1 奈良・平安時代

(1) 須恵器・土師器

ＳＫ318・ＳＫ319（Fig.154・155, ＰＬ96・97） 須恵器は坏蓋１～５、坏身６～12、皿10～15、小鉢16、大鉢９・20、壺17・18がある。坏類をみると蓋は天井が低く口縁端部を断面三角形に仕上げるものが多く、身は高台がやや底部の内に入りながらも底部と体部の境に稜がつく傾向をみせている。坏蓋１や蓋17など８世紀後半に下るかとみられるものを一部含むが、８

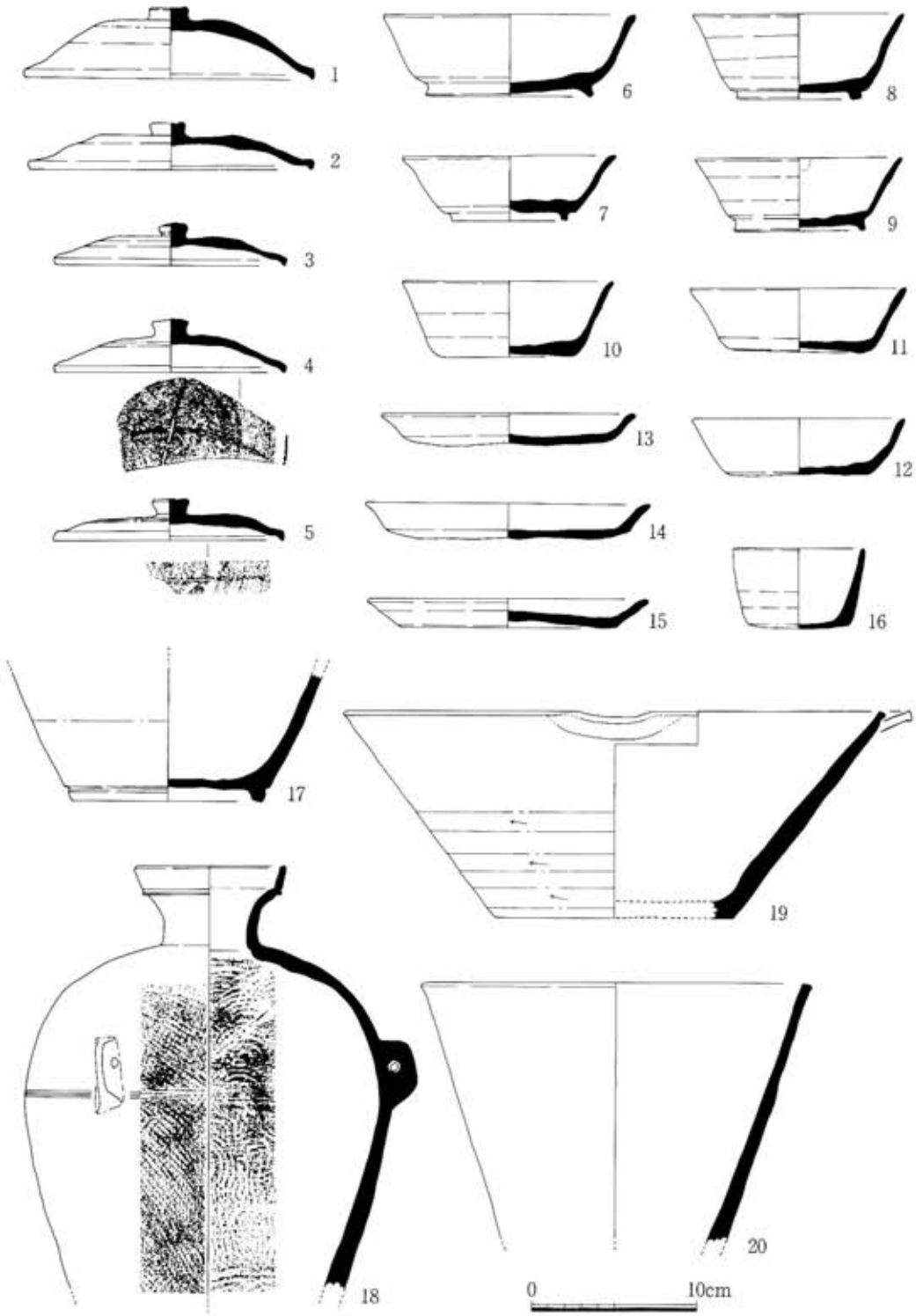


Fig. 154　ＳＫ318・ＳＫ319　出土土器１　須恵器(1/4)

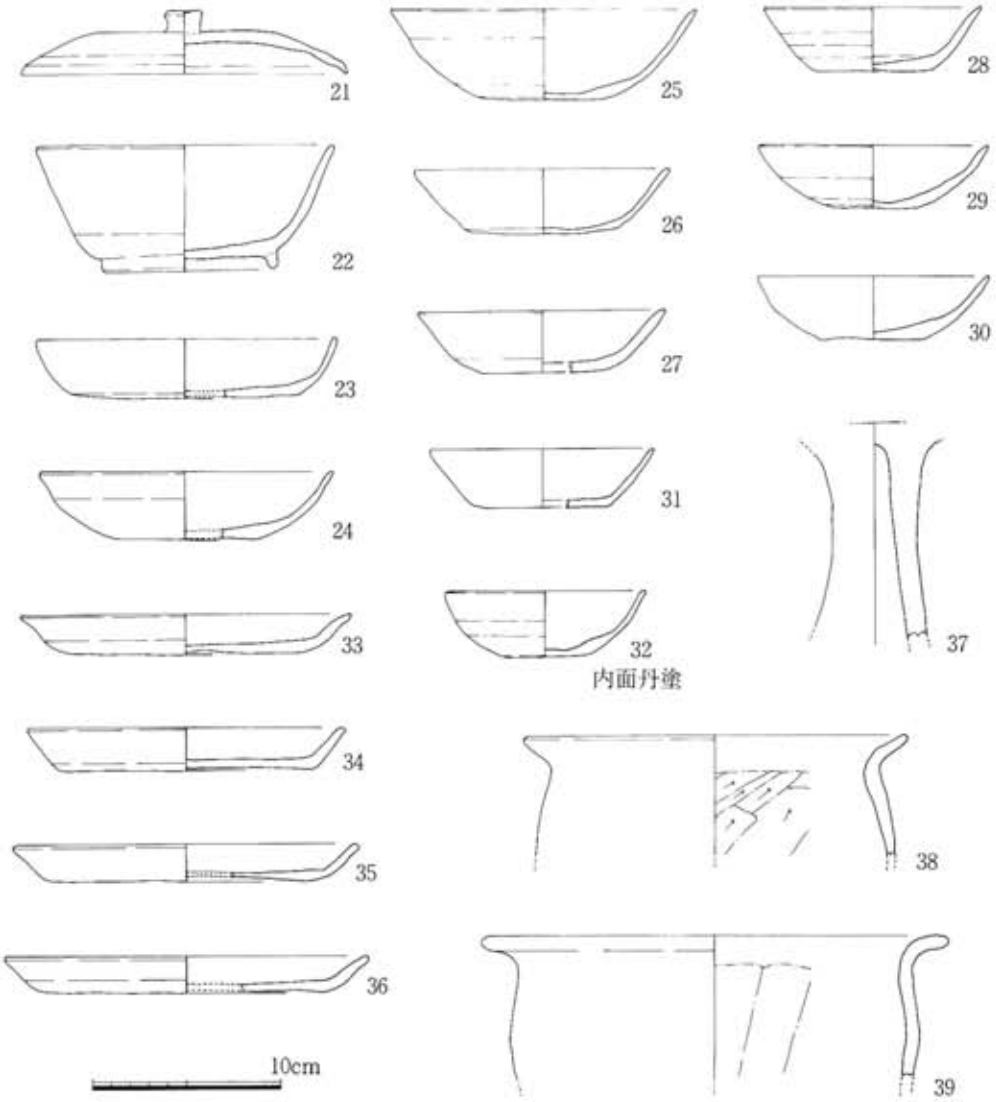


Fig. 155　ＳＫ318・ＳＫ319　出土土器２　土師器（¼）

世紀中頃に主体をおく。軟質で変形した焼成に難のあるものが多い。土師器は殆ど坏類で占められ、須恵器を倣ねた坏蓋21・坏身22のほか、坏23～32、皿33～36、高坏37、甕38・39がある。坏は体部が比較的浅く内湾気味に立ち上がるものを多く含み、31のみ内面に丹が塗られている。底部外面はヘラ切り離しのあと比較的ていねいにナデて仕上げられている。全体として８世紀後半に主体をおくとみられる。ＳＫ318とＳＫ319はほぼ同時期としてよい土壙であり、これらの一群の様相は８世紀後半頃になると土師器の使用量が須恵器にとって替りつつあったことを示すものといえよう。

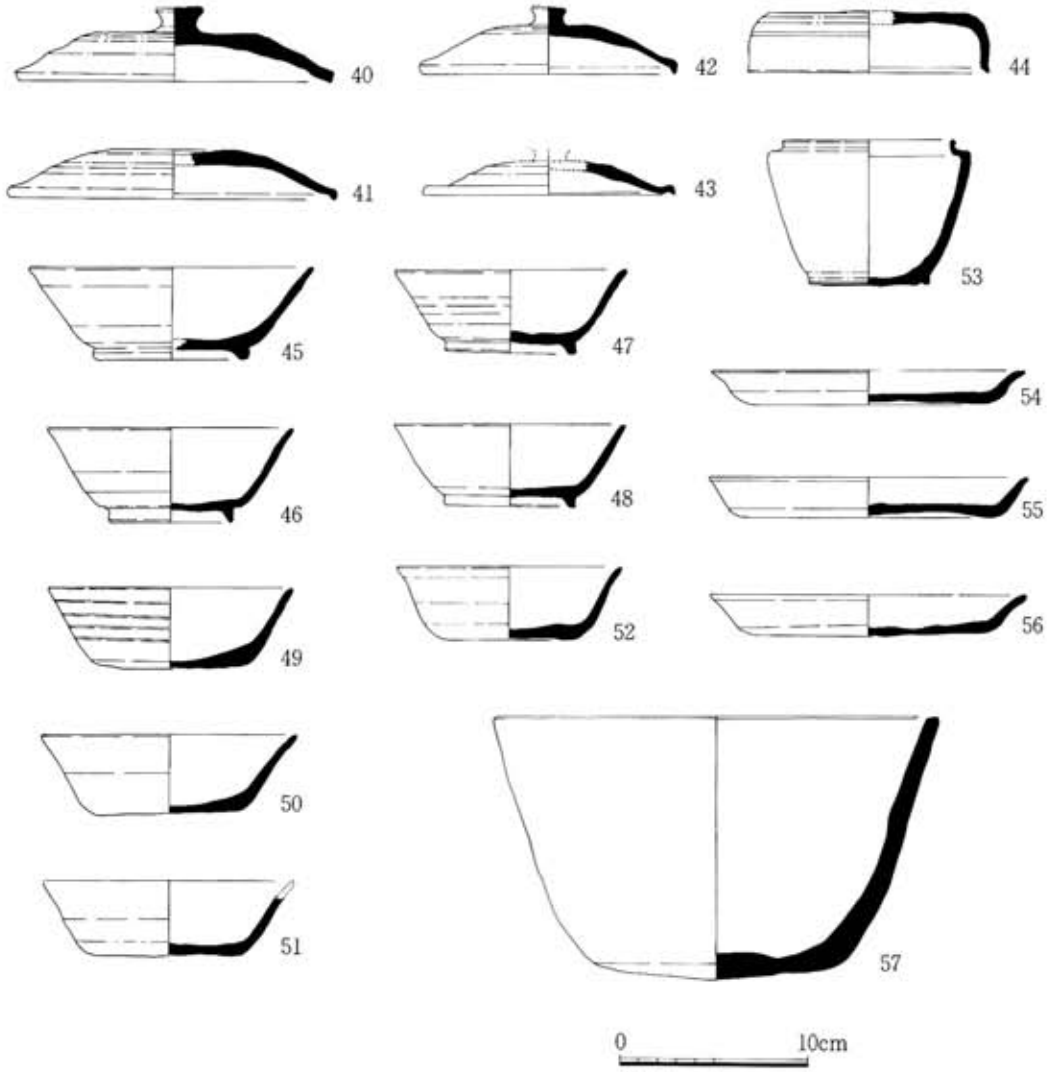


Fig. 156　ＳＫ316・ＳＫ317土壙出土土器１　須恵器(1/4)

ＳＫ316・ＳＫ317（Fig.156・157, ＰＬ98・99）　須恵器・土師器とも坏類が多い。須恵器では坏蓋40～42、杯身45～52、皿54～56、壺蓋44、小壺53、鉢57があり、大部分は土師器質にちかく軟質である。底部外面はヘラ切離し後比較的ていねいにナデ仕上げている。坏蓋42・43や壺蓋44など８世紀前半に位置づけられるかとみられるものも含むが主体は８世紀中頃におく。土師器では坏58～70、壺71、甕72～74がある。坏には体部が内湾気味に立ち上がるものと直線的にやや浅く立ち上がるものとがあり、先のＳＫ318・ＳＫ319とは逆に後者が主体を占めるようである。土壙の時期としてはＳＫ318・ＳＫ319と同じく８世紀後半に置かれ土師器が須恵器

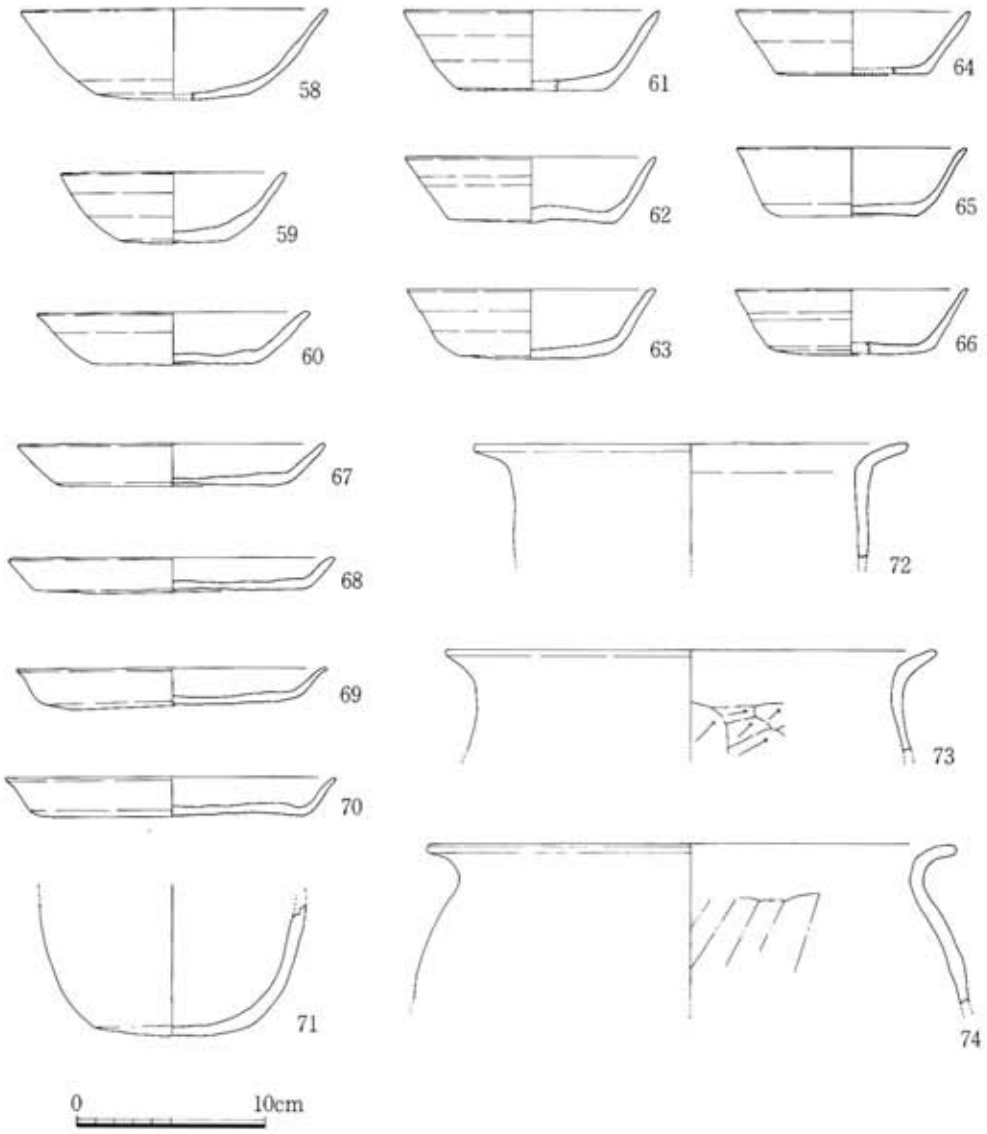


Fig. 157 ＳＫ316・ＳＫ317 土壙出土土器２ 土師器（¼）

と量的にしのぎつつあるが、遺物の組成としてはＳＫ318・ＳＫ319よりも若干古い要素を含むものといえよう。

土壙墓（Fig.158、ＰＬ100） 75～78はＳＰ350土壙墓副葬の須恵器坏。出土状況は離れていたが、法量からみて75と76、77と78がそれぞれ蓋・身のセットである。天井部および底部は殆どヘラ切離しのまま雑なつくりで、身は口縁部に短かい立ち上がりをもつ。いずれも軟質であり、時期は坏が最も小型化する７世紀前半で唯一奈良時代を遡るが、便宜上ここで示しておく。79はＳＰ352土壙墓副葬の土師器坏。次のＳＰ353と近接した時期の土壙墓とみられ11世紀

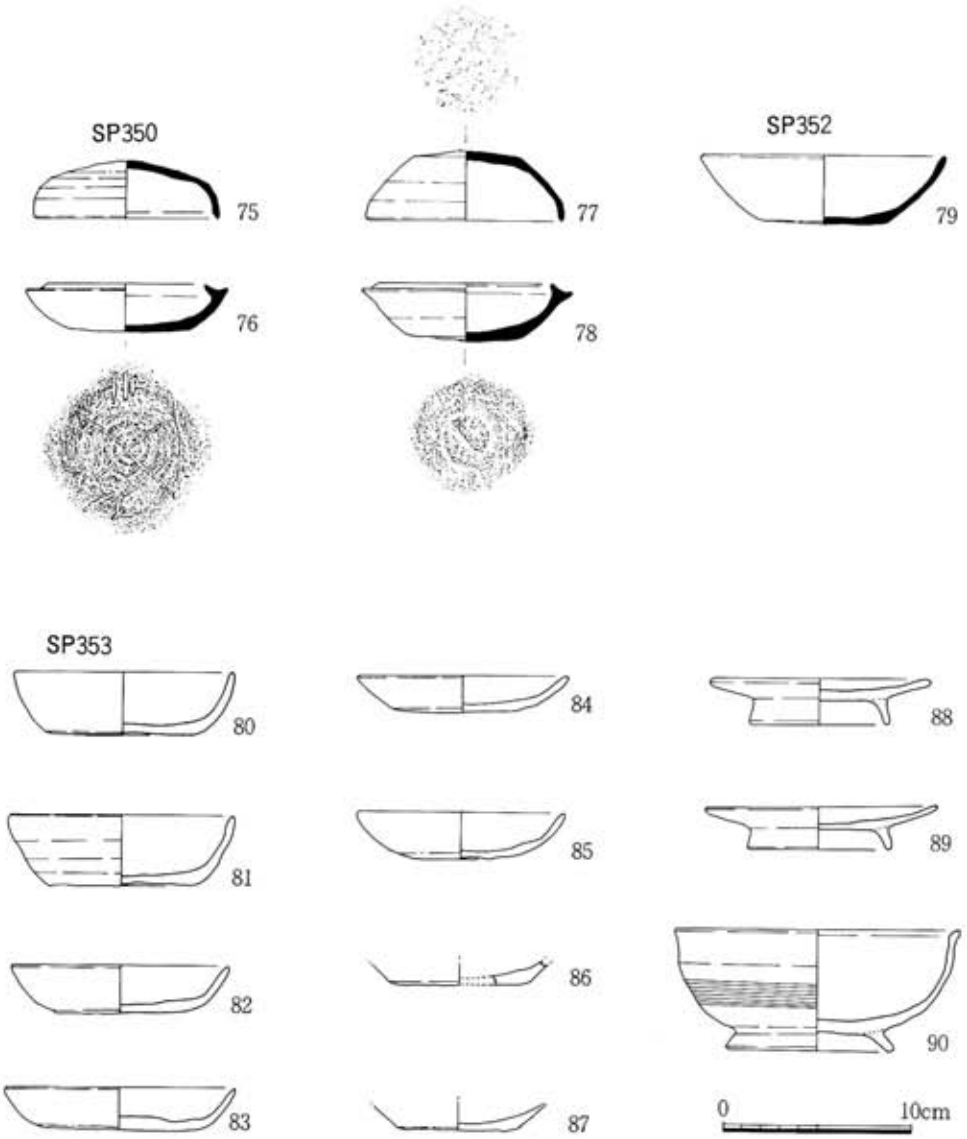


Fig. 158　土壙墓出土　須恵器・土師器 (1/4)

前半に下ると推定する。80～90はＳＰ353土壙墓出土の土師器で、坏はやや染めの80・81の２点、浅い82～85の４点、その他２点、皿は高台付の88・89が２点、90は高台付黒色埦である。全部で11点あり、82・84・85・87～89はやや浮いた状態で、他は壙底から副葬品といえる状態で出土した。埦90などの特徴から10世紀中頃～後半に位置づけられる一群である。

その他（Fig.159・160、ＰＬ101・90～100はＳＫ303土壙・ＳＥ302井戸出土の８世紀「大」があり同じく「大」の字の資料は国庁域からも出土している。101～104はＳＤ323溝出土の土

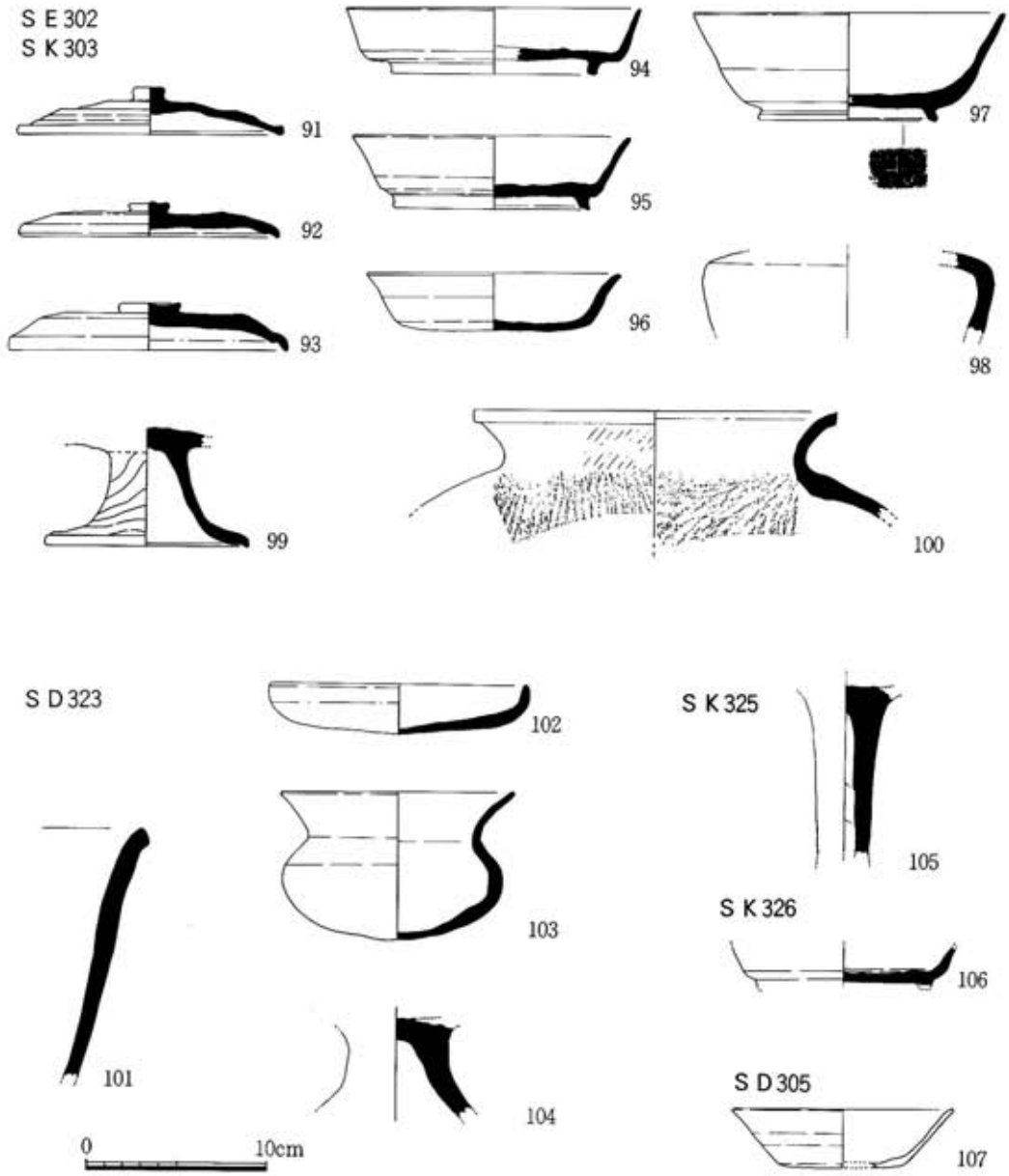


Fig. 159 溝・土壙出土 須恵器および土師器 1 (1/4)

師器で甑・坏・小壺・高坏がみられ、8世紀中頃かと推定する。105・106はⅠ区西端のＳＫ325およびＳＫ326土壙出土の土師器高坏と須恵器坏で8世紀後半に位置する。107はＳＤ305出土の土師器坏で8世紀末～9世紀中頃か。108～110はⅠ区ＳＥ302井戸に伴うＳＤ306～ＳＤ308溝から出土した土師器坏で8世紀中頃～後半にかかるものと推定する。また111須恵器坏蓋はⅠ区ＳＤ307から続くⅡ区のＳＤ330から出土しており、口縁端が短かく折れる特徴に古い要素をもつが天井部が低く8世紀中頃に位置づけられよう。112の土師器瓮はⅡ区ＳＢ335建物を切

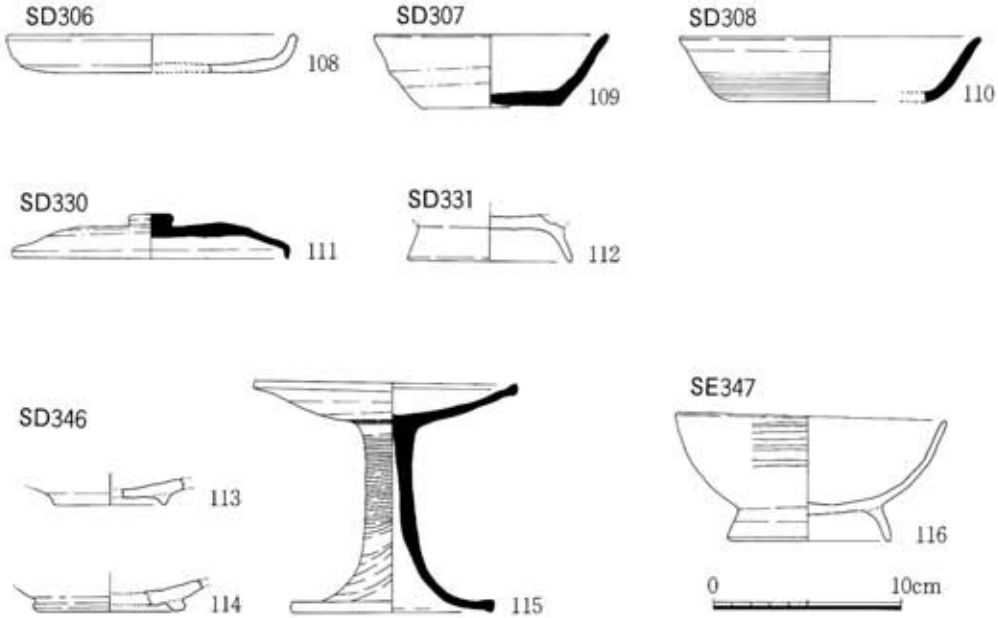


Fig. 160　溝　土壙出土　須恵器および土師器２(¼)

るＳＤ331溝からの出土で10世紀前半。Ｉ区ＳＢ344ほか建物前面のＳＤ346溝からは113・114の土師器皿あるいは坏および115須恵器高坏が出土している。113は高台の短かい初期の高台付皿とすれば９世紀末～10世紀初に位置づけられようか。115は坏部・脚部とも端部の段は消失しており、やや軟質である。これら３点はＳＢ344ほか建物の廃絶時期にちかいものであろう。116黒色瑒はＳＢ343建物の南側に接するＳＥ347井戸からの出土で、丸い坏に内湾気味の高台が付き、10世紀前半までにＳＢ344ほかが既に廃絶していたことを示す。

Tab. 8　　Ｉ・Ⅱ区須恵器・土師器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
154 －１ 8402416	ＳＫ319	須恵器 坏蓋	口径　17.4 器高　4.3	大型の坏蓋。天井部は丸味をもち高く、太いつまみが付く。口縁端部はナデて内側に稜をもつ。	天井部ヘラケズリ。白褐色で軟質。全体に焼成歪みあり。
－２ 8402107	〃	〃	口径　16.1 器高　2.8	大型の坏蓋。天井部は低くつまみをもつ。口縁端部はナデて断面三角形の稜をつくる。	天井部ヘラケズリ。白褐色で軟質。
－３ 8401400	〃	〃	口径　13.8 器高　2.6	天井部はひくく小さなつまみをもつ。口縁端部はナデて断面三角形の稜をつくる。	天井部ヘラケズリ。明灰色。
－４ 8402114	〃	〃	口径　13.8 器高　3.2	天井部はやや高く、つまみが付く。口縁端部はナデて内側に稜をもつ。内面にヘラ記号あり。	天井部ヘラケズリ。明灰色で砂粒やや多く含む。
－５ 840213	〃	〃	口径　13.8 器高　2.5	天井部は低く、つまみが付く。口縁端部はナデて断面三角形の稜をつくる。内面にヘラ記号あり。	天井部ヘラケズリ。明灰色。
－６ 8402413	〃	須恵器 坏	口径　15.0 器高　5.0	高台はやや外に張り、体部はゆるやかに立ち上がって直線的に伸び深い。	底外面ヘラ切離し後ナデ。白褐色で軟質。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴・そ の 他
154 － 7 8402412	S K319	須恵器 坏	口径 12.8 器高 3.9	高台はやや内に入って直に立つ。体部は底部と稜をなして立ち上がり、口縁部でやや外反。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色。
－ 8 8401373	S K318	〃	口径 12.6 器高 5.1	高台はやや内に入って立ち、体部は底部と稜をなして立ち上がって直に伸び深い。	底外面にヘラ切離し後ナデ。黄灰色で軟質、微砂粒を多く含む。
－ 9 8401372	〃	〃	口径 12.6 器高 4.4	高台はやや外に張り、体部は底部と不明瞭な稜をなして立ち上がり直線的に伸びる。	底外面にヘラ切離し後ナテ。灰白色で軟質。
－10 8402101	S K319	〃	口径 12.7 器高 4.7	体部は底部と稜をなして立ち上がり直線的に伸びて深い。	底外面ヘラ切離し後ナデ。白褐色で微砂粒多く含む。
－11 8402109	〃	〃	口径 13.0 器高 4.0	体部は底部から急に立ち上がって直線的に伸びる。	底外面にヘラ切離し後ナデ。赤褐色の「赤焼」須恵器。
－12 840416	〃	〃	口径 6.4 器高 3.4	体部は浅く内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色。
－13 8402406	〃	須恵器 皿	口径 15.0 器高 2.0	体部は底部から不明瞭に折れて立ち上がり、口縁部端部やや外反。	底外面ヘラ切離し後ナデ。黄灰色で軟質。
－14 8402118	〃	〃	口径 17.2 器高 2.2	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。白灰色でやや軟質。
－15 8402407	〃	〃	口径 16.8 器高 1.8	体部は底部とかるく稜をなして直に短かく立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色。
－16 8402409	〃	須恵器 鉢	口径 7.8 器高 4.8	小型の鉢。凸面状の不安定な底部から体部は稜をなして直に深く立ち上がる。	底外面静止ヘラケズリ、体部外面上半回転ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
－17 8401399	〃	須恵器 壺	底径 11.4	短頸壺の胴部下半。高台は底部のやや内に入り低く、胴部は稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面と胴部の底部付近ヘラケズリ。明灰褐色で軟質。
－18 8402119	〃	〃	口径 9.1 胴径 22.0	細頸の長胴三耳壺。胴部は肩が張り沈線2条をめぐらせ板状穿孔の耳を貼付。頸部は外反し、口縁部は沈線をおき折れて立つ。	胴部は外面タタキ目、内面同心円文の上からかるくナデ、口縁部ナデ。内面灰色、外面は酸化により褐灰色。
－19 8402115	〃	須恵器 鉢	口径 32.6 器高 12.5	片口の大型鉢。体部は底部と稜をなして直に開く。	体部外面下半から底外面にかけてヘラケズリ。明灰色で砂粒をやや多く含む。
－20 8402418	〃	〃	口径 7.8	体部は直線的に急に立ち上がり深い。	内外面ともナデ。灰色。
115 －21 8402417	〃	土師器 坏蓋	口径 17.2 器高 3.4	大型の坏蓋。天井部はやや低くつまみをもち、口縁端部は短く内傾する。	内外面ともナデ仕上げ。明黄褐色で砂粒を含む。
－22 8402414	〃	土師器 坏身	口径 15.6 器高 6.8	体部が深い大型坏。高台やや高く直に立つ。	低外面ヘラ切離し後ナデ。明黄褐色で砂粒を含む。
－23 8401391	〃	土師器 坏	口径 15.8 器高 3.2	大型の坏。体部は浅く、底部から不明瞭な稜をなして内湾気味に立ち上がる。	底外面は静止ヘラケズリ後ナデか。明褐色で砂粒を含む。
－24 8401392	〃	〃	口径 15.6 器高 3.6	大型の坏。体部はやや深く、外に開き内湾して立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒やや多く含む。
－25 8402108	〃	〃	口径 16.2 器高 4.8	大型の坏。底部は小さく、体部は深く内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒を含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
155－26 8402117	ＳＫ319	土師器 坏	口径　13.5 器高　3.5	器壁が薄く、体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ、明茶褐色で微砂粒を含む。
－27 8402102	〃	〃	口径　12.0 器高　3.2	体部は底部と稜をなして直線的に立ち上る。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒を含む。
－28 8401395	〃	〃	口径　11.5 器高　3.4	体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し痕。橙褐色で砂粒を多く含む。
－29 8402106	〃	〃	口径　12.2 器高　3.4	底部は小さく、体部は不明瞭な稜をなして外に開きながら内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒を含む。
－30 8402103	〃	〃	口径　12.3 器高　3.4	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。
－31 8401393	〃	〃	口径　13.2 器高　3.3	体部は底部と稜をなさずに立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。内面は赤褐色の丹塗磨研。胎土は明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－32 8402408	〃	〃	口径　10.6 器高　3.5	小型の坏。底部は小さく、体部は不明瞭な稜をなし内湾して立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒含む。
－33 8401390	〃	皿	口径　17.6 器高　2.2	体部は底部と不明瞭な稜をなして短く外反気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒を含む。
－34 8401388	〃	土師器 皿	口径　17.6 器高　2.2	体部は底部と不明瞭な稜をなして短く直に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。
－35 8401389	〃	〃	口径　16.6 器高　2.3	〃	〃
－36 8401387	〃	〃	口径　約18 器高　2.0	〃	〃
－37 8712907	〃	土師器 高坏	残高　11.4	高坏脚部、中空筒状に高く上位でしまる。	内外面ナデ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－38 8402403	〃	土師器 甕	口径　約20	胴部はやや張り、口縁部は折れ気味に外反。	胴部内面指ナデ、外面タテハケ目後ナデ。明褐色で微砂粒多く含む。
－39 8202419	〃	〃	口径　約24	胴部は張らず、口縁部は折れずに外反し上面平坦。	胴部内面指ナデ。明褐色で微砂粒多く含む。
156－40 8401922	ＳＫ317	須恵器 坏蓋	口径　16.6 器高　3.9	大型の坏蓋。天井部は平坦でつまみが付き、口縁端は厚く角ばる。	天井部から体外面２分の１ヘラケズリ。明黄灰色でや軟質。
－41 8401921	〃	〃	口径　17.4 坏高　2.6	大型の坏蓋で、つまみ欠失。天井部から体部にかけて丸味をもち、口縁体部が断面三角形の稜をつくる。ヘラ記号あり。	天井部ヘラケズリ。灰色。
－42 8401377	ＳＫ316	〃	口径　13.4 器高　3.6	つまみが付き、天井部から体部にかけ丸味をもち、口縁端部が断面三角形の稜をつくる。	天井部ヘラケズリ。灰色。
－43 8402126	ＳＫ317	〃	口径　13.4 坏高　1.8	つまみ欠失。天井部から体部にかけて丸味をもち、口端部が断面三角形の稜をつくる。	天井部ヘラケズリ。明灰色で焼け歪み。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴・そ の 他
156 −44 8402104	S K317	須恵器 壺蓋	口径 12.8 器高 3.2	天井部は平坦で、体部が直に下り、口唇部に稜をつくる。	天井部ヘラケズリ、体部ナデ。 明灰色。
−45 8401374	S K316	須恵器 坏	口径 15.2 器高 4.9	高台はやや内に入り、体部は底部と不明瞭な稜をもって直線的に立ち上がる。	底外面ナデ仕上げ。灰白色で微砂粒を多く含む。
−46 8401918	S K317	〃	口径 13.0 器高 5.0	高台はやや内に入り、体部が直線的に立ち上がる。底内面にヘラ記号。	底外面ヘラ切離し後ナデ。 灰色でやや軟質。
−47 8401375	S K316	〃	口径 12.2 器高 4.5	高台は底体屈曲部に付き、体部が直線的に伸びる。	底外面ナデ仕上げ。灰白色で軟質。
−48 8402122	S K317	〃	口径 12.3 器高 4.4	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。白灰色で軟質。
−49 8402120	〃	〃	口径 13.0 器高 4.3	体部は底部とやや不明瞭な稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。白灰色で軟質。
−50 8402121	〃	〃	口径 13.5 器高 4.3	体部は底部とやや不明瞭な稜をなして立ち上がり口縁部でやや外反する。	底外面ヘラ切離し後ナデ。白灰色で軟質、砂粒やや多く含む。
−51 8402123	〃	〃	残高 3.1	〃	器面荒れて調整不明瞭。明灰色で軟質。
−52 8401916	〃	〃	口径 11.8 器高 3.9	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。赤褐色の「赤焼」須恵器。
−53 8401919	〃	須恵器 壺	口径 9.0 器高 7.7	高台は形式的に付いて小さく、体部は直線的に立ち上がって肩をつくり、口縁部が短く立つ。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色。
−54 8401912	〃	須恵器 皿	口径 16.6 器高 1.8	体部は底部から屈曲して短く立ち上がり、口縁部で外反。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色。
−55 8401913	〃	〃	口径 17.0 器高 2.1	体部は底部から屈曲して直線的に短く立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。内面明灰色、外面明灰褐色で軟質。
−56 8402125	〃	〃	口径 16.8 器高 2.2	〃	底外面切離し後ナデ。板目痕あり。明灰色で軟質。
−57 8402124	〃	須恵器 鉢	口径 23.6 器高 13.9	大型の深鉢。底部は丸味をもち不安定。体部は不明瞭な稜をなし直線的に立ち上がる。	底外面から胴外面下半を静止ヘラケズリ後ナデか。灰白色で軟質。
157 −58 8402133	〃	土師器 坏	口径 16.3 器高 4.8	大型坏。底部は丸味をもって不安定。体部は稜が不明瞭なまま内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデか。明茶褐色で微砂粒を含む。
−59 8402135	〃	〃	口径 12.0 器高 3.8	体部は底部との稜が不明瞭なまま内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離しナデ。明褐色で砂粒を含む。
−60 8402134	〃	〃	口径 14.3 器高 2.8	体部は浅く、底部と不明瞭な稜をなして直線的に伸びる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。茶褐色で微砂粒を含む。
−61 8402129	〃	〃	口径 13.6 器高 4.3	体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面にヘラ切離し後ナデ。明茶褐色で砂粒やや多く含む。

Fig.-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
157 －62 8402128	ＳＫ317	土師器 坏	口径　13.3 器高　3.4	体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－63 8402132	〃	〃	口径　12.4 器高　3.4	〃	底外面ナデ仕上げ。明褐色で砂粒を含む。
－64 8402136	〃	〃	口径　13.2 器高　3.7	体部は底部とやや不明瞭な稜をなして直線的に立ち上がる。	器面荒れて調整不明。明褐色で砂粒を含む。
－65 8401915	〃	〃	口径　12.2 器高　3.7	〃	底外面にヘラ切離し後ナデ。茶褐色で微砂粒を含む。
－66 8402136	〃	〃	口径　12.4 器高　3.5	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。白褐色で砂粒を殆ど含まない。
－67 8402137	〃	土師器 皿	口径　16.3 器高　2.3	体部は底部と稜をなして短く直線的に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明茶褐色で微砂粒を含む。
－68 8402139	〃	〃	口径　17.2 器高　1.9	〃	底外面切離し後ナデ。白褐色で砂粒を含む。
－69 8402138	〃	〃	口径　16.5 器高　2.2	体部は底部とやや不明瞭な稜をなして立ち上がり、口縁端部やや外反。	底外面切離し後ナデ。明茶褐色で砂粒を含む。
－70 8401914	〃	〃	口径　18.0 器高　2.1	〃	〃
－71 8401378	ＳＫ316	土師器 壺	胴径　14.2	小型壺の胴部下半。底部は不安定で体部は急に立ち上がる。	底部から体部下半にかけ外面ヘラケズリ後ナデか。内面ハケ目後ナデ。明赤褐色で砂粒多く含む。
－72 8401923	ＳＫ317	土師器 甕	口径　22.8	胴部は張りがなく、口縁部は折れて大きく開く。	胴部内面ヘラケズリ、他ナデ。白褐色で微砂粒多く含む。
－73 8401924	〃	〃	口径　25.8	口縁部はやや肥厚して急に外反。	胴部内面ヘラケズリ、他ナデ。明褐色で微砂粒多く含む。
－74 8401925	〃	〃	口径　25.8	胴部は肩が張ると思われ、口縁部は急に外反して端部が水平にちかく開く。	胴部内面指ナデ。外面ハケ目後ナデか。明褐色で微砂粒多く含む。
158 －75 8401357	ＳＰ350	須恵器 坏蓋	口径　9.6 器高　3.0	天井部は丸味をもち、体部は稜をなさず下がる。	天井部ヘラ切離し後かるくナデ。暗灰色で砂粒やや多く含む。焼け歪む。
－76 8401358	〃	須恵器 坏身	口径　8.2 器高　2.5	体部は底部から不明瞭な稜をなして立ち上がり、口縁部立ち上がりはつよく内傾。底外面にヘラ記号。	底外面ヘラ切離し後かるくナデ。灰色で砂粒やや多く含む。焼け歪む。
－77 8401356	〃	須恵器 坏蓋	口径　10.2 器高　3.7	天井部は高く、体部は丸味をなして下がる。天井部にヘラ記号。	天井部はヘラ切離し後かるくナデ。明灰褐色で軟質。
－78 8401355	〃	須恵器 坏身	口径　9.2 器高　3.1	体部は底部から不明瞭な稜をなして立ち上がり、口縁部立ち上がりはつよく内傾。底外面にヘラ記号。	底外面ヘラ切離し後かるくナデ。明灰褐色で軟質。
158 －79 8401369	ＳＰ352	土師器 坏	口径　12.8 器高　3.6	体部は底部と稜をなし内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。

Fig.-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴・そ の 他
158－80 8401363	ＳＰ351	土師器 坏	口径 11.7 器高 3.3	体部は底部と不明瞭な稜をなして内湾気味に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。
－81 8401362	〃	〃	口径 11.8 器高 3.8	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。板目痕あり。
－82 8401359	〃	〃	口径 11.6 器高 2.5	体部は底部と明瞭な稜をなさず浅く立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。
－83 8401360	〃	〃	口径 12.2 器高 2.3	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。板目痕あり。
－84 8401364	〃	〃	口径 11.2 器高 2.0	体部は底部と稜をなさず内湾気味に浅く立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。
－85 8401361	〃	〃	口径 11.0 器高 2.5	〃	〃
－86 8412567	〃	〃	底径 6.6	坏底部。体部は底部とかるい稜をなして立ち上がる。	〃
－87 8401365	〃		底径 6.5	〃	底外面ヘラ切離し後ナデ。明褐色で微砂粒を含む。板目痕あり。
－88 8301366	〃	土師器 皿	口径 7.2 器高 2.4	坏部は浅く立ち上がりをなさず、高台は高くやや外に張る。	底外面ナデ仕上げ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
－89 8401367	〃	〃	口径 7.4 器高 2.3	〃	〃
－90 8401368	〃	土師器 埦	口径 15.0 器高 6.5	底部は丸味をもって深く立ち上がり、口縁端部はナデて外反。高台は底部の内に入ってつよく外に張る。	底外面ナデ仕上げ。体部内外面ヨコヘラミガキで暗褐色の「黒色土器」。
159－91 8401906	ＳＫ303	須恵器 坏蓋	口径 14.6 器高 2.5	天井部は低くつまみをもち、口縁端部は断面三角形の稜をもつ。	天井部ヘラケズリ。灰色。
－92 8401907	〃	〃	口径 14.2 器高 1.9	天井部は低くつぶれつまみをもち、口縁端部は内に鈍い稜をつくる。	〃
－93 8401908	〃	土師器 坏蓋	口径 15.2 器高 2.5	天井部は低く平坦で太いつまみが付き、口縁端部は短く折れて立つ。	内外面ともナデ仕上げ。明黄褐色。
－94 8401903	〃	須恵器 坏	口径 16.4 器高 3.6	高台は内に入って立ち、体部は底部と稜をなして急に直線的に立ち上がる。	底外部ヘラ切離し後ナデ。灰色。
－95 8401904	〃	〃	口径 15.6 器高 4.0	高台はやや内に入って立ち、体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がる。	〃
－96 8401901	〃	〃	口径 14.0 器高 3.1	体部は底部と不明瞭な稜をなして立ち上がり、口縁部やや外反。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色。
－97 8401911	〃	〃	口径 17.2 器高 5.9	大型の坏。高台はやや内に入って立ち、体部は底部と明瞭な稜をなさず立ち上がり直線的に伸びる。底外面にヘラ書「大」。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色で砂粒やや多く含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
159 −98 8412560	ＳＥ302	須恵器 壺	胴径 16.0	胴肩部がつよく張る。	胴部肩位をナデ。灰色。
−99 8401909	ＳＫ303	須恵器 高坏	底径 11.2	高坏脚部。裾部は端部が平坦にちかく開く。	脚部内外面ともナデ。明灰色で軟質。
−100 8712563	〃	須恵器 甕	口径 19.8	大型甕。口縁部は球状を思わせる胴部から急に外反。	口縁部ナデ。胴部内外面ともタタキ目を残す。外面黄灰色、内面黒灰色。
−101 8712903	ＳＤ323	土師器 甑	残高 13.6	甑口縁部。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒を含まない。
−102 8401380	〃	土師器 皿	口径 14.0 器高 2.8	底部は不安定で、体部は稜をなさず短く直に立つ。	底外面静止ヘラケズリ。明褐色で微砂粒を殆ど含まない。
−103 8401379	〃	土師器 壺	口径 12.8 器高 8.1	小型広口壺。体部は丸底でやや偏平、口縁部は体部と稜をなさず反転して大きく外反。	底外面付近ヘラケズリ後ナデか。胴部中位以外は器壁が薄い。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
−104 8712905	〃	土師器 高坏	残高 5.3	脚部は低く裾が開く。	脚部は内外面ともナデ。器壁が厚い。明褐色。
−105 8712908	ＳＫ325	〃	残高 9.1	高坏脚部。脚筒部は細長く伸びる。	筒部外面ナデ、内面ヘラケズリ。明茶褐色で砂粒を殆ど含まない。
−106 8712555	ＳＫ326	須恵器 坏	底径 9.6	高台はやや内に入り、体部は底部と不明瞭な稜をなして立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。灰色でやや軟質。
−107 8401381	ＳＤ305	土師器 坏	口径 12.0 器高 3.2	体部は底部とかるい稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面ナデ仕上げ。器壁が薄い。明褐色で微砂粒を含む。
160 −108 8412568	ＳＤ306	土師器 皿	口径 15.5 器高 2.0	体部は底部と稜をなさずに短く立ち上がり、口縁端部をまるめる。	底外面ヘラケズリ後ナデか。明褐色で微砂粒を含む。
−109 8401382	ＳＤ307	須恵器 坏	口径 12.4 器高 3.9	体部は底部から稜をなして直線的に立ち上がる。	底外面ヘラ切離し後ナデ。白褐色で軟質。
−110 8401383	ＳＤ308	〃	口径 約16 器高 3.4	体部は底部と不明瞭な稜をなして浅く直線的に立ち上がる。	体部はナデて外面下半はカキ目風に仕上げる。灰色で砂粒やや多く含む。
−111 8401385	ＳＤ330	須恵器 坏蓋	口径 14.6 器高 2.5	天井部は低くつぶれてつまみが付き、口縁部は短く折れて立つ。	天井部はヘラケズリ。天井部のみ紫灰色、他明灰色。
−112 8401384	ＳＤ331	土師器 高坏	底径 8.6	高台はやや外に張って高く伸びる。	底外面ナデ仕上げ。明褐色で微砂粒を含む。
−113 8412901	ＳＤ346	土師器 皿	底径 6.0	高台は内に入って短く立つ。体部は底部と稜をなさず内湾して立ち上がるか。	底外面ナデ仕上げ。明褐色で砂粒を殆ど含まない。
−114 8412575	〃	〃	底径 8.0	高台は短くやや外に開いて立つ。体部は底部と稜をなさず内湾して立ち上がるか。	〃
−115 8401386	〃	須恵器 高坏	口径 13.9 器高 12.2	坏部は底体が一体化して浅く開き、脚部は筒状に高く伸びて裾が平坦に開く。	内外面ともナデ、筒部にカキ目を施す。灰色。
−116 8401905	ＳＥ347	土師器 埦	口径 14.3 器高 6.8	高台はやや開いて高く伸び、埦部は底体が丸味をもって大振り。	底外面ナデ仕上げ。埦部は内外面ともヘラミガキ。外面明褐色、内面暗褐色の「内黒」で砂粒を殆ど含まない。

(2) **土錘** (Fig.161, ＰＬ102)

Ｉ区の土壙から７点出土した。いずれも手捏ねで両端を細く仕上げた管状の土錘で、長さ３～４、太さ1.2～1.5m、孔径0.5前後。117～120・122はＳＫ316、121はＳＫ317、123はＳＫ318土壙からの出土である。

(3) **紡錘車** (Fig.162、ＰＬ102)

124はＳＰ353土壙墓出土の鉄製紡錘車である。径4.2cm、厚0.2cmの薄い鉄製円板の中心に細い鉄芯を通す。鉄芯は径0.3cm、長さ8.5cm以上で一端を欠損し、土圧のため円板と直交していない。銹化が著るしい。類例は佐賀平野では吉野ケ里遺跡からも１点出土している。

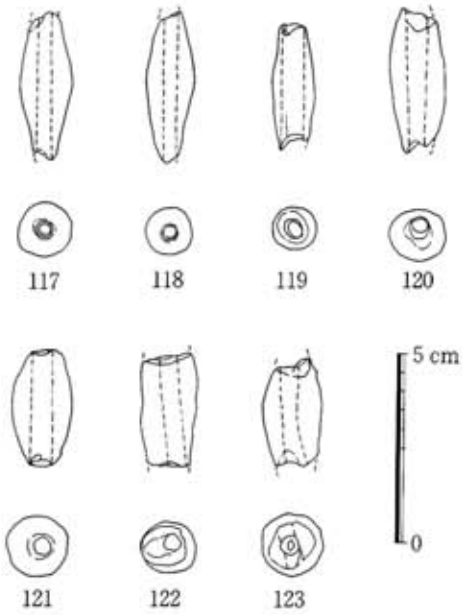
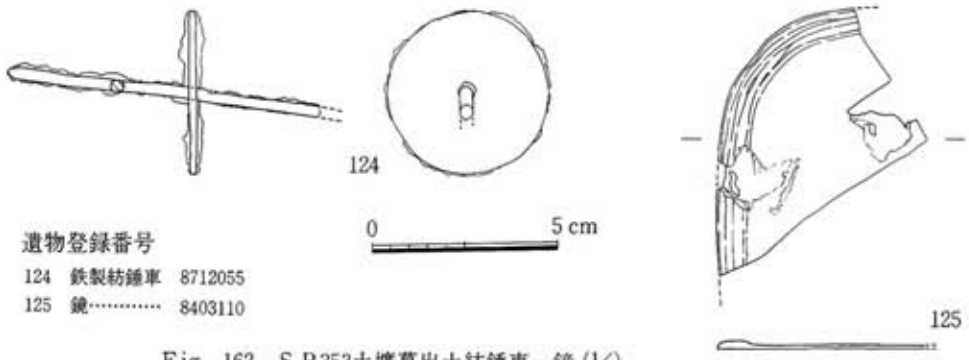


Fig. 161 土錘 (½)

(4) **鏡** (Fig.162、ＰＬ102)

125はＳＰ353土壙墓出土の湖州鏡系の素文鏡片。隅丸方形鏡の角部にあたるため法量は明らかでないが、縁が狭いことからみて、おそらく１辺10前後の小型鏡であろう。破片のみ、しかも破砕された状態で出土した。縁は「湖州鏡系」特有の蒲鉾縁で幅0.8cm、厚さ0.2cmで細かな研磨痕を残す。鏡面部分は厚さ0.1cmと極めて薄く平滑に仕上げられ、背面は素文である。一部緑青がみられるが保存良好な黒色を呈し、胴質は錫分を多く含むと思われる。湖州鏡系のこの種の鏡は経筒に使用されたものと別とすれば、佐賀平野では国府跡周辺でのみ久池井Ｂ遺跡Ⅲ区、惣座Ｂ遺跡、佐賀市泉三本栗遺跡等の例があり、いずれも土壙墓からしかも本例と同様破片で出土している。ただしこれらはいずれも大型円形鏡である点が異なる。



遺物登録番号

124 鉄製紡錘車 8712055

125 鏡…… 8403110

Fig. 162 ＳＰ353土壙墓出土紡錘車・鏡 (½)

〈Ⅲ区の遺物〉

奈良時代の須恵器・土師器が殆どである。

弥生時代では調査区西辺部の貯蔵穴から前期の土器が若干出土しているほか、縄文～弥生時代の石器が数点ある。南側の惣座Ｂ遺跡に比べて弥生時代の土地利用は殆ど無いに等しい。

奈良・平安時代では土壙を中心に須恵器・土師器が比較的豊富に出土した。ただしその大部分は奈良時代で、平安時代に入ると激減する。そのほか鉄器が数点あり、また特殊な遺物としては小穴から出土した石錘１点、土壙墓から出土した鏡片１点などがある。

中世では室町期の瓦質土器・磁器・石塔などがみられるが量は少なく、主に調査区南端のＳＤ787あるいはその周辺からの出土に限られる。

１　縄文・弥生時代

(1)　石器（Fig.163、ＰＬ115）

耕作土、遺構の埋土から安山岩、黒曜石を素材とした石器が出土している。大部分は調整剥離のない剥片であったが、削器（126～130）、石鏃（131・132）が出土している。時期は縄文後期から弥生前期のものと考えられる。

削器（Fig.163、ＰＬ115）

126は幅広の縦長剥片を素材とし、表裏ともに調整剥離を施して刃部を作出している。127・128は横長剥片を素材とし、表裏ともに背部調整剥離と刃部調整剥離を施している。130は大型の横長剥片を素材とし、打面のある一側縁に背部調整剥離、対側縁と弧状の先端に刃部調整剥離を施している。いずれも安山岩製。

石鏃（Fig.163、ＰＬ115）

131・132ともに弧状に抉入した基部の平基で、調整は全体的に丁寧である。黒曜石製。

(2)　土器（Fig.164、ＰＬ115・116）

ＳＫ745 、ＳＫ746 土壙から弥生前期中頃の土器がまとまって出土した。

133～138はＳＫ745 土壙から出土した甕である。133・134は口縁部と体部上半が残存する。端部に刻目をもつ口縁部は短く外反し、体部上反はやや内傾する。調整は内外面ともにヨコナデ、他はナデ。色調は外面黒褐色、内面茶褐色。胎土に砂粒を含む。133は復元口径14.4cm、134は復元口径2.2cm。135・136は、口縁部と体部の上半に刻目突帯を貼り付けるもので、135の体部上半は丸みを持ちながら内傾する。突帯と突帯の間には内外面ともにヨコナデ、ほかはナデ。色調は内外面ともに黄褐色。胎土に１前後の砂粒を含む。復元口径26.4cm。136の体部上半は

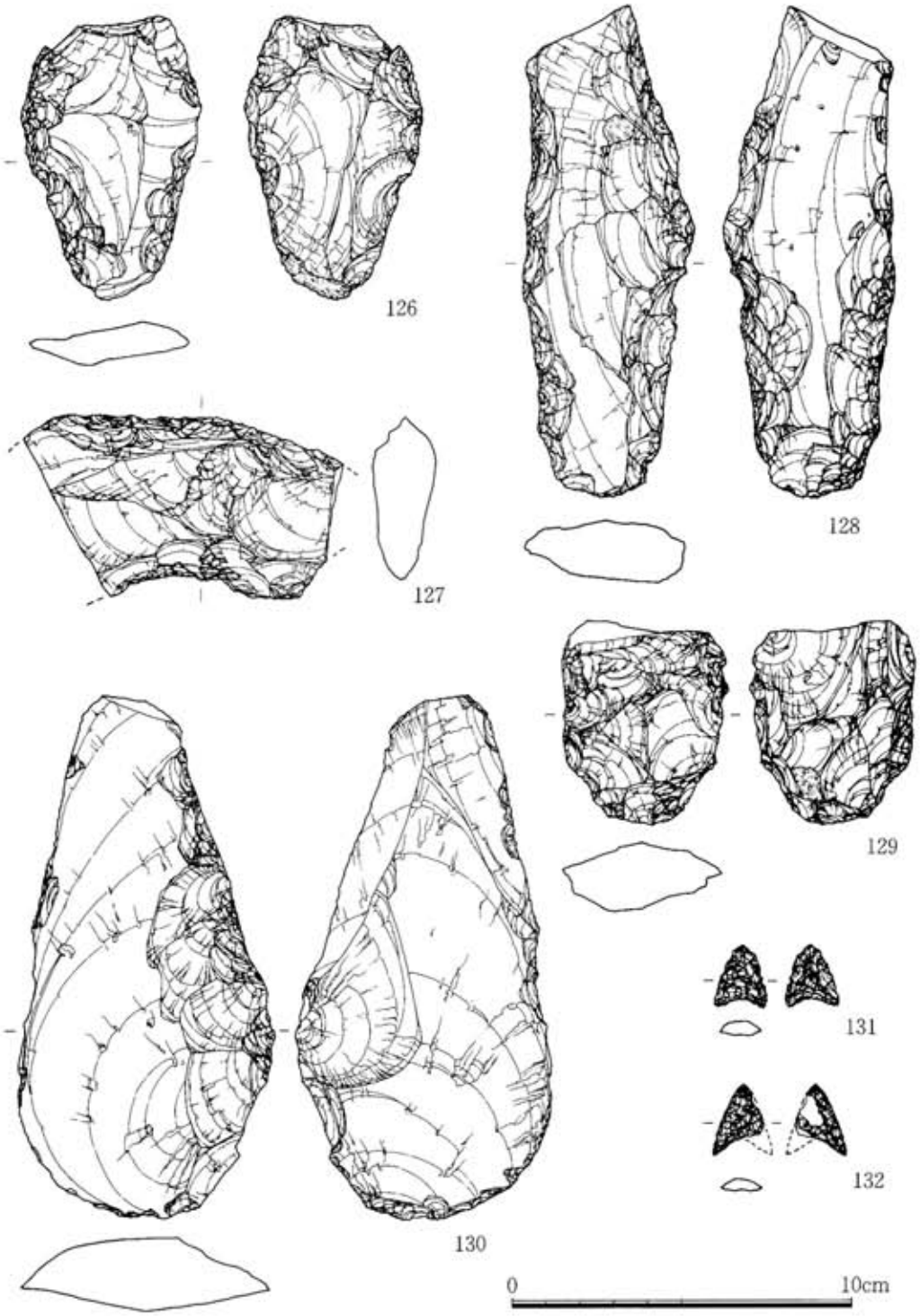


Fig. 163　縄文・弥生時代石器（½）

ほぼ直立する。調整は突帯と突帯の間がハケの後ナデ、他は内外面ともにナデ。色調は内外面ともに黒褐色～茶褐色。胎土に１㎜前後の砂粒を含む。復元口径26.0㎝。ＳＫ746土壙出土の破片と接合。137～140は底部しか残存していない。いずれも端部が外に張り出すもので140は焼成後穿孔している。

141～143はＳＫ746土壙出土の、141・142は高坏、143は甕である。141・142ともに坏部から脚部にかけてしか残存していないが、坏部と脚部の境に刻目のない突帯を貼り付け口縁部が短く直立するものであろう。調整は坏部内面と脚部外面がヘラミガキ、脚部内面タテ方向のナデ。142は口縁部と体部上半が残存するだけで体部の突帯は不明である。口縁に刻目突帯を巡らし、体部上半は直線的にやや外反する。調整は内外面ともにヨコナデ。復元口径26.6㎝。

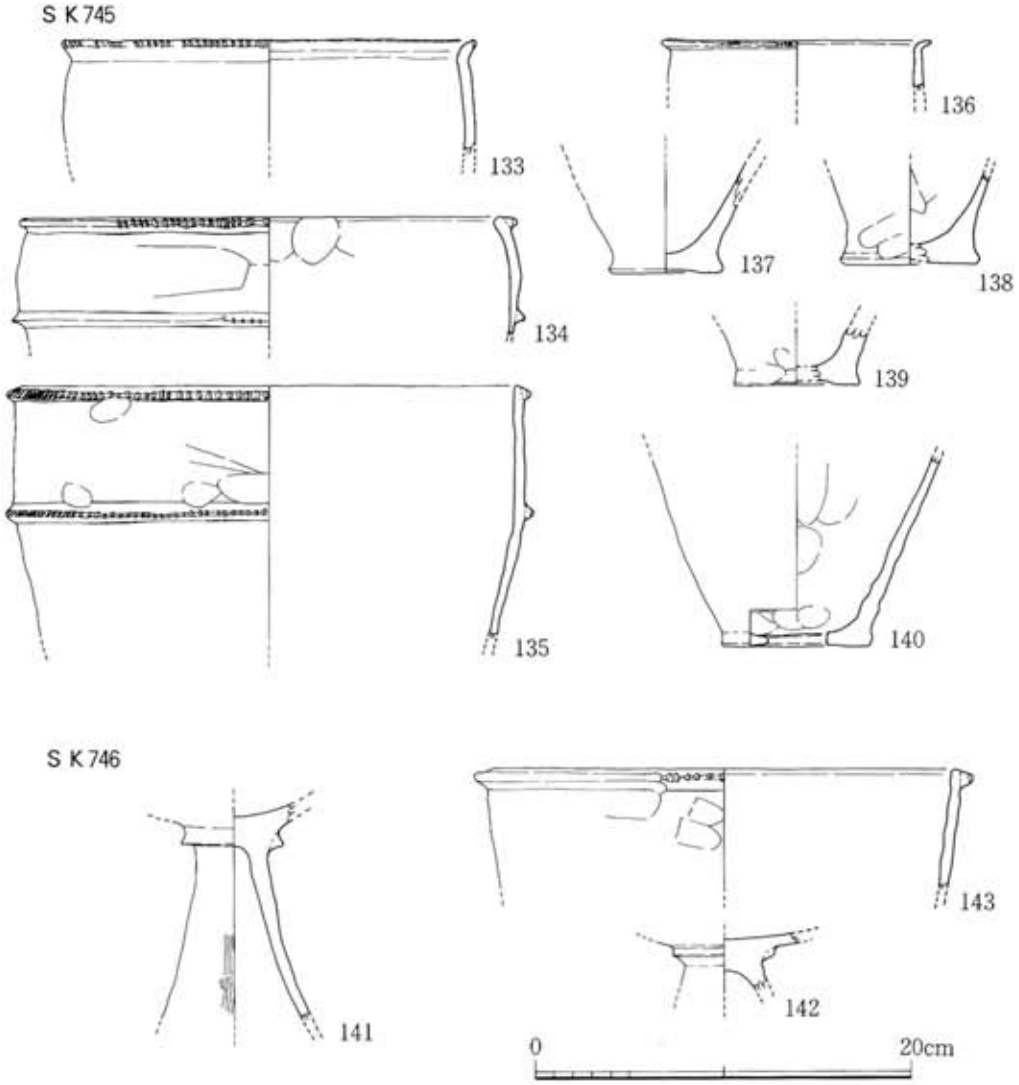


Fig. 164　ＳＫ745・746 土壙出土弥生前期土器（¼）

2 奈良・平安時代

(1) 須恵器・土師器

a 奈良時代

久池井Ｂ遺跡Ⅲ区において各遺構から出土した遺物群中、当該時期に比定できるものが多くを占めている。この様な状況は、肥前国府跡との関連が考えられ、出土遺物群の性格においても、一般集落出土遺物の構成とは異なった官衙に関連した遺物としての性格を考慮しておかなければならないと考えられる。特に土壙ＳＫ775～777・768に関しては、多量・他器種にわたる遺物を出土しており、出土状況ならびに各遺構の共存関係を知る上で最も重要になる接合関係から、一括廃棄の状況が看取でき、その構成器種の取扱いについても分析対比が必要となる。ここでは、ＳＫ764・775・776出土資料に関して詳細を述べることにする。また調査区の縦断ならびに横断する溝からも、当該時期に比定できる遺物群が多く出土してはいるが、遺構の形状から考えられる性格ならびに遺構埋土の堆積状況から、一括性には乏しいものである。さらに、特筆した３遺構以外の遺構出土資料に関しては各遺構ごとに記述することは避け、特筆すべき遺物に関して記述するにとどめた。遺物の詳細に関しては、出土遺物観察表（Ｔab. 9）を参照されたい。

ＳＫ764出土土器　（Ｆig.165・166, ＰＬ.117　）

須恵器　久池井Ｂ遺跡Ⅲ区において検出された他の遺構出土土器群の出土傾向と同様に、非常に少量であり坏および蓋が出土している。

蓋は偏平つまみを有するもので、口縁端部形状が断面三角形のものが出土しており、調整属性に関しても天井部外面を回転ヘラ削りするほかは、内外面ともに回転ナデによって仕上げているものである。また、小型でつまみを有さないものも微量ながら出土しており、口縁端部形状が明瞭な断面三角形を呈するものと、やや丸みを有するものがあり、天井部外面の調整はいずれも粗いナデによって仕上げられている。

坏は１点のみ図示したが、量的にも少ない傾向にある。形状は、底部から体部への移行が緩やかなものであり、底部外面の調整は、回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げるものである。

土師器　質量ともに多様であり蓋・坏・皿・甕・高坏・手づくね土器にわたっている。

蓋には、坏に伴う蓋と壺に伴う蓋、および大型品に伴うであろうと考えられる蓋（坏に伴う

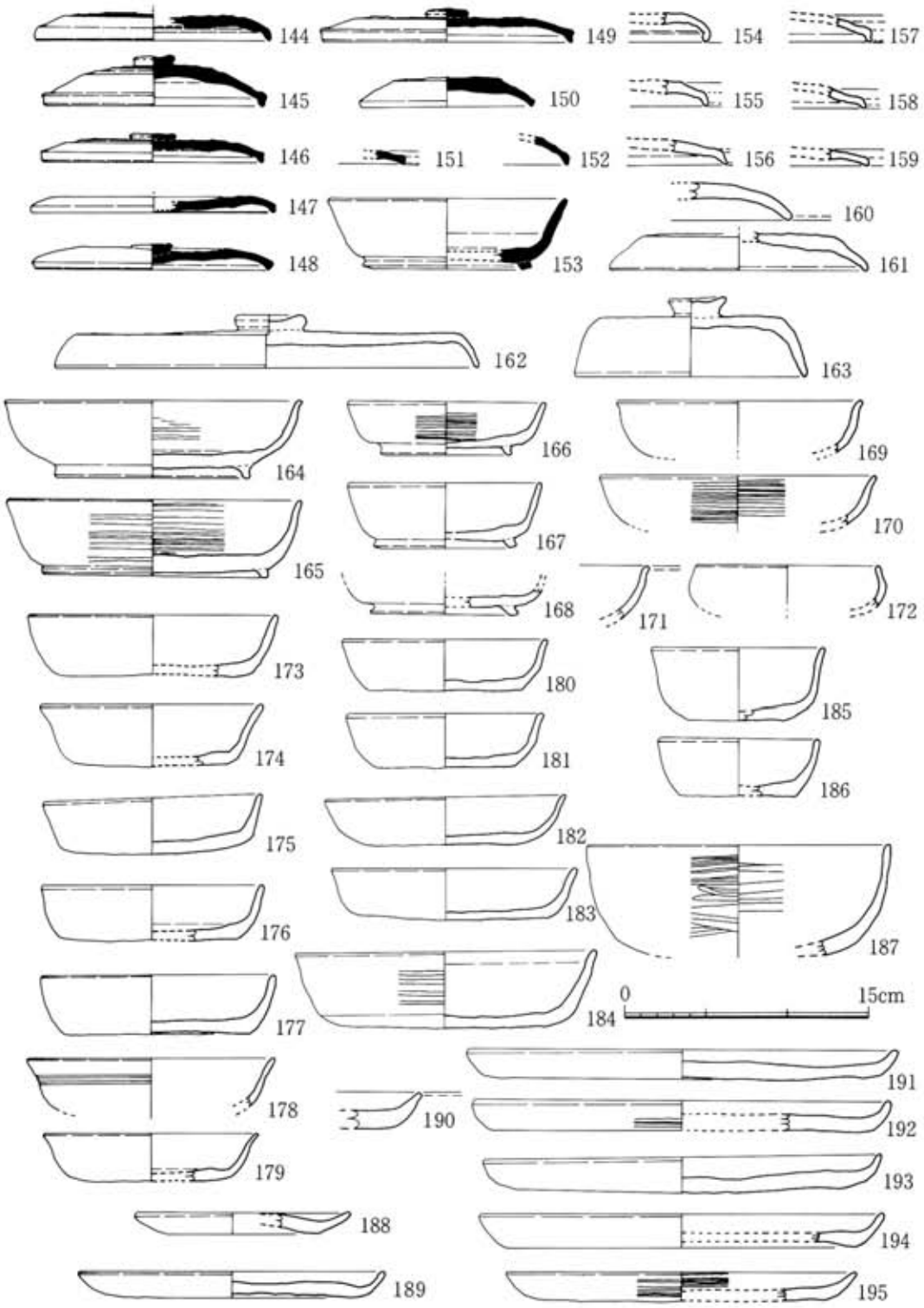


Fig. 165　ＳＫ764 土壙出土土器１（¼）

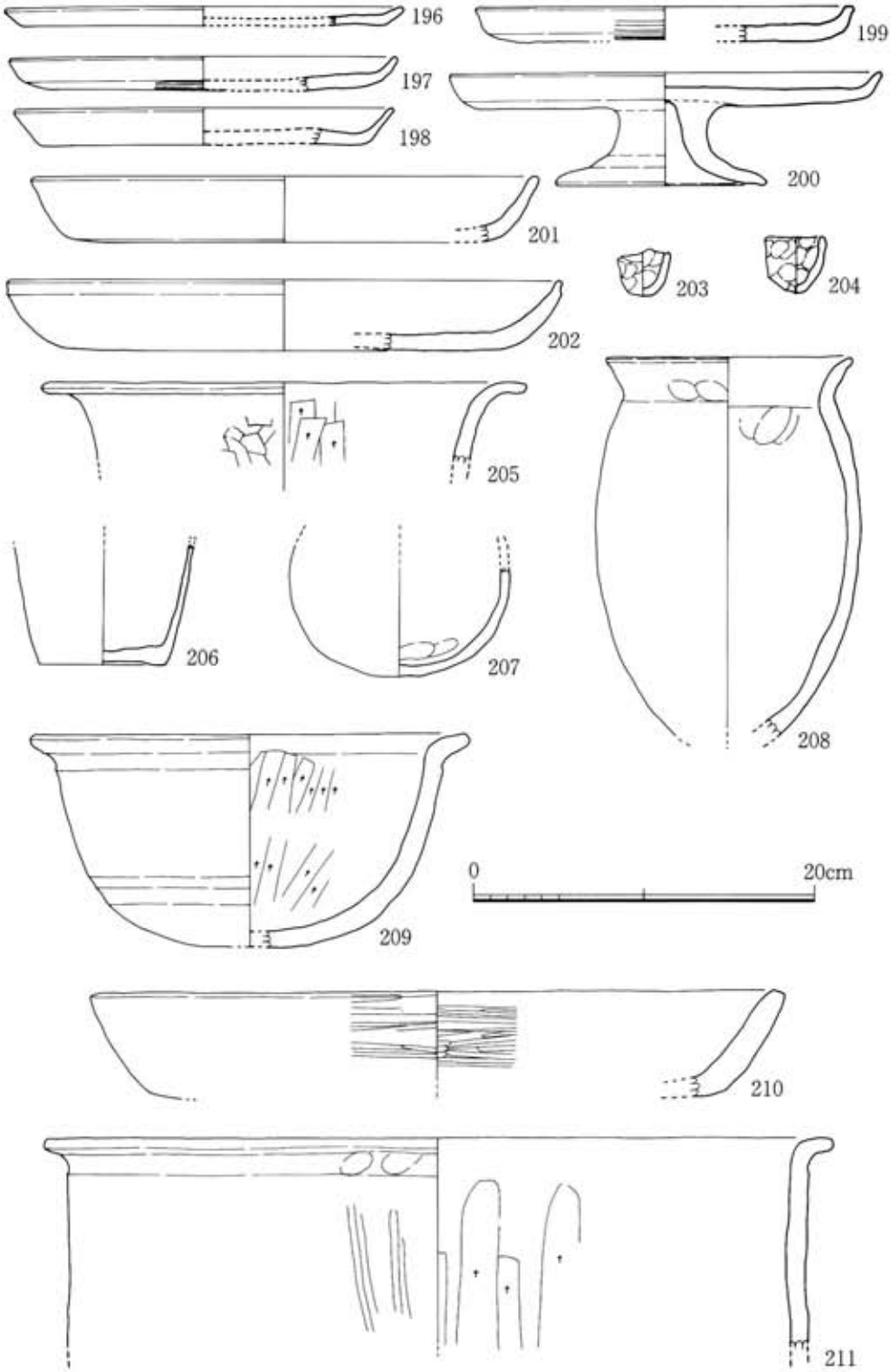


Fig. 166 SK764 土壙出土土器 2 (¼)

と考えられる蓋を坏蓋、壺に伴うと考えられる蓋を壺蓋とする）が出土している。大型の蓋ならびに壺蓋は、共に偏平ながら回転ナデによって丁寧に仕上げられた中心部が凹むつまみを有し、大型の蓋は後述する皿を、壺蓋は無高台坏を天地逆転させたような形状をとり、調整属性に関しては天井部外面を回転ヘラ削りし、他の部分は内外面ともに回転ヘラ磨きによって仕上げられる点で、皿ならびに坏とは異なっている。坏に伴う蓋に関しては、体部から口縁部にかけての破片であり、つまみの有無については判断できないものの、断面三角形を呈する口縁端部形状のもの154～157、やや丸みを有する断面三角形のもの158～166が存在している。 坏は、有高台のものと無高台のものがあり、法量差によって大小の別がある。形状的には、底部から体部への移行が緩やかなもので、口縁端部がやや外反するものと直線的に外開きに開く体部形状を呈するものとがある。調整属性は、内外面ともに回転ヘラ磨きによって仕上げており、底部外面は無高台のものは手持ちヘラ削り、有高台のものは粗いナデによって仕上げている。

皿は、底部から体部への移行が緩やかなもので、法量差によって大・中・小に分けられる。いずれも内外面ともに回転ヘラ磨きによって仕上げられており、底部外面は回転ヘラ切り後粗いナデもしくは未調整のものがある。これら皿に、緩やかな外方へ開く脚を付したものが高坏の形状となる。

甕は、他の多量に土器群が出土したＳＫ775・ＳＫ776の土器出土傾向に比して少なく、粗製の甕が出土しており、法量差によって大小の別がある。底部形状においても、丸底のものと平底のものがあり、深い鉢的な形状を呈するものも出土している。さらに、内外面ともに回転ヘラ磨きを施し、精製品である特徴を有している器厚の厚い鉢的形状のものも出土している。また、他の遺構では出土していない手づくねのミニチュア鉢形土器が出土している。

ＳＫ775出土土器（Fig.167～171，ＰＬ．118・119）

須恵器　蓋（坏蓋・壺蓋）・坏（無高台坏・有高台坏）・長頸壺があり、他の遺構出土土器に比して比較的多く出土している。

坏蓋は、つまみ高のものと偏平で低いものを貼付したものがあり、つまみを有さないものもある。つまみを有している坏蓋は口径12cm～14cmを計るもので、つまみの無いものは口径９cm～７cmと小型のものである。つまみを有している蓋の口縁端部形状は、すべて断面三角形を呈するもので、精粗によって細分ができる。つまみを有さない蓋の口縁端部形状は、いずれも丸みを持った形状を呈しており、つまみを有する蓋に比してやや粗い作りを呈している。壺蓋が１点出土しているが、小型の蓋である。つまみ高のやや高いものでつまみを除外した形状については、小型の坏を天地逆転させたような形状をとり、調整においても天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げている。

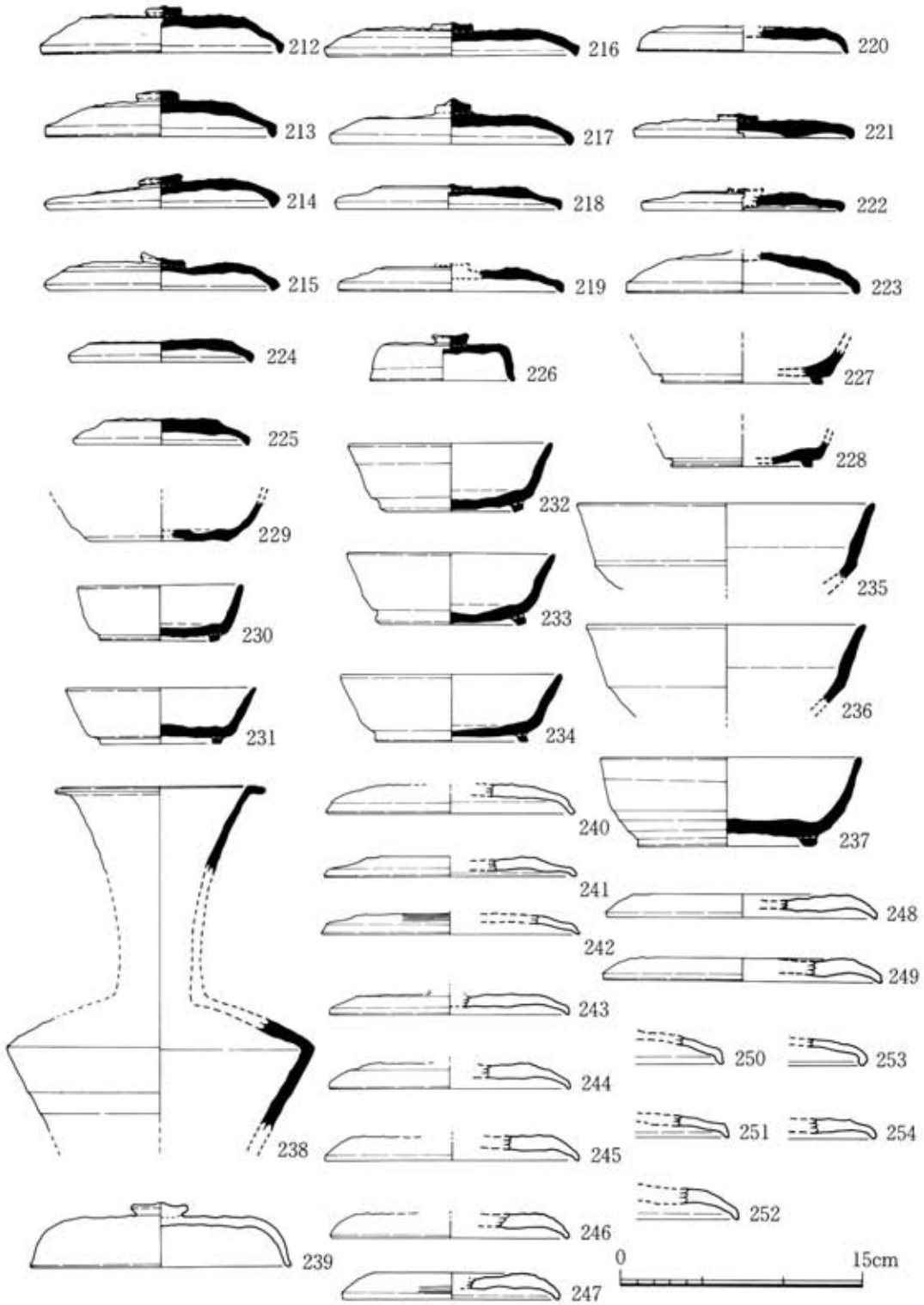


Fig. 167 SK775 土壙出土土器1 (¼)

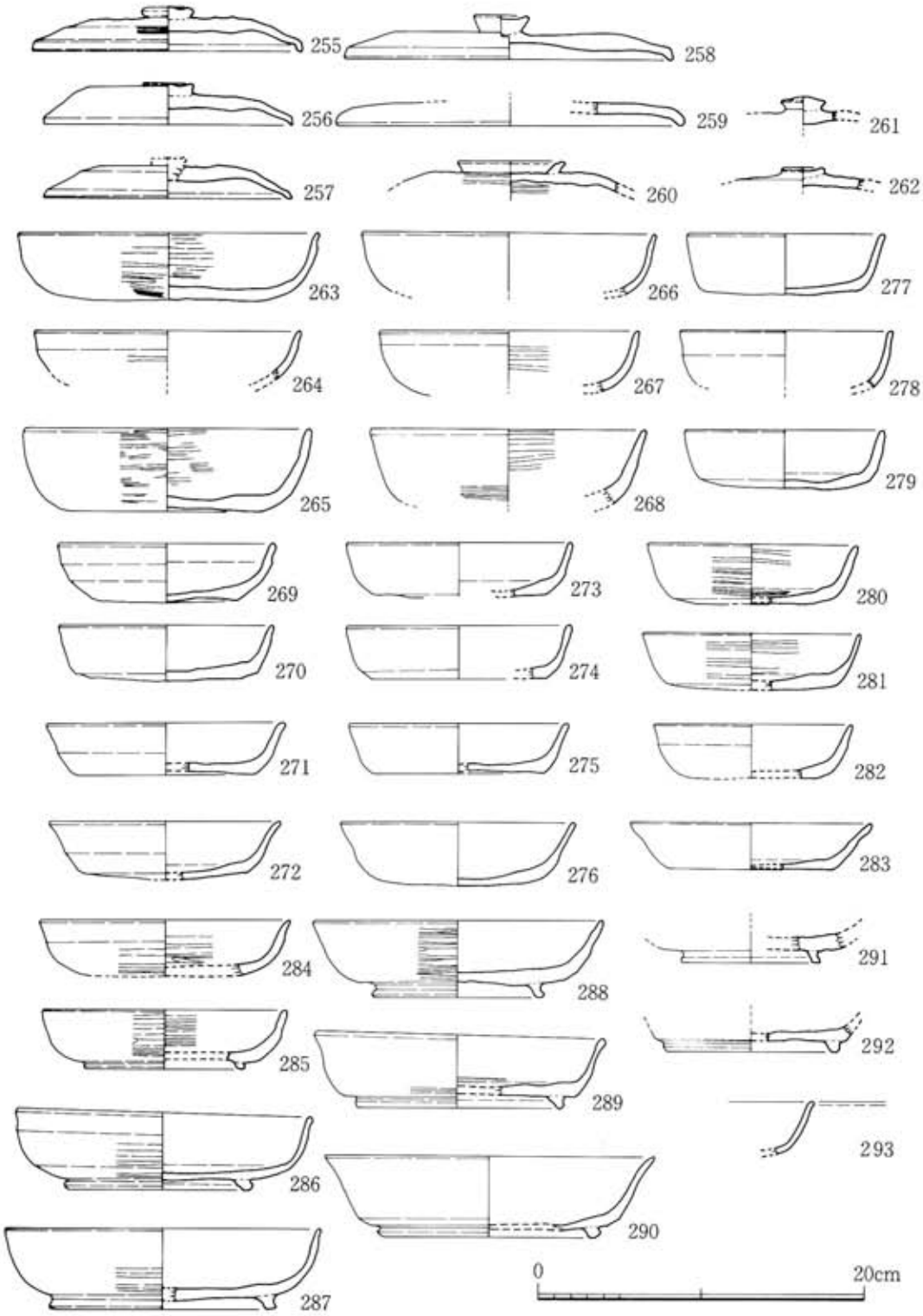


Fig. 168　SK775 土壙出土土器2 (¼)

坏については、有高台のものと無高台のものがあり、有高台のものには法量差によって大小のものがある。無高台のものも含めて、坏の底部から体部への移行が緩やかなものと境界部分が明瞭なものがあり、前者が数量的に卓越している。長頸頚壺は肩部が鋭く張り、外開きに上方へ長く伸びる頸部から、ほぼ直角に外方へ曲折する口縁部形状を呈するもので、肩部よりやや下位より回転ヘラ削りをもって仕上げるほかは、内外面共に回転ナデによって仕上げるものである。

土師器　久池井Ｂ遺跡Ⅲ区において、最も出土量・器種共に多量に出土しており、蓋（坏蓋・壺蓋）・坏（有高台坏・無高台坏）・皿（有高台皿・無高台皿・把手付皿）・甕（把手付甕・粗製甕）・高坏・鉢等がある。

出土した蓋類の中で壺蓋は、ＳＫ776出土のものに非常に近似しており、天井部から口縁部への移行が緩やかな形状を呈している。内外面共に摩耗が著しく形態属性のみしか抽出できない。坏蓋に関しては、偏平なつまみを有するものと、環状つまみの２種類があり、口縁端部形状が明瞭な断面三角形を呈するものと、口縁端部内面に明瞭な稜線が入らない丸みを持った断面三角形を呈するものがある。量的には前者が卓越している。調整属性としては、全体的に摩耗しているため観察し難いものの、残存状況の良好なものについては、内外面ともに回転ヘラ磨きによって仕上げられている。

坏には、高台を貼付したものと無高台のものの２種類があり、法量差によって大小の別が存在している。しかし法量の大小を問わず形態上の特徴としては、底部から体部への移行が緩やかなものと、体部・底部の境界部分において明瞭に屈曲するものがあり、前者の方が数量的に見て卓越している。さらに体部・底部の境界において丸みを有するものの口縁部形状は、口縁端部においてやや外反する傾向が見て取れる。底部外面の調整属性としては、無高台のものは大半が手持ちヘラ削りであり、微量ながら回転ヘラ切りの後粗いナデ、もしくは回転ヘラ削りするものが存在している。体部の調整については摩耗が著しい資料が多く、全体に観察できる資料は少ないものの、希少資料から見ると内外面ともに回転ヘラ磨きによる最終調整をもって仕上げている。特に器形および調整等から微量であるが、無高台坏283・294ならびに有高台坏289・292のように体部・底部の境界部分において明瞭な屈曲する形状を持ち、かつ外上方へ直線的に開く形状を有している資料も出土している。

皿についても坏同様、体部から底部への移行が緩やかなものと、稜線を有する屈曲形状を呈するものの２種があり、口縁部形状におけるやや外反する口縁端部を呈するものと、前者の底部・体部形状の相関性は坏と同様である。器高から見て浅坏と解される一群が存在しているものの、ここでは便宜的に皿に含めた。調整痕跡においても摩耗度合いによって観察できない資料が存在しており、全資料についてではないが、内外面回転ヘラ磨きによって仕上げており、

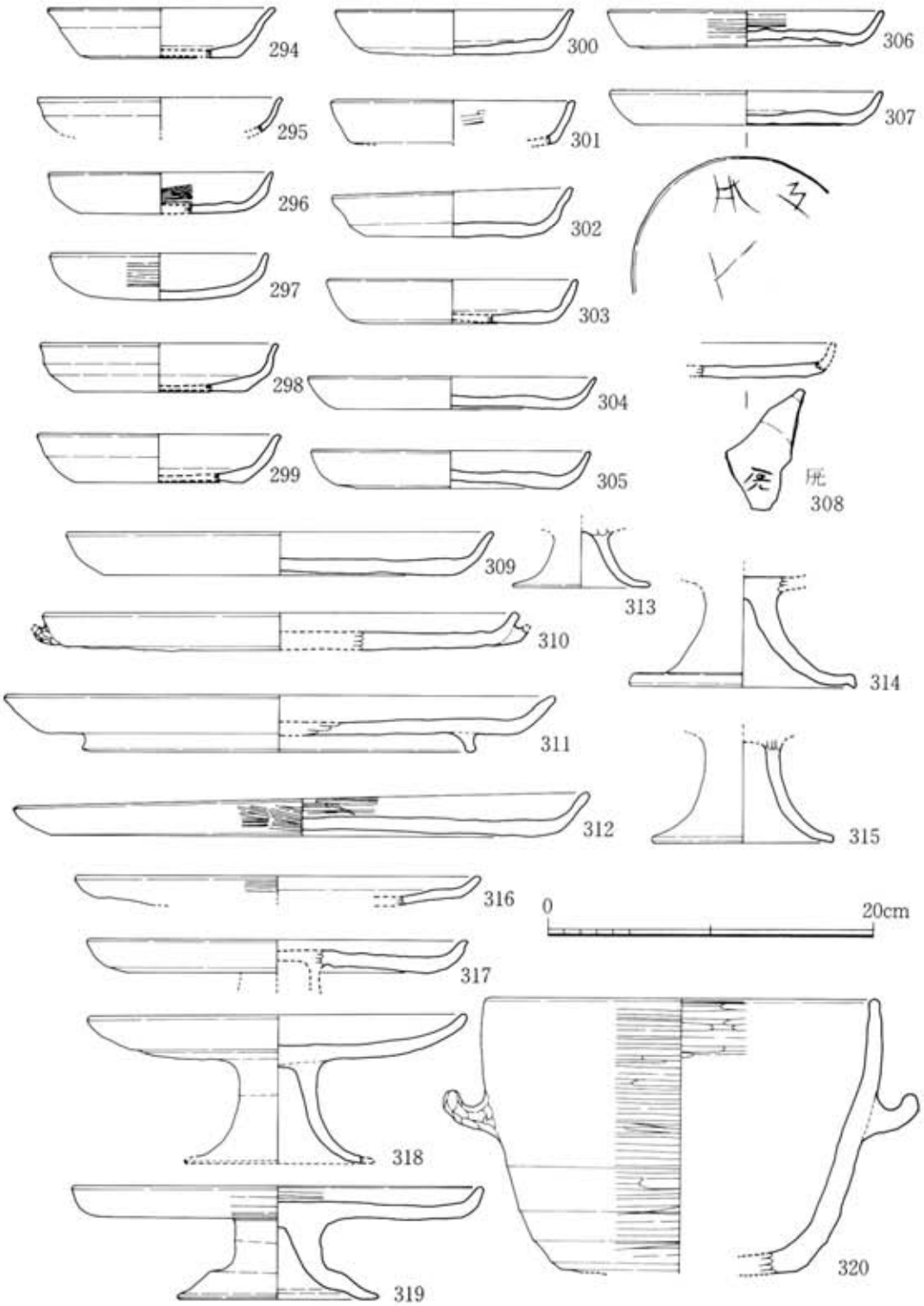


Fig. 169　ＳＫ775 土壙出土土器３（1/4）

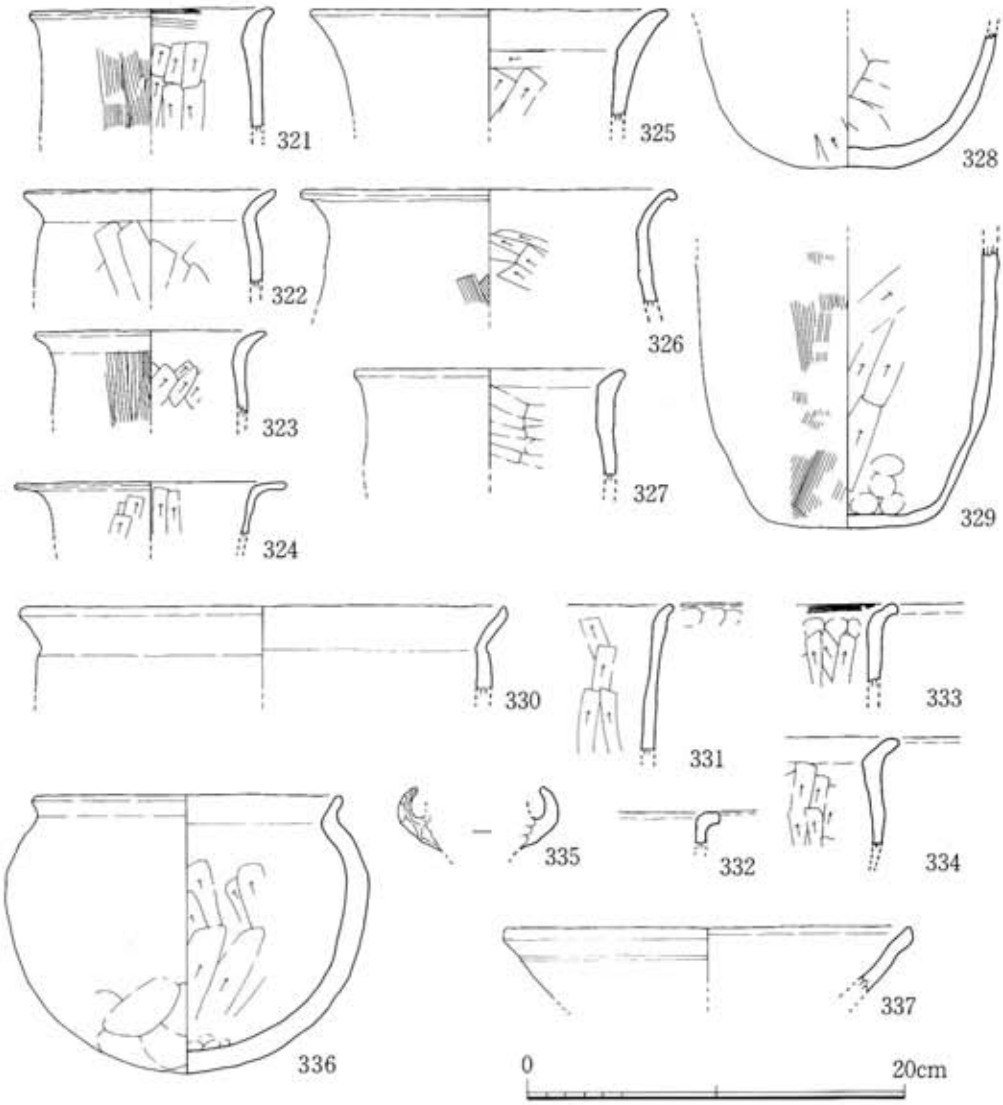


Fig. 170 SK775 土壙出土土器4 (1/4)

底部外面の調整については、手持ちヘラ削りのものと回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げているものがある。なお一部底部外面にヘラ記号とも解することができる文字(?)があり、さらに判読にやや難があるものの「屍」と記されているものも出土している。皿についても同じ形態で法量差によって大小の別がある。また高台の有無の別とともに、把手を貼付する大型の皿も出土している。

高坏は、先述した皿に緩やかに開く脚部や、脚裾端部において屈曲する脚を付すものがあり、小型のものと中型のもののみ出土している。坏部調整については、内外面回転ヘラ磨き、および底部は回転ヘラ削り後粗い回転ヘラ磨きによる最終調整を行っている。

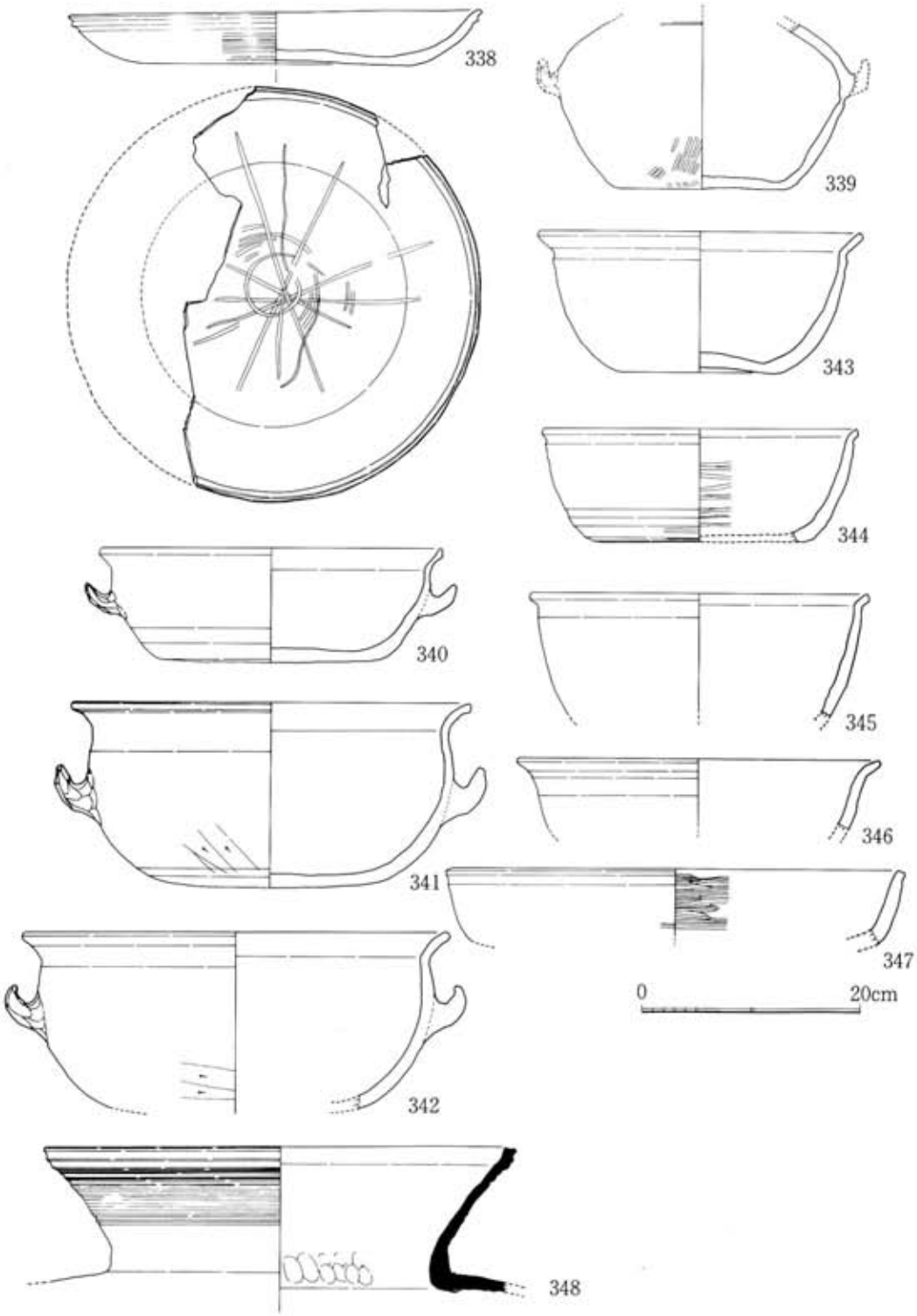


Fig. 171 SK775 土壙出土土器5 (½)

甕は外面ヘラ磨きによって仕上げられている精製の甕と、外面ハケ・内面ヘラ削りによって仕上げられている粗製の甕があり、さらには把手を有し調整等から精製および粗製の中間的把手付き甕が出土している。精製の甕は、底部からほぼ直線的に口縁部へ至り、口縁端部をやや平坦に仕上げかつ内外面ともに回転ヘラ磨きによって仕上げているもので、把手を２カ所に付している（320）。またほぼ球形に近い資料で、頸部より「く」の字状に屈曲する形状を呈し、外面タタキの後丁寧にナデ消しており、内面は縦方向のヘラ削りによって仕上げる大型の甕がある。全体の甕の出土量に比せば、精製の甕はごく微量と言わざるを得ない。

註２）調整痕跡の残存度合いについても、磨きは器面に浅く施されるのに対し、削りという行為は器体に含まれる砂粒の移動を伴っているため、器体に深く残されることになる。この浅深の度合いによって観察できる調整属性にも限界が生じることになり、ここでは形態属性を重視し、調整属性については参考程度にとどめた。

ＳＫ776出土土器（Fig.172・173, ＰＬ.120）

須恵器　出土した器種には蓋・坏・壺があり、土師器に比して数量的に非常に劣っている。

蓋は、全てつまみを貼付するもので、349がややつまみ高があるものであるのに対して、他の２者350・351は偏平なつまみを有している。口縁部形状は、断面三角形を呈しており、天井部外面は全て回転ヘラ削りによって最終調整を行っている。

坏には、小坏352・坏353があり破片数としては坏が多く出土している。高台の有無については高台付坏が出土しており、体部から底部への境界は緩やかに移行し、底部外面は粗いナデによって仕上げている。

壺は、外方へ張り出す高台を有し肩部が鋭角な形状を示し、肩部屈曲部よりやや下位から回転ヘラ削りによって仕上げられている。形状から長頸壺の体部であると考えられる。

土師器　須恵器に比して多量かつ多器種にわたって出土しており、蓋（坏蓋・壺蓋）・坏（無高台坏・有高台坏）・高坏・皿（無高台皿・有高台皿）・甕（把手付甕・無把手甕）等が出土している。

蓋については、偏平なつまみを貼付するもの354・355と環状つまみを有するもの356～359の２種があり、口縁部形状は断面三角形を呈するものと丸い形状に近い断面三角形を呈するもの、さらには口縁部を長く引き出すものがある。特に387については内外面ともに回転ヘラ磨きを施し、非常に精選された胎土の特徴を有しており、口縁部形状についても他の環状つまみを有するの形状と比べて、丁寧に断面三角形を作り出している。361については、形状から壺に伴

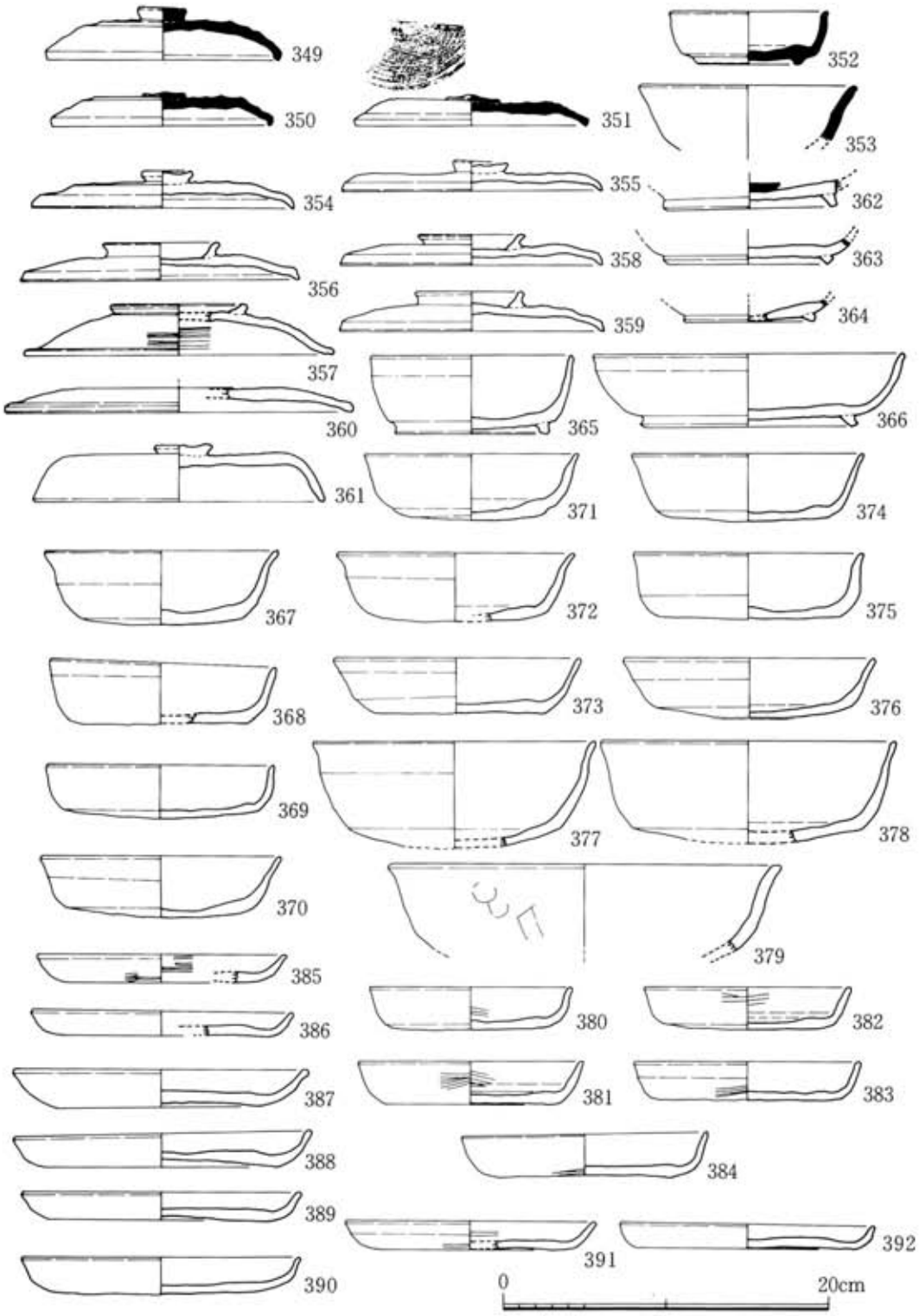


Fig. 172 SK776 土壙出土土器1 (¼)

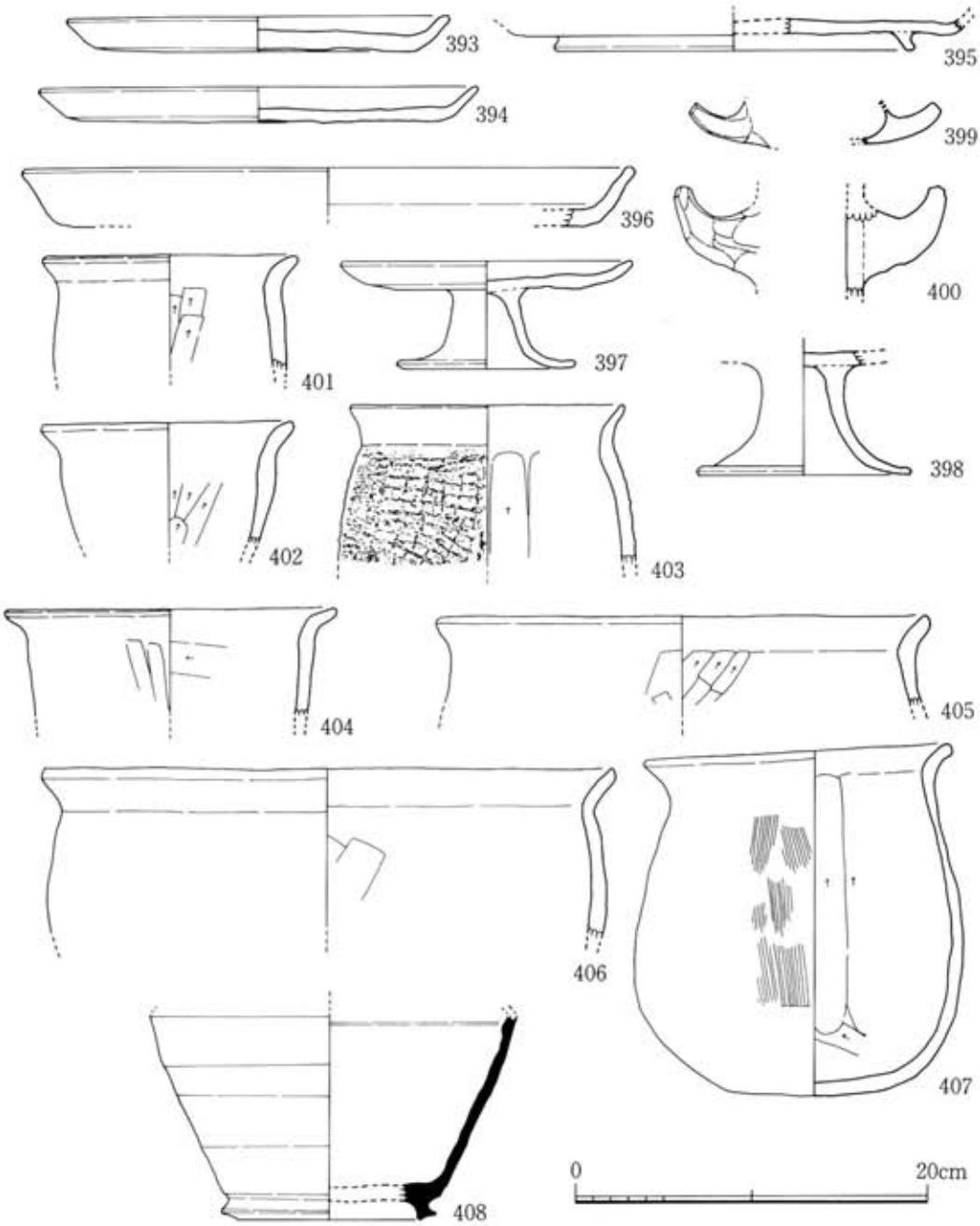


Fig. 173　SK776 土壙出土土器2 (1/4)

う蓋と考えられ、他は坏に伴うものと考えられる。

坏および皿については、高台を貼付するものと無高台のものがあり、高台を有する坏・皿の底部外面の調整は、粗いナデもしくは回転ヘラ削りをもって最終調整を行っており、無高台の

坏・皿については、全て手持ちヘラ削りによって底部外面を仕上げている。なお坏については、器面摩耗が著しいものが多く、調整属性の細部にわたって観察できないという欠点があり記述できないが、皿については多くのものにおいて、内外面とも回転ヘラ磨きによって仕上げられている。坏・皿ともに底部から体部への境界部分が緩やかに移行し丸みを有している。

高坏については、緩やかな曲線を描く脚部形状を呈しており、器高の低い坏部（皿と分類して良いと考える）が上にのる。

甕は、把手を貼付するものと把手を有さないものがあり、つかないものは法量差から大小の別がある。内面はいずれも不定方向のヘラ削りによって仕上げられており、外面はハケによって調整されている。しかし400に関しては、口縁部内外面および体部内面は他の甕と同様の調整属性を有しているものの、外面において粗い格子状のタタキを施している。また把手についても大小の別があることから、把手付きの器種についても大小の別があるものと考えられる。

その他の土壙出土土器（Fig.174～178，ＰＬ．121・122）

先述した土壙ＳＫ764・775・776以外の土壙出土遺物は、少量・少器種に限られるものであり、定性という見地から捉えなければならない資料群である。

須恵器　出土器種は、坏・蓋・長頸壺・把手付甕・甕等が出土しており、特にＳＫ737出土の把手付甕は、内面において不定方向のヘラ削りを施し、体部外面の調整は体部下半においてカキ目痕跡をとどめ、上半は回転ナデによって仕上げられている。色調は暗赤褐色を呈するという特徴を持っている。またＳＫ759出土の坏の中で無高台坏と考えられる。416は、体部下位から丸みをもって内傾気味に立ち上がり、口縁端部付近においてやや外反する形状を有するものである。

土師器　須恵器に比して多器種にわたっており、坏・蓋・甕・皿高・坏・短頸壺等がある。

ＳＫ734出土坏436は形態から見ると底部より外方へやや開き気味に立ち上がり、器高の高い形状を有しているものの、調整について見ると手持ちヘラ磨きによって仕上げられている。ＳＸ781出土坏429・430 のうちヘラ磨きによって仕上げられている。ＳＫ781出土坏429・430のうち429は　よりやや丸みを有しつつ外方へ立ち上がる形状を呈し、内外面とも回転ヘラ磨きによって仕上げられており、底部外面は回転ヘラ削りによって最終調整がなされている。それに対し坏430は、底部よりほぼ直角に立ち上がり口縁部へ至る形状を有し、底部外面は回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げられている。

以上の土壙出土土器の傾向について、特にＳＫ764・775・776より出土した土器群は、その構成器種は、その構成器種もさることながら一括性を伴っていることから、佐賀平野中央部における官衙関連遺跡の土器群として把握することができる一群と考えられる。上記３遺構の性

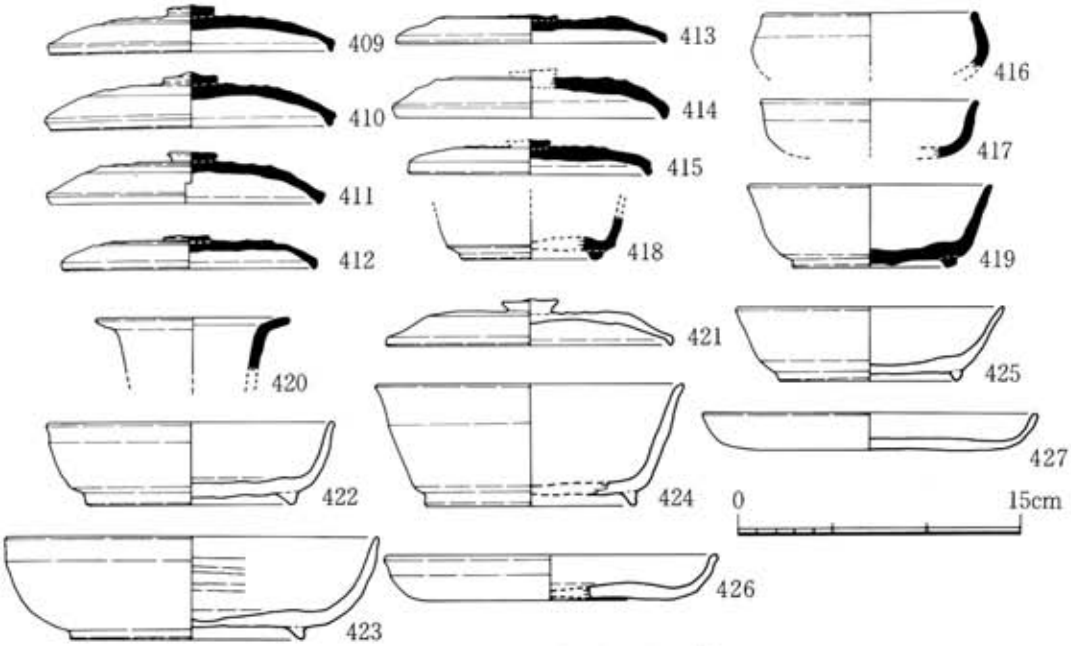


Fig. 174　ＳＫ759 土壙出土土器（¼）

格については、土器出土状況ならびに出土土器群から考えて、廃棄土壙と考えることができるものの、遺構配置状況からそれぞれに異なった性格が存在しているものと考えられる。特に掘立柱建物跡ＳＢ763の方向に一致する形で検出できたＳＫ764・781については、土壙の長軸方向が建物跡に一致することから建物跡に伴う土壙と解することができ、土壙の埋没年代から建物の存続時期の一端を把握することが可能であると考えられる。この点については土壙の機能含めた建物跡との関係を把握することが必要であり、今後この点について検討が必要であろう。さらに当該土壙から出土した土器群の出土傾向が、供膳形態を主としミニチュア土器等の他の土壙とは性格の異なる土器群が出土していることから、建物跡ＳＢ763の性格を把握する上において、参考資料に位置づけられる。

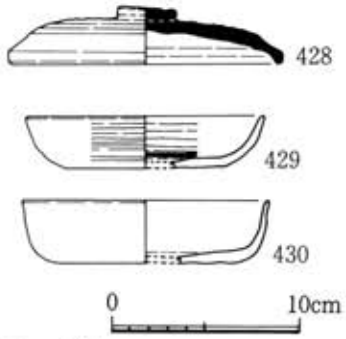


Fig. 175
ＳＫ781 土壙出土土器（¼）

土壙に投棄された土器群の時間軸上の位置づけは、個々の属性によって構成される型式のみの視点に立つと、多量に土器群を出土した土壙の土器廃棄および埋没時期は、長い時間幅を有しており一括性に疑問が生じる。しかし遺構調査時の所見に基づくならば、一括廃棄の状況が非常に強い。したがって各型式の定性分析ではなく、各型式の占める割合の量的把握を行うと、８世紀でも頭初から存続している型式と８世紀の中頃以降に存続幅を有している型式が共存している中に、前者が量的に卓越し後

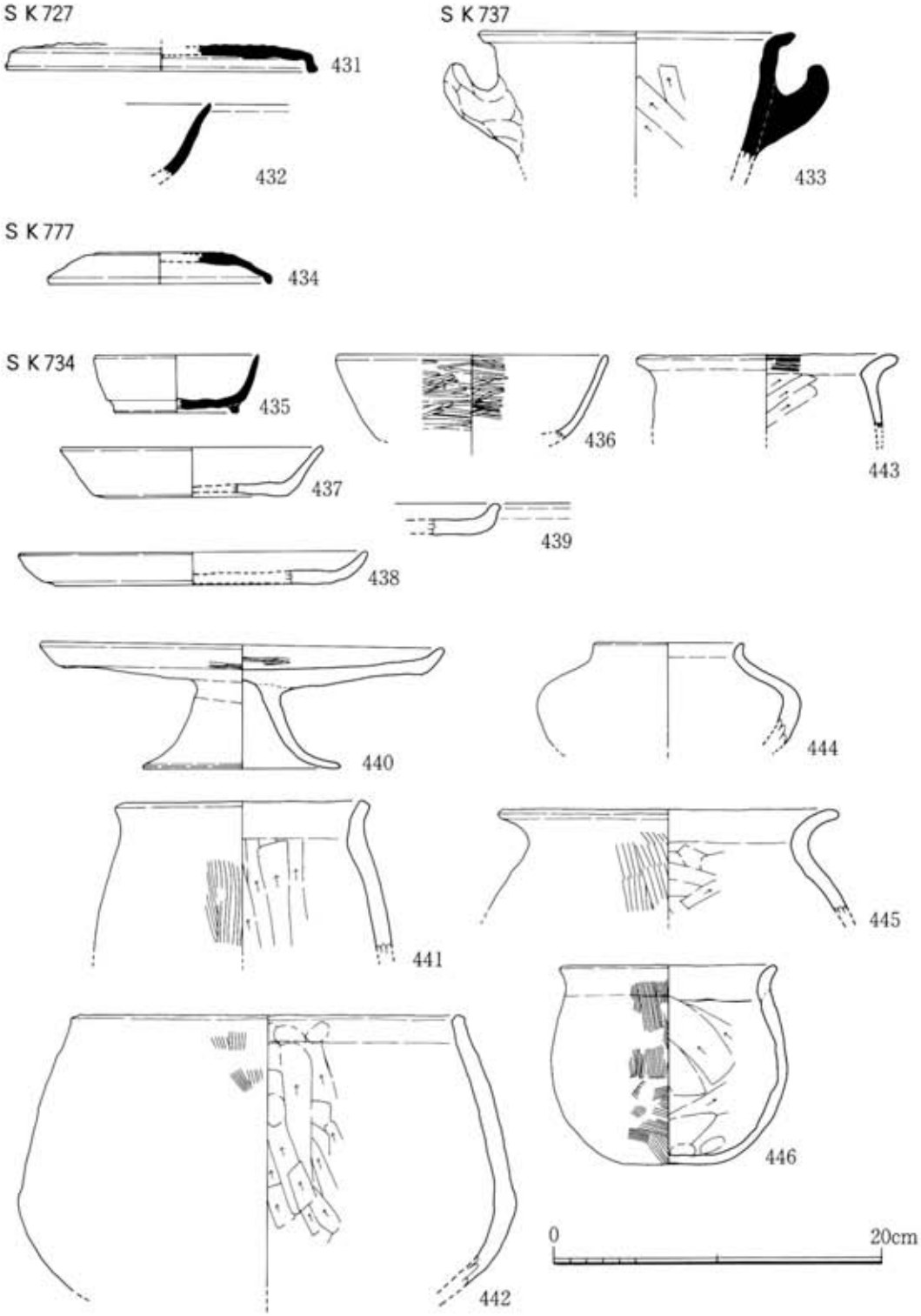


Fig. 176 SK727 ・782 ・777 ・734 土壙出土土器 (1/4)

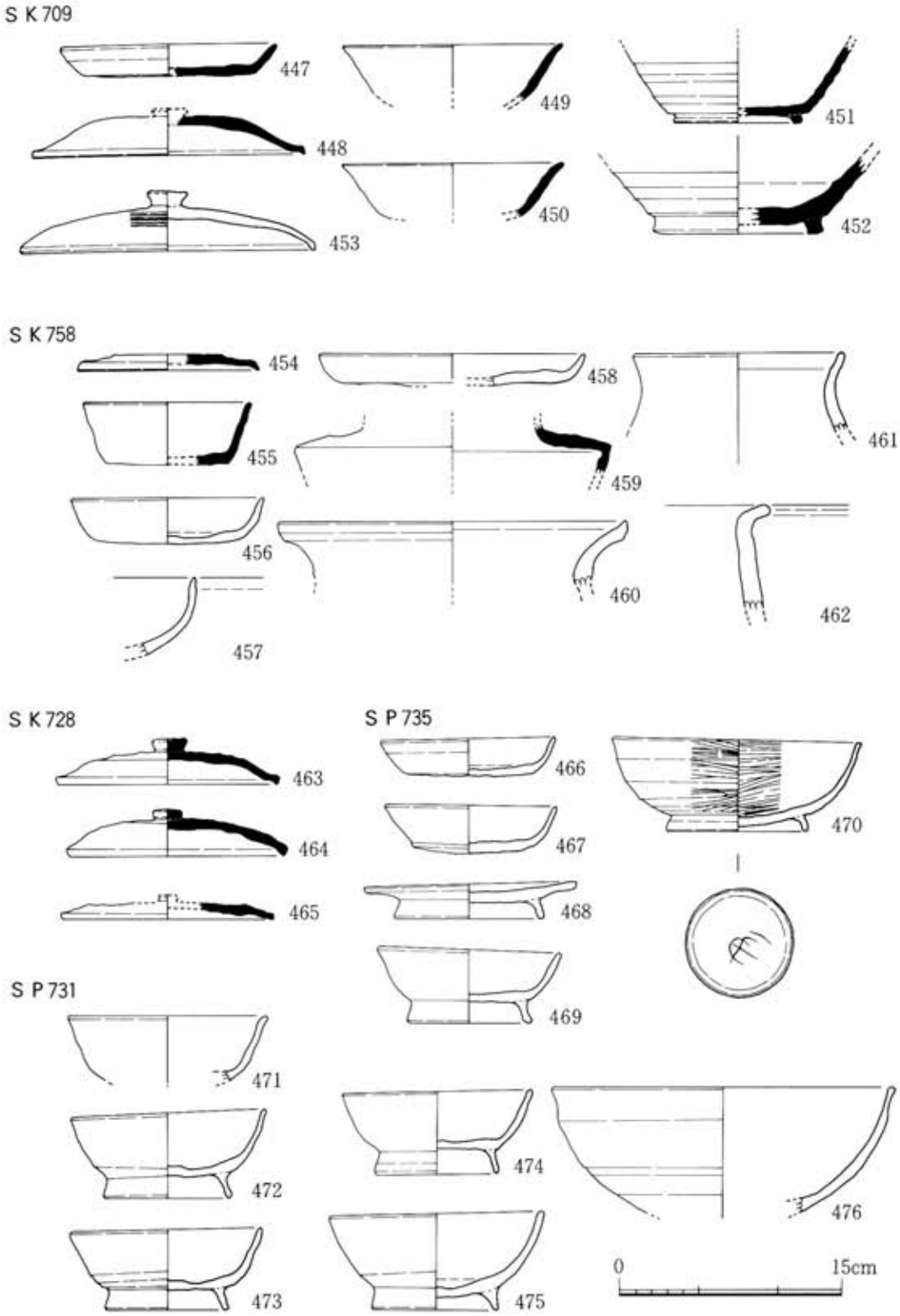


Fig. 177 S K709 ・758 土壙および土壙墓出土土器（1/4）

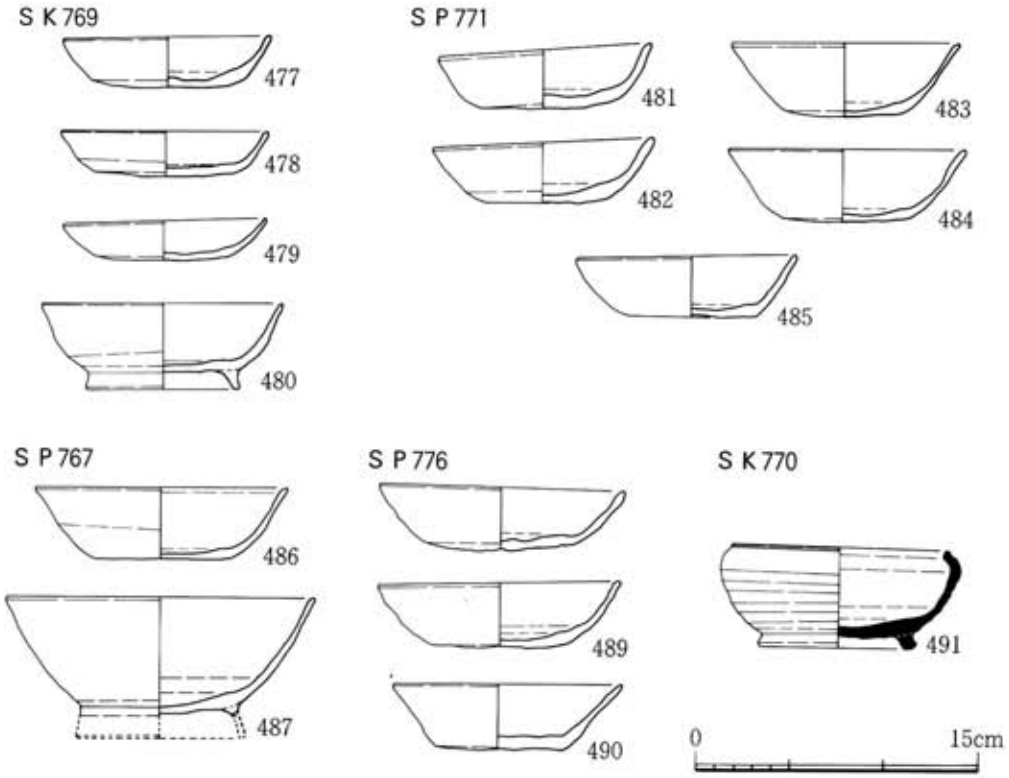


Fig. 178　ＳＫ769 ・770 土壙および土壙墓出土土器（¼）

者が微量ながら存在している傾向が読み取れる。つまり一つの解釈として、出土土器型式の量的な傾向から土壙内土器の廃棄および埋没時期は、８世紀前半から中頃の一点を示す資料であると考えられる。したがって微量に存在している８世紀中頃から後半に一般的な資料は、出現時期の一端を示しているものと解する。

また、須恵器と土師器の構成比のみに視点を置くと、土師器が非常に卓越しているという特徴を有している。この様な状況は、久池井Ｂ遺跡第Ⅲ区のみの傾向であめのか、肥前国府周辺における一般的な傾向として把握できるのかは、今後の遺構出土一括資料の検討から明らかになってゆくことと考える。ところで先述した３遺構の出土傾向のみを捉えると、須恵器と土師器の構成比に違いがあるものの、須恵器個々の型式供伴ならびに土師器個々の型式供伴を見ると、「天平六年（734年）」銘木簡を出土した、太宰府史跡検出の溝ＳＤ2340における土器群の出土傾向に非常に近い傾向を示しているといえる。

参考文献・九州歴史資料館『太宰府史跡－昭和58年度調査概報－』1983
・九州歴史資料館『太宰府史跡－昭和61年度調査概報－』1986

註３）　自然科学分析に適用されてきた概念であるが、今後出土した土器の型式分類（定性）にとどまるのではなく、各型式の出土土器群中に占める割合（定量）をも考慮する必要がある。

掘立柱建物跡出土土器（Fig.179）

掘立柱建物跡からの出土傾向は、須恵器（坏・蓋）・土師器（坏・皿・蓋・甕）が出土しており、先述した土壙出土土器群に包括されるものである。特に建物跡ＳＢ773より出土した須恵器・高台付坏494は底部から体部への移行が緩やかであり、外方へ張り出す高台を貼り付け、接合部分外面に明瞭な稜線を有している。さらに土師器・高台付坏493は、先述した須恵器・坏よりさらに丸みのある底部から体部への移行形状を示すものの、非常に小さな断面台形を呈する高台を貼り付けている。

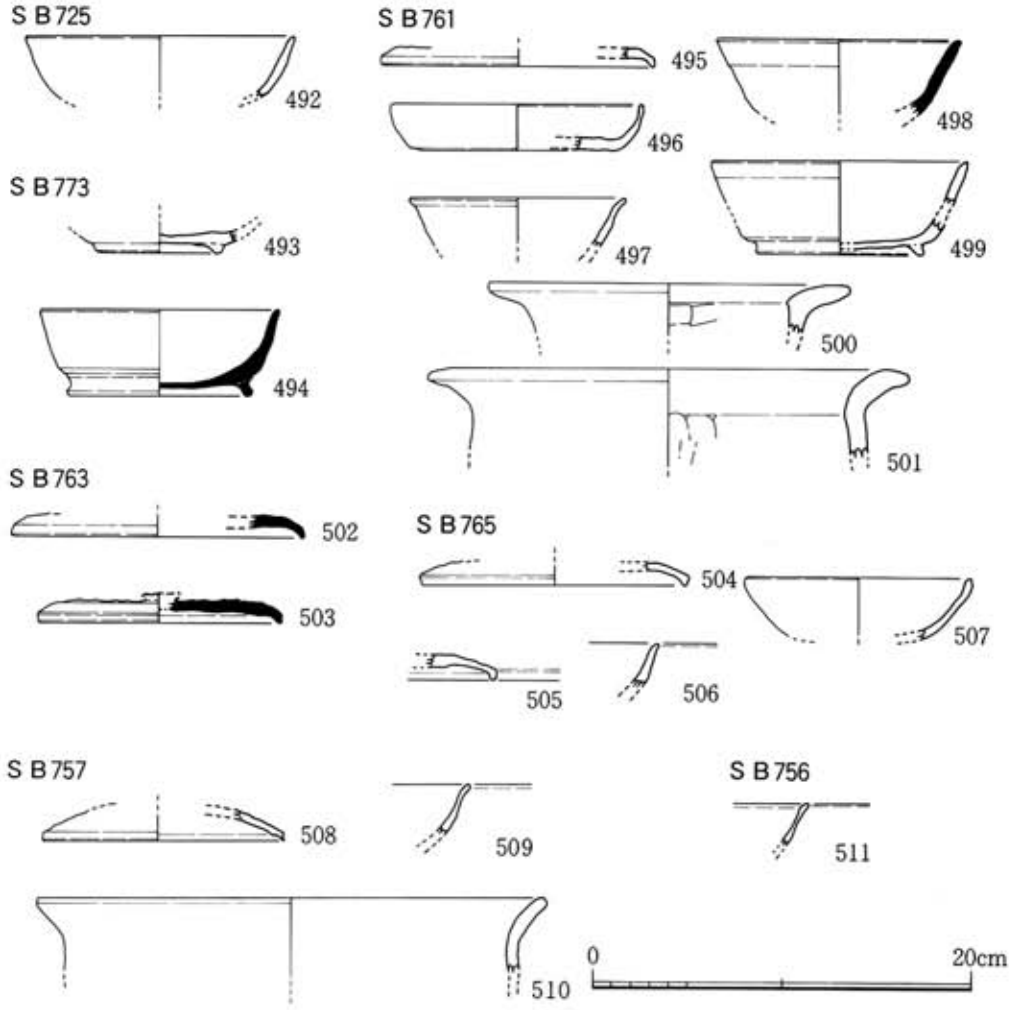


Fig. 179　掘立柱建物跡柱穴出土土器（¼）

ところで掘立柱建物跡柱穴出土の土器は、建物建築時ならびに建物廃絶後に柱穴が埋没する過程において混入する遺物であることから、当該遺跡においても非常に出土量が少ないものであり、かつ掘立柱建物跡の存続期間を確定できる性格のものではないと考えられるが、遺構廃絶時期に最も近い時期を特定する資料として参考になる。先述した建物跡ＳＢ773出土遺物は、諸特徴から８世紀初頭から前半に位置づけられる資料であり、建物跡ＳＢ773の存続時期の下限に近い時期を示すものと考えられる。

他の建物跡出土資料は、全て土壙出土資料の傾向に包括されるものであり、土壙内に土器が投棄され埋没した時期である８世紀前半から中頃の時期が考えられ、建物跡の存続時期の下限の一端を示すものと考えられる。

井戸出土土器（Fig.180, ＰＬ.122）

井戸からは、それぞれの遺構から単体で出土している。全て土師器であり、特にＳＥ755出土の無高台坏は、底部から体部への移行が緩やかであり体部外面に３条の沈線が巡っている。調整は器面摩耗のため不明確である。この土器素掘りの井戸のほぼ中位から出土しており、井戸埋没途中と考えられる資料であり、井戸廃絶の時期を明確に示す資料にはならない。さらに、ＳＥ754出土の埦形の土器は、底部外面回転ヘラ切り後非常に粗いナデによって仕上げており、形状についてはやや丸底気味の底部から内湾する体部形状を呈し、平坦に近い口縁端部である。類例が無く、時期判断が困難であるものの、底部処理の状況から考えて奈良期後半以降の製品であろうと考えられる。

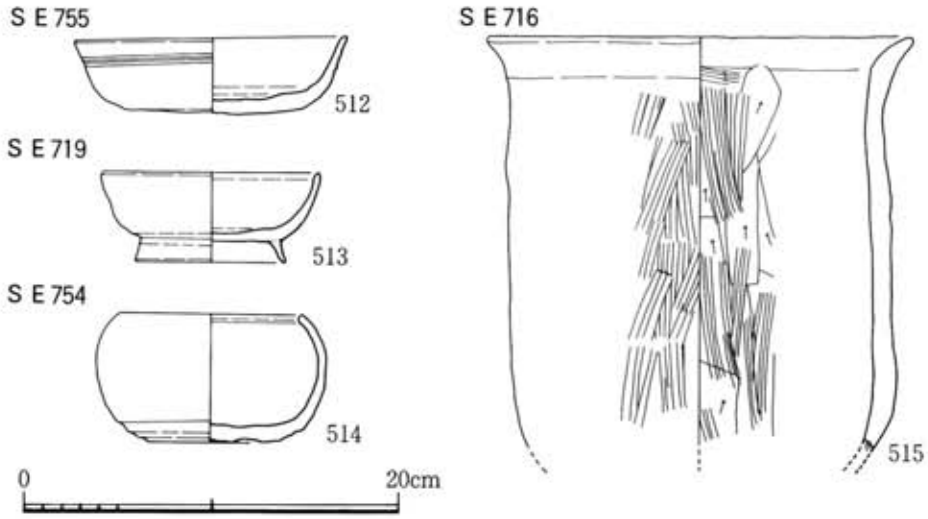


Fig. 180　井戸跡出土土器（¼）

溝出土土器（Fig.181, PL.122）

須恵器　出土器種には坏・蓋・甕があり、形態的特徴は先述した土壙出土土器群に非常に近似した傾向を有しているたけ説明を省略するが、SD713出土無高台坏528は底部から体部への移行が緩やかであり、直線的に外方へ開く口縁部形状を呈しており、底部外面を手持ちヘラ削りによって仕上げている。さらにSD753出土の坏520は体部外面を非常に強く回転ナデによって仕上げている。また、SD741出土の蓋538はつまみ高が高く天井部・体部の境界が不明瞭であり天井部外面の調整は、回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げているものである。

土師器　出土した器種には坏・蓋・皿・短頸壺・甕があり、ほぼ須恵器同様に土壙出土傾向に包括される。また、土製品として土錘が出土している。

b　平安時代（Fig.177・178・182, PL.121）

久池井B遺跡第Ⅲ区において平安時代に比定できる遺構は、当該期におけめ遺跡の性格を明瞭に表すかのように、ほとんどが墓に関係すると考えられる遺構から出土している。遺構の性格および出土状況から、いずれも土器群も一括性を帯びており、当該期における土器の供伴関係を把握するうえで、非常に良好な資料群に位置づけることができる。出土期種としては、供膳形態であるが、高台付坏は平底からやや明瞭に屈曲し直線的に立ち上がる形状を示す。また土壙SK737出土の黒色土器B類の椀、底部から緩やかに立ち上がりやや平坦な口縁端部形状を呈し、内外面共に非常に丁寧な手持ちヘラ磨きによって仕上げられている。底部外面にヘラ記号状の線刻がある。他に無高台坏・鉢・瓶等が出土しているが、全般的に直線的な体部ならびに口縁部形状を呈する土器群が主体を成す。この様な傾向にある土器群の供伴傾向は、大宰府史跡第35次調査検出の土壙SK678ならびに君畑遺跡第18号副葬の土器群の供伴傾向に非常に近似しており、年代としてはそれぞれの遺構に付与されている9世紀末から10世紀初頭の時期が考えられる。しかし、同一期間内における造墓活動を考慮しているのであり、同一時における造墓と考えているわけではない。なぜならば否定的要素として、墓の主軸方向が非常に無秩序であることがあげられる。

またこれら土器群の供伴する形でSP771からは、土師器・無高台坏に伴って円形素文鏡片が出土しており、久池井B遺跡第Ⅰ区の鏡片副葬墓をはじめてとして、近接する佐賀市久保泉町所在の泉三本栗遺跡検出のSP001土壙墓出土の円形素文鏡片を考えると、佐賀平野北部、特に中央部の国府周辺における平安期の特質がうかがえる。

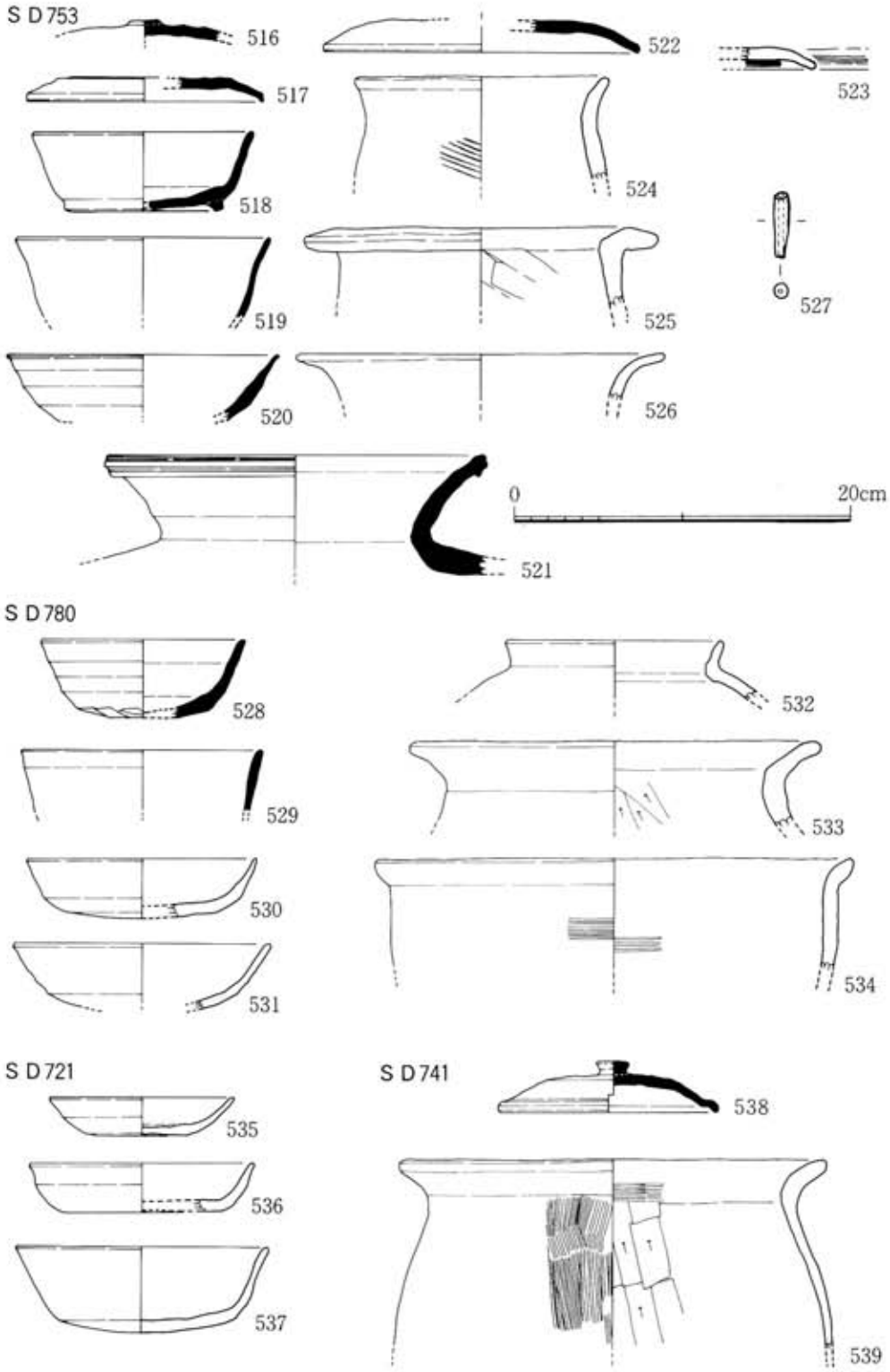


Fig. 181　溝跡出土土器（¼）

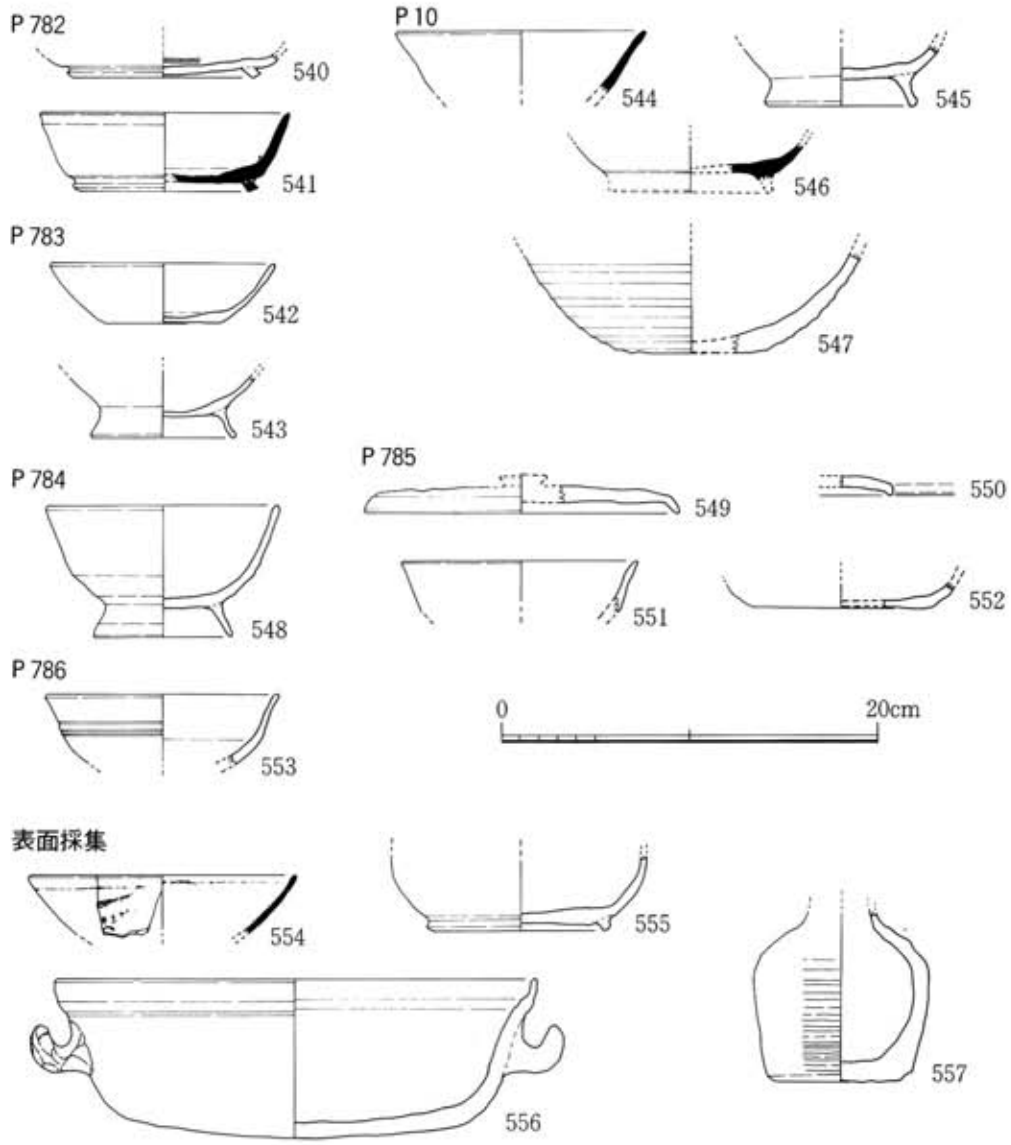


Fig. 182 小穴・表面採集土器 (¼)

Tab.9 Ⅲ区須恵器・土師器一覧表

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴 ・ そ の 他
165－144 8908799	SK764	須恵器 蓋	口径 14.4 残高 1.5	口縁部屈曲が明瞭な断面三角形の形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。天井部内面のみ、その後不定方向のナデ。
－145 8909201	〃	須恵器 蓋	口径 13.4 器高 3.0	偏平なつまみを貼付し、やや器高の高い体部から、口縁部屈曲が明瞭な断面三角形の形状を示す。	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
165－146 8908797	SK764	須恵器 蓋	口径　13.5 器高　1.8	偏平なつまみを貼付し、口縁部屈曲が明瞭な断面三角形の形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。天井部内面のみ、その後不定方向のナデ。
－147 8908798	〃	〃	口径　15.0 残高　0.9	口縁部屈曲が明瞭な断面三角形の形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。天井部内面のみ、その後不定方向のナデ。 SK759と接合。
－148 8909203	〃	〃	口径　14.2 器高　1.5	偏平なつまみを貼付し、口縁部外面における稜線明瞭であるが、口縁部内面において不明瞭。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。天井部内面のみ、その後不定方向のナデ。
－149 8909202	〃	〃	口径　15.2 器高　2.0	偏平なつまみを貼付し、口縁部屈曲が明瞭な断面三角形の形状を示す。	〃
－150 8908800	〃	〃	口径　10.5 器高　1.8	つまみを付さない小型の蓋で、不明瞭な断面三角形の形状を示す。	〃
－151 8909226	〃	〃	残高　0.8	不明瞭な断面三角形の口縁端部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－152 8909220	〃	〃	残高　1.7	やや明瞭な断面三角形の口縁端部形状を示す。	〃
－153 8909204	〃	須恵器 坏	口径　14.5 器高　4.2	底部・体部の移行が緩やかで直線的に外上方へ伸びる形状を示し、内側接地の断面四角形高台。	〃
－154 8908384	〃	土師器 蓋	残高　1.8	口縁部屈曲が長く、丸みを有した口縁端部形状を示す。	外面：回転ヘラ削り後、回転ナデ。内面：回転ナデ。
－155 8909238	〃	〃	残高　1.5	口縁部屈曲が長く、やや丸みを有した口縁端部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－156 8908380	〃	〃	残高　1.5	口縁部外面における稜線は明瞭であるが、口縁部内面において不明瞭な断面三角形を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－157 8908381	〃	〃	残高　1.4	内外面ともに稜線を有する断面三角形の形状を示す。	〃
－158 8908382	〃	〃	残高　1.3	口縁部外面における稜線は明瞭であるが、口縁部内面において不明瞭な断面三角形を示す。	〃
－159 8908383	〃	〃	残高　1.0	不明瞭な丸みのある断面三角形の形状を示す。	〃
－160 8908784	〃	〃	残高　2.3	丸い口縁端部形状を示す。大型の製品に伴う蓋と考えられる。	〃
－161 8909237	〃	〃	口径　15.9 残高　2.2	口縁部内面にやや稜線を有する、丸みのある断面三角形の形状を示す。	〃
－162 8908793	〃	〃	口径　25.9 器高　3.2	偏平なつまみを貼付し、長く折り曲げる口縁部形状を呈し、大型の皿を天地逆転させた形状を示す。	天井部内面は回転ナデ後、回転ヘラ磨き。天井部外面は丁寧な回転ヘラ削りの後、回転ヘラ磨き。
－163 8908385	〃	土師器 壺蓋	口径　14.1 器高　4.8	やや高いつまみを貼付し、長く折り曲げる口縁部形状を示し、坏を天地逆転させた形状を示す。	天井部内面および口縁部内外面は回転ナデ。天井部外面は回転ヘラ削り。
－164 8908458	〃	土師器 坏	口径　18.2 器高　4.8	底部・体部の移行が緩やかで、口縁端部がやや外反し、やや外側に張る高台を貼付。	底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデ。他の部位は回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－165 8908457	〃	〃	口径　18.0 器高　4.7	〃	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
165－166 8908785	SK764	土師器 坏	口径 12.0 器高 3.2	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に口縁部に至る形状を示す。	底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデ。他の部位は回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－167 8908786	〃	〃	口径 11.9 器高 4.0	〃	〃
－168 8909244	〃	〃	底径 9.1 残高 1.5	底部・体部の移行が緩やかで、外方へ張り出す高台を貼付。	底部外面は回転ヘラケズリ後、粗いナデ。
－169 8909229	〃	〃	口径 15.0 残高 3.1	底部から体部への移行が緩やかで、丸味をおびた体部より、わずかに口縁部が外反する。	内外面ともに、回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－170 8908790	〃	〃	口径 16.9 残高 3.0	〃	〃
－171 8909234	〃	〃	残高 3.4	丸みのある体部からやや外反する口縁端部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－172 8908789	〃	〃	口径 11.2	〃	内外面ともに回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－173 8909232	〃	〃	口径 15.3 器高 3.6	〃	内外面ともに回転ナデ。
－174 8909231	〃	〃	口径 13.7 器高 3.8	丸みを有し、内傾する体部形状からやや外反する口縁端部形状を示す。	〃
－175 8908452	〃	〃	口径 13.4 器高 3.5	底部・体部の移行が緩やかで、やや内湾気味に立ち上がる体部形状を示す。	底部外面は手持ちヘラ削り。他の部位は内外面とも回転ナデ。
－176 8909207	〃	〃	口径 13.5 器高 3.2	底部・体部の移行が緩やかで、やや外反気味に立ち上がる体部形状を示す。	〃
－177 8908453	〃	〃	口径 14.3 器高 3.6	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に立ち上がる体部形状を示す。	〃
－178 8909228	〃	〃	口径 15.2	底部・体部の境界に明瞭な稜線を有し、やや内湾気味に立ち上がる体部形状を示す。	〃
－179 8908788	〃	〃	口径 13.2 器高 3.0	〃	〃
－180 8909206	〃	〃	口径 12.5 器高 3.2	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。	内外面ともに回転ナデ。口縁部外面に2条の沈線。
－181 8909300	〃	〃	口径 12.0 器高 3.2	底部・体部の移行が緩やかで、やや外反気味に立ち上がる体部形状を示す。	底部外面は手持ちヘラ削り。他の部位は内外面とも回転ナデ。
－182 8908454	〃	〃	口径 14.9 器高 2.9	底部・体部の境界に明瞭な稜線を有し、体部中位にて僅かに屈曲し、やや外反する口縁部である。	〃
－183 8908451	〃	〃	口径 15.0 器高 3.1	〃	〃
－184 8908456	〃	〃	口径 13.4 器高 4.6	底部・体部の移行が緩やかで、やや外反気味に立ち上がる体部形状を示す。器高が低い。	〃
－185 8908455	〃	〃	口径 10.7 器高 4.4	底部・体部の境界に明瞭な稜線を有し、やや外反する口縁部である。器高が低い。	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
165－186 8908787	SK764	土師器 坏	口径　9.8 器高　3.5	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に立ち上がる体部形状を示し、やや口縁端部において外反する。	底部外面は、手持ちヘラ削り。内面は回転ナデ。外面は回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－187 8908765	〃	〃	口径　18.6 器高　5.9	底部・体部の境界に明瞭な稜線を有し、体部中位にて僅かに屈曲し、やや外反する口縁部である。	内外面ともに回転ナデの後、回転ヘラ磨き。
－188 8909241	〃	〃	口径　13.2 器高　1.3	〃	〃
－189 8908386	〃	土師器 鉢	口径　13.8 器高　1.7	丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る形状を示す。	〃
－190 8908782	〃	土師器 小皿	残高　2.3	平底の底部から直線的に外上方へ開く体部形状を示す。	底部外面：回転ナデ。他の部位は、内外面ともに回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－191 8908794	〃	土師器 皿	口径　26.3 器高　1.8	〃	底部外面：回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り。体部内面：回転ナデ。底部内面：回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－192 8908778	〃	〃	口径　25.5 器高　1.8	平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる体部形状を示す。	〃
－193 8908387	〃	〃	口径　24.4 器高　2.1	〃	底部外面：回転ヘラ削り。他の部位：回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－194 8908776	〃	〃	口径　24.9 器高　2.1	〃	〃
－195 8908780	〃	〃	口径　21.5 器高　1.8	〃	底部外面：回転ヘラ削り。他の部位：回転ナデ。
－196 8908781	〃	〃	口径　23.2 器高　1.1	平底の底部から直線的に外上方へ開く体部形状を示す。	〃
－197 8908779	〃	〃	口径　22.5 器高　1.9	〃	底部外面：回転ヘラ削り。他の部位：回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－198 8908777	〃	〃	口径　22.0 器高　2.1	〃	底部外面：回転ヘラ削り。他の部位：回転ナデ。
－199 8909240	〃	土師器 高坏	口径　21.9	坏部のみ残存。平底の底部からやや直線的に立ち上がり、平坦な口縁端部形状を示す。	底部外面：回転ヘラ削り後、回転ヘラ磨き。他の部位は、回転ヘラ磨き。
－200 8908783	〃	〃	口径　25.2 器高　6.6	平底の底部から直線的に外上方へ開く体部形状を示し、緩やかに開く脚部を貼付。	坏部・脚部ともに内外面、回転ナデ。坏部内面のみその後回転ヘラ磨き。
－201 8909236	〃	土師器 盤	口径　29.5 器高　3.8	平底の底部から直線的に外上方へ開く体部形状を示す。	内外面ともに回転ヘラ磨き。
－202 8909242	〃	〃	口径　32.2 器高　4.1	平底の底部から直線的に外上方へ開く体部形状を示す。口縁端部をややつまみ出している。	底部外面回転ヘラ削り後、回転ヘラ磨き。他の部位は、回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－203 8909245	〃	土師器 ミニチュア土器・鉢	口径　3.0 器高　2.5	手づくねにより、やや尖底気味に成形。	指頭圧
－204 8909246	〃	〃	口径　3.3 器高　3.3	〃	〃
－205 8908769	〃	土師器 甕	口径　28.1	外上方へ広く開く形状を示す。	体部外面：ハケ。体部内面：縦方向のヘラ削り。口縁部内外面は、ナデによって仕上げる。

図版番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
166－206 8909205	SK764	須恵器 壺	底径 7.3	平底の底部から直線的に外上方へ立ち上がる。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。内面：回転ナデ後、底部のみ不定方向のナデ。外面は不明確。
－207 8908772	〃	土師器 壺	胴径 12.9	丸底の底部から球形の体部形状を示す。	内面：丁寧な横方向のナデ。外面は不明確。
－208 8909251	〃	土師器 甕	口径 14.2 器高 23.4	やや長胴の体部形状から「く」の字形に外反し口縁部へ至る。	内外面ともに非常に粗雑なナデ。体部外面下位のみ未使用ハケ状原体による調整痕跡か？。
－209 8908775	〃	土師器 大鉢	口径 25.2 器高 12.3	丸底の底部からやや丸みをもって立ち上がり、ほぼ直角に曲折する頸部形状を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り後粗いナデ。体部外面：横方向のナデ。底部・体部内面：縦方向のヘラ削り。
－210 8908766	〃	土師器 盤	口径 39.5	平底の底部から直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げる。	内外面ともに丁寧な手持ちのヘラ磨き。
－211 8908767	〃	土師器 大甕	口径 46.1	直立気味に立ち上がり、ほぼ直角に外方へ曲折し、口縁部へと至る。	体部外面：縦方向のナデ。体部内面：縦方向のヘラ削り。口縁部内外面：横方向のナデ。
－212 8908247	SK775	須恵器 蓋	口径 14.9 器高 2.9	中央部がやや隆起した形態を示すつまみを貼付、口縁部は内外面に明瞭な稜線を有し断面三角形。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は、回転ナデ。
－213 8908240	〃	〃	口径 14.0 器高 2.8	偏平なつまみを貼付し、口縁部は内外面に明瞭な稜線を有し、やや丸みのある断面三角形。	天井部外面：回転ヘラ削り。天井部内面：回転ナデの後不定方向のナデ。他の部位は、回転ナデ。
－214 8908248	〃	〃	口径 13.8 器高 1.9	偏平なつまみを貼付し口縁部は内外面に明瞭な稜線を有する断面三角形を呈する。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は、回転ナデ。
－215 8908249	〃	〃	口径 14.0 器高 2.0	〃	天井部外面：回転ヘラ削り。天井部内面：回転ナデの後不定方向のナデ。他の部位は、回転ナデ。
－216 8908749	〃	〃	口径 15.3 器高 2.0	〃	〃
－217 8908239	〃	〃	口径 14.8 器高 2.9	中央部がやや隆起したつまみ貼付、口縁部は内外面に明瞭な稜線を有する断面三角形。	〃
－218 8908301	〃	〃	口径 13.9 器高 1.5	偏平なつまみを貼付し、口縁部内外面に明瞭な稜線を有する断面三角形を呈する。	〃
－219 8908137	〃	〃	口径 13.9	口縁部内外面にやや明瞭な稜線を有する、断面三角形を呈する。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は、回転ナデ。
－220 8908139	〃	〃	口径 13.0	天井部からやや長めに口縁部を折り曲げる形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。天井部内面：回転ナデの後不定方向のナデ。他の部位は、回転ナデ。
－221 8908250	〃	〃	口径 13.5 器高 1.4	偏平なつまみを貼付し、口縁部内外面に明瞭な稜線を有さず、丸みのある断面三角形を呈する。	〃
－222 8908138	〃	〃	口径 12.3	口縁部内外面に明瞭な稜線を有さず、丸みのある断面三角形を呈する。器厚が厚い。	〃
－223 8908140	〃	〃	口径 14.3	〃	〃
－224 8908242	〃	〃	口径 11.1 器高 1.3	口縁部内外面にやや明瞭な稜線を有する、断面三角形を呈する。つまみは貼付しない。	〃
－225 8908119	〃	〃	口径 10.9 器高 1.5	〃	〃

FIG－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
167－226 8908241	SK775	須恵器 小型壺蓋	口径　8.9 器高　2.8	偏平なつまみを貼付し、平坦な天井部から折り曲げによる口縁部。口縁端部がやや外反。	天井部外面を回転ナデ、他の部位は回転ナデ。
－227 8908150	〃	須恵器 坏	底径　9.8	底部・体部の境界が明瞭に屈曲し、断面長方形の高台を貼付。	内外面共に回転ナデ。
－228 8908149	〃	〃	底径　8.8	〃	底部外面のみ回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。底部内面のみその後不定方向のナデ。
－229 8908358	〃	〃	底径　8.7	平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる体部形状を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り。底部内面：回転ナデ後不定方向のナデ。他の部位は回転ナデ。
－230 8908243	〃	〃	口径　10.1 器高　3.4	底部・体部の移行がやや緩やかで、体部はほぼ直立する。内側接地の断面台形の高台を貼付。	底部外面のみ回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。底部内面のみその後不定方向のナデ。
－231 8908246	〃	〃	口径　11.6 器高　3.3	底部・体部の移行がやや緩やかで、体部は外上方へ開く。外側接地の断面台形の高台を貼付。	〃
－232 8908244	〃	〃	口径　12.5 器高　4.1	〃	〃
－233 8908351	〃	〃	口径　12.9 器高　4.3	〃	〃
－234 8908352	〃	須恵器 大坏	口径　13.6 器高　4.1	体部中位にて屈曲し外上方へ直線的に開く形態。	体部屈曲部以下は回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－235 8908354	〃	〃	口径　18.1	〃	〃
－236 8908353	〃	〃	口径　17.0	体部・底部の屈曲が緩やかで、屈曲部分に断面長方形の高台を貼付。緩やかな丸みのある体部。	底部外面：回転ヘラ切り後未調整。体部外面下位：回転ヘラ削り。他の部位：回転ナデ。
－237 8908245	〃	土師器 坏	口径　16.0 器高　5.4		
－238 8908359	〃	須恵器 長頸壺	口径　13.0 胴径　19.0	肩部は鋭角に屈曲し、外上方へ細く長く伸び上がる頸部から口縁部ほぼ直角に外反。	肩部外面下位：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－239 8908713	〃	土師器 壺蓋	口径　16.1 器高　4.0	偏平なつまみを貼付し、水平な天井部から緩やかに降り、やや外反する口縁部形態を示す。	天井部外面のみ回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－240 8908124	〃	土師器 蓋	口径　15.2	やや水平な天井部から、長く伸びる口縁部形態。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として全面回転ヘラ磨き。
－241 8908117	〃	〃	口径　15.5	水平な天井部から、内外面明瞭な稜線を有する断面三角形の口縁部形態を示す。	天井部外面のみ回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－242 8908293	〃	〃	口径　15.4	〃	内外面共に回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－243 8908127	〃	〃	口径　14.7	水平な天井部から、外面明瞭な稜線を有し、内面の稜線が不明瞭なやや丸い断面三角形の口縁部。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として全面回転ヘラ磨き。
－244 8908129	〃	〃	口径　14.9	〃	天井部外面のみ回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－245 8908118	〃	〃	口径　15.6	〃	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
167－246 8908121	SK775	土師器 蓋	口径 14.6	水平な天井部から、外面明瞭な稜線を有し、内面の稜線が不明瞭なやや丸い断面三角形の口縁部。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として全面回転ヘラ磨き。
－247 8908125	〃	〃	口径 13.4	〃	〃
－248 8908126	〃	〃	口径 16.5	〃	天井部外面のみ回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－249 8908116	〃	〃	口径 17.0	〃	〃
－250 8908113	〃	〃	残高 1.6	やや長い断面三角形の口縁部形態を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として全面回転ヘラ磨き。
－251 8908112	〃	〃	残高 1.4	内外面明瞭な稜線を有する断面三角形の口縁部形態を示す。	内外面ともに、回転ナデ。
－252 8908108	〃	〃	残高 1.9	外面明瞭な稜線を有し、内面の稜線が不明瞭なやや丸い断面三角形の口縁部形態を示す。	〃
－253 8908294	〃	〃	残高 1.7	丸い断面三角形の口縁端部形態を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－254 8908109	〃	〃	残高 1.2	内外面の稜線が不明確な口縁部形態を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として全面回転ヘラ磨き。
－255 8908132	〃	〃	口径 16.5 器高 2.6	偏平なつまみ。平坦な天井部から体部は緩やかな丸味のある断面三角形の口縁端部。	〃
－256 8909213	〃	〃	口径 15.2 器高 2.6	〃	器面磨耗のため調整痕跡不明。
－257 8908128	〃	〃	口径 15.2	〃	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－258 8909213	〃	〃	口径 20.1 器高 2.7	やや高いつまみを貼付し、水平な天井部形態を示し、内外面明瞭な断面三角形の口縁端部形態を示す。	外面の一部に回転ヘラ磨き痕跡が残る。他の部位は回転ナデ。
－259 8908131	〃	〃	口径 21.2	水平な天井部形態から、内外面明瞭な断面三角形の口縁部形態を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－260 8908260	〃	〃	残高 2.0	やや外方へ開く環状つまみを貼付。	内外面ともに回転ヘラ磨き。
－261 8908134	〃	〃	残高 1.6	断面菱形のつまみ形態。	内外面ともに回転ナデ。
－262 8908135	〃	〃	残高 1.1	中央部分がくぼむ、作りが雑なつまみ形態。	〃
－263 8909209	〃	土師器 大坏	口径 18.3 器高 4.0	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、やや外反する口縁端部形態を呈する。	内外面ともに回転ヘラ磨き。
－264 8908216	〃	〃	口径 16.1	〃	〃
－265 8909208	〃	〃	口径 17.4 器高 5.0	底部・体部の境界がやや明瞭で丸みをもって立ち上がる体部形態を示す。	〃

Fig.一図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
168－266 8908175	SK775	土師器 大坏	口径　12.9	底部・体部の移行が緩やかで丸みをもって立ち上がり、やや外反する口縁端部形態を呈する。	内外面とも回転ヘラ磨き。
－267 8908208	〃	〃	口径　15.8	〃	〃
－268 8908213	〃	〃	口径　16.8	底部・体部の境界がやや明瞭で丸みをもって立ち上がる体部形態を示す。	内外面とも回転ナデ。
－269 8908724	〃	土師器 坏	口径　13.1 器高　3.6	底部・体部の境界が明瞭で、やや丸みをもって立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。	〃
－270 8908721	〃	〃	口径　12.9 器高　3.4	底部・体部の境界がやや明瞭で丸みをもって立ち上がる体部形態を示す。	〃
－271 8908723	〃	〃	口径　14.4 器高　3.1	〃	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他部位は回転ナデ。
－272 8908720	〃	〃	口径　14.1 器高　3.6	底部・体部の境界がやや明瞭で、外反気味に立ち上がる体部形態を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－273 8908725	〃	〃	口径　13.6 器高　3.4	底部・体部の境界が明瞭で体部中位にて屈曲し、直線的に立ち上がる体部形態を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他部位は回転ナデ。
－274 8908203	〃	〃	口径　13.6 器高　3.2	〃	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－275 8908722	〃	〃	口径　13.3 器高　3.0	底部・体部の境界が明瞭で、直線的に立ち上がる体部を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他部位は回転ナデ
－276 8909210	〃	〃	口径　14.1 器高　3.9	底部・体部の境界がやや明瞭で、外反気味に立ち上がる体部形態を示す。	器面磨耗のため調整痕跡不明
－277 8909211	〃	〃	口径　12.0 器高　3.6	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に立ち上がる体部形状を示す。	〃
－278 8908205	〃	〃	口径　13.0	〃	内外面とも回転ナデ。
－279 8908719	〃	〃	口径　12.0 器高　3.5	〃	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－280 8908202	〃	〃	口径　12.8 器高　3.6	〃	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－281 8909216	〃	〃	口径　13.3 器高　3.5	〃	〃
－282 8908204	〃	〃	口径　12.1 器高　3.2	〃	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他部位は回転ナデ。
－283 8908219	〃	〃	口径　14.8 器高　2.9	底部・体部の境界が明瞭で外反気味に立ち上がる体部形態を示す。	〃
－284 8908203	〃	〃	口径　15.2 器高　3.5	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、やや外反する口縁端部形態を呈する。	内外面とも回転ヘラ磨き。
－285 8908256	〃	〃	口径　14.9 器高　3.6	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、口縁端部やや外反。高台は外方へ張り出す。	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
168－286 8908153	SK775	土師器 坏	口径 17.9 器高 4.7	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、口縁端部やや外反。高台は外方へ張り出す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－287 8909215	〃	〃	口径 19.2 器高 5.0	〃	〃
－288 8908258	〃	〃	口径 17.6 器高 4.6	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、直線的な口縁端部。高台は外方へ張り出す。	〃
－289 8908154	〃	〃	口径 17.5 器高 4.4	底部・体部の境界が明瞭で、直線的に立ち上がり、やや外反する口縁端部。高台は外方へ張り出す。	底部外面回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－290 8908748	〃	〃	口径 20.1 器高 5.0	底部・体部の境界が明瞭で、外反気味に立ち上がり、やや外方へ開く口縁部。高台は外方へ張り出す。	底部・体部の境界部分のみ回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－291 8908262	〃	〃	底径 8.5	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、さらに外方へ張り出す高台を貼付。	内外面ともに回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－292 8908259	〃	〃	底径 10.5	底部・体部の境界が明瞭で、断面台形の高台を貼付。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－293 8908499	〃	〃	残高 3.1	丸みをもって立ち上がり、口縁端部がやや外反する。	内外面ともに回転ナデ。
169－294 8908226	〃	〃	口径 12.8 器高 3.0	底部・体部の境界が明瞭で、外反気味に立ち上がる体部形態を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗い不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－295 8908227	〃	〃	口径 14.9	底部・体部の移行が緩やかで、丸みをもって立ち上がり、やや外反する口縁端部形態を呈する。	内外面ともに回転ナデ。
－296 8908498	〃	〃	口径 13.6 器高 1.4	〃	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は手持ちヘラ磨き。
－297 8908496	〃	〃	口径 13.1 器高 2.8	〃	内外面ともに回転ヘラ磨き。
－298 8908209	〃	〃	口径 14.3 器高 2.9	底部・体部の境界が明瞭で、体部中位にて屈曲し、直線的に立ち上がる体部形態を示す。	底部外面回転ヘラ切り後、粗い回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－299 8908206	〃	〃	口径 14.8 器高 2.9	〃	〃
－300 8908201	〃	〃	口径 14.4 器高 2.7	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ立ち上がる。	底部外面回転ヘラ切り後、不定方向のヘラ削り。底部内面回転ナデ後不定方向のナデ。他の部位は回転ナデ。
－301 8908225	〃	〃	口径 14.8	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部がやや平坦な形状を示す。	内外面ともに回転ナデ後回転ヘラ磨き。
－302 8908152	〃	〃	口径 14.7 器高 2.7	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ立ち上がる。	底部外面：回転ヘラ切り。他の調整痕跡については器面磨耗のため不明。
－303 8908229	〃	〃	口径 15.2 器高 2.6	〃	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－304 8908825	〃	土師器 皿	口径 17.6 器高 2.0	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを持ちつつ外上方へ開く形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り。他の調整痕跡については器面磨耗のため不明。
－305 8908823	〃	〃	口径 17.0 器高 2.2	〃	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
169－306 8908718	SK775	土師器 皿	口径　16.8 器高　2.2	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを持ちつつ外上方へ開く形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ後、最終調整として回転ヘラ磨き。
－307 8908826	〃	〃	口径　16.6 器高　2.0	〃	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。底部外面にヘラ記号状の線刻あり。
－308 8908303	〃	〃	残長　8.0	〃	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。底部外面にヘラ描き文字あり。
－309 8908716	〃	土師器 大皿	口径　26.0 器高　2.6	〃	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－310 8908180	〃	土師器 把手付大皿	口径　28.9 器高　2.2	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを持ちつつ外上方へ開く。底部・体部の境界部分に把手。	〃
－311 8908178	〃	土師器 大皿	口径　33.6 器高　3.4	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを持ちつつ外上方へ開く。やや中心よりに高台を貼付。	〃
－312 8908181	〃	〃	口径　35.0 器高　2.2	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを持ちつつ外上方へ開く形状を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－313 8908171	〃	土師器 高坏	底径　8.4	緩やかに開く脚部。	内外面ともに回転ナデ。
－314 8908159	〃	〃	底径　13.9	緩やかに開き、脚端部において下方へ折り曲げる形状を示す。	〃
－315 8908166	〃	〃	底径　11.0	緩やかに開く脚部。	〃
－316 8908824	〃	〃	口径　24.6	底部・体部の境界が明瞭で、外上方へ直線的に開く体部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－317 8908388	〃	〃	口径　23.1	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを有しつつ開き口縁端部がやや外反する。	底部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ヘラ磨き。最終調整として回転ヘラ磨き。
－318 8908853	〃	〃	口径　23.0 器高　9.1	底部から緩やかに体部へ移行し、緩やかに開く脚部を貼付。	坏部底部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－319 8908157	〃	〃	口径　25.0 器高　6.9	底部・体部の移行が緩やかで、外上方へ開く。直立気味な形状から脚部中位より屈曲する脚部を貼付。	坏部内外面ともに回転ヘラ磨き。他の部位は回転ナデ。
－320 8908795	〃	土師器 把手付甕	口径　23.8 器高　16.9	平底の底部からやや直立気味に立ち上がり、やや平坦な口縁端部形状を示し、体部中位に把手を貼付。	内外面ともに丁寧な回転ヘラ磨き。
170－321 8908275	〃	土師器 甕	口径　12.8	直線的な体部より、肥厚しつつやや外反する口縁部形状を示す。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のハケ。口縁部内外面：ナデ。
－322 8908267	〃	〃	口径　13.0	丸みのある体部から、「く」の字形に外反する口縁部形状を示す。	〃
－323 8908268	〃	〃	口径　11.9	丸みのある体部から、緩やかに外反する口縁部形状を示す。	〃
－324 8908288	〃	〃	口径　14.3	外方へ開く体部からほぼ直角に屈曲する口縁部形状を示す。	体部内外面ともに縦方向のヘラ削り。他の部位はナデ。
－325 8908273	〃	〃	口径　18.8	体部からやや外方へ曲折する口縁部形状を呈する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のナデ。口縁部内外面は横方向のナデ。
－326 8908265	〃	〃	口径　19.5	丸い体部から外方へ曲折する口縁部形状を示し、口縁端部がややナデにより乱れている。	体部内面：ヘラ削り。体部外面：ハケ調整。口縁部内外面は横方向のナデ。

Fig.－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
170－327 8908272	SK775	土師器 甕	口径 14.1	体部からやや外方へ曲折する口縁部形状を呈する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のナデ。口縁部内外面は横方向のナデ。
－328 8908238	〃	〃	残高 7.0	丸底の底部から丸みをもって立ち上がる体部形状を示す。	底部および体部内外面とも縦方向のヘラ削り。
－329 8908151	〃	〃	胴径 16.0 底径 8.5	やや平底気味の丸底で、長胴気味に立ち上がる体部形状を示す。	内面：縦方向のヘラ削り。外面：縦方向のハケ調整。
－330 8908289	〃	〃	口径 25.3	「く」の字形に屈曲する頸部ならびに口縁部形状をとる。	内外面ともにナデ。
－331 8908283	〃	〃	残高 7.6	直線的な体部形状を示し、口縁部が僅かに外反する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：調整痕跡不明瞭。口縁部内外面ナデ。
－332 8908231	〃	〃	残高 1.5	口縁部がほぼ直角に曲折し、口縁端部を面とりによって仕上げる。	内外面ともにナデ。
－333 8908284	〃	〃	残高 4.0	直線的な体部から口縁部が僅かに外反する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：調整痕跡不明瞭。口縁部内外面ナデ。
－334 8908277	〃	〃	残高 5.5	丸みをおびた体部形状を示し、口縁部が緩やかに外方へ曲折する。	〃
－335 8908296	〃	土師器 把手	残高 3.0	大きく内方へ曲折する形状を示す。	ナデ調整。
－336 8908492	〃	土師器 甕	口径 16.0 器高 14.7	やや尖底の丸底を示し、球形の体部から緩やかな「く」の字形の頸部形状をとる。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面および口縁部内外面は丁寧なナデにより仕上げる。
－337 8908232	〃	土師器 鉢	口径 21.5	直線的に外方へ開く体部形状を示し、口縁端部を面とりによって仕上げる。	内外面ともに回転ナデ。
171－338 8908179	〃	土師器 大鉢	口径 37.0 器高 4.5	底部から緩やかに体部へ移行し、口縁端部がやや外反する。	底部外面回転ヘラ切り後、やや粗いナデ。暗文を施す。内外面ともに回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－339 8908160	〃	土師器 把手付壺	底径 15.5 胴径 26.7	平底から体部は緩やかに外上方へ開き、肩部に丸味をもつ。体部最大径部分に把手。	体部内外面ともにタタキ、その後外面は回転ヘラ削りならびに回転ナデ、内面は回転ナデ。
－340 8908305	〃	土師器 把手付鉢	口径 30.9 器高 10.3	平底から緩やかに外上方へ開く体部形状から、緩やかな「く」の字形を呈する頸部。	内外面ともに回転ナデ、底部内外面ともに回転ナデの後不定方向のナデ。
－341 8908306	〃	〃	口径 36.0 器高 16.8	〃	〃
－342 8908796	〃	〃	口径 38.2 器高 16.4	〃	〃
－343 8908304	〃	〃	口径 29.3 器高 12.9	〃	〃
－344 8908237	〃	〃	口径 28.5 器高 10.2	〃	〃
－345 8908234	〃	〃	口径 30.4	〃	〃
－346 8908233	〃	〃	口径 32.9	〃	〃
－347 8908136	〃	土師器 鉢	口径 40.3	直線的に外上方へ立ち上がり口縁端部を面とりによって仕上げる。	内外面ともにヘラ磨きによって仕上げる。

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
171－348 8908230	SK775	須恵器 甕	口径 42.7	「く」の字形の頸部形状をとり、大きく外上方へ立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げる。	体部は平行タタキ、口縁部内面は回転ナデ、口縁部外面はカキ目調整ならびに回転ナデ。
172－349 8908361	SK776	須恵器 蓋	口径 14.1 器高 3.2	高いつまみを貼付し、天井部から緩やかに口縁部へ至り、明瞭な断面三角形を呈する口縁端。	天井部外面回転ヘラ削り、他の部位は回転ナデにより仕上げ。天井部内面に不定方向のナデ痕跡。
－350 8908360	〃	〃	口径 13.4 器高 2.0	偏平なつまみを貼付し、平坦な天井部からやや曲折しつつ、断面三角形の口縁端部形状をとる。	天井部外面回転ヘラ削り、他の部位は回転ナデにより仕上げ。天井部内面に不定方向のナデ痕跡。
－351 8908362	〃	〃	口径 14.1 器高 1.8	〃	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。天井部内面に不定方向のナデ痕跡天井部外面にヘラ記号。
－352 8908364	〃	須恵器 坏	口径 9.5 器高 3.2	底部から緩やかに体部へ移行し、やや丸みをもった体部形状をとり、口縁端部が僅かに外反。	底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデ。他の部位は回転ナデ。底部内面のみ不定方向のナデ。
－353 8908363	〃	〃	口径 13.3	直線的に外上方に立ち上がる形状をとる。	内外面ともに回転ナデ。
－354 8908367	〃	土師器 蓋	口径 16.0 器高 2.3	偏平なつまみ。平坦な天井部から緩やかに口縁部へ移行。断面三角形の口縁端部。	天井部外面回転ヘラ削り、他の部位は回転ナデにより仕上げ。天井部内面に不定方向のナデ痕跡。
－355 8908368	〃	〃	口径 16.0 器高 1.8	〃	〃
－356 8908370	〃	〃	口径 17.0 器高 2.3	外方へ開く環状つまみを貼付し、平坦な天井部から緩やかに口縁部へ移行。断面三角形の口縁端部。	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。最終調整として内外面ともに回転ヘラ磨き。
－357 8908371	〃	〃	口径 18.9 器高 3.1	やや外方へ開く環状つまみ。丸みのある天井部から緩やかに口縁部へ移行。口縁端部に沈線。	〃
－358 8908372	〃	〃	口径 16.0 器高 1.9	外方へ開く環状つまみ。平坦な天井部から緩やかに口縁部へ移行。断面三角形の口縁端部。	〃
－359 8908369	〃	〃	口径 16.2 器高 2.4	〃	〃
－360 8908373	〃	〃	口径 21.3	平坦な天井部から緩やかに口縁部へ移行し、丸い口縁端部形状をとる。	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。最終調整として内外面回転ヘラ磨き。
－361 8908366	〃	土師器 壺蓋	口径 17.7 器高 3.4	偏平なつまみを貼付し、平坦な天井部から緩やかに曲折し、口縁端部を丸く仕上げる。	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデにより仕上げ。最終調整として内外面ともに回転ヘラ磨き。
－362 8908332	〃	土師器 坏	底径 10.4	外方へやや張り出す断面台形の高台を貼付。	底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ後、回転ヘラ磨き。
－363 8908336	〃	〃	底径 9.8	断面三角形の高台を貼付。	底部外面は回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデにより仕上げる。
－364 8908338	〃	〃	底径 7.9	〃	〃
－365 8908311	〃	〃	口径 12.3 器高 4.8	底部からやや緩やかに体部へ移行し、体部は直線的に立ち上がり、外側接地の断面台形の高台。	底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデ他の部位は回転ナデ。底部内面のみ不定方向のナデ。
－366 8908317	〃	〃	口径 19.0 器高 4.5	底部から丸みをもって緩やかに立ち上がり、口縁端部を僅かに外反。内側接地の高台。	底部外面は手持ちのヘラ削り。他の部位は回転ナデ。底部内面のみ不定方向のナデ。
－367 8908308	〃	〃	口径 14.2 器高 4.5	底部から緩やかに体部へ移行し、やや外反気味に口縁部へ至る。	底部外面は回転ヘラ切り後未調整。他の部位は回転ナデ。
－368 8908315	〃	〃	口径 13.8 器高 3.6	底部から体部へ屈曲気味に立ち上がり、やや丸みをもちつつ口縁部へ至る。	底部外面は手持ちのヘラ削り。他の部位は回転ナデ。底部内面のみ不定方向のナデ。

Fig.－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
172－369 8908312	SK776	土師器 坏	口径 13.8 器高 3.2	底部から体部へ緩やかに移行し、口縁端部をやや外反させる。	底部外面は手持ちのヘラ削り。他の部位は回転ナデ。底部内面のみ不定方向のナデ。
－370 8908152	〃	〃	口径 14.5 器高 3.8	〃	〃
－371 8908376	〃	〃	口径 13.0 器高 4.0	〃	底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデ。内外面ともに回転ナデ。
－372 8908316	〃	〃	口径 14.4 器高 4.1	〃	底部外面は手持ちのヘラ削り。他の部位は回転ナデ。底部内面のみ不定方向のナデ。
－373 8908313	〃	〃	口径 15.0 器高 3.3	底部から体部へ屈曲気味に立ち上がり、やや丸みをもちつつ口縁部へ至る。	〃
－374 8908310	〃	〃	口径 14.1 器高 4.1	底部から体部へ緩やかに移行し、口縁端部をやや外反させる。	〃
－375 8908307	〃	〃	口径 14.0 器高 4.0	底部・体部の移行が緩やかで、外上方へ開く口縁部形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－376 8908314	〃	〃	口径 15.2 器高 3.5	〃	〃
－377 8908374	〃	土師器 大坏	口径 17.2 器高 6.5	〃	〃
－378 8908375	〃	〃	口径 18.0 器高 6.2	〃	〃
－379 8909337	〃	〃	口径 23.8	〃	体部外面ハケ状原体による調整。最終調整として回転ナデ。
－380 8908858	〃	土師器 皿	口径 12.2 器高 2.5	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ開く体部形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－381 8908859	〃	〃	口径 13.8 器高 2.6	〃	〃
－382 8908857	〃	〃	口径 12.6 器高 2.5	〃	〃
－383 8908860	〃	〃	口径 13.8 器高 2.3	〃	〃
－384 8908861	〃	〃	口径 15.0 器高 2.5	〃	〃
－385 8908330	〃	〃	口径 15.1 器高 1.7	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ外反気味に立ち上がる形状を示す。	内外面ともに回転ナデ後回転ヘラ磨き。
－386 8908328	〃	〃	口径 15.8 器高 1.4	〃	底部外面：回転ヘラ切り後不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－387 8908186	〃	〃	口径 17.9 器高 2.2	〃	〃
－388 8908184	〃	〃	口径 18.0 器高 2.0	〃	〃
－389 8908187	〃	〃	口径 17.0 器高 1.7	〃	〃

Fig図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
172－390 8908183	SK776	土師器 皿	口径　17.0 器高　2.2	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ外反気味に立ち上がる形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。
－391 8908327	〃	〃	口径　15.1 器高　1.8	〃	〃
－392 8908185	〃	〃	口径　15.5 器高　1.5	〃	〃
173－393 8908297	〃	土師器 大皿	口径　21.7 器高　1.9	底部から体部への移行が緩やかであり、直線的に外上方へ伸びる形状を示す。	〃
－394 8908298	〃	〃	口径　24.8 器高　1.9	〃	〃
－395 8908333	〃	〃	底径　20.2	外方へ張り出す高台を貼付。	底部外面回転ヘラ削り。内面回転ナデ後回転ヘラ磨き。
－396 8908379	〃	土師器 盤	口径　34.5 器高　3.3	底部から体部への移行が緩やかであり、直線的に外上方へ伸びる形状を示す。	〃
－397 8908377	〃	土師器 高坏	口径　16.3 器高　6.0	底部から体部へ緩やかに移行し、丸い口縁端部形状を示す坏部に、緩やかに開く脚部。	坏部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として回転ヘラ磨き。脚部は内外面ともに回転ナデ。
－398 8908378	〃	〃	底径　12.0	緩やかに開く脚部。	脚部は内外面ともに回転ナデ。坏部内面回転ヘラ磨き。
－399 8908326	〃	土師器 把手(皿)	把手長 3.0	あまり曲折せず、角張った形状を示す。	把手外面面とりのため丁寧なヘラ削り。内面ナデ。
－400 8908325	〃	土師器 把手 (甕もしくは鉢)	把手長 4.5	あまり曲折しない形状を示す。	粗いナデ。
－401 8908770	〃	土師器 甕	口径　14.1	丸みのある体部から肥厚しつつ口縁部が外反する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面縦方向のナデ。口縁部内外面ともにナデ。
－402 8908323	〃	〃	口径　14.0	〃	〃
－403	〃	〃	口径　15.5	〃	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：格子状のタタキ。口縁部内外面：ナデ。
－404 8908320	〃	〃	口径　18.6	〃	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面縦方向のナデ。口縁部内外面ともにナデ。
－405 8908322	〃	〃	口径　27.5	〃	〃
－406 8908319	〃	〃	口径　32.2	〃	〃
－407 8908197	〃	〃	口径　17.1 器高　19.5	やや丸底気味の底部から丸みを有しつつ立ち上がり、緩やかに口縁部が外反する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のハケ。口縁部内外面ともにナデ。
－408 8908365	〃	須恵器 壺 (長頸壺)	底径　10.3 胴径　20.9	外方へ張り出す高台を貼付し直線的に外方へ立ち上がり、僅かに曲折する肩部が残存。	体部外面：回転ヘラ削り後丁寧な回転ナデ。他の部位は回転ナデ。
174－409 8908430	〃	須恵器 蓋	口径　15.0 器高　2.5	中央部が隆起する形状のつまみを貼付し、口縁部の屈曲が明瞭な断面三角形の形状を示す。	天井部外面：丁寧な回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ調整。
－410 8908429	〃	〃	口径　14.7 器高　2.9	偏平なつまみを貼付し、口縁部の屈曲がやや明瞭な断面三角形の形状を示す。	天井部外面：丁寧な回転ヘラ削り。口縁部内外面：回転ナデ。天井部内面：回転ナデ後、粗い不安定方向のナデ。

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
174－411 8908426	SK759	須恵器 蓋	口径 14.3 器高 2.7	偏平なつまみを貼付し、口縁部の屈曲がやや明瞭であり、丸みをもった断面三角形の形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ切り後、粗い回転ヘラ削り。口縁部内外面：回転ナデ（SK775の資料と接合）
－412 8908428	〃	〃	口径 13.3 器高 1.8	偏平なつまみを貼付し、口縁部屈曲が不明瞭な断面三角形の形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ切り後、粗い回転ヘラ削り。他の部位は、内外面ともに回転ナデ。
－413 8908429	〃	〃	口径 14.2 器高 1.5	〃	〃
－414 8908424	〃	〃	口径 14.3	口縁部の屈曲がやや明瞭であり、丸みをもった断面三角形の形状を示す。	〃
－415 8908425	〃	〃	口径 12.8 器高 1.8	外面における口縁部屈曲が明瞭で、内面においてはやや不明瞭な屈曲を示す。	〃
－416 8908441	〃	須恵器 坏	口径 11.0	丸みをもった底部・体部の境界から内湾する形で立ち上がる。	内外面ともに回転ナデ。
－417 8908443	〃	〃	口径 11.3	底部・体部の移行が緩やかであり、やや外反気味な口縁部形状を示す。	〃
－418 8908442	〃	〃	底径 7.0	底部・体部の移行がやや屈曲気味に立ち上がる。断面台形の高台を貼付する。	〃
－419 8908422	〃	〃	口径 12.7 器高 4.4	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に立ち上がる体部形状を示し、内面接地の断面台形の高台を貼付。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。底部内面のみ、回転ナデの後不定方向のナデ。
－420 8908444	〃	須恵器 長頸壺	口径 10.0	やや外傾気味に立ち上がる頸部形状を示し、直角に近い角度で外上方へ屈曲する口縁部である。	内外面ともに回転ナデ。
－421 8908421	〃	土師器 蓋	口径 15.1 器高 2.4	偏平なつまみを貼付し、口縁部内面にやや稜線を有する断面三角形の形状を示す。	〃
－422 8908415	〃	土師器 坏	口径 15.0 器高 4.4	底部・体部の移行が緩やかで、やや丸みをもつて立ち上がる。口縁端部やや外反。高台をやや内側に貼付。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－423 8908418	〃	〃	口径 19.6 器高 5.4	〃	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。内面は回転ヘラ磨き。
－424 8908416	〃	〃	口径 16.2 器高 6.5	底部・体部の移行はやや緩く、直線的に外上方へ立ち、口縁端部やや外反。高台やや外方へ張る。	内外面ともに回転ナデ。坏部器高が高い。
－425 8908417	〃	〃	口径 14.1 器高 3.9	〃	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。内外面ともに回転ナデ。
－426 8908420	〃	土師器 皿	口径 17.5 器高 2.4	底部・体部の移行が緩やかで、丸みを有しつつ外上方へ立ち上がる。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。底部・体部境界付近の外面は、不定方向のヘラ削り、他回転ナデ。
－427 8908419	〃	〃	口径 17.6 器高 1.9	〃	〃
175－428 8908474	SK781	須恵器 蓋	口径 14.2 器高 3.0	偏平なつまみ。天井部から緩やかに口縁部へ移行する形状で、明瞭な断面三角形の口縁端部形状。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－429 8909335	〃	土師器 坏	口径 12.6 器高 2.7	底部・体部の境界が明瞭で、内湾気味に外上方へ立ち上がる。	底部外面：丁寧な回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ後、丁寧な回転ヘラ磨き。
－430 8909334	〃	〃	口径 13.0 器高 3.3	底部・体部の移行が緩やかで、ほぼ直立気味に立ち上がる形状を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
176－431 8908477	SK727	須恵器 蓋	口径 18.5	平坦な天井部から、やや長く屈曲する口縁部形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。

Figー図番号 登録番号	出土地点	器種	法量 cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
176－432 8908478	SK727	須恵器 坏	残高 4.4	直線的に外上方へ開く体部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－433 8909008	SK737	須恵器 把手付甕	口径 18.9	直線的に外上方へ立ち上がり、ほぼ直角に曲折する口縁部形状を示し、丈夫な把手を貼付する。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：カキ目痕跡あり。口縁部内外面ともに回転ナデ。
－434 8909475	SK777	須恵器 蓋	口径 13.4 器高 1.9	天井部から口縁部へ緩やかに移行し、明瞭な断面三角形の形状の口縁部を呈する。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－435 8908134	SK734	須恵器 坏	口径 9.8 器高 3.5	底部・体部の境界がやや明瞭で、直線的に外上方に立ち上がり、やや外方に張り出す断面台形の高台を貼付する。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－436 8908733	〃	土師器 坏	口径 16.3	底部から体部へ緩やかに移行し、直線的に外上方に立ち上がる。	内外面丁寧な手持ちヘラ磨き。
－437 8909281	〃	土師器 皿	口径 15.8 器高 3.0	底部・体部の境界が明瞭で、やや外反気味に外上方に立ち上がる体部形状を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－438 8909284	〃	〃	口径 21.1 器高 2.0	底部から体部への移行が緩やかで、やや丸みをもって立ち上がる。	〃
－439 8909283	〃	土師器 高坏	残高 1.9	底部から体部への移行が緩やかで、やや口縁端部が外反する。	〃
－440 8908801	〃	〃	口径 24.3 器高 7.4	底部・体部の境界が明瞭で、外上方へ直線的立ち上がり坏部形状で、外方へ開く脚部を貼付する。	坏部外面：回転ヘラ削り。坏部内面：回転ナデ。坏部最終調整として内外面ともに回転ヘラ磨き。
－441 8908728	〃	土師器 甕	口径 14.4	丸みのある体部から、やや上方へ屈曲する口縁部形状を示す。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のハケ。口縁部内外面はナデ。
－442 8908727	〃	〃	口径 23.0 胴径 30.4	丸みのある体部から、直線的に内傾気味に立ち上がる形状を示す。	〃
－443 8908729	〃	〃	口径 14.7	丸みのある体部から、外方へ曲折する口縁部形状を示す。	〃
－444 8908732	〃	土師器 短頸壺	口径 8.9 胴径 16.1	やや偏球形の体部形状を示し、口縁部が僅かに外上方に立ち上がる。	内外面ともに回転ナデ。
－445 8908730	〃	土師器 甕	口径 20.0	丸みのある体部から、外方へ大きく曲折する口縁部形状を示す。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のハケ。口縁部内外面はナデ。
－446 8908806	〃	〃	口径 13.0 器高 12.0	やや丸底の底部から、丸みのある体部を呈し、口縁部が僅かに外反する。	〃
177－447 8908414	SK709	須恵器 皿	口径 13.5 器高 2.0	底部・体部の境界が明瞭で、直線的に外上方に伸びる形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－448 8908706	〃	須恵器 蓋	口径 15.1 残高 2.9	天井部から口縁部への移行が緩やかであり、口縁端部形状が明瞭な断面三角形を呈する。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－449 8909010	〃	須恵器 坏	口径 13.8	やや丸みを帯ながら外上方へ開く。	内外面ともに回転ナデ。
－450 8909009	〃	〃	口径 13.9	〃	〃
－451 8909011	〃	須恵器 壺	底径 8.0	断面長方形の高台を貼付し、直線的に外上方に開く体部形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。体部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－452 8909012	〃	〃	底径 9.5	〃	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴 ・ そ の 他
177－453 8908707	SK709	土師器 蓋	口径 18.4 器高 3.8	やや高いつまみを貼付、天井部から口縁部移行が緩やかで、明瞭な断面三角形の口縁端部。	つまみ部分のみ回転ナデ。他の部位は回転ナデ後丁寧な回転ヘラ磨き。
－454 8909013	SK758	須恵器 蓋	口径 11.3 器高 0.9	偏平な天井部から断面三角形の口縁端部形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－455 8909015	〃	須恵器 坏	口径 10.4 器高 4.9	底部・体部の境界が明瞭で、直線的に外上方に立ち上がる形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－456 8908396	〃	土師器 坏	口径 12.0 器高 2.9	底部から体部への移行が緩やかで、やや内湾気味に立ち上がる形状を示す。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－457 8909017	〃	〃	残高 4.9	丸みをもちつつ立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。	内外面ともに回転ナデ。
－458 8909016	〃	土師器 皿	口径 16.6 残高 1.6	底部・体部の移行が緩やかで、直線的に外上方へ開く。	底部外面のみ器面磨耗のため不明。他の部位は回転ナデ。
－459 8909014	〃	須恵器 短頸壺	胴径 20.0	ほぼ直立気味に立ち上がり、鋭角に肩部を屈曲する。	内外面ともに回転ナデ。
－460 8909018	〃	須恵器 壺	口径 21.8	緩やかに外方へ開く形状を示す。	〃
－461 8908771	〃	土師器 甕	口径 12.9	丸みを有した体部から、緩やかに外方へ開く口縁部形状を示す。	内外面ともにナデ。
－462 8909019	〃	〃	残高 6.0	丸みを有した体部から、大きく外方へ屈曲する口縁部形状を示す。	〃
－463 8909007	〃	須恵器 蓋	口径 14.8 器高 2.9	やや高いつまみを貼付し、天井部から緩やかに口縁部に至り、明瞭な断面三角形の口縁部形状。	天井部外面回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－464 8908448	〃	〃	口径 13.5 器高 2.0	〃	〃
－465 8909006	〃	〃	口径 13.2	偏平な天井部から不明瞭な断面三角形の口縁端部形状を示す。	〃
－466 8908437	SP735	土師器 坏	口径 10.9 器高 2.3	底部・体部の移行が緩やかで、ほぼ直線的に外上方に立ち上がる形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－467 8908438	〃	〃	口径 10.7 器高 3.0	〃	〃
－468 8908439	〃	土師器 皿	口径 13.3 器高 2.2	偏平な形状をとり、口縁端部を面とりによって仕上げ、やや高い高台を貼付する。	〃
－469 8908436	〃	土師器 坏	口径 11.4 器高 4.6	ほぼ直立気味に立ち上がる形状を示し、やや高い高台を貼付。	〃
－470 8908440	〃	黒色土器 B類 椀	口径 15.5 器高 5.8	底部から緩やかに丸みを有しつつ立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げるやや屈曲気味の高台。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他回転ナデ。最終調整は内外面ともに手持ちヘラ磨き。底部外面に線刻。
－471 8908435	SP731	土師器 坏	口径 12.4	ほぼ直立気味に立ち上り、口縁端部をやや外反させる。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－472 8908465	〃	〃	口径 12.2 器高 5.3	ほぼ直立気味に立ち上がる形状を示し、やや高い高台を貼付。	〃
－473 8908533	〃	〃	口径 12.0 器高 5.0	〃	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
177－474 8908434	SP731	土師器 坏	口径　11.8 器高　5.2	ほぼ直立気味に立ち上がる形状を示し、やや高い高台を貼付。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－475 8908432	〃	〃	口径　13.3 器高　6.0	底部から体部への移行が緩やかで、内湾気味に立ち上がり、やや高い高台を貼付。	〃
－476 8908431	〃	土師器 鉢	口径　21.3	丸みのある体部形状を示し、やや外反気味の口縁端部形状を示す。	体部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
178－477 8908460	SK769	土師器 坏	口径　10.9 器高　2.6	底部から口縁部へ緩やかに移行し、直線的な口縁部形態を示す。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－478 8908461	〃	〃	口径　10.9 器高　2.4	〃	〃
－479 8908459	〃	〃	口径　10.6 器高　2.1	〃	〃
－480 8908462	〃	〃	口径　12.6 器高　4.5	底部から体部へ緩やかに移行し、直線的な体部形状をとり、外方へ張り出す高台を貼付。	〃
－481 8908875	SK771	〃	口径　11.2 器高　3.1	底部から口縁部へ緩やかに丸みを有しつつ立ち上がる形状を示す。	〃
－482 8908874	SP771	〃	口径　11.6 器高　3.2	〃	〃
－483 8908877	〃	〃	口径　12.0 器高　3.9	底部から口縁部へ緩やかに立ち上がり、直線的な体部形状をとる。	〃
－484 8908878	〃	〃	口径　12.5 器高　3.9	〃	〃
－485 8908876	〃	〃	口径　11.5 器高　3.2	底部から口縁部へ緩やかに丸みを有しつつ立ち上がる形状を示す。	〃
－486 8908463	SP767	〃	口径　13.3 器高　3.7	底部から口縁部へ緩やかに立ち上がり、直線的な体部形状をとる。	〃
－487 8908464	〃	〃	口径　16.2	底部から体部へ丸みを有しつつ立ち上がり、直線的に外上方へ開く体部形状を示す。	〃
－488 8908391	SP766	〃	口径　12.9 器高　3.2	底部から口縁部へ緩やかに丸みを有しつつ立ち上がる形状を示す。	〃
－489 8908390	〃	〃	口径　12.7 器高　3.4	〃	〃
－490 8908389	〃	〃	口径　12.0 器高　3.4	底部から口縁部への移行がやや明瞭で、外反気味に立ち上がる体部形状を示す。	〃
－491 8908873	SK770	須恵器 坏	口径　10.4 器高　5.3	底部から体部への移行が緩やかで、口縁部が僅かに立ち上がる。高台は外方に張り出す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。体部外面回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
179－492 8909328	SB725 ・P2	土師器 坏	口径　14.1	やや丸みを有する体部形状を示す。	内外面ともに、回転ナデ。
－493 8909320	SB773 ・P2	〃	残高　1.0	磨耗が著しく正確な形状は判断しかねるが、底部から体部の移行が緩やかで、断面台形の高台。	底部外面：回転ヘラ切り後、ナデ。内外面ともに、回転ナデ。
－494 8909321	SB773 ・P11	須恵器 坏	口径　12.5 器高　4.6	底部から体部の移行が緩やかで、直線的に立ち上がる形状をとり、外方へ張り出す高台を貼付。	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
179－495 8909077	SB761 ・P11	土師器 蓋	口径 14.3	平坦な天井部から、明瞭な断面三角形の口縁部端形状をとる。	内外面ともに回転ナデ。
－496 8909272	SB761 ・P1	土師器 皿	口径 13.2 器高 2.4	底部から体部への移行が緩やかかで、丸みを有する体部から口縁部形状を示す。	底部外面回転ヘラ切り後、粗いナデ。内外面ともに、回転ナデ。
－497 8909076	SB761 ・P10	土師器 坏	口径 11.3	やや丸みのある体部から、僅かに口縁部が外反する。	内外面ともに回転ナデ。
－498 8909273	SB761 ・P1	須恵器 坏	口径 12.7	底部から体部への移行が緩やかで、直線的な体部形状をとる。	〃
－499 8909278	SB761 ・P11	土師器 坏	口径 13.4 器高 5.0	底部・体部の境界がやや明瞭で、直線的に外上方へ立ち上がり、外方へ張り出す高台を貼付。	底部外面回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り。内外面ともに、回転ナデ。
－500 8909275	SB761 ・P10	土師器 甕	口径 19.1	体部からほぼ直角に曲折する口縁部形状を示す。	体部外面：ハケ。体部内面：縦方向のヘラ削り。口縁部内外面ともにナデ。
－501 8909274	SB761 ・P7	〃	口径 23.1	〃	〃
－502 8909326	SB763 ・P6	土師器 蓋	口径 15.3	平坦な天井部から、やや丸みのある断面三角形の口縁端部形状を示す。	内面回転ナデ。他の部位は不明。
－503 8909327	SB763	〃	口径 12.7	〃	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデを施し、天井部内面のみその後、不定方向のナデ。
－504 8909324	SB765	〃	口径 13.9	〃	内外面ともに回転ナデ。
－505 8909322	〃	〃	残高 1.3	〃	内面回転ナデ。外面の調整は不明確。
－506 8909323	〃	土師器 坏	残高 1.9	直線的な体部からやや外反する口縁端部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－507 8909325	〃	〃	口径 11.7	やや丸みのある体部形状をとり、口縁端部を丸く仕上げる。	〃
－508 8909330	SB757 ・P9	土師器 蓋	口径 12.7	天井部から口縁部への移行が緩やかで、明瞭な断面三角形の口縁端部形状を示す。	〃
－509 8909332	〃	土師器 坏	残高 2.2	丸みのある体部形状を示し、口縁部をやや外反させる。	〃
－510 8909331	〃	土師器 甕	口径 26.6	体部より緩やかに外方へ曲折させる口縁部形状示す。	内外面ともにナデ。
－511 8909333	SB756 ・P10	土師器 坏	残高 1.8	丸みのある体部形状を示し、口縁部をやや外反させる。	内外面ともに回転ナデ。
180－512 8908395	SE755	〃	口径 14.4 器高 3.9	底部から体部への移行が緩やかで、口縁部をやや外反させる形状をとる。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。体部中位に2条の沈線。
－513 8802227	SE719	〃	口径 11.5 器高 4.7	底部から体部へ緩やかに移行し、直線的な体部形状をとり、外方へ張り出す高台を貼付。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－514 8908476	SE754	土師器 鉢	口径 9.6 器高 6.8	底部から体部への移行が緩やかで、やや偏球形の体部形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。体部外面に鉄分付着。
－515 8802226	SE716	土師器 甕	口径 22.4	ほぼ直線的な体部から、緩やかに外方へ曲折する頸部ならびに口縁部形状を示す。	体部内面：縦方向のヘラ削り後、縦方向のハケ調整。体部外面：縦方向のハケ調整。口縁部内外面ともにナデ。

Fiㅤ－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
180－516 8908346	SD753	須恵器 蓋	残高　0.9	平坦な天井部に断面台形のつまみを貼付。	天井部外面のみ回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－517 8908408	〃	〃	口径　13.9 器高　1.4	平坦な天井部から曲折し、明瞭な断面三角形の口縁端部形状をとる。	〃
－518 8908409	〃	須恵器 坏	口径　12.9 器高　4.7	底部から体部への移行が緩やかで、直線的な体部形状を示す。さらに外方へやや張りだす断面台形高台を貼付。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－519 8908345	〃	〃	口径　14.9	やや丸みのある体部から僅かに口縁部が外反する。	内外面ともに回転ナデ。
－520 8908407	〃	〃	口径　16.0	丸みのある体部が、外方へ大きく開く形状を示す。	〃
－521 8908344	〃	須恵器 甕	口径　22.3	体部より「く」の字形に大きく曲折し、外上方へ開く口縁部形状を示す。	体部外面：平行タタキ。体部内面：当て具痕跡。他の部位は回転ナデ。
－522 8908348	〃	土師器 蓋	口径　18.3	天井部から口縁部への移行が緩やかで、丸みのある断面三角形の口縁部形状をとる。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－523 8908340	〃	土師器 甕	残高　1.3	体部より緩やかに外方へ曲折する頸部ならびに口縁部形状をとる。	体部外面：粗いハケ調整。他の部位は器面磨耗のため不明。
－524 8908339	〃	〃	口径　14.6	体部よりほぼ直角に曲折する頸部形状を示す。	体部外面：横方向のヘラ削り。他の部位はナデ。
－525 8908341	〃	〃	口径　17.5	体部より緩やかに外方へ大きく曲折する頸部ならびに口縁部形状をとる。	内外面ともにナデ。
－526 8908349	〃	土師器 蓋	口径　21.5	天井部から口縁部への移行が緩やかで、丸みのある断面三角形の口縁部形状を示す。	天井部外面：回転ヘラ削り。他の部位は回転ナデ。最終調整として内外面ともに回転ヘラ磨き。
－527 8908350	〃	土　錘	最大長　4.0 最大幅　0.9	ほぼ円柱形の形状をとるものの、長軸片方がやや径を小さく仕上げる。	指押さえ痕跡。
181－528 8908773	SD721	須恵器 坏	口径　12.1 器高　4.6	底部から体部への移行が緩やかで、直線的に口縁部へ至る。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－529 8908774	〃	〃	口径　14.2	直立気味に立ち上がる形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－530 8908705	〃	土師器 坏	口径　13.6 器高　3.5	底部から体部への移行が緩やかで、直線的に口縁部へ至る。	底部外面：不定方向のヘラ削り。他の部位は回転ナデ。
－531 8909252	〃	〃	口径　15.2	底部から緩やかに立ち上がり、やや外反する口縁部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－532 8909253	〃	土師器 短頸壺	口径　12.8	丸みを帯びた体部から、直立気味に立ち上がる口縁部形状を示す。	〃
－533 8909254	〃	土師器 甕	口径　24.4	体部より「く」の字形に緩やかに曲折する形状をとる。	体部内面：縦方向のヘラ削り。他の部位はナデ。
－534 8909255	〃	土師器 深鉢	口径　28.1	直立気味に立ち上がる体部から、外反する口縁部形状をとる。	体部内外面ともに回転ナデ後ハケ調整。口縁部内外面ともに回転ナデ。
－535 8908446	〃	土師器 坏	口径　10.9 器高　2.2	底部・体部の境界が明瞭で直線的に外上方へ立ち上がる形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－536 8908447	〃	〃	口径　13.2 器高　2.9	底部から体部への移行が緩やかで、やや外反気味に立ち上がる体部および口縁部形状をとる。	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴 ・ そ の 他
181－537 8908445	SD721	土師器 坏	口径 14.9 器高 5.0	底部から体部への移行が緩やかで、やや外反気味に立ち上がる体部および口縁部形状をとる。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－538 8802228	SD741	須恵器 蓋	口径 13.0 器高 3.1	やや丸みのある天井部から緩やかに口縁部へ至り、曲折後明瞭な断面三角形の口縁端部。つまみはやや高い。	天井部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－539 8802229	〃	土師器 甕	口径 25.0	丸みのある体部から緩やかに「く」の字形に曲折する口縁部形状を示す。	体部内面：縦方向のヘラ削り。体部外面：縦方向のハケ。口縁部内面：横方向のハケ。口縁部外面：ナデ。
182－540 8909257	Pit783	土師器 坏	底径 9.6	底部から緩やかに体部へ移行する坏部形状を示し、外方へ張り出す高台を貼付する。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。最終調整として内面回転ヘラ磨き。
－541 8909256	〃	須恵器 坏	口径 13.2 器高 4.1	底部・体部の境界がやや明瞭で、直線的に外上方へ立ち上がる。高台は外方へ張り出す。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－542 8908468	Pit784	土師器 坏	口径 11.8 器高 3.1	底部から緩やかに口縁部へと移行し、直線的な体部形状を示す。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－543 8908470	〃	〃	底径 8.6	底部から緩やかに体部へ移行する形状を呈し、やや高く直線的に外方へ張り出す高台を貼付。	〃
－544 8909258	〃	須恵器 坏	口径 13.1	直線的に外方へ開く体部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－545 8909259	〃	土師器 坏	底径 7.8	底部から緩やかに体部へ移行する形状を呈し、やや高く直線的に外方へ張り出す高台を貼付。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－546 8909261	〃	〃	残高 1.8	〃	〃
－547 8909260	〃	須恵器 鉢	残高 5.2	やや丸底の底部から丸みをもって立ち上がる形状を示す。	外面回転ヘラ削り。内面回転ナデ。
－548 8908393	Pit785	土師器 坏	口径 12.2 器高 7.0	底部から緩やかに口縁部へと直線的に立ち上がる。高台はやや高く直線的に外方へ張り出す。	底部外面：回転ヘラ切り未調整。他の部位は回転ナデ。
－549 8909309	Pit786	土師器 蓋	口径 16.8	平坦な天井部からやや長めに屈曲し、断面三角形の口縁端部形状をとる。	器面磨耗のため不明。
－550 8909308	〃	〃	残高 1.0	平坦な天井部から丸みを帯びた断面三角形の口縁端部形状を示す。	内外面ともに回転ナデ。
－551 8909306	〃	土師器 坏	口径 12.5	直線的に外方へ開く体部形状を示す。	〃
－552 8909307	〃	〃	底径 9.5	底部から体部への移行が緩やかな形状をとる。	底部外面粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－553 8908754	Pit787	黒色土器 A類 椀	口径 12.4	緩やかに丸みをもって立ち上り口縁部が僅かに外反する。	内外面とも回転ナデ。内面のみ最終調整として手持ちヘラ磨き。外面に沈線。
－554 8909279	表採	染付磁器 碗	口径 14.2	やや丸みをもって立ち上がる体部形状を示す。	全面に施釉。口縁部内外面に1条の界線、外面に草様の文様を描く。
－555 8908397	〃	土師器 坏	底径 9.2	底部から緩やかに体部へ移行する形状を形状を示し、内側接地で断面台形の高台を貼付。	底部外面：粗いナデ。他の部位は回転ナデ。
－556 8909005	〃	土師器 把手付甕	口径 25.5 器高 8.4	底部から体部へ丸みをもって立ち上がり、口縁部を直立気味に曲折させ、丈夫な把手を貼付。	底部外面：ヘラ削り。他の部位はナデ。把手貼付のための粗いナデ。底部・体部境界部分に炭化物付着。
－557 8908467	〃	黒色土器 B類 壺	底径 6.8 胴径 9.3	平底の底部から直立気味に立ち上がり、やや張る肩部形状を示し、細頸の頸部が続く。	底部外面：回転ヘラ切り後粗いナデ。体部外面丁寧な回転ヘラ磨き。内面不明。

(2) 石錘（Fig.183, PL.123）

Ⅲ区北側の小穴埋土中から丸鞆558が1点出土した。縞目をもつ灰褐色の硬質粘板岩製で、通例により偏円形の下端を切り、裏面に紐通し孔を3対穿けている。表面は極めて平滑に磨かれているが、周縁と裏面はほぼ成形研磨のままで、とくに裏面には荒割り際の剥離痕が残る。各稜はかるく面をとっている。最大幅42cm、高さ2.5cm、厚さ0.5cm。

周辺では他に惣座遺跡のひすい製巡方、西山田三本松遺跡の丸鞆および巡方、やや離れ池ノ上の久留間上塚遺跡の丸鞆があり、国府が位置するこの地域特有の集中をみせている。

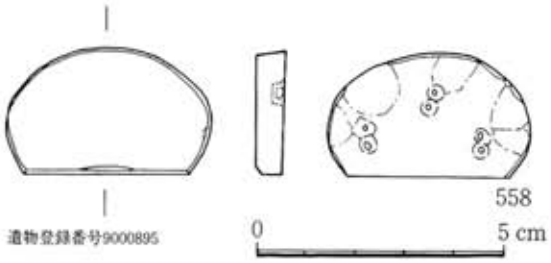


Fig. 183 石錘（3/5）

(3) 鉄器（Fig.184, PL.123）

鉄鎌 559はSK759土壙埋土から出土した。先端部を欠損するが、元々長さ16cm前後になる小型直刃鎌である。両刃で脊部の最大厚0.3cm、基部最大幅3.2cmを測る。

刃子 560は小穴、561はSK775土壙埋土から出土した。560・561とともに基部端と先端部を欠損する。現存長は、560は5.0cm、561は5.2cm。両関で身の反りはない。両刃で断面三角形を呈し、柄の木質が遺存する。

鉄斧 562はSK708土壙埋土出土。袋部のみ遺存しかなり潰れている。植物繊維が付着する。

鉄鏃 563はSK717土壙埋土、564はSB756掘立柱建物跡埋土から出土。563は先端をやや欠き尖根式で鋒はヘラ状をなし、茎および身の断面は方形になる。残存長8.8cm。564は先端部と茎を欠損するが、やはり尖根式であろう。残存長5.9cm

不明鉄器 565はSK759土壙埋土から出土した。基部が丸くなる片刃の鉄器で先端を欠損する。現存長4.7cm、残存幅2.5cm、厚さ0.2cm。

(4) 鏡（Fig.184, PL.123）

566はSP771土壙墓の副葬品の全体の約8分の1にあたる破片で、破片のまま副葬されていた。鏡式は円形素文鏡で、縁は湖州鏡に似た蒲鉾形縁の特徴をもつ。鏡面は平坦で、鏡背には雑な往復細線文が毛彫りされているが一周するものではなく、元々素文であろう。縁には細かな研磨痕が認められ、仕上げは丁寧である。灰黒色を呈するが銅質は錫分が多いと思われ、鋳上がりも良好である。復元径16.8cm、縁幅0.8cm、縁高0.2cm、面厚0.1cm。類例はⅡ区でもSP353土壙墓から小型方形鏡片が出土している。

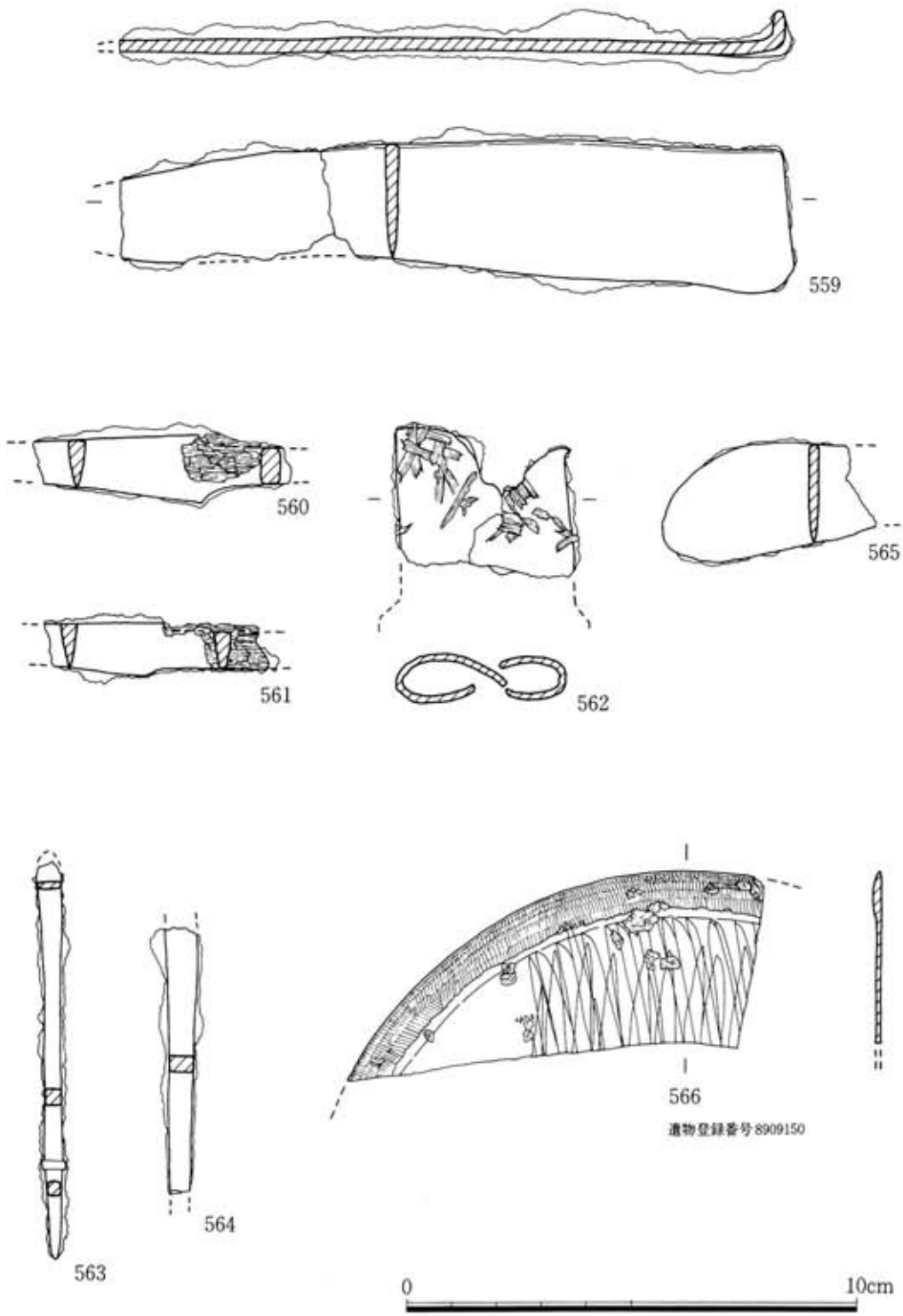


Fig. 184　奈良・平安時代　鉄器・鏡（3/5）

3　室町時代

(1)　土器（Fig.185・PL.122）

煮沸形態・調理形態を主体とし供膳形態が僅かながら出土している。具体的な出土器種は瓦質土器の鍋・摺鉢・羽釜・土師質土器の鍋・鉢・坏・小坏ならびに染付磁器碗等がある。特に主体を占めるのが瓦質土器および土師質土器の鍋であり、やや丸みを持った平底の底部から大きく外方へ直線的に開く体部形状であり、底部付近に僅かに段状の作り出しを有するものがある。さらに口縁部形状は丸く仕上げるものとやや平坦に仕上げるものもあり、頸部においてやや屈曲するものと体部より緩やかに口縁部へ移行するものが出土しているが、前者の方が数量的に卓越している。また器体外面において、体部と底部の境界よりやや高い部分から口縁部が屈曲する部分にかけてスス状炭化物の付着が観察できる。内外面共に、粘土紐巻き上げの接合痕跡である指頭圧痕を明瞭にとどめており、さらにその後粗いハケによる調整が施されている。一部内面に縦方向のナデ痕跡をとどめている個体もある。瓦質土器の鍋は、法量によって大小が存在している。この鍋に把手を付し把手上面から体部に２カ所穿孔が見られ、片方２カ所、１個体において計４カ所の穿孔を施すものである。瓦質土器の摺鉢570は平底の底部から直線的に立ち上がり、平坦な口縁部形状を呈している。底部内面には円弧を描く形で条線が施され、体部における摺り目と同様の工具によるものと考えられる。体部内外面ともにハケ調整によって仕上げられ、最終的に口縁部におけるナデならびに摺り目である条線が入れられている。土師器・坏は少量ながら出土しており、非常に器厚いもので底径に比して口径が大きく、逆台形の形状を呈している。土師質土器の鉢588については、平底の底部からやや外開きに直線的に開く体部形状を呈し、内外面ともにナデによって仕上げられている。染付磁器碗569は、断面三角形に近い高台形状であり、畳付け部分に砂の付着が見られる。さらに畳付け以外の部分は全面釉をかけており見込み部分に呉須にて文様が描かれている。瓦質土器の羽釜583・584は、双耳の把手を付し、把手に１カ所穿孔しており、やや平底の底部から丸みを有する体部形状を呈している。さらにやや内傾する形で立ち上がる口縁部形状を示しており、端部は平坦に仕上げている。また体部最大径を計る部分よりやや下位に、断面台角形を呈する１条の鍔を巡らせており、体部から口縁部へ移行する部分に木葉様のスタンプ文様を付している。２個体実測図を示したが、同一個体である可能性が高い。また構内から出土した遺物の中に図示しなかったが、五輪塔の一部の砂岩製の水輪が転落する形で１点出土している。

以上が溝と解することができる遺構から出土した土器群であるが、出土傾向としては先述した様に、いわば日常雑器的性格の強い土器群を主体としており、土師器・坏・小坏ならびに、底部内面に円弧を描くような条線を入れた瓦質土器・摺鉢559、および出土土器群の主体を占

めている土師質土器・鍋と把手付鍋等の供伴関係から、ほぼ16世紀中頃から後半にかけての出土傾向を示しており、この時期に埋没して溝と考えられる。類似した出土傾向を示す資料群としては、諸富町太田本村遺跡・溝ＳＤ003の出土資料群に近い。

参考文献

徳永貞紹「佐賀平野の瓦質・土師質土器について　－14～16世紀を中心に」1989
（『日本中世土器研究会　第４回シンポジュウム　発表資料』）
種浦　修『太田本村遺跡』　諸富町教育委員会1988

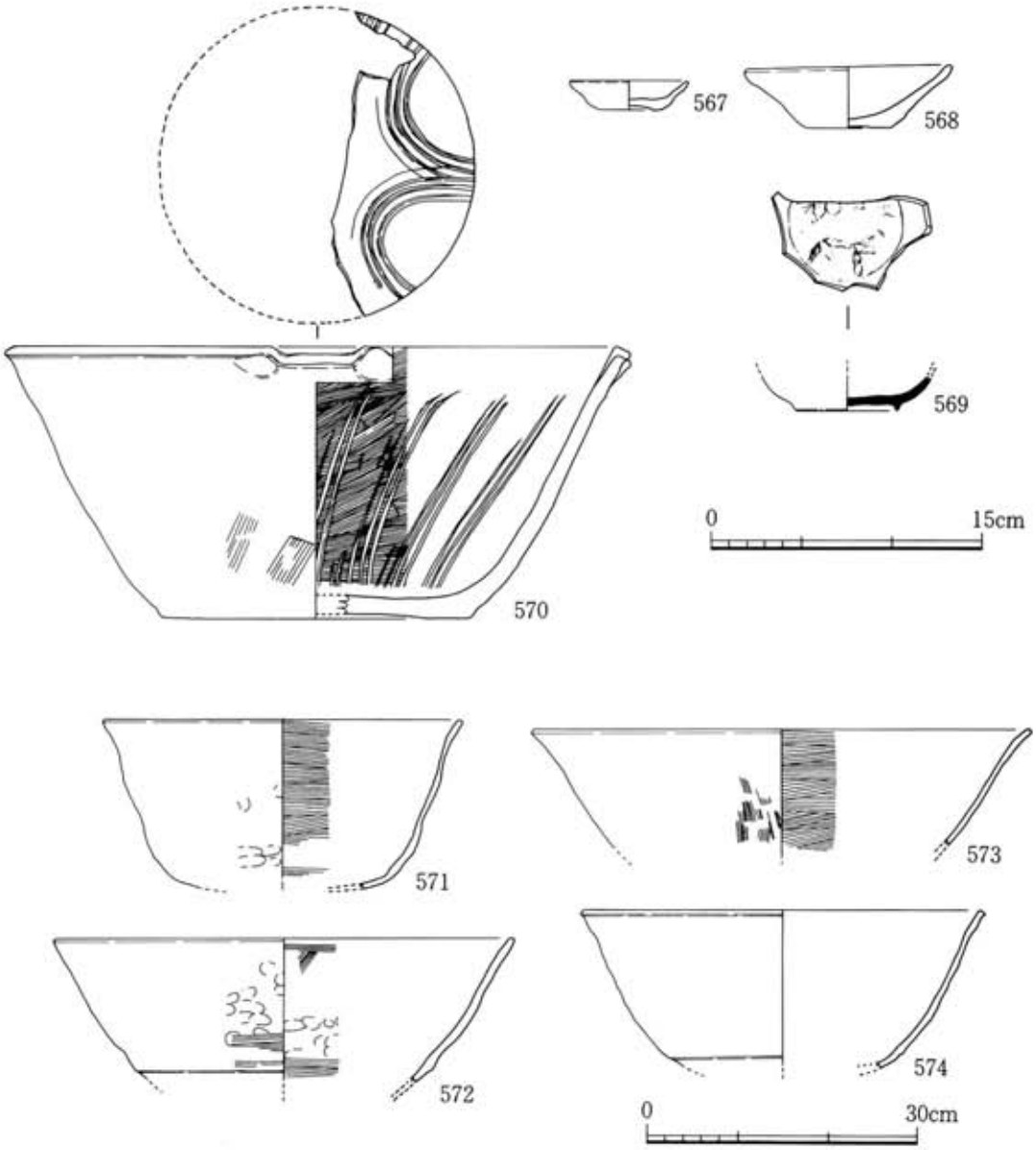


Fig. 185　ＳＤ789 溝出土中世土器１（¼・⅛）

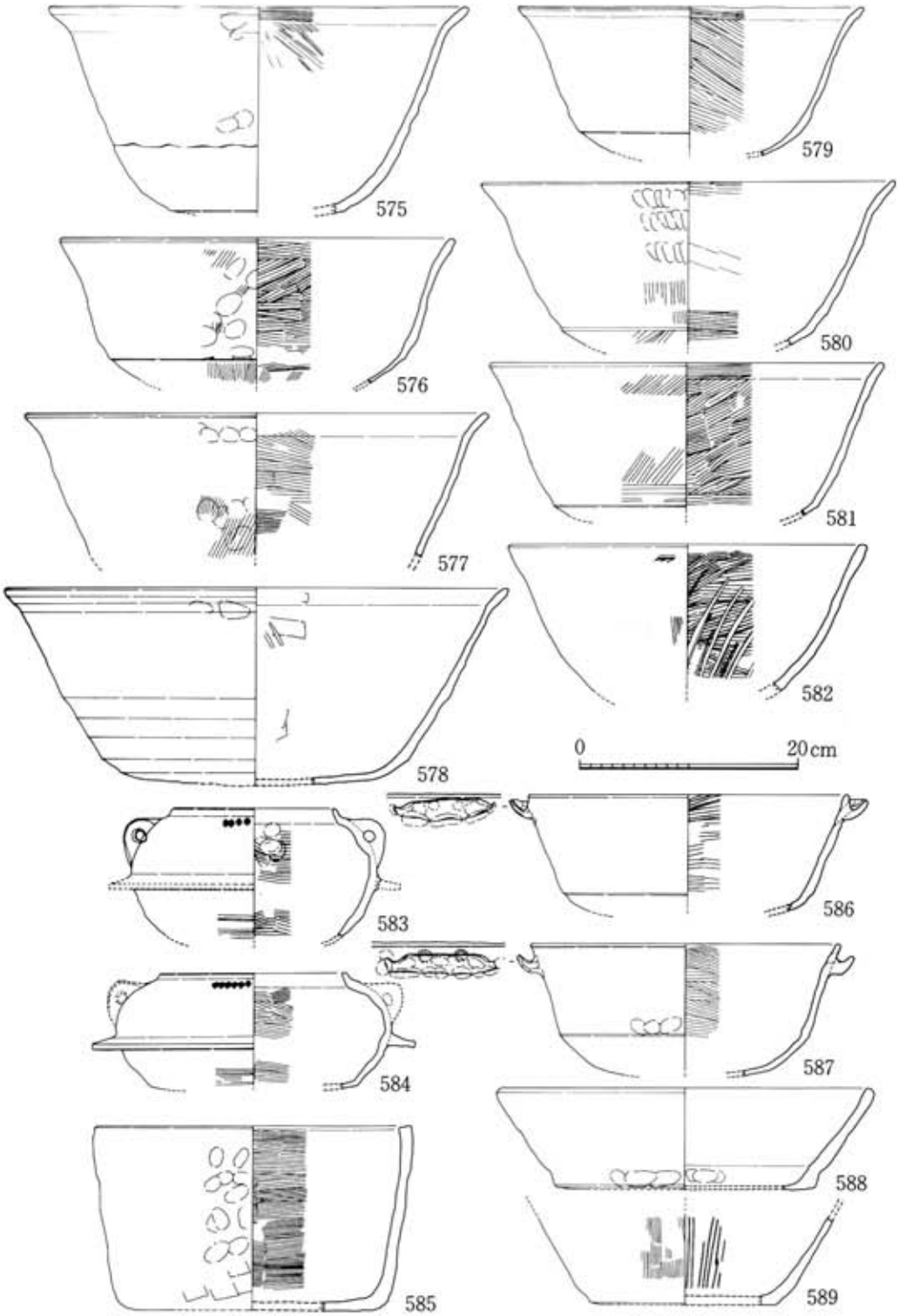


Fig. 186 SD789 溝出土中世土器2 (1/6)

Tab.10　Ⅲ区中世土器一覧表

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量　cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
185－567 8908486	SD788	土師器 小皿	口径　6.4 器高　1.5	平底の底部から直線的外方へ開く形状を示す。	底部外面：回転糸切り。他の部位は回転ナデ。
－568 8908738	〃	土師器 坏	口径　11.3 器高　3.4	〃	〃
－569 8908484	〃	染付磁器 椀	底径　5.6	断面三角形の高台から丸みを帯びて立ち上がる形状を示す。	高台端部を除き全面に施釉。見込み部分に文様を描く。
－570 8908736	〃	瓦質土器 摺鉢	口径　33.0 器高　15.0	平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁端部を面とりによって仕上げ、1カ所に注ぎ口。	内外面ともにハケにより丁寧に調整。内面に4条を1単位とする条線を施す。
－571 8908485	〃	瓦質土器 鍋	口径　39.2 器高　18.8	底部から直線的に外方へ開く形状を示す。	内外面ともに粗い指頭圧によって器面を整え、最終調整としてハケ調整を施す。
－572 8908480	〃	〃	口径　50.4	〃	〃
－573 8908482	〃	〃	口径　54.4	〃	〃
－574 8908483	〃	〃	口径　43.8	底部から直線的に外方へ開く形状を示し、口縁部がやや外方へ曲折する。	〃
186－575 8908737	〃	〃	口径　37.6 器高　19.2	〃	〃
－576 8908489	〃	〃	口径　35.5	〃	〃
－577 8908711	〃	〃	口径　41.7	〃	〃
－578 8908710	〃	〃	口径　45.7	〃	〃
－579 8908712	〃	〃	口径　31.2 器高　14.0	〃	〃
－580 8909002	〃	〃	口径　37.3	〃	〃
－581 8908451	〃	〃	口径　35.3	〃	〃
－582 8908490	〃	〃	口径　32.0	底部から直線的に外方へ開く形状を示す。	〃

Fig－図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
186－583 8908482	SD788	瓦質土器 羽釜	口径 14.5 胴径 22.6	偏球形の体部中位に1条の断面台形の鍔を貼付し2カ所に中央を穿孔した把手をさらに貼付する。	体部内面および外面下位：横方向のハケ調整。他の部位は回転ナデ。頸部に木葉様のスタンプ文様あり。
－584 8908483	〃	〃	口径 16.6 器高 10.5	〃	〃
－585 8908487	〃	瓦質土器	口径 28.9 器高 16.8	平底の底部から直立気味に立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げる。	体部内面：横方向のハケ調整。体部外面：指頭圧による器面調整後粗いハケ調整。
－586 8908740	〃	瓦質土器 把手付鍋	口径 29.0	やや丸底の底部から直線的な体部へ移行し口縁部付近外面に２カ所把手を貼付、さらに穿孔している。	〃
－587 8908739	〃	〃	口径 28.0 器高 12.1	〃	〃
－588 8908481	〃	瓦質土器 こね鉢	口径 33.4 器高 9.2	平底の底部から直線的に外上方へ開くように立ち上がり、口縁端部を面とりによって斜めに仕上げる。	体部内外面ともに回転ナデ。底部・体部の境界部分内外面に指頭圧痕あり。
－589 8908488	〃	〃	底径 17.0	平底の底部から直線的に体部へ移行する。	体部外面：縦方向のハケ調整。体部内面：縦方向の粗いハケ調整。

春日遺跡（かすが）

遺跡名：春　日　遺　跡（略号 ＫＡＳ）
所在地：佐賀郡大和町大字久池井字野口

春　日　遺　跡

Ⅰ　遺跡の概要

丘陵裾の標高約25mの緩斜面上に位置する（Fig.5）。北側背後には山がせまり、南側には東から西にはしる旧地形の谷があって久池井C遺跡や礫石遺跡がのる台地と分断する。この谷は現在も小さな川を流すが、本遺跡付近では幅約50m、深さ約４mと大きく、やや西に行って南に曲がったのち開く。集落の立地条件としては他と分断する点で大きな意味をもっていたと思われる。遺跡は古墳時代後期の古墳群とも重複するが、集落の形成が可能な緩斜面だけでみれば東西に細長く約10,000㎡と推定される。今回の調査区はその南辺部にあたる1,300㎡であり、遺跡の中心部からは南に外れるであろう。

検出した遺構は弥生時代前期～中期初の住居跡など集落関連遺構、古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の掘立柱建物跡である（Fig.187）。全体に削平が著るしく、また南辺の遺構はやや谷に切られている。遺跡全体は不明ながら途中の時期を埋める遺構が他に存在すると予想され、また中世に下る遺物も出土しているので、弥生時代前期から中世まで継続する集落跡とみてよいであろう。もちろん集団そのものが安定的に継続したかどうかはわからないが、立地条件からすると比較的小規模な、おそらく各時期血縁的紐帯のつよい単位集団の存在が想定される。

まず弥生時代前期～中期初では溝１条・竪穴住居跡６棟・竪穴２基・炉跡３ケ所を検出した。ＳＤ008溝は調査区の南端を東西に走るが中央はその後の出水による窪地で約22mにわたって切られ、東端は南に折れ、両端とも南側の谷に消えている。幅約0.5m～1.6mのＶ字溝で、埋土中から弥生前期後半～中期初の土器を中心とする遺物が多量に出土した。この溝は全体として南側に弧を描き、また西傾への傾斜および東端での曲がり方からみると集落をとり囲み、防禦的な環濠といったものではなく、排水が主な目的であったと考えられる。

竪穴住居跡ではＳＢ021が方形竪穴で、調査した遺構の中では最も古く前期前半に遡る。遺跡の東端の調査可能なわずかな平地でみつかっており、南半を谷に削られている。ＳＢ001・ＳＢ007・ＳＢ020は径６～８mの円形竪穴住居跡である。３棟とも上面がかなり削平されており、ＳＢ007では周溝がわずかに残存する程度である。ＳＢ020はＳＤ008溝と切り合う関係にあり、ＳＢ020が後出すると思われる。時期はＳＢ001・ＳＢ002・ＳＢ020が弥生中期初、ＳＢ003・ＳＢ007は前期後半～中期初のうちと推定する。また、これら竪穴住居としたものの中には、住居跡と呼ぶには躊躇するような小型のものが２棟含まれている。すなわちＳＢ002は隅丸方形気味の円形で径約3.0m、ＳＢ003は一辺約2.6mの方形で中央に炉をもつ。通常的な住まいというよりは住居の補完的な施設にあたるものであろう。

いわゆる貯蔵竪穴はＳＫ004・ＳＫ019の２基がある。いずれも小型の方形で、いずれも前期

Fig.187　春日遺跡遺構配置図（1/300）

後半～中期初であろうか。ほかに弥生時代と思われる炉跡が３ケ所みつかっており、ＳＫ015は円形掘形、他も浅く窪み焼土がつまっていた。これらが削平された住居跡の痕跡であるのか、あるいは野外炉跡であるのかは不明である。

弥生時代では調査区の両端部検出面および区外西方の試掘溝で弥生後期の土器片を若干採集したが、遺構そのものは検出されなかった。

次に古墳時代ではＳＢ005・ＳＢ006竪穴住居跡がある。２棟は調査区の東側にあって互いに近接する。上面がかなり削平され南辺を欠失するが、４本柱の構造からみて１辺約５ｍの方形である。いずれもカマドを付設するが、ただし西壁と北壁との違いがある。時期は共に６世紀後半と推定され、近辺でこの時期の竪穴住居跡としては珍らしい。

奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物跡２棟と柱列とがある。掘立柱建物跡のうちＳＢ018は４間×２間の東西棟で柱掘形は円形ながら比較的大型の建物である。ＳＢ011は２間×２間の総柱建物で倉庫とみられる。ＳＸ012柱列はＳＢ011の西北隅柱穴と切り合って４間伸びる。建物跡の可能性があるが、南北いずれにも妻柱が検出されなかったので柱列としておく。その他、ＳＢ003竪穴住居跡の西側にも掘立柱建物の一部かとみられる柱穴があるが、プランがはっきりしない。遺物は検出面で８世紀を中心とする須恵器・土師器および瓦が若干出土しており、建物跡はおそらく奈良時代のものではないかと推定する。

中世では14世紀頃の遺物が若干出土したが、明確な遺構はない。

Tab. 11　　春日遺跡・遺構一覧表

遺構番号	種　別	形　態	規　模　m	時　期	備　考
ＳＢ001	竪穴住居	円形	径 7.7	弥生中期初	中央に炉
ＳＢ002	〃	〃	径約 3.0	〃	中央に炉
ＳＢ003	〃	方形	206×α	弥生前期後半～中期初	中央に炉
ＳＫ004	竪穴	長方形	1.8×1.5	〃	
ＳＢ005	竪穴住居	方形	5.3×α	古墳後期	主柱穴４本、カマド付設
ＳＢ006	〃	〃	5.0×α	〃	〃　、　〃
ＳＢ007	〃	円形	径約 8.0	弥生前期後半～中期初	周溝一部残存
ＳＤ008	溝		幅 0.5～1.2	〃	断面Ｕ字形、弥生前期土器多数出土
ＳＢ011	掘立柱建物	２間×２間	3.4×3.4	奈良時代	総柱、方位Ｎ31°40′Ｗ
ＳＸ012	柱列	４間	8.0ｍ	〃	方位Ｎ19°20′Ｗ
ＳＸ015	炉跡			弥生か	
ＳＸ016	〃			〃	
ＳＸ017	〃			〃	
ＳＢ018	掘立柱建物	４間×２間	7.9×3.3	奈良時代	方位Ｎ19°20′Ｗ
ＳＫ019	竪穴	方形	1.9×1.8	弥生前期後半～中期初	
ＳＢ020	竪穴住居	円形	径 6.2	弥生中期初	
ＳＢ021	〃	方形	3.5×α	弥生前期前半	夜臼式系土器出土

Ⅱ 遺 構

1 弥生時代

(1) 溝 (Fig.188・ＰＬ 126～128)

調査区の南辺を南側に弧を描きながら東西方向に88m走る。途中22mは窪地で切られ、東端は谷側に曲がる。断面は一部Ｖ字形となるが、全体的にはＵ字形で急に掘り込み、幅は西側が約0.5mと狭く、南側が広いところで1.6m、深さはよく残るＳＢ020付近で1.1m。

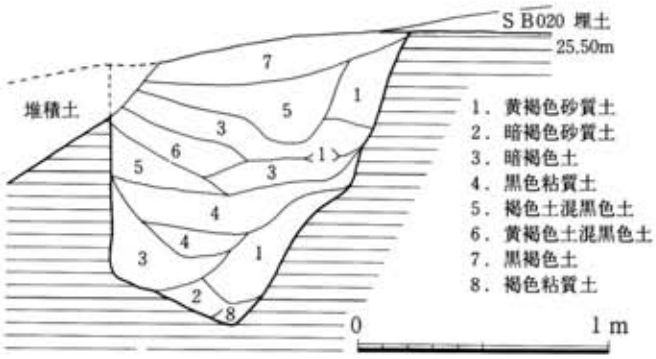


Fig. 188 ＳＤ008溝断面 (1/30)

主に埋土中位から多量の土器等が出土した。弥生前期前半の土器も含むが、主体は前期後半～中期初で、おそらく前期後半に掘られ中期初にはほぼ埋まっていたものと推定される。

(2) 竪穴住居跡・竪穴 (Fig.189～193, ＰＬ 129～132)

竪穴住居跡６棟・竪穴２基がある。竪穴住居跡のうちＳＢ021は夜臼式系の土器を出土する前期前半の例として貴重である。他５棟はＳＢ001・ＳＢ002・ＳＢ020が中期初と推定、ＳＢ003とＳＢ007が前期後半～中期初で、これらに付属するであろう竪穴ＳＢ004・ＳＢ019も前期後半～中期初であろう。

ＳＢ021

形態 方形で南側がやや開く。
規模 3.5m×α、残存深0.4m
特徴 南側を半分以上欠する。床面が柔らかく、実際に長期居住に使用された形跡に乏しい。北壁際床面から夜臼式系鉢片１点が出土したほか埋土中からも同系壺２点分が出土している。

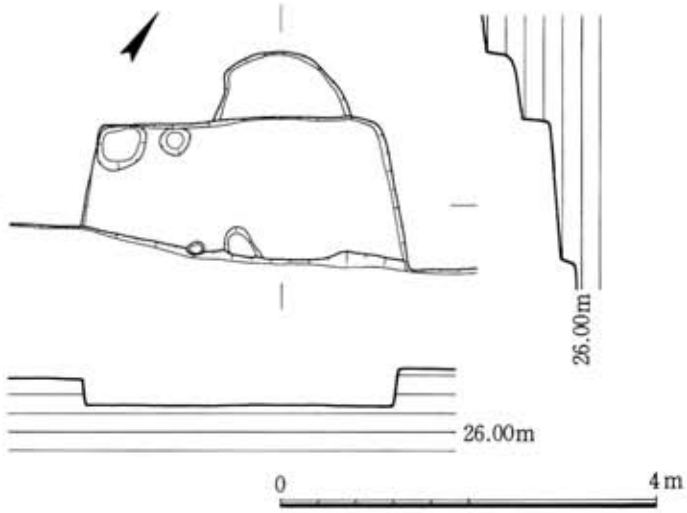
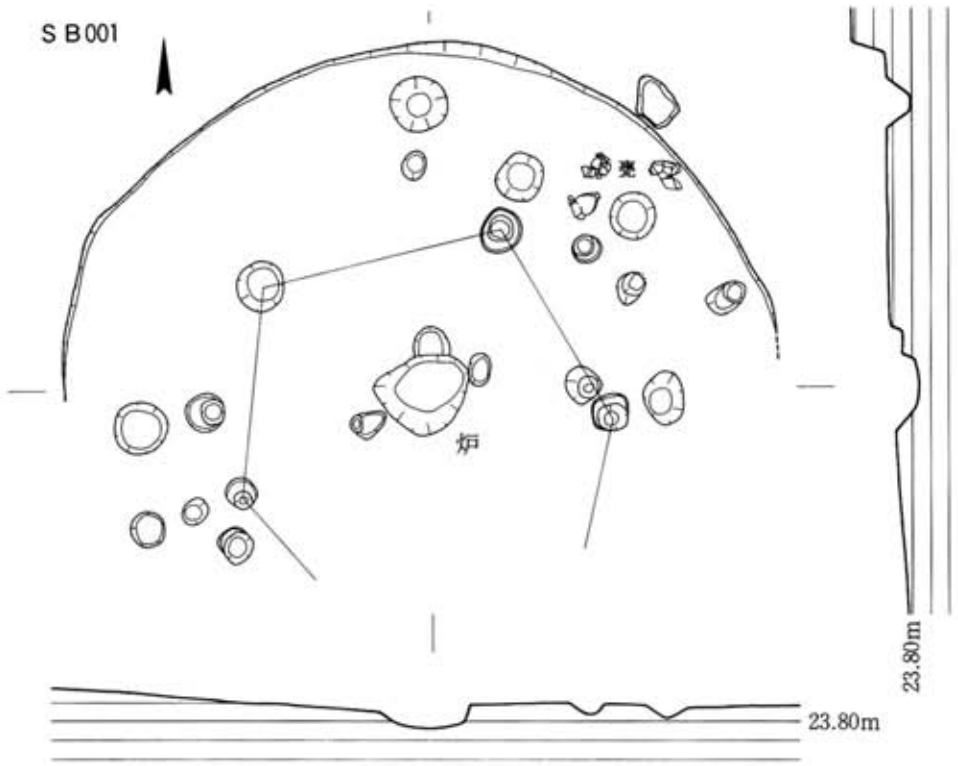
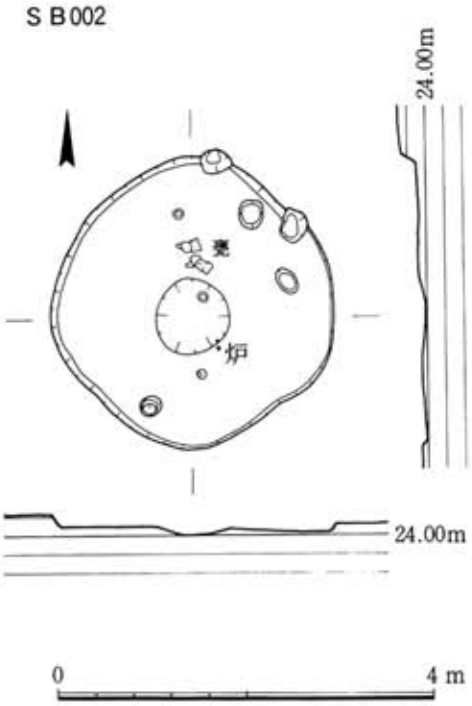


Fig. 189 ＳＢ021 竪穴住居跡(1/40)





S B001

形態　円形

規模　径7.7m

特徴　北側半分のみ壁が浅く残る。主柱穴は６本と推定するが南側は不明。中央に径約0.5mの円形の炉があり、炉床が赤く焼けて炭化物と灰がうすく堆積していた。東北壁ちかくの床面上から甕２点が出土した。

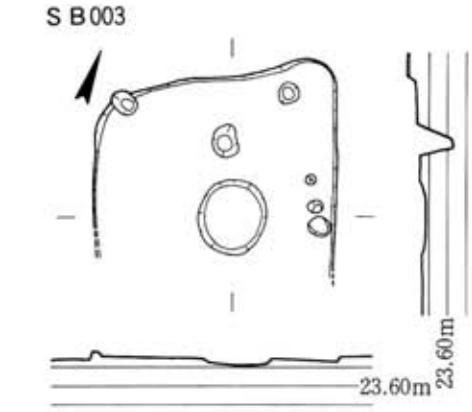
S B007

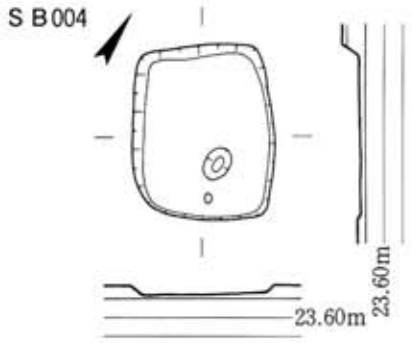
形態　円形

規模　径約3.0m

特徴　S B001に隣接するが、同時期の付属施設とするには近すぎる。柱穴は不明、中央に径0.8cmで焼土と灰の詰まった炉があるので居住は可能であるが、規模からみて恒常的なものとは思われない。炉の北脇から甕が出土した。

Fig.190　S B001・S B002 竪穴住居跡（1/60）





S B003

形態　方形　**規模**　2.6m×α

特徴　上面の削平が著るしく南辺は不明、S B001と同時期でこれに付属する施設の可能性がある。柱穴は不明、中央に径0.4mの炉状の浅い窪みがある。

S K004

形態　方形　**規模**　1.8m×1.5m

特徴　南北にやや長く、貯蔵竪穴にあたるものであろう。削平され壁がうすく残る。南辺際から甕片が出土した。

S B007

形態　円形　**規模**　径約8.0m

削平が著るしく、北側と東北側に浅く残る住居内周溝の痕跡からかろうじて存在が知られる。主柱穴は6本前後。

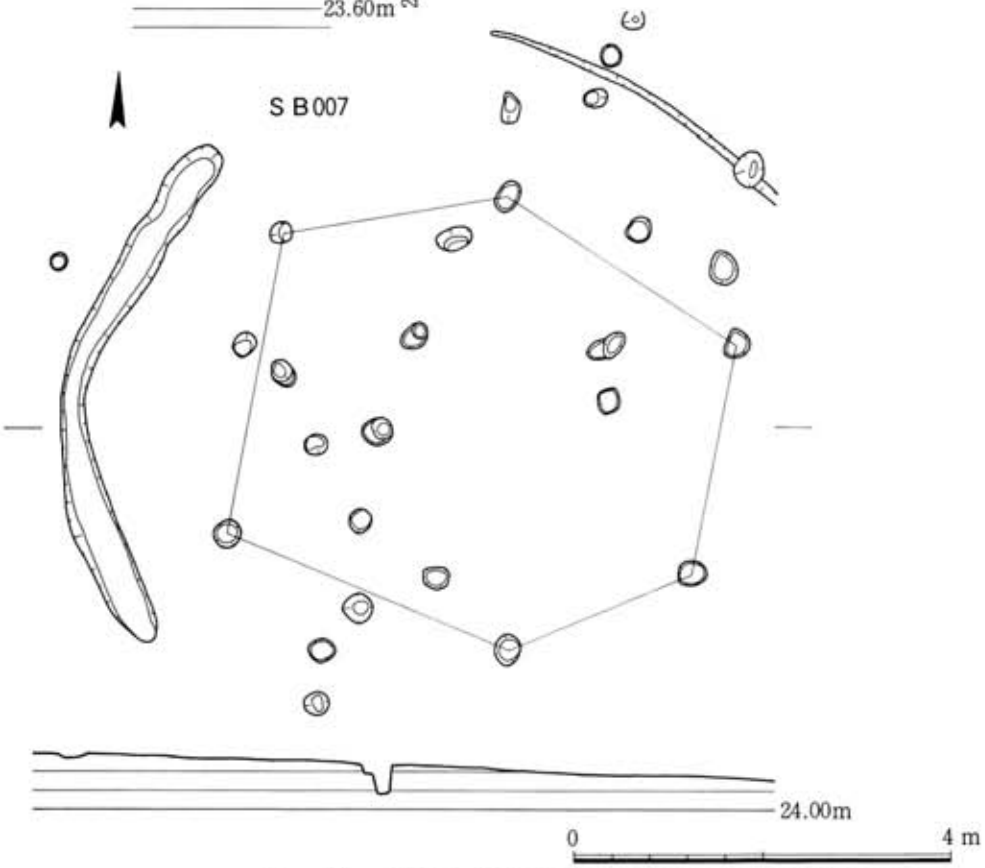
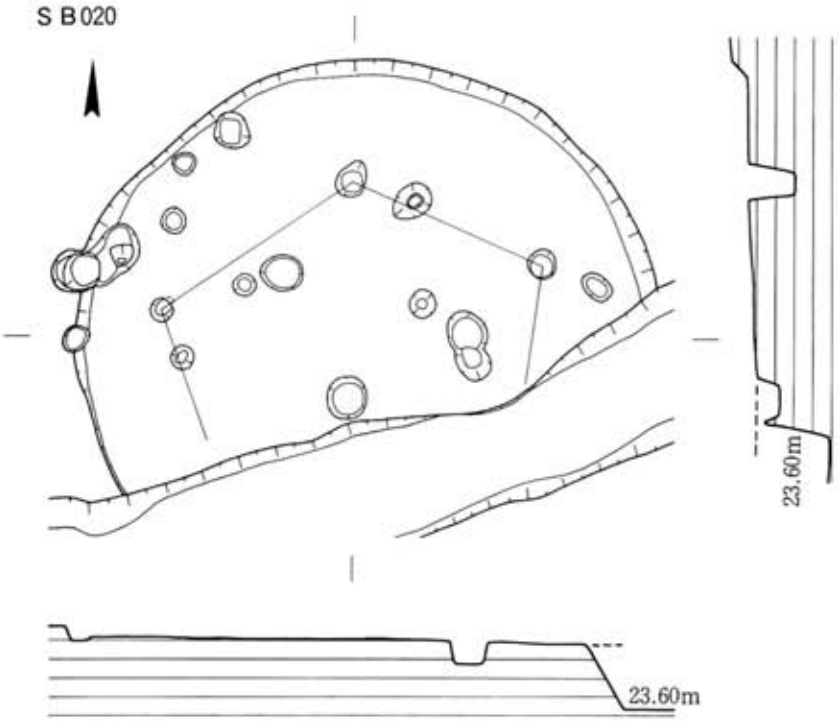


Fig. 191　S D003・S B007竪穴住居跡およびS K004竪穴（1/40）

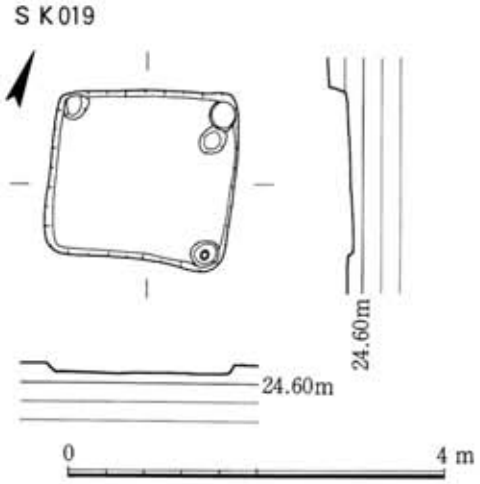


S B020

形態 円形

規模 径6.2m

特徴 北側で壁が約10cm浅く残るが、南側約⅓はＳＤ008溝に切られていると思われる。主柱穴は５～６本からなると推定する。中央の炉は検出されなかった。遺物は土器片が若干出土した。



S K009

形態 方形

規模 1.9m×1.8m

特徴 貯蔵竪穴にあたるものか。弥生期の遺構ではＳＤ008溝の南側に唯一離れて位置する。床面の３隅に浅い小穴はあり、柱穴にあたるものか。

Fig. 192 ＳＤ020・ＳＢ019 竪穴住居跡（1/60）

2　古墳時代

(1)　竪穴住居跡

カマドをもつ方形竪穴住居跡２棟を検出した。２棟は隣接した位置関係にあり、時期は６世紀後半と推定される(Fig.193, ＰＬ 133・134)

ＳＢ005

形態　方形、カマド付
規模　5.3×α
特徴　削平のため南辺部不明だが柱穴からみて方形。柱穴は４本で2.7m×2.7m。西壁際にカマドが形状不明。厚さ約５cmで焼土が堆積し、周囲にも散っていた。

ＳＢ006

形態　方形、カマド付
規模　5.0m×α
特徴　削平のため南辺部不明だが柱穴からみて方形、柱穴は４本で2.8m×2.9m。西壁一部に周溝をもつ。北壁際にカマドを付設し、両袖が残り焼土と灰が詰まっていた。

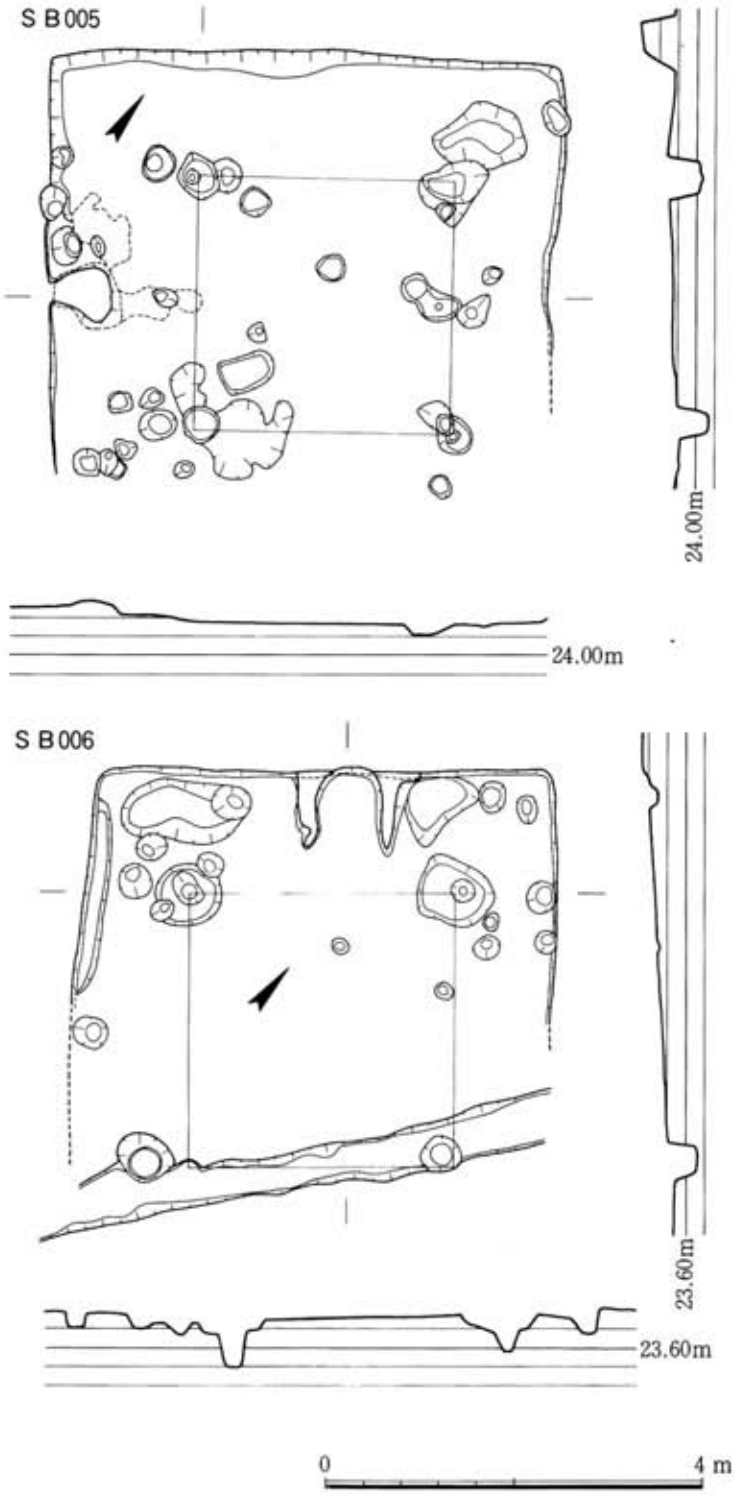
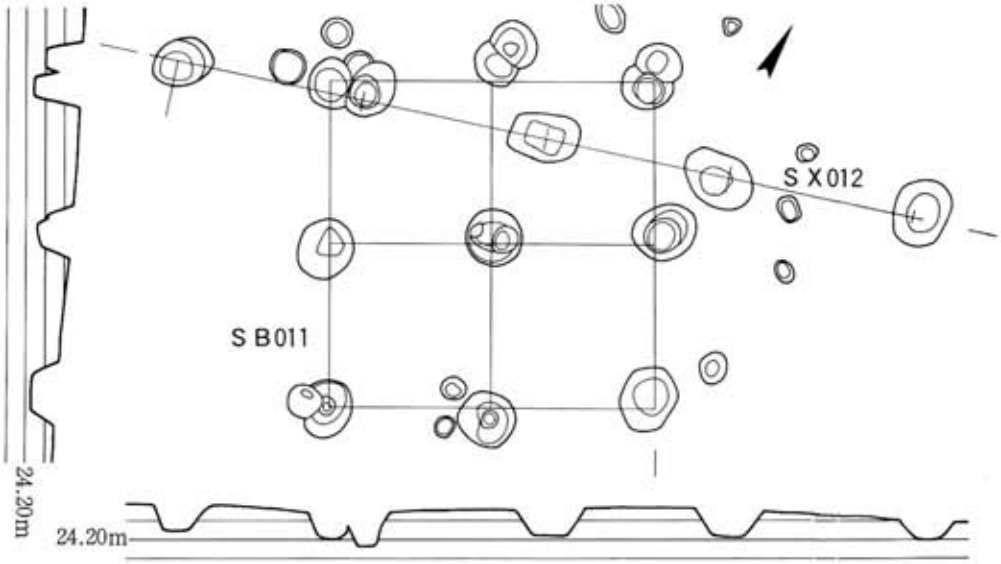


Fig. 193　ＳＢ005・ＳＢ006 竪穴住居跡（1/80）

3 奈良・平安時代

(1) 掘立柱建物跡 (Fig.194, PL 135・136)



S B011

構造 総柱方形 方位 N31° 40'W
規模 3.4m×3.4m 柱間5.7尺

S B012

構造 東西4間 方位 N19° 20'W
規模 8.0m 柱間 6.7尺

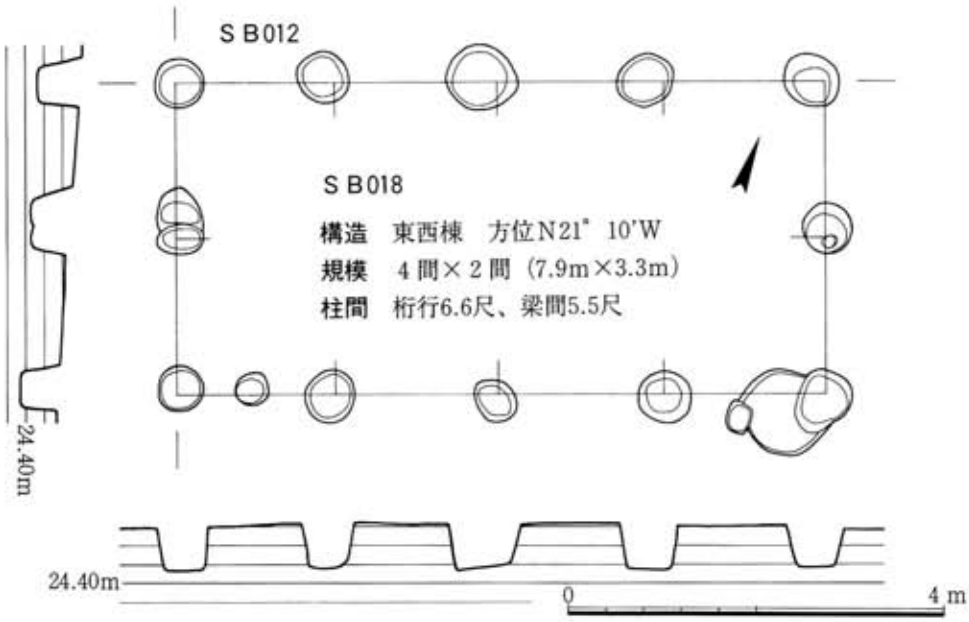


Fig. 194 S B011・S B018 掘穴柱建物跡およびS X012柱列 (1/80)

Ⅲ　遺物

主体を占めるのは弥生土器で、前・中期でもとくに前期後半～中期初のものが多く、他に後期終末の土器を若干採集した。中でもＳＤ008溝からは前期後半～中期初を中心とする多量の土器が出土しており、突帯文系土器の編年上問題となる。弥生時代ではそのほか石器等が若干ある。古墳時代では住居跡から須恵器・土師器が出土したが量は少ない。奈良・平安時代ではこれも須恵器・土師器および瓦が若干あるが遺構に伴わず点数も少ない。

その他、中世の鉢片等が若干出土している。

1　弥生時代

(1)**石器**（Fig.195・196, ＰＬ 137）

石鏃11点と石包丁・石斧等磨製石器８点を図示する。

石鏃　１～10の打製品と11の磨製品とがあり、打製品では基部の特徴からおよそ５種に分けら

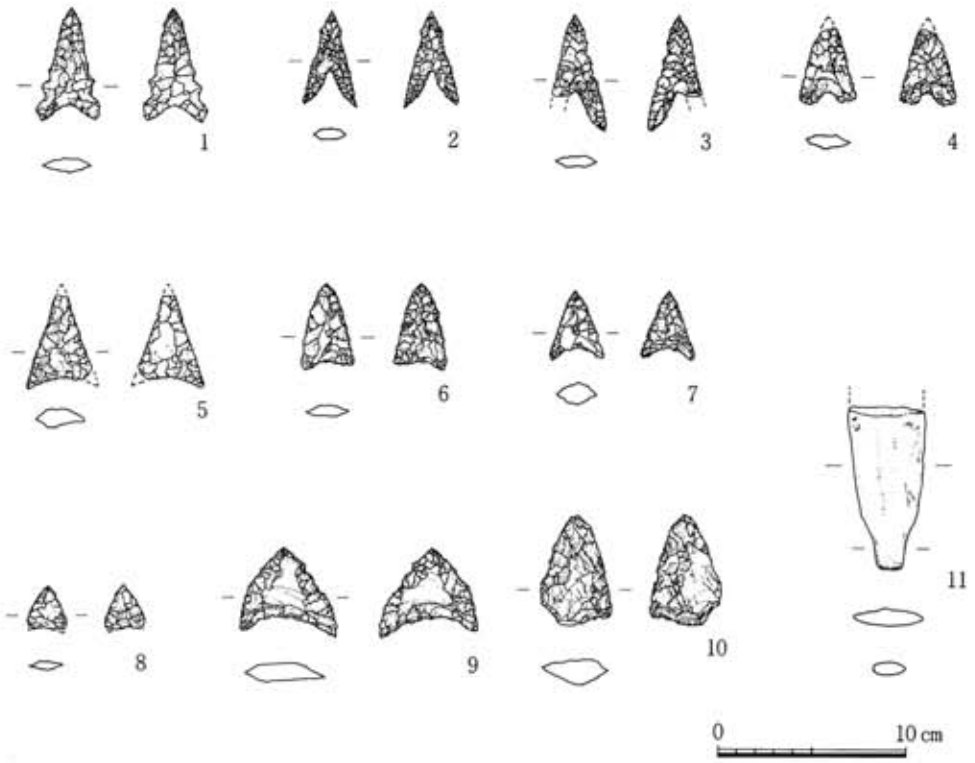


Fig.195　石鏃（½）

れるが、点数が少ないのでとくに分類しない。

1は基部の抉りが山形で脚がやや伸びる。サヌカイト製で1.1g。2・3は抉りが深く脚がとくに長い。2は乳白色チャート製で細かな剥離を施し0.5g、3は黒曜石製で0.7g。3点とも細身で鋒が鋭い。

4は基部に抉りをつくるが脚を意図しない。サヌカイト製で0.9g、5～9は基部に弓状の浅い抉りをもつ、大きさおよび細かな形態には違いがあり、8の両側縁が弧状で造りが粗い。5はサヌカイト製1.3g、6は黒曜石製0.8g、7は黒曜石製0.9g、8はサヌカイト製0.2g、9は黒曜石製1.0g。

10は不整形な基部と先端をもち厚く、製作途中のものか、サヌカイト製で3.3g。

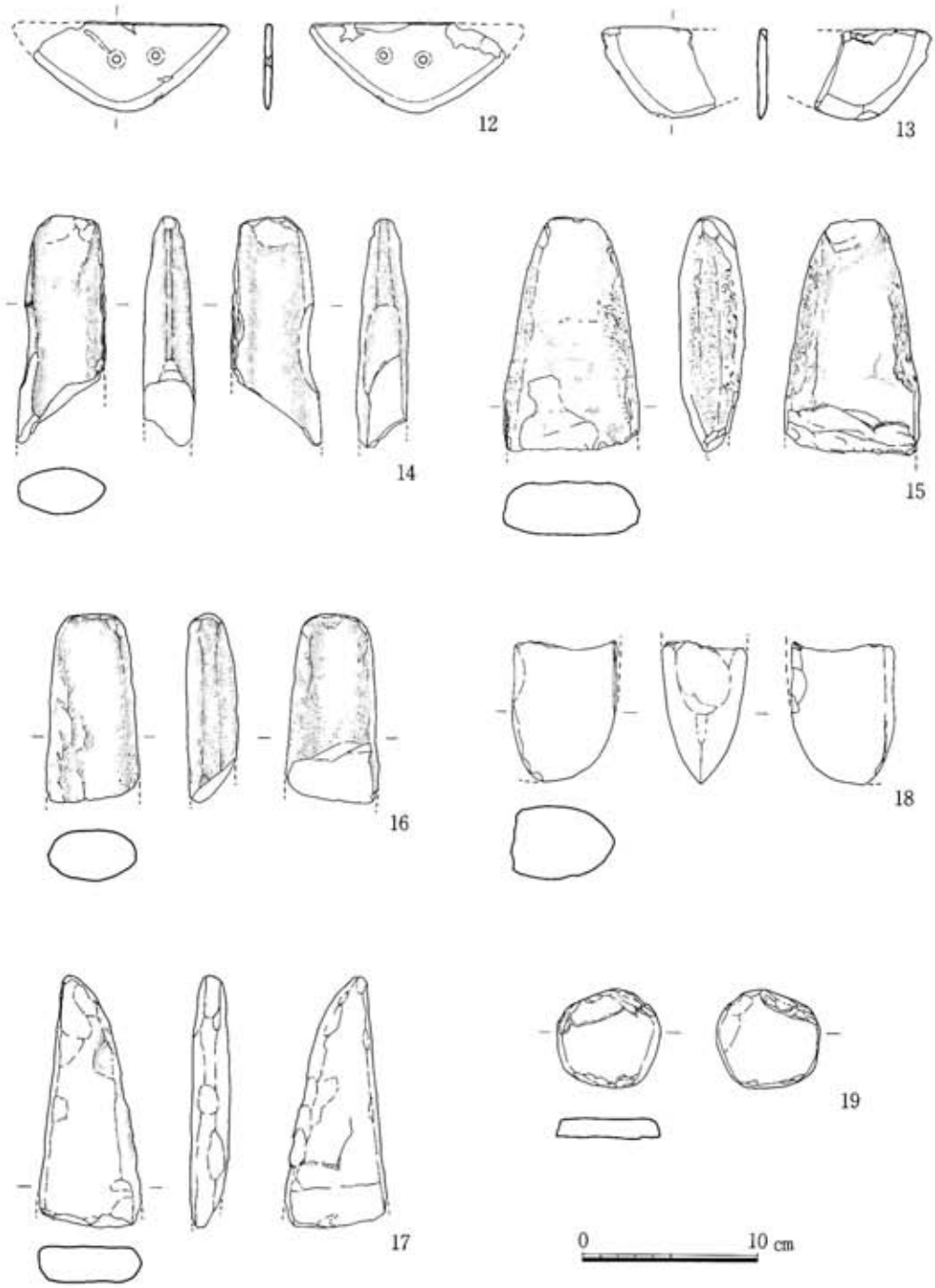
磨製石鏃では11の1点のみあるが風化してもろく先端を欠失する。茎は小さく、身は偏平で中位が広く長伸。残存長4.3m、身幅2.0cm。

なお、出土地点は1・2・4・11がSD008溝、9がSB001竪穴住居跡、5・7がSB020竪穴住居跡、他は表採である。

石包丁 12は平面三角形ちかく、一端を欠く。紐孔が中心から外れているところをみるとかなり研ぎ減りがあるかと思われるが、2孔そのものも脊に対し水平に位置していない。立岩系の暗灰褐色輝緑凝灰岩を使用、復元長12.2cm、幅5.1cm、厚さ0.4cm。13は片側半分ちかくを欠失する。脊を水平に置いた場合、刃部最先端が極端に一方に寄り、また紐孔も残存部にはみえないので、再生により大きく変形したものかと思われる。砂岩製で、残存長5.6cm、幅6.6cm、厚さ0.5cm。2点ともSD008溝から出土した。

石斧 14は抉入柱状片刃石斧で、折損し基部のみ残る。基部端と身の脊側にやや調整打痕を残すほかは平滑に研磨されている。抉は幅5で浅く弓状につくり、断面形は丸味をもって基部端に向かって尖り気味に薄くなる。暗灰色粘板岩で残存長13cm、最大幅5.1cm、最大厚さ3.9cm。15は刃部を欠失する。基部端は少し剥離し、両側面に調整打痕、表裏面はよく研磨されている。灰褐色粘板岩で残存長13.4cm、最大幅7.7cm、最大厚3.7cm。16も刃部を欠失する。表裏面研磨、基部端から両側縁に調整打痕をやや残す。身中位の断面は厚く丸味をもつ。灰色砂岩で残存長10.7cm、中位で幅5.3cm、厚さ2.9cm。17は粗い造りの片刃石斧。平面形は基部が一方に傾いて尖り、調整打痕を多く残しながら全面をかるく研磨して偏平に仕上げている。灰色粘板岩で全長14.3cm、刃部幅5.8cm、厚さ約2.2cm。18は太形蛤石斧の刃部破片。刃部は厚く十分研磨されている。石材は灰色砂岩。なお、これら石斧5点のうち17はSB003竪穴住居跡出土、14は検出面、他はSD008溝から出土した。

円板 19は紡錘車の未製品であろう。径5.7cm前後の不整円形で、両面は厚さ約1.0cmに荒割りのまま、周縁は研磨されているが、両面とも周縁ちかくの剥離痕が大きい。暗緑色の片岩系石材を使用する。SD008溝出土。


12
13
14
15
16
18
17
19
0
10 cm

(2) 土器

a) 弥生前期の土器 (Fig.197～205, PL 138～143)

甕・壺・鉢・その他がある。そのうち甕が断然多く、また大部分はSD008溝からの出土で他に竪穴住居跡および竪穴等からの出土が若干ある。これらの土器は前期後半を中心として前期中頃から一部は中期初頭に及ぶが、ここでは前期の項の中で一括して説明し、編年上の位置づけについては後にまとめる。個々の観察一覧表はTab.12によられたい。

まず最も古い様相をもつものとしてはSB021出土の壺・鉢がある。器種の共伴を示すため別に一括しておく (Fig.197) 。3点とも夜臼式である。壺20は平底と思われるが、広口で短かく直立する口縁部だけをみれば一見夜臼式でも古期の形態を思わせよう。しかしながら口頸間よりやや下がって単に装飾化した沈線は夜臼式の新らしい要素といえるものであり、胴部が低くつよく張る特徴は板付Ⅰ式並行期と見られる壺にもみられるところである。しかも胴径が大きい。平底の壺21との共伴に矛盾のない時期の特殊な型態と考える。鉢22も口縁部は短かく折れて一旦内傾するが端部は直立しており、夜臼式でも古期のものではない。

これら以外の、SD008溝および竪穴住居跡・竪穴等出土土器については器種ごとに以下分類して述べる。

〔甕〕 大別して刻目突帯文系と板付式系とがある。ただし、あくまで主体は刻目突帯文系であって、板付式系は客体である。主に口縁部の特徴と全体のプロポーションからA・B・C…に分類し、さらに細部の特徴・法量等からa・b・c…にそれぞれを細分する。

A類 (Fig.198・199)

口縁部突帯はやや突出して上面に比較的小さな平坦をつくり、胴部上位にも1条突帯をめぐらす。胴部は下半がかるくしまり、上半は直立あるいはやや内湾して立ち上がる。突帯の刻目

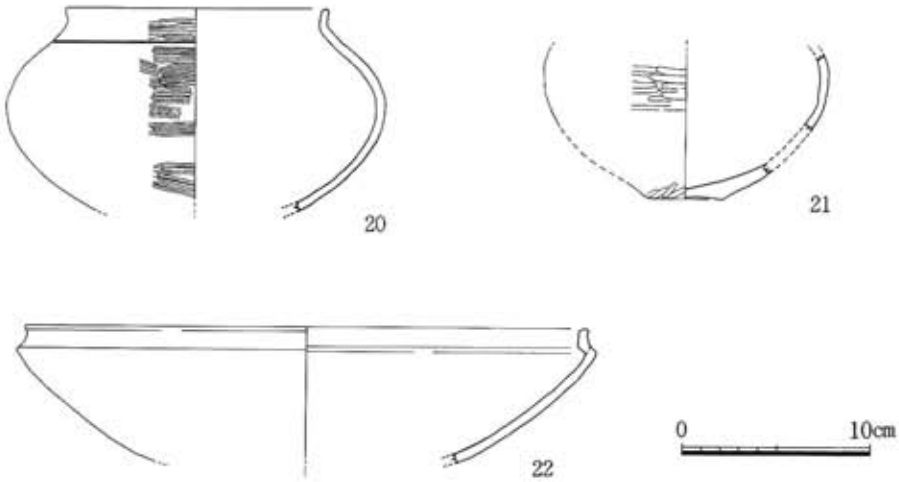


Fig.197 弥生前期土器1 SB0021出土 (1/4)

はヘラをかるく当ててつけ、これを省略するものもある。調整はハケ目を残すものは稀で主にナデて仕上げる。口縁部突帯の特徴からＡａ類、Ａｂ類、Ａｃ類に細分する。

Ａａ類　口縁部突帯が小さく未発達なもの。23・24がある。23は胴部上位が内湾して突帯に刻目を施すのに対し、24は胴部上位が直立して突帯に刻目をもたない。

Ａｂ類　口縁部突帯は上面やや下傾気味の小さな平坦をつくり、Ａａ類に比べると突出が大きい。25～30のほか、小型甕35もこれに含めておく。突帯の刻目は25・26が省略、ハケ目は25・29にみられるほかはナデ仕上げである。出土した甕のうち最も量が多い。**Ａｃ類**　口縁部突帯は上面が平坦口縁にちかく端部が伸びるもの。31は胴部に張りがなく、突帯は刻目を省略し、ハケ目を残す。

Ｂ類（Fig.199, 200）

口縁部突帯が断面三角形となる特徴をもつもので、胴部上位にも突帯を１条あるいは稀に２条めぐらす。胴部はＡ類同様に下位でかるくしまり上半は直立あるいはやや内湾して立ち上がるが、これに厚い台状底部をもつものが加わる。突帯の刻目は省略する場合があり、また調整はすべてナデ仕上げである。口縁部突帯底部の特徴からＢａ類・Ｂｂ類・Ｂｃ類に細分する。

Ｂａ類　口縁部突帯は突出の小さな断面三角形をなし、上面が下傾する。33・34を挙げておく。いずれも刻目突帯で、胴部は33が上位で直立するのに対し、34はやや内湾する。

Ｂｂ類　口縁部突帯は幅が広く厚味のある断面三角形をつくる。36～39がある。36は大型で胴部上位が内湾気味、他はほぼ直立する。突帯の刻目は37・39が省略する。なお37は底部を穿孔し甑に転用している。

Ｂｃ類　口縁部突帯は厚味のある断面三角形で、胴部下位はしまって厚い台状底部をつくる大きな特徴がある。41は口縁部突帯が三角形でもやや突出し、底部は上げ底である。ＳＢ001からＢｂ類の39・40と共伴して出土した。

Ｂｄ類　Ｂ類のうち、胴部上位に突帯２条をめぐらす大型の甕。42は口縁部突帯が未発達で小さい。

Ｃ類（Fig.201）

突帯文系甕のうち胴部が底部から口縁部に向かって直線的に伸びるもの。43は口縁部と胴部上位に刻目のないやや小さな突帯をめぐらせる粗製の甕である。

Ｄ類（Fig.201）

口縁部が外反して伸びる如意形口縁の甕。法量および突帯の特徴からＤａ類・Ｄｂ類・Ｄｃ類に細分する。

Ｄａ類　口縁部が大きく外反し、口唇部角にかるく刻目を施す大型の甕で、46・47がある。46は胴部上位がわずかに張ってハケ目を残す。47は胴部が張らずナデて仕上げている。板付Ⅱ式にあたる。

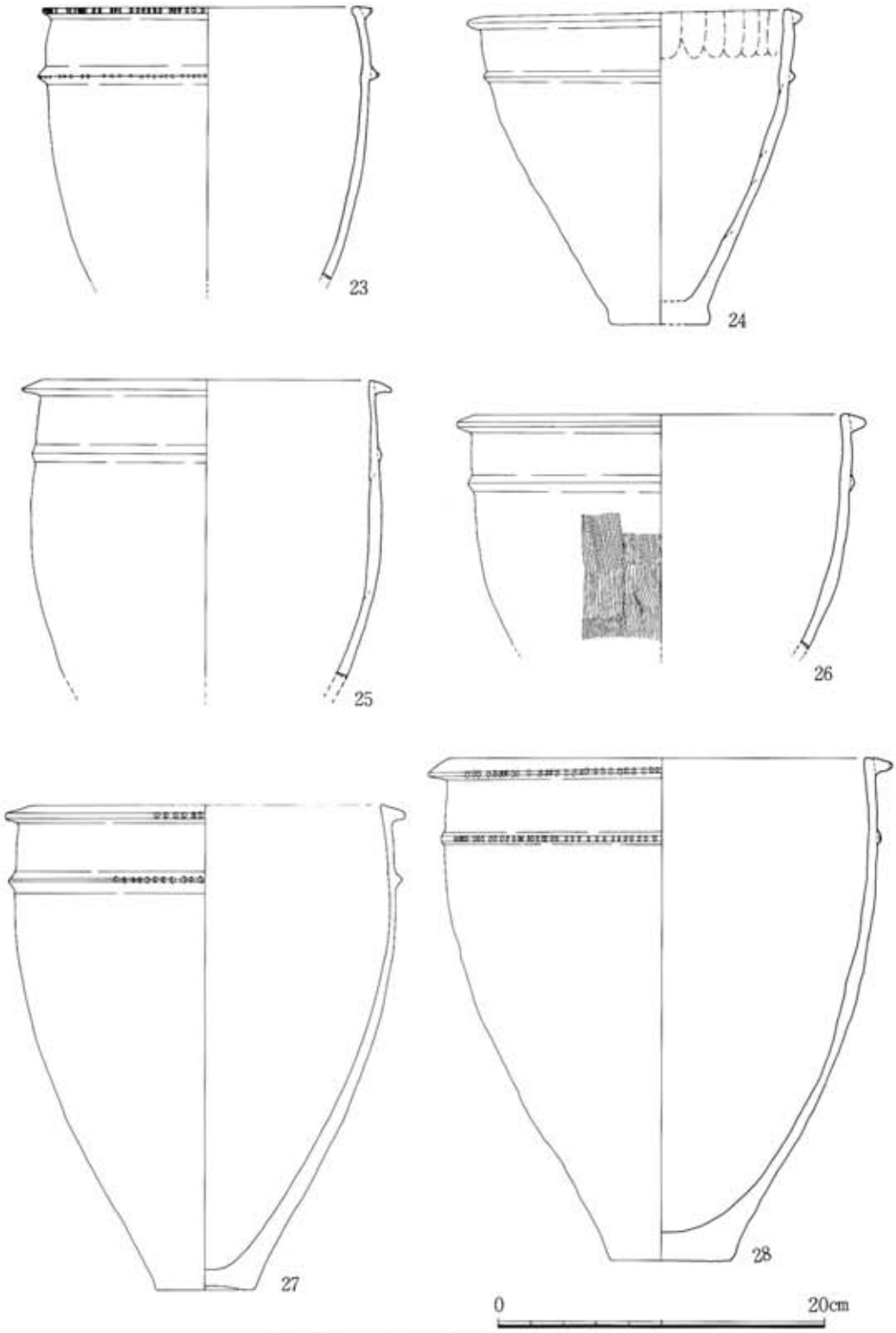


Fig.198　弥生前期土器２　甕（¼）

Ｄｂ類　口縁部が折れ気味に外反する小型の甕。48・49がある。48は胴部中位が張って口縁部角に刻目を施すのに対し、49は刻目をもたない。共にナデ仕上げである。

Ｄｃ類　如意形口縁で胴部上位に突帯をめぐらす板付式と突帯文系とのいわゆる折衷形式。50は胴部が張らずに浅く、口唇部および突帯に刻目をもたず、ナデ仕上げである。

その他、甕底部が多数出土しており、一括して図示する。（Fig.202）

〔鉢〕　点数が少ないのであえて形式分類しない。（Fig.204）。口縁部が屈曲する夜臼式の鉢は先のＳＢ021出土品のほか脚状底部91がＳＤ008からも出土している。また突帯文系では44と45が同系統でありながら口縁部突帯の発達に大きな差がある。51は如意形口縁をもつ大型の鉢で、口縁端部が平坦にちかく大きく外反する。その他87～90は脚状底部や平底・台状底部など様々な手捏ね風の小型鉢で、そのうち90が如意形口縁をもつ。

〔壺〕　これも点類が少ないのであえて形式分類しない（Fig.203）。大型壺と小型壺がある。

大型壺では73～78・83～84がある。このうちでは胴部肩位が張る74が古相をもち、胴部がつぶれて中位が張るらしい76が後続する。この２点が頸胴間を沈線で区切る夜臼式系であるのに対し、73は突帯で区切り頸部が立ち、夜臼式から一段飛躍した形態である。

小型壺は79～82がある。79・80は基本的に夜臼式系とみられるが、79では口縁部が外反気味に折れて伸び、板付式壺の影響を思わせる。胴中位が張って頸胴間に段・沈線をもたない80との違いが大きい。81・82はとくに小型で、81は胴部がやや肩が張り82は球状という違いはあるが、共に口縁部から胴部までのプロポーションがゆるやかなＳ字を描く。

〔蓋〕　91のほか破片が１点出土した（Fig.204）。天井部が高いわりに裾は端部が平坦にちかく開く。頂部は細くしまったのち上端周縁が外に張り出し上面が窪む。

〔甕棺〕　ＳＤ008から生活用土器と共に数点出土した（Fig.204）。93・94は共に口縁部を外反させ口唇部に刻目を施すが、93は内面に粘土帯を１段高く貼って口縁部を厚く強調させる。

以上、図示した資料の出土遺構は先のＳＢ021竪穴住居跡一括のほか、甕32がＳＫ004竪穴住居跡、甕38～39・56（甕Ｂｂ類・Ｂｃ類）がＳＢ001竪穴住居跡、甕58・67（Ｂｂ類・Ｂｃ類）および鉢88がＳＢ002竪穴住居跡、他はすべてＳＤ008溝からの出土である。したがって共伴関係では甕Ｂｂ類とＢｃ類、ＳＢ021出土の鉢と小型壺の同時性は確められるが、大部分を占めるＳＤ008出土品の場合はその中に明らかな時期差があるため、器種をこえた編年となると改めて整理が必要となる。なお、個々の資料の詳細についてはTab.11のとおりである。

〔その他の土製品〕　土製紡錘車・投弾・不明土製品・土錘がある（Fig.205）。紡錘車95は径3.8でＳＢ001出土、96は径2.9cmでＳＤ008出土。投弾98・99はＳＢ001から出土した。97は刺突孔をもつ粘土小塊で焼成品ではあるが性格不明。ＳＤ008出土。土錘100は西側検出面からの出土で、弥生後期以降に下る可能性もある。

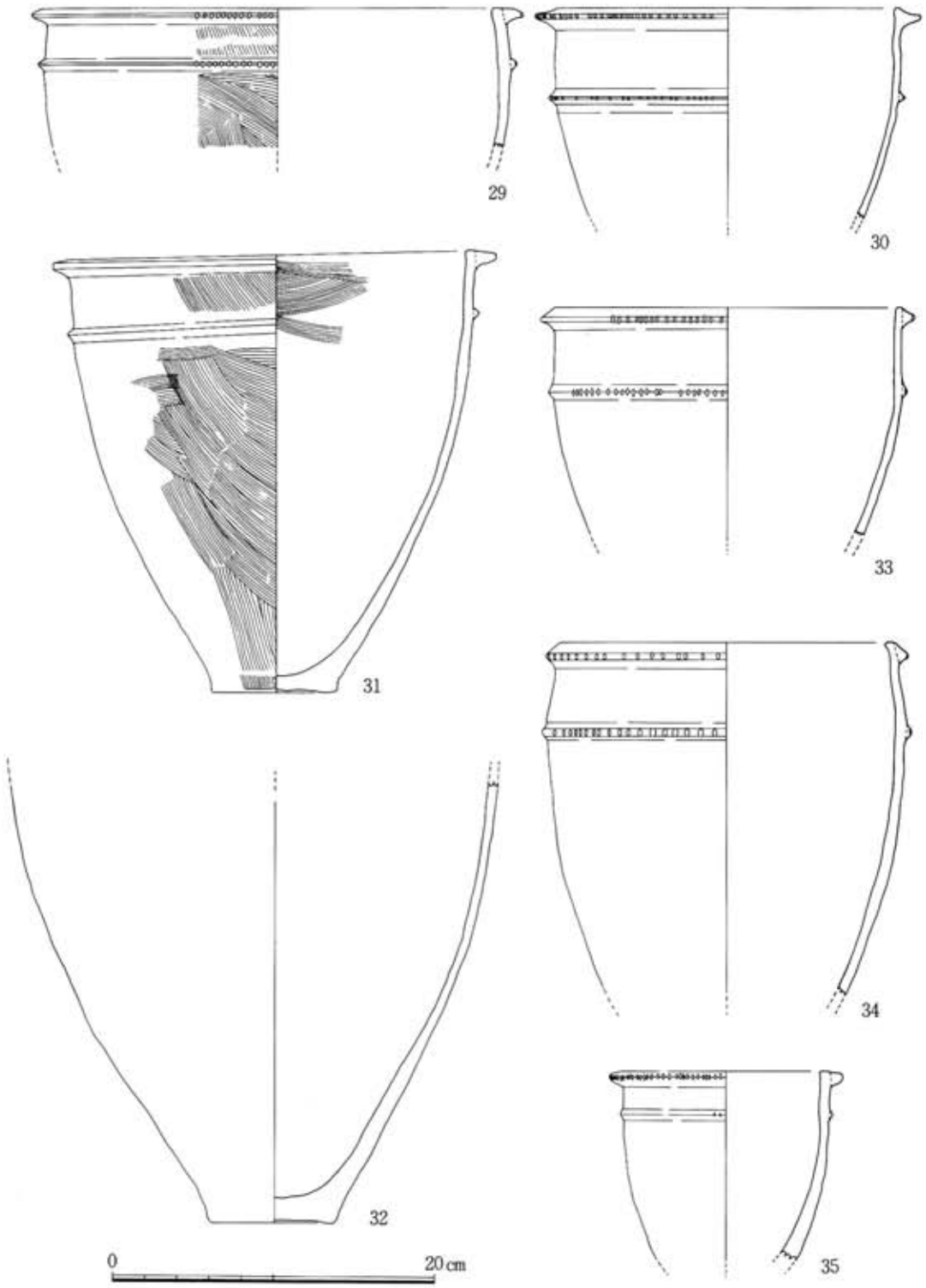
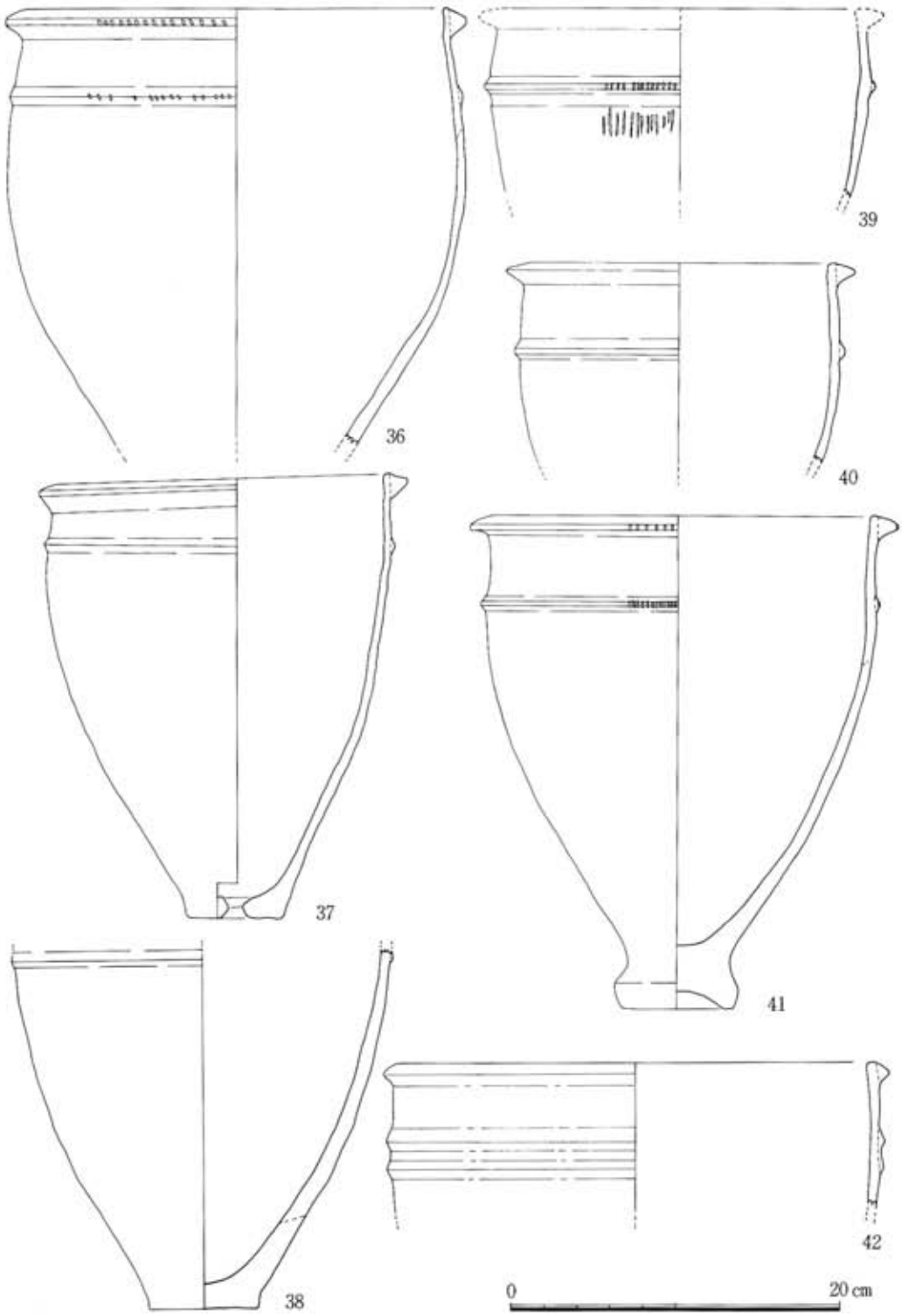


Fig.199　弥生前期土器3　甕（1/4）


36
39
40
37
41
38
42
0
20 cm

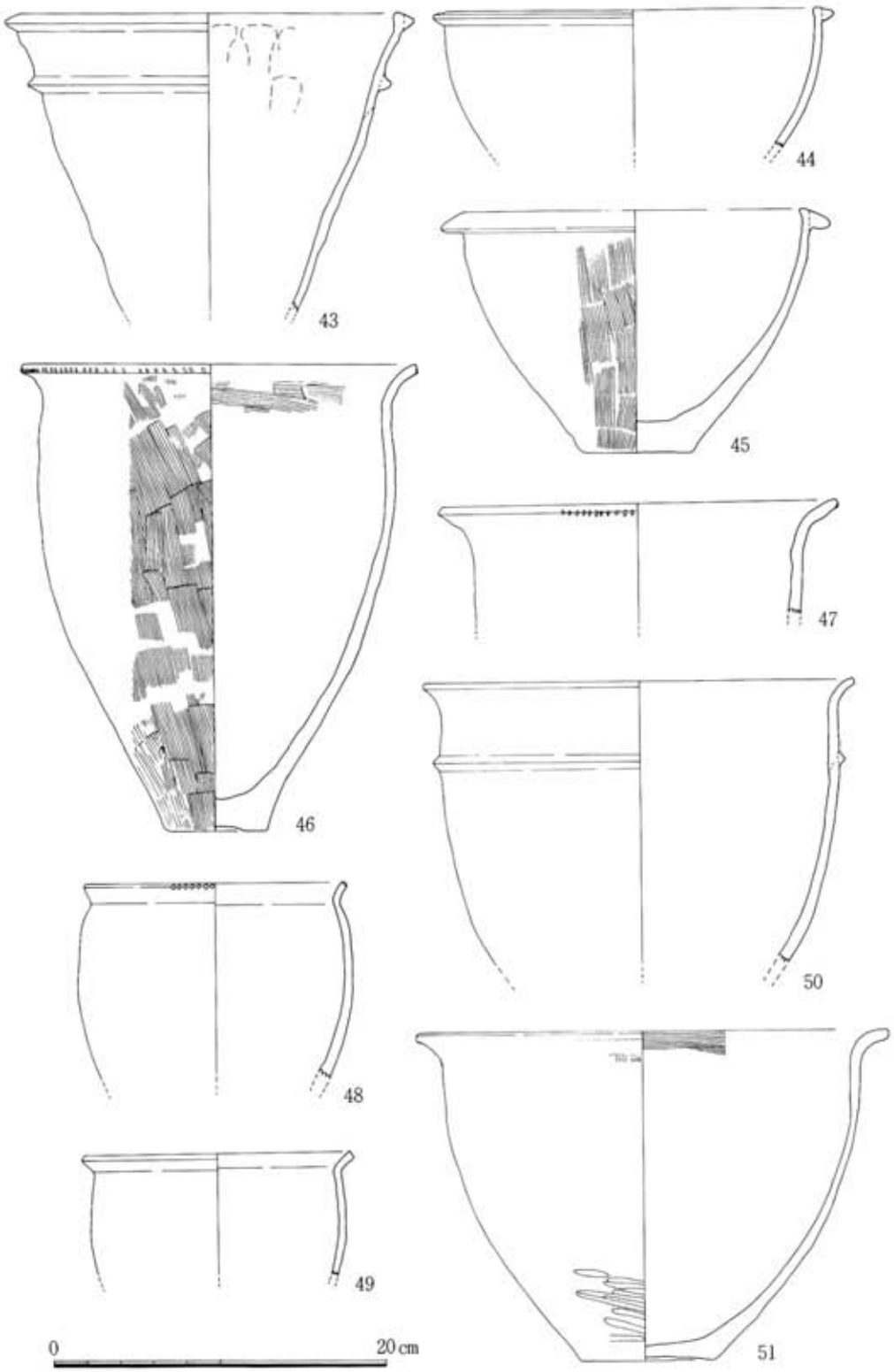


Fig.201　弥生前期土器5　甕（1/4）

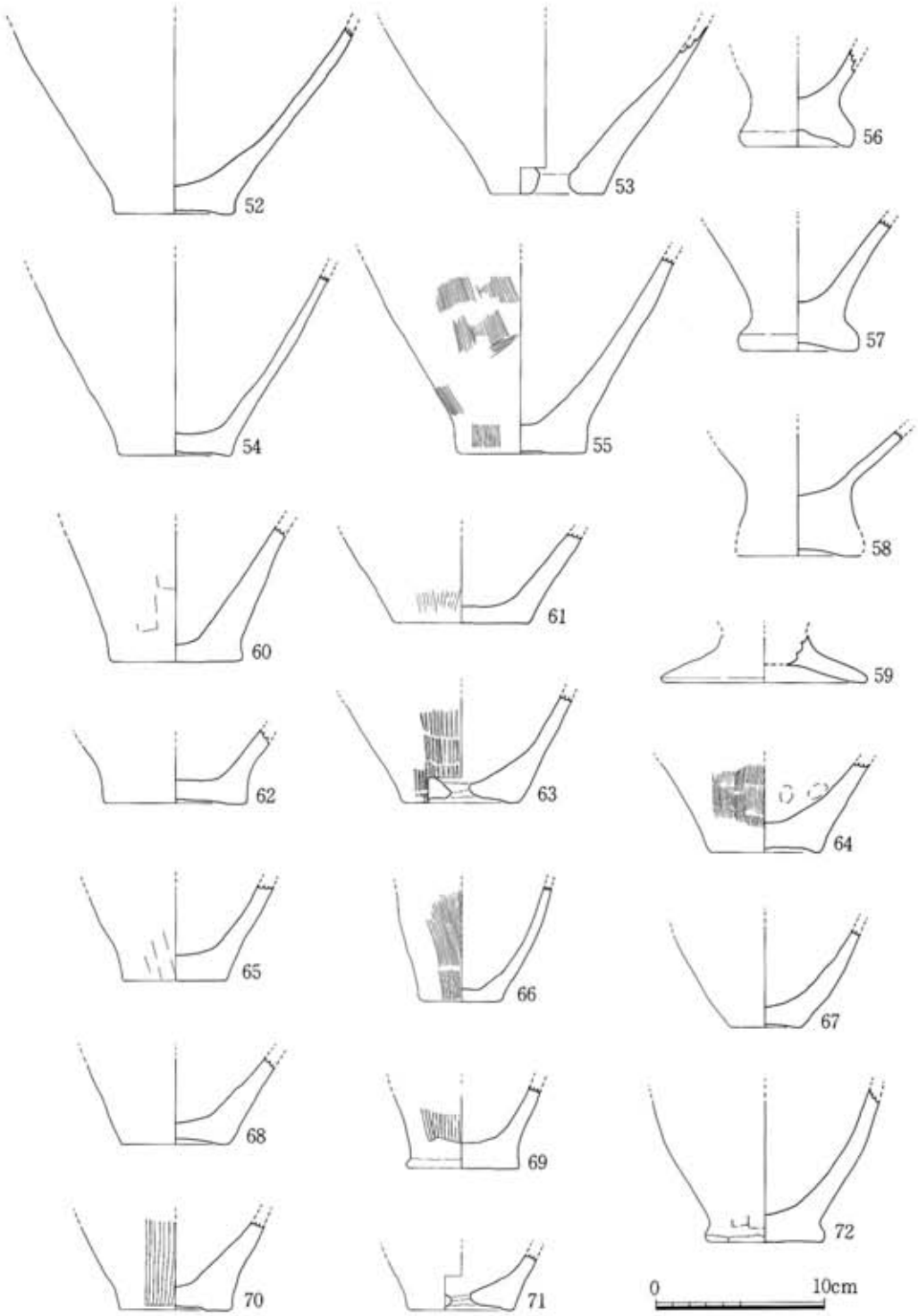


Fig.202　弥生前期土器6　底部（¼）

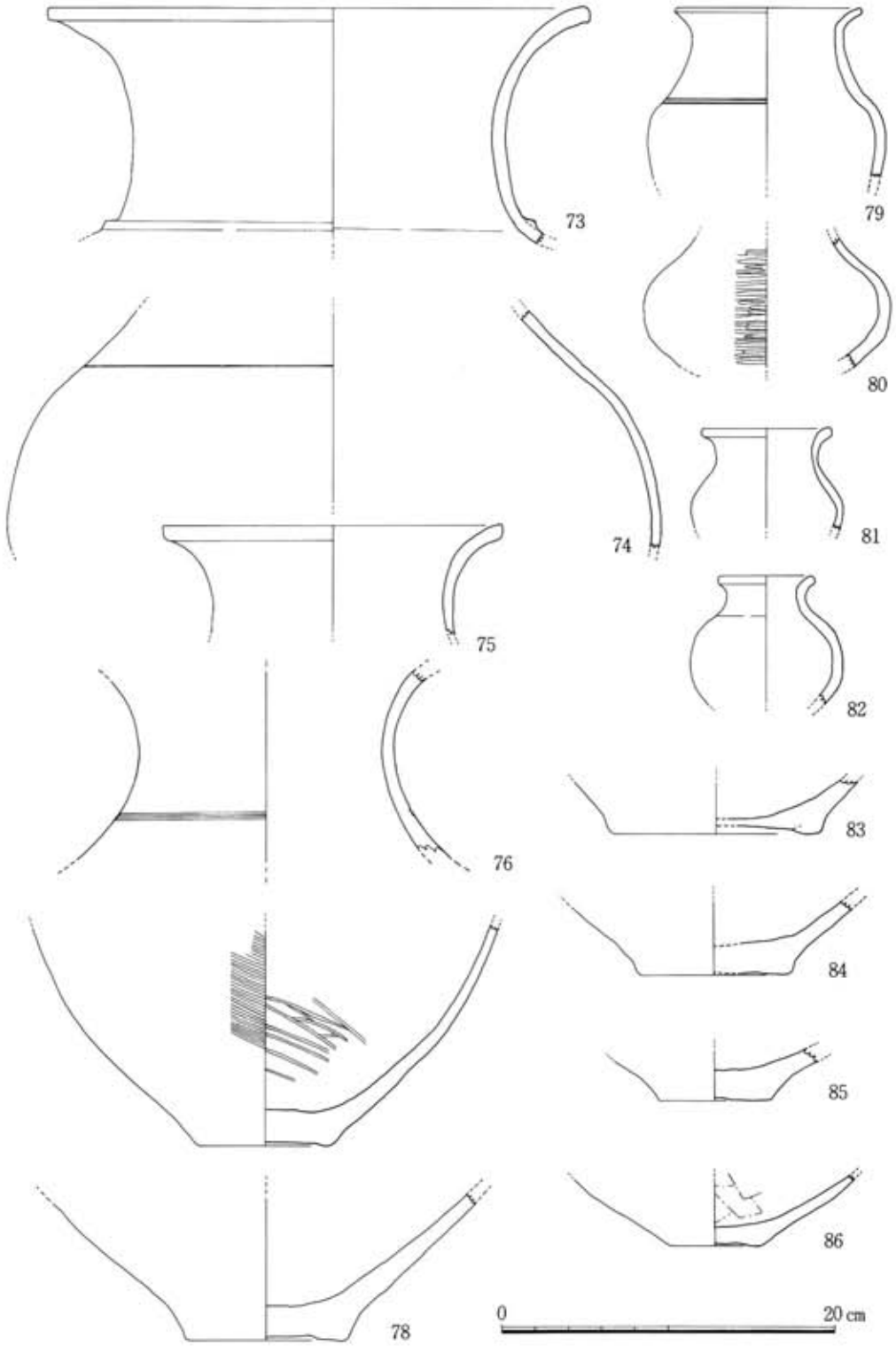


Fig.303　弥生前期土器７　壺（¼）

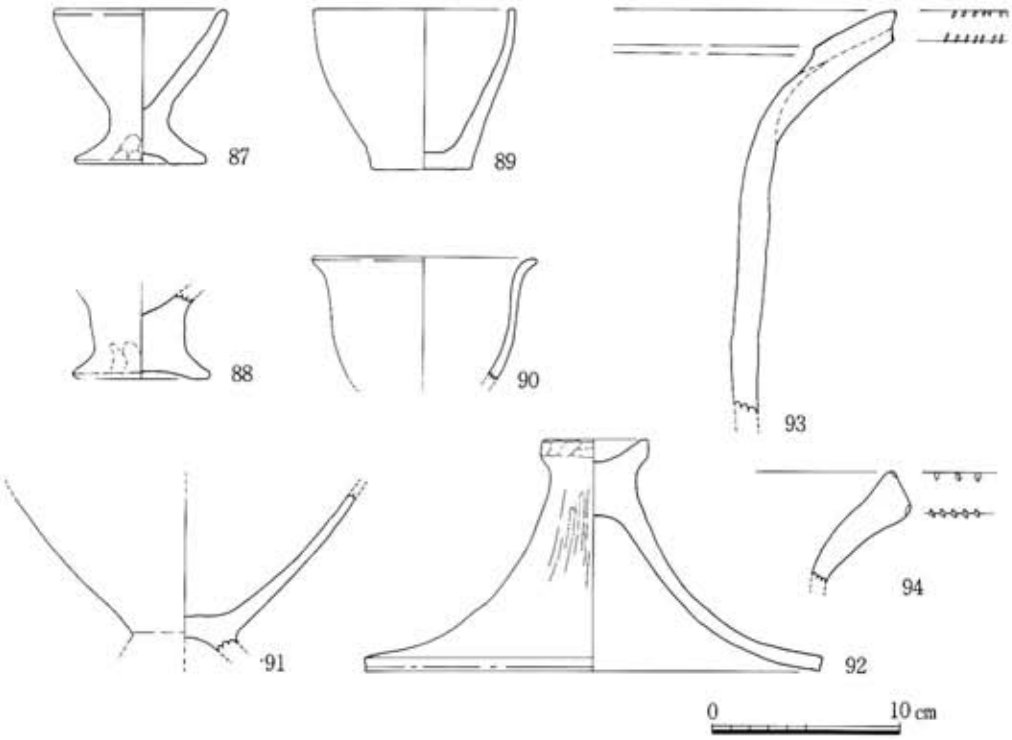


Fig.204　弥生前期土器8　鉢・蓋・甕棺（1/4）

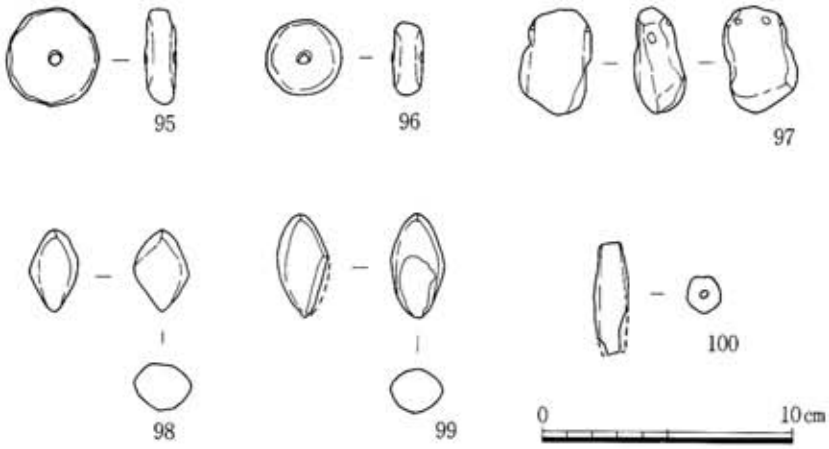


Fig.205　弥生前期土器9　その他の土製品（1/4）

Tab.12　　弥生前期土器一覧表

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
194－20 8805826	S B021	壺	口径 14.0 胴径 20.1	口頸部は短く直立。胴部は低く外につよく張り丸底気味か。頸胴間よりやや下がって突帯1条。	外面ヨコヘラミガキ、内面ナデ。明褐色。
－21 8801857	〃	〃	胴径 15.1 底径 4.0	胴部はやや低く外に張り、平底。黒色磨研	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。外面黒色、内面暗褐色。
－22 8805825	〃	鉢	口径 30.0	口縁部は体部と稜をなして内に折れたのち短く直立。体部は浅く開く。	内外面ともていねいなナデ。褐色。
195－23 8805852	S D008	甕	外口径20.2	口縁部と胴部上位に刻目突帯。口縁部がやや内湾。	内外面ともナデ。褐色。
－24 8809658	〃	〃	外口径20.7	小型甕。口縁部と胴部上位に刻目をもたない突帯。胴部は下位が急にすぼみ平底。	内外面ともナデで、口縁部内面に指痕。暗褐色。
－25 8804871	〃	〃	外口径22.8	口縁部突帯はややうすく伸び、胴部上位にも突帯。刻目なし。胴部は下半がやや内傾して立ち上がる。	内外面ともナデ。褐色で砂粒多く含む。
－26 8809657	〃	〃	外口径22.7	口縁部と胴部上位に刻目をもたないと思われる突帯。胴部は上位で直に立ち上がる。	胴部突帯下外面ハケ目、他ナデ。褐色で砂粒やや多く含む。
－27 8800885	〃	〃	外口径21.4 器高 29.5	口縁部と胴部上位に刻目突帯。口縁部上面は平坦にちかい。胴部上位やや内湾。	内外面ともナデ。褐色で砂粒多く含む。
－28 8804876	〃	〃	外口径28.6 器高 30.9	大型甕。口縁部と胴部上位に刻目突帯。口縁部上部は平坦にちかい。胴部上位やや内湾。	内外面ともナデ。外面で口縁下の胴部3分の2に煤付着。褐色。
196－29 8809663	〃	〃	外口径30.6	大型甕。口縁部と胴部上位に刻目突帯。口縁部上面は平坦にちかい。胴部上位やや内湾。	外面ハケ目のあと口縁下ナデ、内面ナデ。褐色。
－30 8805855	〃	〃	外口径24.0	口縁部突帯は上面平坦にちかく伸び、胴部突帯とともに刻目。	内外面ともナデ。明褐色。
－31 8805854	〃	〃	外口径26.7 器高 27.3	口縁部突帯は上面平坦、胴部突帯とも刻目なし。	外面ハケ目、内面は口縁部付近ハケ目、下位ナデ。胴部外面は、底付近以外に煤付着。褐色。
－32 8804878	〃	〃	外口径23.3	口縁部と胴部上位に刻目突帯。胴部は上位で直に立ち上がる。	内外面ともナデ。褐色。
－33 8809656	S K004	〃	胴径 30.3	大型甕。	内外面ともナデ。明褐色。
－34 8804877	S D008	〃	外口径23.9	口縁部刻目突帯はやや厚く、上面斜傾。胴部は上位やや内湾。	内外面ともナデ。明褐色。
－35 8804875	〃	〃	外口径13.8	小型甕。上面突帯はやや厚く上面平坦。胴部突帯とともに刻目。	内外面ともナデ。明褐色

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
197－36 8804874	S B002	甕	外口径28.1 胴径　28.0	口縁部突帯は厚く、胴部上位突帯とも刻目。胴部は中位やや上で最大径。	内外面ともナデ。暗褐色で砂粒多く含む。
－37 8804879	S D008	〃	外口径22.5 器高　26.8	口縁部突帯は厚く、胴部突帯とも刻目なし。胴部は、上位直立。底部に焼成後穿孔し甑に転用。	内外面ともナデ。明褐色。
－38 8806517	〃	〃	胴径　23.2	胴部上位に刻目のない突帯。	内外面ともナデ。暗褐色で、砂粒多く含む。
－39 8809606	S B001	〃	胴径　23.9	胴部上位に刻目突帯、突帯下に刻目時のヘラ傷。	内外面ともナデ。褐色。
－40 8809608	〃	〃	外口径21.2	口縁部突帯はやや厚く胴部突帯とも器面荒れて刻目の有無不明。	内外面ともナデか。黄褐色。
－41 8809607	〃	〃	外口径26.2 器高　29.8	口縁部刻目突帯はやや厚い。胴部は上位が直に立ち上がり、底部は厚い脚状。	内外面ともナデ。暗褐色で砂粒を多く含む。
－42 8806521	S D008	〃		口径29cm前後の大型甕。突帯は口縁部１条、胴部上位２条。器面荒れて、刻目の有無不明。	内外面ともナデか。黄褐色で砂粒多く含む。
198－43 8809609	〃	〃	外口径27.0	浅甕。口縁部に突帯、胴部は急に内湾して立ち上がる。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒多く含む。
－44 8804816	〃	〃	外口径23.6 器高　14.5	浅甕。口縁部突帯は厚く、上面下傾。胴部は急に内湾して立ち上がる。	胴部外面ハケ目、口縁部から胴部内面ナデ。褐色で砂粒多く含む。
－45 8806522	〃	〃	外口径22.6	胴部は直線的に開いて伸び、口縁部と胴部上位に突帯。やや粗製の感あり。	内外面とも粗くナデ。明褐色で砂粒多く含む。
－46 8900886	〃	〃	口径　28.0 器高　19.6	浅甕。口縁部はやや肥厚して大きく外反。	胴部は外面ハケ目のあとかるくヘラミガキか。口縁部から胴部内面ナデ。褐色で砂粒多く含む。
－47 8805851	〃	〃	口径　26.0	胴部はやや浅く、口縁部は短かく外反し、胴部上位に突帯。	内外面ともナデ。褐色。
－48 8809654	〃	〃	口径　23.8 器高　27.9	胴部上位がやや内湾したあと口縁部ゆるやかに外反して口唇部外角に刻目。	口縁部から胴部外面ハケ目、胴部内面ナデ。胴部外面中位に煤。褐色で口縁下に丹らしい痕跡。
－49 8809620	〃	〃	口径　24.0	口縁部は大きく外反し、口唇部外角に刻目。ナデにより口縁部やや肥厚してみえる。	内外面ともナデ。褐色で砂粒多く含む。
－50 8809661	〃	〃	口径　15.6	小型甕。胴部は上位で内湾し、口縁部は折れ気味に短かく外反して口唇部外角に刻目。	内外面ともナデか。褐色で砂粒多く含む。
－51 8806524	〃	〃	口径　16.0	小型甕。口縁部は胴部とかるい稜をなして短かく外反。	内外面ともナデか。暗褐色で砂粒多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器　種	法量cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
−78 8900887	〃	〃	底径　9.3	大型壺。底部は厚く、胴部はつよく外に張る。	内外面ともナデ。褐色で砂粒多く含む。
−79 8809619	〃	〃	口径　11.0 胴径　14.2	小型壺。胴部はやや肩が張り沈線２条をおいて頸部が急に立ち、口縁部がやや折れ気味に外反。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒少し含む。
−80 8810855	〃	〃	胴径　14.8	小型壺。胴部は低くつぶれ中位がつよく張る。頸胴部の境は外面で不明瞭。	外面ともナデ。明褐色で砂粒少し含む。
−81 8806525	〃	〃	口径　7.6 胴径　9.1	小型壺。胴部はやや肩が張り、口部と一体化し、口縁部は肥厚して外反。	内外面ともナデ。褐色で砂粒を含む。やや軟質。
−82 8809652	〃	〃	口径　5.6 胴径　9.2	小型壺。球状胴部と一体化した口部がＳ字状に短かく立ち上がり外反。	内外面ともナデ。黄褐色で砂粒やや多く含む。
−83 8805842	〃	〃	底径　12.0	大型壺。底部は薄い。	内外面ともナデ。黄褐色で軟質、砂粒を多く含む。
200−84 8809614	〃	〃	底径　8.8	大型壺。底部は厚い。	内外面ともナデ。褐色で砂粒含む。褐色で砂粒少し含む。
−85 8809616	〃	〃	底径　6.6	大型壺。底部は厚い。	内外面ともナデ。赤褐色で砂粒含む。
−86 8805840	〃	〃	底径　5.3	大型壺底部。	外面ナデ、内面底部付近ヘラナデ。褐色で砂粒を含む。
201−87 8806476	〃	鉢	口径　8.8 器高　8.2	台付鉢。体部は直線的に伸び、台部は端が脚状に大きく開く。粗製。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒多く含む。
−88 8806483	ＳＢ020	〃	底径　6.8	台付鉢。台部は短かく筒状に伸び、端部が開く。粗製。	内外面ともナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
−89 8809651	ＳＤ008	〃	口径　10.8 器高　8.2	体部は直線的に伸び、口縁部でやや直立。	内外面ともナデ。褐色で砂粒含む。
−90 8804873	〃	〃	口径　11.6	口縁部は体部からゆるやかに外反。	内外面ともナデ。明褐色で軟質、砂粒多く含む。
−91 8805843	〃	〃	残高　8.5	体部は直線的に伸び、底部は脚状に開く。	茶褐色で砂粒を多く含む。
−92 8809665	〃	蓋	口径　24.3 器高　12.2	山笠形蓋。器高が高く、つまみ部は厚く端部が外に張り出す。	つまみ部と笠内面ナデ、笠外面ヘラナデ。外面下半煤、内面は周縁部以外に有機物着。明褐色。
−93 8806486	〃	甕	残高　20.9	大型甕棺片。口縁部は内面に一段厚く粘土を貼り直立胴部から外反、口唇部にヘラ刻目。	内外面ともナデ。褐色で砂粒多く含む。
−94 8806484	〃	〃	残高　5.3	大型甕棺片。口縁部は端部に向かって肥厚し、口唇部にヘラ刻目。	内外面ともナデ。暗褐色で砂粒多く含む。

Fig-図番号 登録番号	出土地点	器 種	法量cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
199－52	S D008	甕	底径 6.8	大型甕底部。	内外面ともナデ。
－53 8805841	〃	〃	底径 6.6	大型甕底部。焼成後穿孔し瓶に転用。	内外面ともナデ。
－54 8804867	〃	〃	底径 6.2	大型甕底部。	内外面ともナデ。
－55 8809662	〃	〃	底径 7.5	大型甕底部。	外面ハケ目後ナデ、内面ナデ。
－56 8809604	S B001	〃	底径 5.8	底部は厚く、端部は外につよく張り出す。	内外面ともナデ。
－57 8805836	S D008	〃	底径 8.0	底部は厚く、端部は外につよく張り出す。	内外面ともナデ。
－58 8809603	S B002	〃	底径 7.3	台状底部。	内外面ともナデ。
－59 8810856	S D008	〃	底径 12.0	甕または鉢底部か。脚状に端部が底く伸びる。	内外面ともナデ。
－60 8805827	〃	〃	底径 7.6	底部。	内外面ともナデ。
－61 8805833	〃	〃	底径 8.1	底部。	外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ。
－62 8805839	〃	〃	底径 8.4	底部。	内外面ともナデ。
－63 8805849	〃	〃	底径 6.8	底部。焼成後穿孔し瓶に転用。	外面ハケ目、内面ナデ。
－64 8805846	〃	〃	底径 6.6	底部。	外面ハケ目、内面ナデ。
－65 8805830	〃	〃	底径 6.2	底部。	内外面ともナデ。
－66 8804868	〃	〃	底径 4.5	底部。	外面ハケ目、内面ナデ。
－67 8809601	S B002	〃	底径 6.8	底部。	内外面ともナデ。
199－68 8809602	〃	〃	底径 5.0	底部。	内外面ともナデ。
－69 8806481	S D008	〃	底径 4.6	底部。	外面ハケ目、内面ナデ。
－70 8806479	〃	〃	底径 5.0	底部。	外面ハケ目、内面ナデ。
－71 8806480	〃	〃	底径 6.2	底部。	内外面ともナデ。
－72 8806514	〃	〃	底径 6.6	底部。	内外面ともナデ。
200－73 8809666	〃	壺	口径 32.3 頸径 26.0	大型壺。口頸部は一体化し胴部と稜をなして外反。頸胴間に三角突帯。	内外面ともナデ。暗黄褐色で砂粒含む。
－74 8805845	〃	〃	胴径 39.4 頸径 29.8	大型壺。胴部は肩が張り、頸胴間に浅い沈線をおいて頸部は胴部から続いてつよく内傾。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒含む。
－75 8806523	〃	〃	口径 20.3	大型壺。口縁部は肥厚しながら外反。	内外面ともナデ。褐色で砂粒含む。
－76 8805844	〃	〃	頸径 18.0	大型壺。頸部は胴部と一体化しながら浅い沈線２条で区切り、大きく外反。	内外面ともナデ。明褐色で砂粒含む。
－77 8805853	〃	〃	底径 8.0	大型壺。底部は厚く、胴部下半やや急に立ち上がる。	外面ハケ目後ナデ、内面ナデおよび一部ヘラナデ。褐色で砂粒含む。

b）弥生後期の土器（Fig.206）

101～108を図示する。いずれも遺構に伴わず、検出面あるいは調査区外西側斜面の試掘溝から少量出土した。後期後半～後期終末の甕と壺がみられる。

101～104は小破片からの復元のため径はやや不確かであるが、口縁部はく字形に屈曲して端部が角ばり、長胴傾向の認められる甕である。105・106は口縁部がく字型に折れ胴部中位が張る壺。106は底部にわずかな平底を残すのに対し、107底部は完全に丸底化している。器面調整はハケ目とナデ以外に105・107では外面にタタキ目を残す。

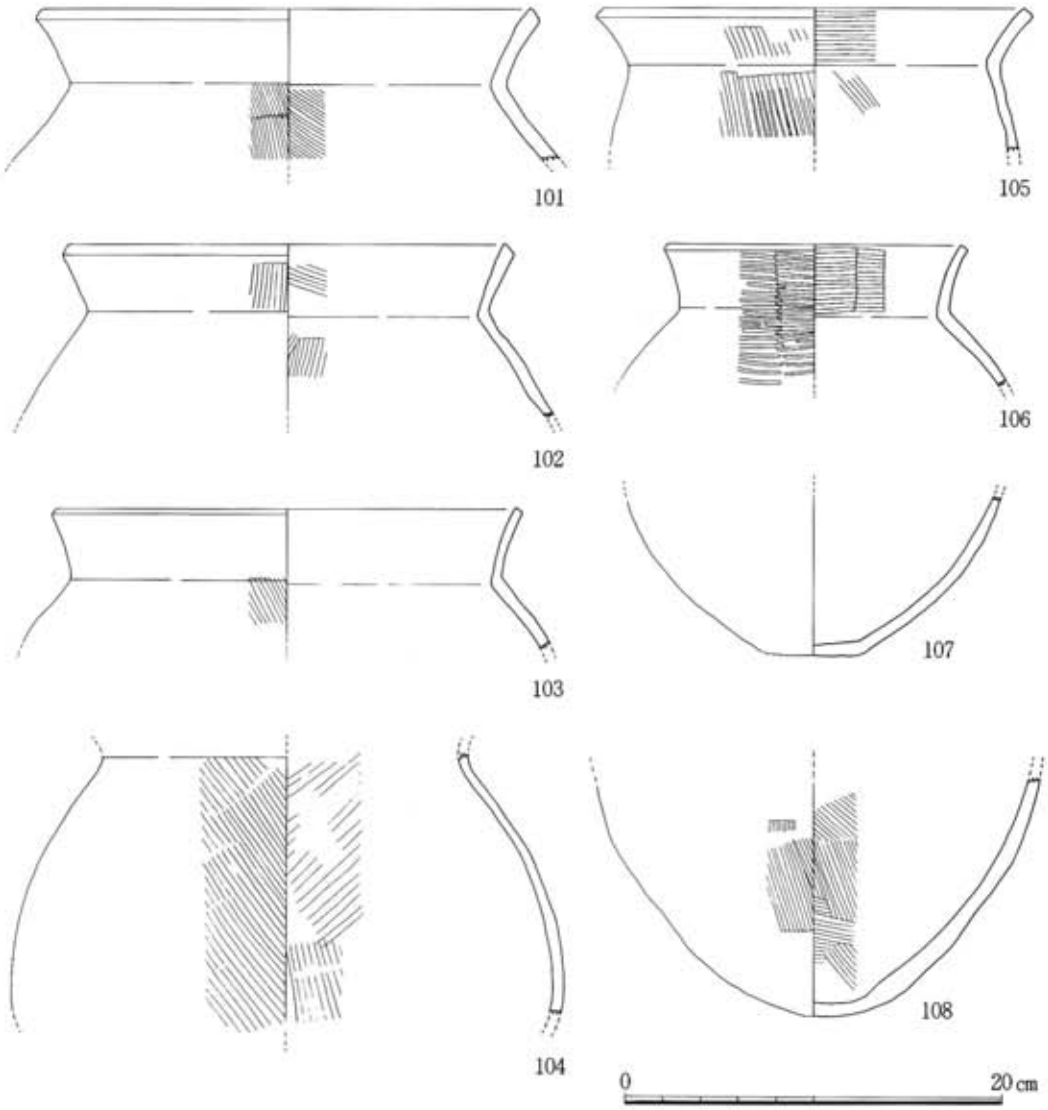


Fig.206　弥生後期土器（1/4）

以上の弥生土器のうち、ここで前期後半を中心とする土器について編年を示し一定の整理を行っておく（Fig.207）。ただしその場合、同一地域といえる礫石遺跡等で試みた編年（『礫石遺跡』佐賀県教育委員会1989）との関係を考慮する。

〔甕〕　最も古相のＡａ類は礫石編年Ｖ期にあたる。次いでⅥ期に刻目突帯文系ではＡｂ類・Ｂａ類とＣ類・Ｂｄ類、板付式系ではＤａ・Ｄｂ・Ｄｃ類を置く。両系統の共伴はＶ期でもみられたが、重要なことはこの段階で共伴の一方が板付Ｉ式から板付Ⅱ式甕に替わることである。また刻目突帯文系では口縁部突帯が発達して平坦口縁を志向しはじめるＡｂ類と、断面三角突帯を志向するＢａ類との二つの大きな流れが生まれる。刻目は省略するものが多くなり、Ｖ期の甕に一部みられた胴部上位の屈曲はもはや痕跡すら残さない。Ⅵ期として刻目突帯文系Ａｃ類・Ｂｂ類・Ｂｃ類を置く。Ｖ期に生じた二つの流れは一層明確になり、Ａｃ類はＡｂ類を引き継いで小いながらほぼ平坦にちかくやや厚い口縁をつくり、一方Ｂｂ類はＢａ類を引き続いて口縁部の断面三角突帯が太くなる。また台状底部をもつＢｃ類はＳＢ020でＢｂ類と共伴しており、この時期に出現する。

絶対時期区分との対応では礫石編年でＶ期を前期中頃、Ⅵ期を前期後半としたこを踏襲する。Ⅶ期についてはＢｃ類が城ノ越式期に当たるものとすれば中期初頭に位置づけられよう。ところで城ノ越式の甕自体、突帯文系と板付式系の二つの系統をそのまま持ち込み、未だ平坦口縁を完成させていない段階にあるものと理解するが、次期の平坦口縁は両者の統一体であり、佐賀平野においては主体を荷う突帯文系のうちＡｃ類からの発展過程が想定される。少なくともこれまで、板付式系Ｄ類の発展型態としてⅦ期に位置づけられるような資料は佐賀平野では出土していないのではなかろうか。なお、いわゆる亀ノ甲式にあたるＢ類は築後平野を中心に特殊発達するものであって、口縁部の特徴はそれ自体では平坦口縁に至る可能性はもたないであろう。

〔鉢〕　22をⅣ期に置く。ＳＢ021で壺20・21と共伴した。板付式系の大型鉢51は口縁部端部が水平にちかく大きく外反して新しい様相をみせるが、甕Ｄ類に並行させⅥ期に置く。突帯文系では大型鉢44と45が口縁部突帯の発達において違いが歴然としており、それぞれⅥ期とⅦ期に置くのが適当であろう。

〔壺〕　大型壺74が礫石編年のⅣ期、76がＶ期にあたる特徴をもつ。大型壺73は城ノ越式の中に類型式がみられるところであり、口頸部の外反の仕方に前期的な要素を残すが、Ⅶ期に相当させる。小型壺では一見夜臼式の古相を思わせる20・21をⅣ期に置く。80は礫石編年ではⅣ期とした小型壺に類型式が求められよう。79は礫石編年で敢えてⅢ期とした小型壺Ｄｂ類に頸胴部は類似するが、口縁部が屈曲するように伸びる特徴からⅣ期以降に下ると考えたい。81・82はⅥ期でも新しく、Ⅶ期に下る可能性もある。

その他、蓋92は甕Ｄ類に伴うと考えⅥ期に当てる。また、編年図に挙げなかったが、甕棺片93・94はⅥ期に置かれるもので、口縁部内面に粘土帯を貼る94の方が新らしい要素を示す。

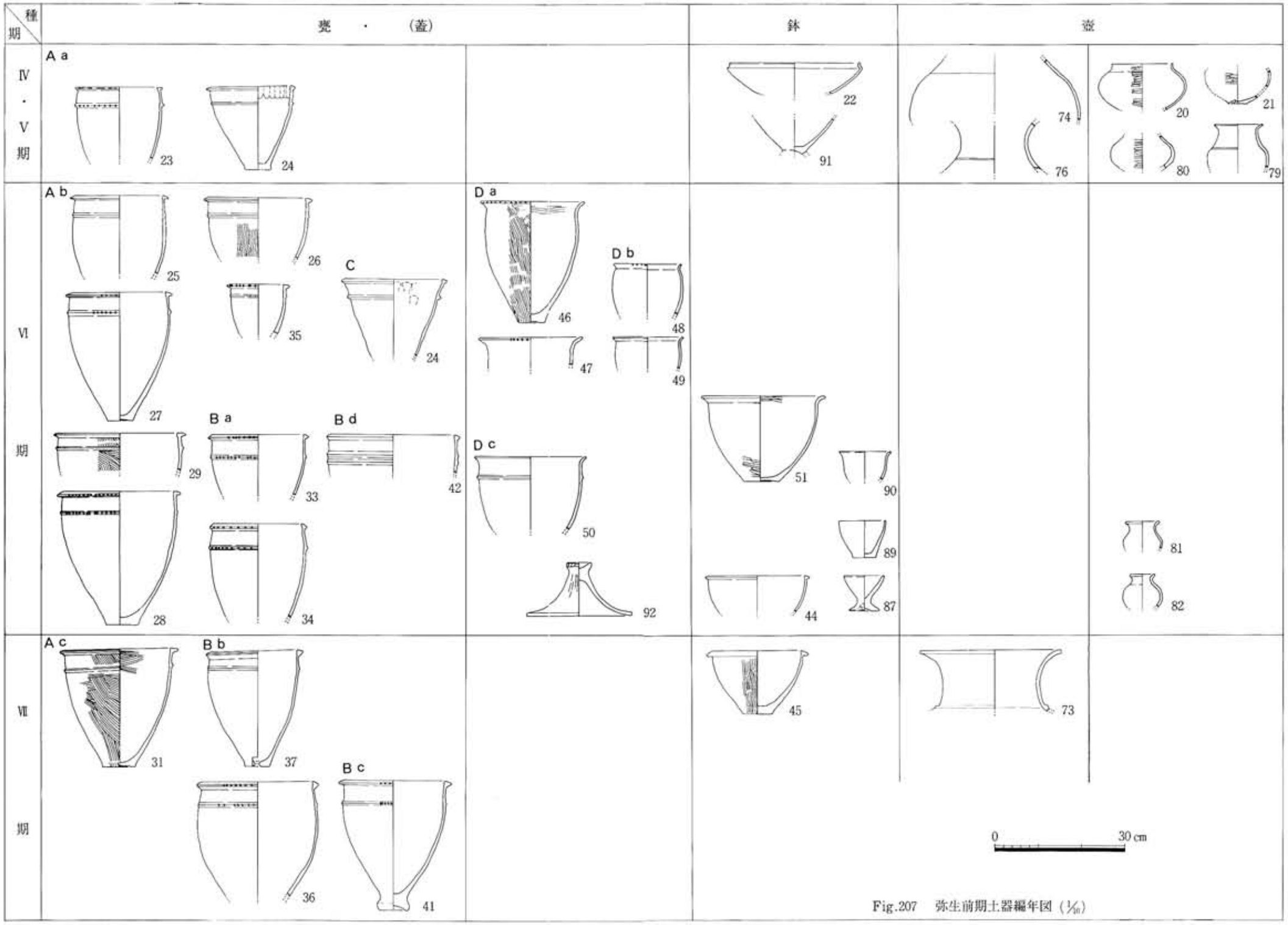


Fig.207　弥生前期土器編年図（1/10）

2 古 墳 時 代

(1) 土師器 (Fig.208, PL 144)

SB005およびSB006竪穴住居跡から出土した。点数が少なく、またほぼ同時期とみられるので一括する。器種には坏・高坏・甕がある。ただし、このうち109～113は形態・胎土・技法などの点で須恵器の要素を一部もつものであるが、いずれも須恵器にしては焼成が軟質であるなど問題があり、ここでは須恵器を模したものとして土師器に含めておく。

109は坏蓋で、全体に歪む。天井部を回転ヘラケズリ、白褐色で胎土は砂粒を殆ど含まない。口径13.8cm、器高3.5cm。110坏は体部が浅く、受部は鋭い段をもち、口縁部が直立する。須恵器を模した土師器坏によくみられる形態である。底体部を回転ヘラケズリ、明褐色で胎土は砂粒を含まない。口径12.5cm、器高4.0cm。111坏は口縁部が体部とかるく段をなして長く立ち上がり深い。底部を回転ヘラケズリ、明褐色で胎土は砂粒を少し含む。口径12.5cm。

111は高坏の坏部と思われる。体部は下位に沈線を1条めぐらせ、やや開いて直に伸び深い。底部を回転ヘラケズリ、褐色で砂粒を少し含む。口径10.2cm、坏部高4.7cm。112高坏は体部にかすかな段をつけて口縁部を意識している。坏底部をカキ目風に仕上げるなど須恵器的であるが、砂粒を多く含み明褐色の色調は土師器そのものである。口径13.8cm。坏部高4.7cm。

114は甕胴部は最大径が中位にあって丸味をもち、口縁部は外面では稜をなさずに大きく外反して端部を薄くつくる。口縁部と胴部外面ナデ、胴部内面ヘラケズリ。茶褐色で砂粒を含む。口径17.1cm、胴径16.3cm。

115は丹塗りの高坏。坏部はごく浅く開く、全体に器壁は厚く、外面下半ヘラケズリ、他ナデ。丹は赤褐色に発色、胎土そのものは茶褐色で砂粒を含む。口径33.4cm。

これら土師器の時期は須恵器との比較から6世紀後半と推定する。

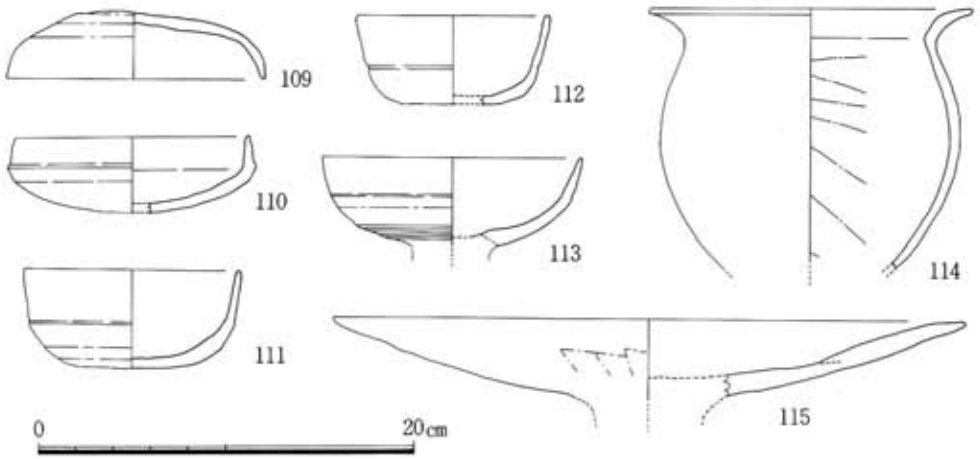


Fig.208 古墳時代の土師器(1/4)

3 奈良・平安時代

(1) 須恵器・土師器 (Fig.209, PL 144)

遺構に伴うものではないが、検出面出土の破片が若干ある。

116～118は須恵器。116蓋は天井部が低くつぶれ、口縁端部が短かく折れる。つまみを欠失する。天井部ヘラケズリ。口径15.3cm、残高1.7cm。117坏は平坦な底部から体部は稜をなして急に立ち上がる。底部ヘラ切り離し、灰褐色でやや軟質。118皿は体部が短かく直に開く。灰褐色でやや軟質。口径13,5cm、器高1.8cm。

119・120は土師器坏。119は体部が底部とかるい稜をなして立ち上がり深い。底部はヘラケズリのあとナデ。茶褐色で砂粒を含まない。口径12.4cm、底径3.7cm。120は体部が外反気味に長く開いて伸び、底部は糸切り離し。白褐色で砂粒を含まない。口径12.3cm、器高3.2cm。

120は12世紀に降るが、他は8世紀で、瓦と共に掘立柱建物跡の時期を示すものと推定する。

(2) 瓦 (Fig.209)

122と123の丸瓦と平瓦を各1点づつ図示しておく。いずれも布目瓦で平瓦は格子叩目。国府関連建物からある時期に持ち帰ったものか。この周辺の遺跡ではよく布目瓦片が出土する。

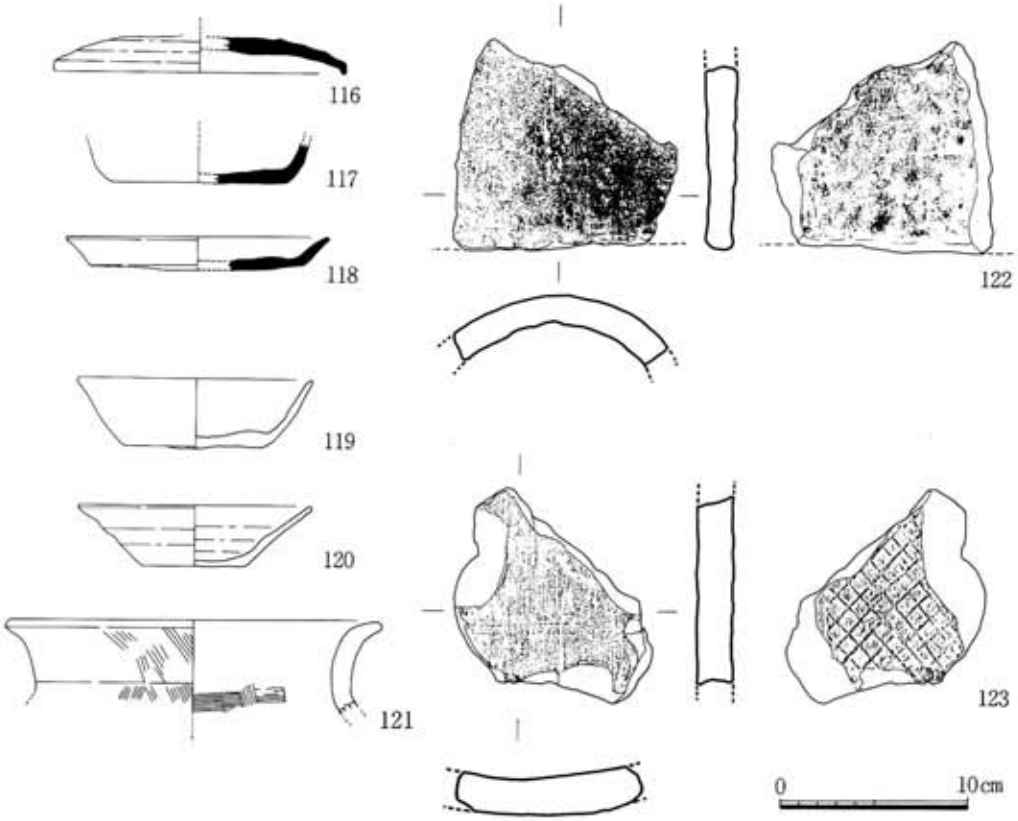


Fig.209 奈良・平安時代～中世遺物 (1/4)

第4章　総　　括

1　ま　と　め

以上みてきた3遺跡は弥生時代および奈良・平安時代を中心として、久池井周辺のみならず佐賀平野全体の古代史像に関わる多くの問題を含むものである。

春日遺跡では弥生前期前半から中頃初の集落跡に、一部古墳時代および奈良・平安時代の遺構が重なり、さらに遺物のうえからは中世まで下って集落が形成されている。遺跡全体の規模はさほど大きくなく、しかも今回の調査は遺跡の南辺部のみにとどまったが、西南方に惣座遺跡といったこの地域の中核集落が在るだけに、その周辺遺跡の実態を探るうえでは貴重な資料といえる。ことに注目されるのは弥生前期集落の存在である。近接して弥生前期の埋葬を中心とする礫石遺跡があり、集落と埋葬双方から弥生前期社会の実像を今後探る必要があろう。その際の基礎となる前期土器については本文中にまとめておいた。

惣座遺跡では主に弥生時代後期の環濠集落と奈良時代の国府関連官衙群を調査した。この弥生後期の環濠は外濠と内濠とからなる二重構造でしかも弧状突出部をもち、防禦的性格がつよい。後期後半に掘削され、調査区内ではその終末に東辺部が改修され、古墳時代前期のうちに廃絶してしまっている。東南隅に内郭への入口を開けるようであり、削平が著るしいとはいえ多くの建物群が造られている。建物は竪穴住居が主であるが、その中に規格性をもって配置された大型掘立柱建物等が含まれる。環濠からは膨大な量の土器が出土した。また奈良時代の建物群は、8世紀前半には国府の正倉とみられる倉庫棟7棟が西傾して整然と並び、8世紀後半には正方位に合わせた長棟群に変わっている。奈良時代を中心として、肥前国府の中でも主要な機能を果す建物群が配置された地区であることは明らかである。

久池井B遺跡はⅠ～Ⅱ区を別けて調査した。Ⅱ区では正方位に合わせて長棟3棟と倉庫5棟が整然と並ぶ一群があり、国府との関係でその性格が問題になる。Ⅰ区ではこれと同時期であろう大型井戸が存在する。Ⅲ区の場合は全体に規格性に乏しく小規模であるが、多数の建物跡・溝・井戸等が検出されている。これらの遺構は主に8世紀代で、9世紀に一部残るとしても9世紀末以降は一帯が墓地に変わっている。国庁跡と立地を別にするとはいえ、近接するだけにこの地区がどのように利用されたかは、国府および国庁の変遷を考える際に重要である。他にはⅢ区で弥生時代の貯蔵穴3基と中世の溝数条が検出されている。遺物は須恵器・土師器が豊富なほか、特殊なものとして石錘・素文鏡片などがある。

これらの調査結果からは、解決した事柄よりもむしろ新たに発生した問題が多く、しかも多岐にわたるが、逐一論じる時間も紙幅も余裕ない。とくに大きな問題は惣座遺跡の環濠集落の性格、それを明らかにする為の基礎資料となる膨大な弥生後期土器の整理、そして惣座遺跡および久池井B遺跡に関する肥前国府の変遷であろう。そこで、以下にはこの3点について若干所見を述べ、本報告全体のまとめにかえることにする。

2　惣座遺跡の弥生後期土器

(1)　編年の方法

佐賀平野における弥生時代後期土器の実態については未だ総括的にまとまった編年が公表されていない。かって基山町干塔山遺跡[1]・諸富町本村遺跡[2]で後期終末をやっと中心に編年が試みられはしたが、資料そのものに量的な限界があり、また両遺跡とも佐賀平野の東辺部あるいは外的な影響を受けやすい特殊な地域にあるため、佐賀平野の一般的な状況を写すというには問題があった。一方、福岡方面ではとくに近年、古墳発生期の問題にも関係して弥生後期土器の研究が進んでおり、佐賀平野の場合はこれを援用している、というのが現状である。

このたび惣座遺跡では弥生後期の土器が豊富に出土した。そこで以下に、この自前の資料をもって編年を試案するが、同時期の資料は吉野ケ里遺跡ほかでも整理されつつあり、今後地域差の問題まで含め、より精度の高いものに補正されるであろうことを期待する[3]。

佐賀平野における編年といっても、基本的には福岡平野方面と大きな違いがあるわけではない。ここでは森貞次郎氏[4]の高三潴式・下大隈式・西新式の3時期区分を基本とし、武末純一[5]・高倉洋章[6]・柳田康雄[7]・常松幹雄[8]ほか各氏の編年を参考にさせていただいた。

編年の方法としては、まず外濠ＳＤ019のうちその第3突出部から東側（以下ＳＤ019東と呼ぶ）埋土中の土器と、これを埋めて濠が改修された後のＳＤ204埋土中の土器とを比較する。両濠はＳＤ019東濠を埋めてＳＤ204が造られるといった関係にあることから、少なくとも時間的に重複する心配は全くない。すなわちＳＤ019東土器群→ＳＤ204土器群への時間的前後関係が確かである。次にＳＤ019東辺濠および内濠ＳＤ207の土器にをもってこれを補完するが、その際には竪穴住居等から出土した供伴関係をもつ一括資料をも加えて時間的並行関係を確めながら作業を進めることにする。ＳＤ019南辺濠から出土した膨大な量の土器は濠底にちかい下層と埋土上層とに相対的に区分できるが、少なくとも途中後期終末に掘直しが行なわれているため、層序と土器形式との間にしばしば明らかな逆転がみられる。したがって、形式変化の一定の傾向を知るうえで参考になるとしても、上層・下層の別を決定的なものとするのは危険であり、そのまま鵜飲みにするわけにはゆかない。これは環濠という遺構の性格上やむをえぬところであろう。また、それぞれの器種については既に本文中で行なった分類に従い、それぞれの形態の変化を重視したい。その結果、器種間の供伴関係に各氏の所論と細かな喰違いが生じたとしても、今は一々論じるつもりはない。所詮、編年は時代の様式を示す画期をもった概念であり、勿論共伴関係や出土状況は無視するつもりはないが、土器の形式が基本的に無段階に変化する以上一括資料をいくら並べてみても、それだけでは十分説明できる編年とはなりえないと考えるからである。出土した土器は弥生後期後半から終末を中心としており、とくにこの時期の日常生活に用いられて殆ど全ての器種にわたるものといえよう。

(2)　ＳＤ019東およびＳＤ204出土土器

甕・壺・高坏・鉢・器台・支脚について、Fig.210のとおり編年を試みる。既に述べたようにＳＤ019東とＳＤ204とは時間的な先後関係が保証できるので、この点を有利なものとし、移行期に形式上は同一視すべきものがあったとしても、ここでは一線を引いて分けておく。さらにＳＤ019東では上層と下層とがあり、そのうち下層の土器はとくに古い要素を認めるものは古相に分けた。下層出土土器は実質、濠底出土といってもよく、ＳＤ019東の主体を占める。上層出土土器は埋土中位以上からの出土で量は下層に比べて少ない。またＳＤ204では下層として取上げた濠底ちかくからの出土資料に乏しく時期を設定するほとでもないので上層と一括し、改めて古相と新相とに分けた。ただし全体に出土量は少ない。

甕　Ａ類では、大型ＡⅠ類はＳＤ204でみられるが、それ以前については適当な資料がない。33・42は未だ平底の名残りをとどめるのに対し、次期の35は丸底でタタキ目をそのまま残して大きな違いがあり、その間を埋める資料がまだ必要である。中型ＡⅡ類はＳＤ019東下層（古）では比較的安定した平底であるが、次期にはやや丸底へのきざしをみせ、50は長胴傾向を示し、40にタタキ目が一部残る。小型ＡⅢ類は適当な資料を欠くが中型甕の動向と似ていよう。

Ｂ類台付甕はＳＤ204出土の64があり、その新相に置く。

Ｃ類短胴甕では大型ＣⅠ類の67と中型Ｃ類の72がＳＤ019東下層から出土している。67は胴部の張りと底部にいくぶん古相をとどめるものの、72は胴部が球状で丸底に一層近づく。

壺　Ａ類複合口縁壺では大型ＡⅠ類のみ見られる。ＳＤ019東下層では83が比較的安定した底部をもち古相に置かれる。ただし口縁部の屈曲はややつよい。新相では頸部が胴部と稜をなし、いきなり外反気味に立ち上がるものが現われる。81・82は底部が薄い不安定な平底で、胴部肩位に櫛描平行文あるいは波状文、小円板貼付文を飾る。ＳＤ019東上層出土の80では大型化が著るしく、底部は一層丸底化が進む。しかし口縁部はまだ稜をもってく字形に折れ内傾したままである。ＳＤ204では下層出土の89の場合、口縁部は屈曲部が外につよく張り出して立ち気味となり、端部が短かく外折する。87は頸部が胴部と稜をなして外反気味に立ち上がり、口縁部は89よりもさらに直に立つ。底部はほぼ丸底で頸胴間の刻目突帯は低くつぶれるもので、これを新相に置く。

口縁部が単純に折れるＢ類のうち大型ＢⅠ類では、長胴気味のBIb類で97と94との間に底部の時期差が明瞭である。また短胴気味のBIa類はＳＤ204で底部がほぼ丸底にちかい薄い作りの92がある。もっとも、丸底傾向はＳＤ019東下層の段階から始まってはいるが、その上層までは平底の名残りをよく残すものが多い。口縁部の屈曲が甘くなるのはＳＤ019東上層以降にみられる。１点のみ中型ＢⅡ類の103はＳＤ019東下層（新）に置く。小型壺ＢⅢ類および格別小型のＣ類は本来、多形態にわたるが、両濠では資料が少ない。これは小型壺の大部分が後期終末であって、該期のＳＤ204自体の土器出土量が少ないためであろう。108はＳＤ019東下層

（古）、123・126はその新相に置く。小型土器の場合は丸底化の進行が極めて早い。

高坏　中期の遺風を残す平坦口縁とは別の、口縁部が体部から屈曲して立ち上がるA類がＳＤ019東から出土している。ＳＤ204については不明である。大型ＡＩ類の場合、135は口縁部が直に立って外反し古相を示す。140では口縁部が体部と明瞭に折れながらも外傾し始めるが、まだ短かい。ＳＤ019東上層出土の141では口縁部の外傾がさらに進み甘くなる。小型ＡⅡ類では144の場合、口縁部は体部とやや不明瞭な稜をなして立ったのち端部が屈曲して開く。平坦口縁の影響を受けたものか。145は口縁部が短かく外傾し、脚部は内湾しながら開く。それぞれＳＤ019東下層の古相と新相に置く。

鉢　口縁部が浅い体部からそのまま立ち上がるA類では、中型ＡⅡ類の164がＳＤ019東下層から出土している。口縁部はやや内湾し底部は丸底にちかい。小型ＡⅢ類の203はＳＤ019東上層にあり、やや尖底状の丸底で口縁部は内湾せずに立ちあがる。

口縁部がく字に折れるB類では、大型ＢＩ類の場合、ＳＤ019東下層出土では新相としたうち168のように平底で口縁部がつよく屈曲し、胴部は肩が張ってやや深いものが古相を溜めよう。170・171は丸底にちかくなり口縁部の屈曲がやや甘い。次期のＳＤ019東上層出土の169は薄い平底ではあるが、口縁部の屈曲は不明瞭となる。小型ＢⅡ類の場合は同様にＳＤ019東下層出土の178をその古相とする。上層出土の179は底部付近を削り、完全に丸底化する。次期のＳＤ204出土の181は口縁部の屈曲がよわくなり、タタキ目を残す。また体部の浅い185がＳＤ204下層にある。303は甑に転用された鉢である。

坏状に浅いD類はＳＤ019東下層の209とＳＤ204の211とがある。

とくに小型のE類ではＳＤ019東下層出土に213のような平底で比較的ていねいな作りのものをみるが、同時に粗製丸底の216もあり、ＳＤ204下層出土の215との時期差を単に粗製や丸底の違いで判断するのは困難である。尖底状で比較的精良品の多い228のタイプはＳＤ019東上層にあって、その時期の一端を知る。

全体としては壺と同様、小型品において丸底化の進行が早く、バラエティーが多い。

器台　中期の筒型器台から発展したA類のみ、ＳＤ019東から出土した。下層出土のうちでは230が筒型の特徴をしのばせるものとして古期に置かれる。新期としたものうち小型の259は口縁部が稜をなしてつよく屈曲外反し、タタキ目をそのまま残す粗製品で特殊である。他は口縁部が上位で急に外反し、稜は内面についても外面にはみえない。体部は裾がわずかに外反あるいは直線的に開き、端面をやや外にのぞかせ内側角で接地するものが多い。245・246は裾端面が平坦に接地し内側に角がめくれ新しい要素を示すものである。この下層の出土の器台では体部裾が内湾するものを含まない点が注意される。上層出土の255・261は口縁部が外面でも屈曲による稜をにし、体部は直線的に開いて端面が平坦に接地し、外面にタタキ面をそのまま残す。

期＼器種		甕	壺
SD019東濠下層	古	46	83
	新	49 48 67 40 50 72	81 103 95 82 97 91
SD019東濠上層			80 94 96
SD204濠	古	33 42	下層 89 92
	新	35 64	87

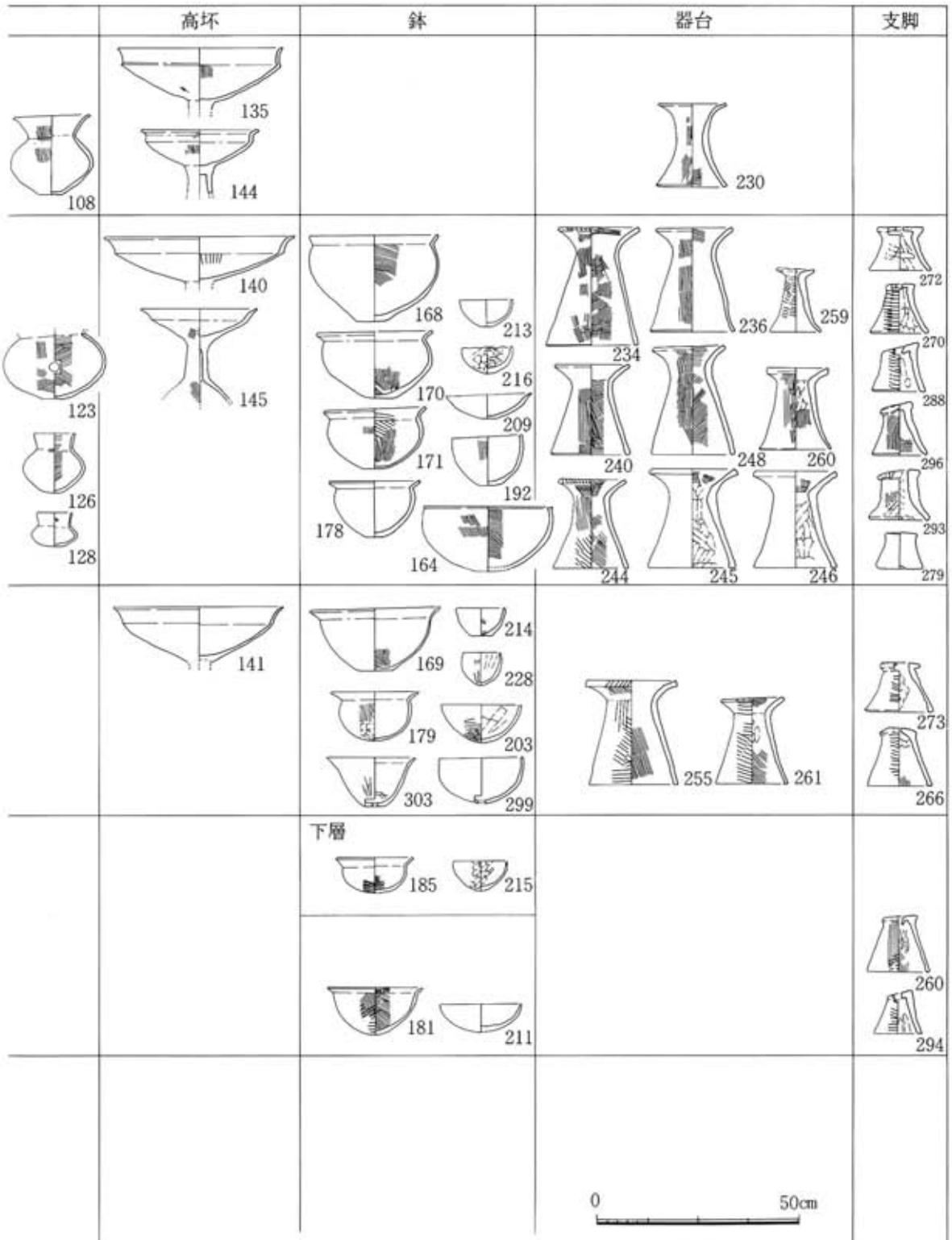


Fig. 210　SD019 東・SD204 出土土器編年図（1/12）

支脚　上面周縁が水平なA類と斜傾するB類はＳＤ019東下層の段階から並存し、ＳＤ204の段階まで両者が残る。他の器種に比べると時期による形態の変化を見出すことが困難である。タタキ目またはナデで仕上げる粗製品が多い点は既にＳＤ019東下層の段階からかわらない。

(3)　惣座遺跡における弥生後期土器の編年試案

以上の状況をふまえたうえで、既述の方法に従って惣座遺跡における弥生後期全体の編年を試案する。資料は巻末の〈付図１〉を参照されたい。

時期区分についてはⅠ期～Ⅵ期とする。Ⅰ期は竪穴住居跡等の資料を加えて、中期的な特徴を残すタイプを一括したものである。Ⅱ期以降については先のＳＤ019東およびＳＤ204出土土器の編年を基準とし、ＳＤ019南辺濠（以下、単にＳＤ019と呼びＳＤ019東と区別する）で不足していた各形式の資料を補足した。変化の概要は既に述べたところであるので、以下には全般的にみた要点のみ説明する。

甕

A類　大型ＡⅠ類はⅠ期でも存在する。365は口縁部が水平にちかく屈曲し端部が肥厚するもので、甕366・鉢367・368と共にＳＢ293から出土したＡⅠ類はⅢ期以降に長胴傾向を示し始めると思われるが、目立って長胴化するのはⅤ期以降である。底部はⅣ期までは不安定ながらも平底をとどめるが、Ⅴ期では据りの悪い平底となって丸底傾向が顕著となり、Ⅵ期で完全に丸底化した尖底状の底部が出現する。レンズ状底部はⅤ期の新しいうちに含める。口縁部の屈曲はⅤ期以降によわくなる。タタキ目はⅣ期にみられ、Ⅵ期になって外面調整にそのまま残すものが主流となる。中型ＡⅡ類・小型ＡⅢ類も基本的にこれと同様である。

B類　台付Ｂ類はＳＤ204出土の64のほかＳＤ019上層から出土しており、Ⅴ期～Ⅵ期に置くが、63は胴部上位の張りからみて、あるいはⅣ期に上げてもよいかもしれない。変化の様相は基本的にＡ類と同様である。

C類　短胴Ｃ類のうち大型ＣⅠ類ではＳＤ019下層の68をⅣ期とし、上層出土の丸底化が著しい69・70をⅤ期に置く。小型ＣⅡ類では丸底化が早く、ＳＤ019下層出土の71・75・43はわずかに平底の痕跡をとどめるものでⅣ期～Ⅴ期に位置しよう。同上層出土の74・76はほぼ丸底化が完了するものでⅥ期に置く。

D類　60はＳＤ019中層出土で、口縁部はく字に折れて立ち気味に外反し、胴部は尖底状になって中位やや上が張り、タタキ目を残す。Ⅵ期に外的な影響を受けて出現したものであろう。

壺

A類　複合口縁系Ａ類のうち小型ＡⅠ類はⅠ期に328が高坏322・鉢336と共にＳＫ230から出土している。口縁部の屈曲は比較的弱い。大型ＡⅡ類はⅠ期の355以下、ＳＤ019下層の86をⅤ期に、上層出土の88をⅥ期に補足する。底部はⅤ期以降丸底化し、頸部はⅤ期に胴部から急に外反するものが現われ、口縁部は一旦つよく屈曲外反するがⅥ期にかけて立ち気味となり、88

では二重口縁にちかくなる。90はＳＤ019下層出土で、Ⅱ期を下るものではあるまい。

Ｂ類　口縁部が屈曲するＢ類のうち、大型ＢＩ類では球状胴部のＢIa類の場合、ＳＤ019中層の93を追加してⅥ期とする。長胴気味でく字口縁のＢIb類と直口縁のＢIc類では甕と同様、とくに底部の変化からみてＳＤ019中層の98と同上層の101をⅣ期とし、わずかに平底の名残りをとどめる319・102をⅤ期に、丸底の100をⅥ期に補足する。319は小型壺の320と共にＳＢ215から出土しており、また102・100はＳＤ019下層出土である。中型ＢⅡ類では直口の105がＳＤ019下層出土でわずかに平底の痕跡を残しⅤ期、同じくＳＤ019出土の117をⅥ期に置く。小型ＢⅢ類ではａ～ｇ類個々の系統は把えがたく、補足した資料ではＳＤ019中層の台付125を123と同じⅣ期とするが、他はⅤ期、Ⅵ期のいずれとも区別が困難である。ただしその中ではわずかに平底の痕跡を残すＳＤ019出土の110と、ＳＢ262から鉢336・337を伴って出土した335をⅤ期とし、それ以外のＳＤ019出土では仮に下層の116・119をⅤ期、上層の122・113・111・112をⅥ期に当てておく。これらの小型土器はⅤ期にはほぼ丸底化し、とくにⅥ期に量を増すと思われる。なお長頸ＢⅢｈ類ではＳＤ019下層出土の130が131と同じく平底気味とすればⅤ期、広口ＢⅢｇ類で中層出土の134はⅥ期に置かれよう。また、先には分類名称を与えなかったが、ＳＣ180石蓋土壙墓副葬の378はⅠ期、ＳＢ219から鉢332・334と共に出土した無頸壺335はⅢ期、ＳＤ207出土の短頸壺314はわずかに平底をとどめておりⅤ期に置く。

Ｃ類　とくに小型の広口壺Ｃ類ではⅢ期に既にほぼ丸底化しており、ＳＤ019下層から出土した129を仮にⅤ期としておく。

高坏

Ａ類　口縁部が屈曲するＡ類のうち、主体を占める大型ＡⅠ類ではⅡ期に口縁部が直立する135が現われ、Ⅲ期にはそれが短かく外傾外反、Ⅳ期になってやや長伸する。脚部はⅡ～Ⅳ期を通じて裾が内湾気味に開き高い。Ⅴ期では口縁部が一層長伸するとともに、脚部は裾が内湾せずに開き低いものが出現し、裾が内湾するタイプは残ったとしても主体ではなくなる。Ⅵ期では坏体部が丸味をもち、口縁部との接合部は稜から段で示されるように変わる。157は口縁部が極度に発達したものであり、150・149・153は口体部が一体化する傾向にある。口縁部が内面に沈線をもって外反する361もこの時期であろう。小型ＡⅡ類も、量は少ないが、同様な変化を辿ると思われる。補足した資料では139・138がＳＤ019上層、143が同下層、316はＳＤ207、142・147がＳＤ019下層、151・157・150・149・153が同上層からの出土で、348は鉢347と共にＳＢ269から、361は鉢358・360・甑359と共にＳＢ281から出土したものである。

Ｂ類　口縁部が屈曲して立ち上がり小口径のＢ類では154・155・156がＳＤ019上層から出土している。155・156にみる坏部および脚部の特徴は古墳前期の高坏に通じるものであり、Ⅵ期に置かれる。

Ｃ類　158はＳＤ019上層出土で、他の類例との対応でⅥ期に当てる。

D類　350はＳＢ274出土で、図示していないがＶ期の甕および鉢の破片を伴う。158と同様に精良品で、脚部に古い特徴を残す。

E類　中期的な平坦口縁の322・353はＩ期にある。322はＳＫ230から壺325・鉢336と、352はＳＢ292から壺355・器台356・357と共に出土した。口縁部がわずかに外反してふかい354も、形態は異なるが、353と共伴しておりＩ期に置かれる。289はその退化したものとしてⅡ期に当てる。鉢375と共にＳＢ289から出土した。

高坏の変化においてⅡ期は、Ｅ類系とＡ類系の交替期に当たる。

鉢

A類　口縁部が体部からそのまま立ち上がりやや浅目のＡ類のうち、格別大型のＡＩ類159はＳＤ019上層から出土した破片であるが、明瞭な平底をもつことから一応Ⅱ期に置く。中型ＡⅡ類では同下層出土の平底鉢をやはりⅡ期に置く。２点とも体部下半を丹念にヘラで削る。322はわずかに平底をとどめるもので、鉢339と共にＳＢ219から出土した。ＳＤ019下層の154と共にⅢ期とする。165はＳＤ019上層出土で丸底化してタタキ目を残し、Ⅳ期に置く。大型・中型鉢はほぼⅣ期までで、口縁部が内湾する特徴をもつ。小型ＡⅢ類ではＳＢ269出土の347がＶ期、ＳＤ019上層出土で粗製直口の163・162はⅥ期に置く。

B類　口縁部が屈曲するＢ類では、全体的な傾向として口縁部がつよく屈曲して胴部に上位で張り平底のものから、口縁部屈曲が甘く丸底化するものへの変化は他とかわりない。補足したものを中心に述べると、Ⅱ期とした平底の370はＳＢ291から鉢372・371と共に出土、375はＳＢ289で高坏374と共伴した。176以下に並べた７点は、358がＳＢ281、他はＳＤ019上層から出土しており、Ｖ～Ⅵ期に位置しよう。台付189はＳＤ019上層出土であるが、口縁部屈曲の特徴からⅣ期に置く。

C類　体部が深く直口のＣ類では、ＳＤ019上層出土の大型ＣＩ類161がＶ期頃に置かれよう。中型ＣⅡ類では367・368がＳＢ293で甕365・366と共伴しておりＩ期に位置する。この368の系統はⅢ期では平底を残すＳＤ019上層出土の192となり、Ⅵ期ではタタキ目仕上げで丸底の191となる。199・197・193はＳＤ019上層からの出土でＶ～Ⅵ期に置かれよう。Ｃ類もＡ類同様、Ⅵ期以降丸底化し、口縁部は直立ないしは開くものが多くなり、粗製化する。

D類　体部が浅く小型のＤ類では系統の理解が困難である。補足したものを中心に述べると、平底の371・351は既述の共伴からⅡ期、わずかに平底を残す339はＳＢ219で鉢332を伴いⅢ期に位置する。340はＳＢ222でⅣ期の甕および鉢341・342を伴い出土した。205・204・260はＶ～Ⅵ期の資料としてＳＤ019上層からの出土例を挙げたものである。また、360はＳＢ281で高坏361と共伴しており、Ⅵ期に属す。

E類　これも系統の理解が困難である。ただ全体の傾向をいえば、手捏風の粗製品はⅢ期からあるが主流になるのはＶ期以降で、Ⅳ期までは平底をとどめる比較的ていねいな作りのもの

が多い。既述の共伴関係資料でⅠ～Ⅳ期を補ったほか、ＳＤ019上層出土の225以下に並べた５点をⅤ～Ⅵ期の資料として挙げておく。

Ｅ類　ジョッキ型の202はＳＤ019上層から出土しており、仮にⅥ期としておく。

なお甑については基本的に鉢と類似するが、Ⅳ期の299では丸底で浅く、Ⅴ期以降になって339・359のように尖底化するようである。ただし、平底のものがⅠ期すでに存在する。

器台

Ａ類　中期の筒形器台から発達したものであり、変化の方向は、一つは元々体部中位にあったくびれ部が体部上位に上がり次第につよく屈曲するようになること、もう一つは体部裾が外反して開いていた段階から直伸、さらに内湾気味に開くようになること、この２点から把えることが可能である。器台はこれまで後期土器の編年上はあまり重視されない傾向にあったが、器形が単純なだけに案外基準となりうるのではないかと考える。以下、ＡⅡ類を中心に述べる。

Ⅰ期では357がＳＢ292から高坏353ほかと共に出土している。体部上位が口縁状に短かくわずかに外反し、筒形器台から未発達な段階にある。Ⅱ期では筒形の名残を残しながらも、くびれ部が上位に上がり口縁部と裾部が大きく開き小型である。230はＳＤ019東下層出土。ここに図示していないが、ほかにＳＤ019出土で同形態の231・232があり、この２点は外面調整がタタキ目またはナデでⅡ期に置くに若干躊躇するが、考えられないではない。Ⅲ期ではＳＤ019東下層を当てＳＤ019下層出土の239・237を補足した。体部くびれは上位に上がり全体に大型化する。口縁部が折れずに急に外反するものでは体部裾がやや外反する236ほかのタイプが主流である一方、244ほかのように直線的に開くものも出現している。口縁部が屈折するものでは260・246がある。ただし屈折は内面に稜をなすが外面は明瞭でなく、体部裾はやや外反気味である。体部裾が開くものが多い関係上、裾端面を外にのぞかせるものが一般的で、246のように平坦に接地するものは新らしい傾向を示すものである。小型の259は特殊で、口縁部は屈折して大きく開き、外面タタキ面仕上げの粗製品である。Ⅳ期になっても口縁部の屈折は内面に稜をなす程度であるが、体部は直線的に開くものに加えて裾が内湾するものが出現し、裾端面は平坦に接地するようになる。また外面調整はハケ目が主体になりつつある。このⅣ期にはＳＤ019東上層を当て、ＳＤ019下層の243・251・449・250・247・同中層の241を補足した。Ⅴ期にはＳＤ019下層出土の252・同中層のたは上層出土の258・257を置く。258・257は口縁部屈曲が外面でも明瞭となり、体部は直線的で外面タタキ目仕上げ。252は口縁部が直線的ではあるが屈曲せずに体部裾内面に内湾を残し、退化傾向にある。これらＡ類の盛行はⅢ・Ⅳ期でⅤ期には衰退すると思われる。ＳＤ019上層からの出土は少なく、238のような一見Ⅲ期を思わせるが口縁端部が水平に開き形態の崩れたタイプが、その末期に位置するのではないかと考える。唯一大型のＡⅠ類233も一見古相を思わせるが、大型化とくびれが少なく口縁端部が開く特徴からはⅤ～Ⅵ期に置かれよう。なおＳＢ225出土の複合口縁343はⅣ期の高坏と共伴、突帯付35

6はＳＢ292出土でＩ期に位置する。

Ｂ類　262・263はＳＤ019出土。Ａ類とは全く別系統で、Ⅴ～Ⅵ期に置く。

支脚

図示したⅢ～Ⅵ期を通じてタタキ目またはナデ仕上げの粗製が多く、変化の様相が不明確である。Ａ類とＢ類はⅢ期以来並存するが、機能に違いがある。補足した資料ではＳＤ019出土の264が袋状口縁を意図しⅢ期以前か、同下層出土の牛角状280をⅣ期に当てる。また比較のため、Ⅴ～Ⅳ期とみられるＳＤ019上層出土の268ほかを一括図示した。

Ａ類　上縁が水平であるため、甕の横腹を一点で支えるにはどの面も使えるが、加熱効果の点では難があろう。甕を上に載せて使用する際には上面が平坦なものは不向きで、Ⅳ期以降に上面が凸状のものが加わるかもしれない。

Ｂ類　甕を上に載せて使用するのに適し、また横腹を支えるには突起部一点のみ使用できる。Ⅴ・Ⅵ期ではそれ以前に比べて突起がつよくなる傾向にあり、その場合は煮沸効果が高まったと考える。Ⅴ期以降はＢ類の方が量的に優勢になるようである。

以上の各自機についてはⅠ・Ⅱ期が高三潴式（後期前半）、Ⅲ・Ⅳ期が下大隈式（後期後半）、Ⅴ・Ⅵ期が西新式（後期終末）に、ほぼ該当しよう。後期中頃を設定する場合はⅡ期を当てておきたい。またⅥ期は庄内式傾向の甕、高坏の存在および全体的にみた丸底化の完成から、古墳出現の先進地域では古墳前期初とする時期に相当すると考える。

冗漫に説明してきたが、ここに挙げた編年ははじめにも述べたように、惣座遺跡という限られた地域での、しかも形態を中心としたて大まかな一つの試案にすぎない。本来、後期土器の編年というには、Ⅰ・Ⅱ期の資料がまだ不足し、Ⅵ期もさらに土師器との区分を明確にする必要があるなど問題が多く、今後検討を重ねてゆく必要がある。

註

1　中牟田賢治ほか『干塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団1978
2　種浦　修『土師木村遺跡』諸富町教育委員会1989
3　佐賀平野の弥生後期土器編年については西田和巳・蒲原宏行氏らが現在、別に作業を進めており、より精度の高い全般的なものとしていずれ公表されるであろうと期待する。
4　森貞次郎「九州」（『日本の考古学』Ⅲ弥生時代）1966
5　武末純一「遺物の検討(1)弥生土器」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＸ』）1977
6　高倉洋章「原ノ辻上層土器の検討」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻）1982
7　柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」（『森貞次郎博士古稀記念文化論集』下巻）1982
8　常松幹雄「北部九州におけるいわゆる山陰系土器」（『九州考古学』第60号）1986

3　惣座遺跡の環濠集落

「吉野ケ里」騒動以来、弥生時代の環濠集落はまさに世間の一大関心事となってしまった。惣座遺跡でも環濠集落の存在が確認されている。幸か不幸か、高速道計画路線幅の中で集落南辺の外濠と内濠が同時に、しかも路線と方向まで合わせてである。ここでは、前節の土器編年を基にこの環濠集落の成立と変遷についてまとめ、さらにその性格に関して若干触れておく。

(1)　惣座遺跡環濠集落の変遷

各遺構の時期については既に本文中のTab.1で示しているが、それは前節の土器編年に基づき、図示しなかった各遺構の資料も合わせ検討した結果である。それにより、集落の変遷を簡便に図で示せばFig.211のようになる。以下、時期をおおまかに3段階に分けて説明する。

弥生後期前半（惣座Ⅰ期・Ⅱ期）　環濠はまだ出現していない。竪穴住居群は調査区の西半にかたまり、さらにその南側の未調査区に拡がるようである。竪穴の方位は辺がほぼ正しく東西方向に一致する場合が多い。構造の点ではベッド状遺構が出現しており、入口位置に関係するであろう方形ピットは東西軸棟が多い関係上、竪穴の南辺に付設するのが普通である。注意されるのは掘立柱建物の存在である。ＳＤ019第1突出部付近のＳＢ259ほか4棟は竪穴住居群の比較的東辺部に在って、主軸方位は竪穴住居の多くと同様正方位にちかい。時期は明確でないが、ＳＢ278掘形からは後期前半と思われる甕片が出土し、また4棟ともＳＤ019に切られていることから、この時期と推定する。柱穴掘形は弥生時代としては異例に大きく、長辺が1.5m前後をはかり、長方形で二段掘りの特徴は土壙墓と見誤らせるほどである。その北東にある正方位にちかい掘立柱建物2棟および柵も同じ時期であろう。2間×1間あるいは1間×1間といった構造から高床倉庫と推定する。弥生時代の掘立柱建物は近辺でも最近調査例が多く、肥前国府跡確認調査でそれと思われる建物跡が検出されているほか、嘉瀬川対岸の西山田三本松遺跡でも多数調査されている。

その他の遺構では調査区の西南隅に竪穴住居廃絶後に甕棺墓1基と石蓋土壙墓1基、中央南辺に甕棺墓1基、東側に貯蔵穴2基などがある。

弥生後期後半（惣座Ⅲ期・Ⅳ期）　内濠ＳＤ207と外濠ＳＤ019の二重環濠がⅢ期に出現する。内濠の場合はＳＤ018を西辺にあたるその一部とみれば、西南隅に出入口を設けていたことになる。また外濠は南辺の途中2ケ所に弧状突出部を設け、東辺では台地縁ちかくを北に向かい、西辺も嘉瀬川に沿って北に曲がるようである。環濠が南辺で約25°南に傾くのは地形の傾斜に合わせたものであろう。掘削にあたってはⅠ期・Ⅱ期の竪穴住居跡等を多く切っており、施工が全体計画に従って大規模に行なわれたことをものがたっている。

竪穴住居群は調査区内に関する限り、全て環濠内に入り、なおかつ内濠を境に東群と西群の2つのグループが存在するようになる。すなわち東群では内濠東外の広い空間を占めて、さら

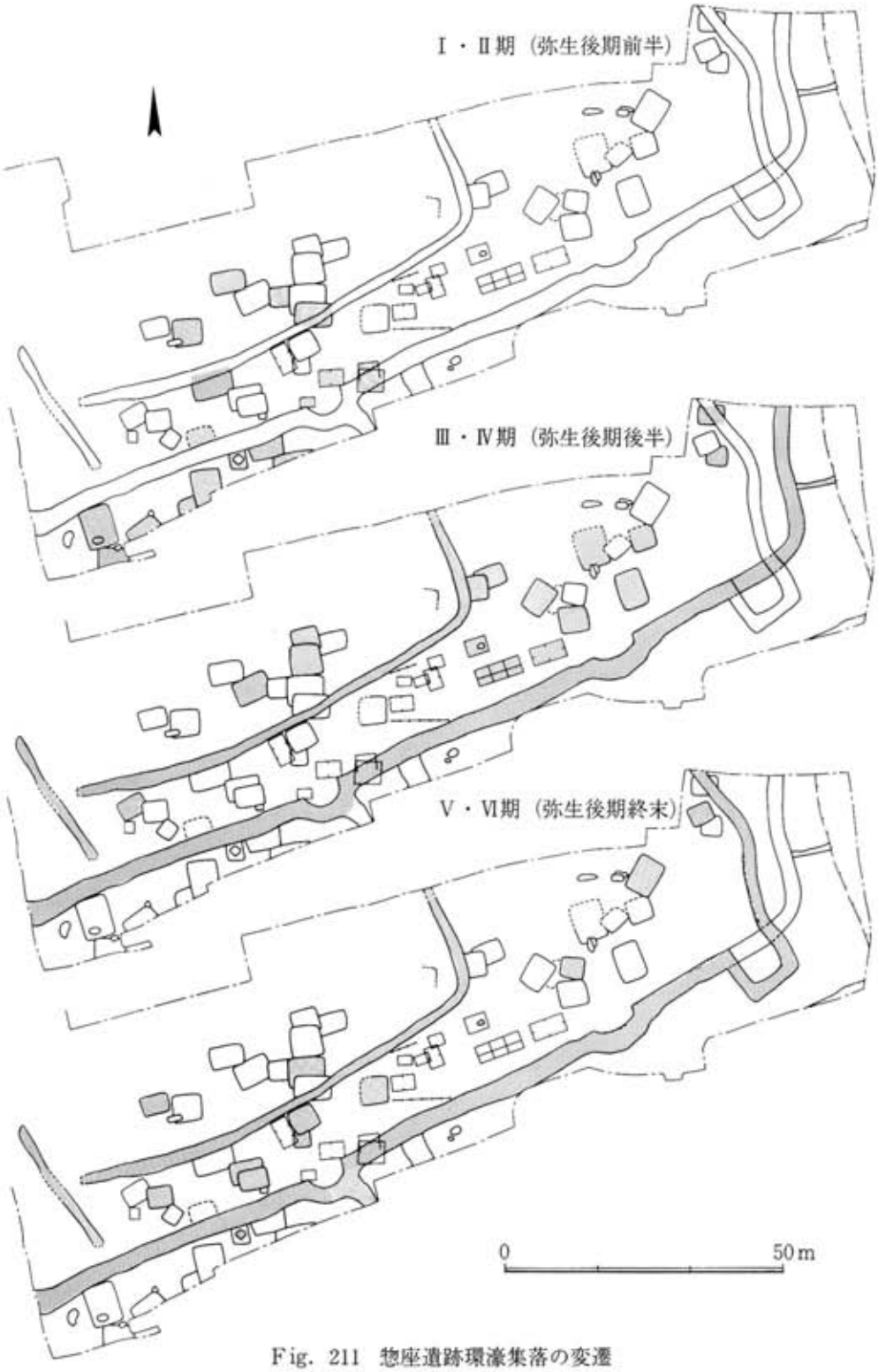


Fig. 211 惣座遺跡環濠集落の変遷

に北に拡がる勢いをみせる。これに対し西群はわずか4棟にすぎないが、内濠内と西南隅入口に造られている。西群の場合はおそらく中心は内濠内にあって、4棟はその南辺の一群にあたるものであろう。北側は削平により不明、さらにその北側は調査区外となる。両群とも竪穴の方位は環濠の走向に合わせ南北軸が西傾するものが多い。また方形ピットは東西長軸棟では南辺、東群にある南北長軸棟あるいは東傾棟では東または東南と思われる。このように環濠の出現と同時に竪穴住居群の配置にも環濠を隔てて一定の区別が認められ、グループごとに占有できる領域に制約があったことが窺われるが、ただし調査区内の現況で比較する限りでは両群の間に、竪穴住居の構造・規模等で格別違いがあるわけではない。

ここでも注意されるのが掘立柱建物跡の存在である。とくに竪穴住居東群の西側に位置するＳＢ249・ＳＢ250・ＳＢ251の3棟は外濠の走向を意識して東西軸を南に傾け、しかも方位と並びに弥生時代では極めて珍らしく規格的な配置をとる。南側に並ぶ2棟が総柱構造であることから、3棟は高床倉庫と推定する。そのうち西南隅のＳＢ250は3間×2間の大型長棟で、類例は佐賀平野では神埼町川寄吉原遺跡[1]のＳＢ012が知られるだけである。これら3棟は同時に存在したと考えられるものであり、その西側にある小規模な掘立柱建物数棟および柵も、方位からみて近接した時期であろう。このような倉庫群が集落の中でどのような性格をもつかは重要な問題であるが、大型のわりには内濠の外にあり、しかも竪穴住居東群に接していることからすれば東群の付属施設とみるのが妥当であり集落全体の共同施設とは考えにくい。 またＳＢ249が後期終末の甕棺ＳＪ233と重複していることからみて、規則的に並ぶ3棟とも後期後半のうちに、建替えられることなく廃絶してしまうようである。

なお、2ケ所の環濠突出部付近には竪穴住居も掘立柱建物跡も存在せず、近辺の遺構の残存状況からみて、少なくとも望楼のような掘立柱の構造物の存在は想定困難である。

弥生後期終末（惣座Ⅴ期・Ⅵ期）　環濠はⅤ期に大規模な改修が行なわれる。外濠の場合、東辺ではわざわざＳＤ019東を埋めてＳＤ204を付け替え、その際には東南隅に方形の突出部を造り、さらに東辺途中を弓状に張り出させている。ＳＤ204では濠の幅はやや狭くなる。このような方形突出部は古墳時代の居館とされる群馬県三ツ寺遺跡をそれを連想させよう。また南辺でも濠底からⅤ期の完形土器が多量に出土しており、改修あるいは掘り直しが全体に及ぶものであったことを示している。第1突出部から南に派生するＳＤ209もこの時期の改修による可能性がつよい。環濠は少なくとも庄内式並行期までは維持されているが、この地域に古墳が発生する布留式期まで利用されたかどうかは不明である。その点では調査区東南隅でわずかに検出したＳＤ211の存在が気になるところである。

一方、竪穴住居群はこの時期になると、基本的には先の東群・西群の区分けを踏襲しながらも、とくに西群では、かって原則としたであろう環濠による居住区分を越えるものが現われる。すなわち西群をみると、外濠の内にはあるとはいえ、内濠を越えて南外に竪穴住居の分布が拡

がるようになる。同時にまた、竪穴の方位も環濠の走向をあまり意識せず不統一になる傾向がつよい。方形ピットは依前東西長軸棟が多いことから基本的に南に設けられるが、東群の２棟のように極端に東傾する場合は東南側に付設される。調査区北側の削平を考えると全体的なことは言えないが、竪穴住居群は数のうえではＶ期になっても後期後半以来安定した発展・継承をみせる。しかしⅥ期、いかにも突然終る。

なお、掘立柱建物については先述のとおり、少なくともＳＢ249ほか３棟はＶ期まで残存した可能性は少ない。Ｖ期以降あるとすれば、その西側の小規模な建物あるいはＳＢ273に関係する可能性のあるＳＢ275などであろう。

(2) 惣座遺跡周辺の環濠

次に、このような惣座遺跡の環濠集落が嘉瀬川渓口東岸の限られたこの地域の中で、どのような性格をもつものであるか、見ておく。北側の惣座六本杉遺跡から南側の惣座遺跡、さらに久池井Ｂ遺跡にわたるこの一帯は、これまで肥前国府跡関連調査による試掘あるいは開発に伴う発掘調査結果から、ある程度、全体の状況把握が可能である。Ｆig.212を参照にされたい。

まず今回報告した環濠の規模であるが、既に本文でも一部触れたように、全体としてみると

Ｆig. 212　惣座遺跡周辺の環濠（1/8000）

地形に合わせて外濠が西に傾く台形になるように周回すると推定する。惣座Ⅲ期における外濠南辺でみて甕棺墓集落の東西幅は約160m、これが地形の制約上、とり得る最大東西幅である。外濠北辺については大和町教委が調査した久池井六本杉遺跡[2]で、惣座橋をわたる町道の北脇まで惣座遺跡から続く弥生後期の竪穴住居群の拡がりが認められるが、環濠は存在せず、町道南側約30m手前まで調査したが、ここでも環濠はみつかっていない。したがって、あくまで外濠が一周するとの仮定で推定すれば、外濠北辺の位置はこの町道の南側30m以南となり、環濠全体の南北幅は最大約180mに復元されることになる。一方内濠で囲まれた範囲は東西幅82m、南北幅不明、環濠全体の中ではその東側に片寄った位置をとる。むろん、外濠・内濠とも正確な形状、突出部の有無等については不明であるが、こうして推定した惣座遺跡の面積は外掘りで測って最大約2.9ha、内濠で囲まれた内郭は仮に方形とすると約0.7haとなる。

それでは周辺はどうか。惣座遺跡がのる同じ微高地上では、まず北側の久池井六本杉遺跡では環濠集落が存在しないことが発掘調査で確められている。南側についてみると、実は肥前国府跡確認調査の際の試掘溝で、環濠とみられる遺構の一部がみつかっている[3]。この環濠はＲＧ33発掘区のＳＤ033で、発掘区を東西斜めに横切ったのち約125°の鈍角をもって南に曲がっており、上端幅約2.4mをはかる。濠底は平坦で、埋土中から弥生後期後半～終末の土器が多量に出土した。これに続くとみられるのが国庁跡の築地北西隅に設けられたＱＦ25発掘区のＳＤ105で、上端幅約3.0mの溝が発掘区の中を西端がやや南に傾いて東西に走り、さらにその東側にあるＱＦ24発掘区のＳＤ103に続くようである。国庁跡付近はかなり密に試掘溝が設けられているので、ＳＤ033の続きを南側で探そうとすればＳＤ105が可能性のある唯一のものといえる。これらの溝をつないでみると、この環濠は北辺・西辺が直線的に走り、東辺もおそらく微高地の縁に沿って直線的な走向をなすものであろう。全体としてはやや南北に長い長方形で、西に大きく傾く形態が想定される。これに囲まれた推定範囲は南北約80m、東西約75m、面積約0.6haである。仮にこれを惣座南環濠と呼ぶことにする。

この惣座南環濠は規模の点では先の惣座遺跡のちょうど内濠程度であって、東側に低地帯がせまり、南側では他に環濠規模の溝がみられないことから、その外側に別の外濠が廻るといった形はまず考えにくく、これのみ一重で周回するものであろう。したがって環濠集落というよりは環濠住居群といった方が適当な規模である。全体の形状・方位および出土土器の時期からみて、惣座遺跡の環濠と同時に掘削され、弥生後期後半～終末の間、並存したことは間違いないところである。

同地区で今のところ確認できる環濠は、ほかにＲＧ40発掘区でＳＤ059がある。これは弥生中期とみられる上端幅2.4mのＶ字溝で、惣座南環濠と重複する位置にあり、惣座南環濠に先行する。発掘区の中を東端がやや南に傾いて走り、北側をどのように回るかは不明だが、おそらくＲＧ33発掘区の北側を周回するものであろう。ＳＤ059環濠の存在は、惣座遺跡環濠並び

に惣座南環濠が弥生後期後半に成立する以前、同地区で既に、遅くとも弥生中期の段階で環濠を廻らす集落ないしは住居群が出現していたことを示すものとして意味が大きい。

ところで、環濠以外の遺構の分布をこの地域でみると、竪穴住居跡は国庁跡の北辺築地以南ではこれまで1例として検出されたことがない。たとえあっても稀であろう。かわって弥生中期～後期にかけての甕棺墓は、惣座遺跡環濠の南側、惣座南環濠および国庁跡の西側、すなわち環濠から南側あるいは西側に外れた嘉瀬川沿いに分布が密で、以前この地区で河岸に並行して導水管埋設工事が行なわれた際、極めて多数の甕棺が破壊されたと伝えられる。したがって惣座遺跡がのるこの微高地では遅くとも中期には環濠に区画された住居群が形成され後期に発展をみせるが、その間、居住地区に利用された範囲は惣座遺跡環濠から惣座南環濠にかけてを中心とするものであって、その南側および西側は埋葬地区として伝統的に認識され、原則的に区別されていたと考えられるのである。その意味では両環濠の間約110mの範囲がどのように土地利用が計られたか、ＳＤ019第1突出部から派生するＳＤ209の存在が暗示するように別の環濠が存在する可能性も含め、大いに興味あるところである。ただしこの地域は今のところ試掘溝の数が少なく、実態は不明である。

次に久池井Ｂ遺跡から惣座Ｂ遺跡[4]にかけての台地をみると、まず久池井Ｂ遺跡では弥生前期の貯蔵穴が数基あるだけで生活の痕跡が極めて少ない。同遺跡の北側山麓部および東側についてもその点は同様である。「環濠」がみられるのは惣座Ｂ遺跡であって、調査区を東西に横切って幅約2ｍの溝ＳＤ530が走っており、仮にこれが東側で元々は台地の縁に沿って北上し、北側で再び調査区を横切って周回すると想定すれば、環濠北辺となる可能性がつよいのはＳＤ530と類似した構造をもつＳＤ411以外にない。西側については明らかでないが、広くとっても台地西縁までであろう。このように、仮にＳＤ530を惣座Ｂ遺跡がのる台地を一周する環濠とみた場合、全体としての形状は南北に長い長方形となり、この環濠に囲まれた集落の規模は南北約130m、東西約100m、したがって先にみた2つの環濠の中間的な大きさになると想定される。これを仮に惣座東環濠と呼んでおく。

惣座Ｂ遺跡の場合、遺跡自体は夜臼期から弥生時代の全期を通じて遺構がみられ、さらに古墳時代に入っても布留式期を中心とする竪穴住居群が弥生時代環濠の南側にあり、以降奈良時代まで連綿と続く。中期・後期の竪穴住居群はＳＤ411の北側に分布し、環濠に囲まれるようである。ただし、ＳＤ411の時期については、濠底が平坦をなす断面構造からみて弥生後期と推定され、これが改修結果でないかぎり中期にはまだ住居群を囲う環濠は出現していなかったようである。そして後期の住居群が営まれた時期にはその南側に石蓋土壙墓を中心とする列埋葬があってこの環濠を切り、また後期後半の甕棺が環濠埋土上に乗っていることから、この時期すでに環濠は埋没していたことがわかる。したがって惣座東環濠の掘削・存続期間は弥生後期後半という限られた期間内にすぎなかったと考えてよい。

その他の周辺遺跡としては東に離れた春日遺跡があるが、見つかっている溝は環濠といえるような性格のものではない。国分寺跡一帯の台地は遺跡の立地として申し分ないように思われるが、これまでの調査では弥生時代の大型集落の存在をにおわせるような証拠は殆ど得られていない。また嘉瀬川西岸の東山田一本杉遺跡[35]から西山田遺跡[36]にかけては弥生後期を中心とする比較的大型の集落であるが、環濠はもたないようである。

さて、このような周辺の状況から推定される惣座遺跡とその周辺における弥生集落の変遷はおよそ次のとおりである。

まず弥生前期では久池井六本杉遺跡・久池井Ｂ遺跡・惣座Ｂ遺跡で小集団の分散的な居住が想定される。しかし惣座遺跡では今のところその明証がなく、あっても他と同様わずかに形跡を残す程度であろう。

弥生中期になると肥前国庁跡の東側の位置に惣座南環濠が出現、惣座Ｂ遺跡では住居群が存在するが環濠はまだもたなかったと思われる。この時期の環濠は１重の方形を基本とする。

弥生後期になって環濠は大きな変貌を遂げる。後期前半においては惣座遺跡環濠の西南部から、おそらくその南の中期以来の環濠にかけて住居群が拡がっていたであろうが、後期後半にさしかかる惣座Ⅲ期にこれらを再編するかのように、惣座遺跡で大規模な二重環濠が掘削され、同時にその南にもそれより一回り小さい惣座南環濠が近接しながら並存する。その中間地帯にはさらに別の環濠が存在した可能性もあり、防禦機能の優れた惣座遺跡の環濠を中核として、あたかも衛星的に中小環濠が近辺に配置され、全体として一つの要塞的景観をもつ一大集落がここに出現したと考えられるのである。この環濠の出現は決して自然発生的なものではなく、当初においてはそれまでの竪穴住居を一部壊してまで整然たる姿で登場し、しかも一定の居住区分をもつ点において、まさに全体がきわめて計画的に施工されたものであり、防禦的色彩がつよいということも含めて、その背景に何らかのさしせまった時代の要請を感じさせるものがある。そして惣座遺跡の環濠の場合、後期終末にかかる惣座Ⅴ期には何故か、一部濠の付け替えも含む環濠の改修が大規模に行なわれたのち、Ⅵ期、すなわち古墳時代前期初に突如として、その活動を停止する。一方、惣座Ｂ遺跡では前・中期以来、安定的き継続してきた集落が、おそらく後期前半になって環濠を廻らすようになる。しかし後期後半以降は環濠は埋没して墓域に変わり、機能しなかったようである。したがってこの惣座東環濠の場合は惣座遺跡の環濠とは同時期に存在しなかった可能性がつよく、一つの考え方としてはこの時期、地域全体のなかで環濠機能の統廃整備が図られたと想像を逞ましくすることもできよう。ただし住居群はそのまま後期終末まで存続したようで、さらに、久池井一帯では今のところ唯一、古墳時代前期以降も奈良時代に至るまで集団としての継続を保っている。

(3)　佐賀平野のおける惣座遺跡の位置づけ

惣座遺跡のおける環濠集落の出現は、それが弥生後期後半という、いわゆる邪馬台国の時代

出来事であるだけに、一地域の現象とはいえ当時の倭国の歴史的機能を知るうえで貴重な資料となるものであろう。佐賀平野においては近年、大型開発に伴う調査で吉野ケ里遺跡[7]をはじめ基山町干塔山遺跡[8]・中原町町南遺跡[9]などが知られており[10]、これらを各地域の拠点的集落とみて佐賀平野における勢力が地図がどのように描かれるか今後大いに問題になるところである。佐賀平野から西では多久市牟田辺遺跡[11]・武雄市大楠遺跡[12]などの環濠集落がある。

惣座遺跡と比較してみると、大楠遺跡は前期といわれ、佐賀平野と隔たるが最も古い。ただし全体は不明である。町南遺跡の環濠は前期末の段階で丘陵上に幅4.1m、深さ約3mの大濠が掘削され、後期後半に再び大規模な改修が行なわれており、これに囲まれる集落全体の規模は直径約200m程の円形もしくは楕円形と推定されている。吉野ケ里遺跡の場合は前期から環濠が造られ、中期後半に極めて大規模な外濠が、集落はおろか丘陵全体を囲繞し、そして後期後半頃に外濠を改修すると同時に南北約150m、東西約100mの内濠が掘削されたようである。内濠の弧状突出部に伴う「物見櫓」もその際設備されている。干塔山遺跡は独立小丘陵上にあって、後期後半に環濠が出現する。一辺約70mのほぼ隅丸方形で、環濠の西南隅にはやや不明瞭ながら、弧状突出部をもつ。

そうしてみると、まず環濠集落の成立時期では現状で比較しうる資料は確かに少ないが、佐賀平野さらには多久・武雄盆地を含めて、環濠集落の出現は既に前期のうちに一部でみられ、中期に吉野ケ里遺跡のような特段大型のものが造られる。そして後期、とくにその後半になる

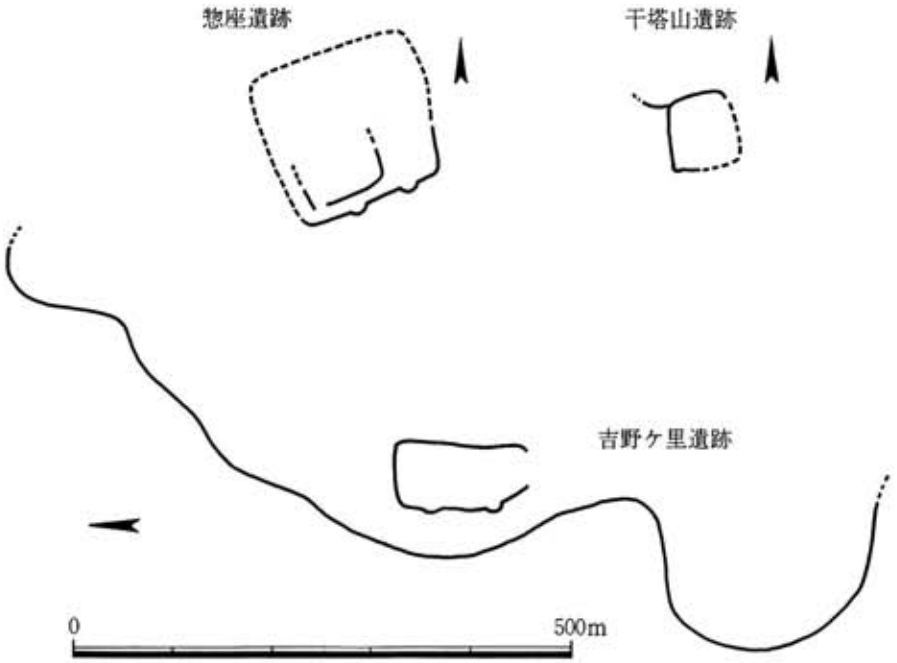


Fig. 213 佐賀平野の環濠集落比較

と多くの地域で環濠の新設あるいは改修が進むらしい。吉野ケ里遺跡・干塔山遺跡がそうであり、惣座遺跡の場合もそれまでの環濠を再編成する形で二重環濠を中核とする大集落が形成されている。後期後半におけるこのような変容がどの程度の範囲にわたるものであるかは、さらに多くの検討資料を必要とするであろうが、もし仮にそれが佐賀平野全体に及ぶ普遍性をもつ現象であるとすれば、その背景に重大な社会的緊張が生じつつあったことが想像され、しかも一集落の問題にとどまらない深刻な事態であったと推測されるのである。防禦的機能の象徴ともいうべき弧状突出部が環濠に付設されるのもこの時期である。

環濠集落の立地という点では、惣座遺跡の場合は微高地といっても殆ど平坦地とかわらない立地条件にあり、丘陵上を占める吉野ケ里遺跡・町南遺跡・干塔山遺跡とは大きな違いがある。たしかに防禦上は丘陵地の方が有利に働くであろうし、その違いは一見、佐賀平野における東部と西部の決定的な相違とみえるかもしれない。しかしながら、これはおそらく地形に制約された結果であって、ことさら重大視する必要はないであろう。つまり東部では洪積世の舌状台地が発達しているのに対し、西部ではそれがみられず、環濠集落ほどの規模ともなれば平坦地とあまりかわらない低台地を選ばざるをえないからである。もっとも東部の丘陵立地にしても高地性というほどではない。

環濠の構造という点では、二重環濠をもつのは佐賀平野では今のところ惣座遺跡と吉野ケ里遺跡だけである。ただし吉野ケ里遺跡の場合、内濠は後に追加されたものであるから、初めから外濠・内濠が二重に廻るのは惣座遺跡のみである。それだけに一層、惣座遺跡の場合は環濠の設定がそれまでの集落の再編成を伴う形で全体計画的に実施されたものとして印象がつよい。環濠の形状は方形を基本とする点で干塔山遺跡および吉野ケ里遺跡の内濠に共通する。

また環濠突出部の構造は、惣座遺跡の弧状突出が吉野ケ里遺跡のそれと隅々までよく似ている。ただし大きな違いで吉野ケ里遺跡では外濠にでなく内濠に付くという点にあるが、これは吉野ケ里遺跡の場合、内濠が後期に追加されたことによる時代性、それと内濠が「物見櫓」を伴い丘陵頂に位置するという立地条件の違いに基づくものであろう。突出部構造の機能からいえば外濠に付く惣座遺跡の場合が本来の姿と思われる。干塔山遺跡の突出部とは環濠の隅に位置する点で、付け替え後のＳＤ019東第３突出部が類似する。

また、環濠の規模の点では、惣座遺跡は外濠で囲まれた範囲が約2.9ha、これは時期は異なるが町南遺跡にちかい広さである。干塔山遺跡は約0.5haではるかに小さい。吉野ケ里遺跡とは外濠の規模でとうてい比較にならないが、しかし後期に新設された内濠だけでみれば吉野ケ里遺跡のそれは1.5haで、惣座遺跡の外濠で囲まれた広さよりもむしろ小さい。吉野ケ里遺跡の場合、とかく外濠の大きさに目をうばわれがちであるが、中期以来の「栄光」を保持したことは疑いないとしても、後期にいかなる新たな発展があったかという点ではあまり過大に亡影を追うのとはむしろ危険であり、周辺地域を含めた勢力の変遷を詳細に把える必要があると考

える。

弥生前期以降、佐賀平野のおそらく各地で大小様々な環濠が造られであろう。それらはまさに環濠集落と呼ぶべき規模のものもあれば、単に環濠住居群とでもすべき小規模のものまであって、両者は峻別されなければならない。環濠集落が防禦的機能をもって出現する最も典型的姿を吉野ケ里遺跡において我々は見る。周辺に散在する小集団を統括して、厳重に濠をめぐらせた中核的な環濠集落の存在、それは一定の地域において権限をある程度集中した拠点的集落の出現といってよいであろう。吉野ケ里遺跡はその最たるもので佐賀平野の他の地域を圧倒し、ある時期の佐賀平野における盟主的地位さえ思わせる。惣座遺跡の場合も、他地域との関係はともかく、佐賀平野西部におけるそうした有力な拠点的集落の一つにあたるものと考える。

このような佐賀平野における弥生時代の各地域集団の勢力を考える際の参考に、今一つ甕棺の出土数を資料として挙げて終わる。Fig.214は百崎正子氏が作成したもので、奈良時代の旧郡別に概数を図示したものである[63]。

これまで佐賀県下で調査により出土した甕棺数はほぼ6,000基ちかい。その他にも工事等で

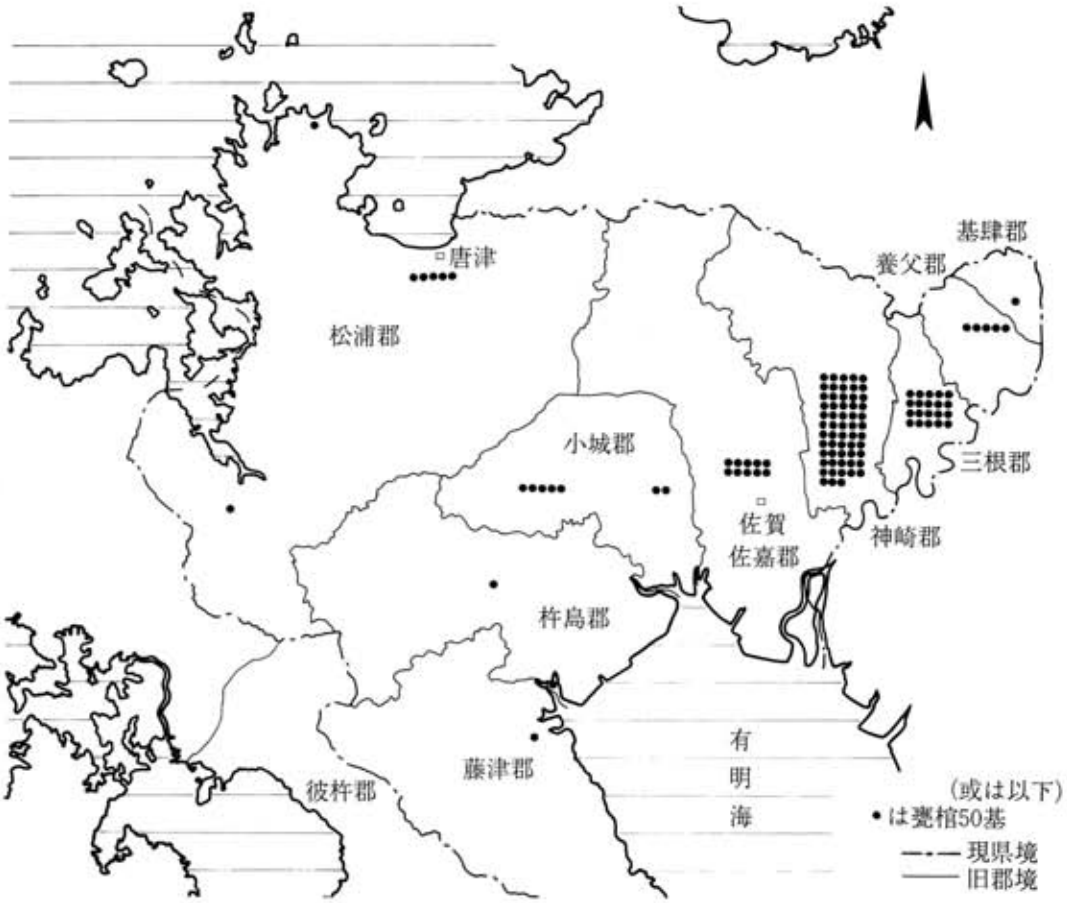


Fig. 214 弥生時代甕棺出土類比較（旧郡別）

破壊されたものはおびただしいが、実数は押えがたいので除外する。図で明らかなように、圧倒的に多いのが神埼郡、次いで三根郡である。佐賀郡・養父郡は多いといっても相当なひらきがあり、唐津平野の場合も意外と数は少ない。1遺跡で吉野ケ里遺跡2,000基以上、船石南遺跡660基などのように極端な集中がみられるのも神埼郡・三根郡だけの特色である。

いうまでもなく甕棺墓は北部九州で弥生中期～後期前半を中心に盛行した墓制で、基本的には等質な埋葬型態をもつ。乱暴な話しであるが、調査件数などの募多は無視して、これがある程度当時の人口比、ひいては生産力を反映したものであるとすれば、神埼郡から三根郡にかけてのかかる状況は完全に他を圧しており、それだけに吉野ケ里移籍をはじめ二塚山遺跡・横田丘陵遺跡等が分布する田手川流域を中心とした勢力の佐賀平野における有位性をつよく思いしらされるのである。問題の後期後半以降も、甕棺が衰退するため状況は不明となるが、基本的にこのような構図に急激な変化はなかったものと推定され、青銅器の分布傾向もこれを補完する。吉野ケ里遺跡の環濠集落をある時期頂点とする田手川流域を中心とする地域の優勢はこうした広範な地域集団の結集によるものであろう。そうしてみると惣座遺跡の場合は、たしかに佐賀平野西部における一方の雄ではあっても、少なくとも弥生時代においては、未だ東部に十分比肩しうるだけの力量を備えるものではなかった、と推測するのである。

以上、憶測を混じえて述べてきたが、惣座遺跡の環濠一つをとり挙げても、全体の状況を正しく把握するのは容易でない。調査範囲が限られる以上、実際どの程度の規模の集団がその中に割拠していたか、全体の詳細な変遷はどうかなどの点まで踏み込むには、まだ資料が不足するからである。弥生時代の環濠集落は、例えば佐賀平野といった一定地域の中に置いてこそ、本来の性格が明らかになるものであろう。今日的な課題として、その点がまず問題である。九州全体あるいは全国的な見地からの比較検討はその後の問題として、大方の識者に委ねたい。

註

1　天本洋一ほか『川寄吉原遺跡』佐賀県教育委員会1981　時期は弥生後期前半～中頃
2　大和町教育委員会1988年度調査
3　七田忠昭ほか『肥前国府跡Ⅲ』佐賀県教育委員会1985
4　大和町教育委員会1984年度調査
5　本田秀樹「東山田一本杉遺跡」(佐賀県教育委員会『九州横断道関係埋蔵文化財調査概報』7)1984
6　副島正道「西山田三本松遺跡」(佐賀県教育委員会『九州横断道関係埋蔵文化財調査概報』10)1988
7　森田孝志「吉野ケ里遺跡の環濠集落」（『考古学ジャーナル』NO.312）1989
8　中牟田賢治ほか『干塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団1978
9　七田忠昭・天本洋一『町南遺跡』佐賀県教育委員会1983
11　西村隆司ほか『牟田辺遺跡』多久市教育委員会1978
10　その他、中原町原古賀三本谷遺跡でも弧状突出部をもつ、小規模な円形二重環濠がある。
　　ただし径約40mの環濠住居群程度で性格不明。中原町教育委員会1988年度調査
12　武雄市教育委員会1989年度調査
13　甕棺の出土数については藤尾慎一郎氏が詳細な図表を公表しているのを、不明にも後で知ったが、ここでは郡別を重視して独自の図を挙げる。数については藤尾氏と必ずしも一致しない。
　　（藤尾「九州の甕棺」－『国立歴史民俗博物館研究報告』21－1989）

4　肥前国府跡調査の現状と問題点

肥前国府跡の所在地については古くから佐賀郡大和町久池一帯と推定され、事実、昭和50年から59年の確認調査でその国庁跡と周辺官衙郡の存在が明らかにされている。国庁跡の全容が判る例としては全国的にも稀であり、しかもそれが確認調査の早い段階であったのは幸運なケースというべきであろう。しかしながら国府が地方における政治機能を中心とした古代の都市計画ある以上、問題は国庁のみにとどまるものではない。肥前国府跡の場合、確認調査以外でもとくに近年、本書所収の惣座遺跡や久池井Ｂ遺跡をはじめ関連する重要遺跡の調査があいついでおり、肥前国府全体の変遷あるいは遺跡相互の有機的な関係等を問題とするのに必要な資料が整いつつある。開発による損壊と表裏の関係にあるとはいえ、国庁とその周辺官衙が集中的に調査され実態が比較的明らかな数少ない地域である点にこれら遺跡の重要性がある。

そこで本項では今回の報告を機にこれまでの成果をある程度整理し、なお多くの課題に当面するであろう今後の調査・研究に備えるため、現状でのいくつかの問題について若干まとめておくことにする。

(1)　肥前国府跡をめぐる諸論

肥前国について『肥前風土記』はその巻頭に「郡11所－郷70・里187、駅18所－小路　峰20所－下国、城１所、寺２所－僧寺」と記す。さらに肥前国府が所在する佐嘉郡の条では「郷６所－里19、駅１所、寺１所」と述べ、地名や人名に、「郡の西に佐嘉川」、「県主等祖大荒田」、「土蜘蛛大山田女・狭山田女」の二女子、「海神世田姫」などの呼称が登場する。この佐嘉郡条が記す風土記の世界がまさに肥前国府が所在する現在の佐賀郡大和町久池井一帯である。駅１所は肥前国府に併設されたものであろうし、寺１所は肥前国分寺および国分尼寺であろう。また佐嘉川は郡の西限になる現在の嘉瀬川であり、その上流にあたる久池井北方

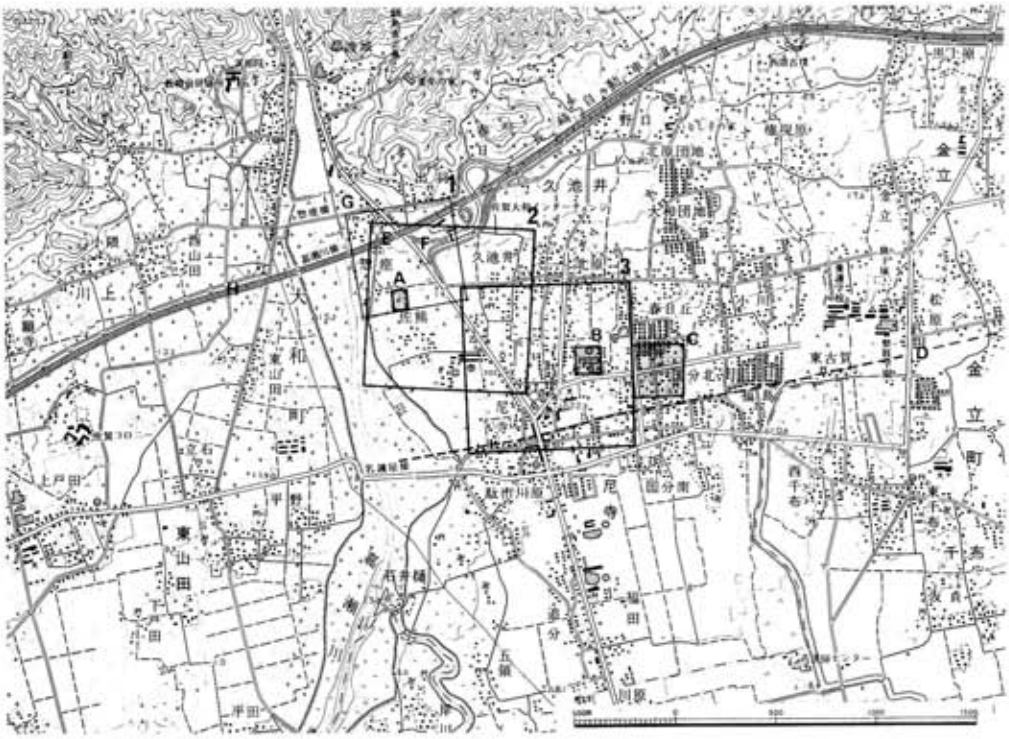
Fig. 215　肥前国古代駅路

の地に淀姫神社がある。さらに山田の地名は現在でも久池井と向かい合う嘉瀬川の西側地域で字名として残り、墨書あるいはヘラ書き土器資料にもしばし登場する。

奈良・平安時代におけるこの地域の様子が文献に現われるのは風土記以外には殆ど皆無にちかい。わずかに『日本霊異記下』の宝亀七年（776）にみえる佐賀君児公の名や、天平勝年間（749～757）以降の国司名[1]、後で問題にするが『和名抄』に記された「呼岐国府」の存在等の断片的な資料に限られる。

国府に関する研究が一般的にそうであるように、肥前国府の場合も地名考証および地理学的な観点から所在地の考察が始まり、府域の設定に関心が向けられてきた。肥前国府が久池井一帯に推定されたのはこの地域に国分寺・尼寺・惣座・印鑰など国府に関する地名がみられ、なおかつ実際に寺跡や古瓦などの以降・遺物が認められることから当然といえば当然である。事実、奈良時代の国庁跡は久池井字五本杉で所在が確認されている。ただ、その場合でも問題になるのが国府の移転云々であって、例の『和名抄』では肥前国11郡の中の小城に続け和訓を「呼岐」とし「国府」を並記する。これについて吉田東伍氏[2]は肥前国府の所在地はあくまで佐嘉郡久池井であって、該当する遺跡の見当らない「小城」なる記述を誤認とした。以来、呼岐国府はあまり問題とされることはなかったが、最近では木下良氏[3]は、初期の国府は水害を被るにおよんで『和名抄』の編纂当時の9世紀には一旦小城郡に移り、平安末期までには再度佐嘉郡に帰転したと推論しており、日野尚志氏[4]も同じく小城移転説を述べた。この問題は今だに決着がついていないが、樋渡敏暲氏は『和名抄』巻9では本来佐嘉郡の6郡に含められるべき川上が小城郡に含められていることを論拠に、現在の大和町川上一帯[5]が『和名抄』当時は小城郡であったが、あるいは小城郡と混同されたかいずれかの可能性、すなわち行政区分の変更や地理観の混同といった観点からの検討も加味する必要があることを指摘している。

国府の府域については主に地理学の方面からいくつかの試案が出されている（Fig.216）。米倉二郎氏は当初、川上川（嘉瀬川）渓口左岸の大和町一帯、すなわち惣座・久池井・尼寺にわたる地域に正方位にちかい方8町の国府域を設定したが[6]、その後、久池井字五本杉で国庁跡の遺構が検出されたことを受け、改めて新説を述べた[7]。米倉氏によれば、初期の肥前国府は南北軸が11°西傾する佐賀平野の条里に合わせた十一条一里の地に方6町の府域をもつものであったが、狭隘な地勢のため実際上は方5町に制約された。現在みつかっている国庁跡は近江国庁跡と同規模とすれば全体の庁域は方2町と推定され、府郭の南辺中央に位置するものである。そして天平宝字元（757）年に介が任命されていることからみて、一般的な類例に従えばこの時に肥前国が中国から上国へ昇格し、同時に方6町から上国の規模にふさわしい方8町へと府郭が移転拡張された、というのである。この新府郭は従来米倉氏が述べてきた正方位にちかい方8町の府域であって、方位が全く異なることから旧府域の町割りを廃して新たな道路網等の設定を必要とする。現在みつかっている国庁跡について米倉氏は、上国昇格後も庁舎は新府郭



①米倉説「初期」国府　　A　国庁跡　　E　惣座遺跡

②米倉説「後期」国府　　B　尼寺跡　　F　久池井Ｂ遺跡

③高橋説国府（最大方７町の場合）　　C　国分寺跡　　G　久池井六本杉遺跡

D　西海道　　H　東山田一本杉遺跡

Fig. 216　肥前国府復原案と関連遺跡

に合わせて新設されることなく、旧施設のまま利用された可能性もありうるとしている。

高橋誠一氏はこの米倉新説の意義を一定程度評価しながらも、米倉氏の示した初期国府の方位、後期国府と条里との関係、国庁跡の時期等に疑念を呈し、府域の設定については米倉新説を否定して詳細な地割復原図に基づき独自の府域設定を試みる[8]（Fig.217）。高橋氏は米倉説府域の東南方にあたる久池井・尼寺・北原・春日丘・国分北の一帯にかぎってみられるほぼ正方位の１町方格地割が佐賀平野の一般的な条里とは全く別種の、いわば異方位の条里ブロックであることに着目し、最大限で方７町、最も可能性の高い府域として方６町の範囲を推定している。その際に論拠として挙げたのは正方位１町方格地割の存在のほか、この地が台地状の地形で米倉説「方８町域」の大部分が低湿な水田部であるのに比べると洪水の危険も少なく国府の立地にふさわしいこと、府域の東辺に国分寺がまさに接すること、官道である西海道が当該地割の外縁部をかすめていること、その他古瓦の濃密な散布地区が含まれること、などであった。高橋氏の所論は詳細な地割図に基づくだけに説得力があり、また国分寺や西海道との関連

Fig. 217　肥前国府路周辺の地割（約1/2000）

※高橋賞一「肥前国府に関する再検討」（注8）の地割図を基に国庁路、尼寺路、西津道路現国道を加えて表示した。
※不適当な表示等があれば編集者の責任である。

まで論及して新味あった。現在みつかっている国庁跡と離れていることについては、これを発掘調査の所見に依り８～９世紀の国庁と認めたうえで、1)何らかの要因、たとえば上国昇格や災害等により国庁のみ高橋説府域から字五本杉に移転した、2)初期はは字五本杉に国庁のみ建設され後に府域に建設と整備が国庁と離れた地で実施された、3)字五本杉周辺にも国府の存在した時期があり先後関係はともかく２ケ所に国庁を含む国府が営まれたなど、現時点では様々な可能性が考えられると述べ、発掘調査の結果を待つとしながらも高橋氏自身は1)を該然性の高いものとみた。このいくつかの可能性の提起は基本的な問題として重要である。ただ、高橋説府域はその中央に国分尼寺を含むものであり、高橋氏が言うように仮にこれを外して北側の方４町に府域を挟めて考えることができるものとしても、国分尼寺が国府の正面に位置するといった欠点が問題として残ることにはかわりがない。

木下良氏は、かつて国府域については米倉説をほぼ妥当としつつもその国庁域は低湿な水田にあたり不適当とし、佐熊集落の北側約２町四方の地を国庁域と推定した[91]。この新たな国庁域の推定については、規模はともかく位置はほぼそのとおりであることが発掘調査の結果確かめられている。そして最近の著書[92]では各地の発掘調査結果をふまえ、これまで一般に論じられてきたような国庁域を方向町と画定することにあまりこだわるべきではない、との立場をとり、多くの国府想定地では周郭にあたるものが殆ど見当たらないと述べている。肥前国府についても字五本杉の国庁跡周辺では条坊のような方格地割は認められず、方向町というような外郭線も考えたいとし、また現在みつかっている遺構の方位・位置等は条里地割と関係ないと考えるようである。これは条里地割（阡陌制）が先行し、条里呼称は８世紀中頃に始まるものであるから、すでに８世紀前半に多く整備された国府の位置が条里界線を基準にすることはありえなとの考え方に基づくものである。また米倉氏が提起した国の等級に応じた府域の拡張についても実態とその必要性に疑問を提した。

そのほか、木原武雄氏は高橋氏と同じ国府を想定し[93]、瓦が多く散布する久池井部落内に国庁を、そしてこれを中心に方５町の府域の設定を試みている。

(2) 発掘調査で検出された肥前国府関連遺構

肥前国府に関する上記の諸論は、国庁および府域の設定を時間的な国府の変遷の中で整理し直す必要があろう。それでは実態として発掘調査の結果はどうか。Fig.218は字五本杉の国庁周辺において、これまでの発掘調査で検出した主に奈良・平安時代を中心に掘立柱建物跡および溝を概略表わしたものであり、詳細図は〈付図２〉としたのでそれを参照されたい。

国庁跡および惣座遺跡　現在、字五本杉でみつかっている国庁跡は広義の惣座遺跡に含められる。先に旧地形復元図で示したとおり（Fig.５）、惣座遺跡は嘉瀬川渓口東岸の細長い微高地上にあり、国庁跡はその南端に位置する。これがある時期の国庁であることには誰も異議を唱えるものはいない。（Fig.219）。

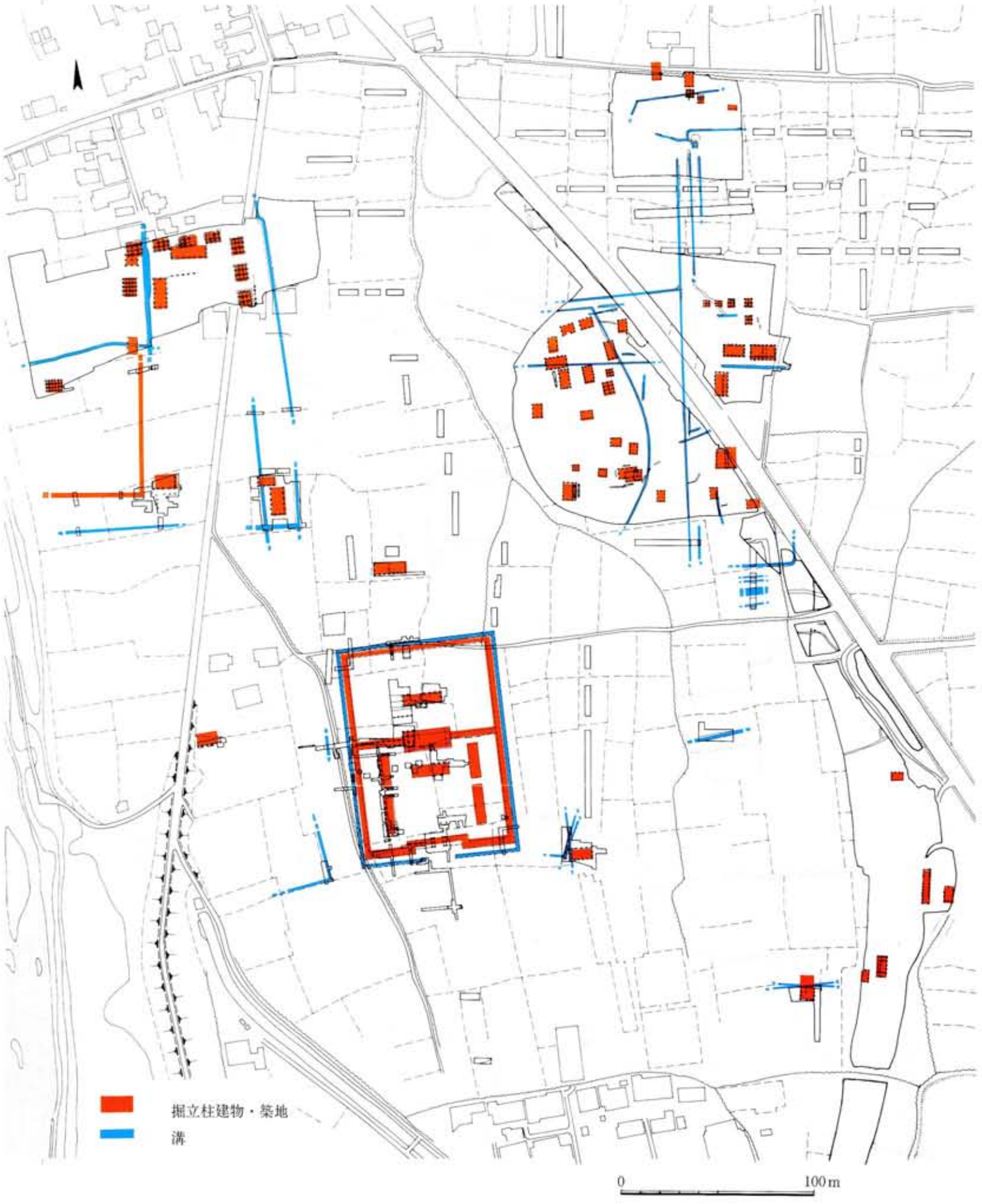


Fig. 218 肥前国府関連主要遺溝配置図（1/400）

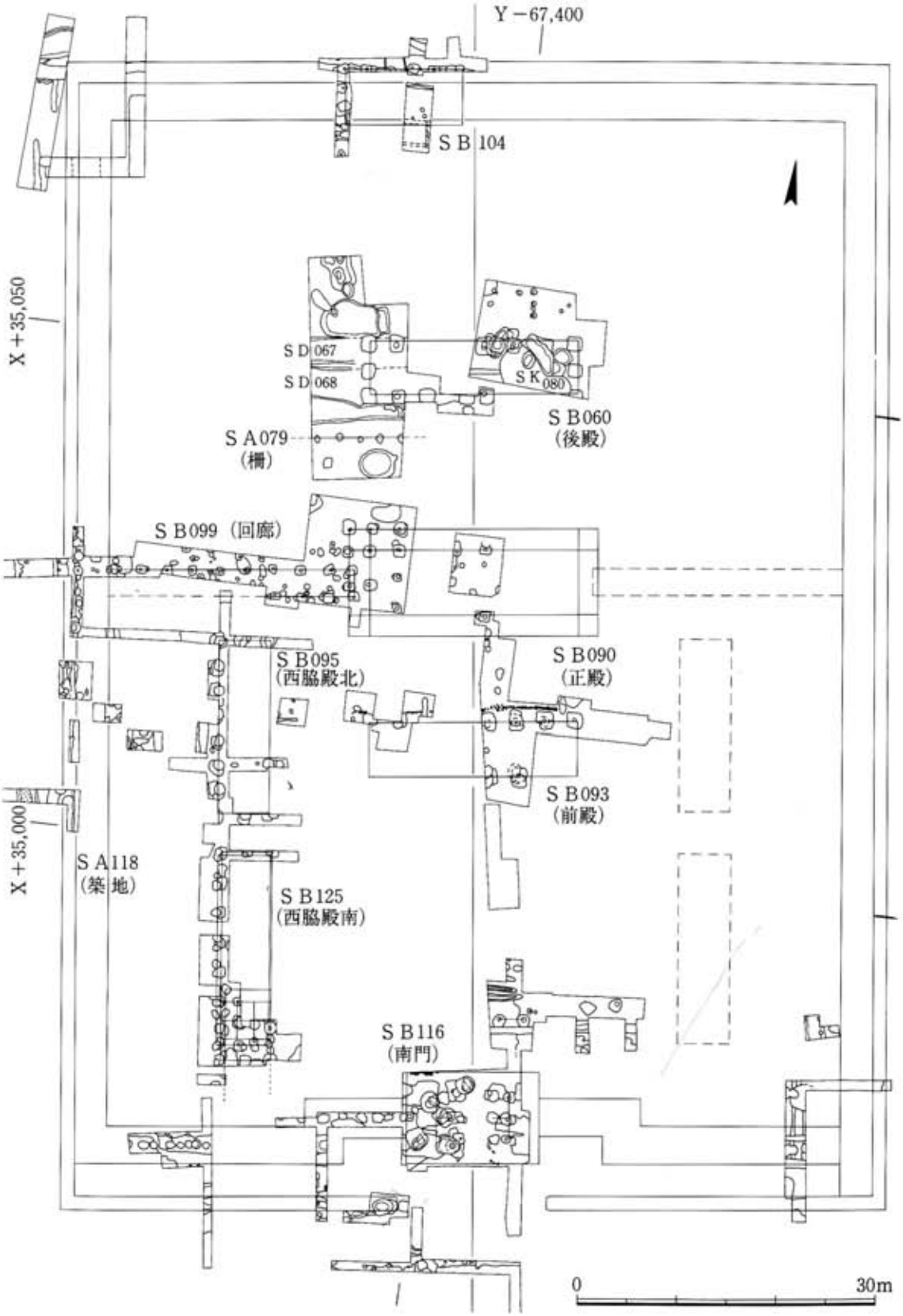


Fig. 219　肥前国庁跡（1/600）

この国庁跡は四周の溝の中心で測って南北104.5m、東西77.2mの規模をもち、溝と築地に囲まれて前殿・正殿・後殿が南北中軸線上に並び、前殿の左右に各2棟の脇殿を配する。また正殿の左右には回廊が取り付いて郭内を前後に2分し、南門は築地を内に曲げて八脚門を設ける。北側に後門が想定されることもあるが、問題の建物の位置・切合からみて疑問である。南北軸方位は7°西に傾く。各建物は前殿と後殿が共に7間×2間で、それぞれ1回づつ柱穴掘形を利用しての建替えが認められた。正殿は身舎部分は前殿・後殿とほぼ同規模の7間×2間で、これに出1間の4面廂が付く。ただし建て替えは行なわれていない。脇殿はいずれも7間×2間で各々1回づつ建て替えを行なうが、西脇殿南棟ＳＢ025の場合は別の建物2棟を切ってつくられている。したがって脇殿南棟にかぎっては創建当初から存在したとは必ずしも断定できず、あるいはこの部分では当初楼閣風の小規模建物が造られたことも考えられるという。南門は2回建替えが認められ、最後には礎石使用に変わっている。このような肥前国庁の建物配置、とくに脇殿が整然と並ぶ盛期の姿は大宰府政庁のⅡ期に類似するものであり、その建設にあたって大宰府の規制がつよく働いたことを窺わせる。

時期については問題が多い。手掛かりになるのはＱＦ16発掘区の遺構の切合いで、大宰府周辺の土器編年でいえば、後殿ＳＢ060が8世紀中頃のＳＤ607・ＳＤ068溝を切り、10世紀初頃のＳＫ080土壙に切られている。他に前殿や脇殿等の柱穴抜跡などから出土していた資料も若干あるが、8世紀中頃の上限を示すにとどまる。また国庁域から出土する土器は全体として8世紀が主体を占め、9世紀では激減しながらも10世紀初頃までのものがみられる[03]。したがって、この国庁が創建当初から前殿・正殿・後殿が揃ったものであったと考え、大宰府周辺の土器編年[03]でいえば、上限は8世紀中頃となる。出土瓦に鴻臚館式がみられ、一帯から7世紀後半～8世紀前半の土器が出土してすることもあって、従来この国庁の創建時期は8世紀前半とされてきたが、そこまで遡るかどうかは土器の年代観も含め再検討する必要があろう。もし8世紀前半あるいはそれ以前に国庁が造られたとすれば、それは別の形を考えてもよい。廃絶時期についてきおそらく9世紀のうちであろうが、最後段階の建物配置がどのようなものであったかは不明である。ただ途中、前殿・後殿・脇殿が1回づつ建替えられているのに郭内の最主要建物である正殿と回廊にその痕跡が認められれないのは、あるいは2期目の建替えで礎石使用に変わったためかと推定する。完掘したわけではないので、この国庁跡についてもまだ問題が多い。

次に国庁跡近辺で検出された主要な遺構をみると、東南隅の通称「かわら塚」では5°西傾した5間×3間の東西棟ＳＢ008がある。西側では国庁の外郭を示す可能性のある溝ＳＤ115のほか、西南隅ちかくでは南北中心軸が16°西傾して直角に曲がるＳＤ166溝、やや離れて10°西傾すると東西棟ＳＤ168がある。とくにＳＤ166の角は現在の地割りともよく合致しており、何らかまとまりのある施設を区画する溝の可能性があるものとして注意する必要がある。

北側では7°西傾の5間×3間東西棟ＳＢ104が国庁北辺築地に切られ、さらにその北に、

2°30′西傾の7間×3間東西棟ＳＢ001がある。ＲＧ33発掘区では4°西傾の5間×3間南北棟のＳＢ004ほか[04]があり、このＳＢ004と方位も一致させてＳＤ022東西溝がＳＤ021南北溝に直角につき当る。2条の溝は同時期とみられ、ＳＢ004ほかの建物等を区画するものであろう。なお、ＳＤ022は今回報告した調査区のＳＤ205に向うが、方位からみて継がるとは思われず、方向性という点ではむしろＳＤ208にちかい。またＳＤ021はＳＤ020を切るが、このＳＤ020は8°西傾して北に向かいＳＢ239ほか総柱南北棟3棟の西側柱列の基線にほぼ一致し、かつＳＤ205とも方位をほぼ揃えるものであること、さらにＲＧ発掘区内ではＳＢ004西北側の正方位建物ら切られていることを注意しておきたい。

ＱＢ09発掘区では2°西傾する東西棟ＳＢ171があり、その西側の築地ＳＡ155がみつかっている。このＳＡ155は南北軸が約3°西傾し[09]ＱＢ09発掘区の中で直角に曲がり、北側はＱＢ12発掘区に至る66m以上とみられ、西側はＱＢ11発掘区の至る37m以上を測る。国庁跡以外では唯一の築地遺構であり、これが何を区画するものであるか重要な課題であるが、内郭が未調査のため性格は不明である。方位という点では今回報告したＳＢ007総柱建物がこれにほぼ等しく、近接した位置関係にあることが注意される。南側にＳＤ141東西溝がある。

今回報告の調査区については既に述べたとおり、第Ⅰ期にはＳＤ205に東側を区画されて4間×3間の総柱建物7棟が全体に9°西傾して鍵形に並ぶ。正倉群に当たるとみてよいであろう。時期はＳＤ205溝埋土土器から8世紀前半と推定する。第Ⅱ期には6間×2間ま長棟2棟がほぼ正方位に沿って第Ⅰ期とは逆鍵形に並び、西側に4間×4間の総柱南北棟を配す。第Ⅱ期の建物は切合いの事実からみて第Ⅰ期のそれとは並存せず、時期はＳＤ208埋土土器の示す年代にちかいとすれば8世紀後半と推定される。第Ⅲ期ではおそらく平安時代に下って、小規模な建物2棟が造られるが、もはや官衙的な性格のものではなくなっている。

このように国庁の近辺では7間×2間、6間×2間、5間×3間といった大型長棟や正倉と推定される大型倉庫群が多く分布するほか、明確な区画溝や築地があって官衙群を形成しており、相互の関係および時期について今後、問題とすべき点が多い。ただ、方位については一般的に言われてきた正方位→斜傾方位とは逆に、惣座遺跡で斜傾方位→正方位への順序を確認できたことは、あまりにも基本的なことながら重要な事実として認識する必要がある。惣座遺跡の今回報告地区における建物の場合、西傾群（9°前後）と正方位群、それと中間的な3°前後のものがある（Fig.220）。国庁跡および他の官衙的建物・溝等は、実際並存したかどうかは別として、群として大別すれば7°～9°西傾するものと正方位をもつものとのいずれかに属する場合が多く、時期の前後もおのずから推定できるが、ＳＸ155のように中間的な方位をもつ遺構あるいはＳＤ166のように極端な傾きを示す遺構についてはどこに位置づけられるのか、今後の課題として残される。これは国庁跡の変遷に関わるとともに、奈良時代における国府の地割および機能にも関わる問題である。

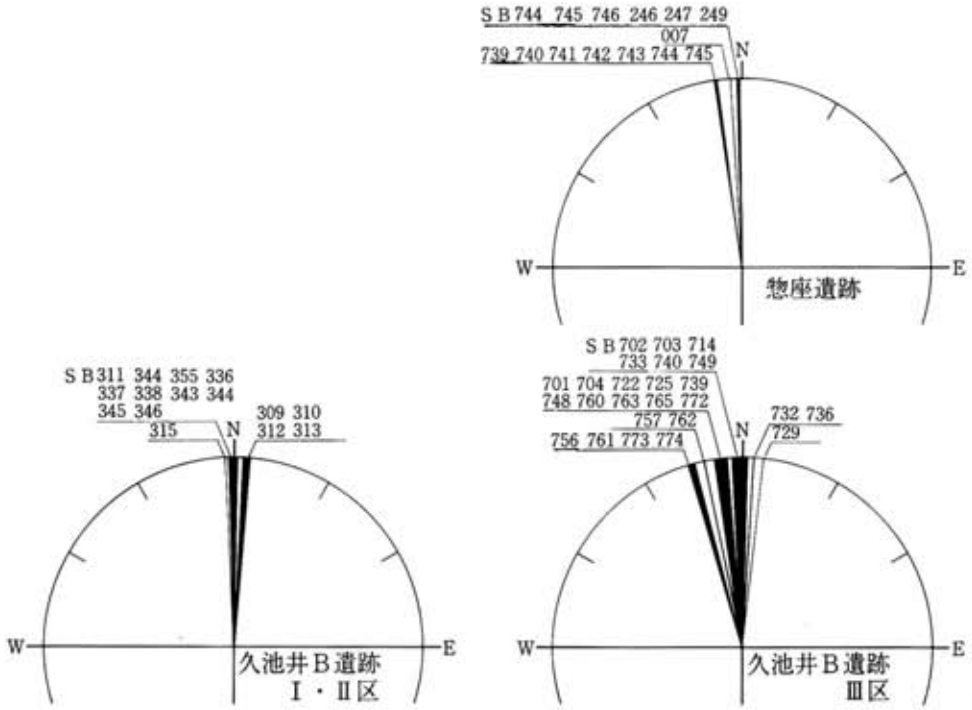


Fig. 220　惣座遺跡・久池井Ｂ遺跡の掘立柱建物跡方位

久池井六本杉遺跡　国庁跡から北々西約250mに位置する。惣座遺跡と同じ微高地上にあって嘉瀬川のまさに渓口を占める。昭和63年の大和町教育委員会の調査で奈良時代の掘立柱建物跡12棟ほかが検出されており、ちかく報告書が刊行される予定である。ことに盛期の建物群は壮大で、掘込地業の基壇をもつ７間×３間および７間×３間の東西棟２棟が東西に並び、その南側前面にも基壇造の6間×２間の東西棟が配されており、柱穴掘形も大きなものは１辺が２mちかい。調査者はこの盛期の建物群の時期を８世紀前半と推定しているようである。方位は上記３棟が約11°西傾、他の９棟のうち８棟は７°～12°までのうちに収まるが、１群中もっとも新しいとみられる四周に溝を巡らせた10世紀に下る１棟のみ約３°西傾して正方位にちかい。国庁跡からこれだけ離れ、しかも国庁跡の建物をしのぐほどの大規模な建物群が整然と配されて見つかったのは予想もしなかったことである。国府の中の官衙的建物であることは間違いないがどのような機能をもつかは不明。米倉説・高橋説いずれの推定府画からもは外れる。

久池井Ｂ遺跡　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の様相は既に述べたとおりであるが、ここでは建物跡および溝等の全体的な配置を中心にまとめておこう。久池井Ｂ遺跡は惣座遺跡とは低地帯によって区別される別の微高上にあり、その南端は途中一旦途切れて惣座Ｂ遺跡に続く。旧地形および確認調査を含む発掘調査の結果からみるとⅠ～Ⅲ区で検出した遺構をもって久池井Ｂ遺跡の主要部分のほぼ全容と考えてよいと思われる。

建物跡は、まず方位を基準にしてみると、正方位にちかいもの、7°前後西傾するもの、15°前後西傾するもの、のおよそ3群があり、その他少数の中間的なものやわずかに東傾するものがある（Fig.220）。時期の判明する建物では8世紀前半にⅡ区でＳＢ762・ＳＢ763・ＳＢ765の西傾棟が造られ、8世紀後半にはⅢ区でＳＢ740、Ⅱ区でＳＢ343ほか多くの正方位棟が造られる。したがって惣座遺跡でみた西傾群→正方位群への建物群の方位変化はここでも基本的に同一であると考えられる。これら建物群のうち、配置に規格性をもつのはⅡ区の一群で廂付を含むＳＢ343～ＳＢ345の大型長棟3棟が正方位に沿って鍵形に並び、北側背後に2間×2間の倉庫5棟がこれも整然と並ぶ。Ⅲ区のＳＢ702もこの一群に含まれる可能性があり、その場合はＳＢ345との間の現在国道263号線下にもう1棟南北棟の存在を考えてよいかもしれない。それ自体で完結した何らかのまとまりある官衙的建物群であることは確かであり、既に国司クラスの館あるいは字五本杉とは別の国庁とする見解も出されている[98]。

Ⅲ区の建物群はⅡ区の一群との間に約40m幅の空閑地帯をもって密集するが、Ⅱ区に比べて全体に規模が劣り配置も規格性に乏しい。5間×3間あるいは5間×2間といった大型長棟5棟のうち8世紀前半のＳＢ763・ＳＢ765は7°～8°、ＳＢ761は15°大きく西に振れ、これら3棟は調査区の北側にかたまるが、とくに規格的な配置をもつわけではない。残る2棟は調査区の南側に位置する8世紀後半の正方位群の建物で、ＳＢ702が前述のとおりⅡ区の一群に含められるとすれば、ＳＢ740のみ離れて存在することになる。北辺にＳＢ773とＳＢ774が並びはするが3間×2間の比較的小型の建物である。このⅢ区で多いのは3間×2間の構造もつ官衙的性格とは言い難い建物で、Ⅰ区の建物もこれに似る。

これら建物全体としての存続時期は8世紀のうちに収まり、一部下ったとしても9世紀初である。土壙墓の存在からも明らかなように、9世紀末以降はⅡ・Ⅲ区で点々と墓地が造られ、私権が入り込んだ状況を呈するようになる。

その他、井戸はＳＥ302が飛び抜けて大型で側溝をもつ。道がⅡ区建物群の西脇に通じており、おそらく並存したであろう。溝はⅢ区のＳＤ712がⅠ区まで続くほか、何らかの区画を示すと見られるＳＤ780・ＳＤ753・ＳＤ721等がⅢ区を中心に奈良・平安時代に多く掘られている。その中ではⅢ区でＳＢ765を切り8世紀後半と推定されるＳＤ753東西溝が方位を2°南に傾け、これとＳＤ788が南北間隔約108m、すなわち1町に等しいことが条里地割との関係で注意される。

久池井Ｂ遺跡で現在見る地割は惣座遺跡とは異なり、南北軸が正方位あるいは部分的にはわずかに西傾するが、大局的にみれば東方台地に拡がる正方位条里に含まれるべきものである。8世紀後半の正方位建物群はこの地割に関連するとみられ、その分布はⅢ区南半からⅠ・Ⅱ区を覆う。惣座Ｂ遺跡の建物群も、分布は粗く全体の配置は不明であるが、基本的にはこうした正方位建物群を主体とするものであろう。

東山田一本杉遺跡　国府期の大規模な建物群は嘉瀬川の西でも、惣座遺跡と向かい合う東山田一本杉遺跡で存在が確認されている[88]。ここでは全体は不明ながら、両側に溝をもつ基底幅10尺の築地に囲まれ、廂府を含む7間×4間、5間×4間、5間×3間など正方位に整然と配置された大型建物がみつかり、円面硯や緑釉陶器、刻印土器などが出土している。また、その西側の西山田三本松遺跡は元々東山田一本杉と一連の遺跡[89]で多くの倉庫建物等が検出されている。出土した墨書土器の中に「廐（うまや）」と読めるものがあり、風土記にいう佐嘉駅が国府に付随してこの近辺にあることをにおわせ興味深い。ただし、これら遺構が国府との関係でどのような機能を果すものであるかは今のところ明らかになし得ない。

国分寺跡・国分尼寺跡　国分寺跡は国庁跡の東南東約1.3kmの大字尼寺字真島にあり、現在でも建物基壇や礎石が一部で露出している。確認調査の結果[90]、寺域は方2町とみられ、これを築地で囲んだ中に中門をもつ回廊が巡り、回廊内に塔・金堂・講堂等の配置が推定されている（Fig.7）。南北中軸方位は4°28'西傾する。しかしながらこの復原案についてはまだ不確定な要素が多く、解決すべき課題が多い。例えば建物の配置、門の位置もそうであるし、寺域もはたして不等四辺形かどうか。また方位が4°以上傾くのは同一条里の中で同時期に造られたであろう国分尼寺と異なるし、高橋氏がいう1町方格地割とも違う。これは国分寺の創建がこの地域の条里施行以前であることを示す微妙なズレであるのか、それとも我々の方位の把握が間違っているのか、さらに国府との位置関係はどうか、等々についてである。

国分尼寺は国分寺と約2町間隔をおいてその西に位置する。寺域は方1町と推定され、大和町教育委員会が昭和59年に実施した調査で両側に溝をもつ築地の東北隅が見つかっている。埋土中出土の多くの墨書土器は法華経の題目を写したものであり、中に「尼寺」と書いたものがみられることなどから、これが国分尼寺の遺構であることは疑いない。方位は約2°西傾する。条里との位置関係では、高橋氏が示した条里の坪境とこの築地とは北辺で1筆分喰違いがあるようであり（Fig.217）、これをどのように解釈あるいは修正するのかは今後問題とすべきところである。

その他の関連遺跡　国分寺跡の南を通加する西海道跡は木下良氏によって中原町から小城町に通じる20数kmの直線道の痕跡を残すことが明らかにされている[91]。久池井一帯でも現在の地割によく残っている。ただ、この西海道は巨視点にみれば確かに直線的に12°前後南に傾いて佐賀平野を横断するものであるが、部分的にみれば案外曲折があり、例えば尼寺跡の南側でも2ケ所でわずかな屈折が認められる（Fig.216）。所々屈折しながら全体として南に下がって行くようであり、したがって部分的には傾斜は10°以下で緩く、国庁跡の正方位の対する傾斜と比べてさほど極端にかわるものではない。西海道は神埼郡吉野ケ里遺跡をも通過しており、調査で8世紀前半の年代が考えられている。

その他の関連する重要遺跡は多いが、とくに64年12月の大和町教育委員会の調査で、国庁跡

東方の台地上にあたる久池井字宝満で初めて方形掘形の大型建物が一部検出されたのは注目に価する。建物はほぼ正方位をとるようであり、この一帯が高橋氏のいう1町方格地割の正方位条里をもつ国府推定地の一つであることから、今後の周辺調査に期待がもたれる。

(3) 肥前国府跡の変遷

以上述べてきた調査の現状から、あくまで現時点で、肥前国府の変遷をどのように把えることができるか、肥前国府に関する各氏の所論をふまえながら以下にまとめてみる。

まず創設期についてであるが、高島忠平氏は7世紀末～8世紀初に最初の国府が出現したと考え、これをⅠ期とし、柱間が天平にのらず方位が一定しない妻3間の建物をこの時期に当てる。そしてⅡ期の初め8世紀前半に字五本杉に国庁が造られ全体の整備が進んだとし、8世紀の律令盛期におけるそのような動向は大宰府の政庁出現期に似ており、大宰府の整備と軌を一にするものではなかったか、と述べている。一帯の建物の出土状況からみると、たしかに高島氏のいうⅠ期に早くも国府が出現した可能性は必ずしも否定できない。明確な府域は設定されなかったとしても、少なくとも何らかの形で行政機能を果した建物等の存在は可能性として考えてもよいであろう。しかしながら今のところ、明確に8世紀初以前に遡る建物等は確認されておらず、この問題は将来の課題とせざるを得ない。ただし高島氏がⅠ期に挙げた建物は方位が正方位群に含められるものを含み、また柱間も8世紀後半にさえ天平尺にのらない妻3間の建物が存在することであるから、それをもって直ちにⅠ期の存在を言う根拠にはならない。

国庁は8世紀前半、あるいは遅くとも8世紀中頃には確実に存在する。ところがその立地たるや西海道から遠く、水害の危険にさらされた嘉瀬川沿いの狭い微高地上のしかも突端といった最悪の条件としか思われず、唯一便があるとすれば嘉瀬川の水運だけである。国庁の建物配置は確かに整然としているが、このような立地条件でははたして国府としての府域まで設定したかどうか疑わしい。国庁跡の方位にちかい、あるいは西傾方位の周辺官衙は今のところ惣座遺跡がのる嘉瀬川沿いの微高地上にほぼ限られ、他は久池井B遺跡の西辺Ⅲ区に一部存在するだけで、殆ど拡りをもたない。この点からいうと、米倉氏の推定した初期国府域は実体として殆ど意味をなさず、したがって字五本杉に国庁が出現した当初には、木下氏が言うように必ずしも明確な府域は想定せずともよく、むしろ方向町といった府域は、少なくとも惣座遺跡がのる微高地上には存在しなかったとみた方がよいと思われる。ただし国庁の方位にちかい建物、あるいは10°前後西傾する建物・溝が離れて存在する事実は一帯の区画・配置に何らかの基準が存在したことを示すものであって、それまで否定すべきではないであろう。この時期の遺構がやや西傾するのは西海道に規制されたか、または河川および地形の走向に制約されたか、いずれかの条件下で基準が定められた結果とみたい。

8世紀後半になって国府の本格的な整備が実施される。この際の整備は相当広範にわたり正方位を基準とした条里制を施行したもので、高橋氏が明らかにしたように久池井一帯の台地上

で1町方格地割が方7町の範囲を中心にみられ、さらに、1町方格とは言えないが正方位にちかい地割が国庁の北側まで及んでいる。これは正方位群に含められる建物遺構の分布ともよく合致しており、惣座遺跡・久池井六本杉遺跡・久池井B遺跡の正方位群建物群はこうした8世紀後半の地割改変以後に登場したものであろう。さらにいえば、この正方位を意識した地割りは嘉瀬川西岸の東山田遺跡周辺まで及んだ可能性もある。

ところが、この時の地割改変に伴って国庁も東に移転したかというと、必ずしもそうは言えない。国庁跡にみる建替の実態からいうと少なくとも8世紀末頃まではそのまま存続したようであり、近辺の惣座遺跡・久池井B遺跡でも8世紀後半になお官衙的建物の建設は盛んである。そして何よりも、高橋説国府では国分尼寺の位置がどのようにも不都合で、字宝満周辺に何らかの官衙的建物のまとまりは予想できるが、今のところ国庁存在の明徴をみない。したがって現状では米倉氏が可能性として述べたように、新府域（推定府域の当否は別として）設定後も字五本杉の国庁はしばらく残り利用された、とみるのが最も妥当であろう。高橋氏の挙げた先のいくつかの可能性でいえば2)にちかく、1)は否定する。それならばこのたびの大規模な地割変更は何のためであったか、という疑問は当然出てくるが、今は明確な説明の根拠をもたない。この点では高橋氏のいう3)が今後検証すべき課題となろう。高橋説国府、米倉説後期国府、あるいはその他、いずれにせよ国府域はまだ画定できないし、あるいは木下氏のいうように府域の画定にあまりこだわる必要がないのかもしれない。

字五本杉の国庁が9世紀に入っても同じ地に存続したかどうかは不明である。ただし惣座遺跡・久池井B遺跡の官衙的建物はほぼ8世紀のうちに終わり、国庁跡でも9世代の出土遺物は激減するらしい。そうしてみると、この国庁が9世紀に存続した可能性は必ずしも否定できないまでも、一方では9世紀に別の地に移転したとの説も改めて浮上してこよう。これについては様々な可能性が考えられ、例えば突飛ではあるが、東山田遺跡の築地遺構を新国庁とみて、「呼岐国府」は嘉瀬川西岸という地理区分からこれを小城郡に含めた憶測することもできるし、最も可能性の高いものとしては高橋説の府域内にこれを求めることもできる。ただしその場合は国府の移転というよりは、実質国庁と関連官衙の移転ということになろう。また移転があったとすれば、理由はは上国昇格云々よりも嘉瀬川による東岸浸蝕の危険や西海道に遠いこと、あるいは新条里地域との連絡の便をはかったことなどが考えられるが、あくまでそれは9世紀に国府ないし国庁の移転を仮定しての話しである。

9世紀末までには字五本杉の国庁は廃絶してしまっている。10世紀以降の律令制衰行期に肥前国府がどのような命運を辿ったかは今のところ殆ど不明である。

以上を要約して肥前国府跡の変遷を次のように推論する。まず、7世紀末～8世紀初には区画の定まらない国府が出現した可能性もあるが、推定の域を出ない。8世紀前半あるいは遅くとも8世紀中頃には字五本杉に国庁が整然たる姿で登場し、惣座遺跡の微高地を中心に周辺官

衙が形成される。ただし明確な府域をもたない。西海道の整備はこれ以前であろう。8世紀後半に久池井の台地を中心に正方位条里が施行されるが、字五本杉の国庁跡はしばらくはそのまま利用される。国分寺・尼寺の創建もこの時期であろう。正確な位置・規模は不明ながら、これが新たな府域にあたる。9世紀になっても字五本杉の国庁跡は存続したかどうかは確証はないが、別の地に移転した可能性がつよい。

註

1 肥前国司の初見は天平勝宝2年（750）の吉備真備で、名目だけにもせよ弘安9年（1286）まで続く。
2 吉田東伍『大日本地名辞典』上巻1907
3 木下良「災害による国府の移転」（『歴史地理学紀要』18）1976
4 日野尚志「西海道国府考」（『太宰府古文化論叢』上巻）1983
5 樋渡敏暲「肥前国府の研究について」（佐賀県教育委員会『肥前国府跡Ⅲ』）1985　樋渡氏のいう川上は嘉瀬川東岸になるが、現在の川上は嘉瀬川西岸にあり、正保4年(1647)肥前国絵図〈鍋島家文書〉でも嘉瀬川渓口西岸を示している。
6 米倉二郎「郡郷と条里制」（『佐賀県史』上巻）1968
7 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」（『史林』66巻1号）1983
8 高橋誠一「肥前国府に関する再検討」（『人文地理』）1984
9 木下良「印鑰社について」（『史元』17）1973
10 木下良『国府』教育社歴史新書〈日本史〉44　1988
11 佐賀県教育委員会『肥前国府跡Ⅰ』1978
12 七田忠明他「肥前国府跡Ⅲ」佐賀県教育委員会1985
13 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」（『九州歴史資料館研究論集2』）1976、川述昭人他『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会1989　その他
14 『肥前国府跡Ⅰ』佐賀県教育委員会1978では7間以上としているが5間と解する。なおこの区のＳＢ002・ＳＢ003・ＳＢ005など小型で主軸斜傾のつよい建物は今日みると弥生時代掘立柱建物の可能性がつよい。ＤＢ発掘区のＳＢ138なども同様である。
15 註12では7°10′西傾としているが、実際は3°程度しか傾かない。
16 米倉氏は註7で後期国庁の可能性もあるとしたが高橋氏は註8でこれを否定。高島氏は註21でⅠ期の国庁あるいはⅡ期以降の国司館か、とした。
17 本田秀樹「東山田一本杉遺跡」（佐賀県教育委員会『九州横断道関係埋蔵文化財調査概報』7）1984
18 副島正道「西山田三本松遺跡」（佐賀県教育委員会『九州横断道関係埋蔵文化財調査概報』10）1988
19 大和町教育委員会『肥前国分寺跡』1976
20 木下良「空中写真に認められる想定駅路」（『びぞん』64）1976
21 高島忠平「肥前国府と肥前国の動き」（佐賀県教育委員会『肥前国府跡Ⅲ』）1985
22 国庁跡の南側で現在地割が斜傾するのは、このときの地割改変が国庁域までは手をつけなかったことを示すものであろうか。なお木下氏は註10で一般に国府と条里は必ずしも厳密には一致せず、肥前国府の場合も条里地割と関係ないと述べているが、発掘調査の結果から総体的にみれば、むしろ関係がつよく、高橋氏が註8でいうように少なくとも国庁域では歴史地理学が伝統としてきた地割論が地下遺構を論じる際になお有効であることを示す。

図　　版

惣　座　遺　跡

惣座遺跡　肥前国府跡周辺航空写真〈上北〉

PL. 2

1

2

惣座遺跡　遺跡全景航空写真〈上東〉

惣座遺跡

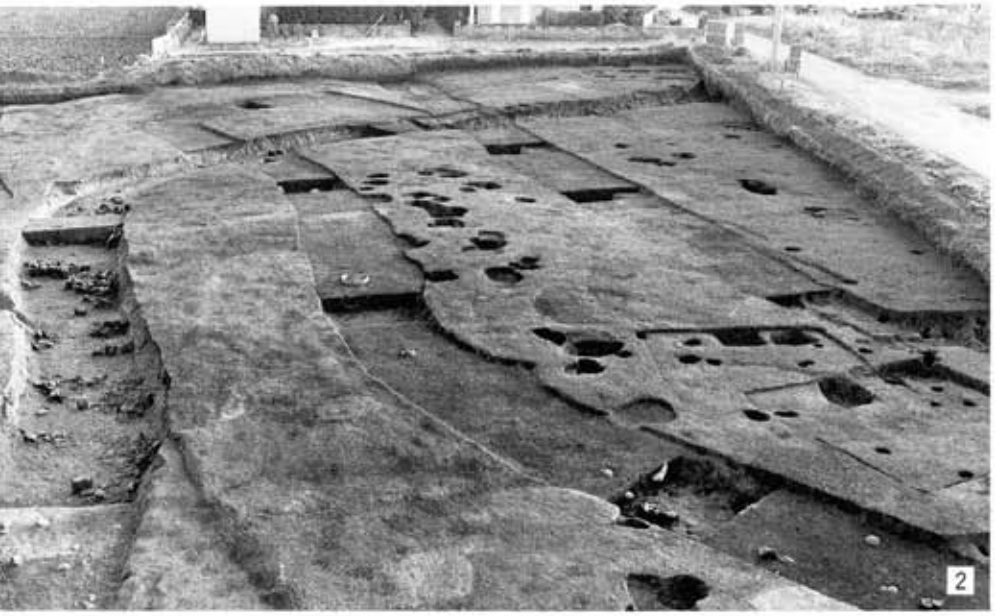
1．遺跡全景航空写真〈西南から〉

2．同　　〈西から〉

3．同　　〈北から〉

惣座遺跡　1．遺跡全景〈東から〉

2．　同　〈西から〉



惣座遺跡　1．遺跡東側航空写真〈南から〉

2．遺跡東側〈北から〉　3．遺跡東側〈東から〉

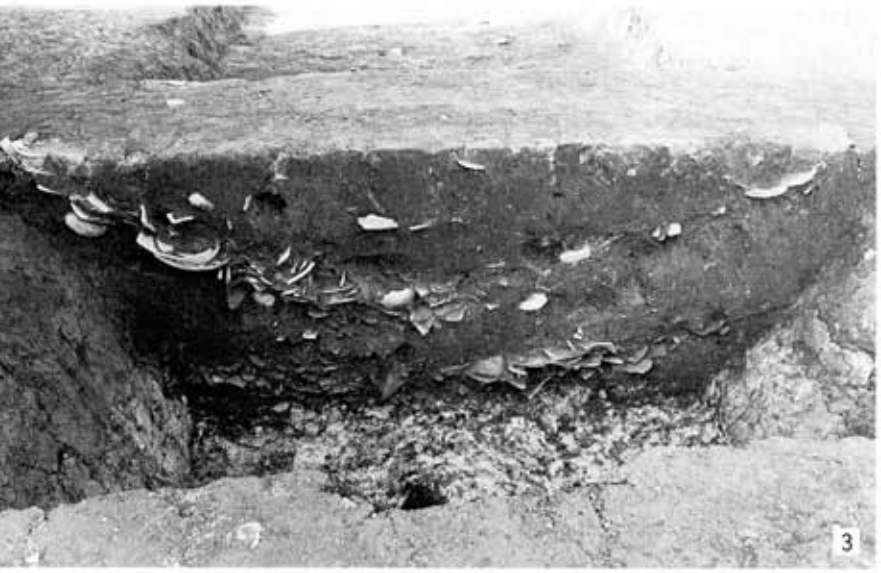
惣座遺跡

1．SD019 溝〈西から〉

2．SD019 溝

　才1突出部〈東から〉

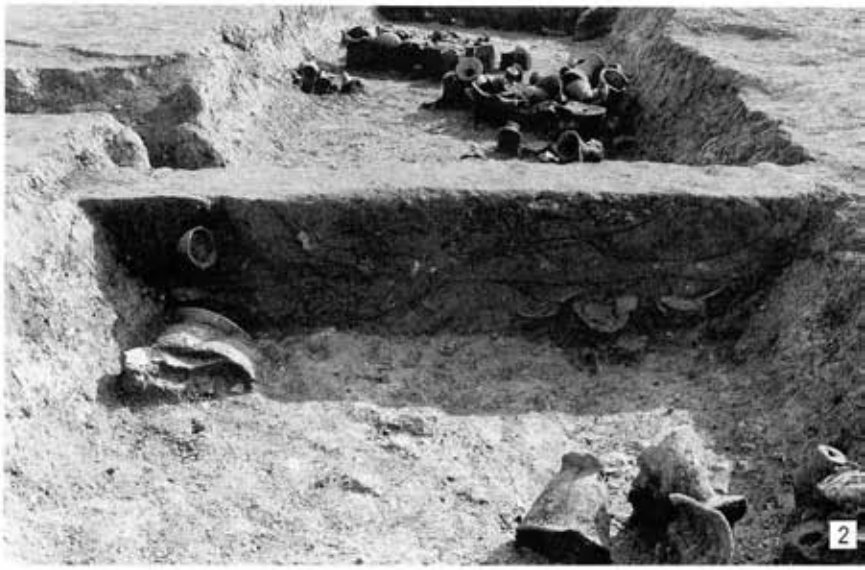
3．　　同　　〈北から〉



惣座遺跡　1．SD019 溝西端断面〈東から〉

2．　同　西端2G区遺物出土状況〈北から〉

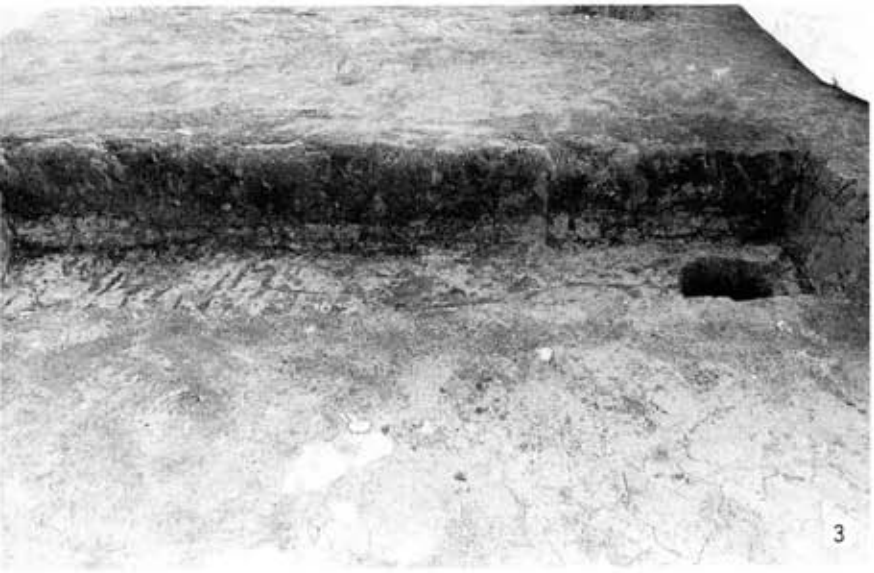
3．　同　d断面トレンチ西壁〈東から〉



惣座遺跡　1．SD019 溝南辺東端遺物出土状況〈東から〉

2．SD019 溝東辺g断面南側〈南から〉

3．　同　g断面北側〈南から〉



惣座遺跡

1．ＳＤ207 溝ａ断面
〈西から〉

2．同　　ｃ断面
〈西南から〉

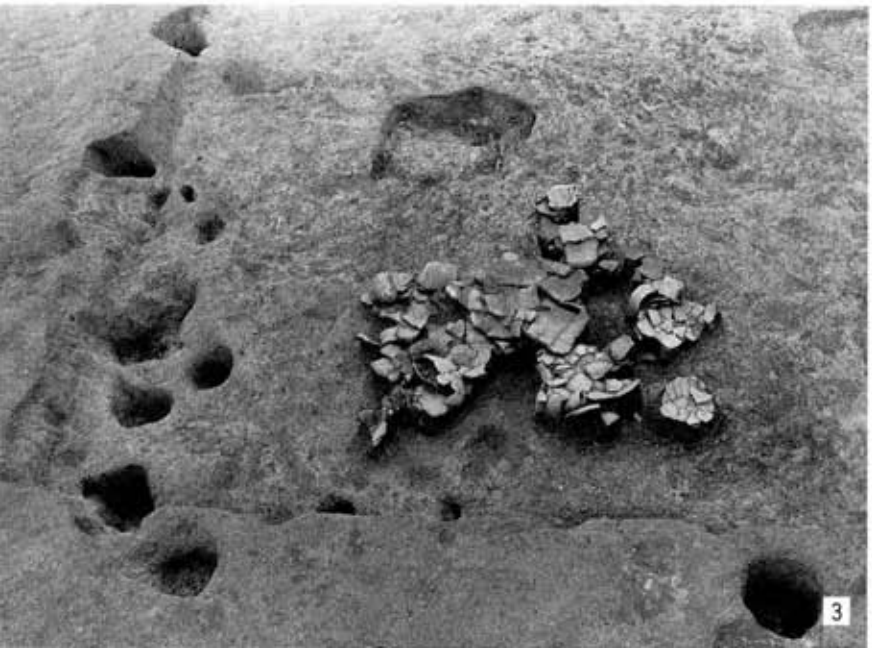
3．ＳＤ204 溝遺物
出土状況（ｈトレ）

惣座遺跡

1．ＳＢ212 竪穴住居跡
〈北から〉

2．ＳＢ213・ＳＢ214
竪穴住居跡〈東から〉

3．ＳＢ217 竪穴住居跡
〈西から〉

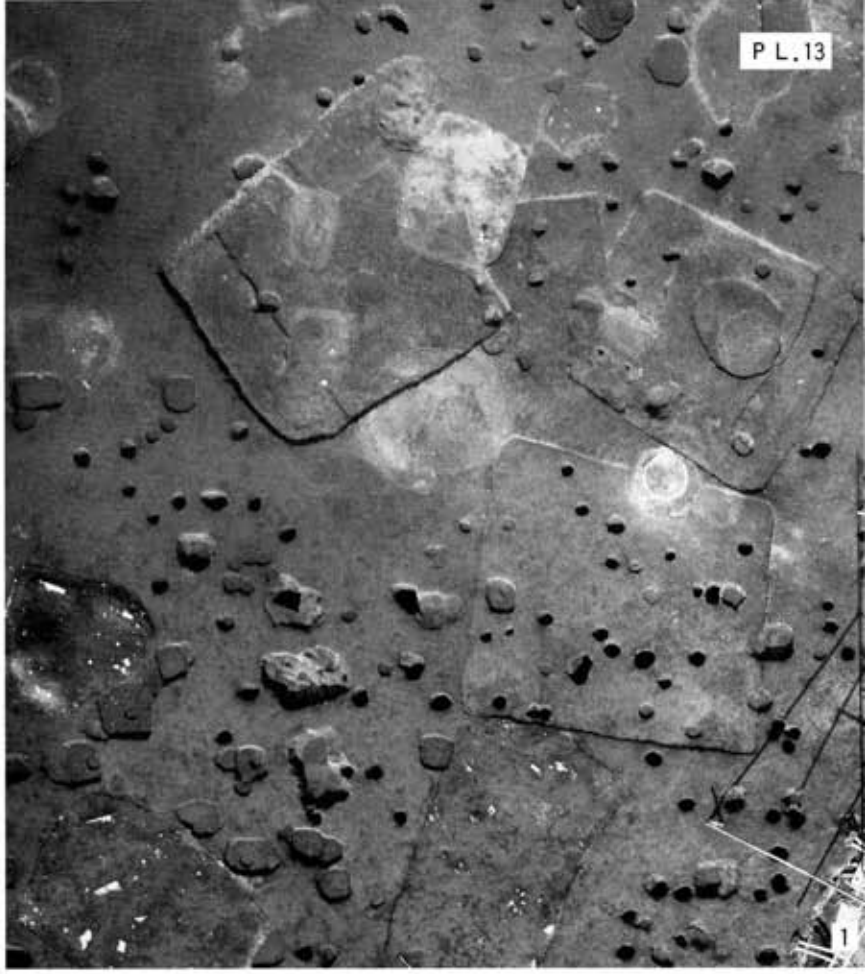


惣座遺跡

1．SB218 竪穴住居跡
〈西から〉

2．SB215 竪穴住居跡
〈西北から〉

3．同　遺物出土状況
〈西北から〉



惣座遺跡

1．ＳＢ220 ～ＳＢ223 竪穴住居跡付近〈上北〉

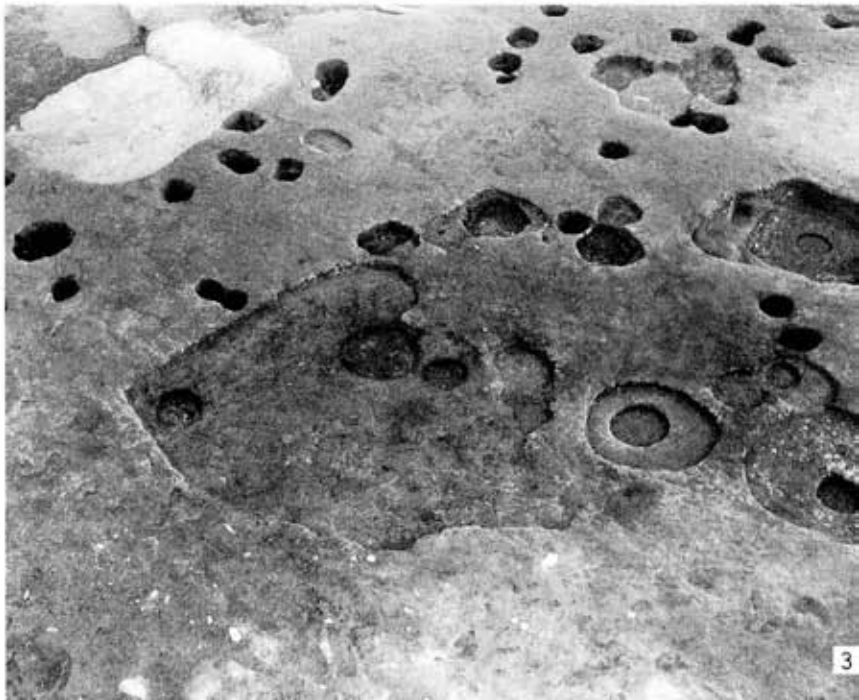
2．ＳＢ220 ・ＳＢ221 ・ＳＢ222 竪穴住居跡〈北から〉

惣座遺跡

1．ＳＢ222 竪穴住居跡
〈東北から〉

2．ＳＢ219 竪穴住居跡
〈西から〉

3．同南壁際の仿製鏡
出土状況〈北から〉



惣座遺跡

1．ＳＢ224 ・ＳＢ225
竪穴住居跡〈南から〉

2．ＳＢ225 南壁側礫群
〈北から〉

3．ＳＢ226 竪穴住居跡
〈西北から〉

惣座遺跡

1．ＳＢ223 ～ＳＢ270
竪穴住居跡〈東から〉

2．ＳＢ266 ～ＳＢ270
竪穴住居跡〈北から〉

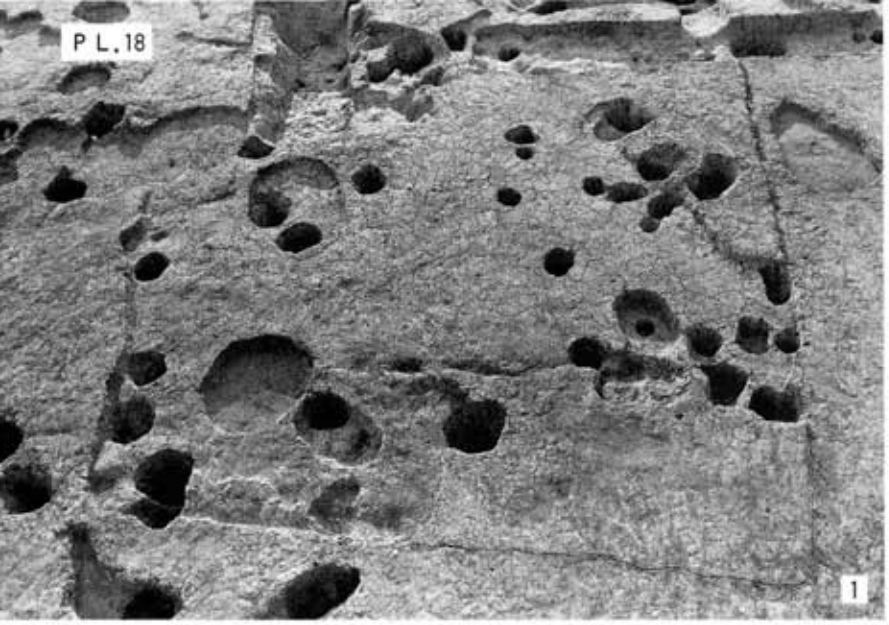
3．ＳＢ263 竪穴住居跡
〈北から〉

惣座遺跡

1．ＳＢ269 竪穴住居跡
〈南から〉

2．ＳＢ268 竪穴住居跡
〈北から〉

3．ＳＢ270 竪穴住居跡
〈北から〉

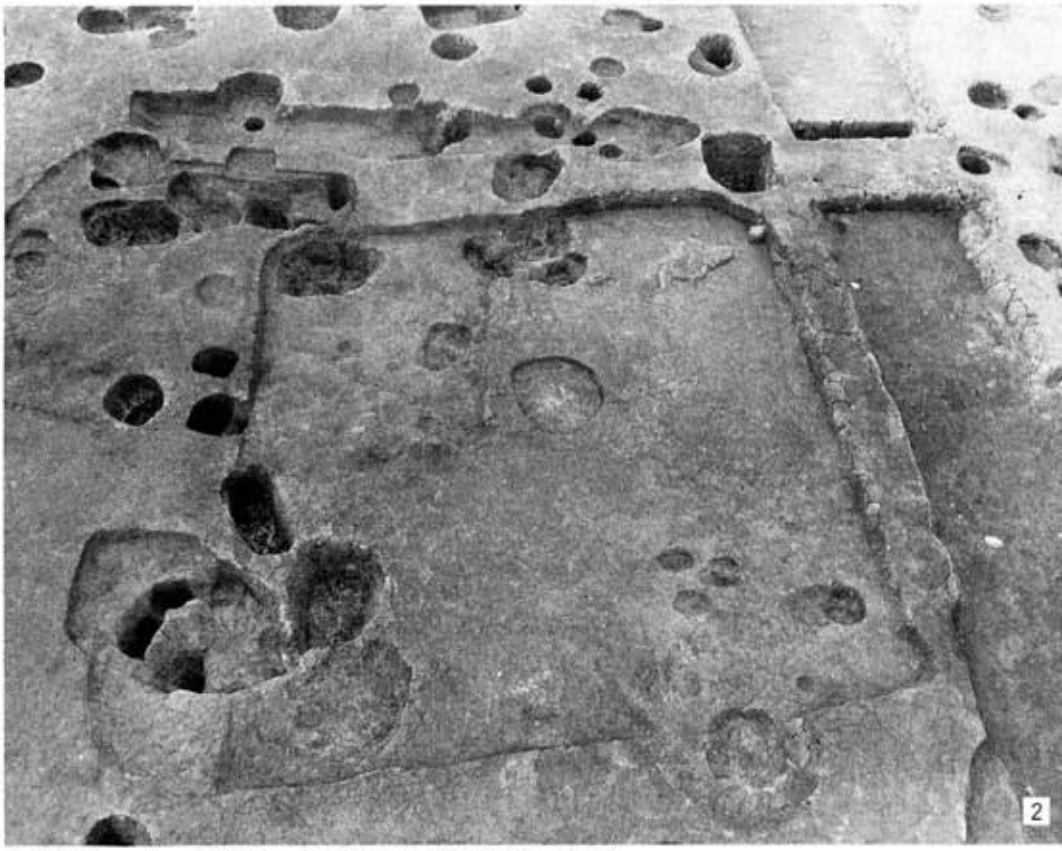


惣座遺跡

1．ＳＢ272 竪穴住居跡
〈東から〉

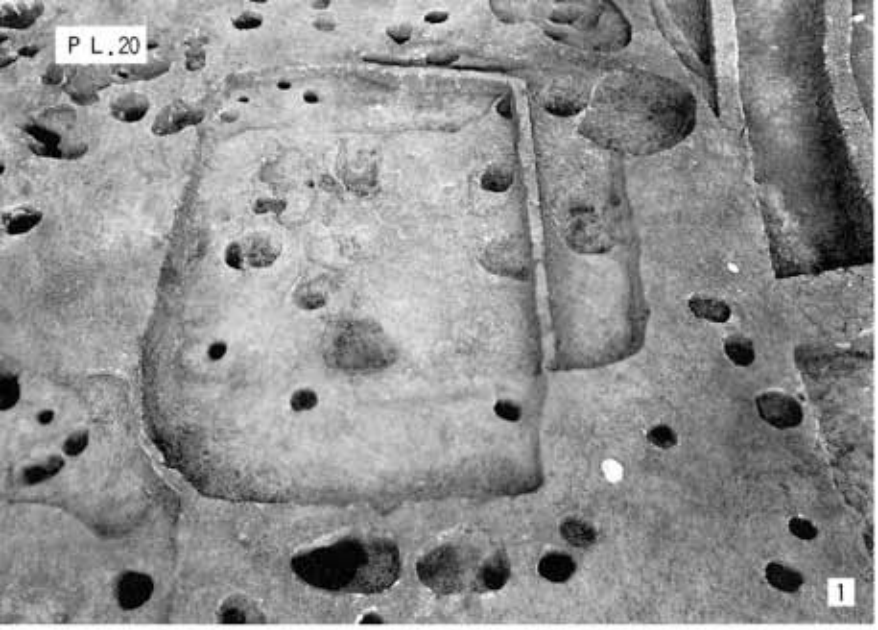
2．ＳＢ271 竪穴住居跡
〈南から〉

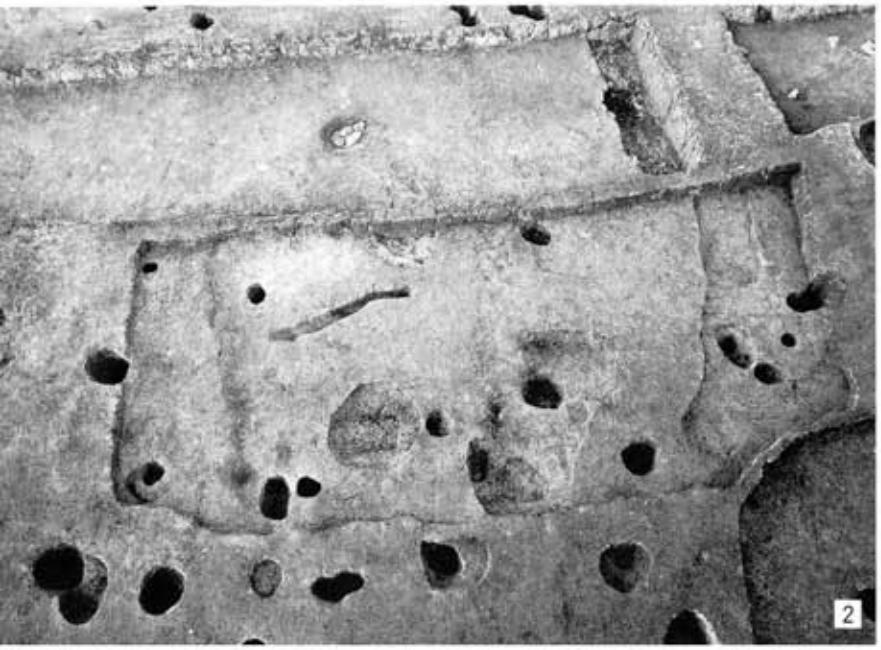
3．ＳＢ262 竪穴住居跡
〈東から〉



惣座遺跡　1．ＳＢ282 ～ＳＢ293 竪穴住居跡付近〈上北〉

2．ＳＢ273 ・ＳＢ274 竪穴住居跡〈東から〉





惣座遺跡

1．SB281・SB282
竪穴住居跡〈東から〉

2．SB282 竪穴住居跡
〈南から〉

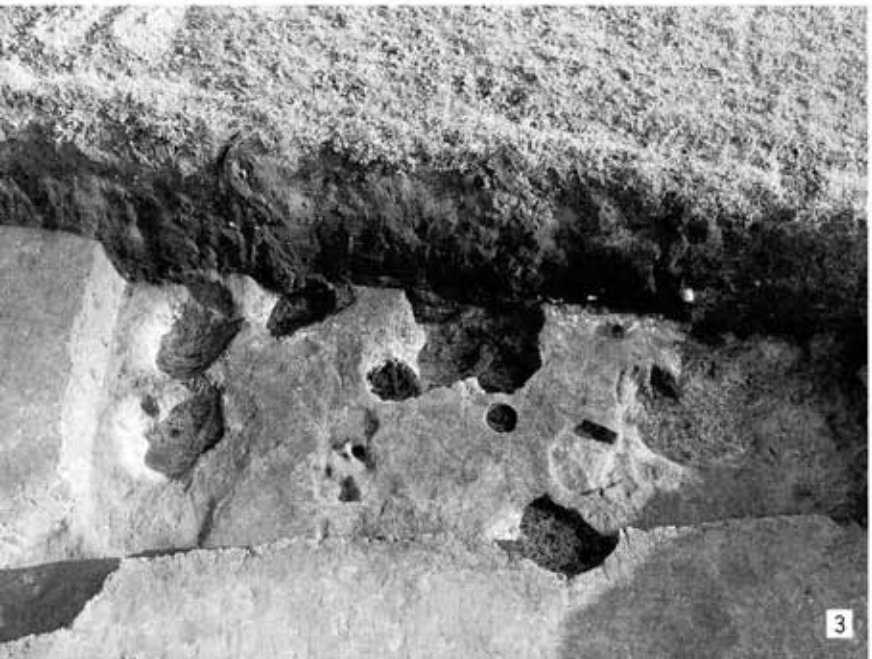
3．SB283 竪穴住居跡
〈南から〉

惣座遺跡

1．ＳＢ284 竪穴住居跡〈東南から〉

2．ＳＢ285 ・ＳＢ286 竪穴住居跡〈東から〉

3．ＳＢ289 ・ＳＢ290 竪穴住居跡〈上北〉



惣座遺跡

1．ＳＢ290 竪穴住居跡
〈南から〉

2．ＳＢ291 ・ＳＢ292
竪穴住居跡〈北から〉

3．ＳＢ293 竪穴住居跡
〈北から〉

惣座遺跡

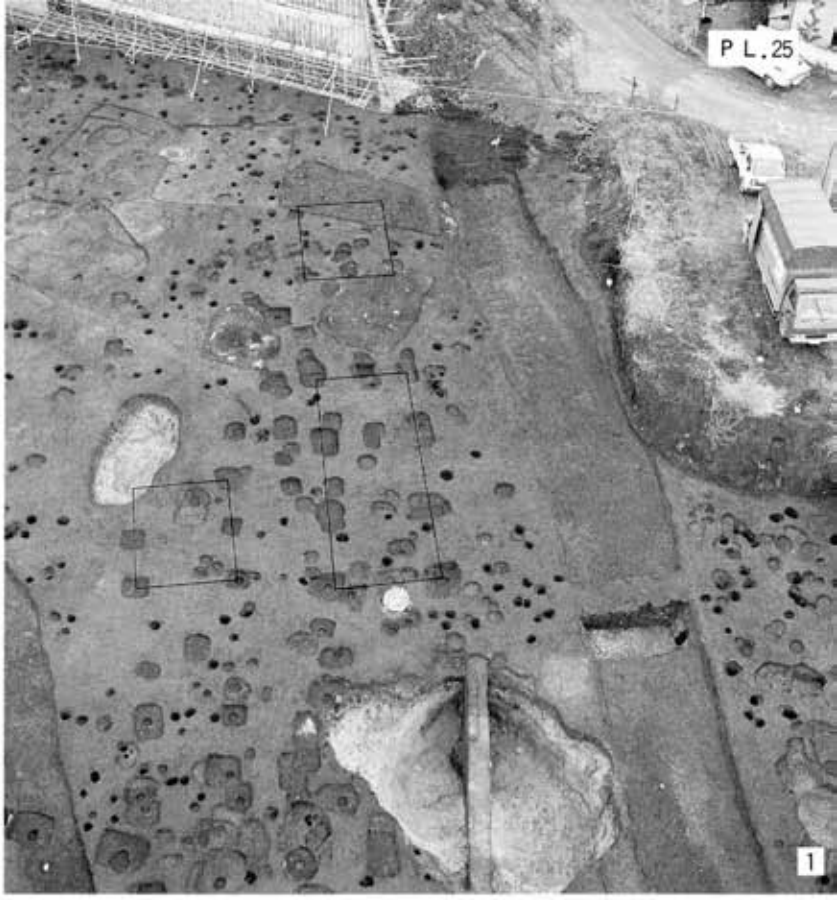
1．ＳＢ009 ・ＳＢ010
竪穴住居跡付近〈南から〉

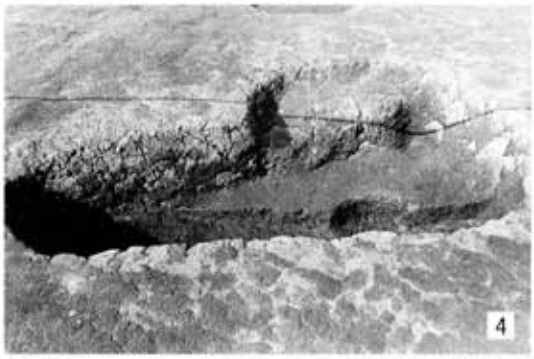
2．ＳＢ009 ・ＳＢ010
竪穴住居跡〈東から〉

3．ＳＢ009 竪穴住居跡
〈西から〉

惣座遺跡　　S B249 ～S B257 掘立柱建物跡付近

〈上東〉



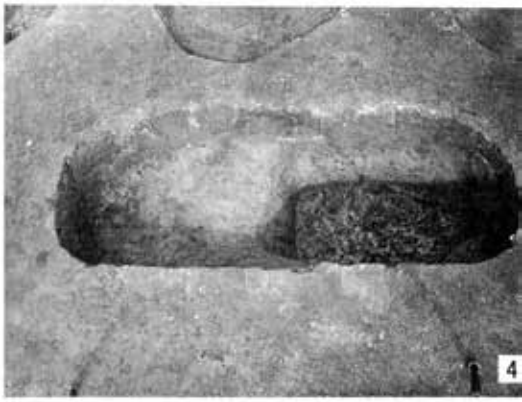


惣座遺跡　　1．ＳＢ249～ＳＢ251掘立柱建物跡〈西から〉

2～5　ＳＢ250 柱穴断面　南側柱列（西東順）

惣座遺跡　　SB276 ～SB278 掘立柱建物跡付近

〈上東〉

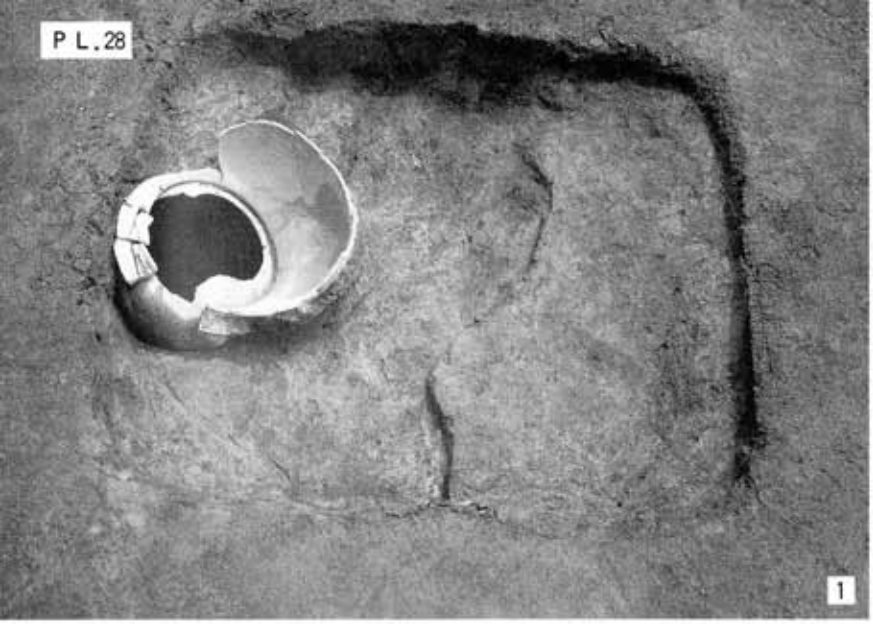


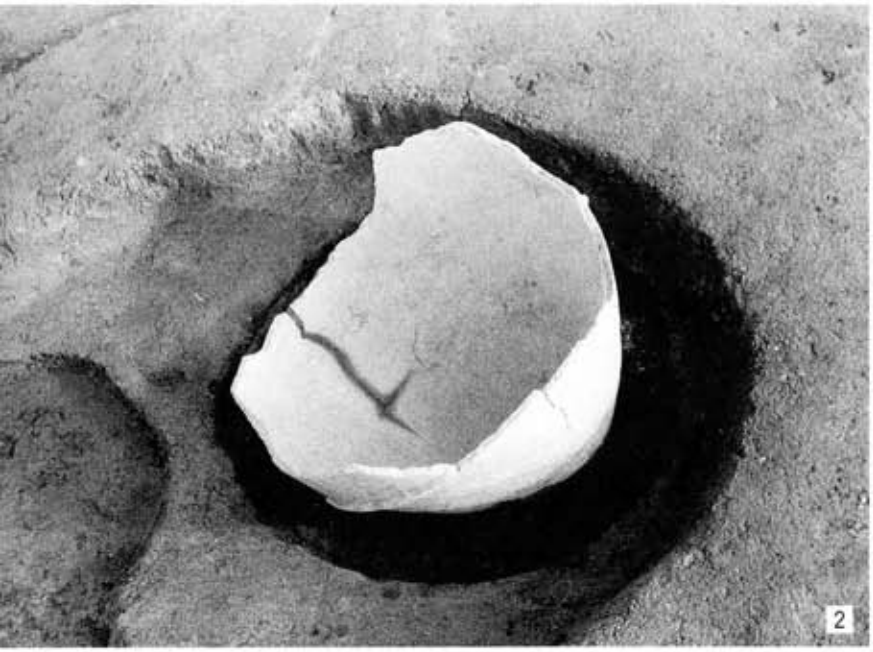
SB277 北側（東西順）及西南隅柱穴

SB278 北側柱穴（西東順）

SB259 北側柱穴（西東順）

惣座遺跡　SB259・SB277・SB278 掘立柱建物跡柱穴断面



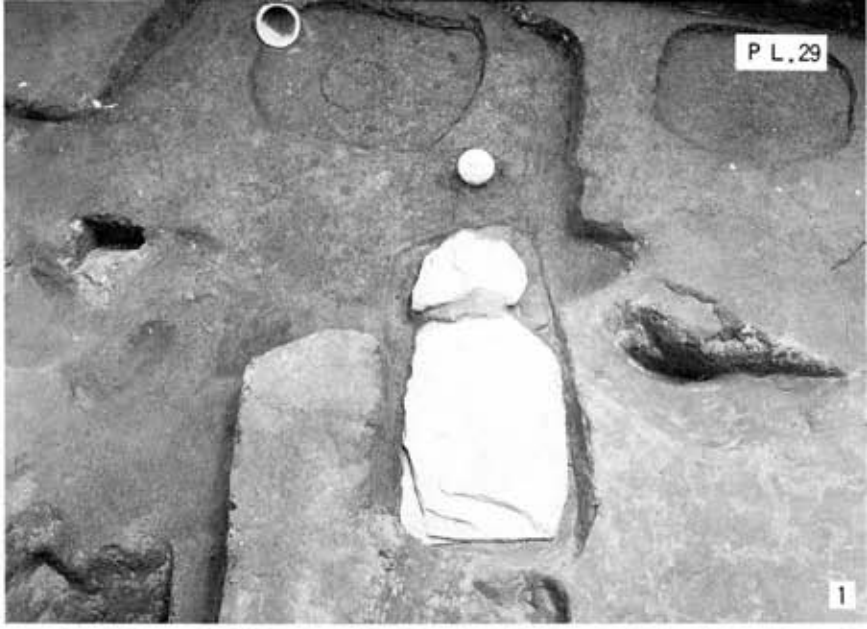


惣座遺跡

1．ＳＪ233 甕棺墓〈北から〉

2．ＳＪ237 甕棺墓〈北から〉

3．ＳＪ181 甕棺墓〈北から〉

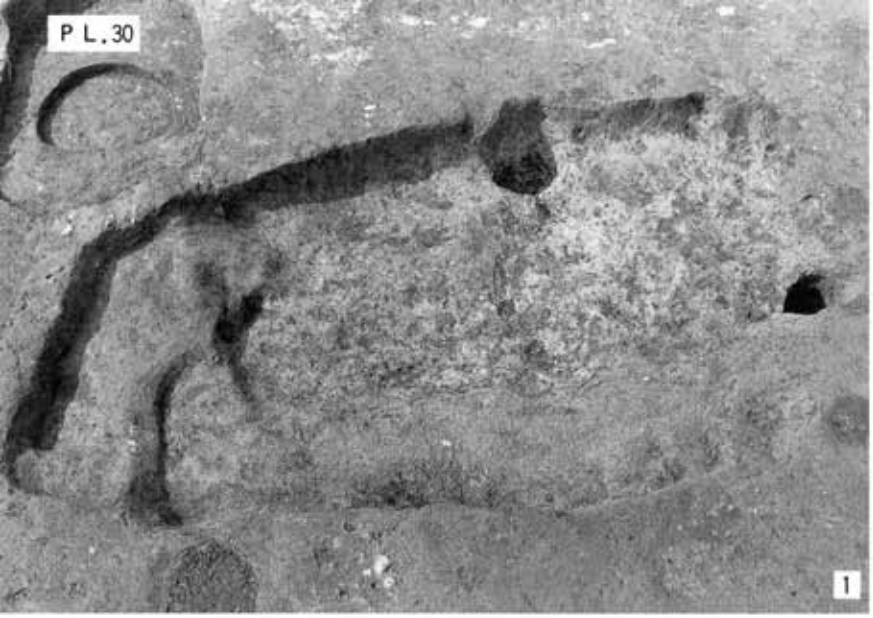


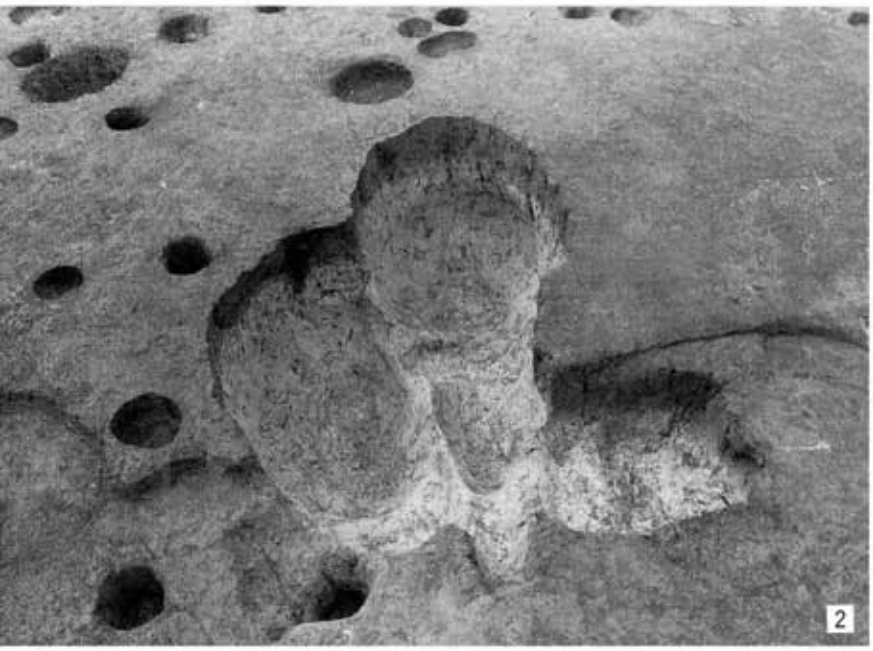
惣座遺跡

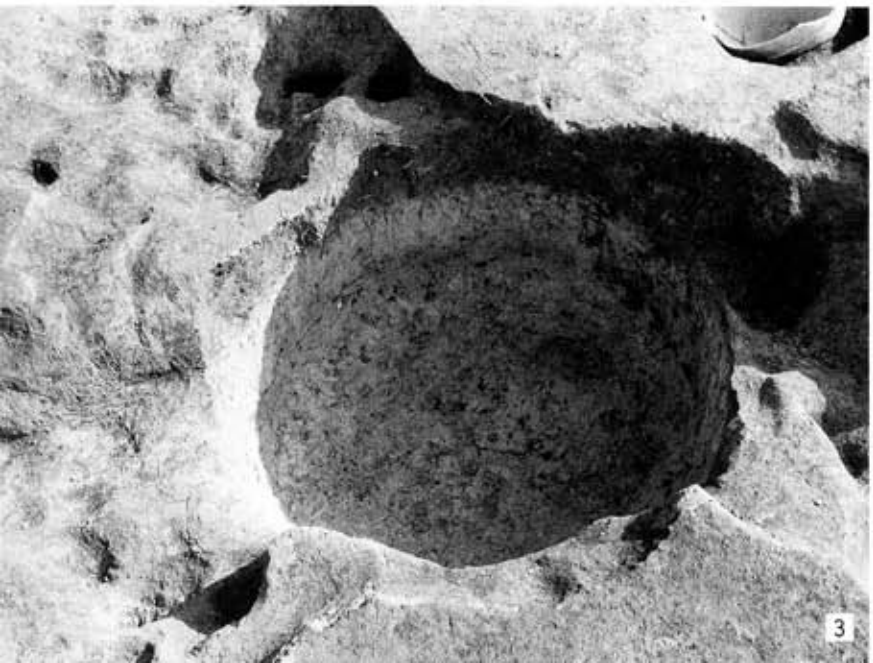
1．ＳＣ180 石蓋土壙墓
〈西から〉

2．同供献壺出土状況
〈南から〉

3．ＳＫ182 土壙〈南から〉







惣座遺跡

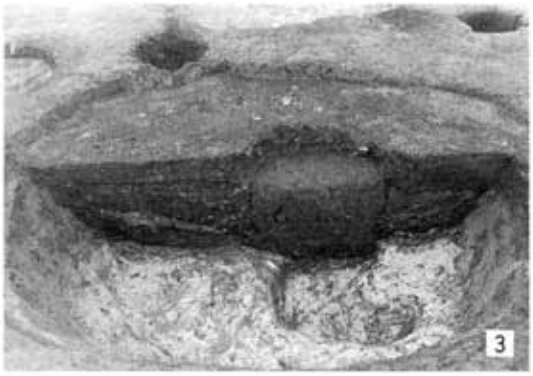
1．SK227・SK228
土壙〈北から〉

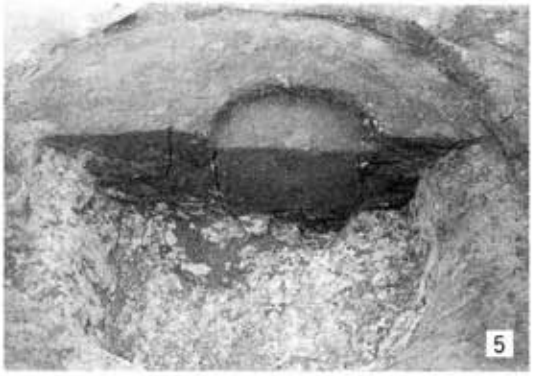
2．SK230・SK231
土壙〈北から〉

3．SK236 土壙
〈北から〉

惣座遺跡　1．ＳＢ239 掘立柱建物跡およびＳＸ238 柵〈東から〉

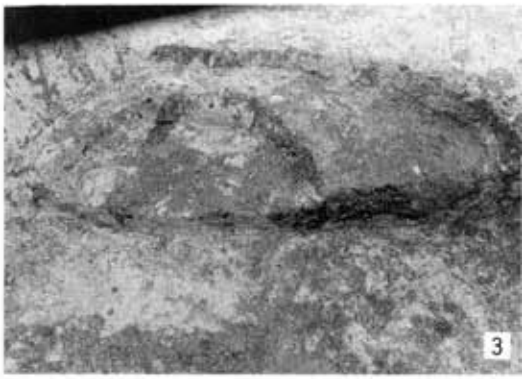
2～5　同柱穴（2東南隅、3・4・5北側柱列）

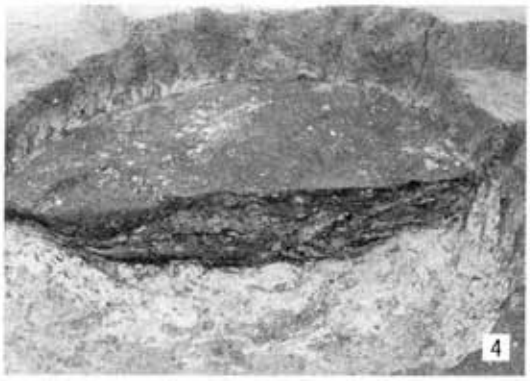




惣座遺跡　1．ＳＢ240 掘立柱建物跡〈南から〉

2～5　同柱穴断面（南北順）〈西から〉





惣座遺跡　1．ＳＢ241 掘立柱建物跡〈北から〉

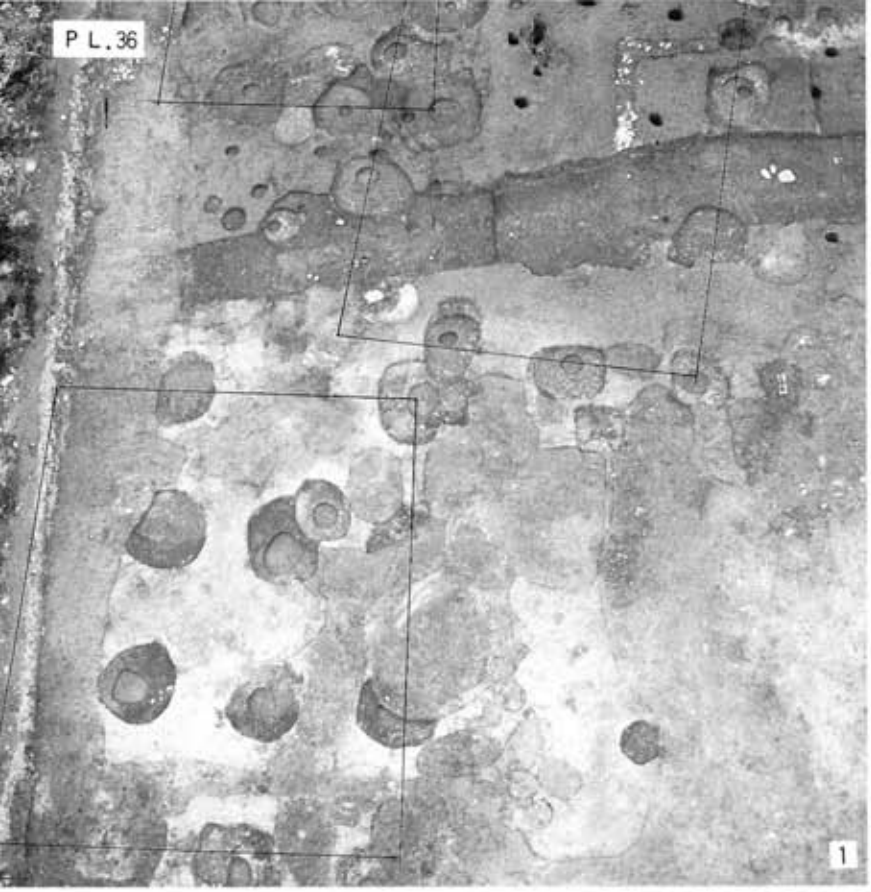
2．同柱穴断面（北南順）〈西から〉

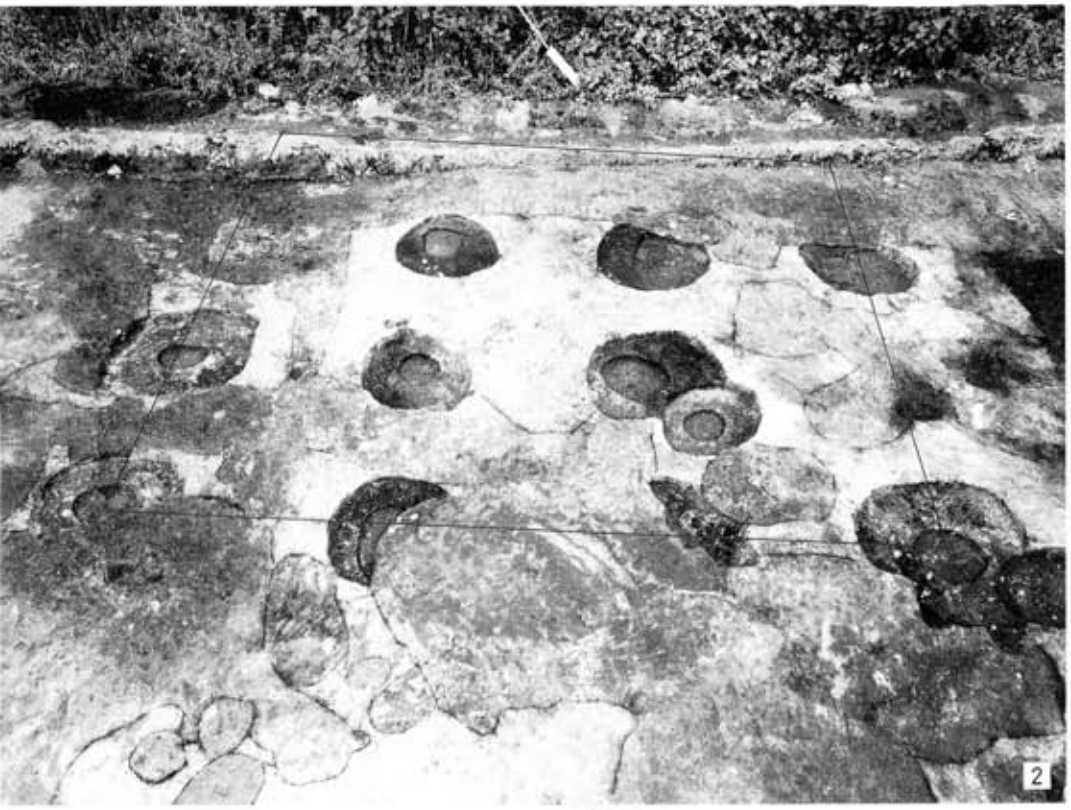
惣座遺跡　1．SB242 掘立柱建物跡〈上北〉

2．　同　〈東から〉

惣座遺跡　1．SB243 掘立柱建物跡〈上西〉

2．　同　〈南から〉





惣座遺跡　1．SB244 掘立柱建物跡〈上東〉

2．　同　〈南から〉

惣座遺跡　1．ＳＢ245 ・ＳＢ246 掘立柱建物跡〈南から〉

2・3・4．ＳＢ245柱穴断面　南側柱列（西東順）〈南から〉

惣座遺跡

1．SB247 掘立柱建物跡

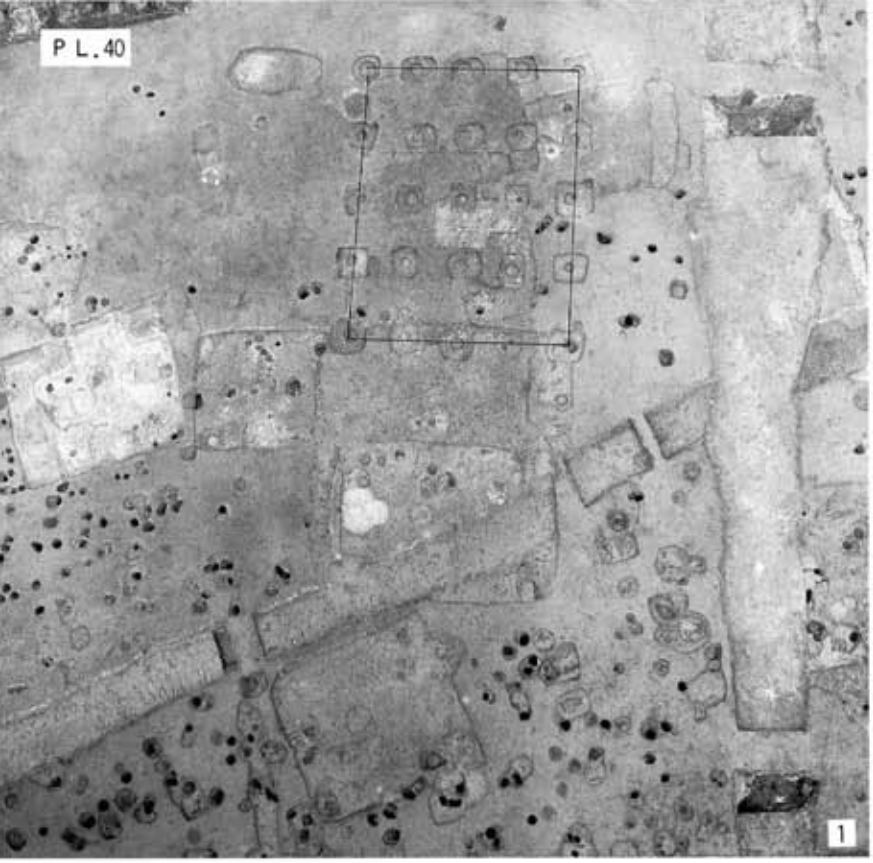
〈上西〉

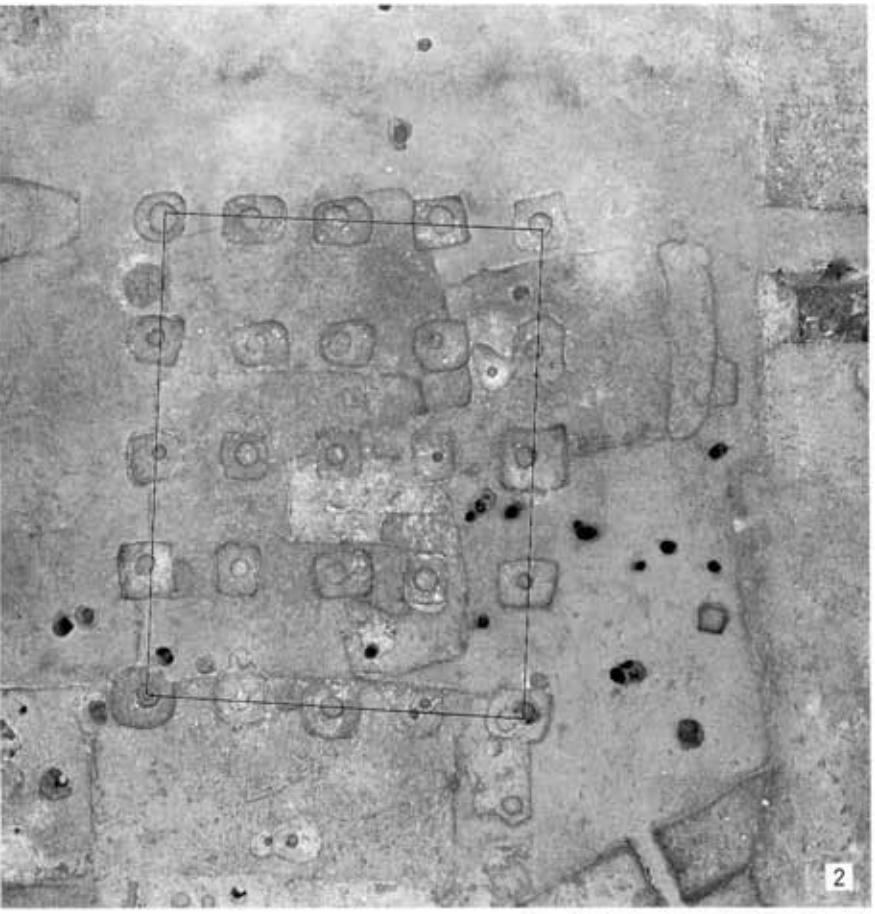
2．同　　〈西から〉

惣座遺跡

1．ＳＢ260 掘立柱建物跡〈上西北〉

2．同　　〈西から〉





惣座遺跡　1．SB261 掘立柱建物跡〈上北〉

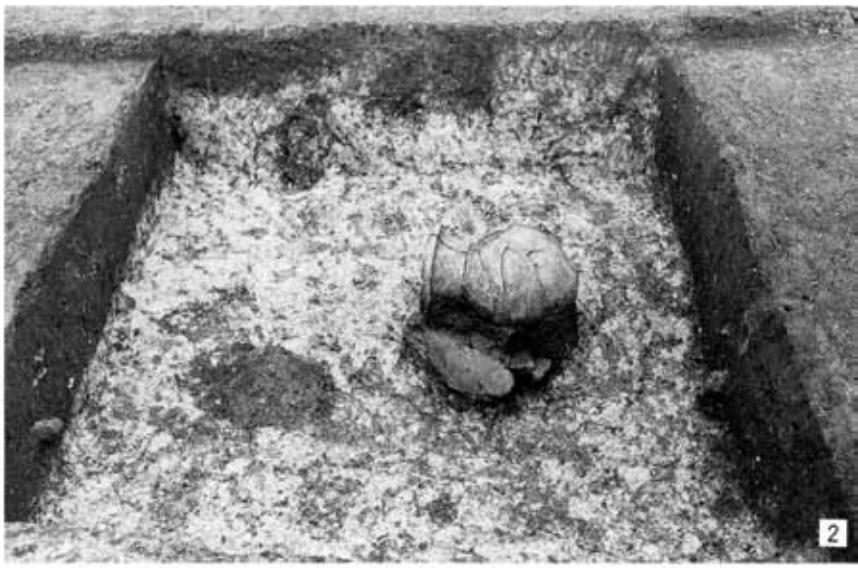
2．同　〈上北〉

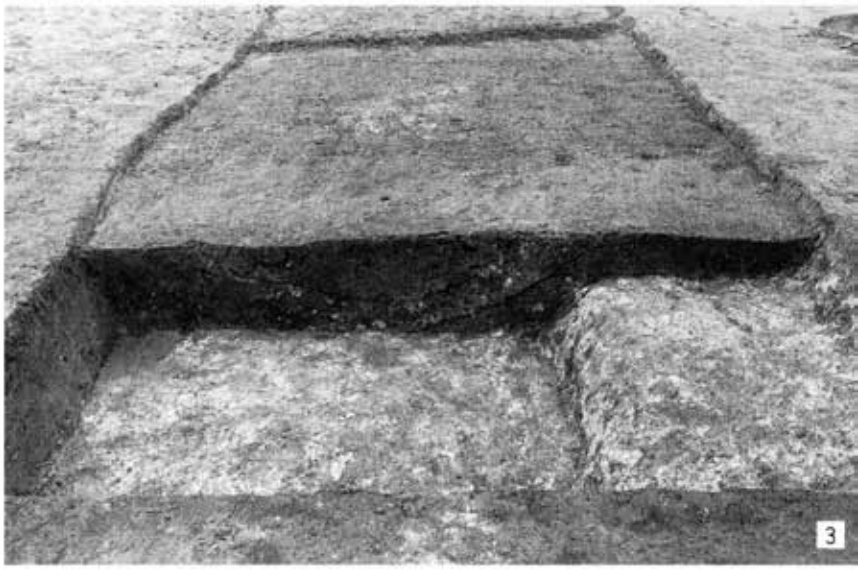
惣座遺跡　1．ＳＢ261 掘立柱建物跡〈南から〉

2～5．同柱穴断面 北側柱列（西東順）〈南から〉

惣座遺跡　1．SB007 掘立柱建物跡〈南から〉

2．　同　〈西から〉

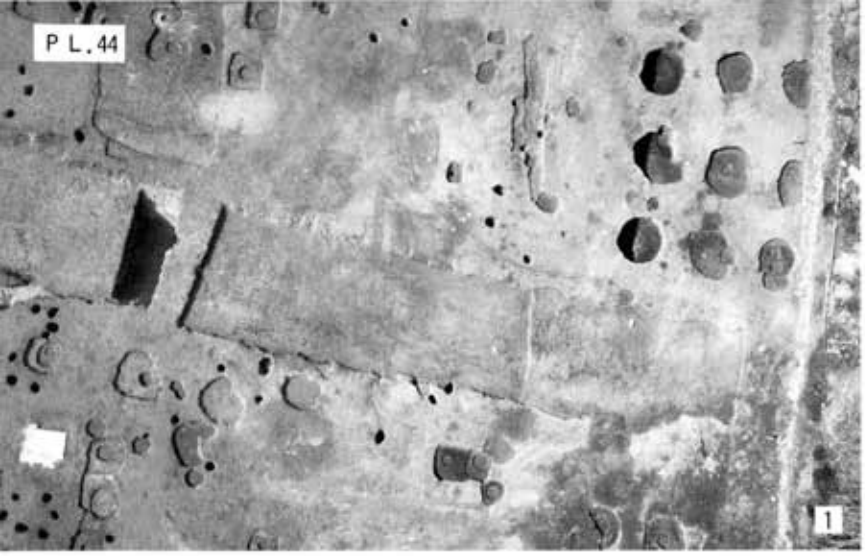


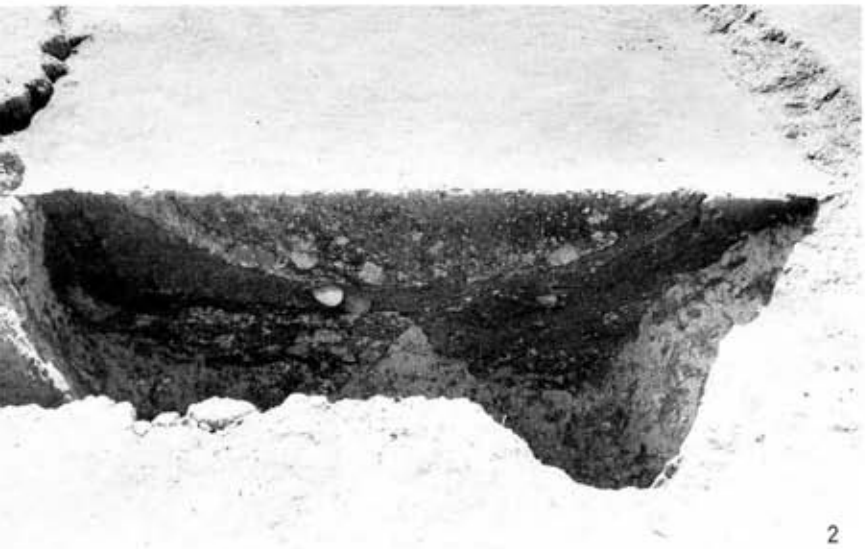


惣座遺跡　1．ＳＤ204 ・ＳＤ205溝〈北から〉

2．ＳＤ205 溝ｄ断面〈南から〉

3．　同　ｅ断面〈南から〉



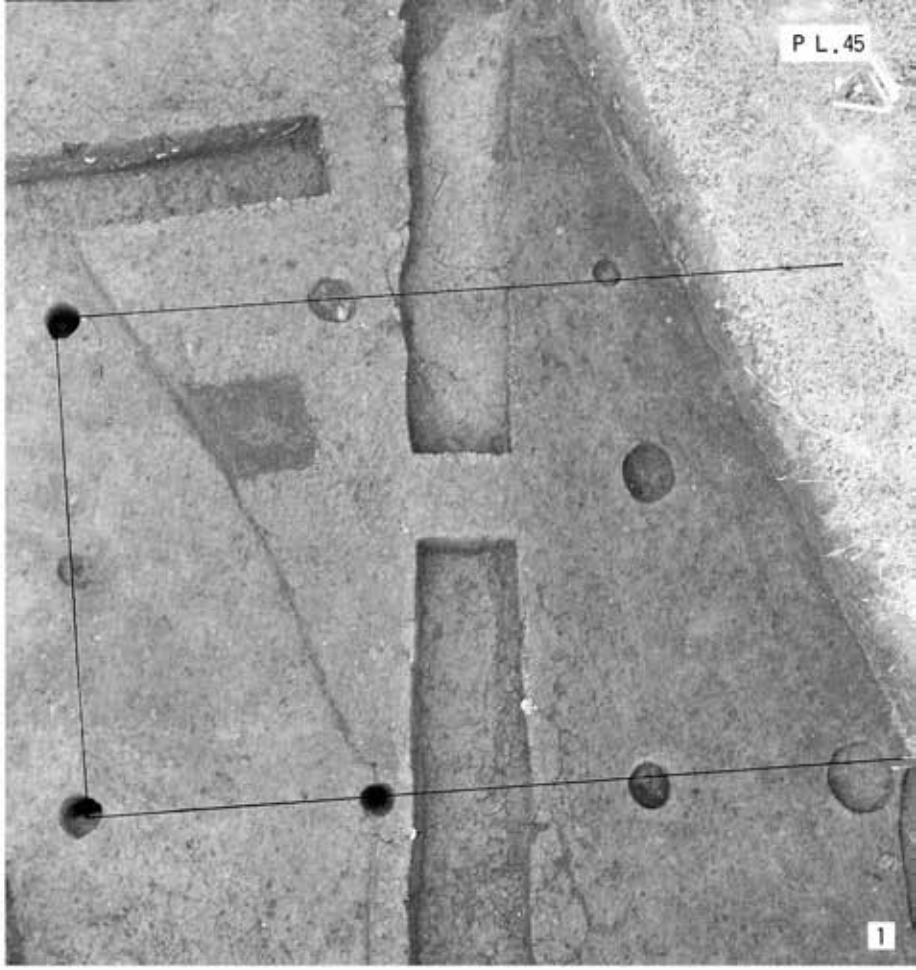


惣座遺跡

1．ＳＤ208 付近〈上西〉

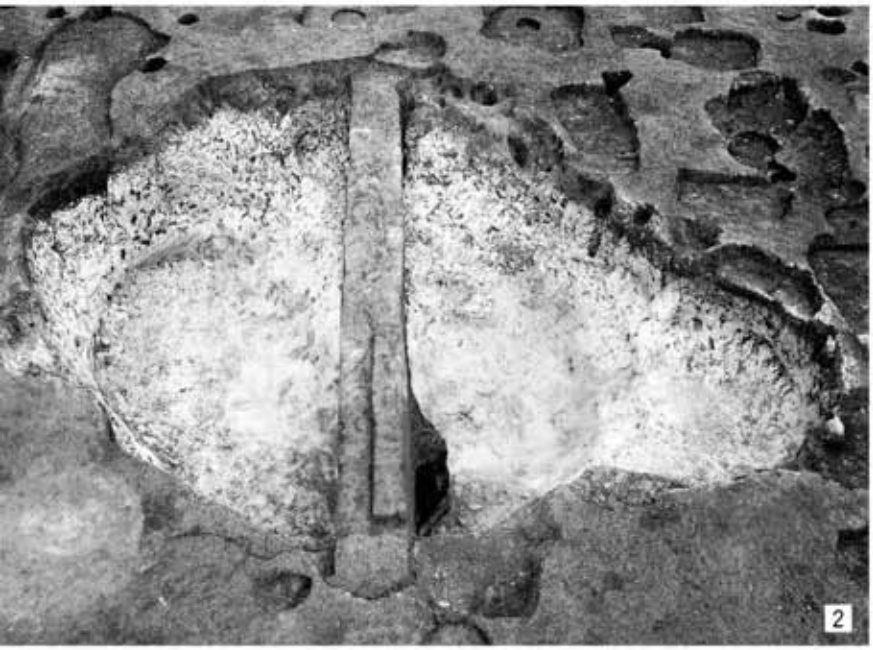
2．同ｂ断面〈南から〉

3．同ｃ断面〈南から〉



惣座遺跡　1．SB279 掘立柱建物跡〈上東〉

2．SD018 溝a断面〈西から〉



惣座遺跡

1．ＳＫ232 土壙〈北から〉

2．ＳＫ235 土壙〈東から〉

3．同　埋土断面〈南から〉

24
SJ233 上甕

28
SD019 埋土

25
SJ233 下甕

30
SD204 埋土

26
SJ237

31
SD019 埋土

惣座遺跡　弥生土器1．甕棺　　24・25　1/5
26・28・29・31　1/10

32

33

36

37

惣座遺跡　弥生土器2　甕　1/8

40

46

42

48

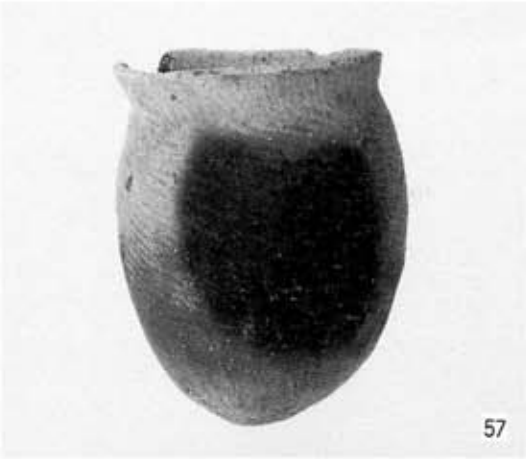
44

45

惣座遺跡　弥生土器3　甕　1/5

惣座遺跡

弥生土器4　甕　55　¼,
49·51·～54·56　⅙



惣座遺跡　弥生土器5　甕　　57・58・65　¼　　59・60・62・64　⅕

惣座遺跡 弥生土器6　甕　　68～71・76・366　1/5　73・75　1/4

惣座遺跡　弥生土器7　壺　　79・81～84　1/6　80　1/6

惣座遺跡　弥生土器８　壺　⅕

惣座遺跡　弥生土器9　壺　1/6

惣座遺跡　弥生土器10　壺　1/5

惣座遺跡　弥生土器11　壺　　103・104・106・110　⅙　他　¼

111

117

118

119

120

124

123

125

378

惣座遺跡　弥生土器12　壺　　111・118・119・123・124　¼
117・120　⅕　125・378　⅓

惣座遺跡

弥生土器13　壺

126・127　⅓，130　⅙，他¼

137

138

143

316

144

147

145

149

惣座遺跡　弥生土器14　高坏　⅕

150

152

154

155

157

156

158

350

惣座遺跡

弥生土器15　高坏

150・151・154・155　1/5

156～158・350　1/4

162

163

165

166

167

170

171

172

179

178

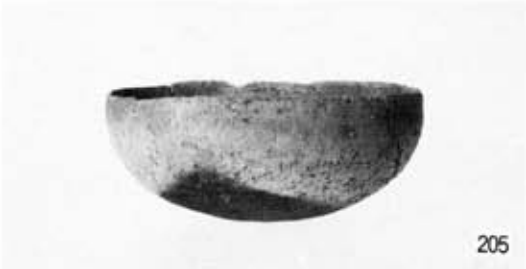
168

惣座遺跡　　弥生土器16　鉢

163・179　¼

他　⅕

惣座遺跡　弥生土器17　鉢　　189・198・161　1/5　198　1/3,他　1/4



惣座遺跡　弥生土器18　鉢　　214・219・225・228・229　⅓，他¼

202ジョッキ形埦 ⅓ ,298・299・301甑 ⅙

器台231 ¼,他 ⅙

惣座遺跡　弥生土器19　埦・甑・器台

238

239

242

244

246

247

248

250

251

惣座遺跡　弥生土器20　器台　1/5

233

252

256

257

259

261

262

263

惣座遺跡　弥生土器21　器台　　262　⅓，259　¼，他　⅙

264

265

270

271

272

276

277

282

283

344

285

284

惣座遺跡　弥生土器22　支脚　1/3

287

288

293

295

296

297

280

307

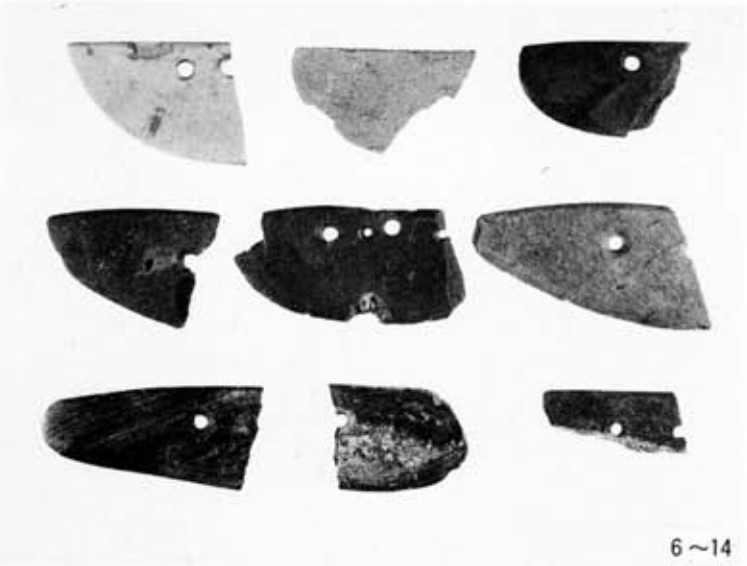
惣座遺跡

弥生土器23

支脚・杓子・蓋　⅓

309

掻器
1～5　石鏃



6～14　石包丁

18～23　砥石

惣座遺跡　縄文・弥生時代石器

379

380

小型仿製鏡 2/3

15

紡錘車 1/1

415

417

416

419

420

418

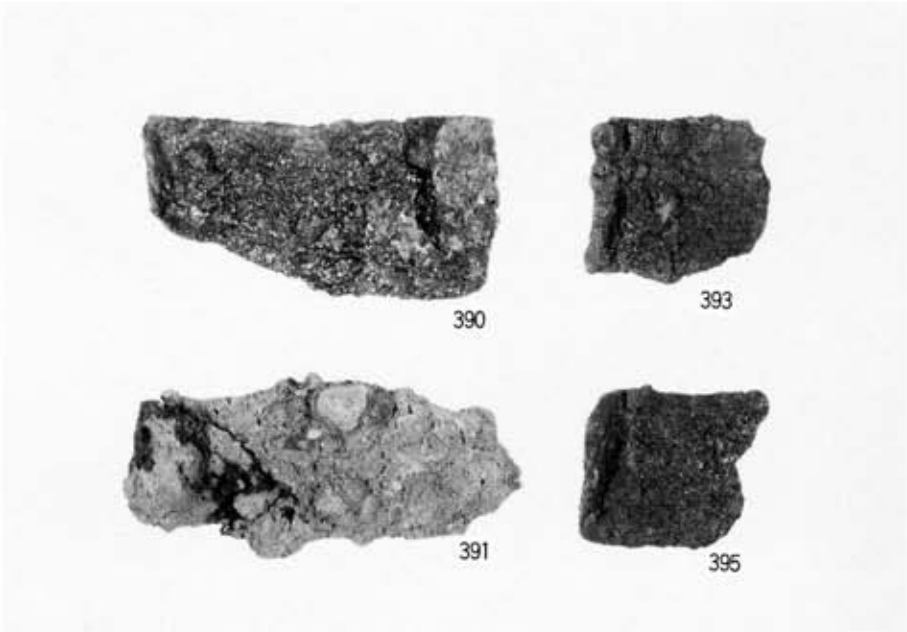
惣座遺跡　鏡・玉類・紡錘車, 弥生時代鉄器 1

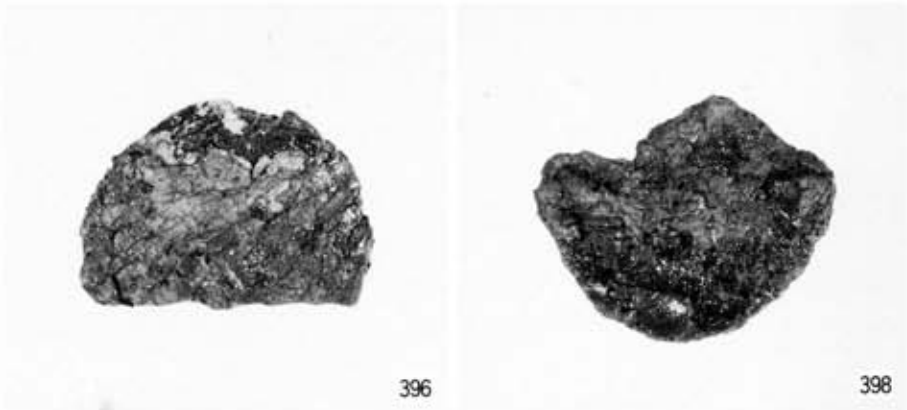
382 383 384

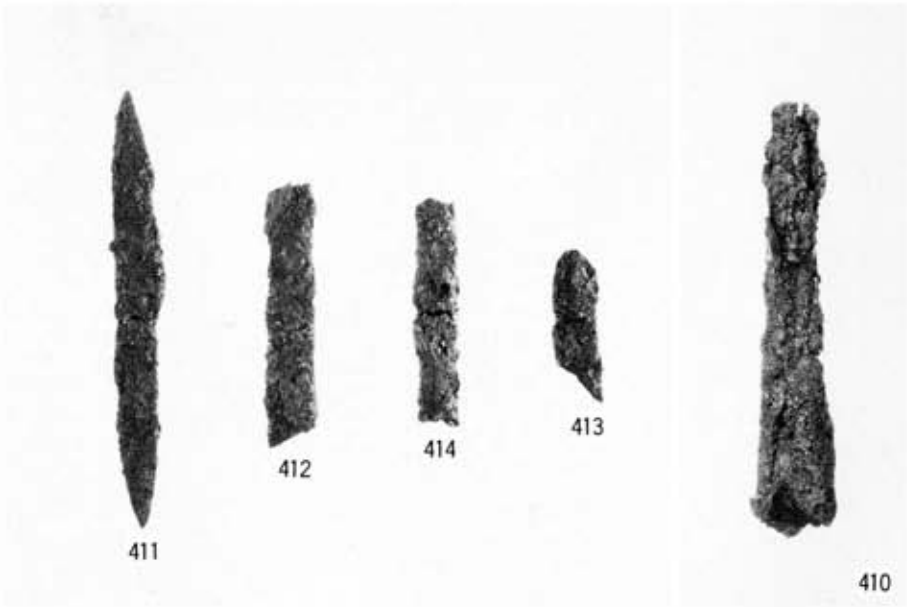
388 385 386 387

389

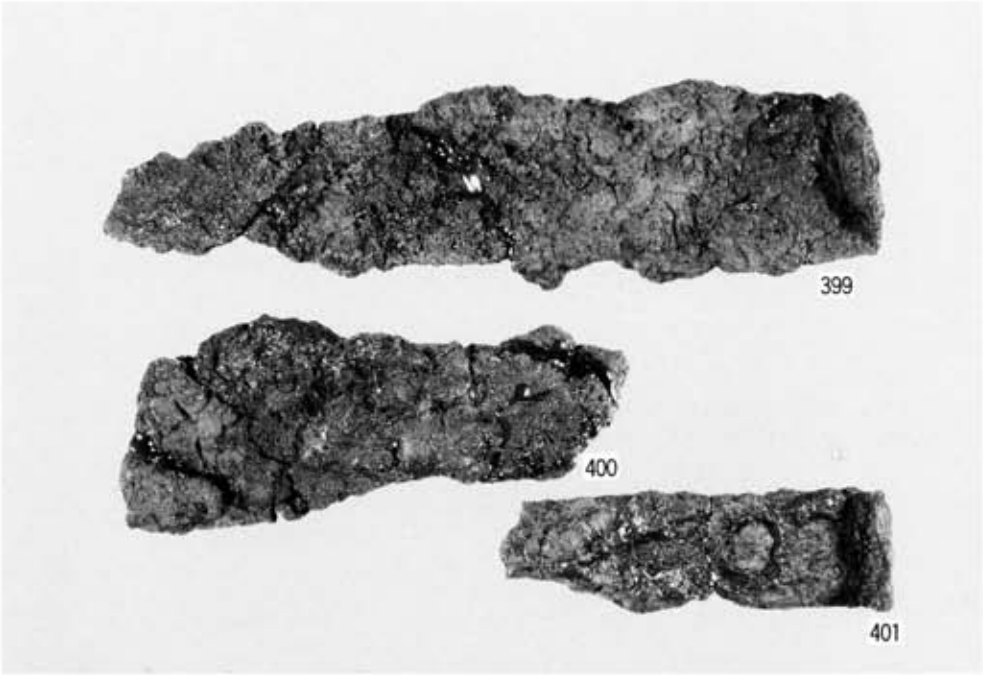
惣座遺跡　弥生時代鉄器２　鉄斧　½

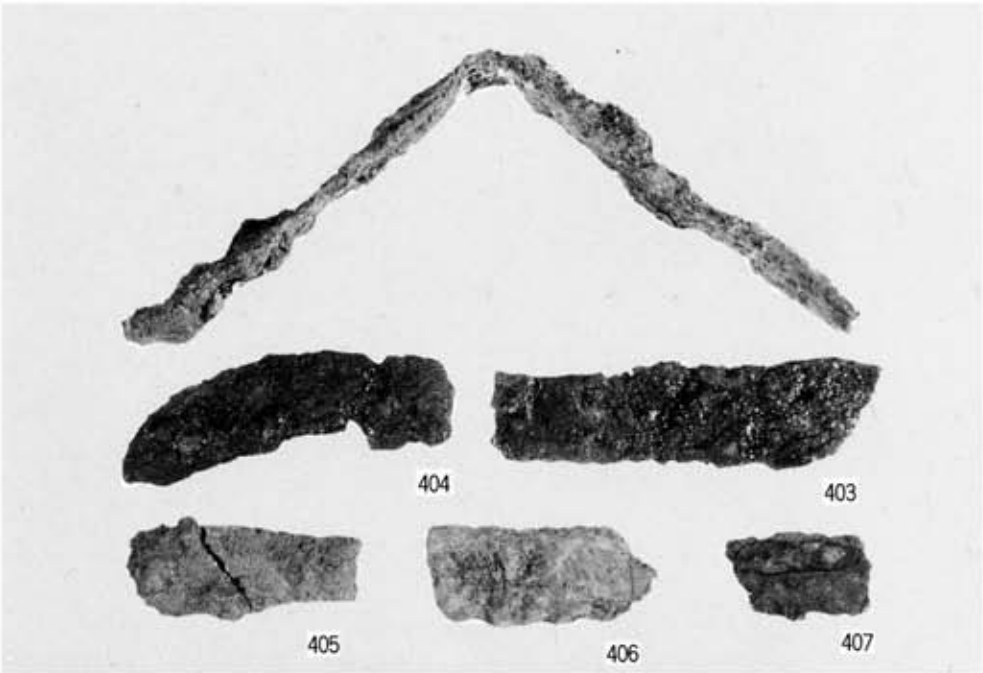


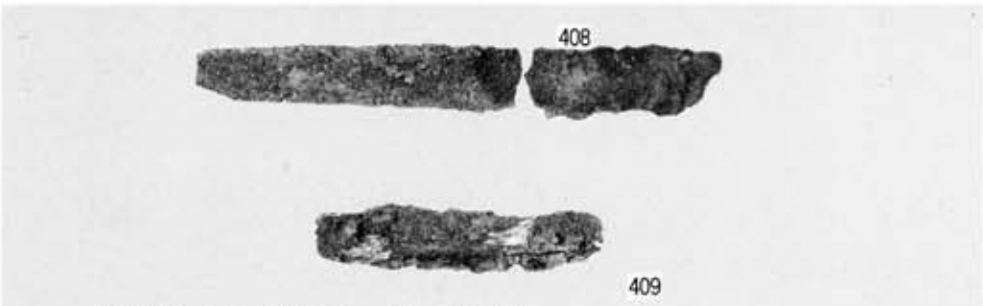




惣座遺跡　弥生時代土器３　鎌・鏃・のみ・鉋　½







惣座遺跡　弥生時代鉄器４　鎌・刀子　½

古墳時代　ＳＤ201 出土土師器　⅓

惣座遺跡

奈良・平安時代溝出土須恵器・土師器１　　457・458・463　¼　他　⅓

465

468

466

469

467

470

471

473

472

473

474

惣座遺跡

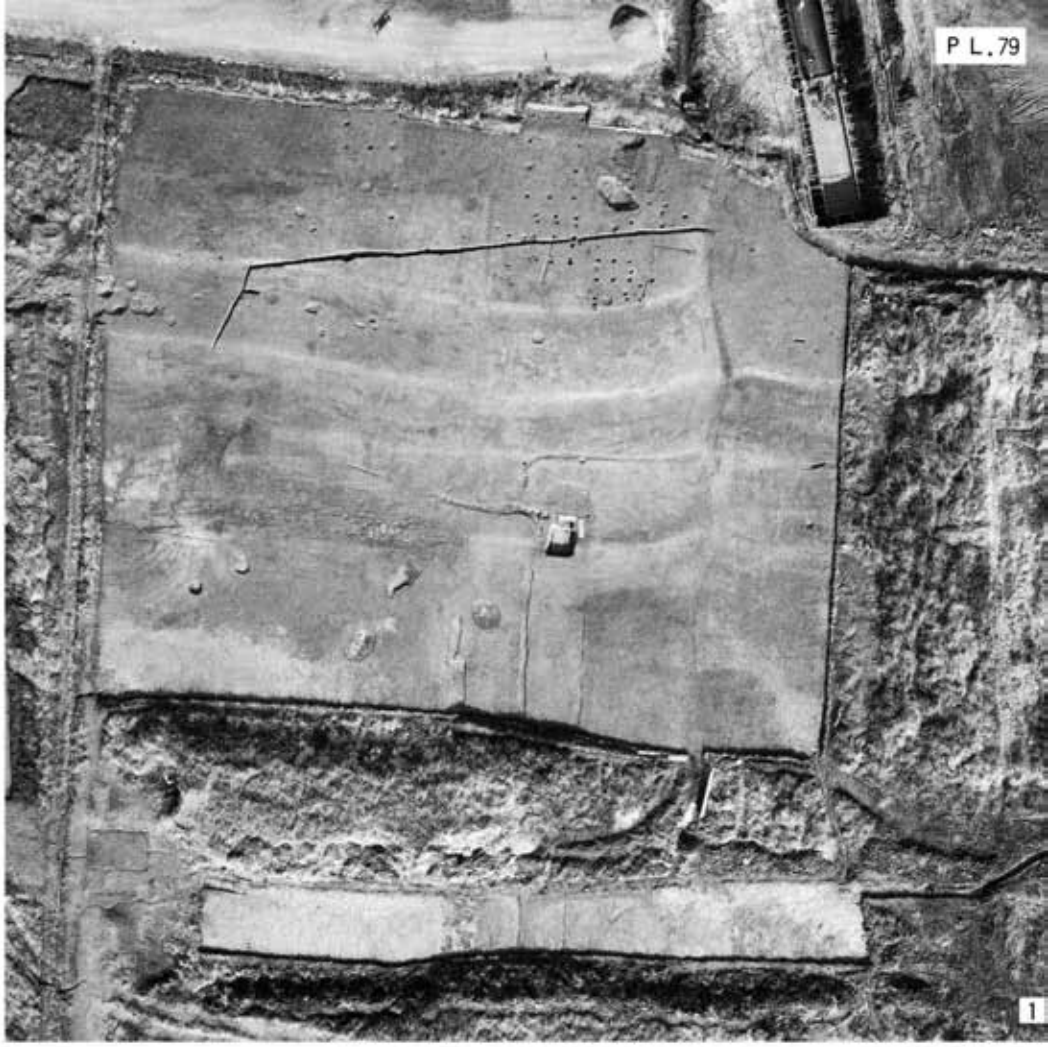
奈良・平安時代　SK235 出土須恵器・土師器 2　　465・468 ½，473 ¼
474 ⅙，他 ⅓

久 池 井 B 遺 跡

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　　Ⅰ区・Ⅱ区全景航空写真 〈上北〉

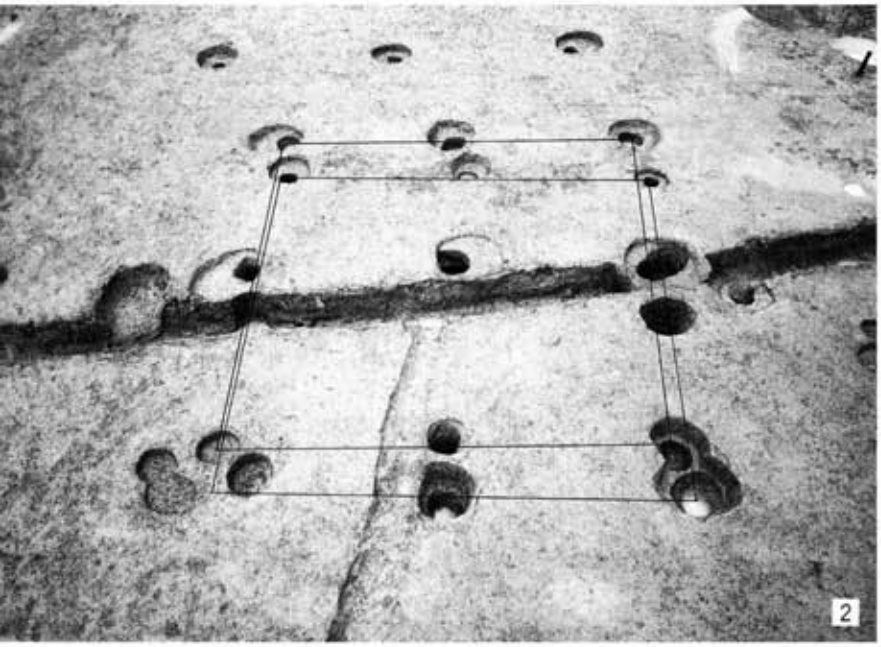
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．Ⅰ区全景航空写真〈西から〉

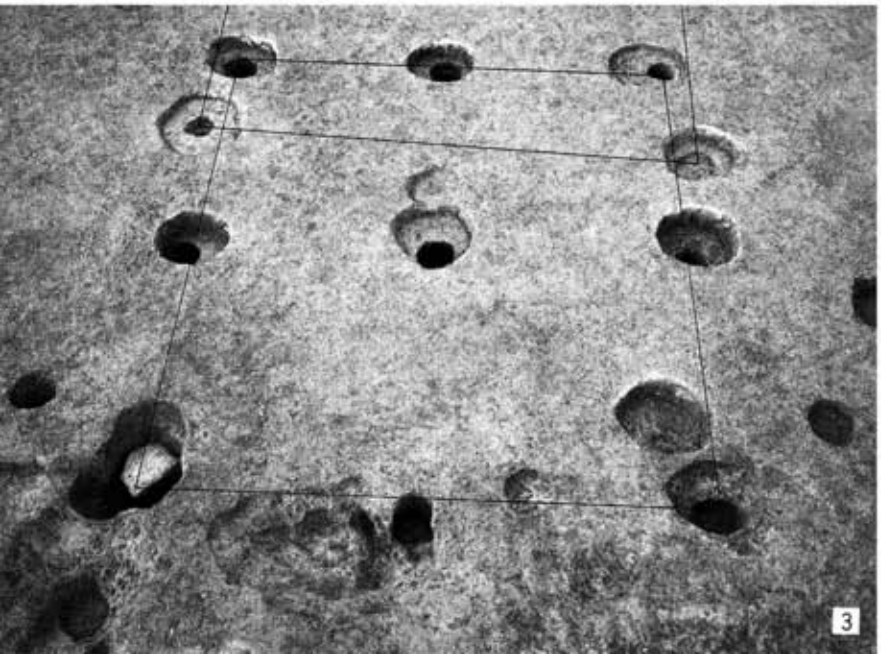
2．　　同　　〈南から〉



久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．Ⅰ区全景航空写真〈上北〉

2．　同　〈南から〉



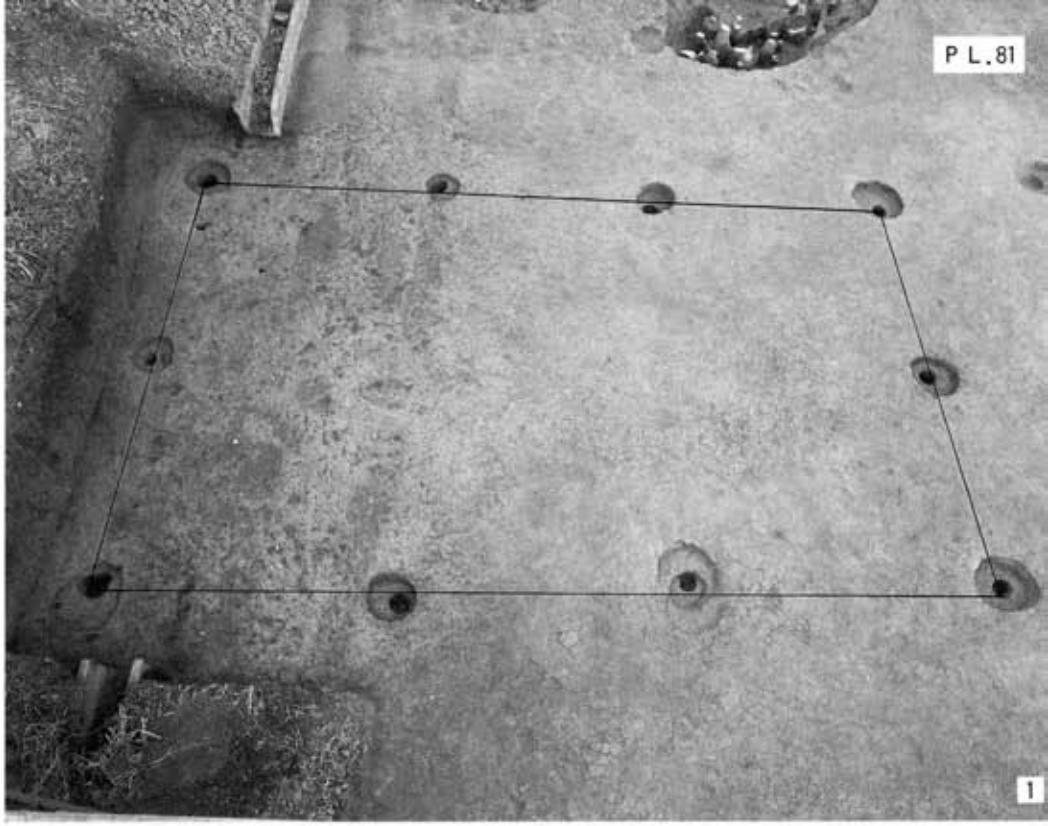


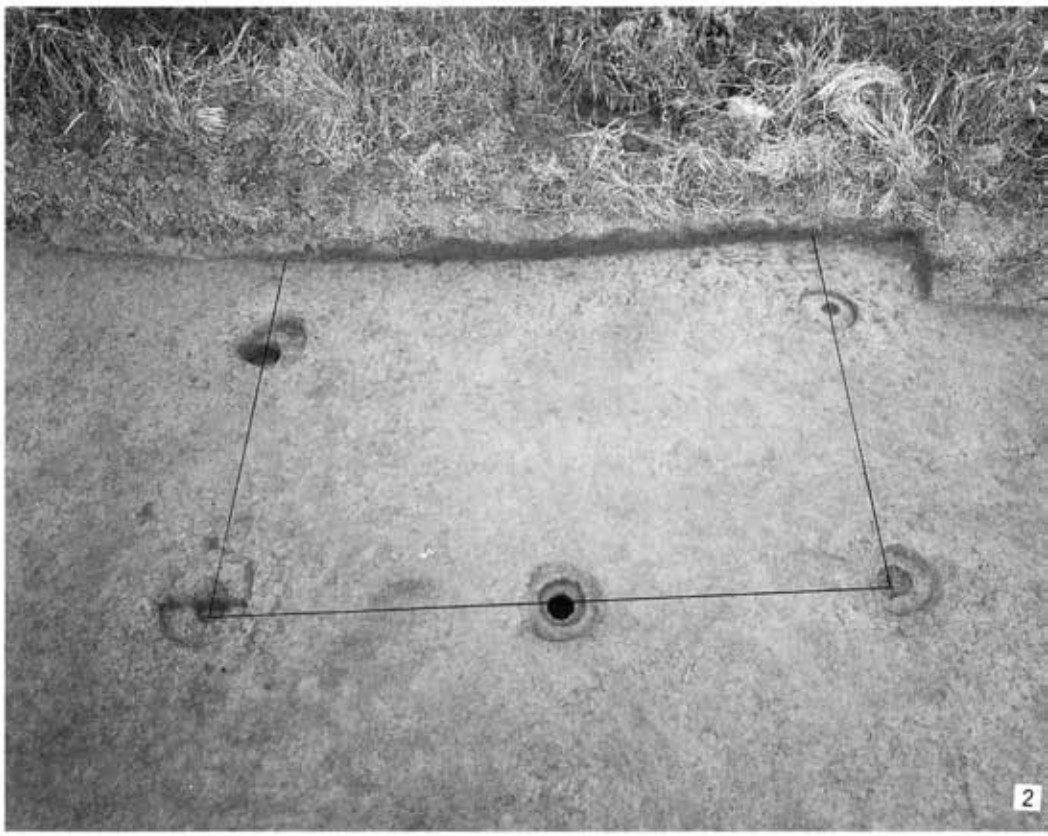
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区

1．Ⅰ区北側建物群ほか
〈東から〉

2．SB312・SB313
掘立柱建物跡 〈南から〉

3．SB310・SB311
掘立柱建物跡 〈南から〉





久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SB314 掘立柱建物跡 〈西から〉
2．SB315 掘立柱建物跡 〈南から〉

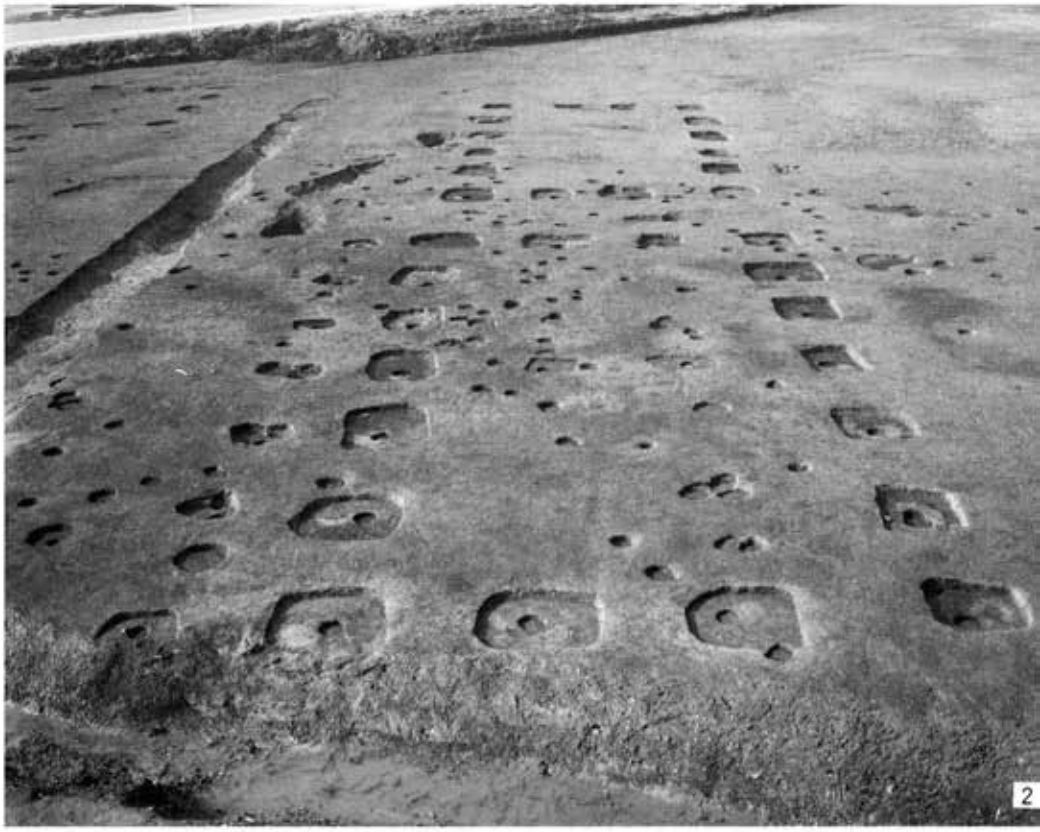
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SE302 井戸　〈北から〉

2．　同　　〈南から〉

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SK316 ～SK320 土壙 〈東から〉

2．SK324 ～SK326 土壙 〈西から〉

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　　Ⅱ区全景 〈上北〉



久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SB343・SB344 掘立柱建物跡〈西から〉

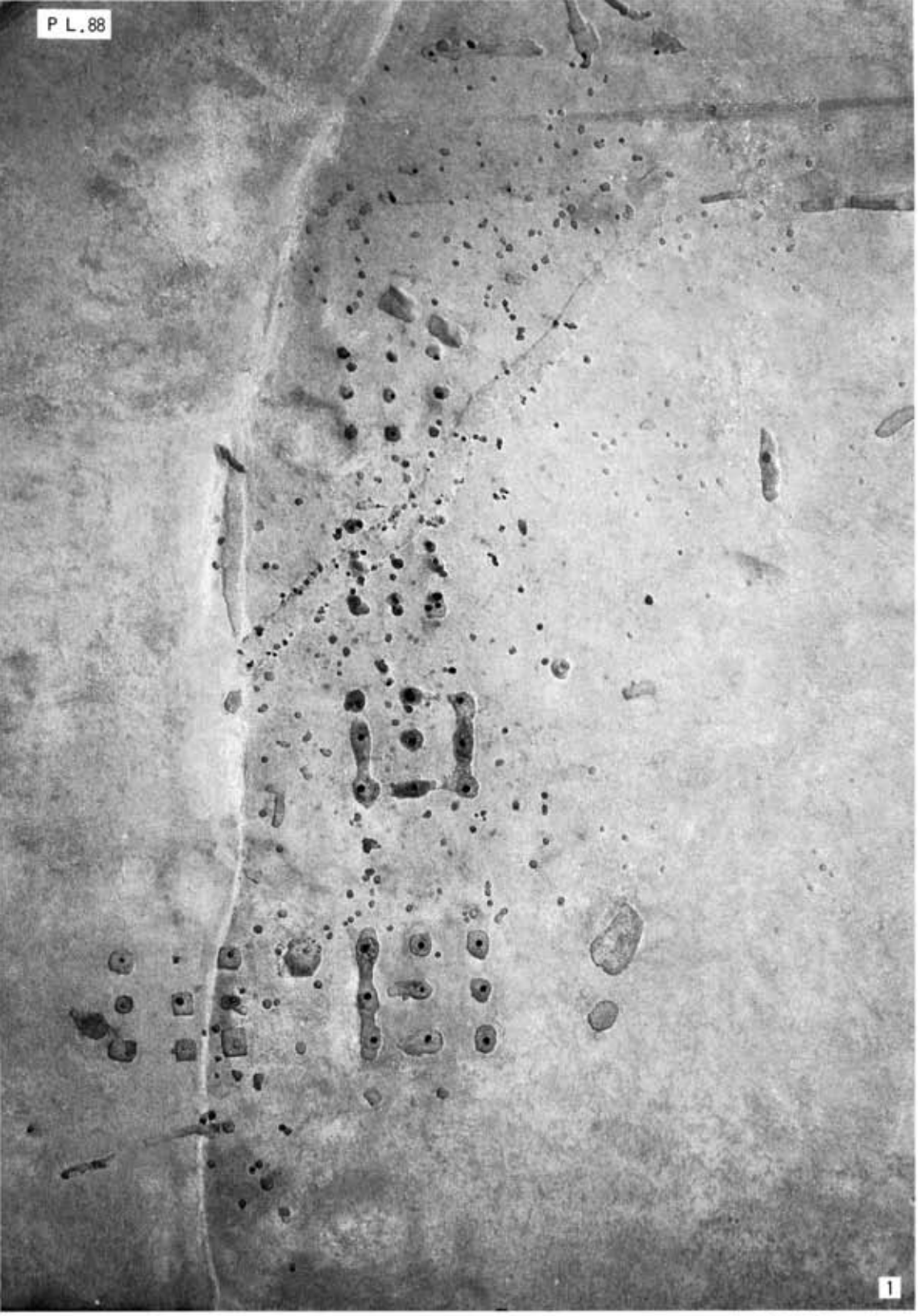
2．　　同　　〈東から〉

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SB344 掘立柱建物跡 〈南から〉

2．SB343 掘立柱建物跡 〈南から〉

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SB345 掘立柱建物跡　〈北から〉

2．　　同　　〈東から〉

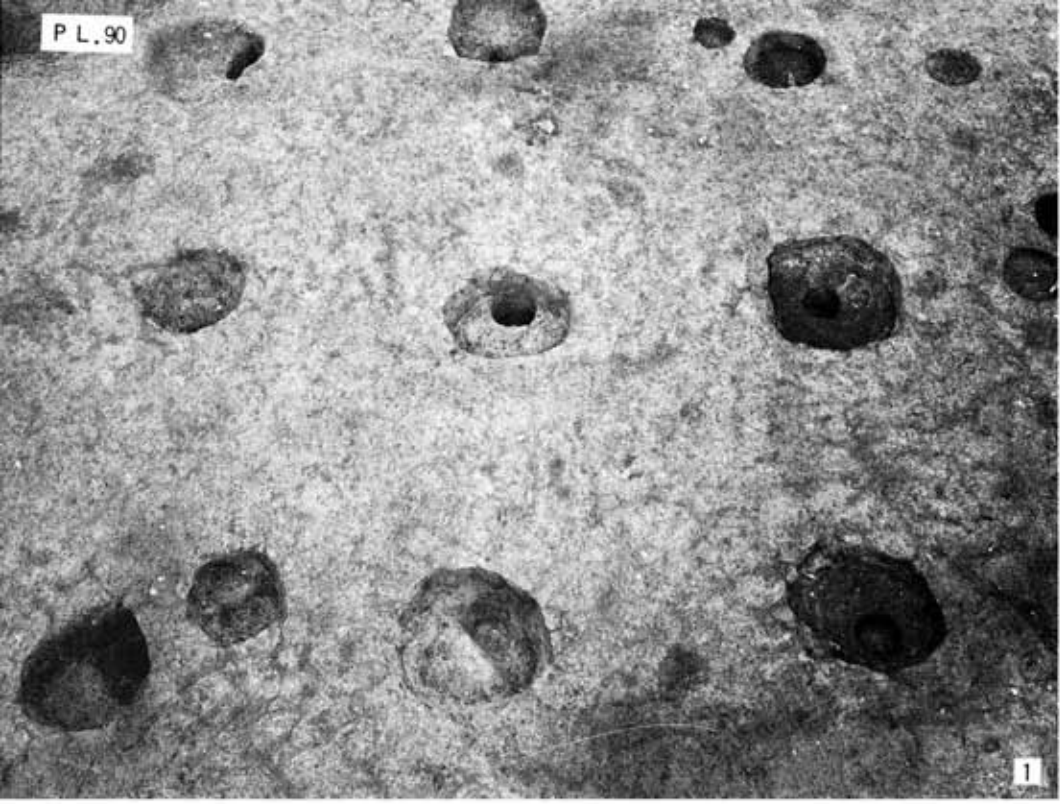


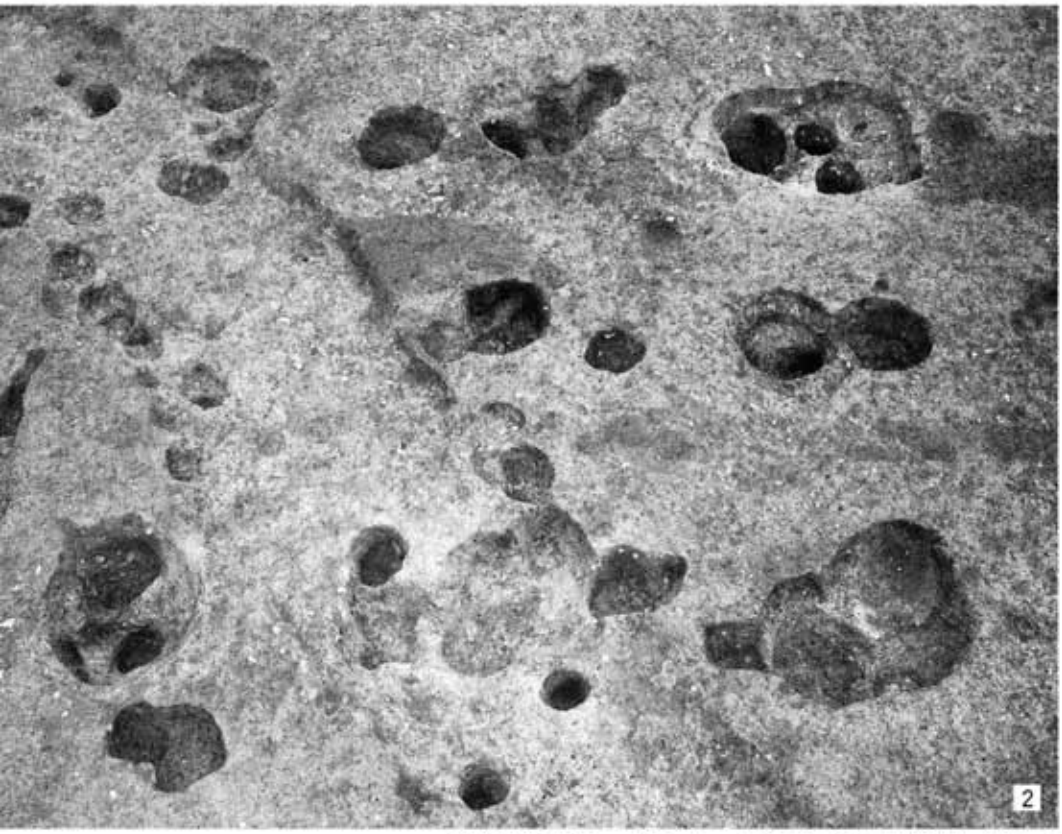
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　SB334 ～SB338 掘立柱建物跡 〈上西〉

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区

1．SB334 ～SB337 掘立柱建物跡 〈西から〉

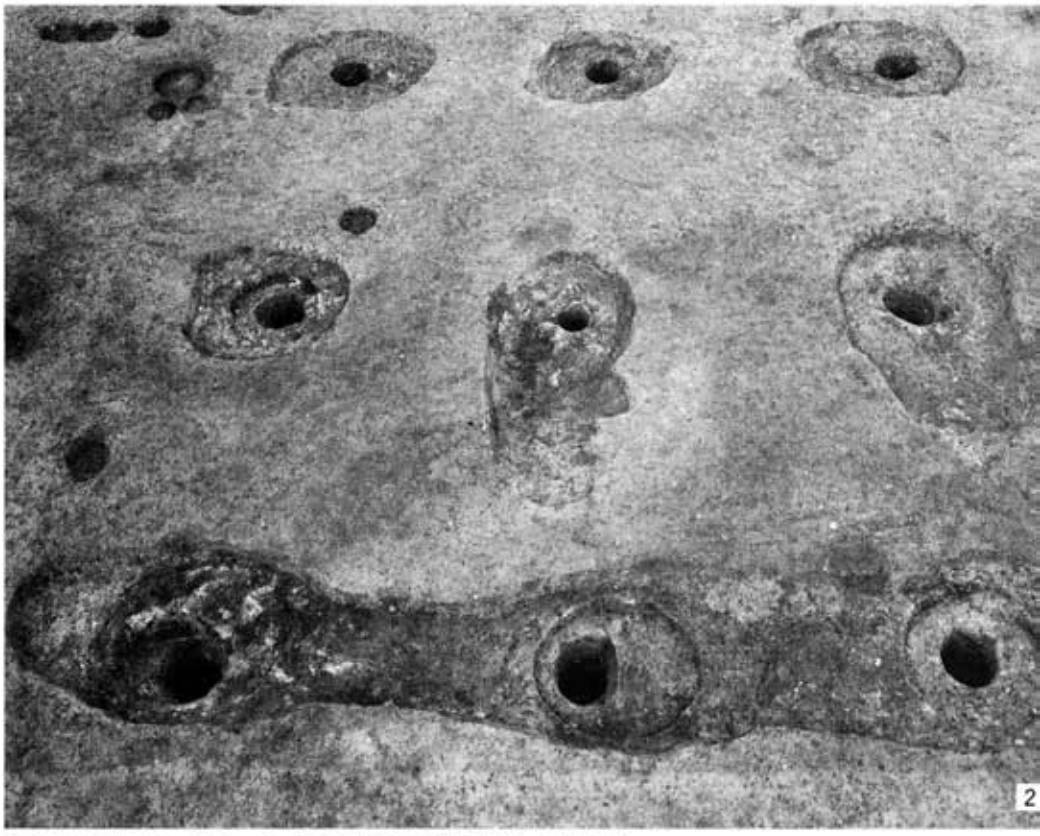
2．SB338 掘立柱建物跡 〈南から〉





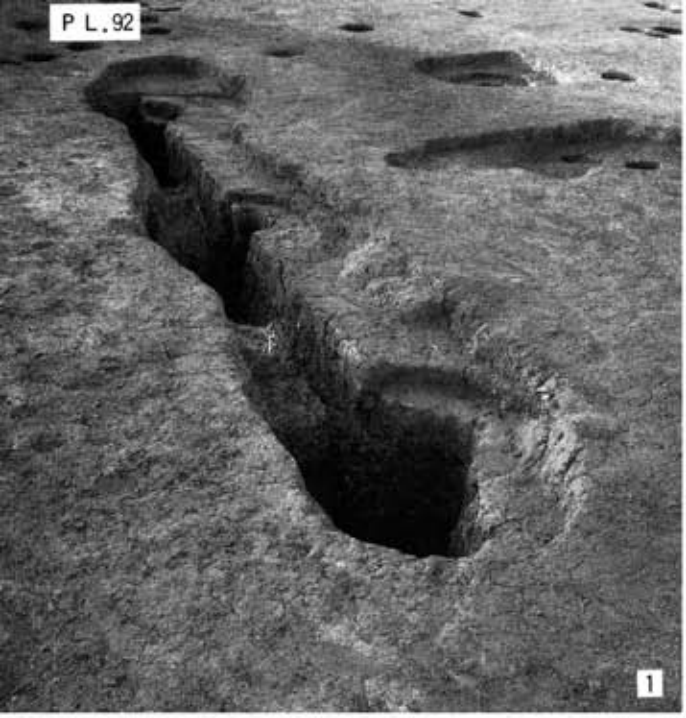
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SB334 掘立柱建物跡 〈南から〉

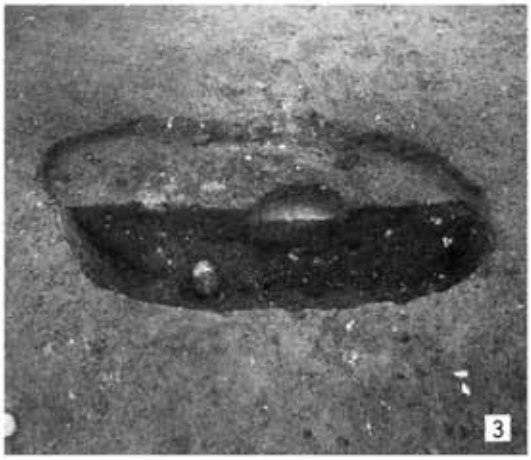
2．SB335 掘立柱建物跡 〈南から〉

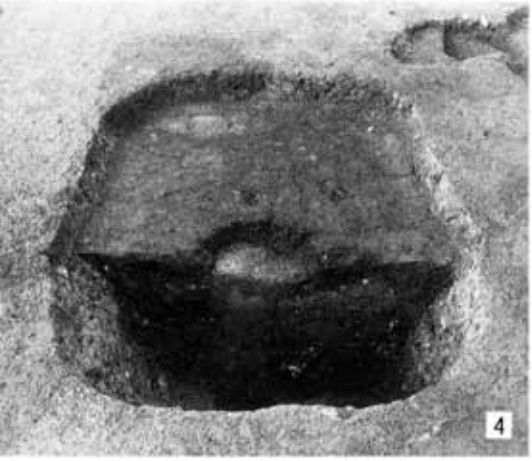


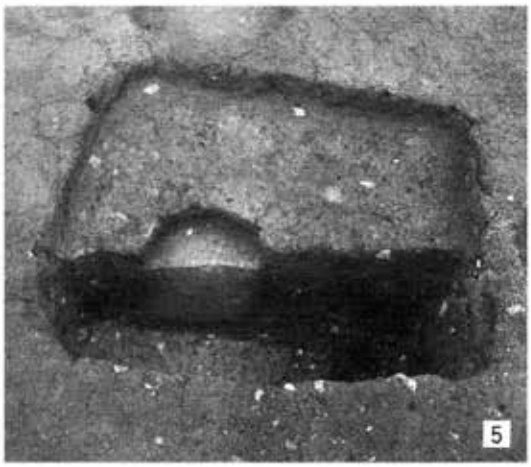
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SB336 掘立柱建物跡 〈南から〉

2．SB337 掘立柱建物跡 〈南から〉









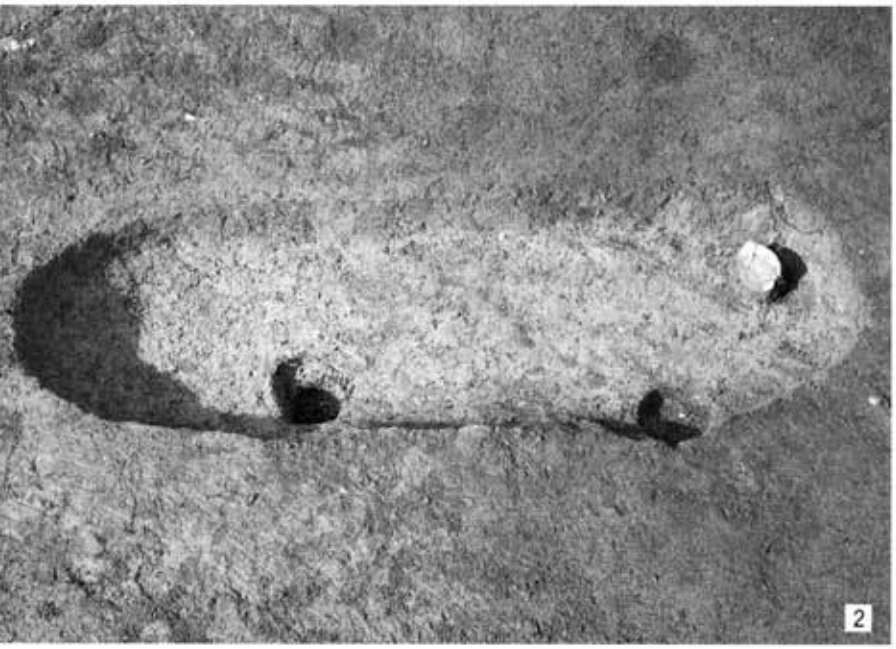
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．ＳＢ337 南側柱穴断面 〈東から〉

2～5　ＳＢ344間仕切柱穴断面（北南順）〈東から〉

久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区

1．SE347 井戸〈南から〉

2．SD328 溝 〈西から〉

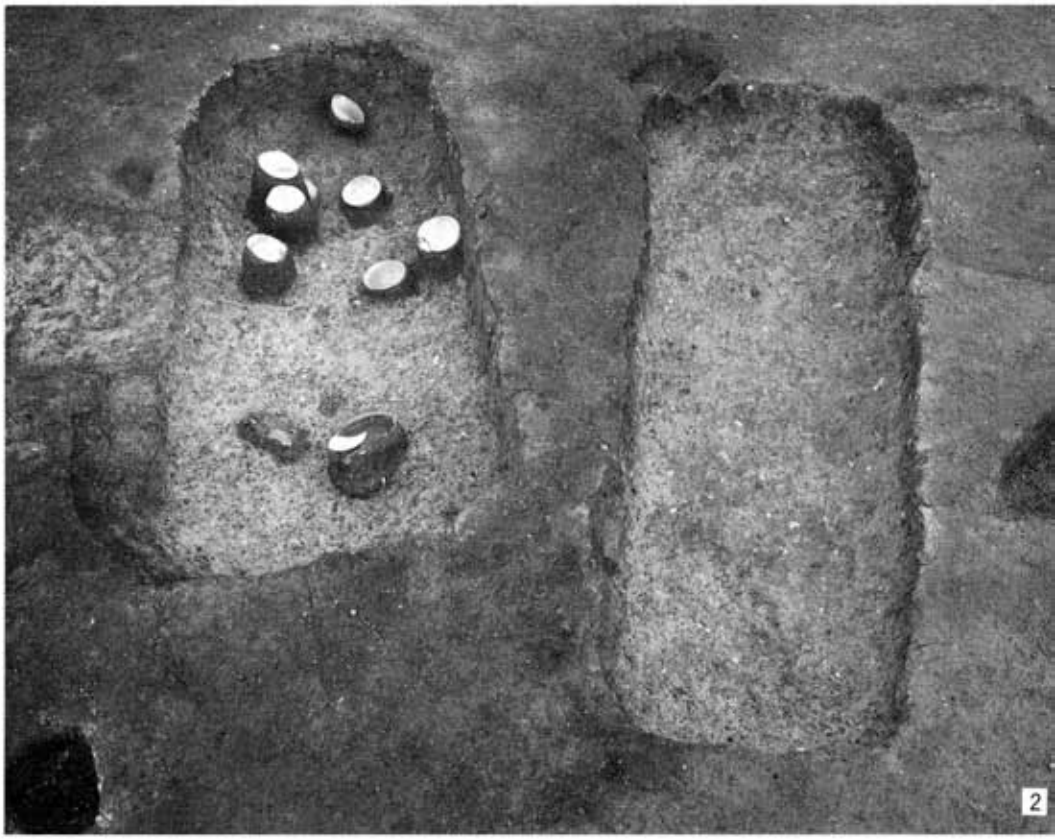


久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区

1．南側土壙墓群
〈北から〉

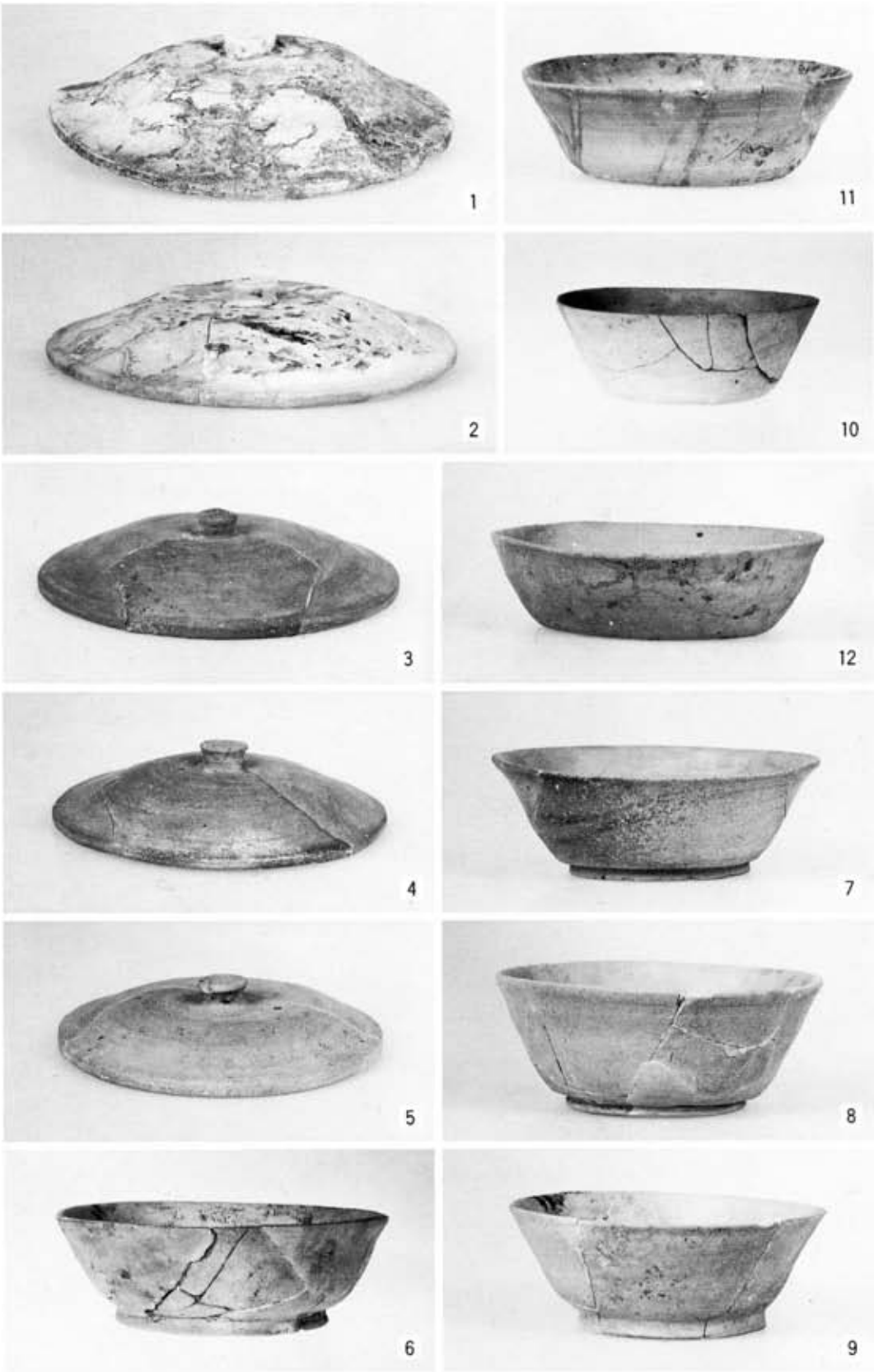
2．SP352 土壙墓
〈東から〉

3．SP350 土壙墓
〈北から〉



久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　1．SP351・SP353 土壙墓〈東から〉

2．　同　〈南から〉



久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　SK319 土壙出土須恵器

13

15

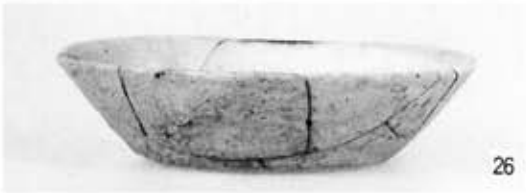
16

18

須恵器

22

25


26

27

29

30

33

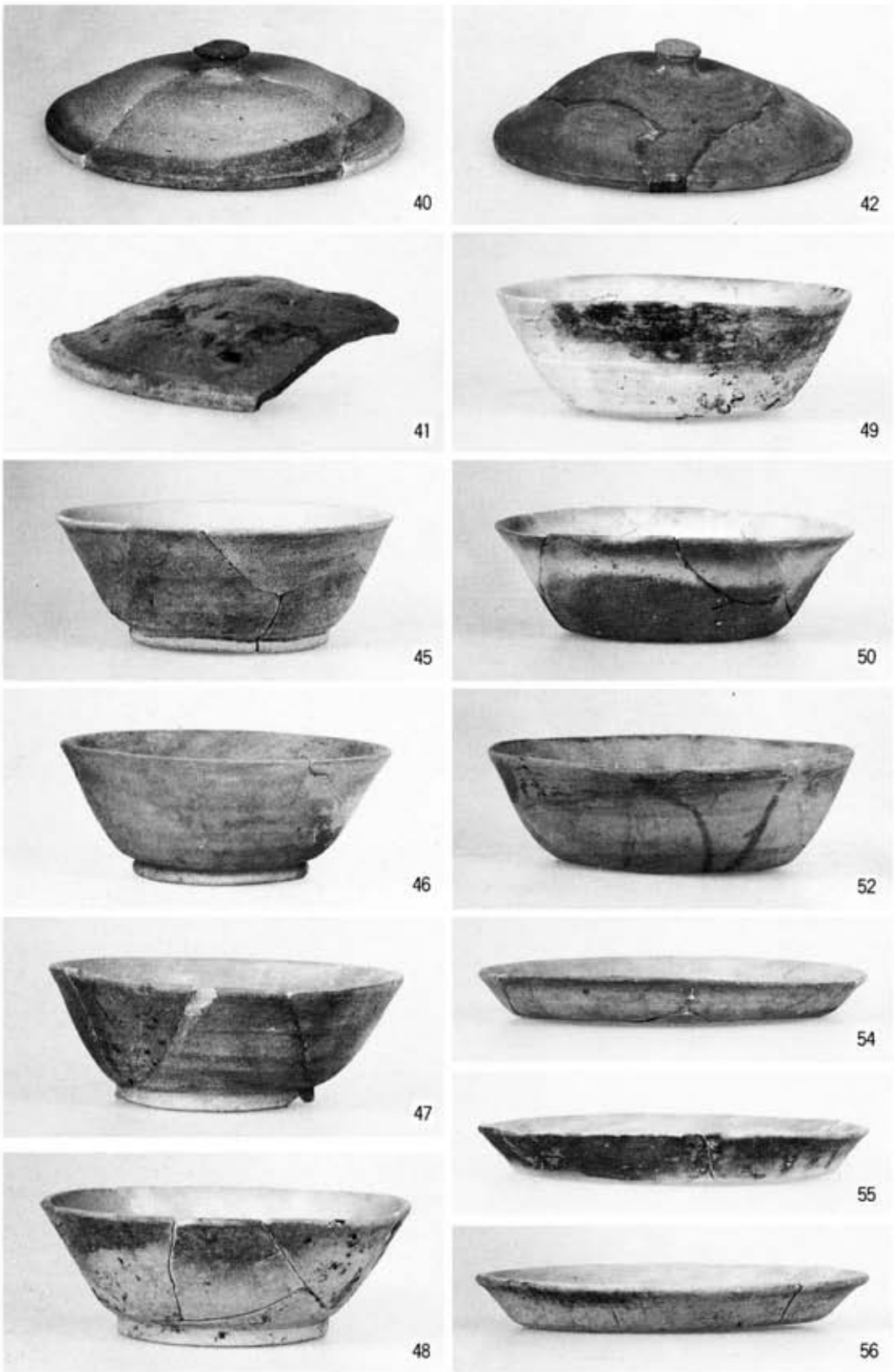
34

35

36

土師器

久池井Ｂ遺跡Ⅰ・Ⅱ区　ＳＫ319土壙出土須恵器・土師器



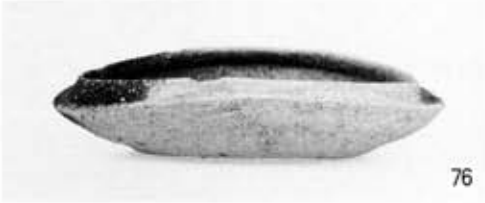
久池井B遺跡Ⅰ・Ⅱ区　SK316・SK317 土壙出土須恵器

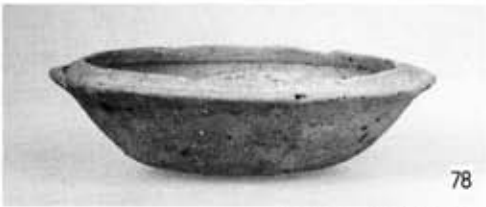
須恵器

久池井Ｂ遺跡Ⅰ・Ⅱ区　ＳＫ317 土壙出土須恵器・土師器　　土師器

75

77


76


78

S P 350 土壙墓出土

80

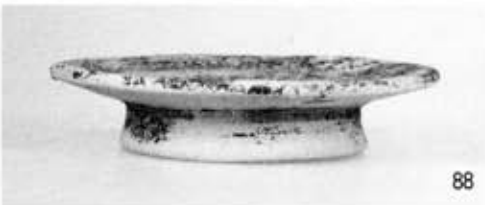
83

81

84

82

85


88

89

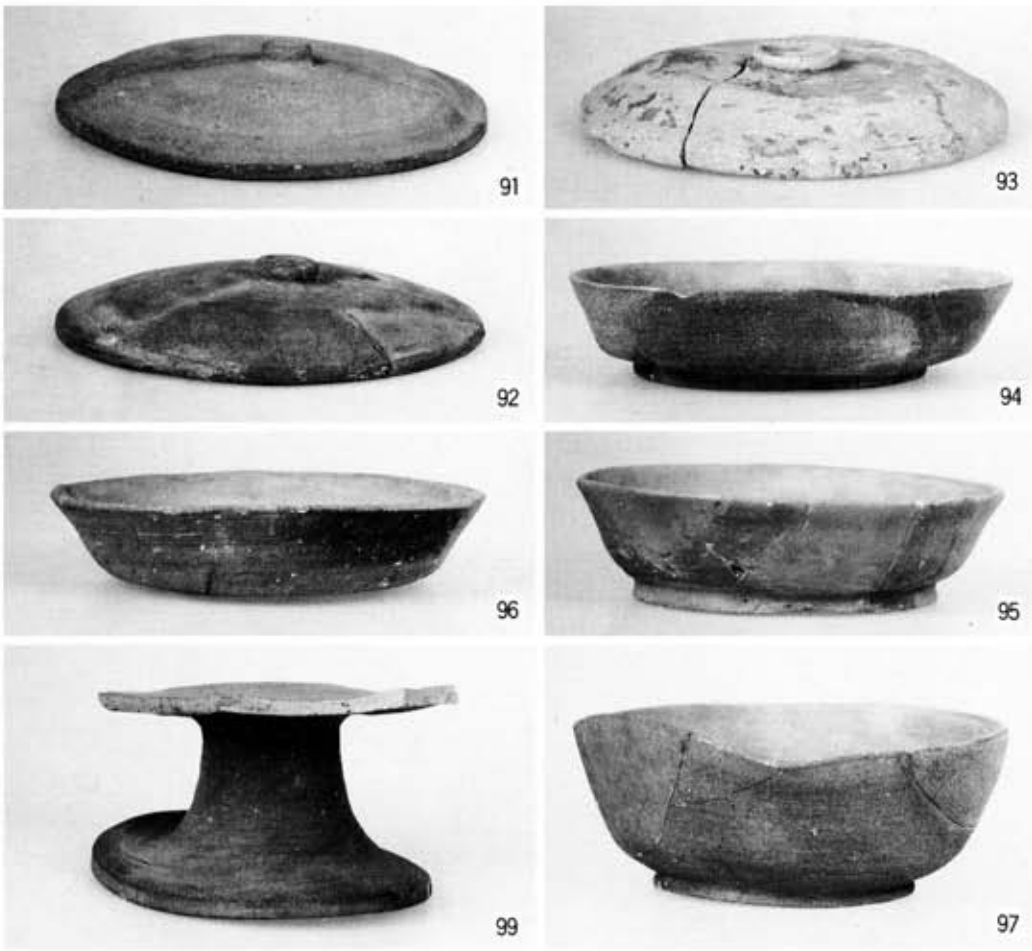
90

S P 353土壙墓出土

79

S P 352土壙墓出土

久池井Ｂ遺跡Ⅰ・Ⅱ区　土壙墓出土須恵器・土師器



ＳＫ303 土壙・ＳＥ302 井戸出土

ＳＤ330溝出土

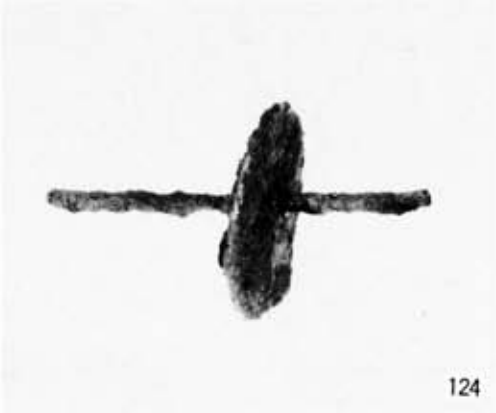
ＳＤ307溝出土

久池井Ｂ遺跡Ⅰ・Ⅱ区　ＳＫ301 土壙・ＳＫ303 井戸出土土器ほか

S D323 溝出土

S E347 井戸出土

S K316 ～S K318土壙出土土錘　½



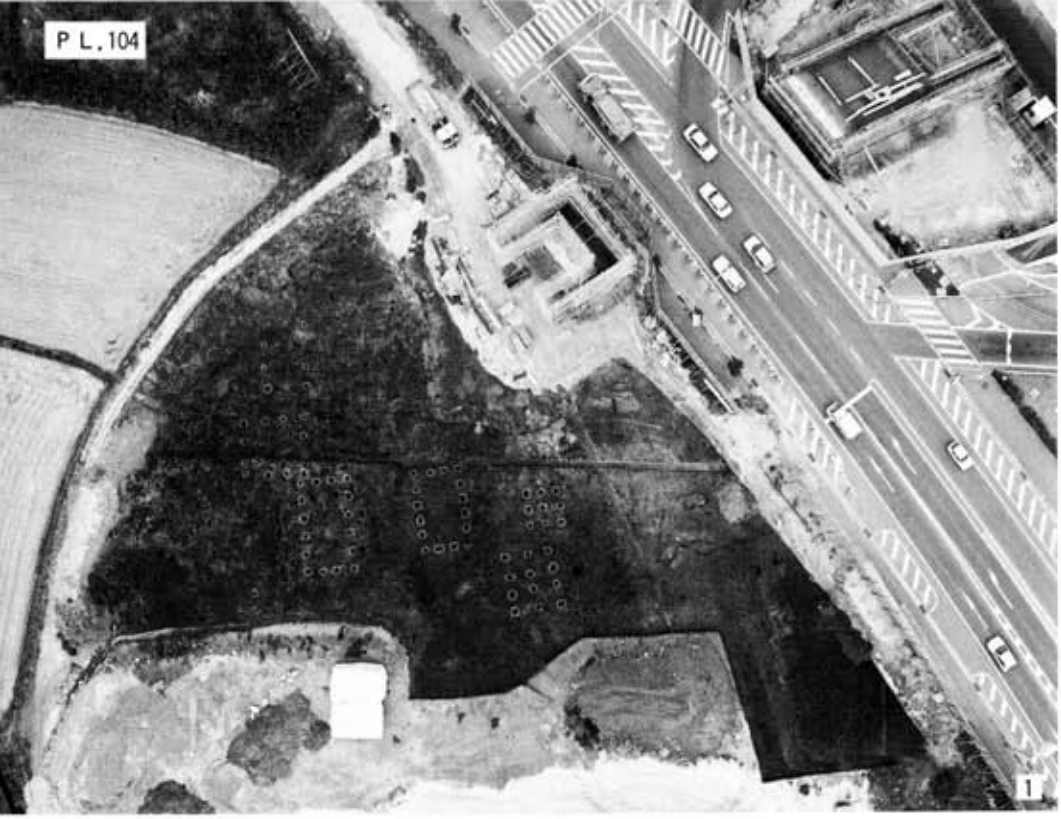
S P353 土壙墓出土
素文鏡・鉄製紡錘車　½

久池井B I・II区　S P353土壙墓出土素文鏡・紡錘車ほか

久池井B遺跡Ⅲ区

1．Ⅲ区北側－1987年度調査－ 〈上北〉

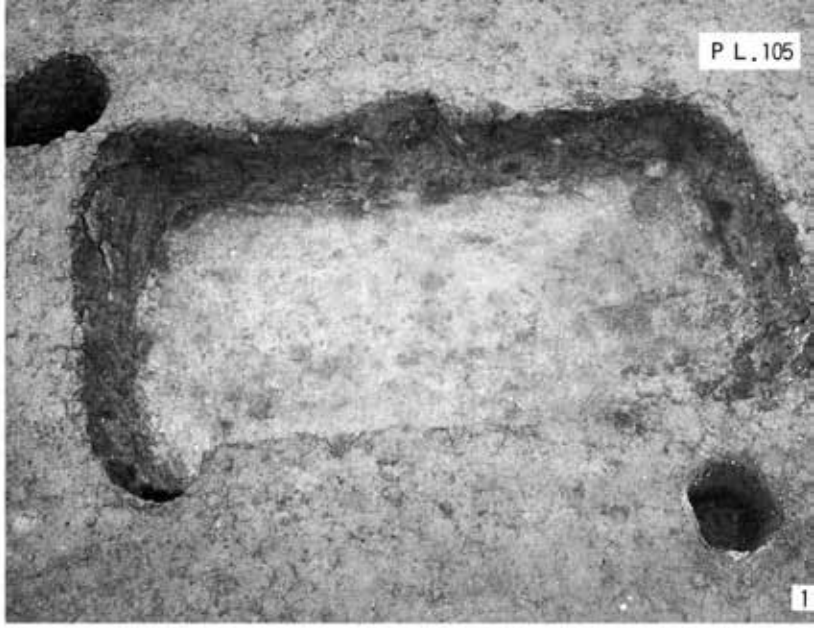
2．Ⅲ区南側－1988年度調査－ 〈上北〉



久池井B遺跡Ⅲ区

1．Ⅲ区北側－1988年度調査－〈上北〉

2．Ⅲ区全景〈南から〉

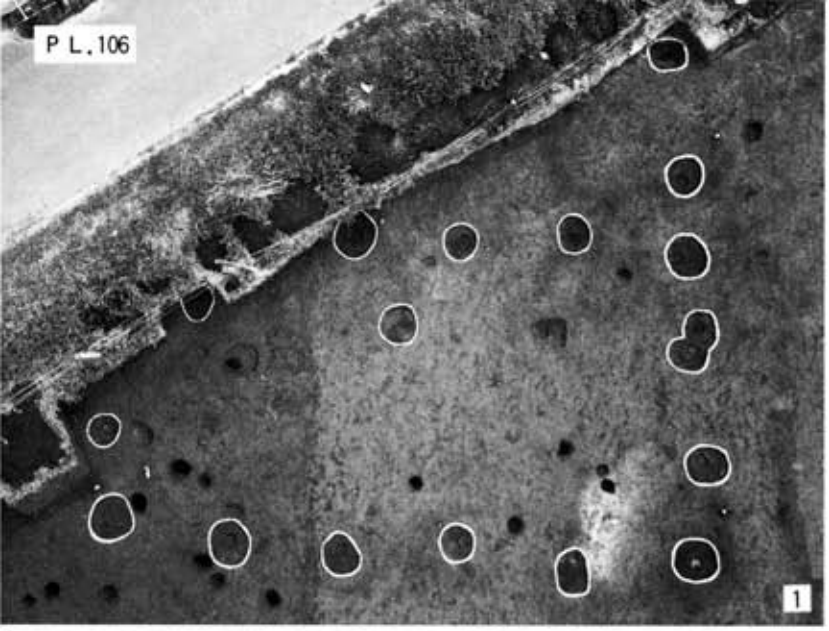


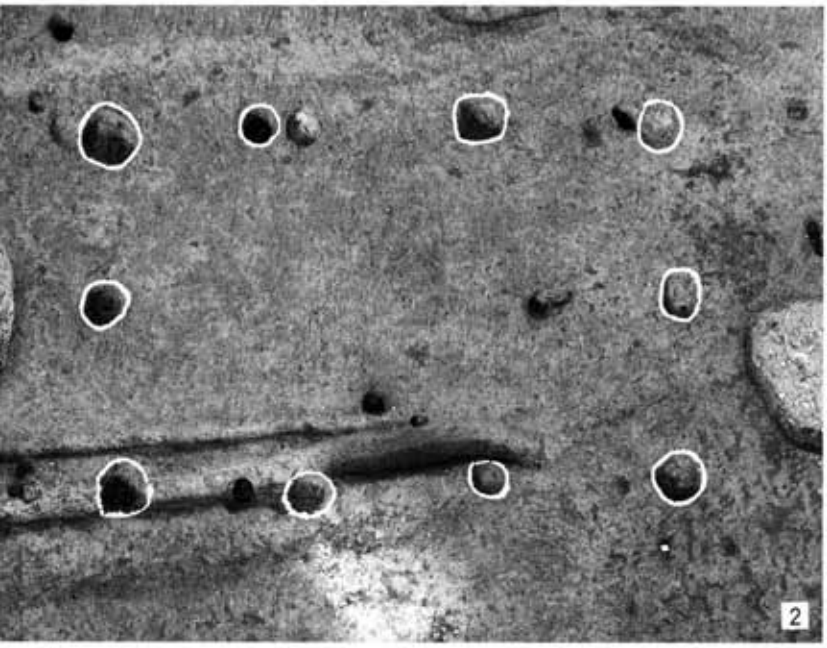
久池井B遺跡Ⅲ区

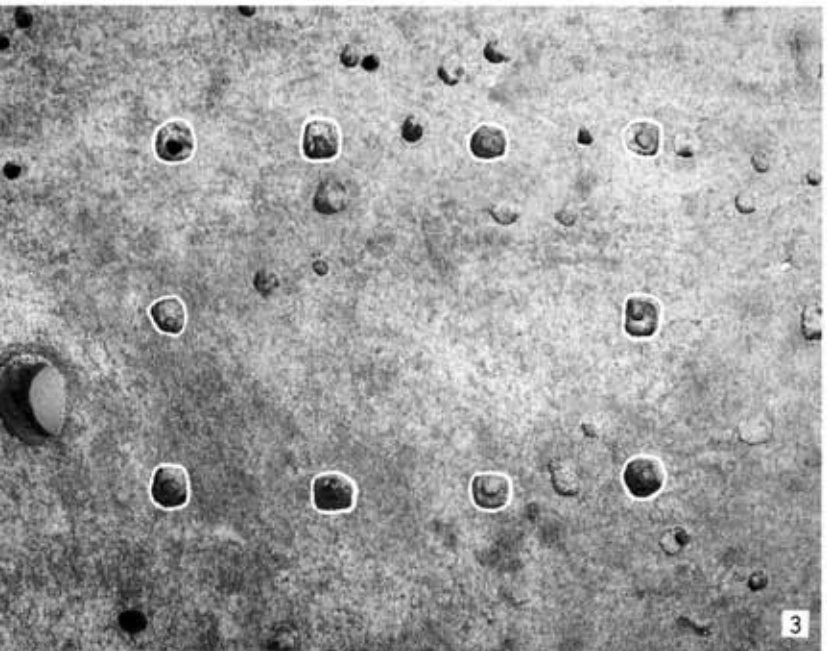
1．SK744土壙〈北から〉

2．SK745土壙〈東から〉

3．SK746土壙〈北から〉





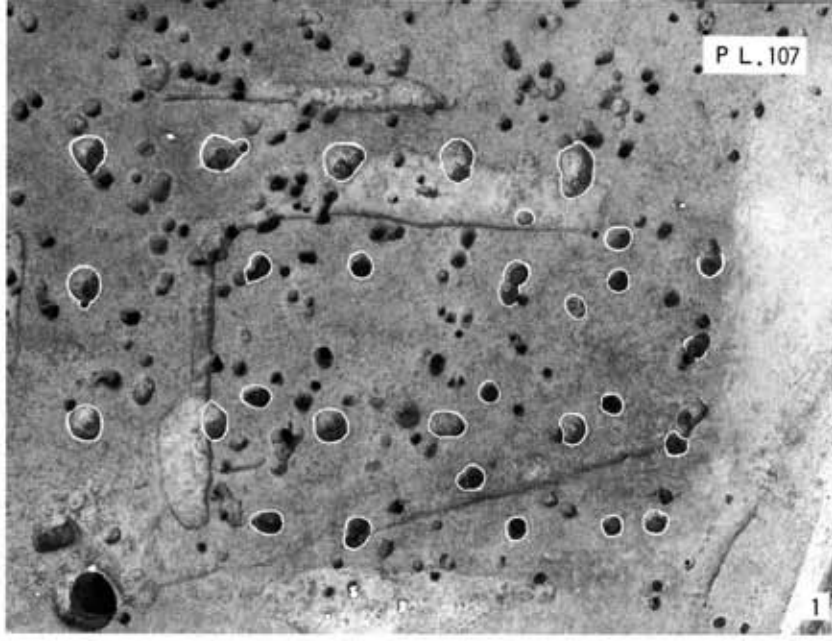


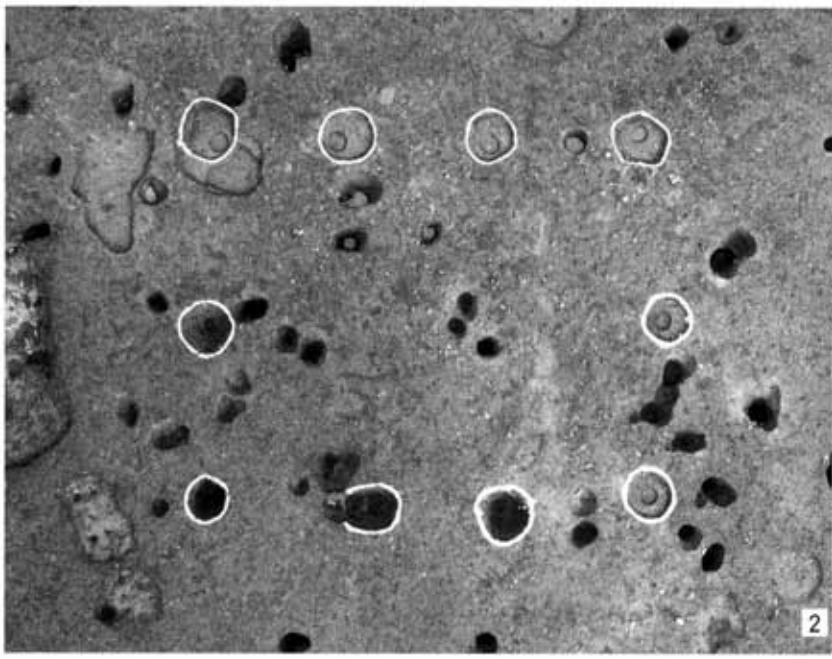
久池井B遺跡Ⅲ区

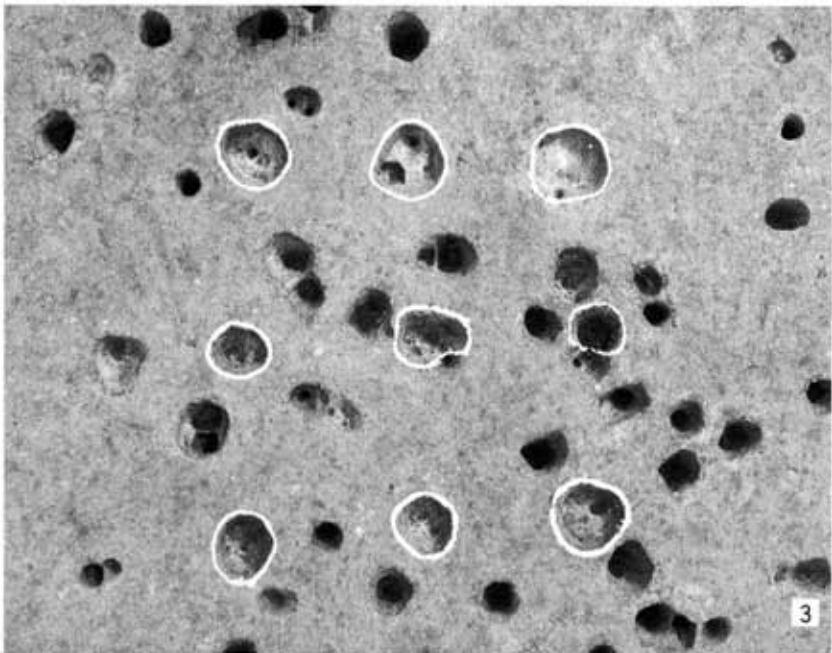
1．SB701・SB702
掘立柱建物跡〈上東〉

2．SB703掘立柱建物跡
〈上西〉

3．SB714掘立柱建物跡
〈上西〉





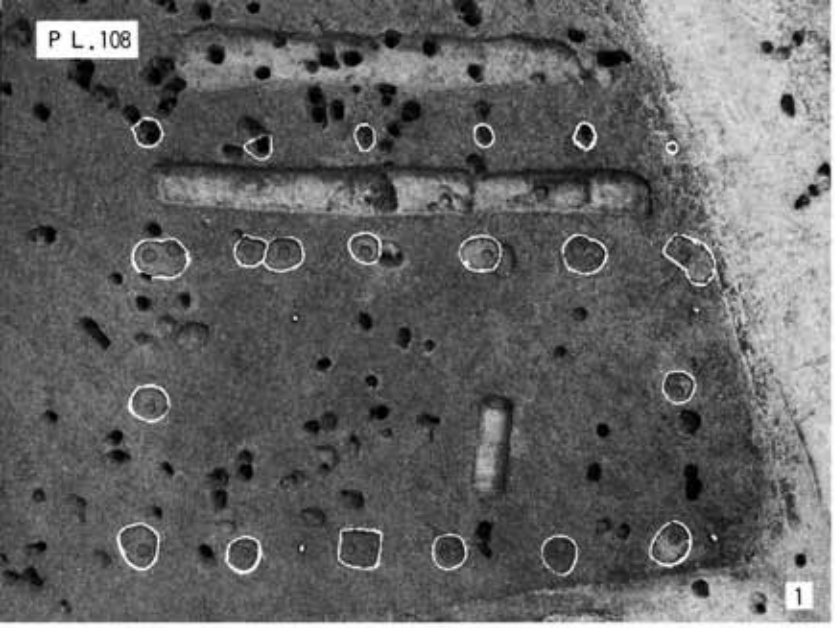


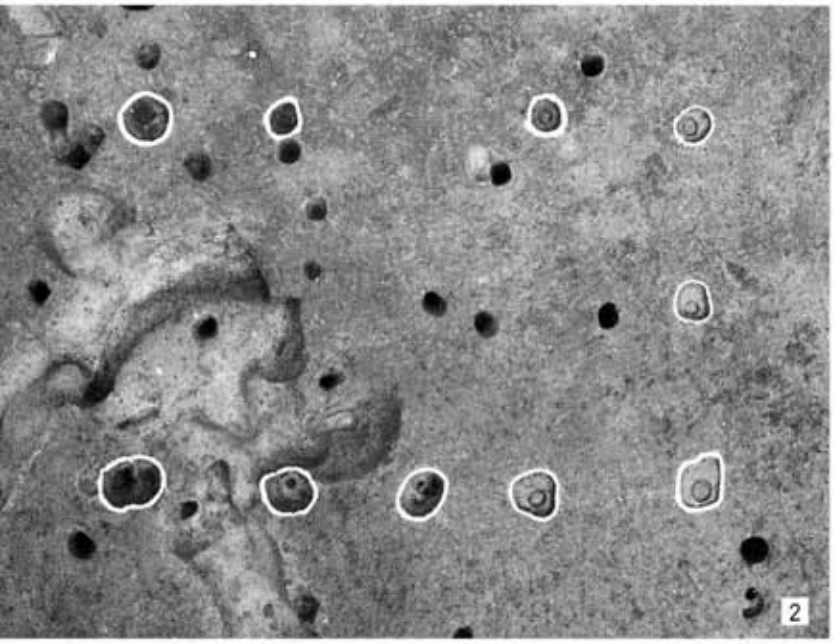
久池井Ｂ遺跡Ⅲ区

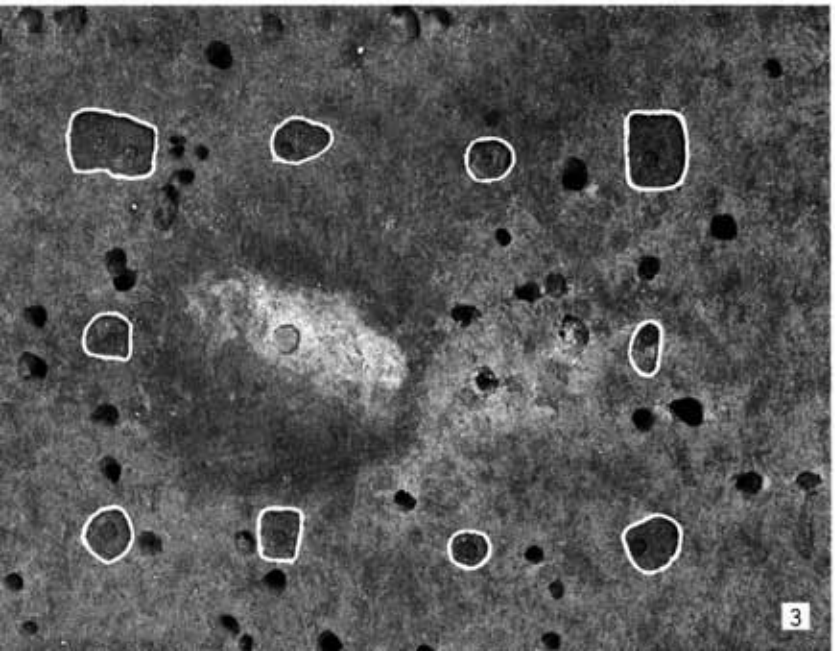
1．ＳＢ722・ＳＢ725・ＳＢ729
掘立柱建物跡〈上北〉

2．ＳＢ733掘立柱建物跡
〈上北〉

3．ＳＢ739掘立柱建物跡
〈上東〉





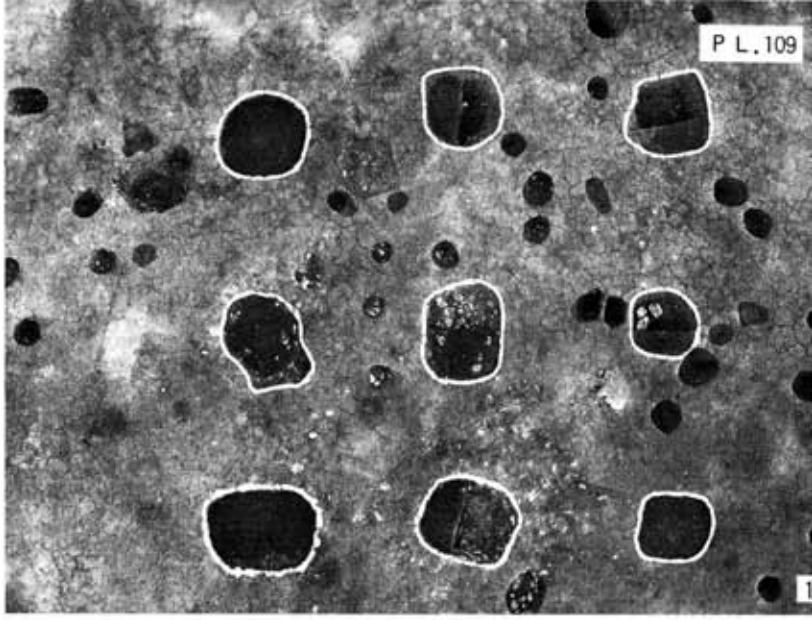


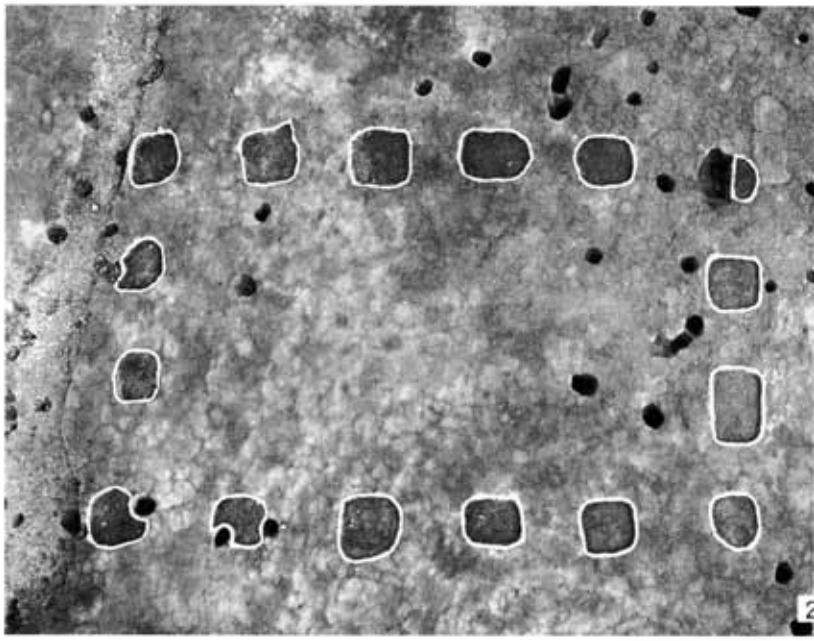
久池井B遺跡Ⅲ区

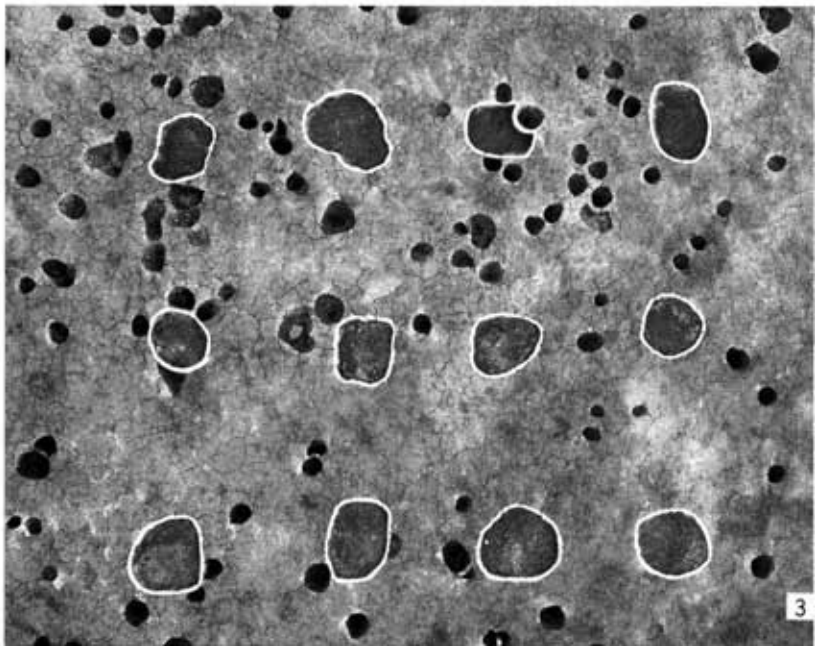
1．SB740掘立柱建物跡
〈上東〉

2．SB748掘立柱建物跡
〈上東〉

3．SB749掘立柱建物跡
〈上東〉





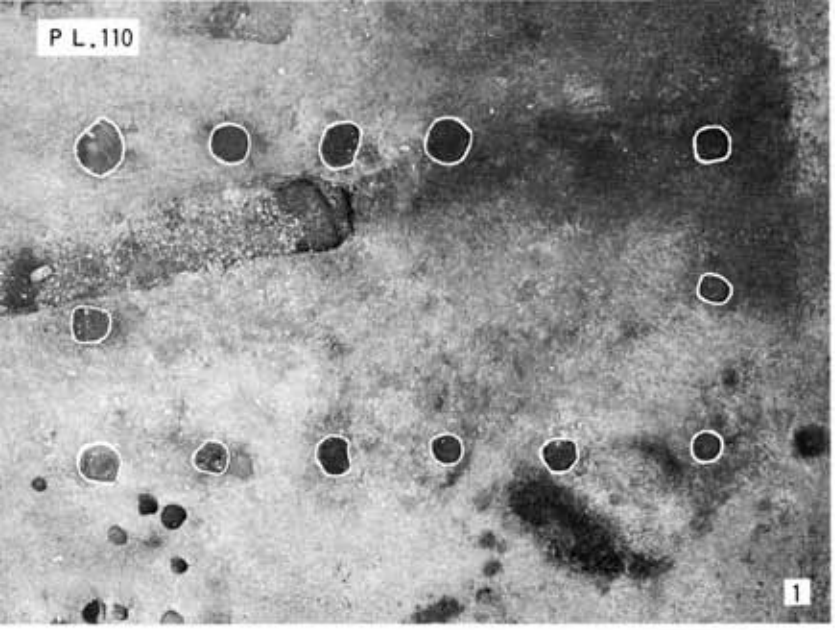


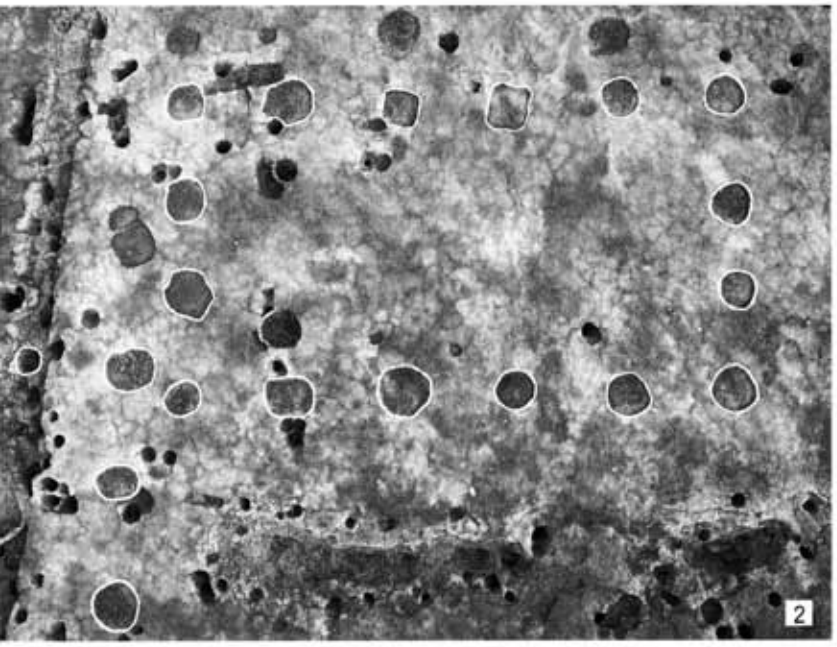
久池井B遺跡Ⅲ区

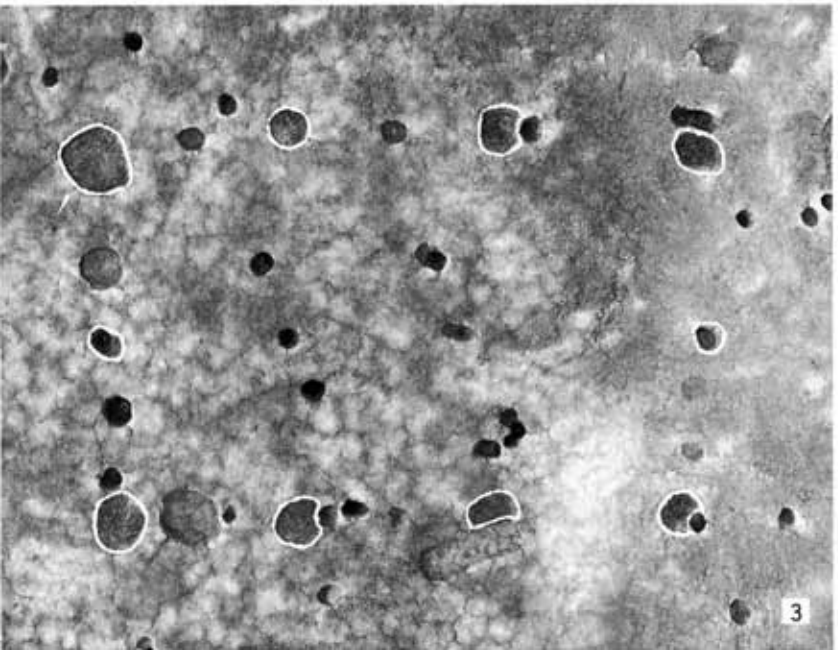
1．SB757掘立柱建物跡〈上東〉

2．SB762掘立柱建物跡〈上東〉

3．SB756掘立柱建物跡〈上東〉





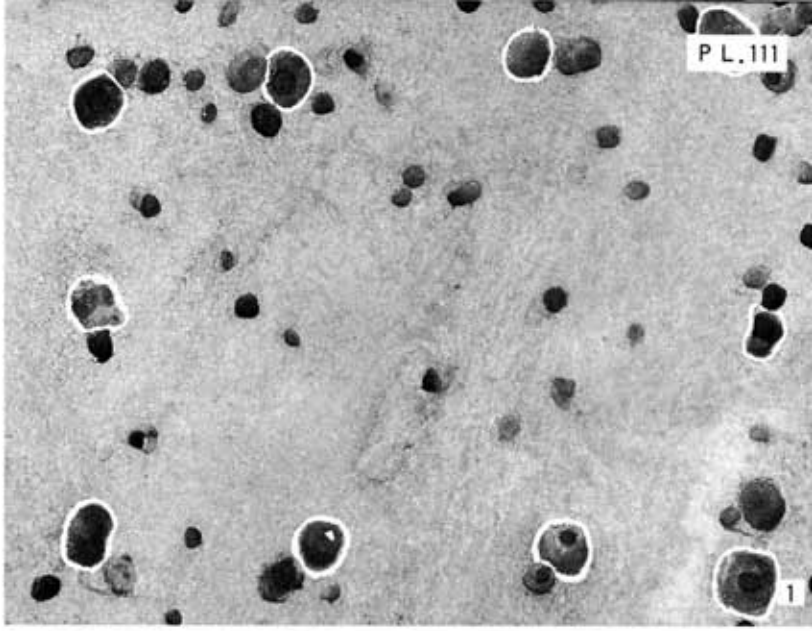


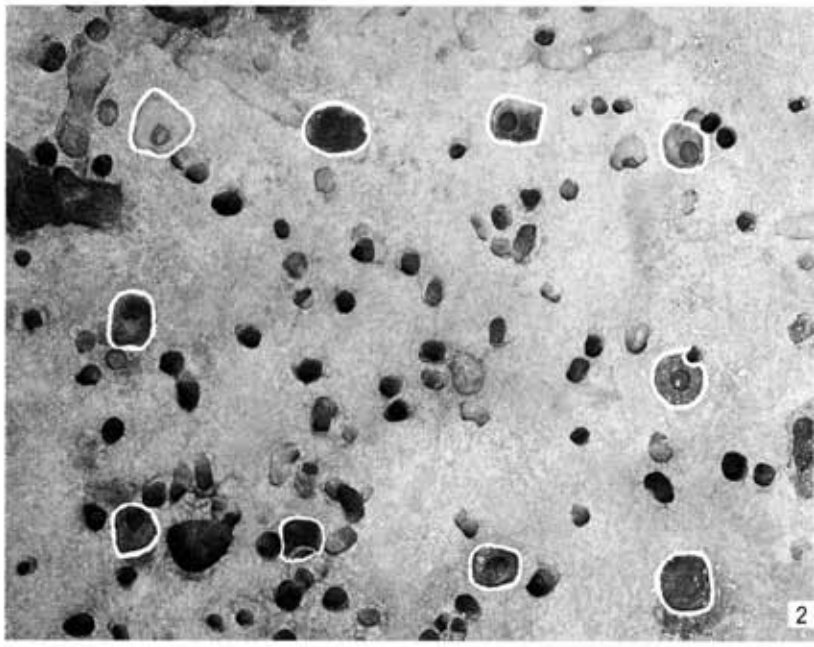
久池井B遺跡Ⅲ区

1．SB761掘立柱建物跡
〈上東〉

2．SB763掘立柱建物跡
〈上東〉

3．SB772掘立柱建物跡
〈上西〉



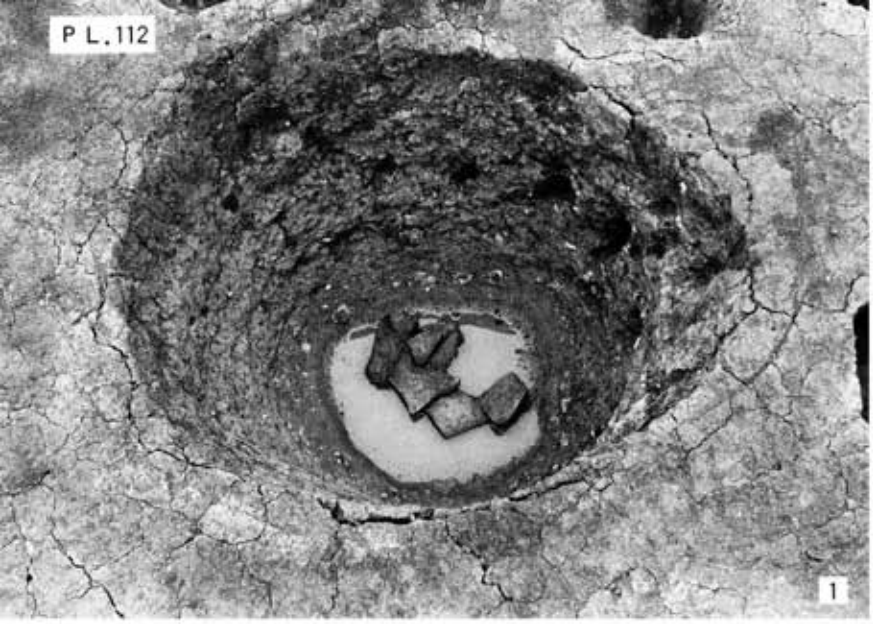


久池井B遺跡Ⅲ区

1．SB773掘立柱建物跡〈上北〉

2．SB774掘立柱建物跡〈上北〉

3．SE715井戸〈南から〉



久池井B遺跡Ⅲ区

1．SE716井戸〈西から〉

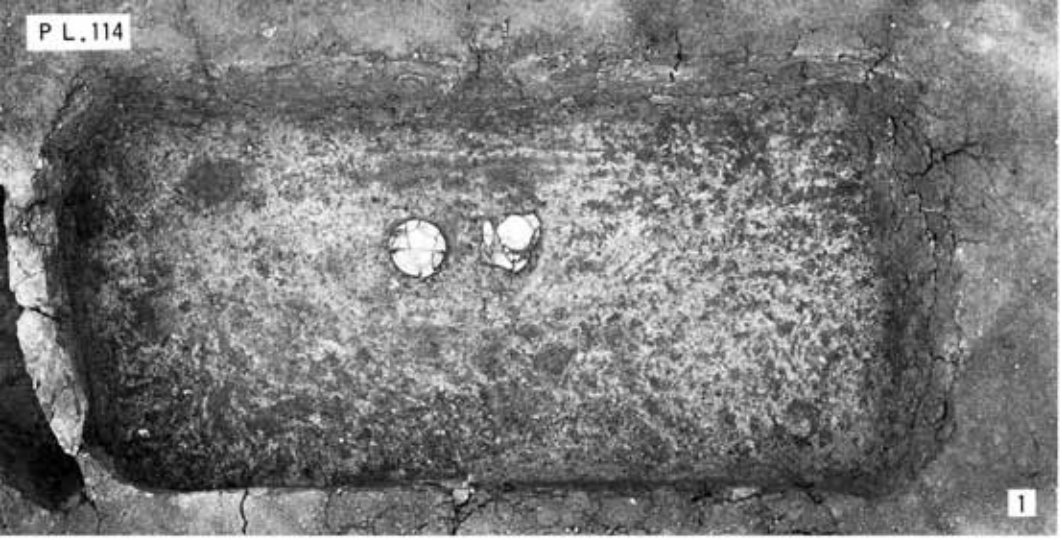
2．SE730井戸〈南から〉

3．SE754井戸〈南から〉

久池井B遺跡Ⅲ区　1．ＳＰ731土壙墓〈東から〉

2．ＳＰ735土壙墓〈西から〉

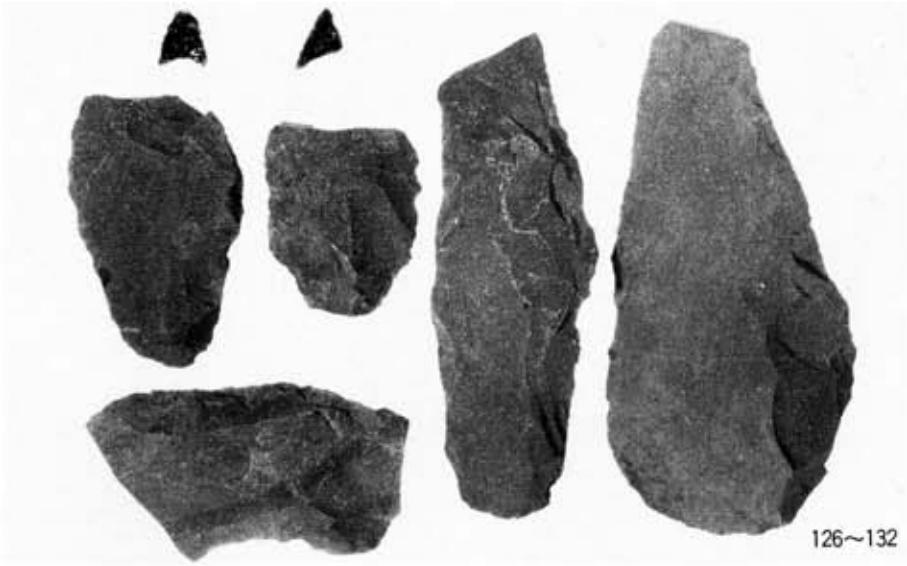
3．ＳＰ738土壙墓〈東から〉



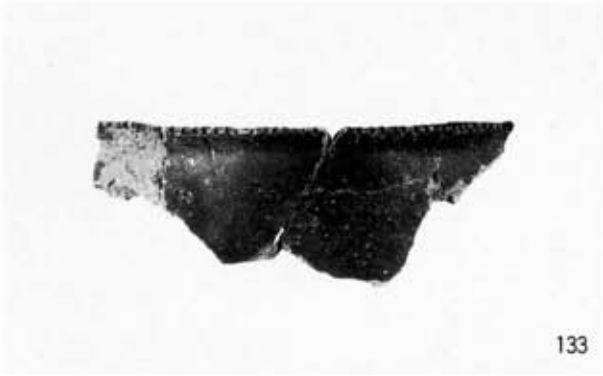
久池井B遺跡Ⅲ区　1．SP766土壙墓〈南から〉

2．SP767土壙墓〈北から〉

3．SP771土壙墓〈東から〉



縄文弥生時代石器　½



弥生前期土器

⅓

久池井Ｂ遺跡Ⅲ区　縄文・弥生時代石器および弥生前期土器

134

136

147

140

138

139

143

142

141

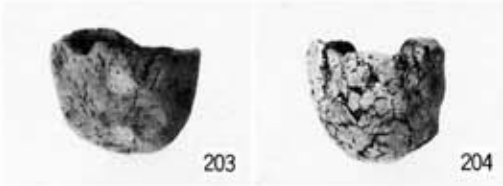
久池井B遺跡Ⅲ区

弥生前期土器

136…½

他 …⅓

ＳＫ759土壙出土（⅓）



ＳＫ764 土壙出土

203・204…½

145・146・163・183・415…⅓, 他…¼

久池井Ｂ遺跡Ⅲ区　ＳＫ759 ・764 土壙出土土器

224

230

217

213

237

317

307

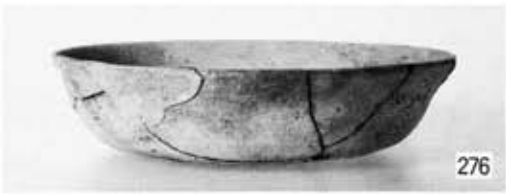
226

256

258

232

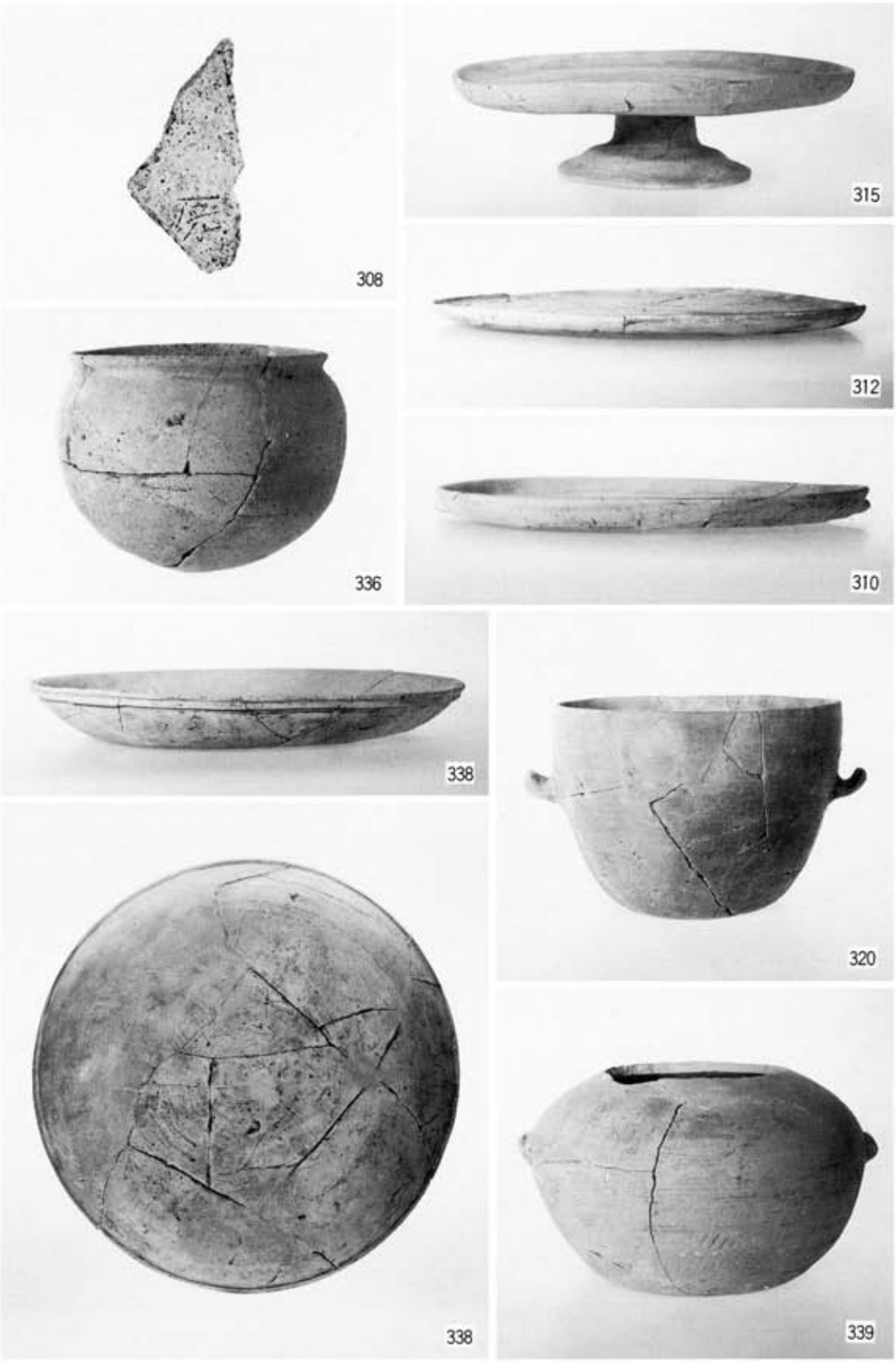
263


276

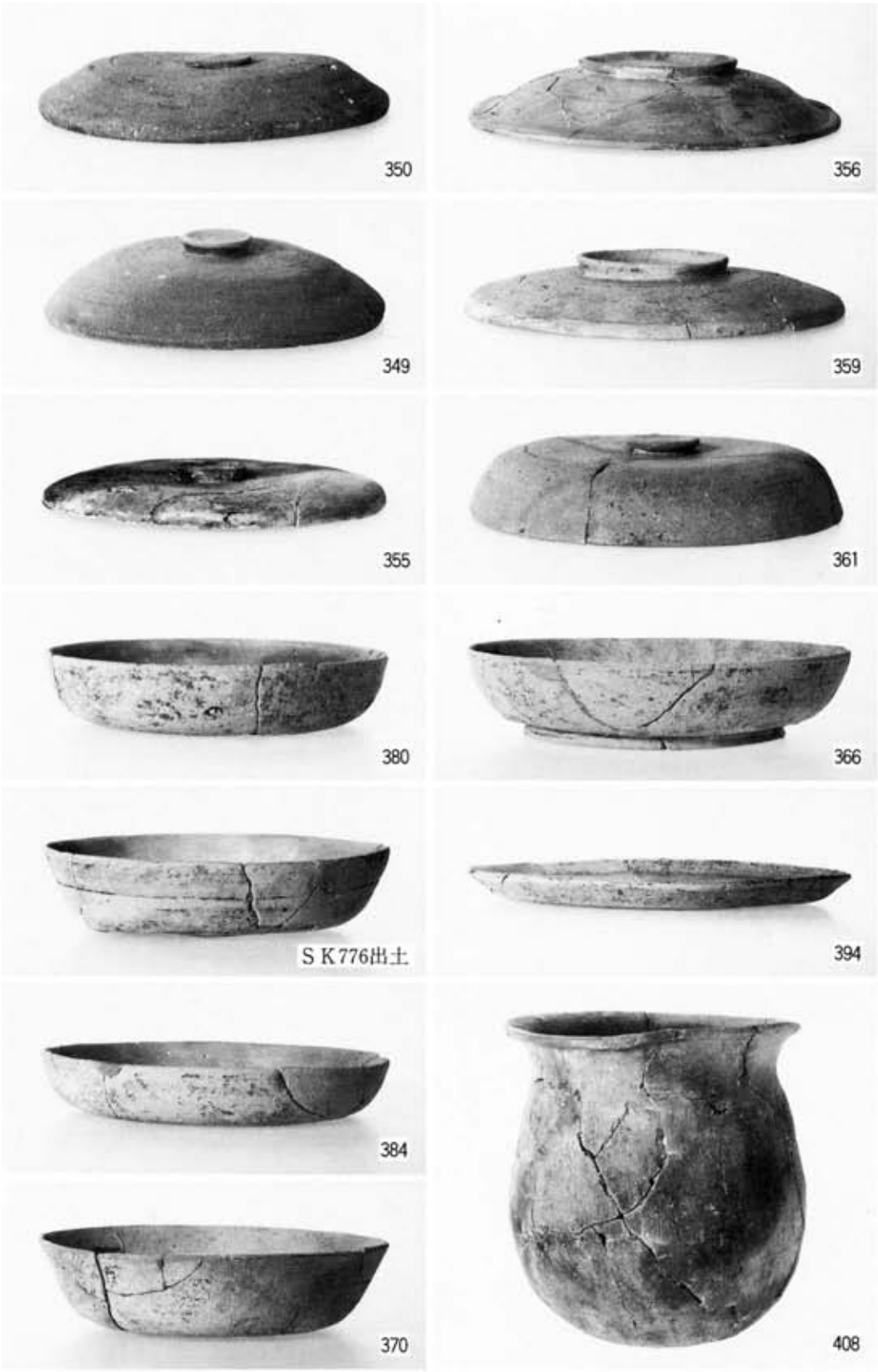
239

286

久池井B遺跡Ⅲ区　SK775土壙出土土器1　317・258…¼，他…⅓



久池井B遺跡Ⅲ区　　SK775土壙出土土器2　　308…½,,310・312・315・338…¼　他…⅕



久池井B遺跡Ⅲ区　　SK776 土壙出土土器　　394…¼, 他…⅓

466

469

467

470

468

S K783 土壙出土

485

482

483

481

484

S P771 土壙墓出土

474

473

475

472

S P731 土壙墓出土

久池井B遺跡Ⅲ区　S K783 土壙・S P771・731 土壙墓出土土器　1/3

568

569

570

583

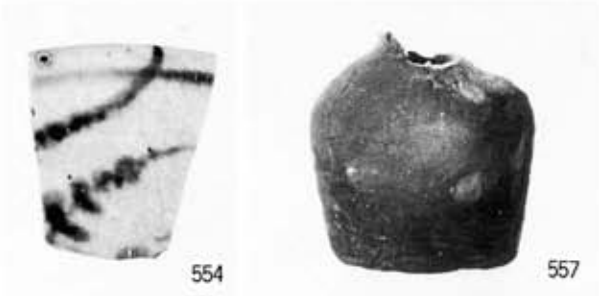
SD789溝出土

570

514

512

491


554　557

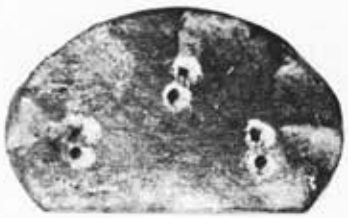
556

514：SE754，512：SE755，491：SK770

他表採　544…½，556…¼，他…⅓

久池井B遺跡Ⅲ区　井戸・土壙・溝ほか出土土器

558表



558裏

566

559～565

久池井B遺跡Ⅲ区　558　奈良・平安時代　石銙　1/1　　566　同　　素文鏡　1/1
559～565 同　　鉄器　1/2

春　日　遺　跡

春日遺跡　1．遺跡全景航空写真〈西南から〉

2．調査風景

春日遺跡

1．遺跡全景〈西から〉

2．　同　〈東から〉

春日遺跡

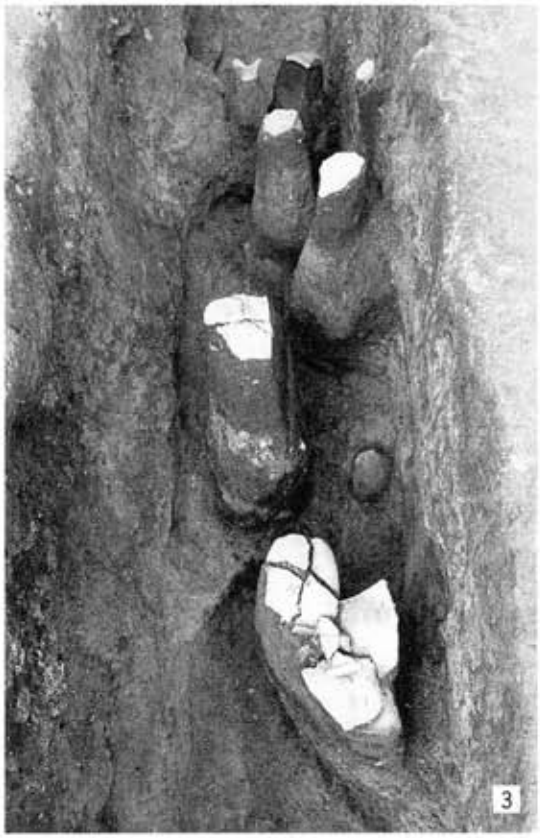
1．SD008溝東側〈東から〉

2．SD008溝西側〈東から〉

春日遺跡　1．ＳＤ008溝断面〈ＳＢ006付近　東から〉

2．ＳＤ008溝遺物出土状況〈ＳＢ018付近　東から〉

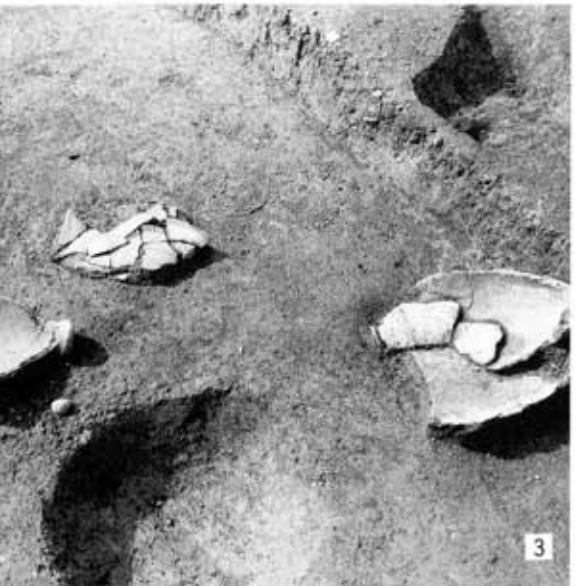
3．　　同　　〈ＳＢ018付近　東から〉



春日遺跡　1～4　SD008溝遺物出土状況

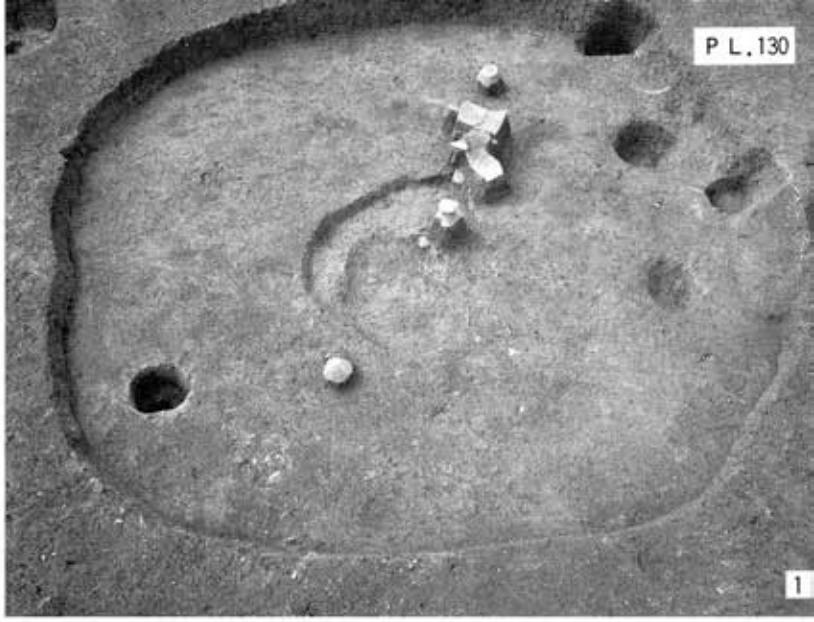
1．SB011付近　　2．SB018付近

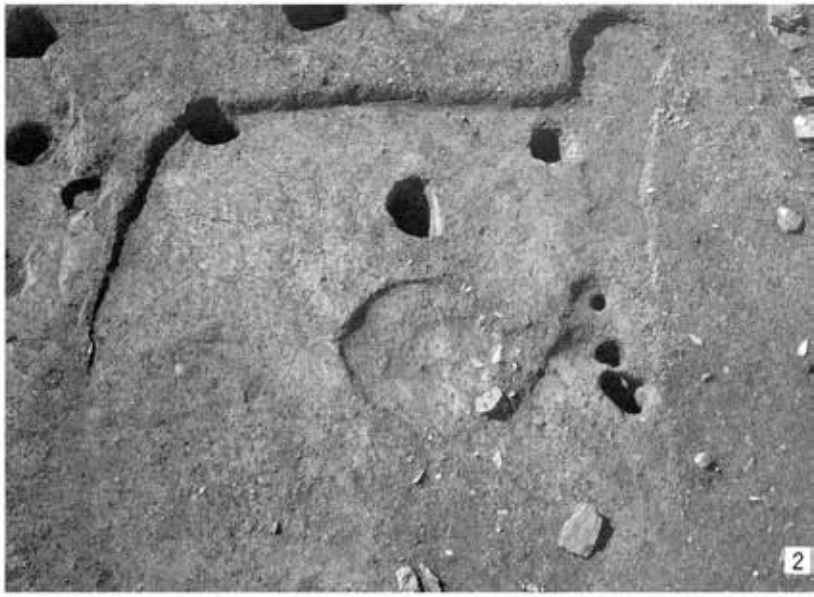
3．SB006付近　　4．SB006付近

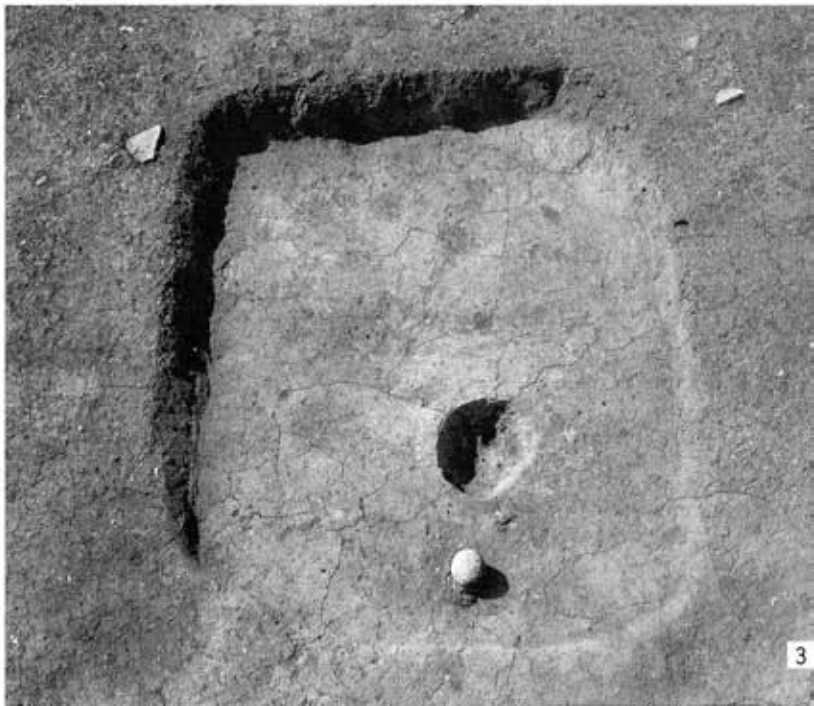


春日遺跡

1. ＳＢ001・ＳＢ002竪穴住居跡 〈東南から〉
2. ＳＢ001竪穴住居跡〈西南から〉
3. ＳＢ001東南部土器出土状況〈南から〉





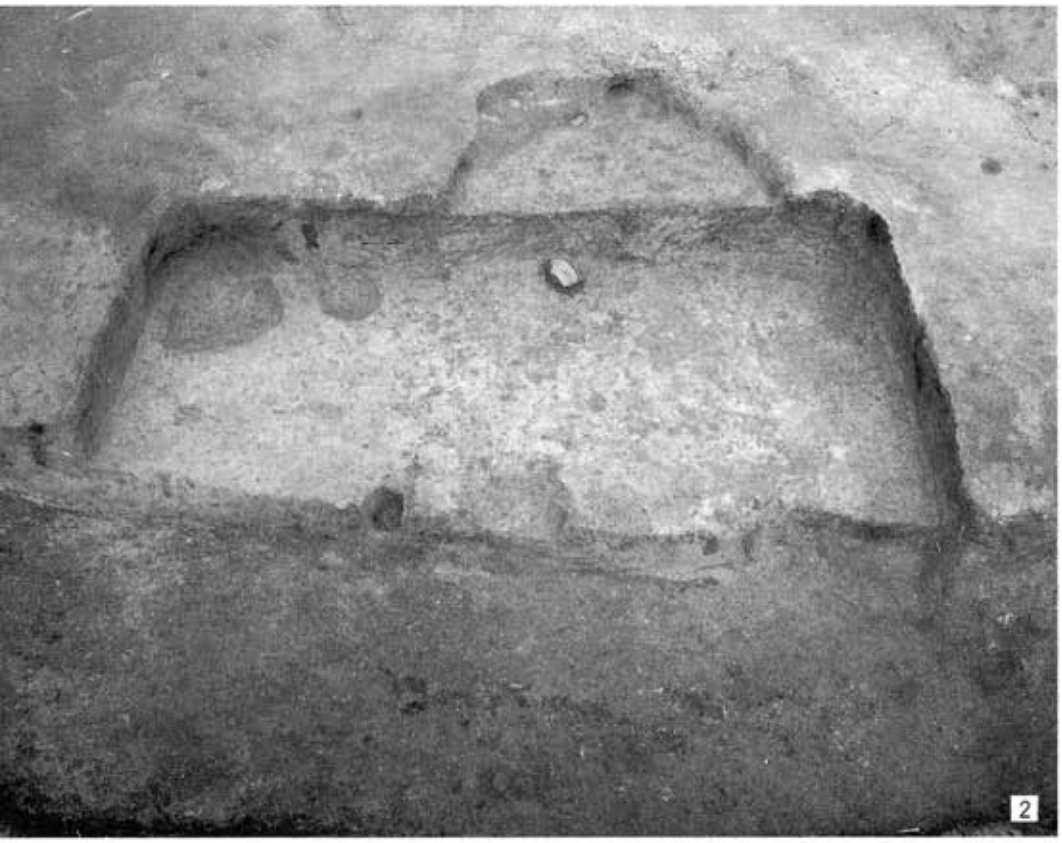


春日遺跡

1．ＳＢ002竪穴住居跡
〈南から〉

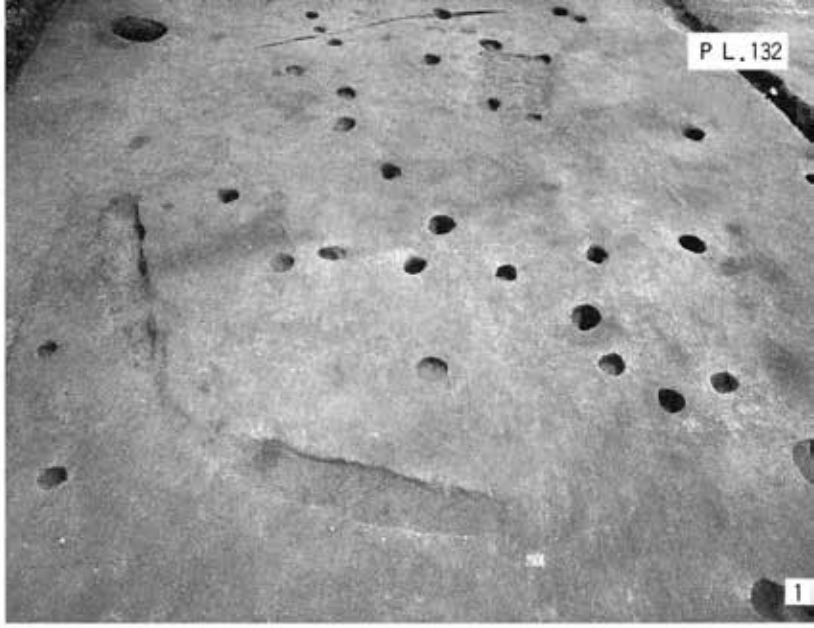
2．ＳＢ003竪穴住居跡
〈南から〉

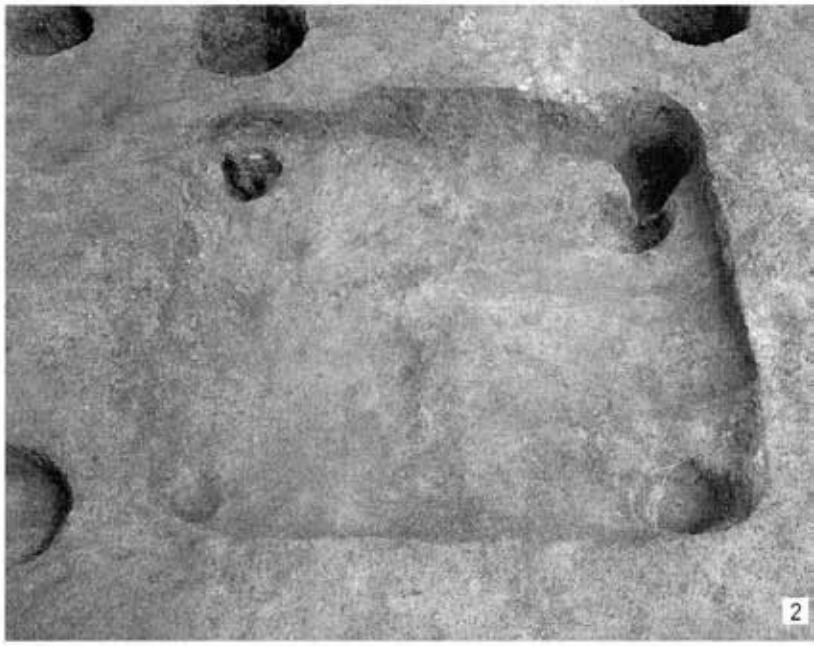
3．ＳＫ004竪穴住居跡〈南から〉

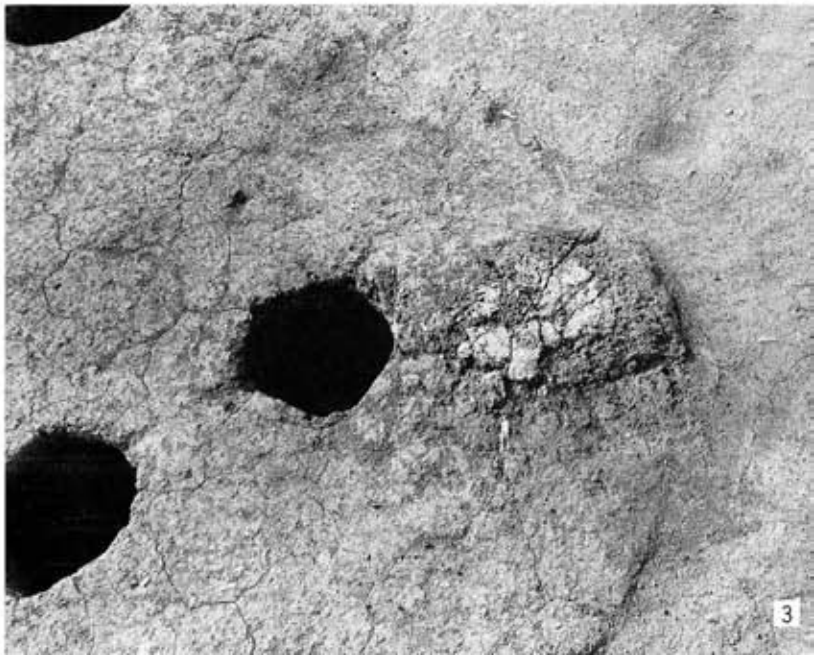


春日遺跡　1．SB020竪穴住居跡〈東から〉

2．SB021竪穴住居跡〈南から〉





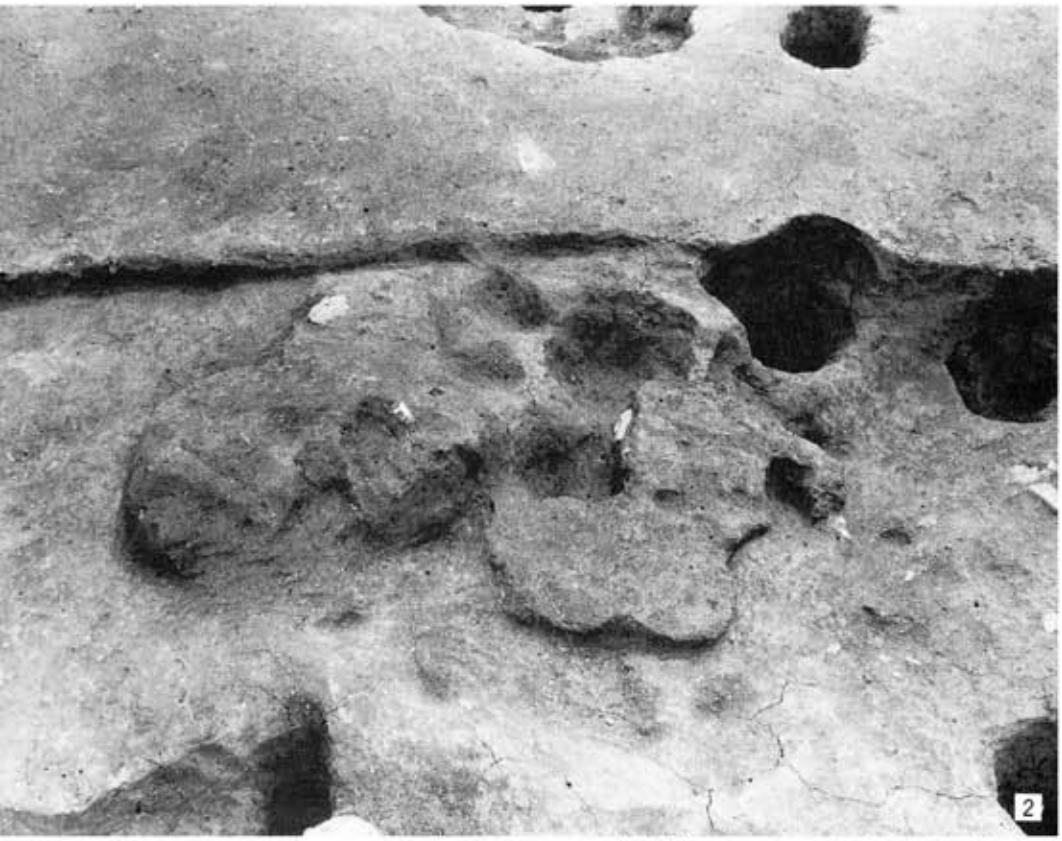


春日遺跡

1．ＳＢ007竪穴住居跡
〈西から〉

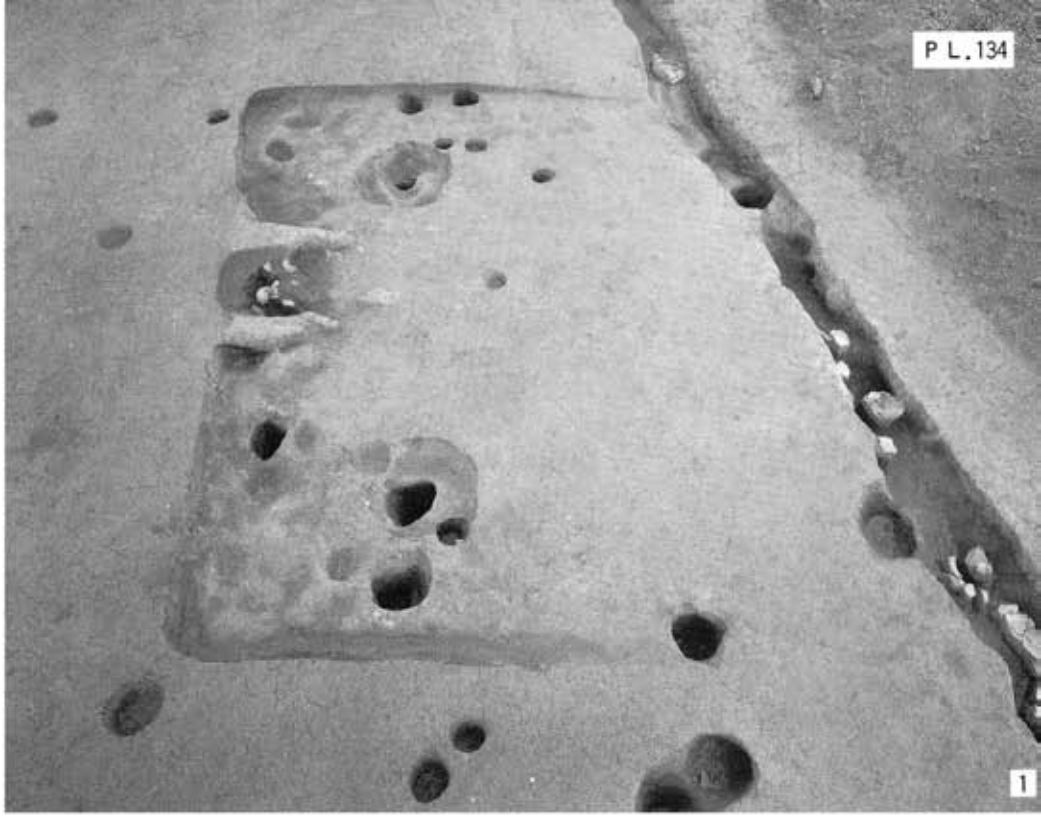
2．ＳＫ019竪穴〈西から〉

3．ＳＸ016炉跡〈南から〉



春日遺跡　1．SB005竪穴住居跡〈南から〉

2．SB005西壁カマド〈東から〉



春日遺跡　1．SB006竪穴住居跡〈西から〉

2．SB006北壁カマド〈南から〉

春日遺跡　1．ＳＢ002北側柱穴群〈南から〉

2．ＳＢ011掘立柱建物跡および

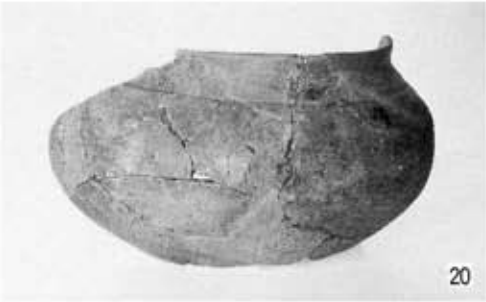
ＳＸ012柱列〈南から〉

春日遺跡　1．ＳＢ018掘立柱建物跡〈東から〉

　　2．　　同　　〈北から〉

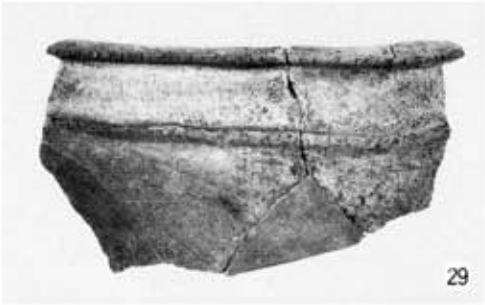
春日遺跡　1．石鏃　½

2．磨製石器　⅓



20・21・22　ＳＢ021竪穴住居跡
出土一括

春日遺跡　弥生前期土器１　　21・22　⅓、他⅕



春日遺跡　弥生前期土器２　　29・42　⅓、他⅙

春日遺跡　弥生前期土器 3　　40 ⅓、他⅙

51

50

46

47

49

53

55

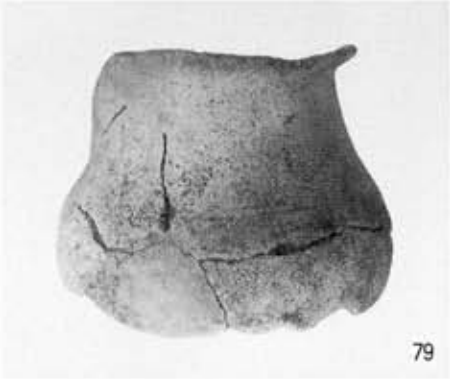
57

59

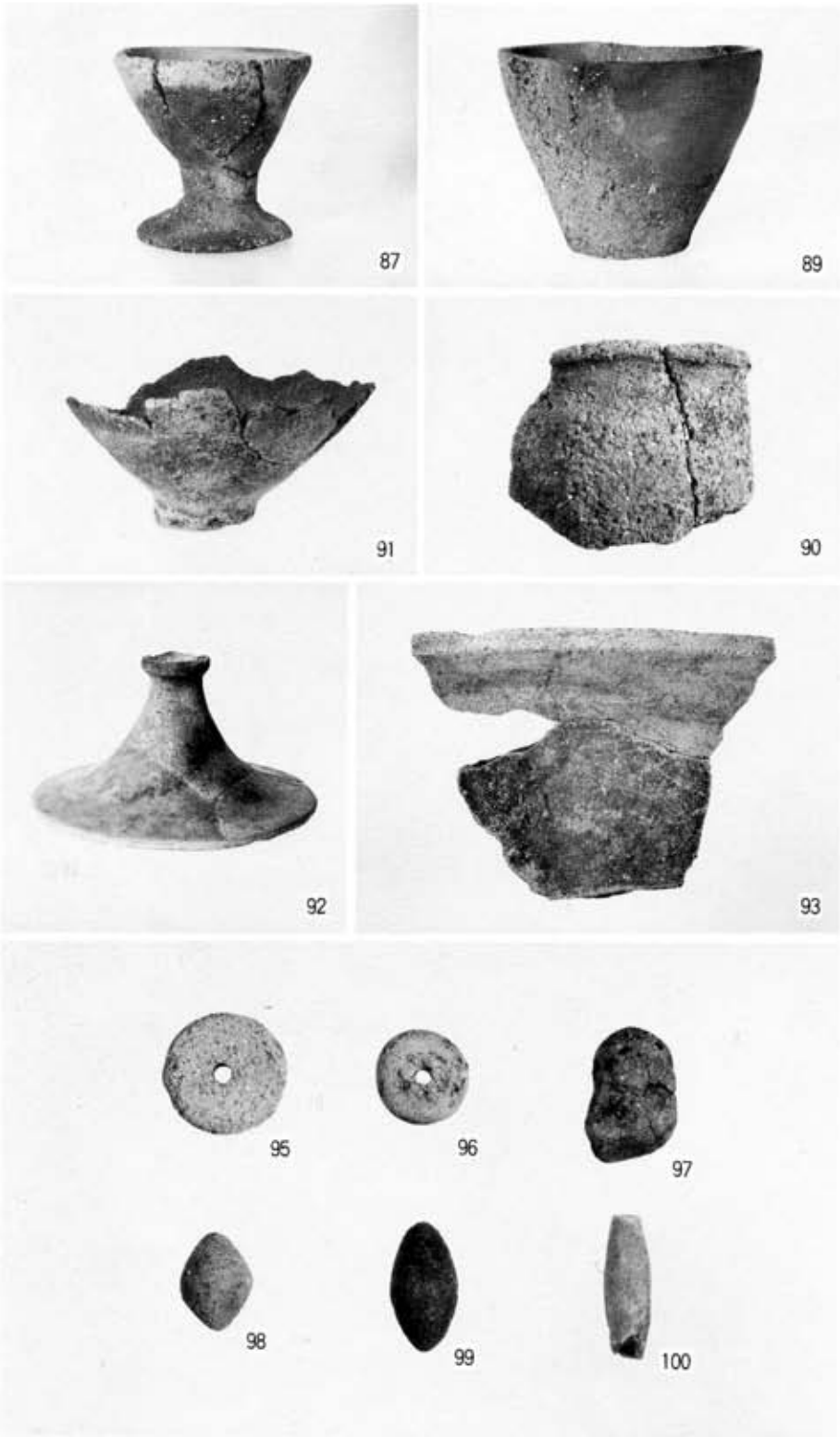
60

72

春日遺跡　弥生前期土器 4　　59 ⅓、他⅕

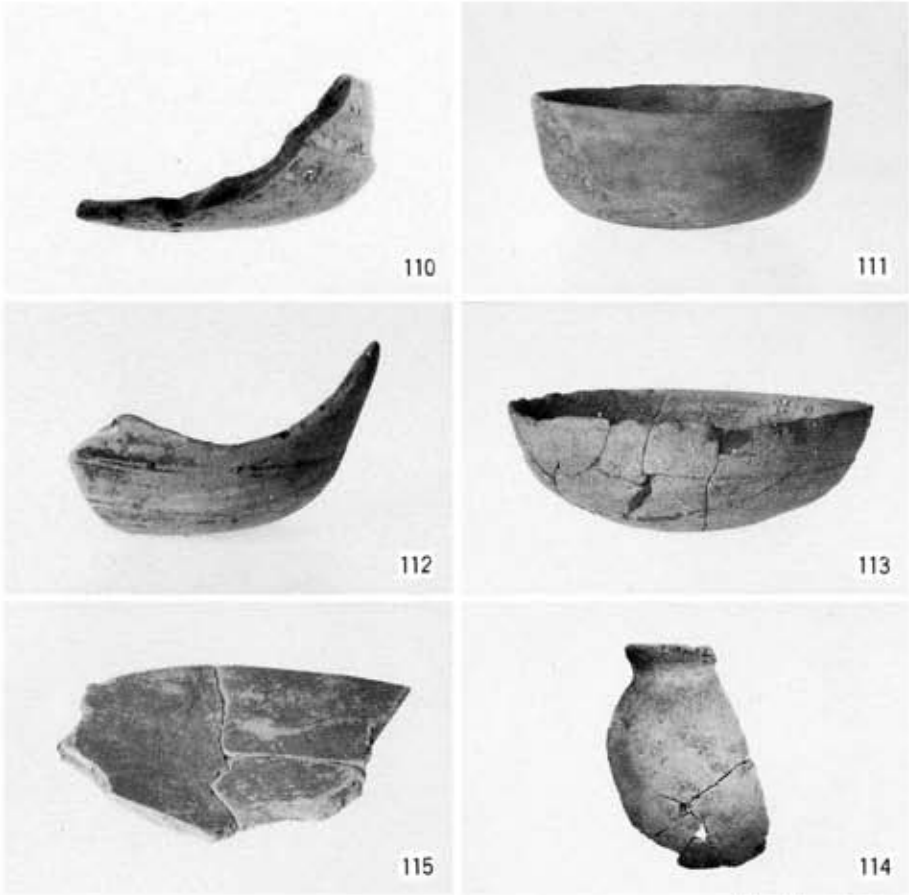


春日遺跡　弥生前期土器５　　75・79～86　⅓、他⅕

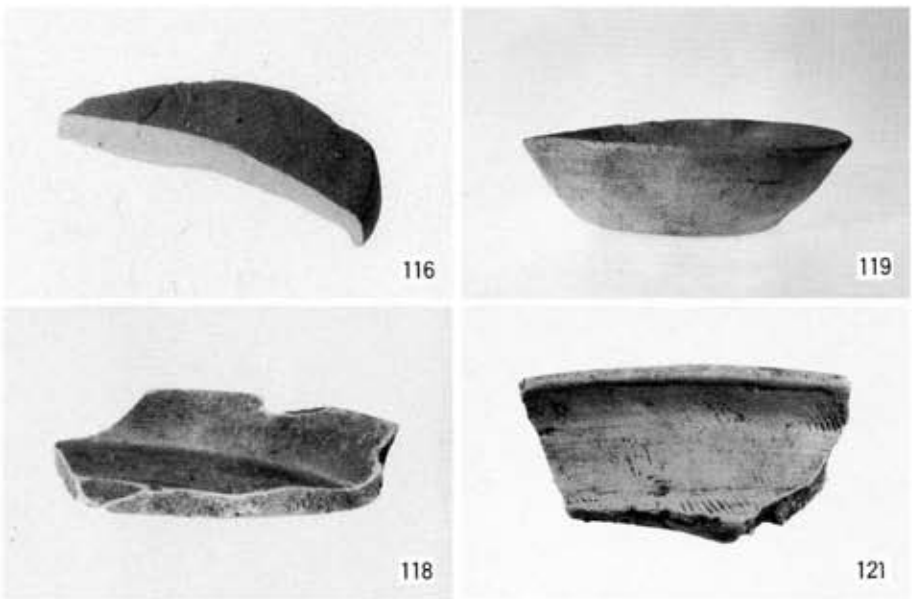


春日遺跡　弥生前期土器 6

87・89・90　⅓、91・92・93　⅕、95～100　½



古墳時代土師器



奈良・平安時代須恵器・土師器

春日遺跡　古墳時代および奈良・平安時代の土器

115～114　⅛、他⅓

佐賀県文化財調査報告書　第96集

惣　座　遺　跡

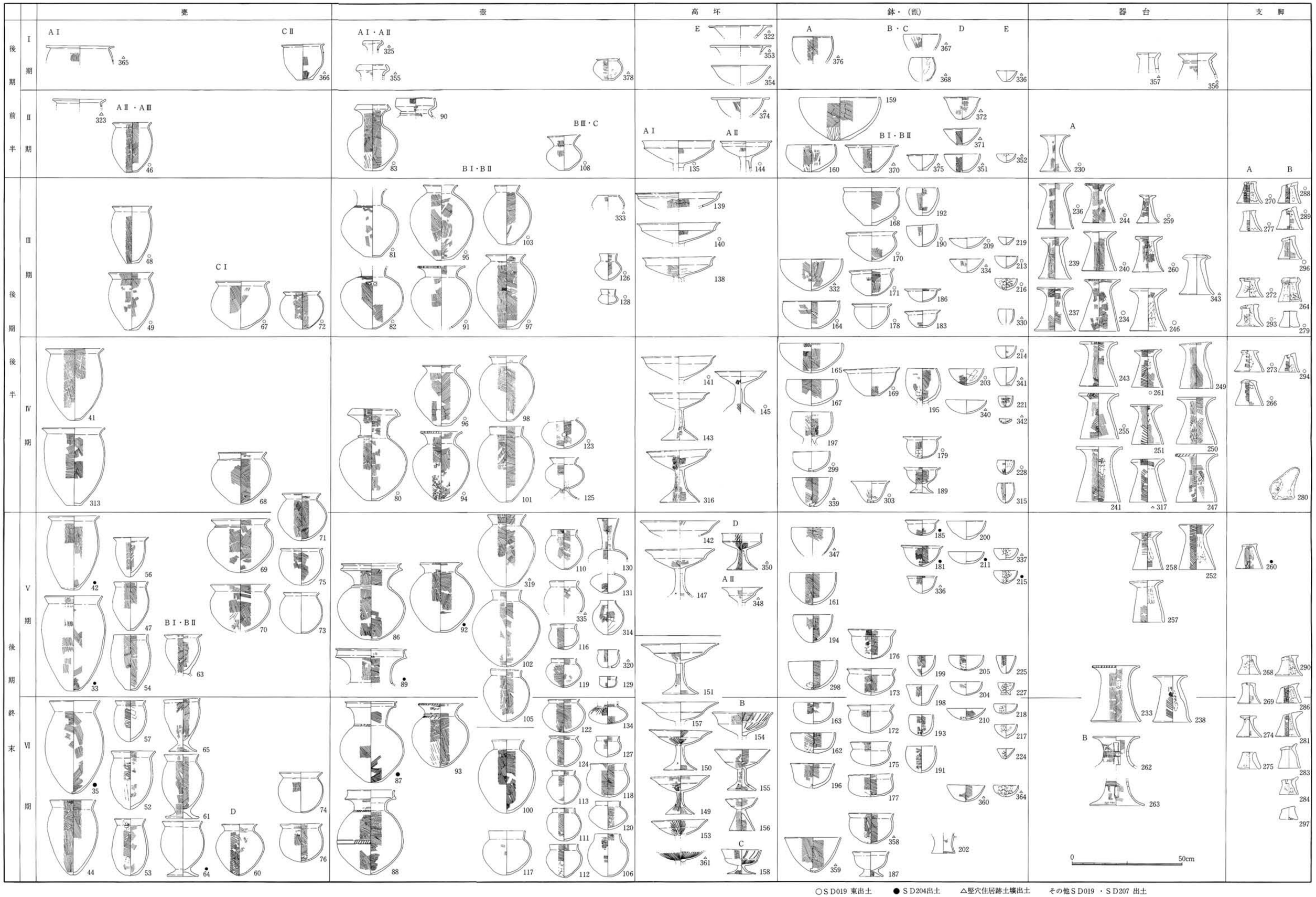
九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

平成２年３月30日　印刷
平成２年３月31日　発行

編集　佐賀県教育庁文化課
発行　佐賀市城内１丁目１－42

印刷　鹿島印刷株式会社
鹿島市古枝甲249番地３

<付図１> 惣座遺跡弥生後期土器編年図（1/10）



〈付図２〉肥前国府関連遺構配置図（1/1000）